

森 町

濁川左岸遺跡 B地区

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13・14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

森 町

濁川左岸遺跡 B地区

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13・14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡遠景（南東から）



表土

層 (k o - d 1640年降下)

層 < B - Tm

層 (k o - g 含む)

層
層

基本土層



竪穴住居跡調査状況（南から）



NP - 82遺物出土状況（西から）



NP - 82出土遺物

口絵 4



B地区出土の土器



B地区出土の石器

例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成13・14年度に実施した森町濁川左岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書には平成13・14年度に調査したB地区の調査結果を掲載する。
3. 調査は平成13年度を第2調査部第4調査課が、平成14年度を第2調査部第3調査課が担当した。
4. 本書の執筆は、各章・節について担当の調査員がそれぞれ行い、文末に文責者名を記している。全体の編集は村田大が行った。
5. 遺構は調査を担当した調査員がそれぞれ整理し、村田が取りまとめた。遺物は土器を影浦覚、石器等を大泰司統が担当した。
6. 遺物等の現場での一次整理および台帳管理は大泰司が統括した。
7. 発掘調査での写真撮影は平成13年度を中山昭大、平成14年度は各担当の調査員が行い、遺物の写真撮影・焼付けなどは中山が行った。
8. フローテーション試料については大泰司が統括した。
9. 各種分析、同定は下記に依頼した。
ヒスイ産地同定（京都大学原子炉実験所 藁科哲男）
炭化種子同定（札幌国際大学 吉崎昌一・椿坂恭代）
10. 火山灰分析および土層の観察は第1調査部第1調査課花岡正光による。
11. 石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡の指導のもと、大泰司が行った。
12. 遺物・記録類は整理および報告書作成後、森町教育委員会が保管する。
13. 調査にあたっては下記の諸機関および諸氏にご協力、ご指導頂いた。

北海道教育庁文化課、森町教育委員会、八雲町教育委員会、長万部町教育委員会、森町立濁川小学校、森町教育委員会：藤田 登・荻野幸男・横山英介・佐藤 稔・原 靖寿・八重樫 誠・山田あや子・渡部明美、八雲町郷土資料館：三浦孝一・柴田信一、八雲町教育委員会：安西雅希・吉田 力、札幌国際大学：吉崎昌一・椿坂恭代、北海道教育大学函館校：鷹沢好博、北海道開拓記念館：平川善祥・山田悟郎・右代啓視、(財)北海道北方博物館交流協会：野村 崇、函館市教育委員会：田原良信・中村公宣・野村祐一・野辺地初雄、函館市立博物館：長谷部一弘、函館市立博物館五稜郭分館：佐藤智雄、七飯町教育委員会：石本省三、南茅部町教育委員会：阿部千春・福田裕二、南茅部町埋蔵文化財調査団：小林 貢・輪島慎二・坪井睦美、今金町教育委員会：寺崎康史、乙部町教育委員会：森 広樹、上磯町教育委員会：森靖裕、上ノ国町教育委員会：松崎水穂・斉藤邦典・松田輝哉、木古内町教育委員会：菅野文二・木本豊・三上英則・大谷内愛史、知内町教育委員会：松本征八・高橋豊彦、松前町教育委員会：久保 泰・前田正憲・谷岡康孝・天方直仁、伊達市教育委員会：大島直行・青野友哉、苫小牧市博物館：赤石慎三、苫小牧市勇武津資料館：佐藤一夫、苫小牧市：宮夫靖夫・二階堂啓也・工藤 肇・兵藤千秋・大泉博嗣・渡辺俊一・鈴木耕栄、岩内町教育委員会：小柳リラコ、泊村教育委員会：田部 淳、札幌市教育委員会：加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・秋山洋司・石井 淳、石狩市教育委員会：石橋孝夫・工藤義衛、恵庭市教育委員会：上屋真一・松谷純一・森 秀之・佐藤幾子、江別市教育委員会：高橋正勝・野中一宏・稲垣和幸、千歳市埋蔵文化財調査センター：大谷敏三・田村俊之・豊田宏良・松田淳子、千歳サケのふるさと館：高橋 理、平取町教育委員会：森岡健治・長田佳宏、富良野市教育委員会：杉浦重信・澤田健、釧路市埋蔵文化財調査センター：石川 朗、網走市郷土博物館：和田英昭、斜里町立知床博物館：松田 功、常呂町埋蔵文化財センター：武田 修、青森県立資料館：鈴木克彦、青森県埋蔵文化財センター：成田滋彦、青森県教育委員会：神 康夫、青森市教育委員会：遠藤正夫・児玉大成、八戸市教育委員会：村木 淳・小保内裕之、東北町教育委員会：古屋敷則雄

凡 例

1. 本文および図・表中では以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。なお混用を避けるため、平成14年度に調査したものについて濁川左岸遺跡の頭文字「N」をそれぞれの略号の頭に付けた。

H (NH) : 住居跡

P (NP) : 土壇

F (NF) : 焼土・石組炉

SP (NSP) : 柱穴様の小ピット

HP : 住居内の柱穴

HF : 住居内の焼土

2. 挿图中的出土遺物は、それぞれに凡例を付した。

3. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺構 1 : 40 遺物出土状況 1 : 20 復元土器 1 : 3 土器拓影 1 : 3

剥片石器 1 : 2 磨製石器 1 : 2 礫石器 1 : 3 土・石製品 1 : 2

4. 遺構の規模は「確認面の長軸長 / 床面・壇底面での長軸長 × 確認面の短軸長 / 床面・壇底面での短軸長 × 確認面からの最大深 (単位はm)」の順で記した。一部破壊されているものについては現存長を () で示し、不明のものは で示した。

5. 土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。

6. 土層の色調は『新版標準土色帖19版』(小山・竹原1997) に準じた。

7. 土層の説明は『土壌調査ハンドブック改訂版』(日本ペドロロジー学会編 1997) を参考に、土性、粘着性、堅密度および礫の混入、その他に分けた。一部、土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表してある。

A + B : AとBがほぼ同量混じる

A > B : AにBが少量混じる

A B : AにBが微量混じる

8. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』(北海道火山灰命名委員会 1982) による。

9. 遺構图中的方位は真北を、細数字は標高 (単位はm) を示している。

10. 石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を () で示した。

最大長 × 最大幅 × 最大厚 (単位はmm)

目 次

口絵	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	2
4 調査概要	2
(1) 発掘区の設定	2
(2) 調査の方法	3
(3) 遺跡の土層	3
(4) 整理の方法	8
(5) 遺物の分類	8
(6) 調査結果の概要	12
遺跡の位置と環境	
1 遺跡の位置と周辺の地形	15
2 周辺の遺跡	15
遺構と遺構出土の遺物	
1 住居跡	22
2 土壌	58
包含層出土の遺物	
1 土器等	105
2 石器等	123
自然科学的分析	
1 濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析	143
2 森町濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子	151
成果と課題	
1 遺構	155
2 土器	157
3 石器	158
一覧表	163 ~ 188
引用参考文献	189
写真図版	191
報告書抄録	261
奥付	

挿図目次

調査の概要	
図 - 1	遺跡の位置
図 - 2	遺跡周辺の地形と調査区
図 - 3	発掘区設定図
図 - 4	基本土層と土層断面
図 - 5	遺構位置図
遺跡の位置と環境	
図 - 1	遺跡周辺の地形(1)
図 - 2	遺跡周辺の地形(2)
図 - 3	遺跡周辺の地形(3)
図 - 4	周辺の遺跡
遺構と遺構出土の遺物	
図 - 1	B地区遺構位置図
図 - 2	H - 1 (1)
図 - 3	H - 1 (2)と遺物(1)
図 - 4	H - 1の遺物(2)
図 - 5	H - 2 (1)
図 - 6	H - 2 (2)と遺物(1)
図 - 7	H - 2の遺物(2)
図 - 8	H - 3 (1)
図 - 9	H - 3 (2)
図 - 10	H - 3 (3)
図 - 11	H - 3の遺物
図 - 12	H - 4 (1)
図 - 13	H - 4 (2)と遺物(1)
図 - 14	H - 4の遺物(2)
図 - 15	H - 9と遺物(1)
図 - 16	H - 9の遺物(2)
図 - 17	NH - 13 (1)
図 - 18	NH - 13 (2)
図 - 19	NH - 13 (3)
図 - 20	NH - 13の遺物(1)
図 - 21	NH - 13の遺物(2)
図 - 22	NH - 13の遺物(3)
図 - 23	NH - 17
図 - 24	NH - 17の遺物(1)
図 - 25	NH - 17の遺物(2)
図 - 26	NH - 19
図 - 27	NH - 19の遺物(1)
図 - 28	NH - 19の遺物(2)
図 - 29	P - 1
図 - 30	P - 1の遺物とP - 3
図 - 31	P - 4と遺物
図 - 32	P - 5・6と遺物
図 - 33	P - 7と遺物
図 - 34	P - 8と遺物
図 - 35	P - 11と遺物(1)
図 - 36	P - 11の遺物(2)
図 - 37	P - 12と遺物(1)
図 - 38	P - 14と遺物、P - 17
図 - 39	NP - 60と遺物(1)
図 - 40	NP - 60の遺物(2)
図 - 41	NP - 60の遺物(3)
図 - 42	NP - 60の遺物(4)
図 - 43	NP - 60の遺物(5)
図 - 44	NP - 60の遺物(6)
図 - 45	NP - 60の遺物(7)
図 - 46	NP - 60の遺物(8)
図 - 47	NP - 60の遺物(9)
図 - 48	NP - 60の遺物(10)
図 - 49	NP - 61と遺物(1)
図 - 50	NP - 61の遺物(2) NP - 62と遺物
図 - 51	NP - 65と遺物、NP - 67
図 - 52	NP - 68・69・70
図 - 53	NP - 77と遺物、NP - 80
図 - 54	NP - 81
図 - 55	NP - 82
図 - 56	NP - 82の遺物(1)
図 - 57	NP - 82の遺物(2)
図 - 58	NP - 84、NP - 85と遺物
図 - 59	NP - 86と遺物
図 - 60	NP - 88と遺物(1)
図 - 61	NP - 88の遺物(2)
図 - 62	NP - 89・90、NP - 92と遺物

包含層出土の遺物

- 図 - 1 包含層出土の土器(1)
- 図 - 2 包含層出土の土器(2)
- 図 - 3 包含層出土の土器(3)
- 図 - 4 包含層出土の土器(4)
- 図 - 5 包含層出土の土器(5)
- 図 - 6 包含層出土の土器(6)
- 図 - 7 包含層出土の土器(7)
- 図 - 8 包含層出土の土器(8)
- 図 - 9 包含層出土の土器(9)
- 図 - 10 包含層出土の土器(10)
- 図 - 11 包含層出土の土器(11)
- 図 - 12 包含層出土の土器(12)
- 図 - 13 包含層出土の土器等(13)
- 図 - 14 包含層出土の土器分布図
- 図 - 15 包含層出土の石器(1)
- 図 - 16 包含層出土の石器(2)
- 図 - 17 包含層出土の石器(3)
- 図 - 18 包含層出土の石器(4)
- 図 - 19 包含層出土の石器(5)
- 図 - 20 包含層出土の石器(6)
- 図 - 21 包含層出土の石器(7)
- 図 - 22 包含層出土の石器(8)
- 図 - 23 包含層出土の石器(9)
- 図 - 24 包含層出土の石器(10)

- 図 - 25 包含層出土の石器等(11)
- 図 - 26 包含層出土の石器分布図(1)
- 図 - 27 包含層出土の石器分布図(2)

自然科学的分析

- 1 濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析

図1 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布圏

図2 ヒスイ原石の元素比值 Zr / Sr 対 Sr / Fe の分布および分布圏

図3 ヒスイ原石の元素比值 Ca / Si 対 Sr / Fe の分布および分布圏

図4 ヒスイ原石の元素比值 Na / Si 対 Mg / Si の分布および分布圏

図5 濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品(88308)の蛍光X線スペクトル

- 2 濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子
図版 濁川左岸遺跡出土炭化種子

成果と課題

- 図 - 1 縄文時代後期前葉の住居跡と中期前半の土壌
- 図 - 2 石器のまとめ(1)
- 図 - 3 石器のまとめ(2)

表目次

調査の概要

- 表 - 1 出土遺物一覧

遺跡の位置と環境

- 表 - 1 森町の遺跡一覧

遺構と遺構出土の遺物

- 表 - 1 遺構規模一覧
- 表 - 2 遺構出土遺物一覧
- 表 - 3 遺構出土掲載土器一覧(復元土器)
- 表 - 4 遺構出土掲載土器一覧(拓影図)
- 表 - 5 遺構出土掲載石器一覧

包含層出土の遺物

- 表 - 1 包含層出土土器等一覧
- 表 - 2 包含層出土掲載土器一覧(復元土器)
- 表 - 3 包含層出土掲載土器等一覧(拓影図)
- 表 - 4 包含層出土石器一覧
- 表 - 5 包含層出土掲載石器一覧

自然科学的分析

- 1 濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析

表1 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(1)

表2 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準(2)

表3 濁川左岸遺跡のヒスイ製石製品の元素
分析と比量の結果

表4 濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の
原産地分析結果

2 濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子

表1 濁川左岸遺跡炭化種子一覧

表2 フローテーション試料一覧

図版目次

口絵1 遺跡遠景 基本土層

口絵2 竪穴住居跡調査状況

口絵3 NH - 82の調査

口絵4 B地区出土の遺物

平成13年度の調査

図版1

1 住居跡確認(南西から)

2 住居跡確認(南東から)

図版2

1 H - 1東西セクション(北西から)

2 H - 1南北セクション(北東から)

3 H - 1遺物出土状況(南東から)

図版3

1 HF - 1・HP - 1セクション(北から)

2 HF - 1セクション(北から)

3 HP - 1セクション(南から)

4 HP - 2セクション(北西から)

5 H - 1完掘(北西から)

図版4

1 H - 2東西セクション(南東から)

2 H - 2南北セクション(東から)

3 HF - 1確認(南東から)

4 HF - 1セクション(南から)

5 H - 2完掘(南東から)

図版5

1 H - 3東西セクション(南から)

2 HP - 1セクション(南から)

3 HP - 7セクション(南から)

4 HP - 8セクション(西から)

5 H - 3完掘(北東から)

図版6

1 H - 4セクション(北から)

2 HF - 1セクション(南西から)

3 HP - 2セクション(東から)

4 H - 4出土状況(北東から)

図版7

1 H - 9セクション(西から)

2 H - 9遺物出土状況(東から)

3 HF - 1セクション(北西から)

4 H - 9完掘(東から)

図版8

1 P - 1セクション(東から)

2 P - 1遺物出土状況(北東から)

3 P - 3セクション(東から)

4 P - 3完掘(北西から)

5 P - 4セクション(北西から)

6 P - 4完掘(北から)

7 P - 5セクション(南から)

8 P - 5完掘(南から)

図版9

1 P - 6セクション(南から)

2 P - 6遺物出土状況(西から)

3 P - 7セクション(東から)

4 P - 8完掘(南東から)

5 P - 11セクション(南西から)

6 P - 11遺物出土状況(西から)

7 P - 12セクション(南西から)

8 P - 12完掘(北西から)

平成14年度の調査

図版10

1 火山灰除去作業(東から)

2 B地区完掘(北東から)

図版11

1 NH - 13東西セクション(南西から)

- 2 NH - 13南北セクション(南東から)
- 3 NH - 13覆土1層遺物出土状況(北東から)

図版12

- 1 HF - 1セクション(東から)
- 2 HF - 2セクション(東から)
- 3 HP - 2セクション(西から)
- 4 HP - 3セクション(西から)
- 5 NH - 13完掘(西から)

図版13

- 1 NH - 17遺物出土状況(東から)
- 2 NH - 17東西セクション(南から)
- 3 HF - 1検出状況(北東から)
- 4 HF - 1セクション(北西から)

図版14

- 1 NH - 17完掘(南から)
- 2 NH - 19東西セクション(南から)
- 3 NH - 19南北セクション(南西から)

図版15

- 1 HF確認(北から)
- 2 HF確認(西から)
- 3 HFセクション(南から)
- 4 NH - 19完掘(東から)

図版16

- 1 NH - 17(手前)・19(奥)調査状況(南から)

図版17

- 1 NP - 60遺物出土状況(南西から)
- 2 NP - 60遺物出土状況(南西から)
- 3 NP - 60遺物出土状況(南西から)
- 4 NP - 60遺物出土状況(南西から)
- 5 NP - 61セクション(南から)
- 6 NP - 61遺物出土状況(東から)

図版18

- 1 NP - 62セクション(西から)
- 2 NP - 62完掘(南西から)
- 3 NP - 65完掘(西から)
- 4 NP - 68完掘(北から)
- 5 NP - 67セクション(東から)
- 6 NP - 67完掘(東から)
- 7 NP - 69セクション(西から)

- 8 NP - 69完掘(北から)

図版19

- 1 NP - 70セクション(南西から)
- 2 NP - 70完掘(南西から)
- 3 NP - 77セクション(東から)
- 4 NP - 77遺物出土状況(南東から)
- 5 NP - 77完掘(南東から)
- 6 NP - 80完掘(南から)
- 7 NP - 81セクション(南西から)
- 8 NP - 81完掘(南から)

図版20

- 1 NP - 82確認(西から)
- 2 NP - 82セクション(南西から)
- 3 NP - 82遺物出土状況(西から)
- 4 NP - 82完掘(西から)
- 5 NP - 84セクション(南から)
- 6 NP - 84完掘(北から)

図版21

- 1 NP - 85セクション(南から)
- 2 NP - 85完掘(西から)
- 3 NP - 86セクション(南から)
- 4 NP - 86完掘(東から)

図版22

- 1 NP - 88確認(北東から)
- 2 NP - 88遺物出土状況(北東から)
- 3 NP - 88セクション(南東から)
- 4 NP - 88完掘(東から)
- 5 NP - 89セクション(東から)
- 6 NP - 90完掘(北東から)

図版23

- 1 NP - 92セクション(東から)
- 2 NP - 92完掘(東から)
- 3 恵山式土器出土状況(北から)
- 4 円筒下層d式土器出土状況(北から)
- 5 フレイク出土状況(F-40区)(北から)
- 6 ヒスイ製玉

掲載遺物

図版24 遺構出土の遺物(1)

図版25 遺構出土の遺物(2)

- 図版26 遺構出土の遺物 (3)
- 図版27 遺構出土の遺物 (4)
- 図版28 遺構出土の遺物 (5)
- 図版29 遺構出土の遺物 (6)
- 図版30 遺構出土の遺物 (7)
- 図版31 遺構出土の遺物 (8)
- 図版32 遺構出土の遺物 (9)
- 図版33 遺構出土の遺物 (10)
- 図版34 遺構出土の遺物 (11)
- 図版35 遺構出土の遺物 (12)
- 図版36 遺構出土の遺物 (13)
- 図版37 遺構出土の遺物 (14)
- 図版38 遺構出土の遺物 (15)
- 図版39 遺構出土の遺物 (16)
- 図版40 遺構出土の遺物 (17)
- 図版41 遺構出土の遺物 (18)
- 図版42 遺構出土の遺物 (19)
- 図版43 遺構出土の遺物 (20)
- 図版44 包含層出土の土器 (1)
- 図版45 包含層出土の土器 (2)
- 図版46 包含層出土の土器 (3)

- 図版47 包含層出土の土器 (4)
- 図版48 包含層出土の土器 (5)
- 図版49 包含層出土の土器 (6)
- 図版50 包含層出土の土器 (7)
- 図版51 包含層出土の土器 (8) ・土製品
- 図版52 包含層出土の土器 (9)
- 図版53 包含層出土の土器 (10)
- 図版54 包含層出土の土器 (11)
- 図版55 包含層出土の土器 (12)
- 図版56 包含層出土の土器 (13)
- 図版57 包含層出土の土器 (14)
- 図版58 包含層出土の土器 (15)
- 図版59 包含層出土の土器 (16)
- 図版60 包含層出土の石器 (1)
- 図版61 包含層出土の石器 (2)
- 図版62 包含層出土の石器 (3)
- 図版63 包含層出土の石器 (4)
- 図版64 包含層出土の石器 (5)
- 図版65 包含層出土の石器 (6)
- 図版66 包含層出土の石器 (7)
- 図版67 包含層出土の石器 (8) ・石製品

調査の概要

1 調査要項

遺跡名：濁川左岸遺跡（北海道教育委員会登載番号 B - 15 - 22）
事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委託者：日本道路公団北海道支社
所在地：茅部郡森町字石倉町401ほか
調査面積：4,930㎡（平成13年度：1,300㎡、平成14年度：3,630㎡）
発掘期間：平成13年7月24日～10月26日
平成14年5月7日～8月30日
整理期間：平成14年10月28日～平成15年3月31日（B地区のみ）

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

（平成13年度）

理事長 大澤 満
専務理事 宮崎 勝
常務理事 木村尚俊（平成13年7月17日まで）
総務部長 柳瀬茂樹
第2調査部長 大沼忠春（第1調査部長兼務 平成13年7月18日付）
第4調査課課長 熊谷仁志（発掘担当者）
主任 影浦 覚（発掘担当者）
主任 中山昭大
主任 袖岡淳子（発掘担当者）
文化財保護主事 大泰司 統

（平成14年度）

理事長 大澤 満（平成14年6月30日まで）
森重橋一（平成14年7月1日から）
専務理事 宮崎 勝
常務理事 畑 宏明
総務部長 下村一久
第2調査部長 西田 茂
第3調査課課長 熊谷仁志（発掘担当者）
主任 村田 大（発掘担当者）
主任 影浦 覚（発掘担当者）
文化財保護主事 大泰司 統（発掘担当者）

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道路は(函館～名寄)は、函館を起点として苫小牧市・札幌市・旭川市を經由し、名寄に至る総延長488kmの路線である。長万部町国縫IC～和寒町和寒IC間の359kmはすでに供用され、七飯～長万部間について平成5年11月から建設工事が進められている。

平成2年4月に、七飯～長万部間について日本道路公団札幌建設局(現：日本道路公団北海道支社)から北海道教育委員会に埋蔵文化財についての事前協議がなされた。協議を受けた北海道教育委員会は、平成2年4月に所在確認調査を実施し、平成5年から北側の長万部町から順次試掘調査を開始した。

濁川左岸遺跡については平成13年4月24・25日に試掘調査が実施された。その結果、用地内南側で縄文時代後期前葉の多量の遺物と共に遺構と見られる落ち込みが確認され、用地内の包蔵地面積8,600㎡(工事区域内4,500㎡)が発掘調査必要範囲とされた。

濁川左岸遺跡の調査は、平成13年度当初の調査計画にはなかった。

当初計画では森町本内川右岸遺跡を調査する予定であったが、同遺跡の工事工程の変更によって、急遽、投入予定人工の見合い分で濁川左岸遺跡を実施することとなった。

平成13年度の調査は、調査範囲内の工事工程の都合から調査区両端の2地点計1,300㎡を調査した。平成14年度は3,630㎡調査を実施し、最終的には4,930㎡を調査し、濁川左岸遺跡の調査を終了した。

整理作業は、多くの遺構が検出され、遺物も約20万点にも及ぶことから平成14・15年度の2ヵ年をかけて整理作業を実施する。

調査報告書は、平成14年度には北側部分(B地区)を、平成15年度は南側部分(A地区)を作成する予定である。
(熊谷仁志)

4 調査概要

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定に当たっては日本道路公団北海道支社の「北海道縦貫自動車道本茅部工事平面図(2)1,000分の1図」を使用した。工事予定上り線の中央線上の中心杭であるSTA.444とSTA.445を通る線を基軸のMラインとし、STA.444を基準に4m方眼を設定した。Mラインと並行に南西へ向かってL、K、J...とした。更に、STA.444を通りそれに直行する線を10ラインとし、北西へ向かって11、12、13...とした。この方眼は南端交点をアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する(例：STA.444はM-10)。更に必要に応じて2m方眼に4分割または1m方眼に16分割し小発掘区とした。2m方眼の小発掘区は杭のある側から反時計回りにa、b、c、dを付し(例：M-10-a)。1m方眼の小発掘区は南端から南西へ順に1、2、3、4とした(例：M-10-1)。

この方眼の日本測地系による平面直角座標は第 系で以下のとおり。

STA.444(調査区杭番号M-10) X = -206064.5983 Y = 19511.8843

STA.445 X = -205999.8906 Y = 19435.6588

また、測量法の改正に伴い、平成14年4月1日に現行の平面直角座標系(昭和43年建設省告示第3059号)は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系(平成14年国土交通省告示第9号)が施行された為、世界測地系による平面直角座標を併記しておく。なお、座標の変換には国土地理院のホームページで公開されている座標変換ソフト「TKY2JGD」を使用した。

この方眼の世界測地系による平面直角座標は第 系で以下のとおり。

STA . 444 (調査区杭番号M - 10) X = - 205808 . 1900 Y = 19218 . 7326

STA . 445 X = - 205743 . 4835 Y = 19142 . 5088

水準測量は北海道茅部郡森町字石倉町34番地先に所在する、1等水準点第5971号を用いて、各測量に使用した。

1等水準点第5971号 H=9 . 3115m

(2) 調査の方法

調査範囲は濁川によって形成された森町側の高い段丘と、無名沢によって開析された八雲町側の低い段丘からなる部分である。両段丘の間に沢跡が確認され、これを境に森町側の高位段丘を「A地区」、八雲町側の低位段丘を「B地区」と呼称し調査を行った。発掘区では30ラインより南東側が「A地区」、北西側が「B地区」となる。

試掘調査の結果から、多量の遺物の出土と遺構の検出が予想されたため、調査予定範囲全てを通常発掘範囲とした。調査に先行し重機により表土、火山灰を除去した。一部、抜根による攪乱が見られたが、遺物包含層は良好に残存していることがわかった。

調査は主に、平成13年度のA地区を影浦が、B地区を袖岡が、平成14年度のA地区を大泰司が、B地区を村田が担当した。

包含層調査

～ 層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。

遺構調査

包含層調査時に土層の変化により確認された遺構については、その平面長軸と短軸に土層観察用のベルトを残して掘り下げた。

遺物の取上げ

包含層出土の遺物は、発掘区および層単位での一括取上げとした。出土状況に応じて、小発掘区による取り上げ、写真や出土状況図の作成など詳細な記録化に努めた。遺構出土の遺物は、遺構上部の自然堆積層(層・ 層に相当) に包含されていたものについては、遺構および層位を記録して一括で取上げた。覆土、床面または墳底面出土の遺物は、図面、台帳等に出土位置を記録し、遺構単位で連続番号を付して取上げた。ただし、調査の都合により、覆土から出土した遺物の一部は、層位による一括取上げを行っている。

(3) 遺跡の土層

基本層序は平成13年度の調査により決定され、平成14年度もこれを踏襲している。斜面部や沢地形で、層厚に差はあるものの堆積状況に相違はない。 層～ 層が遺物包含層である。以下各層について記す。

層：表土 調査前の現況は、スギやマツなどが植林された山林である。

層：駒ヶ岳火山灰d層(K o - d) 1640年に降下。灰白色を呈し、径3～5mmの軽石。層厚は約80cm。

層：黒褐色土 平坦部、斜面部ともに層厚は約5cm。

層と 層の間に、白頭山苦小牧火山灰(B - T m) が斑状に認められた。

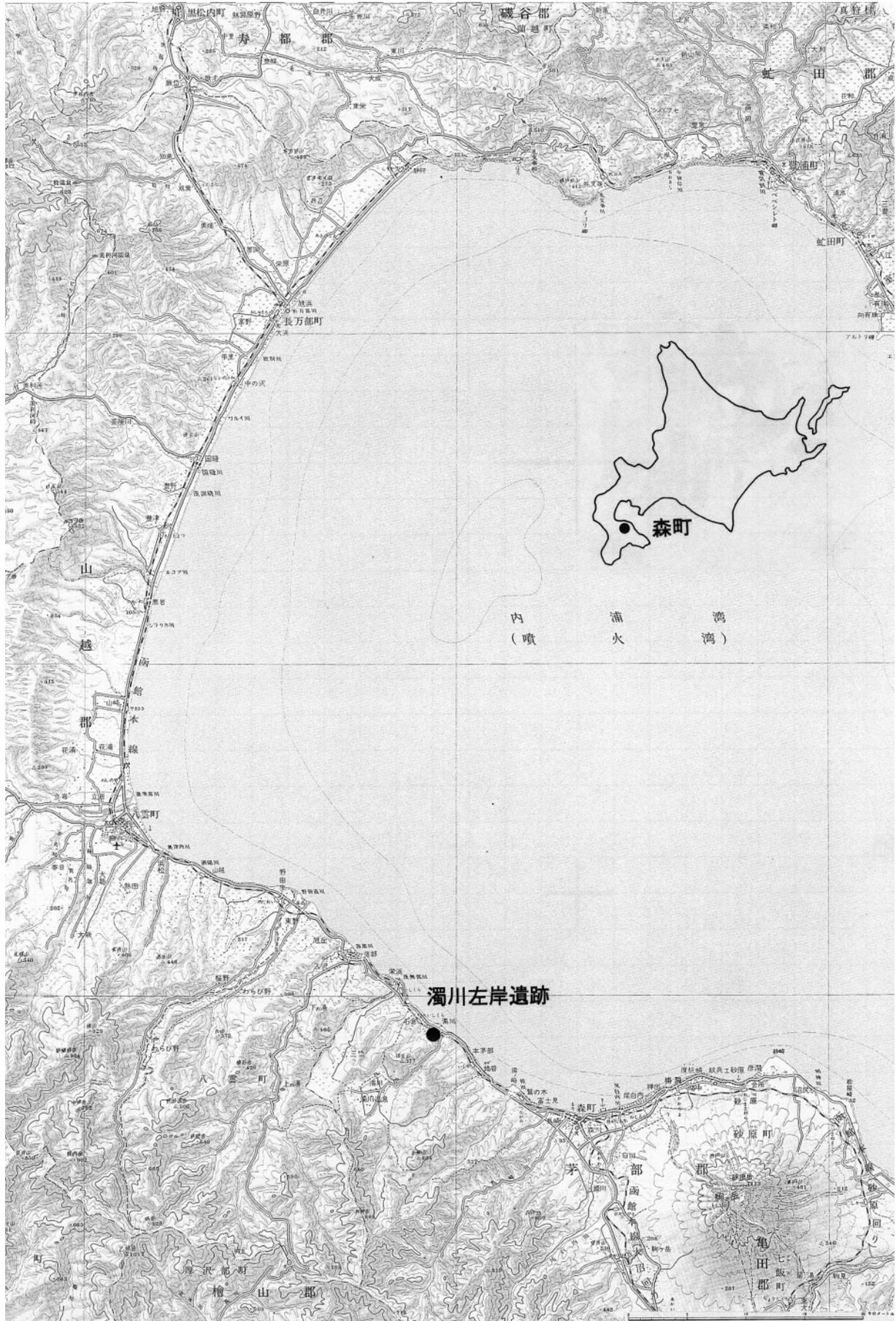


図 - 1 遺跡の位置 (この図は国土地理院発行20万分の1地形図、「室蘭」を複製、加筆したものである)

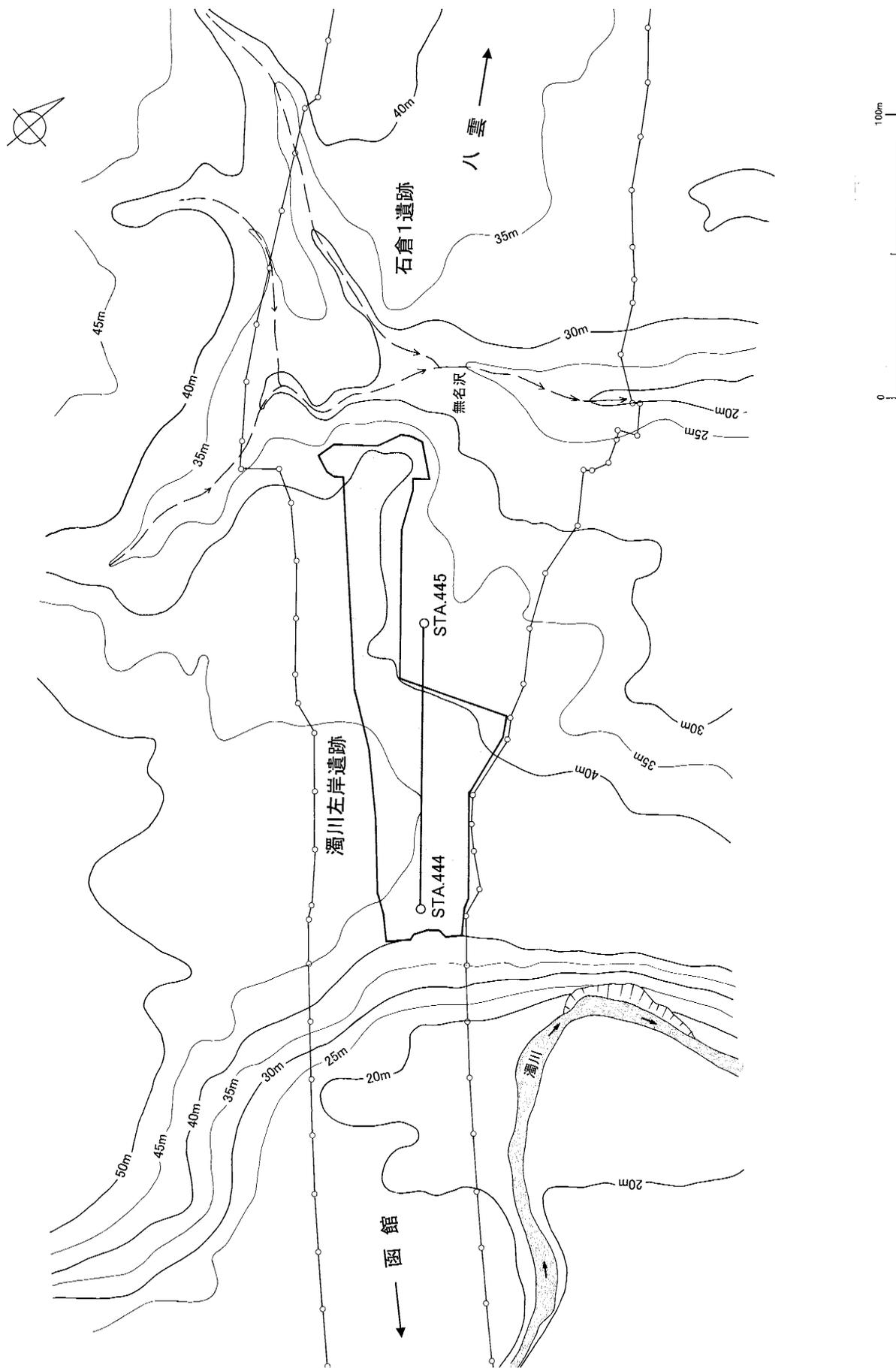


図 - 2 遺跡周辺の地形と調査区

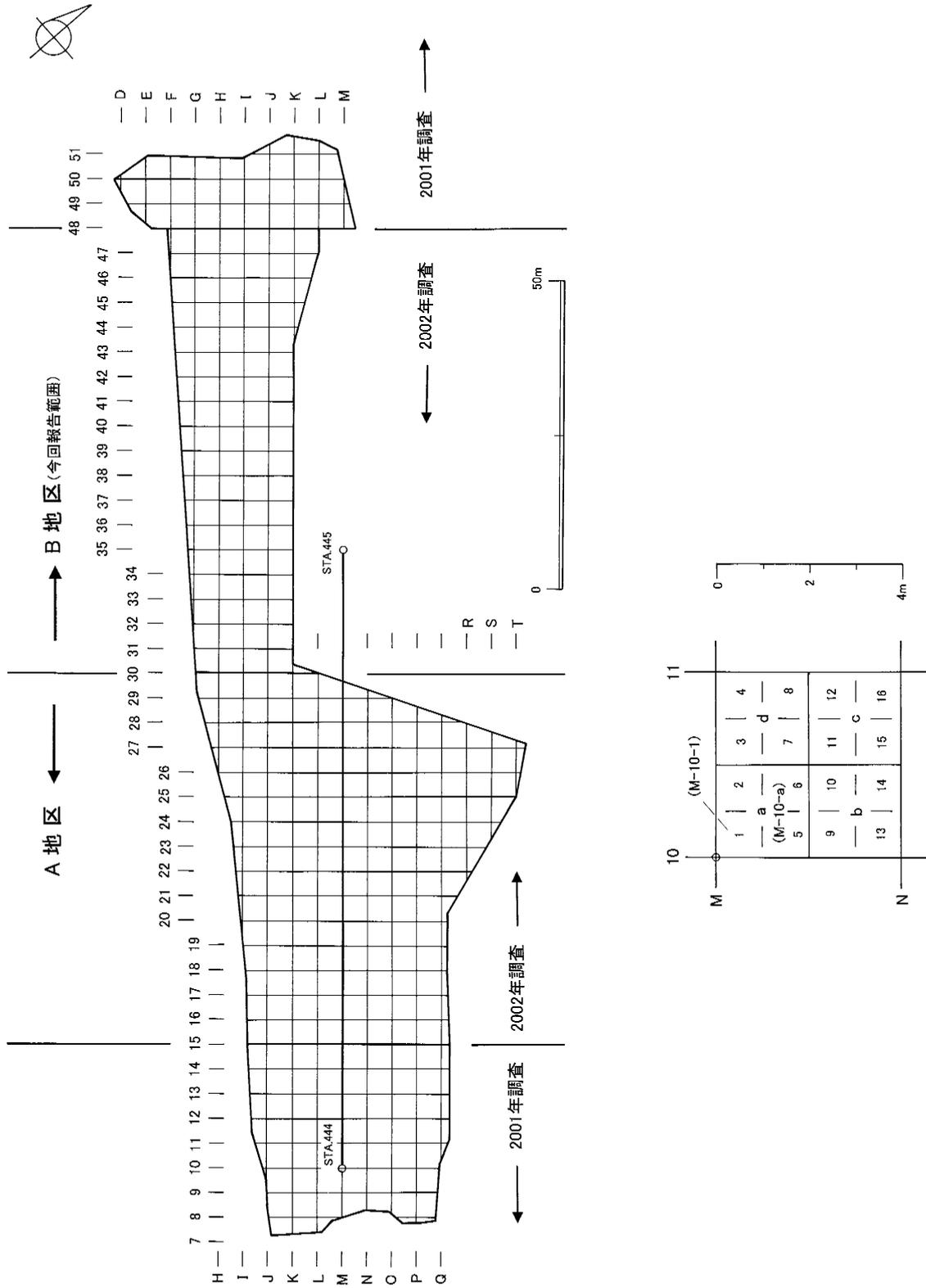
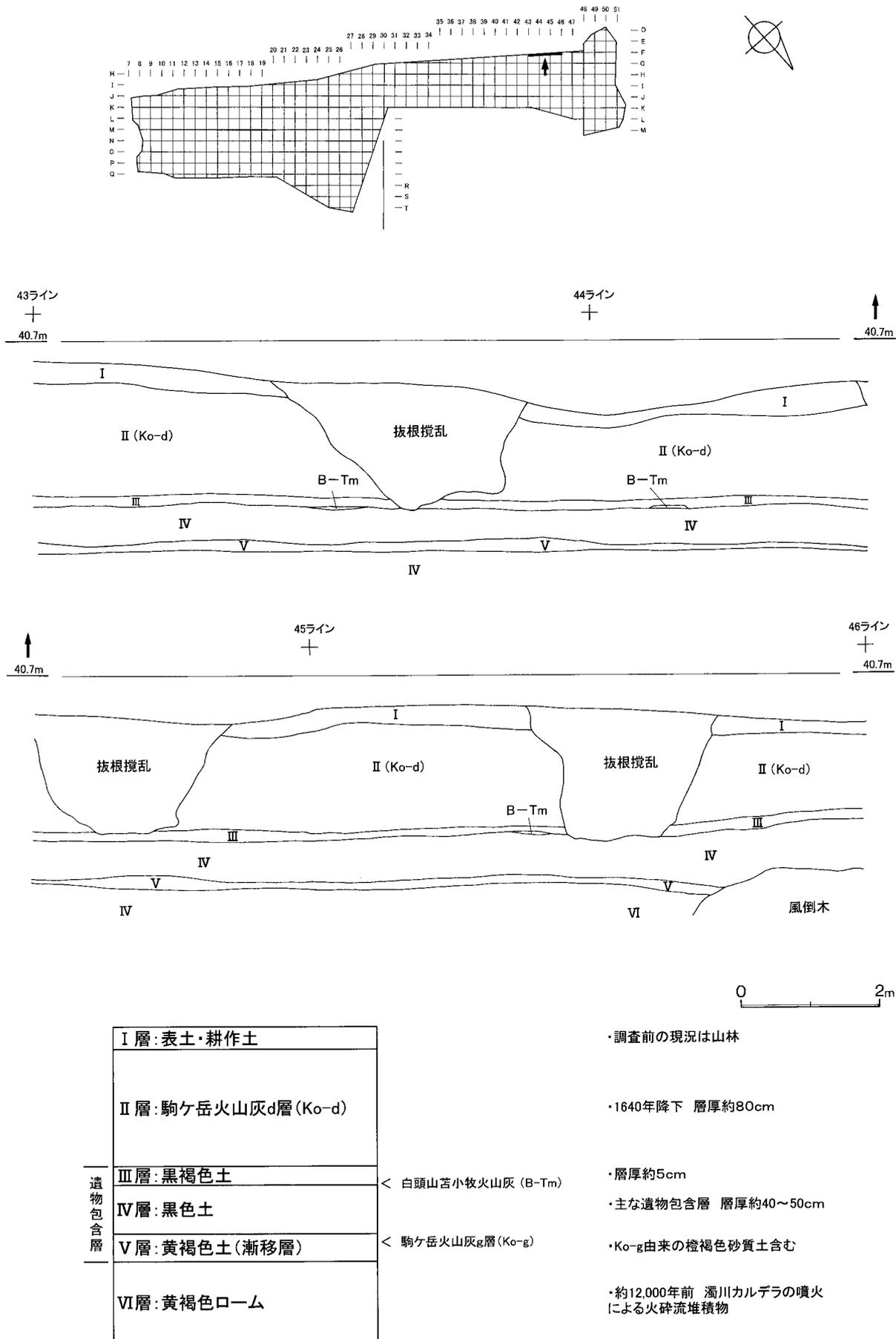


図 - 3 発掘区設定図



遺物包含層	I層: 表土・耕作土	
	II層: 駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d)	
	III層: 黒褐色土	< 白頭山苔小牧火山灰 (B-Tm)
	IV層: 黒色土	
	V層: 黄褐色土(漸移層)	< 駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g)
	VI層: 黄褐色ローム	

- ・調査前の現況は山林
- ・1640年降下 層厚約80cm
- ・層厚約5cm
- ・主な遺物包含層 層厚約40~50cm
- ・Ko-g由来の橙褐色砂質土含む
- ・約12,000年前 濁川カルデラの噴火による火砕流堆積物

図 - 4 基本土層と土層断面

層：黒色土 主な遺物包含層。層厚は約40～50cmであるが、平成13年度調査区のA地区は濁川に向かって緩やかな斜面で黒色土の流れ込みが確認され、約80cmと厚く堆積していた。

層：黄褐色土 漸移層。駒ヶ岳火山灰g層（Ko-g）に由来する橙褐色砂質土を含む。

層：黄褐色ローム層 調査区中央の沢を挟みA地区は黄褐色砂礫層で、人頭大の円礫を包含する水成の二次堆積層である。B地区は約12,000年前の濁川カルデラの噴火による、火砕流堆積物である。

その他、本文中で脆い頁岩を主体とする基盤層を 層と表記したところもある。

（4）整理の方法

現地では野外作業と並行して遺物の水洗、分類、遺物台帳作成、注記作業を行った。注記は小片や微細なものを除いた遺物に、遺跡名略号（NS）・遺構名または発掘区・遺物番号・層位名を記入した。また、竪穴住居の炉と焼土付近の土壌のフローテーション作業を行っている。冬期の整理作業で、土器の接合・復元、石器・礫の接合、土器、石器等の実測・製図、計測、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。A地区の整理作業は平成15年度も継続される予定である。（村田 大）

（5）遺物の分類

土器等

土器は縄文時代早期を 群、前期を 群、中期を 群、後期を 群、晩期を 群、続縄文時代を 群、擦文時代を 群と分類した。各群にアルファベットの小文字を組み合わせてより細かい時期区分を示した。前半をa類、後半をb類、または前葉をa類、中葉をb類、後葉をc類としている。

群 縄文時代早期に属する土器群

a類 貝殻文が施されるもの。

b類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等の施されるもの。

（ 群は今回出土していない）

群 縄文時代前期に属する土器群

a類 縄文の施された丸底、尖底を特色とするもの。（今回は出土していない）

b類 円筒土器下層式土器に相当するもの。

群 縄文時代中期に属する土器群

a類 円筒土器上層式土器に相当、もしくはその系譜を引くと考えられるサイベ沢 式、見晴町式に相当ないし併行するもの。

b類 榎林式、大安在B式、ノダツプ 式、煉瓦台式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

群 縄文時代後期に属する土器群

a類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津 群、白坂3式、十腰内 式に相当ないしは併行するもの。

b類 ウサクマイC式、手稲式、鯉 潤式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

c類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当ないしは併行するもの。（今回は出土していない）

群 縄文時代晩期に属する土器群

a類 大洞B式、大洞BC式に相当ないしは併行するもの。

b類 大洞C1式、大洞C2式に相当ないしは併行するもの。

c類 大洞A式、大洞A'式に相当ないしは併行するもの。

(群は今回出土していない)

群 続縄文時代に属する土器群

a類 恵山式に相当ないしは併行するもの。

b類 後北式に相当ないしは併行するもの。(今回は出土していない)

c類 北大式に相当ないしは併行するもの。(今回は出土していない)

群 擦文時代に属する土器群

(群は今回出土していない)

土製品 土器を除いた土製の加工品。

(影浦 覚)

石器等

石器は出土した包含層出土の石器を純粹にB地区について分類した。分類・細分に関しては、これまで刊行してきた報告書と比較検討するために、群名とその序列、類名は従来のセンター分類におおよそ準じた。しかし、一部の群名とその名称と細分については遺跡と地区の状況を反映させたため多少の変更をした。そして、台石・石皿の群を設けたため群は増えている。付記すると、A地区は縄文時代中期と後期を主体とする遺跡であり、特に中期の遺物量がB地区より多い。またB地区はA地区より縄文時代前期の遺物量が比率的には目立って多い。従って、同一遺跡でありながら、次年度以降報告となるA地区と今回報告のB地区では出土する石器の組成に差があるものと想定でき、かつ現段階の遺物整理結果もその様相を呈している。

< 群 > 石鏃・石槍類(形態の名称は 鈴木道之助:1991 に倣った)

A類 石鏃

1. 凹基有茎のもの
2. 平基有茎のもの(凹基有茎に類似品あり)
3. 凸基有茎のもの(「比較的大型で両面全面調整のもの」「茎部の作り出しが不明瞭なもの」「先端が突き錐のように尖るもの」「使用が著しかったためか先端平面形が鈍角のもの」「茎部が小さく舌状に張り出すもの」などにさらに細分)
4. 尖基鏃(この範疇に入りうるが、凸基有茎の縁辺が潰れた可能性のものが出土)
5. 折損品・未成品

尚、平基有茎・凹基有茎・凸基有茎・折損品の中には両面全面に調整がおよび、特殊なかえし(かえしの先に微妙な段を持つ)のものがある

B類 石槍又はナイフ

1. 凸基有茎のもの(「茎が明瞭なもの(茎部が突起様、あるいは微妙な舌状に作られるものあり)」「茎が不明瞭なもの」にさらに細分)

< 群 > 石錐

A類 石錐

1. 刺突部分を持つもの
2. その他(使用痕のある剥片について、潰れ痕跡に石錐の可能性のあるもの等)

< 群 > つまみ付きナイフ・スクレイパー

A類 つまみ付きナイフ

1. 両面調整のもの(「両面全面調整で鋭利な先端部を持つ」ものがある)

2. 縦長剥片を用いているもの（「片縁調整のもの」「縁辺全周に調整が及ぶもの」「両縁調整のもの」「一側縁に急角度の刃部を持つもの」「一側縁が両面調整のもの」「端部のみが片面全面調整のもの」にさらに細分）
3. 横長剥片を用いているもの
4. 極浅い調整が縁辺に施されているもの（未成品の可能性もあるもの）
5. 分類不能（つまみ部分のみの残存等）

B類 スクレイパー

まず調整の度合いから、刃部が明瞭なものと不明瞭なものに分けた。

1. 相対的に確たる調整するもの（目安として石器幅の8分の1以上の刃幅を、押圧剥離が規則的に連続して形成するもの）その中で、
「急角度の刃部を持つもの」（搔器の可能性のあるものを含み、その中には「側縁に曲線的に張り出す刃部を持つもの」「両側縁に刃部・調整を持つもの」がある。）
「篋状石器ないしはそれに類するもの（「両面調整のもの」「篋の角にあたる部分を1か所持つもの）」
「背面観について、側縁に特に曲線的な刃部を持つもの（「両面調整のもの」を含む）」
「上記に当てはまらないものの中で、背面観から見て、側縁に特に曲線的な刃部を持つもの」
「上記に当てはまらないものの中で、両面調整の刃部を持つもの（他の細分に当てはまらないもので、縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して「両側縁に刃部を持つもの」と「片縁に刃部を持つもの」に分けることができる。）」
2. 剥片素材の縁辺に極浅い（簡単な押圧剥離の連続、刃幅2mm未満を目安とした。）調整をしたもの（「急角度の刃部を有するもの」「一側縁のみに加工を施すもの」「縦長剥片に極浅い調整のみを施したもの」）

更に細分の1、2にあてはまらないもののうち、縦長剥片の利用頻度が高いという観点からさらに3、4を加えた。

3. 縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して両側縁に刃部を持つもの（「両側縁とも確たる調整が巡るもので、端部にも調整が及ぶものを含む」「片縁のみ確たる刃部を持ち、もう片縁は極浅い調整のもの、端部に調整が及ぶものを含む」「背面の一側縁に片面調整があり、それに対となる側縁の腹面側に調整が及ぶもの」がある。）
4. 縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して片縁に刃部を持つもの

また、事実記載中、全面調整のものとは、石器の正中線に至るまでの深い調整を両側縁から施す状況を指すものとした。

< 群 > 石斧類

A類 石斧（成形・調整方法から分類）

1. 全面に研磨が及ぶもの（「敲打後に研磨調整」「打ち欠き後研磨調整」「擦り切り痕跡が明瞭」「擦り切りの可能性があり、打ち欠き・敲打調整後研磨調整」にさらに細分）
2. 未成品

B類 石のみ

（石斧類について、刃部形態の分類（佐原真1977に倣った）としては「弱凸強凸刃（円刃と直刃のものを確認）」「弱凸強平刃（円刃のものを確認）」に分けられた。）

< 群 > たたき石

A類 たたき石

1. 凹み石とされるもの
2. 顕著な打ち欠きを伴う機能部を持つもの（「礪器」とでもいうべき石器で「両面調整」「片面調整」のものがある）
3. 亜球礪のほぼ全面に敲打が巡るもの
4. 割礪の割面を用いるもの
5. 偏平礪・不整な礪の表面に敲打痕を持つもの

「礪の端部を使用するもの」「礪の側縁を使用するもの（偏平打製石器の項目で刃部様と称した機能部を持つものを含む）」「礪の平らな面を用いるもの」「縁辺と端部を使用するもの」「両端と側縁を用いるもの」「縁辺と平らな面を用いるもの」「一端と平らな面を用いるもの」がある。）

< 群 > すり石

A類 すり石 確実に擦痕が観察できるもので「礪の平らな背腹を微妙に用いているもの」「表面を敲打・裏面に擦りのもの」「礪の平らな面を用いるもの」「端部に機能部があるもの」「側縁を使用するもの」がある。

B類 北海道式石冠

1. 全面に敲打で調整する、あるいはその可能性が高いもの
2. 短軸で、半割した楕円礪に敲打によって溝を作る、あるいはその可能性が高いもの
3. 未成品の可能性が高いもの

C類 偏平打製石器（機能部に敲打痕を持つものがほとんどだが、従来の分類を踏襲し、すり石に分類。同一遺物について、3つの観点「石器正面観の形状・石器正面観と底面観から見た機能部の形状」から分類・検討をした）

石器の正面観の形状から

「半円形」「楕円形」「礪素材の形状を留めるもの」「素材に打ち欠き調整を施したのみで未成品の可能性が高いもの」に分かれる。

石器の底面観（機能部・機能面の形状）から

「機能面が底面観について明瞭な面を持つもの」「機能面があるものの明瞭とは言い難いもの」「面部分を持たずいわば刃部様の機能部を有するもの（その中で石器の厚さが3.4 cm以上の肉厚で重量感のあるもの（1000 g以上を目安とする）がある）」

石器の正面観から見た機能部（底面）の形状から

「直線的なもの」「曲線的なもの」「(図上の)頂部・底部に機能部を有するもの（「頂・底部とも直線的なもの」「頂・底部のうち片方が曲線的でもう片方が直線的なもの」「頂・底部の両方に直線的な機能面を有するもの」に細分）

< 群 > 砥石・石鋸

A類 砥石：砥面と想定し得る機能部が平滑ないしは凹面を形作るものが出土した。

B類 石鋸：今回出土していない。しかし石鋸の素材としてよく選択される板状に節理する豊浦・虻田に特徴的な安山岩の出土がある。また、出土遺物中に、擦り切りによる石斧があることから今後出土する可能性がある。

< 群 > 台石・石皿（破片レベルでは両者の見分けがつかないものがほとんどである。）

A類 石皿

1. 楕円形に近い平面形をした顕著な皿部分を有する、典型的な石皿

2. 楕円礫を選択し、顕著な擦り面を持つもの

B類 台石：A類以外の敲打・研磨の台と成り得たと想定できる石器。ただし、破片レベルで石皿との判別は難しく、更には、北海道式石冠を作るための割礫を含む可能性もある。

機能面に残る痕跡から「敲打痕を持つもの」「かすかに擦痕を持つもの」「敲打痕と擦痕の見られるもの」「縁辺に敲打調整を加えるもので、その機能面に敲打痕と擦痕を持つもの」に細分でき、このうちで、表裏面とも確実に使用しているものもある。

< 群 > 両面調整石器・石核・剥片類

A類 両面調整石器

石器の両面に調整が入り、縁辺に使用痕を断定できないもので、石核の性質を備えている可能性がある、又は他の分類に当てはまらないものをここに分類した。

B類 石核

打面が顕著で、剥片剥離面ないしはそれに準ずるものが認められるものを当てはめた。

C類 フレイク

人為的に母材から打ち剥がされたもので、他の石器分類（Uフレイク・Rフレイクを含む）にあてはまらないものをここに当てはめた。

< 群 > 加工痕・使用痕等の作為がみられる剥片や礫

A類 ビエス・エスキーユ

上下両端に潰れ痕跡があるもの、どちらかの端部から裂けるような剥離痕があるものを選んだ。今回、側縁に調整が連続するものはない。

B類 Uフレイク

潰れている連続して欠けているなど的人為的な使用痕が認められるものを当てはめた。

C類 Rフレイク

連続して剥離された痕跡を持つものを当てはめた。

D類 加工痕・使用痕（被熱を含む）のある礫・礫片

E類 礫・礫片（意義づけて運んできた可能性のある原石・軽石・自然の作用による穿孔礫を含む）

< 従来から当センターで群・類名を用いないもの >

石製品：実用品とは考え難い、装飾品等を含めた石の加工物

【引用文献】

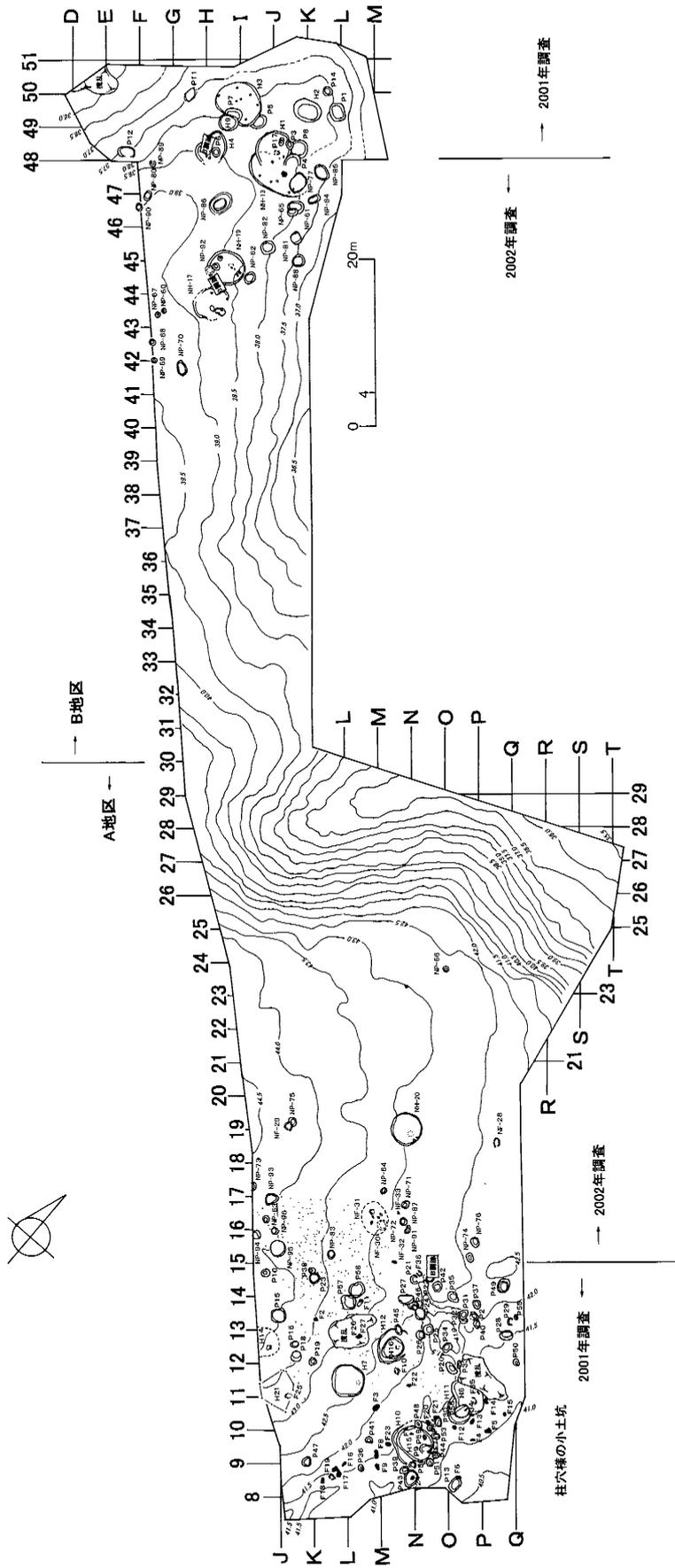
佐原 真 1977 石斧論 横斧から縦斧へ 『考古論集 慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』

鈴木道之助 1991 石鏃 『石器入門事典 縄文』 (大泰司 統)

(6) 調査結果の概要

濁川左岸遺跡は、森町中心部から北西へ約5 km、標高約37～45mの濁川左岸段丘上に位置する。調査区は濁川によって形成された南東側の高位段丘（A地区）と無名沢によって開析された北西側の低位段丘（B地区）および両段丘の間の沢跡からなる。遺構、遺物はおもに調査区両端の濁川と無名沢に面する緩斜面および平坦面から検出されている。

調査は、平成13・14年度の2ヵ年に行われ、平成13年度は、調査対象面積4,500㎡のうち、工事工程の都合から調査区両端にあたるA地区850㎡、B地区450㎡の計1,300㎡について行った。平成14年度は、前年の調査結果から、B地区北東側の斜面部に遺構の存在が想定されたため430㎡を拡張し、A・B地区合わせて3,630㎡の調査を行った。最終的な調査面積は4,930㎡となった。なお、拡張部分から



	A地区	B地区
竖穴住居跡 (H・NH)	11軒	8軒
土壇 (P・NP)	64基	30基
焼土・石組炉 (F・NF)	36ヶ所	
柱穴様の小土壇 (SP・NSP)	307基	

図 - 5 遺構位置図

は6基の土壌が検出されている。

遺構は縄文時代のものがほとんどで、A・B地区合わせて、住居跡19軒、土壌94基、焼土（石組炉を含む）36ヶ所、柱穴様の小ピットが307基である。今回報告するB地区からは、住居跡8軒、土壌30基が検出された。以下、B地区について述べる。

住居跡は楕円形を呈し大形のもの（H-3・NH-13）、円形もしくは不整形を呈し石組炉を持つもの（H-1・4・NH-17・19）、小形のもの（H-2・9）がある。楕円形のもは、縄文時代前後半、群b類土器の時代に、石組炉を持つものは縄文時代後期前葉、群a類土器の時代に属するものと考えられる。

土壌は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものとに分かれる。このうち、平坦面に位置するものは径50cm程の小形で円形のものが多い。NP-60からは長さ5cm～10cmほどで、一部接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、二次加工のある剥片、剥片などが82点出土している。これらは縄文時代後期前葉頃のものと考えられる。緩斜面に位置するものは長軸長約1.5m～2mの楕円形を呈し、掘り込みも比較的深いものである。P-1・11・12・14・NP-61・81・82・84・86・88は埋め戻しの覆土で土壌墓の可能性もある。NP-82からは土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器が13点出土し、副葬品の組み合わせを示す貴重な資料が得られている。これらは縄文時代中期前半、群a類土器の時代に属するものと思われる。遺物はA・B地区合わせて約20万点が出土した。このうちB地区は、土器27,860点、石器等4,136点の合計31,996点である。土器は群a類のものが最も多く、次いで群b類、群a類が多い。また、続縄文時代恵山式の土器が1個体まとまって出土している。

石器は各種出土しているが、北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器類が比較的多いのが特徴である。また、穿孔のみ施された、ヒスイ製玉類の未製品が1点出土している。

（村田 大）

表 - 1 出土遺物一覧

土器等	2001遺構土器	2002遺構土器	遺構合計	2001包含層土器	2002包含層土器	包含層合計
IIb	57	515	572	651	4658	5309
IIIa	348	509	857	1397	1466	2863
IVa	119	554	673	4091	13423	17514
VIa					59	59
不明土器	7		7			
土製玉					2	2
円板状土製品	1		1	1		2
焼成粘土塊					1	1
合計	532	1578	2110	6140	19610	25750
石器等	2001遺構石器	2002遺構石器	遺構合計	2001包含層石器	2002包含層石器	包含層合計
石鏃		3	3	2	47	49
石槍又はナイフ		2	2		7	7
石錐		1	1	1	3	4
つまみ付ナイフ				8	16	24
スクレイパー	5	16	21	28	119	147
石核	2	9	11	9	71	80
両面調整石器				8	12	20
ピエスエスキュー				1	6	7
Rフレイク		13	13	23	68	91
Uフレイク	10	27	37	24	127	151
フレイク	21	114	135	277	1602	1879
北海道式石冠	6	3	9	18	18	36
偏平打製石器	14	13	27	30	39	69
石皿		1	1	2	10	12
台石	20	21	41	20	56	76
石斧片	2	1	3	7	17	24
石のみ片		1	1		1	1
すり石	6		6	4	9	13
たたき石	26	16	42	33	73	106
砥石				3	7	10
礫石	7	2	9	4	4	8
原石		3	3	5	34	39
自然の穿孔がなされる礫					3	3
被熱・使用痕ありの礫				3	10	13
礫・使用痕ありの礫	4	5	9	5	5	10
被熱礫	36	43	79	42	87	129
礫	286	70	356	209	104	313
石製品	1	1	2	2	2	4
合計	446	365	811	768	2557	3325

土器等 27,860点 石器等 4,136点 合計 31,996点

遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形

遺跡の所在する森町は、内浦湾（噴火湾）に面する渡島半島のほぼ中央に位置し、渡島支庁管内茅部郡に属する。東側は駒ヶ岳山頂から押出しの沢を境に砂原町と、南側は宿野辺川を挟んで大野町、七飯町と、南西側は渡島山地を分水嶺として厚沢部町と、西は茂無部川を挟んで八雲町と接し、北は内浦湾（噴火湾）に臨んでいる。

遺跡は森町市街地から北西へ約5kmの石倉地区に所在し、濁川左岸の河岸段丘上に立地している。石倉地区には濁川、石倉川、三次郎川、本内川、茂無部川などの内浦湾（噴火湾）に注ぐ大小の河川があり、これらの河川に面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には多くの遺跡が確認されている。

「石倉」地区は元名を「ショウンナイ」と呼ばれ、アイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）「ウン」（...のある所）「ナイ」（川・沢）で、滝のある沢を意味し、現在の本石倉にそそぐ小川から得た名である。「石倉」は、箱館戦争時、榎本軍の石倉三左衛門の名に由来するそうである。遺跡名にもある「濁川」は、アイヌ語で「ユウンベツ」と呼ばれ、温泉のある川の意で、これを濁川と呼称する経緯は、川水に温泉が流入して濁ったため、和人が意識改称したものである。

現在、海岸線から濁川の盆地へ至る主なルートは、濁川沿いの「道道濁川温泉線」であるが、明治29年製版、大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図「狗神岳」では、石倉川左岸の河口付近から山越えの道が記されているのみである。また、大正9年製版の同図「上濁川」では、現在の石倉小学校から地熱発電所のある坊主山の南麓を回る山越えの道と濁川沿いの道が記載されている。濁川は急峻な谷地形を形成していることから、川沿いのルートは利便性が良くなかったのであろう。

2 周辺の遺跡

平成14年12月現在、34ヶ所の遺跡が登載されている。過去に調査が行われた主なものは、昭和27年から29年にかけて東京大学駒井和愛による尾白内貝塚の調査があり、縄文時代恵山式の土器、石器、骨角器が出土している。尾白内貝塚は昭和55年と平成4年に町教育委員会で調査が行われている。また、昭和30年代から40年代にかけては熊野喜蔵による姫川1遺跡（旧姫川A遺跡）、姫川2遺跡、森川1遺跡などが調査され、縄文時代前期から中期が主体の遺跡であることが確認されている。昭和38年には函館博物館による森川貝塚の調査で、縄文時代前期の円筒土器下層式、縄文時代恵山式、擦文式の土器、陶磁器、鉄器、古銭などが出土した。その他、町教育委員会によって、昭和46年に姥谷遺跡、昭和49年に鳥崎遺跡、昭和51年にオニウシ遺跡、昭和59年・平成5年に御幸町遺跡などが調査され、おもに縄文時代中期から後期の様相が次第に明らかになっている。最近では北海道縦貫自動車道建設工事に伴う調査が増加し、町教育委員会による鷲ノ木4遺跡、栗ヶ丘1遺跡や当センターによる森川3遺跡、倉知川右岸遺跡など継続中のものも含め9遺跡が調査されている。

分布は、尾白内川中流域と七飯町との境界である宿野辺川流域に数ヶ所の遺跡がある他は、森町市街地から茂無部川にかけての海岸段丘上と内浦湾（噴火湾）にそそぐ河川沿いに集中している。この地域の時期は、縄文時代中期から後期のものが大半であるが、河川沿いの遺跡は、内陸部に向かって縄文時代後期を主体とするものが増加する傾向が見られる。縄文時代の遺跡は、森町市街地の低位の海岸段丘上に多い。

（村田）

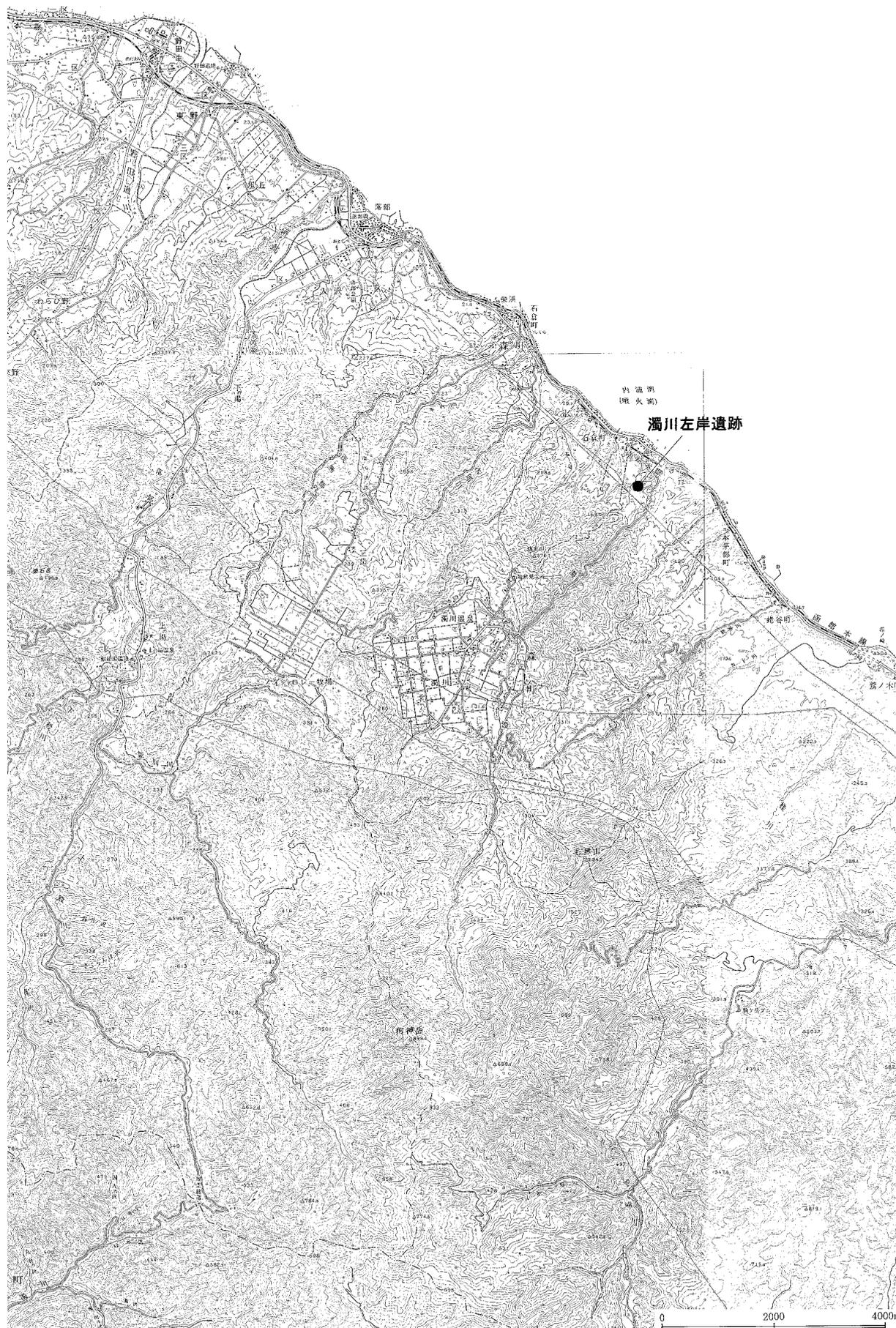


図 - 1 遺跡周辺の地形 (1) (この図は国土地理院発行5万分の1地形図、「駒ヶ岳」「濁川」「八雲」を複製、加筆したものである)

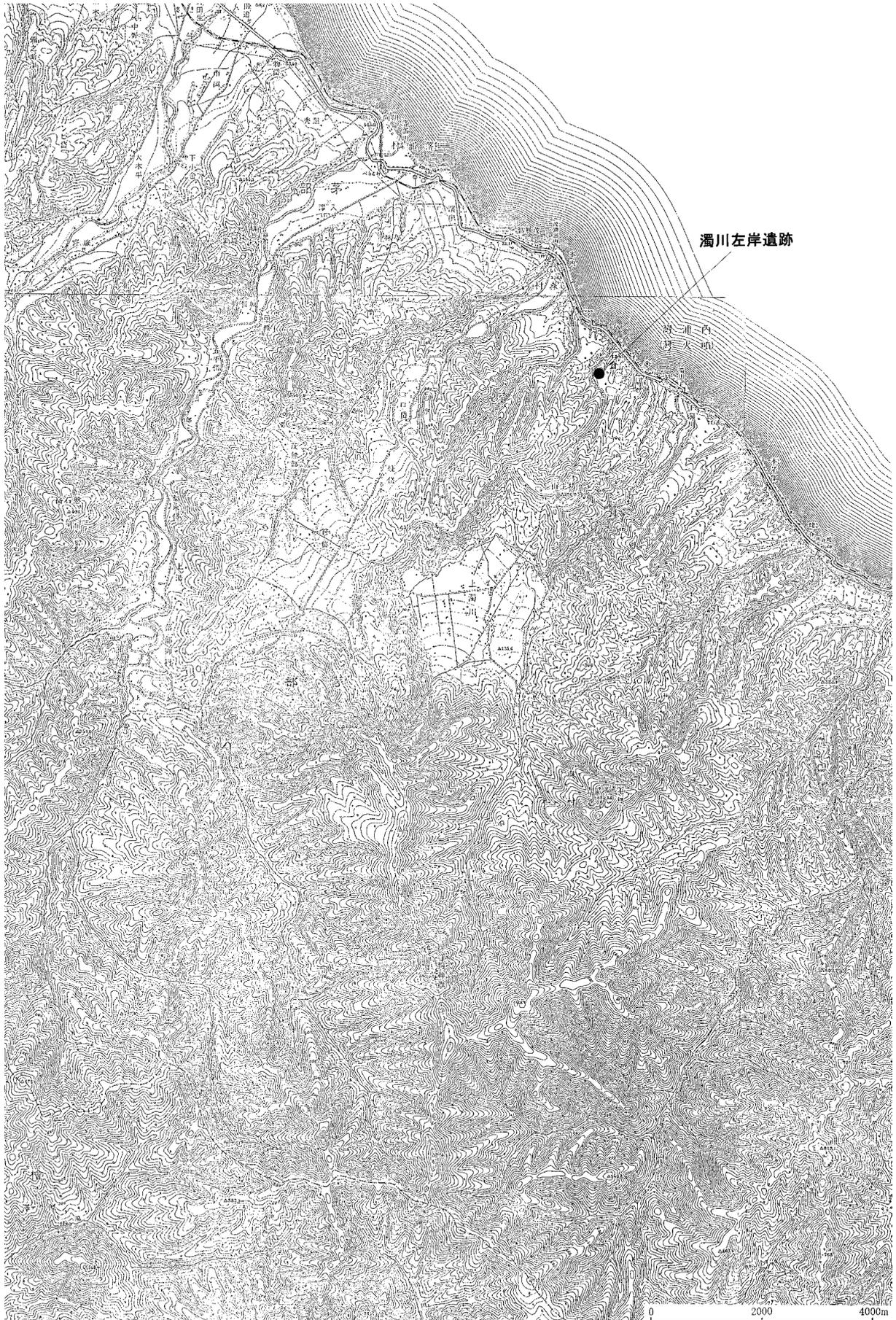


図 - 2 遺跡周辺の地形(2)(この図は大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図、大正6年製版「駒ヶ嶽」大正9年製版「上濁川」大正8年製版「八雲」を複製、加筆したものである)



図 - 3 遺跡周辺の地形 (3) (この図は大日本帝国陸地測量部5万分の1地形図、明治29年製版「駒嶽」「狗神岳」「八雲」を複製、加筆したものである)

森町内の遺跡

図番号	遺跡名	図番号	遺跡名	図番号	遺跡名
1	蛭川1遺跡	11	姥谷遺跡	21	葦ノ木4遺跡
2	蛭川2遺跡	12	赤井川1遺跡	22	蛭川左岸遺跡
3	白川遺跡	13	赤井川2遺跡	23	本茅船1遺跡
4	森川貝塚遺跡	14	赤井川3遺跡	24	栗ヶ丘1遺跡
5	森川1遺跡	15	才ノウシ遺跡	25	倉知川右岸遺跡
6	森川2遺跡	16	御幸町遺跡	26	森川3遺跡
7	本内川右岸遺跡	17	清澄遺跡	27	上台1遺跡
8	茂無部川右岸遺跡	18	葦ノ木1遺跡	28	葦ノ木5遺跡
9	尾白内貝塚遺跡	19	葦ノ木2遺跡	29	石倉1遺跡
10	鳥嶋遺跡	20	葦ノ木3遺跡	30	森川4遺跡
				31	上台2遺跡
				32	石倉2遺跡
				33	石倉3遺跡
				34	石倉4遺跡

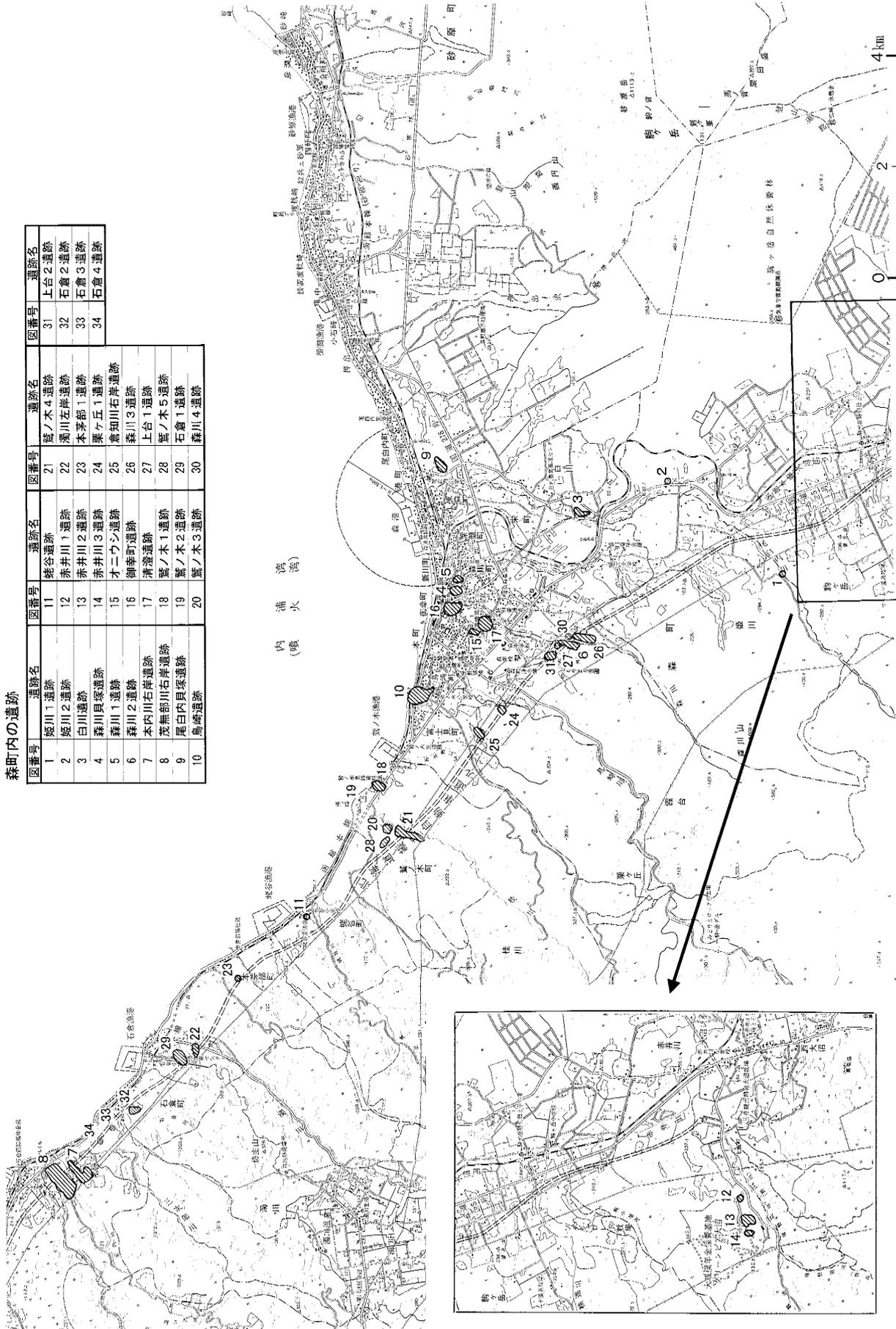


図 - 4 周辺の遺跡

表 - 1 森町の遺跡一覧

図番号	遺跡名	登録番号	所在地	立地()内標高	主な時期	備考
1	姫川1遺跡	B-15-1	字駒ヶ岳132-1ほか	姫川右岸の河岸段丘上(167m)	縄文中期(円筒上層)	昭和37年熊野氏調査 旧姫川A遺跡
2	姫川2遺跡	B-15-2	字駒ヶ岳17-6ほか	姫川右岸の河岸段丘斜面部(112m)	縄文中期(円筒上層)	昭和34年熊野氏調査 旧姫川B遺跡
3	白川遺跡	B-15-3	字白川49-14	河岸段丘上(48~50m)	縄文晩期・続縄文(北大)	昭和37年熊野氏調査 貝塚あり
4	森川貝塚遺跡	B-15-4	字森川町76ほか	低位海岸段丘上(13~15m)	縄文・続縄文(恵山)・擦文・中近世	昭和38年函館博物館調査(函館博物館保管) 旧森川B遺跡を統合
5	森川1遺跡	B-15-5	字森川町69-2ほか	低位海岸段丘上(15~18m)	縄文前期・中期(円筒下層・上層)	昭和40年・46年熊野氏調査 昭和56年範囲確認調査 竪穴住居跡1 旧森川A・C・D遺跡
6	森川2遺跡	B-15-6	字霞台34-1ほか	森川左岸台地上(80~100m)	縄文後期	平成14年町教委調査
7	本内川右岸遺跡	B-15-7	字石倉町610-7・8	本内川右岸台地上(40~60m)	縄文中期・後期	平成13年道埋文センター調査
8	茂無部川右岸遺跡	B-15-8	字石倉町610-2・5	茂無部川右岸台地上(40~60m)	縄文中期・後期	
9	尾白内貝塚遺跡	B-15-9	字尾白内926ほか	低位海岸段丘上(10~14m)	続縄文(恵山)	昭和26・27・29年東京大学調査(東京大学保管) 平成4年町教委調査
10	鳥崎遺跡	B-15-10	字鳥崎31-1ほか	海岸段丘上(15~30m)	縄文後期	昭和49年町教委調査
11	蛭谷遺跡	B-15-11	字蛭谷町146-1ほか	河岸段丘上(30~32m)	縄文中期(円筒上層)・後期	昭和46年町教委調査
12	赤井川1遺跡	B-15-12	字赤井川229	丘陵上(175~195m)	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2遺跡	B-15-13	字赤井川229	丘陵上(230~235m)	縄文中期	
14	赤井川3遺跡	B-15-14	字赤井川229	丘陵上(210m)	縄文中期	
15	オニウシ遺跡	B-15-15	字上台町326-18	海岸段丘上	縄文早期(東銅路Ⅲ)・中期(円筒上層)	昭和51年町教委調査
16	御幸町遺跡	B-15-16	字御幸町132-2ほか	低位海岸段丘上	縄文中期(円筒上層)	昭和59年・平成5年町教委調査 フラスコ状ピット
17	清澄遺跡	B-15-17	字清澄27、29-2	海岸段丘上(33~39m)	縄文中期(円筒上層)	昭和25年森高教諭小林・千歳氏調査(高校台遺跡)
18	鷺ノ木1遺跡	B-15-18	字鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘上(15~20m)	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2遺跡	B-15-19	字鷺ノ木455、無番地		近世	明治2年、榎本武揚、鷺ノ木上陸時に築いた台場跡と伝えられる
20	鷺ノ木3遺跡	B-15-20	字鷺ノ木499-2ほか	河岸段丘上(40~45m)	縄文中期(円筒上層)・続縄文(恵山)	
21	鷺ノ木4遺跡	B-15-21	字鷺ノ木506ほか	河岸段丘上(45~50m)	縄文中期・後期・晩期・続縄文	平成13・14年町教委調査 竪穴住居跡 土壇 配石遺構 ガラス玉(続縄文)
22	濁川左岸遺跡	B-15-22	字石倉町401ほか	濁川左岸段丘上(40~50m)	縄文前期・中期・後期・続縄文	平成13・14年道埋文センター調査
23	本茅部1遺跡	B-15-23	字本茅部町205ほか	海岸段丘上(80~85m)	縄文中期(円筒上層)	平成14年道埋文センター調査 土壇 鉄製品
24	栗ヶ丘1遺跡	B-15-24	字栗ヶ丘38~44	鳥崎川左岸の河岸段丘上(35~45m)	縄文中期・後期	平成13・14年町教委調査 竪穴住居跡 土壇
25	倉知川右岸遺跡	B-15-25	字栗ヶ丘7、11~1・2	倉知川右岸、小無名沢との間の丘陵上(75~80m)	縄文早期・中期・後期	平成14年道埋文センター調査 竪穴住居跡 土壇 配石遺構
26	森川3遺跡	B-15-26	字森川町317-7ほか	森川右岸、細い丘陵上(100m)	縄文前期・中期・続縄文(恵山)・近世	平成14年道埋文センター調査 竪穴住居跡 土壇 畑跡(近世)
27	上台1遺跡	B-15-27	字上台町33-1ほか	小沢を挟む森川2遺跡の対岸(90m)	縄文後期	
28	鷺ノ木5遺跡	B-15-28	字鷺ノ木503-1ほか	桂川の支流、上毛無沢川左岸段丘上(70m)	縄文後期	
29	石倉1遺跡	B-15-29	字石倉町395ほか	濁川の支流(無名沢)の左岸丘陵上(30~40m)	縄文後期・続縄文(後北)	平成14年道埋文センター調査 土壇
30	森川4遺跡	B-15-30	字森川町317-18	森川右岸低位面(90m)	縄文中期・後期	
31	上台2遺跡	B-15-31	字上台町326-5	小沢の左岸、段丘上~緩斜面(90~100m)	縄文中期・後期	
32	石倉2遺跡	B-15-32	字石倉町146ほか	石倉川右岸の高位段丘上(尾根状)(65~75m)	縄文中期・後期・晩期	
33	石倉3遺跡	B-15-33	字石倉町482,483,490	小沢の左岸段丘上(65~75m)	縄文後期	
34	石倉4遺跡	B-15-34	字石倉町511,520,521	三次郎川右岸段丘上(60m)	縄文後期	

遺構と遺構出土の遺物

概要

B地区からは住居跡8軒、土壌30基の遺構が検出された。分布は、おもに調査区北西側を流れる無名沢に向かって、舌状に突き出た段丘の平坦面および緩斜面に位置している。

住居跡はいずれも平坦面にあり、平面形が楕円形を呈し大形のもの（H-3・NH-13）、平面形が円形もしくは不整形を呈し石組炉を持つもの（H-1・4・NH-17・19）、小形のもの（H-2・9）に分かれる。楕円形のは縄文時代前期後半の群b類土器の時期に、円形で石組炉を持つものは後期前葉の群a類土器の時期に、小形のものは中期前半の群a類土器の時期に属すると考えられる。NH-19の炉は2度の付替えを行っている。

土壌は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものに分かれる。前者のうち、F-42・43区のNP-60・67～69は、遺構周辺の遺物出土状況などから、隣接する縄文時代後期前葉の住居跡NH-17・19と関連があると推測される。NP-60からは接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、剥片など82点が出土している。後者は長軸長約1.5m～2mの楕円形を呈し、掘り込みも比較的深いものが多い。P-1・11・12・14・NP-61・81・82・84・86・88は埋め戻しの覆土で土壌墓の可能性もある。NP-82からは土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石などの礫石器が13点出土した。これらは縄文時代中期前半の群a類土器の時期に属すると考えられる。

（村田）

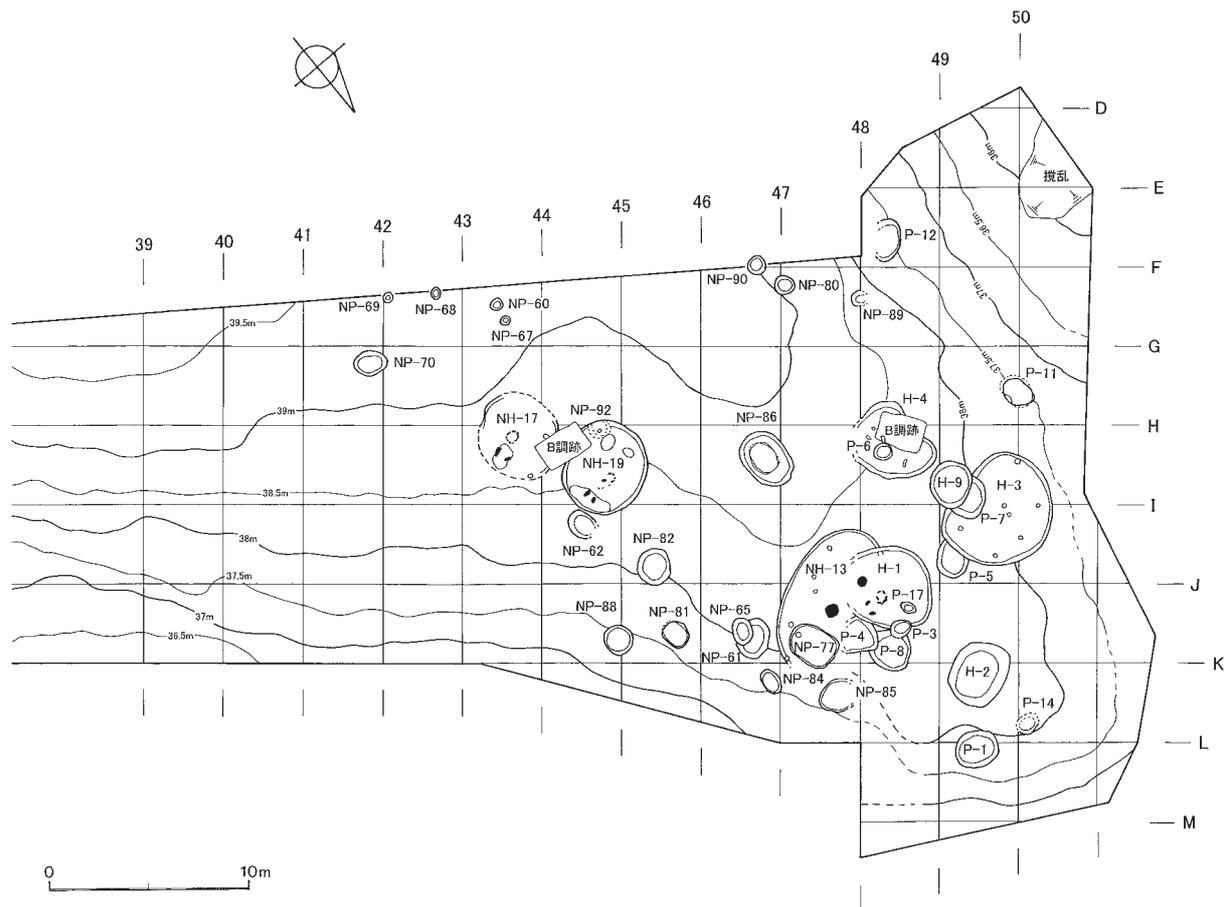


図 - 1 B地区遺構位置図

1 住居跡

H - 1 (図 - 2 ~ 4、図版1 ~ 3)

位置・立地：I・J - 47、48 北に張り出す台地の標高38 ~ 38.5mの平坦面

規模：(4.80) × (4.50) / 4.20 × 4.00 / 0.20m

確認・調査：重機によってK o - g火山灰を除去し、層上面を精査した段階において浅いくぼみを検出した。住居跡であることが想定されたため、土層観察用のベルトを設定し掘り下げていった。これと同時に掘り上げ土の検出を目的に落ち窪みの周囲を3 ~ 5cmずつ掘り下げていった。調査の結果、掘りこみが浅いが明瞭な壁の立ち上がりと床、石組炉を検出し住居跡と認定した。掘り上げ土は検出されなかった。掘り込み面は層中と考えられる。

覆土：1 ~ 8層まで分層した。層黒色土を主体とする。住居の掘り上げ土の流入や層腐植土などによる自然埋没と考えられる。

形態：平面形はほぼ円形である。掘り込み面の層中からの床面までの深さは20cm前後と見られる。掘り込みは浅いが壁の立ち上がりは明瞭である。床面は層層上面にかけてほぼ平坦にし構築している。床面の中央に濁川火砕流に遊離鉄が結合したような層(6層)が検出された。層、層中では検出しない土なので、人為的に持ち込まれ、この住居の床の一部を構成する材料となっていたことが考えられる。

付属遺構：住居の中央よりやや西よりに石組炉(HF - 1)がある。この石組み炉のさらに西側、住居の西端に位置するところに配石とみられる礫の埋設(HP - 1)が検出された。東の方向へ開く「八」の字になっている。炉と配石の長軸方向はN - 88° - Eである。HP - 1周辺は床面より6 ~ 9cm浅く掘り込んでいる。住居の北側に土壌(HP - 2)を検出した。住居跡に伴うものと考えられる。柱穴は検出しなかった。

遺物出土状況：覆土からは遺物が点在して出土した(図 - 3)。群a類土器と礫、礫片を中心として136点の遺物が出土している。覆土下からは群a類、群a類土器と剥片石器類、礫石器類が26点出土している。床面からの遺物は礫、礫片が多く、群a類1点を含む64点の土器、石器類が出土する。HF - 1とした石組炉からはたたき石1点、台石1点を含む合計15点の礫や礫片によって構成されている。HP - 2からは群a類土器1点、礫、礫片1点、被熱礫1点の合計3点出土している。

時期：住居の形態から縄文時代後期前葉群a類の時期の住居跡と考えられる。(袖岡)

掲載遺物：土器 1・2は覆土、3は覆土下、4は床面出土である。1は群a類。LR原体を不規則に施文後、粘土帯を2段貼り付けしたもの。粘土帯の間は横方向の調整により無文である。内外面は指頭圧の凹凸が著しい。胎土に海綿骨針および多量の砂礫を含む。2~4は群a類。いずれもサイベ沢式である。2は山形突起部に橋状突起が縦位に貼付され、口唇上には縄の圧痕が認められる。補修孔が2ヶ所穿たれているが、うち1ヶ所は破損面にかかっている。内面は平滑。鈍い光沢を帯びている。3は外反した口唇上に縄線が加えられたもの。4はRLの縄同士の結束縄文を地文とする。

(影浦)

石器 覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土中から、スクレイパー1点、石核1点、Uフレイク3点、フレイク5点、偏平打製石器が1点、台石が1点、礫・礫片が48点出土し、被熱礫が17点、使用痕のある礫が2点、床面直上からスクレイパーが3点、フレイクが2点、偏平打製石器が1点、台石が1点、礫・礫片が33点、被熱礫が3点、使用痕のある礫が2点出土する。付属遺構HF - 1からた

たき石1点、台石1点、礫13点が出土している。HP - 2から礫・礫片が2点出土している。なお、覆土中からは小礫が7点集中して出土している。未掲載の覆土下部から出土した偏平打製石器は破片であり、その可能性が高いものである。

5～7はスクレイパーである。5は覆土からの出土で、6・7は床面出土である。5は篋状を呈するもので粘板岩製である。両面調整で腹面には節理面を残す。6は珪質頁岩製で端部に浅い調整を施す。先端部の左側は急な刃部である。7はメノウ製横長剥片の一侧縁を用いた削器である。背面に礫面を含む。8は床面出土の偏平打製石器破片である。刃部状の機能部を持つ。安山岩製。9は床面出土の台石である。安山岩製で、表裏に敲打調整の痕と機能を示す擦痕がある。表面は擦痕が顕著で、擦りによって、幅3cm深さ3mmの直線的な溝が数条ある。なお覆土中から出土した石核はNH - 13覆土出土の石核と接合したため、NH - 13の項目で報告した。(大泰司)

H - 2 (図 - 5～7、図版4)

位置・立地：J・K - 49 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：3.28×2.47 / 2.67×1.87 / 0.54m

確認・調査：包含層調査で 層下位～ 層を掘り下げていたところ、灰黄褐色～暗褐色土の、遺構もしくは古い風倒木痕の可能性のある落ち込みが検出された。トレンチを設定し掘り下げたところ明瞭な床面と壁の立ち上がりを検出し遺構と認定した。

覆土：1～14層まで分けた。 層土を多く含む土が主体で、混ぜ返されたような土である。埋め戻しによるものと考えられる。

形態：平面形は楕円形を呈する。床面は平坦で壁の立ち上りは明瞭である。柱穴のようなものは床、壁、H - 2周辺では検出しなかった。

付属遺構：覆土中に焼土を検出した。埋め戻す過程において火を焚いたことが考えられる。

遺物出土状況：H - 2の東側、覆土中から 群a類に属する土器1が1個体出土した(図 - 5・6)。覆土及び覆土下、覆土中の焼土(HF - 1)から土器、石器類合わせて176点の遺物が出土した。

時期：埋め戻しと考えられる覆土中から 群a類、サイベ沢 式に相当する土器が出土したことから縄文時代中期前半の遺構であると考えられる。(袖岡)

掲載遺物：土器 すべて覆土出土である。いずれも 群a類のサイベ沢 式である。1は2本組になっている小形のツノ状突起と、上向きに開いた「C」字状の突起を2種2対で口縁に持つ。底部がわずかに張り出し、ストレートに開く器形である。胴部下半の器表面は剥落が著しい。口唇上には縄による刻みが増えられている。縄および縄端の圧痕は突起上にも観察される。内面は非常に平滑に調整され、光沢を呈する。胎土には海綿骨針が含まれる。2は環状突起が縦位に付されたもの。摩滅が著しいが突起上には縄を2条加えた痕が認められる。口縁は折り返し風に肥厚し、口唇上にも縄の刻みを連続的に加えている。内面は平滑で、胎土中に繊維を含んでいる。3は羽状縄文を地文とする。山形突起の下に瘤状の貼付を有し、口唇上にも縄文を施文している。4は口唇上に縄で刻みを加えたもの。5は円板状土製品。(影浦)

石器 覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土中からスクレイパー1点、Uフレイク1点、フレイク4点、偏平打製石器4点、たき石2点、礫28点(うち軽石が1点)出土している。床面からの遺物出土はない。HF - 1からたき石2点、礫10点が出土している。

11が出土位置不明で、13・14がHF - 1出土である以外はすべて覆土出土である。6は頁岩製のスクレイパーで、急角度の刃部を持つ搔器である。腹面から調整がおよぶが機能部の作出には、礫面の

残存部を生かしている。7～14の礫石器は安山岩製である。7～10は偏平打製石器である。7～9は両面調整で、側縁と頂部にも調整が及び、直線的な機能部を一か所持つ。7・8は敲打によるものか幅の狭い機能面を持ち、9は比較的厚みのあるもので、刃部様の機能部を持つ。10は偏平礫の側縁を打ち欠いており、偏平打製石器の未成品と考える。11は北海道式石冠の破片である。安山岩製ですり面が残り、その縁辺には細かい打ち欠き痕跡が残る。割礫に敲打で溝を巡らせるタイプと見なされる。12～14はたたき石である。12は不整な礫の平らな面部分を複数箇所、敲打している。13・14は鋭角的な一か所の端部に敲打痕がある。

(大泰司)

H - 3 (図 - 8 ~ 11、図版5)

位置・立地：H・I・J - 49、50 北側に張り出す台地の西側のへり、無名沢に臨む標高37.5～38mのところの位置する。

規模：5.73×4.85 / 5.42×4.47 / 0.42m

確認・調査：重機によってK o - d火山灰を除去した段階において住居跡もしくは沢状の地形両方が想定できる落ち込みを検出した。包含層調査によって周辺を掘り下げていくと、これに重複する2つの遺構(H - 9、P - 5)の存在を確認した。これらにかかる土層観察用のベルトを設定し、これに沿ってトレンチを入れたところ、新たに重複する土層(P - 7)を確認し、H - 3の急な壁と平坦な床面の一部を検出した。調査の結果、H - 9より古く、P - 5、7より新しい住居跡であることが判明した。覆土：1～11層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。

形態：平面形は不整な楕円形を呈する。住居の北半部は床と壁の立ち上りが明瞭である。南半部は地形が低くなっていることと、木根による攪乱を受けていることから壁の立ち上りは明瞭になる。床面はほぼ平坦である。規模は大きいが掘上げ土は検出されていない。北側の沢に捨てたことが推測される。

付属遺構：柱穴と考えられる小ピットを8ヶ所検出した。

遺物出土状況：木根による攪乱と風倒木痕より8点の土器、石器類が出土した。覆土と覆土下より土器、石器類の遺物が46点した。床面からは 群b類土器が5点、石斧1点、石斧未成品1点、たたき石3点、すり石1点、北海道式石冠2点、礫、礫片9点、被熱礫1点の計23点、合計77点の遺物が出土した。

時期：床面から 群b類土器が出土したことから縄文時代前期後葉に属する住居跡と考えられる。

(袖岡)

掲載遺物：土器 いずれも床面出土の 群b類。円筒土器下層d式である。単軸絡条体を縦位に回転施文させたもの。胎土中に繊維が含まれる。1は底部片、2は胴部片である。

(影浦)

石器 覆土別の出土状況は、覆土中からUフレイク3点、すり石1点、たたき石2点、台石1点、礫19点(うち軽石が1点)、被熱礫4点が出土した。床面からは石斧とその未成品が1点ずつ、北海道式石冠が2点、すり石1点、たたき石3点、礫・礫片10点が出土した。6・7が覆土からの出土であり、他は床面の遺物である。3は粘板岩製の石斧未成品である。両側縁を両面から打ち欠く。4は緑色泥岩製の石斧である。敲打調整後、研磨を施すが、比較的素材の原形が保たれているものとする。刃部の先端は潰れている。5・6は安山岩製の北海道式石冠片である。5は全面敲打によって成形される。楕円形の機能面には擦痕が残り、長軸方向に対しておおよそ斜め45度の角度で擦痕が走る。6はすり面が残り、その縁辺には細かい打ち欠き痕跡が残る。割礫に敲打で溝を巡らせるタイプと見なされる。7～9は安山岩製のたたき石である。7は亜角礫の端部に機能部を持つものである。8はす

り石とたたき石の機能を合わせ持つもので、端部に敲打痕、平らな面部分に敲打痕と擦り跡を持つ。9は不整な棒状礫の平面的な一部に複数の敲打痕跡を持つものである。10は安山岩製の楕円礫を用いたすり石である。平らな面に擦痕がある。 (大泰司)

H - 4 (図 - 12~14、図版6)

位置・立地：G、H - 47、48 北に張り出す台地の標高38~38.5mの平坦面

規模：4.16×3.72 / (3.61) × (1.50) / 0.18m

確認・調査：重機によってK o - d火山灰を除去した段階において試掘坑(平成13年4月文化課)の周辺に浅い落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを残し落ち込みの周辺を掘り下げたところ、配石と焼土を検出し、先に調査を行なったH - 1と同様の住居跡であると認定した。掘り込み面は 層中と考えられる。

覆土：1~3まで分層した。黒褐色を主体とする。H - 1同様、住居の掘り上げ土の流入や 層腐植土などによる自然埋没と考えられる。

形態：この住居の中央より南側の部分は試掘坑によって壊されているが、平面形は不整な楕円形を呈すると考えられる。床面は西側にゆるく傾く。壁の立ち上がりは明瞭である。

付属遺構：床面の南西端に配石(HP - 1)を検出した。板状の礫を用い、埋置に必要な礫の深さだけを掘り込み埋設してある。配石は2ヶ所あったと推定される。住居床の北側にも礫の抜き取り痕がみられるもの(HP - 2)があり、そのすぐそばに焼土(HF - 1)が検出されている。石組炉は構築されていたことが考えられるが、位置的に想定できる床面は試掘時の攪乱を受けており、確認できなかった。住居に伴う土壌を3ヶ所(HP - 3~5)検出した。柱穴は検出しなかった。

遺物出土状況：覆土からは 群a類土器を主として45点の土器、石器類が出土している。覆土下からは7点、床面からは配石に使用された礫等を主として 群a類土器1点を含む17点、この遺構の関連遺物と考えられるH - 4付近遺物としてたたき石2点、台石1点、HP - 2覆土として3点、合計69点の遺物が出土している。

時期：床面から出土した 群a類土器から縄文時代後期前葉 群a類の時期の住居跡と考えられる。

(袖岡)

掲載遺物：土器 1は床面で出土した 群a類。口唇直下を横位に結節のある縄線が巡る。縄線の下には細く鋭い沈線が施されている。内面はヘラ状工具による丁寧な横方向の器面調整が加えられ、平滑である。焼成良好で、非常に堅密な土器である。 (影浦)

石器 覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土からUフレイク1点、偏平打製石器1点、台石1点、礫・礫片13点、被熱礫1点、床面からフレイク2点、台石4点、礫・礫片4点、被熱礫1点が出土した。HP - 2からは台石が1点出土した。

2は覆土出土の偏平打製石器、3・4はH - 4付近から出土したたたき石、そして5・6は床面出土の台石である。いずれも安山岩製である。包含層遺物たたき石の項で「礫器」としたものに類似する刃部様の機能部を持つ。3は礫の一端を敲打したものである。敲打痕の周辺には打ち欠き痕跡が巡る。4は棒状礫の両端部に敲打痕持ち、一端から連続する一縁辺にも敲打痕跡を持つものである。5は板状礫の両面にかすかな敲打痕と擦痕を持つものである。6は大型の楕円礫の平面的な部分に微妙な擦痕を持つものである。縁辺の一部には打ち欠きを持つ。 (大泰司)

H - 9 (図 - 15・16、図版7)

位置・立地：H - 49 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面より西側

規模：2.34×2.05 / (2.05)×1.85 / 0.18m

確認・調査：H - 3の精査によって判明した住居跡である。ベルトの観察により重複するH - 3、P - 7より新しい。

覆土：2層に分けた。1層は自然埋没によるものと考えられる。覆土下位とした2層はこの住居の生活面と考えられる。

形態：平面形は円形である。床面は、重複する遺構(P - 7)の覆土が柔らかいため、西側にやや傾く。壁の立ち上りは明瞭である。

付属遺構：覆土下位より焼土を検出した。

遺物出土状況：覆土(1層)からは19点の土器、石器類が出土している。覆土下位(2層)からは群a類土器1個体1とたたき石のまとまりを主として87点、合計106点の遺物が出土した(図 - 15)。住居の中央よりやや南東寄り、覆土の下位より土器1が1個体出土した。また住居の西端にたたき石2～7がまとまって出土した。遺物や焼土の検出状況から判断するとこの住居跡の生活面は構築したときの床より8～10cm高く、覆土2層に相当する部分と考えられる。

時期：この住居の生活面と考えられるところからサイベ沢式に相当する土器1個体が出土したことから縄文時代中期前半の住居跡と考えられる。(袖岡)

掲載遺物：土器1は群a類。覆土下においてまとまった状態で出土した。底部がわずかに張り出し、ストレートに開く器形で、口縁はやや外反する。内面は指頭圧による凹凸とヘラ状工具による器面調整が顕著。口縁は幅1cm内外で若干肥厚する。この肥厚は折り返しによるものかもしれない。山形の小突起には環状の貼付がなされ、そこから粘土紐が2本垂下している。縦位に2本垂下する粘土紐から小突起は全体で4つあったことが推測される。胴部の上半は弧線状の粘土紐で文様帯が構成されている。粘土紐の貼付後に付加条の縄文が施されているが、胴部下を横断する一条の綾線文を境として、下半部は無文である。縄文は口唇上にも付されている。(影浦)

石器 覆土層位別の出土状況は、覆土からフレイクが2点、たたき石が8点、礫が12点出土した。

2～8はたたき石である。いずれも覆土の下位からの出土である。4のみ泥岩で、他は安山岩製である。2～4は礫の一端に敲打痕が残るものである。5～8は棒状礫の両端に敲打痕が残るものである。8は偏平な楕円礫の一端に敲打痕が残る、平らな面部分に擦痕を持つものである。(大泰司)

NH - 13 (図 - 17～22、図版11・12)

位置・立地：I・J・K - 47・48 北側へ舌状に張り出す平坦部の先端付近。

規模：(7.67) / (7.47) × - / - × 0.50m

確認・調査：平成13年度の調査で壁の立ち上がりの一部が確認された。平成14年度の調査で黒色土の落ち込みが認められ、前年の調査区との境である48ラインとそれに直行する土層観察用ベルトを設定した。トレンチ調査を行い、平坦な面と明瞭な立ち上がりが認められたので、住居跡と判断した。炉周辺の土壌をサンプリングし、フロ - テ - ション作業を行っている。HF - 1から不明炭化種子片が5点、HF - 2からウルシ属炭化種子片1点と不明炭化種子片1点が検出された。

覆土：全体で7層に分層した。自然堆積である。覆土上層は時期の新しい遺構の掘揚げ土など(1層として一括)があり、壁付近に崩落土を主体とする暗褐色土が見られる。

形態：平面形は北側から北西側は、NH - 13より新しいNP - 77、P - 4、H - 1が構築され、不明で

あるが、楕円形を呈すると思われる。床はほぼ平坦で 層中に掘り込まれている。北東側の一部で脆い頁岩を主体とする 層が露出している。壁は急に立ち上がるが、斜面下方にあたる北側では明瞭に確認できなかった。

付属遺構：床面に炉が2ヶ所確認された（HF - 1・2）。掘り込みのない地床炉で、いずれも炭化物を少量含み、地山の焼成は良い。

柱穴は8基検出した。HP - 5は浅く柱穴ではない可能性がある。その他は深さ40～60cm程で直立し、先端は杭状である。壁際から50cmほど内側を巡るように位置している。

遺物出土状況：覆土中に 群b類、 群a類、 群a類の土器とフレイクなどが散見される。床面からは 群b類土器が出土している。

時期：床面出土の遺物から縄文時代前期後半の 群b類、円筒土器下層d式土器の時期である。

（村田）

掲載遺物：土器 2・4・5・8は床面の出土、他は覆土1の出土である。なお、7・8はHP - 1で出土した土器片が接合している。1は 群a類。覆土1においてまとめて出土したサイベ沢式である。上半部のみの復元である。筒形で垂直に立ち上がり、口縁部付近で少し外反する。口径は30cmである。体部は羽状縄文が施文され、口唇上には縄が連続的に加えられている。口縁は環状の突起を有し、その下に乳頭状の小突起を付してある。口縁部の2分の1を欠くが、この環状突起は全体で4ヶ所あったと推定される。内面は平滑に調整され、鈍い光沢を呈する。2～5は 群b類。いずれも円筒土器下層d式である。2と3は平行縄線を数条巡らせた口縁片。2は体部との境に綾絡文を2段施文している。3は体部に結束羽状縄文と撚糸文によって、いわゆるスダレ状縄文を構成したもの。4、5は胴部片。いずれも胎土に繊維と海綿骨針を含む。4はLの縄とRの縄を組み合わせた撚糸文。5は多軸絡糸体を回転施文させたもの。6～10は 群a類、サイベ沢式である。6は山形突起部に橋状突起が縦位に付されたもの。口唇上に縄線が加えられ、沈線が口縁部を巡る。7はやや肥厚した山形の小突起を有する。口唇上には縄の圧痕が加えられている。8は胎土に砂礫を多く含む。口唇上にはヘラ状工具で調整した痕が観察される。9、10は底部片。いずれも底部が張り出し、底部付近と底面が平滑に調整されたものである。11は 群a類。原体の回転方向を不規則に変えて粗く施文したもの。口唇から口縁にかけ粘土帯を貼付している。

（影浦）

石器 覆土別の出土状況は、覆土中から石槍又はナイフが1点、スクレイパーが6点、Uフレイク4点、フレイク6点、偏平打製石器2点、たたき石2点、台石1点、礫・礫片13点、被熱礫6点が出土し、床面からUフレイク2点、フレイク1点、台石4点、礫・礫片10点が出土した。

12は覆土2層から出土した、玄武岩製の石槍又はナイフである。側縁の加工が両面におよんでいる。残存する先端部は鋭利ではない。13～20はスクレイパーである。14が玄武岩製、18がメノウ製であり、他は珪質頁岩製である。床面から15と20が出土した他は覆土の遺物である。特に13・17・19はJ 47

b区に相当する覆土1層からまとめて取上げたものである。13は背面の両側縁から全面調整されるもので刃部に潰れ等が認められないため未成品であろう。14は横長剥片を用いており、背面右側縁に両面調整がなされている。15は背面右側縁にノッチ状の刃部を持つ。16は縦長剥片の両側縁を調整したもので両縁に細かい調整痕が並ぶ。折損している。17は縦長剥片の両側縁に浅い調整を施すものである。打面側の両縁がノッチ状になっておりつまみ付きナイフの装着部分に準じるものであろうか。端部には礫面が残存し、腹面側から調整が及ぶ。18は図示した背面側に礫面を含む。縦長剥片の一侧縁に浅い調整をする。19は縦長剥片の端部に全面におよぶ両面調整を施したものである。折損したつまみ付きナイフの可能性もある。両縁とも急角度の刃部を持つ。20は不整な形状をした剥片の縁辺に

極浅い調整を施したもの。21は覆土出土の珪質頁岩製の石核である。H - 1覆土中出土のものと接合した。図で示した上下から粗く打ち欠いた後に左側縁からの細かい調整が連続する。裏面の下端にも調整痕が残る。

22・23は安山岩製の偏平打製石器である。22は覆土1層から出土し、礫面が残存する面にはかすかに擦痕が残る。機能部には敲打によって形成された面があり、その縁辺には細かい打ち欠き痕が巡る。縁辺には敲打調整が巡る。23は安山岩の板状節理を使用していると思われ、所々にメノウ質が貫入する。刃部様の機能部を打ち欠きによって調整し、そこには敲打に形成されたものが、幅の狭い面がある。機能部の一部が欠損し、そこから割れている。24は床面出土の台石片である。表裏面に顕著な擦痕があり、側縁も擦りによって楕円形に成形された痕がある。濁川火砕流起源の角閃石が顕著な安山岩製である。

(大泰司)

NH - 17 (図 - 23~25、図版13・14・16)

位置・立地：G・H - 43・44 標高38.5~39mの平坦面

規模：(4.50) / (4.26) × - / - × 0.12m

確認・調査：G - 43区の風倒木痕の調査中に石組炉が検出されたため、住居跡と判断した。風倒木痕と試掘坑(B調査、平成13年4月)のため、壁は一部が確認されたのみである。炉周辺の土壌をサンプリングしフロ - テ - ション作業を行ったが、炭化種子等は検出されなかった。

覆土：2層に分層した。層を主体とする黒色土が大半で、自然堆積である。

形態：平面形は円形を呈する。床面はおおむね平坦であるが、石組炉の東側の立石付近は、床面からなだらかなくぼみとなっている。掘り込みは浅く層から層上面に掘り込まれている。壁は急に立ち上がるが、斜面下方に当たる東側では明瞭に確認できなかった。

付属遺構：床面に石組炉が1ヶ所確認された(HF - 1)。浅い掘り込みを持ち、炭化物を微量に含む。地山の焼成は弱い。東側に2個対になる立石がある。礫の形に合うように地面を掘り込み、全体の3分の2程度埋め込んでいる。炉から立石の中心の方向はN - 72° - Eである。HPIは2基検出したが、柱穴と判断されるものはない。

遺物出土状況：覆土中に群b類、群a類、群a類の土器とフレイクなどが散見される。石組炉の炉石に礫のほか、偏平打製石器、たたき石、台石が用いられている。

時期：出土遺物と形態から縄文時代後期前葉、群a類土器の時期と考えられる。(村田)

掲載遺物：土器 1・3~5はベルト内、2は覆土1の出土である。1~3は群a類。1は貼付帯を施したのち、RLの斜行縄文を施したもの。2は斜位の縄線を施文したもの。3は底部片。膨らみを呈しながら立ち上がる器形で、LR斜行縄文を地文とする。胎土に砂礫を多く含む。4は群a類のサイベ沢式。横走気味の縄文に綾絡文を施したもの。山形の小突起は内傾している。焼成は良好。5は群b類。円筒土器下層d式である。口頸部文様帯に2本一組の縄線が施される。口唇断面は肥厚してやや丸みを帯びた角形。口唇上にも縄線文が加えられている。円筒下層d₂式の可能性がある。(影浦)

石器 覆土別の出土状況は、覆土中から石鏃1点、スクレイパー2点、フレイク3点、偏平打製石器1点、たたき石3点、被熱礫1点が出土し、床面からはフレイク1点、石斧1点、偏平打製石器1点、たたき石2点、台石7点、礫2点、被熱礫3点、使用痕の有る礫2点が出土した。

6は頁岩製の石鏃である。いびつな凸基有茎鏃で土層観察用ベルトの下位、覆土中からの出土である。茎部と基部の境界は不明瞭である。7・8はスクレイパーで覆土からの出土である。7は頁岩製、

8は泥岩製である。7は縦長剥片の両縁に極浅い調整が施され、背面右側縁については両面調整である。折損している。8は泥岩の横長剥片の直線的な一縁に極浅い調整が巡る。9は床面出土の片岩製石斧であり、G-32区の 層から出土した端部側の基部と接合している。全面に研磨が巡り、刃部は折損する。

11・12・14・15は炉石であった。10・11は安山岩製の偏平打製石器である。10は覆土中、11は床面出土である。10は機能部に敲打痕があり、幅の狭い面を形成する。機能部に対して両側縁は石錘状に打ち欠かれる。11は被熱する。平坦な楕円礫の長軸部分が帯状にススや赤色化を免れている。楕円礫の片縁に機能部があり、刃部様の機能部である。縁辺にも打ち欠きによる調整が巡る。12・13はたたき石である。12は床面出土で、被熱した安山岩製のたたき石である。偏平な礫の側縁に敲打痕跡がある。平らな部分についても数か所の敲打痕が認められる。13は安山岩製で、不整な楕円礫の端部に敲打痕を持ち、敲打痕の縁辺は大きく打ち欠きを伴う。14・15・16は床面出土の台石である。いずれも安山岩製であるが、14については濁川火砕流起源のもので、やや発泡しているため軽石の可能性もある。14は炉石だったものである。表裏に調整のために敲打を施したのか、敲打痕の後に、擦痕がつく。15は楕円礫を側縁に沿って縦割りしたものであり、周囲に敲打、割面にかすかな擦痕がある。16は大型の楕円礫が長軸方向に対して縦に割れたもので、全面に敲打痕があり、機能面には擦痕を持つ。

(大泰司)

NH-19 (図 -26~28、図版14~16)

位置・立地：H-1-44・45 標高38.5~39mの平坦面。

規模：4.78 / 4.52 × 4.08 / 3.80 × 0.23m

確認・調査：試掘坑(B調査、平成13年4月)の断面で、黒色土の落ち込みが確認されたため、この断面を延長する形で土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行った。石組炉が検出されたため住居跡と判断した。炉周辺の土壌をサンプリングしフロ-テ-ション作業を行っている。

覆土： 層が主体である。壁付近では崩落した 層が多く混じる。

形態：平面形はほぼ円形を呈する。床はおおむね平坦であるが、石組炉の東側の立石付近は、床面からなだらかなくぼみとなっている。掘り込みは浅く、 層中に掘り込まれているが、一部 層の上面が露出している。壁は急に立ち上がる。

付属遺構：床面に石組炉が検出された。浅い掘り込みをもち、炭化物を微量に含む。地山の焼成は弱い。付替えを行っており、土層断面の観察からHF-2、HF-1、HF-3の順で使われたと考えられる。石組炉の東側に2個対になる立石がある。礫の形に合うように地面を掘り込み、全体の3分の2程度埋め込んでいる。炉から立石の中心の方向はN-82°-Eである。柱穴と判断されるものはなく、住居の東側に、浅い皿状のピットが2基検出された。

遺物出土状況：東側のくぼみから 群a類の土器がまとまって出土している。

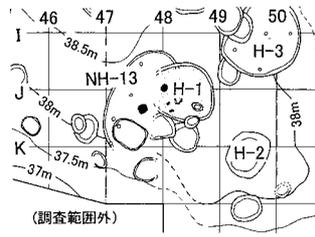
時期：出土遺物から縄文時代後期前葉、 群a類土器の時期と考えられる。(村田)

掲載遺物：土器 1はベルト内の出土。2は床面出土の土器片に、覆土1と2で出土した土器片が接合したもの。いずれも 群a類で、羽状縄文を体部地文とする。指頭圧による凹凸が顕著。1は折り返し口縁。口唇は丁寧な調整が加えられ、断面は角形である。2は貼付帯をもつもの。3は網目状の撚糸文を重ねて施文したもの。4は表裏面に太い沈線の連弧文が描かれており、胎土に砂礫を多く含んでいる。5は棒状工具の押圧による2個一組の山形突起を持つもの。突起の1つを欠損する。無文の口縁部に太い縄線が2条巡っている。(影浦)

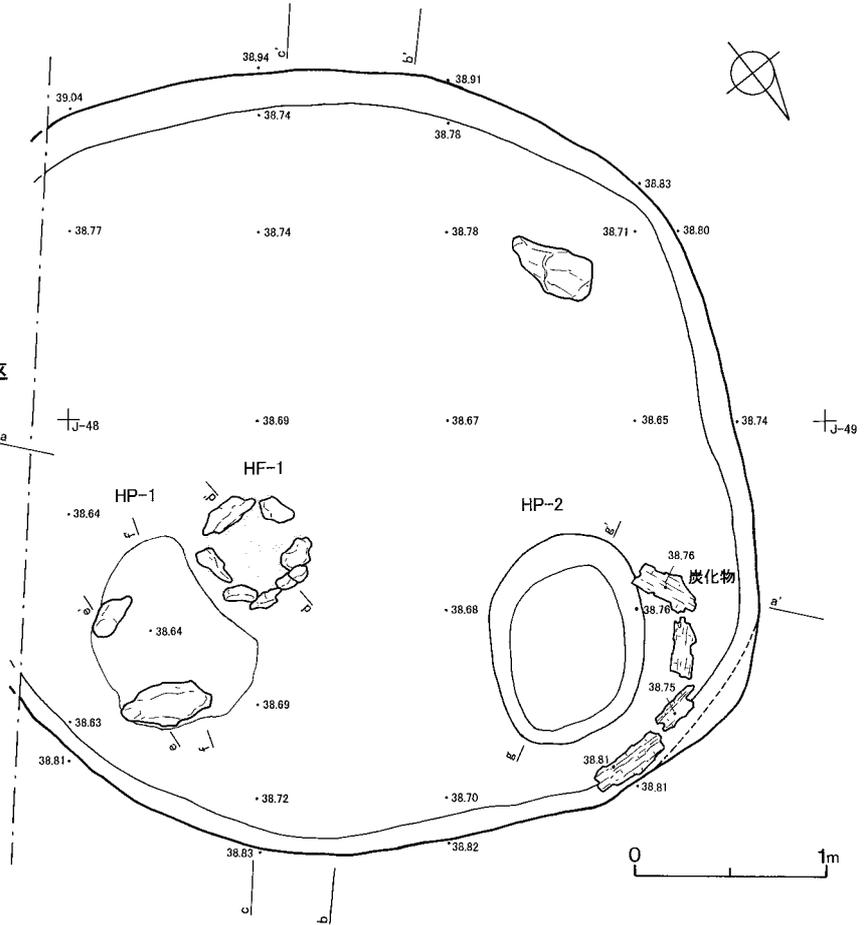
石器 覆土別、付属遺構別の出土状況は、覆土中から石鏃が1点、スクレイパーが1点、Uフレイクが3点、Rフレイクが1点、フレイクが26点、たたき石1点、石製品1点、礫・礫片4点が出土しており、床面からは石鏃1点、スクレイパー1点、フレイク3点、たたき石2点、台石4点、礫・礫片7点、被熱礫2点、使用痕のある礫1点が出土している。

6・7は石鏃である。6は黒曜石製で覆土中、7はメノウ製で床面からの出土である。いずれも凸基有茎鏃だが、6は両面全面調整で、舌状で小型の茎を持つ。7は両面とも縁辺のみの調整で五角形に近い。8は風化した頁岩製の石槍又はナイフである。覆土からの出土である。両面縁辺に調整が巡り、茎部の抉り部分が明瞭である。現存する先端部および側縁は鋭利ではない。9・10は珪質頁岩製である。9は床面出土のスクレイパーで、剥離の両側縁に極浅い調整が巡る。10は覆土出土のUフレイクで、剥片の一縁辺が潰れる。11は覆土から出土した軽石製石製品で全面に研磨が施され、楕円の一縁を直線的に加工した形状である。貫通孔を持つ。12～15は床面出土の安山岩製の礫石器である。12・14・15は被熱している。12・13はたたき石である。12は割礫の一縁に敲打を加えたものである。敲打の度合いは、平らな機能面を有するには至らない。13は棒状礫の側縁と片方の端部に敲打痕を持つものである。断面三角形で、頻度の差こそあるが、三角形の角にあたる3縁辺に敲打痕を持つ。14・15は台石である。14は割礫で、割面に顕著な敲打痕を持つ。それに対応して裏面にあたる端部にも敲打痕を持つ。15は楕円礫の表面に擦痕を持つものである。 (大泰司)

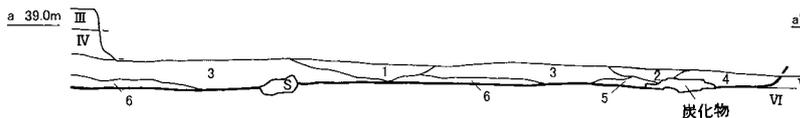
H-1



2002年調査区



焼土

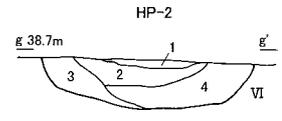


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒褐色	10YR2/3	砂壤土	弱	粘り	IV, IV	班状
2	暗褐色	10YR2/4	砂壤土	弱	軟	風化層15%	炭化物を含む
3	黄褐色	10YR3/1	砂壤土	弱	軟	風化層15%	炭化物を含む
4	暗褐色	10YR3/4	砂壤土	弱	軟	炭化物を含む	
5	褐色	10YR1.7/1	砂壤土	弱	軟		
6	褐+極赤褐色	10YR2/4	砂壤土	弱	軟	磁器破片が結合した濁川火砕流	班状 酸化鉄による赤化?

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒色	10YR1.7/1	壤土	弱	軟		IV主体 炭化物微量含む

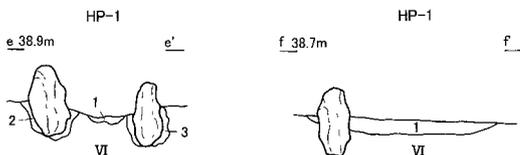


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
3	黒褐色	10YR2/1	砂壤土	弱	軟	IV	
4	暗褐色	10YR2/4	砂壤土	弱	軟	風化層15%	炭化物を含む
6	褐+極赤褐色	10YR2/4	砂壤土	弱	軟		釜倉礫と酸化鉄
7	褐色+暗褐色	10YR4/4+10YR3/4	壤土	弱	軟	IV+V破片	濁川火山灰(によるもの)
8	褐色+暗褐色	10YR4/4+10YR3/3	壤土	弱	軟	IV+V破片	



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒褐色+暗褐色	10YR2/1+10YR2/6	壤土	弱	堅		班状
2	黒褐色+暗褐色	10YR2/1+10YR2/6	壤土	弱	堅		班状
3	黒褐色+暗褐色	10YR2/1+10YR2/6	壤土	弱	堅		班状

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒色	10YR1.7/1	壤土	弱	軟		IV主体 炭化物微量含む



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
7	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	暗褐色+明黄褐色	10YR3/4+10YR8/6	壤土	弱	軟		IV+V 班状
2	黄褐色	10YR5/1	壤土	弱	軟	風化破砕層10%	IV>VI
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	軟	風化破砕層10%	IV>VI
4	暗褐色	10YR3/4	壤土	弱	軟	風化破砕層20%	IV>VI

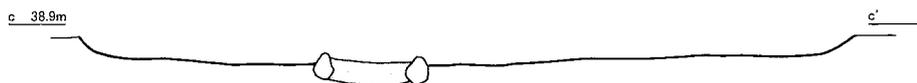


図 - 2 H-1(1)

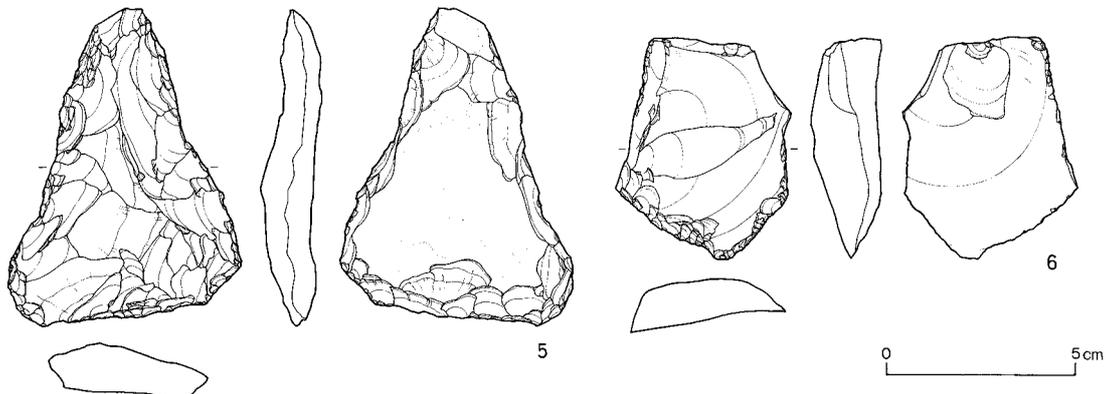
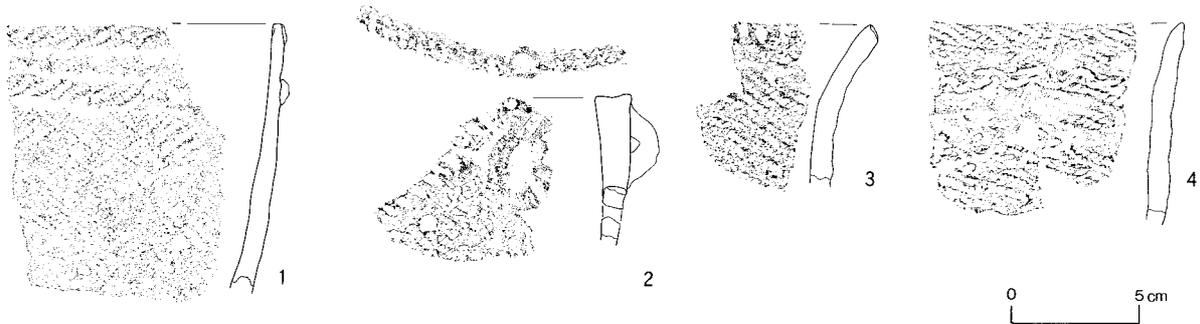
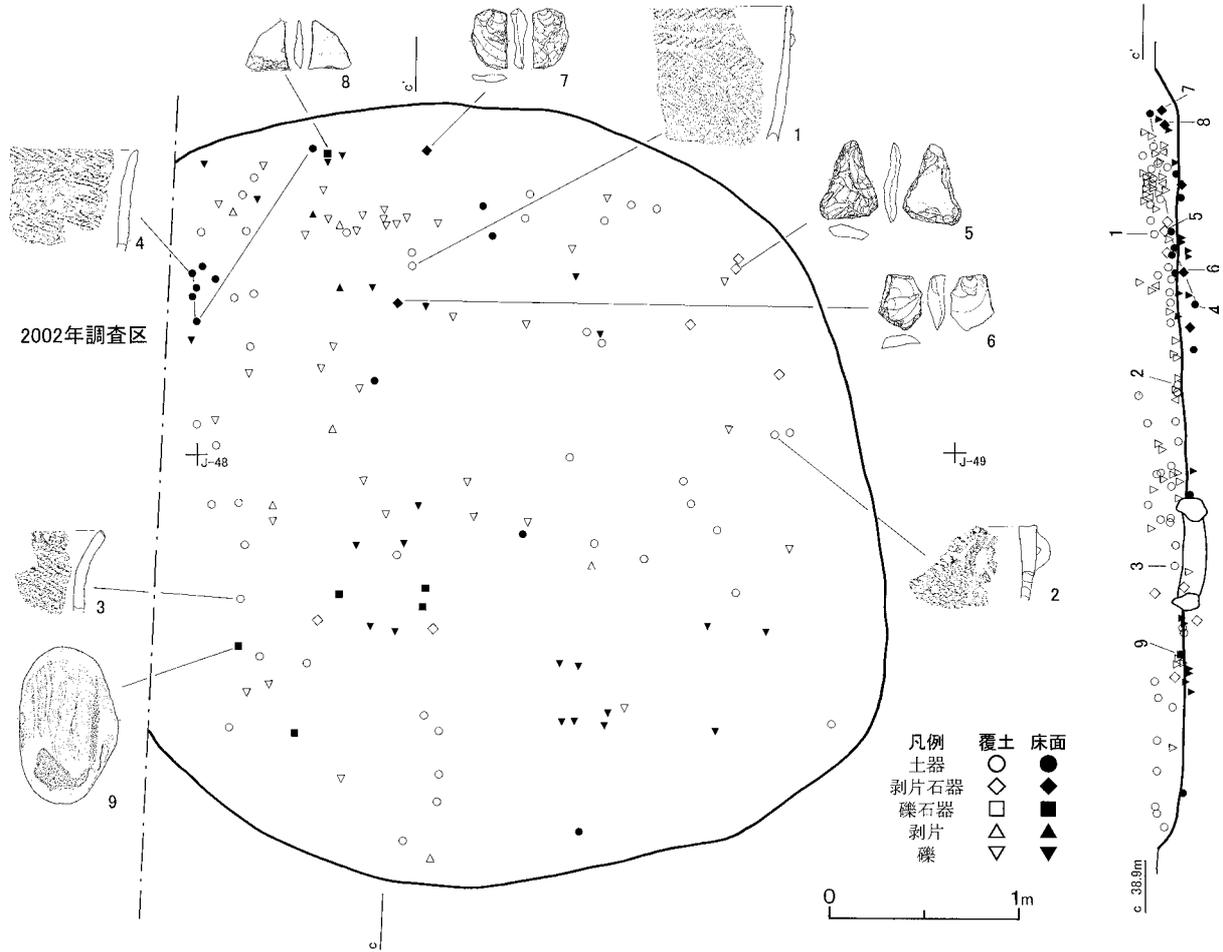


図 - 3 H - 1 (2) と遺物 (1)

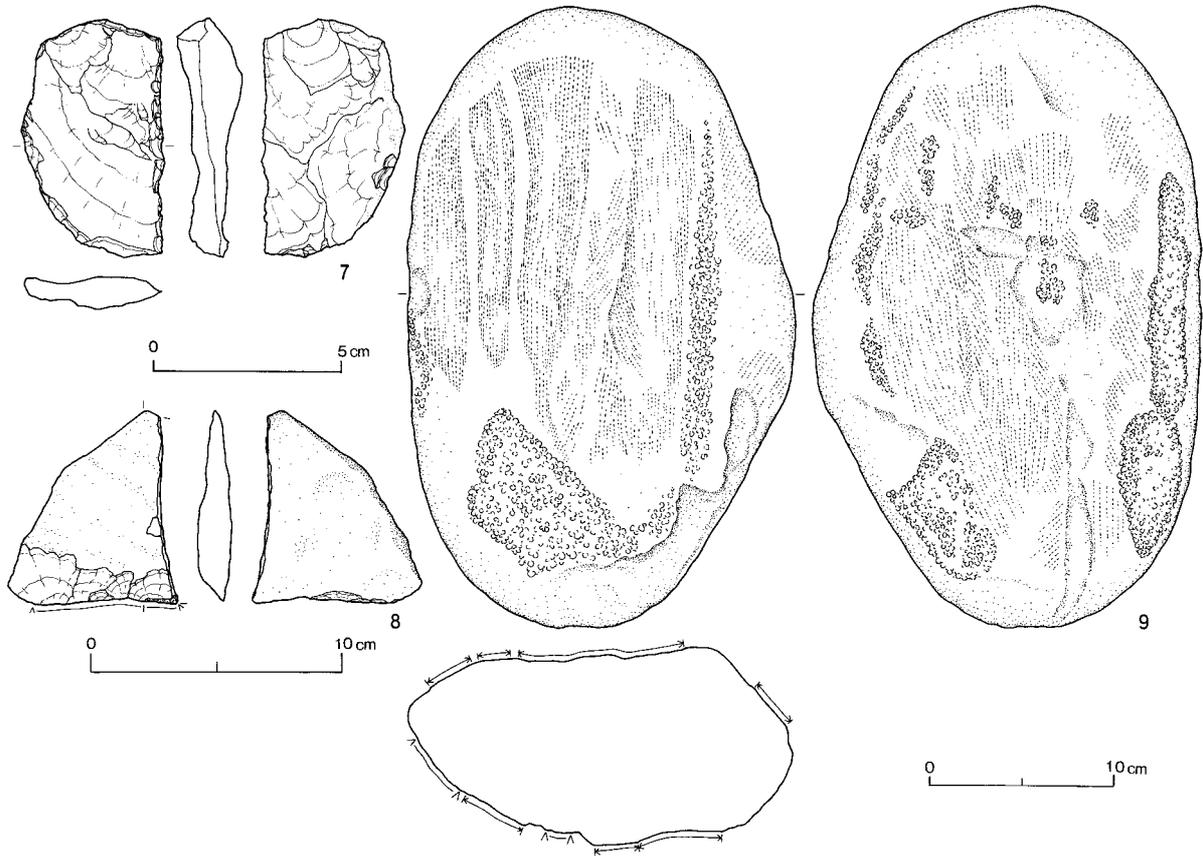
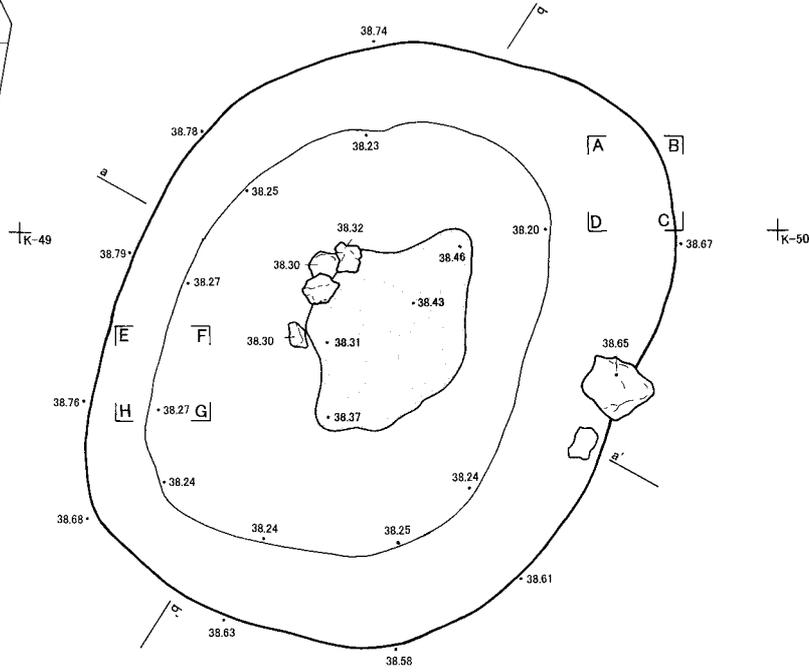
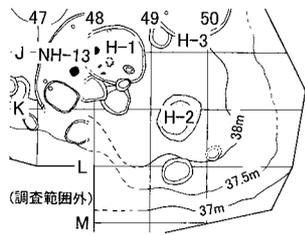


図 - 4 H - 1の遺物(2)

H-2

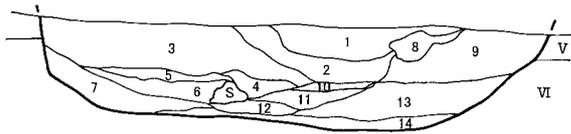


焼土



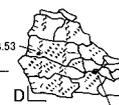
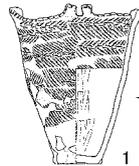
a 39.0m

a'



A B

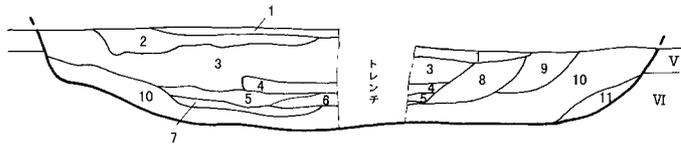
層名	土色1	土色2	土性	粘り	緊密度	埋入	その他
1	黒色	10YR2/1	壤土	弱	堅		IV主体
2	灰黄褐色	10YR4/2	壤土	弱	堅		IV>V
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	堅		IV>VI
4	黄褐色	10YR2/3	壤土	弱	堅		IV>VI
5	黄褐色	10YR3/6	壤土	弱	堅		IV主体
6	黄褐色	10YR3/1	壤土	弱	堅		IV主体
7	胡黄褐色	10YR2/8	壤土	弱	堅		IV>VI
8	橙褐色	10YR3/4	壤土	弱	軟		木炭線
9	灰褐色	10YR3/4	壤土	弱	軟		木炭線
10	緑褐色と黒色	10YR2/3+10YR2/1	壤土	弱	軟		埋入
11	にぶい黄褐色	2.5YR4/4	壤土	弱	堅		横行線
12	緑黄褐色	2.5YR2/2	壤土	弱	軟		焼土と黒色土の混状
13	胡黄褐色	10YR2/6	壤土	弱	堅		IV+V
14	灰泥	10YR4/1	壤土	弱	堅		IV+V



C

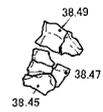
b 39.0m

b'



E F

層名	土色1	土色2	土性	粘り	緊密度	埋入	その他
1	黒色	10YR2/1	壤土	弱	堅		IV主体
2	灰黄褐色	10YR4/2	壤土	弱	堅		IV>VI
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	堅		IV>VI
4	黄褐色	10YR2/3	壤土	弱	堅		IV>VI
5	緑黄褐色	2.5YR2/2	壤土	弱	軟		焼土と黒色土の混状
6	黄褐色	10YR3/6	壤土	弱	軟		IV主体
7	黄褐色	10YR3/1	壤土	弱	堅		IV主体
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	堅		IV>VI
9	褐色	10YR3/6	壤土	弱	堅		IV>VI
10	胡黄褐色	10YR2/6	壤土	弱	堅		VI>IV
11	黄排	10YR7/8	壤土	弱	堅		IV>IV



H



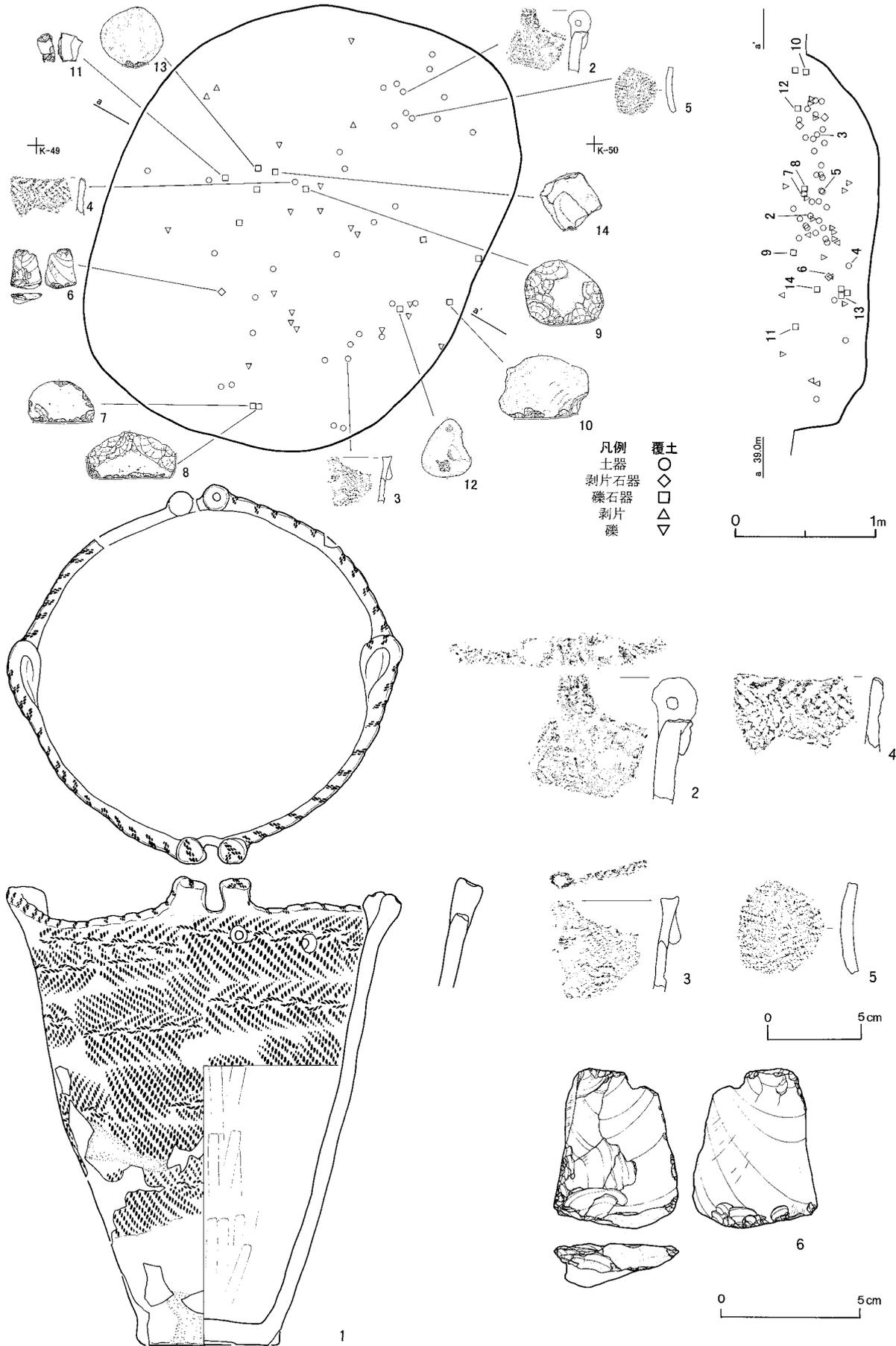


図 - 6 H - 2 (2) と遺物 (1)

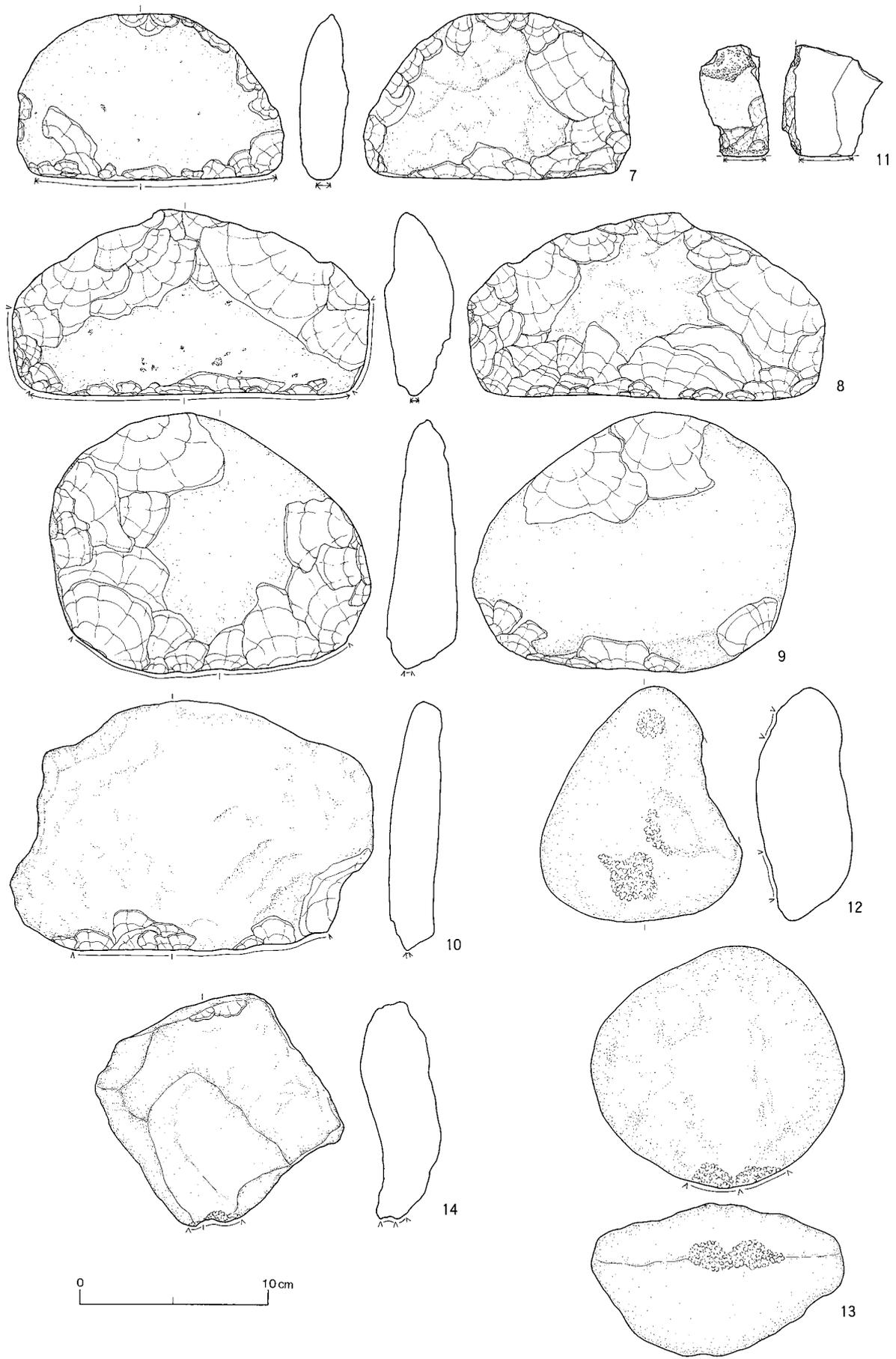
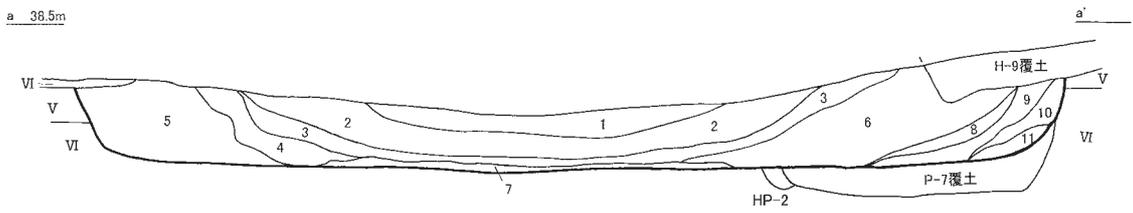
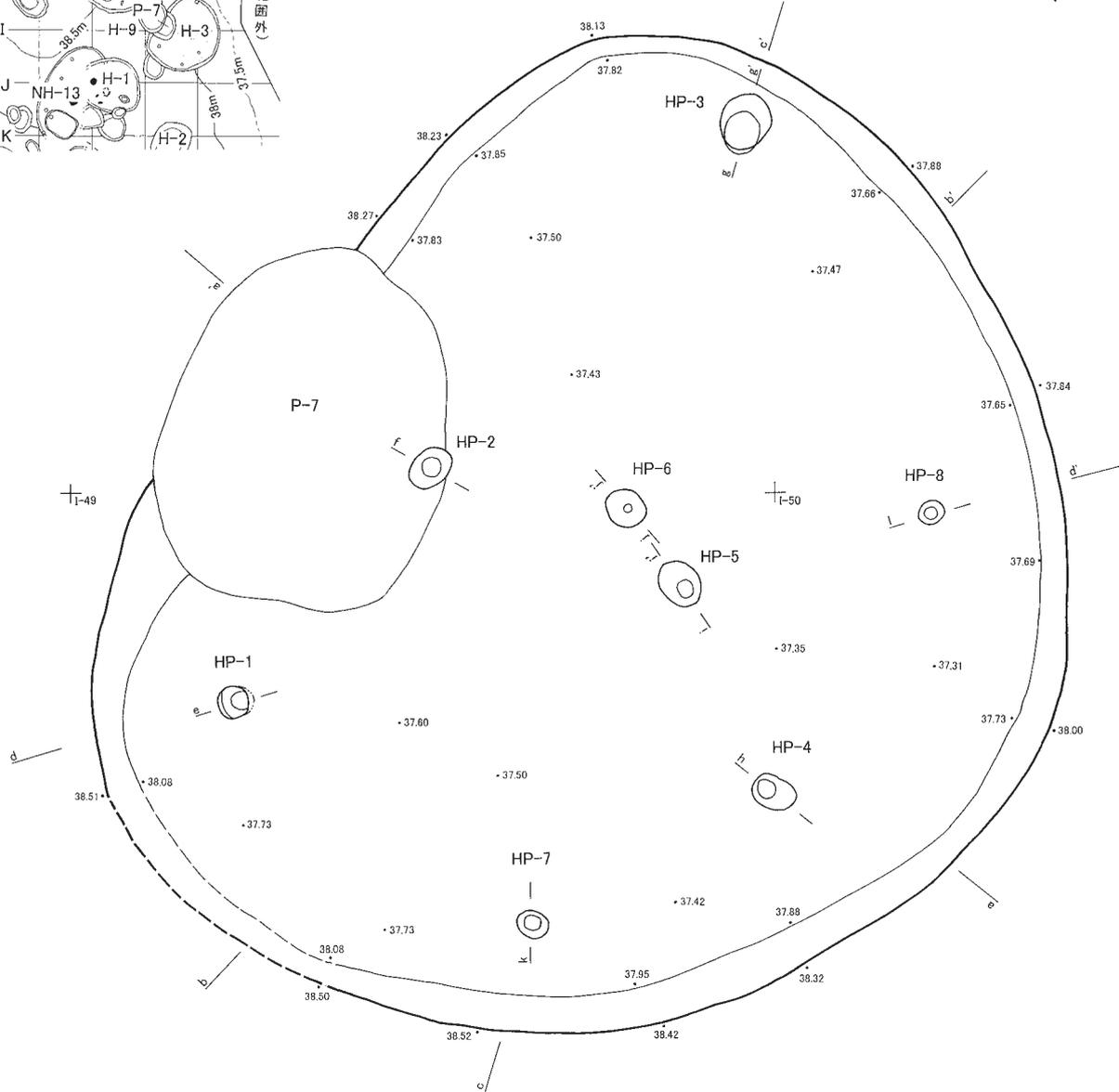
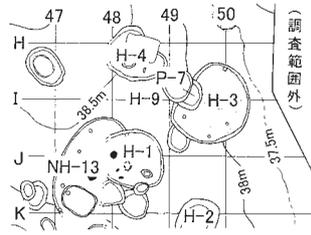


図 - 7 H - 2の遺物(2)

H-3

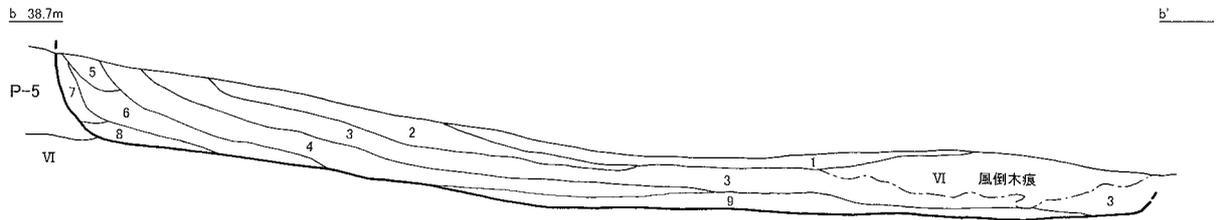


層名	土色1	土色2	主粒	粘り	堅硬度	雑混入	その他
1	黒褐色	10YR5/1	砂壤土	弱	軟		Ⅲ<<Ⅳ B-1m以内
2	黒色	10YR1/1	砂壤土	弱	軟		Ⅳ
3	黒褐色	10YR2/2	砂壤土	弱	軟		Ⅳ
4	灰褐色	10YR4/2	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
5	に少し黄褐色	10YR5/3	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
6	に少し黄褐色	10YR4/3	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
7	赤褐色	2.5YR1/1	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
8	黒褐色	10YR5/2	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
9	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
10	に少し黄褐色	10YR5/4	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ
11	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄屑1%	Ⅳ>Ⅴ

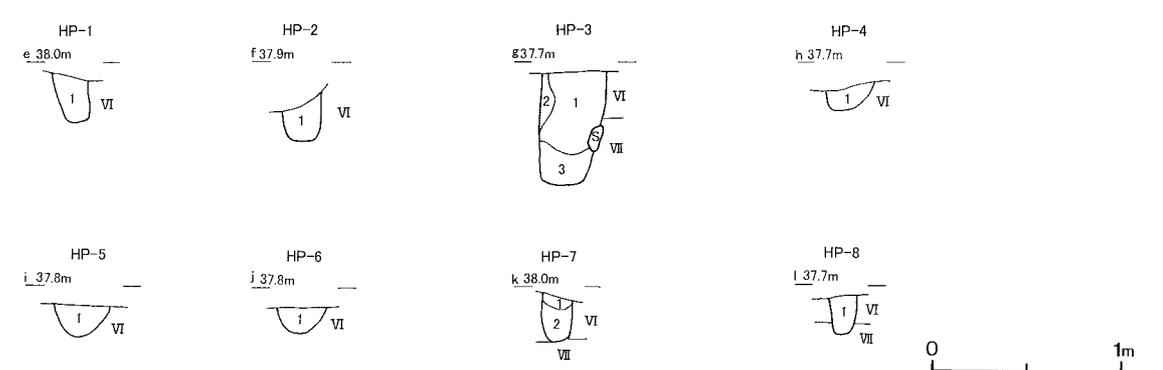
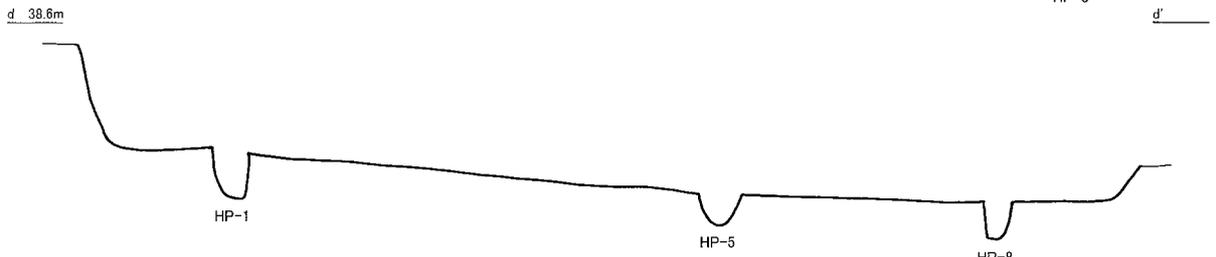
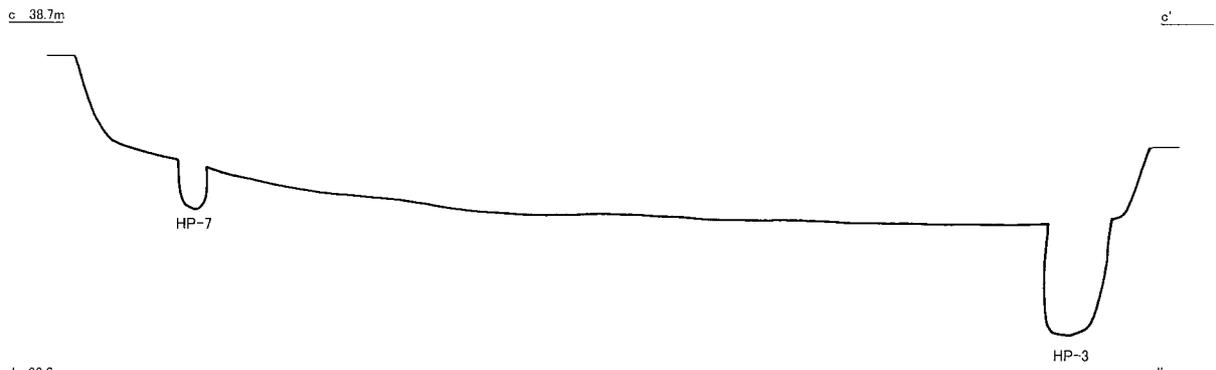


図 - 8 H - 3 (1)

濁川左岸遺跡 B地区

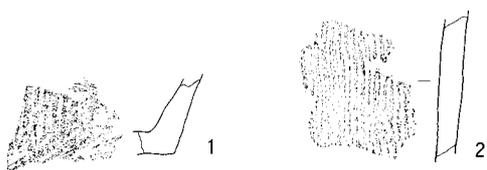
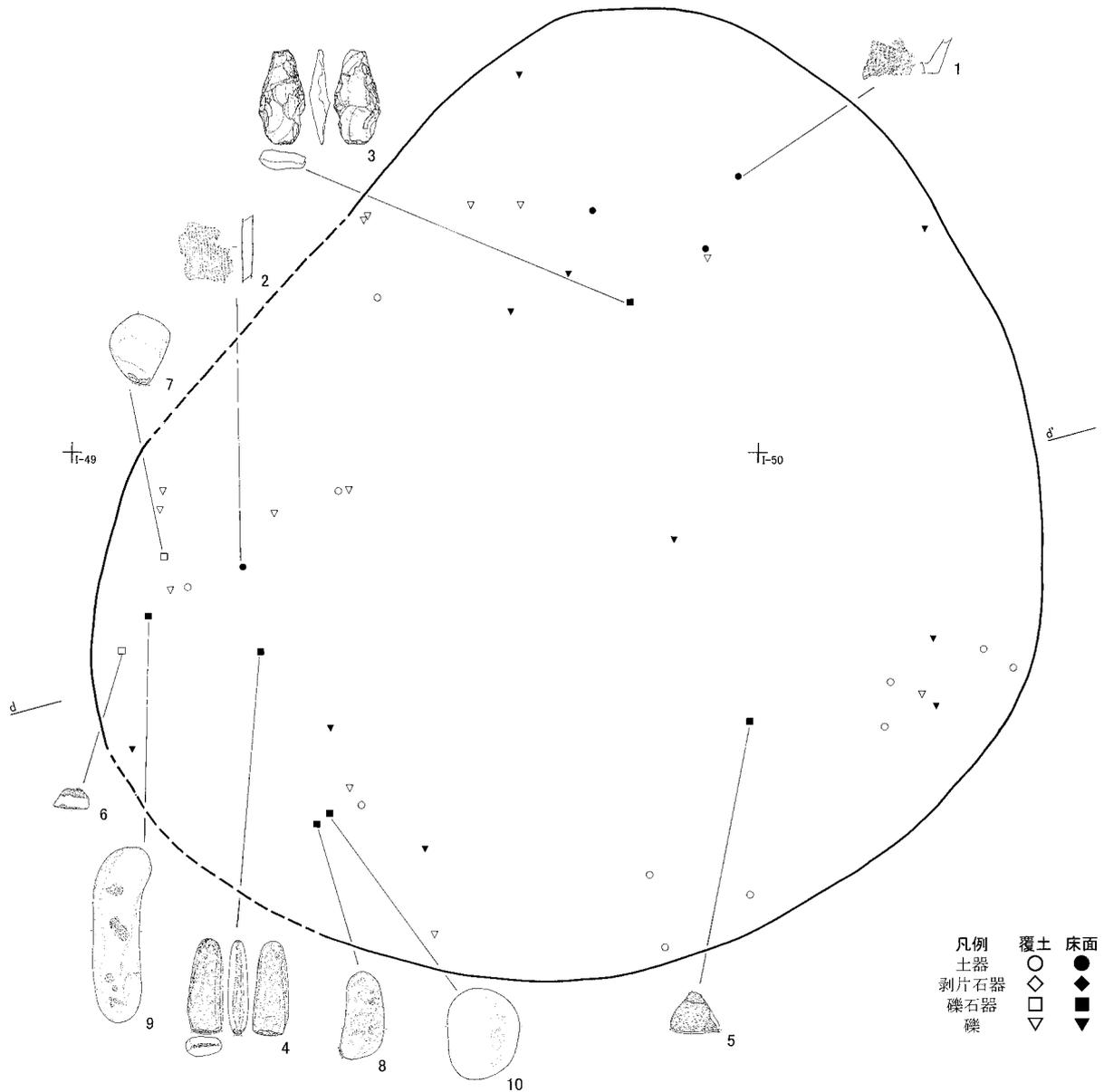


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋入物	その他
1	褐灰	10YR6/1	砂壤土	弱	軟		B-1m多 III IV状
2	黒褐色	10YR3/4	砂壤土	弱	軟		IV>VI
3	褐色	10YR2/1	砂壤土	弱	軟		IV
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄礫1%	IV+VI
5	黒褐色	10YR3/1	砂壤土	弱	軟		IV>>VI
6	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄礫1%	VI
7	黒褐色	10YR3/2	砂壤土	弱	軟		IV>>VI
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂壤土	弱	軟	風化磁鉄礫1%	IV+VI
9	赤褐色	2.5YR7/1	砂壤土	弱	堅		風化によるもの?



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋入物	その他
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	軟	風化磁鉄礫φ0.3~0.5cm少量	
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	軟	風化磁鉄礫φ0.3~0.5cm少量	
1	褐灰	10YR6/1	壤土	弱	軟	風化磁鉄礫φ0.3~0.5cm少量	
2	褐灰	10YR6/1	壤土	弱	軟		
3	褐色	10YR2/1	壤土	弱	軟	IV主体	
1	褐灰	10YR6/1	壤土	弱	軟		

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋入物	その他
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	軟	風化磁鉄礫φ0.3~0.5cm多	
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	軟	風化磁鉄礫φ0.3~0.5cm多	
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	軟	風化磁鉄礫φ0.3~0.5cm多	
1	褐灰	10YR6/1	壤土	弱	軟		
2	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟		
1	褐灰	10YR6/1	壤土	弱	軟		
1	黄褐色	10YR4/1	壤土	弱	軟		褐色土との混状



0 5 cm
 ☒ - 10 H - 3 (3)

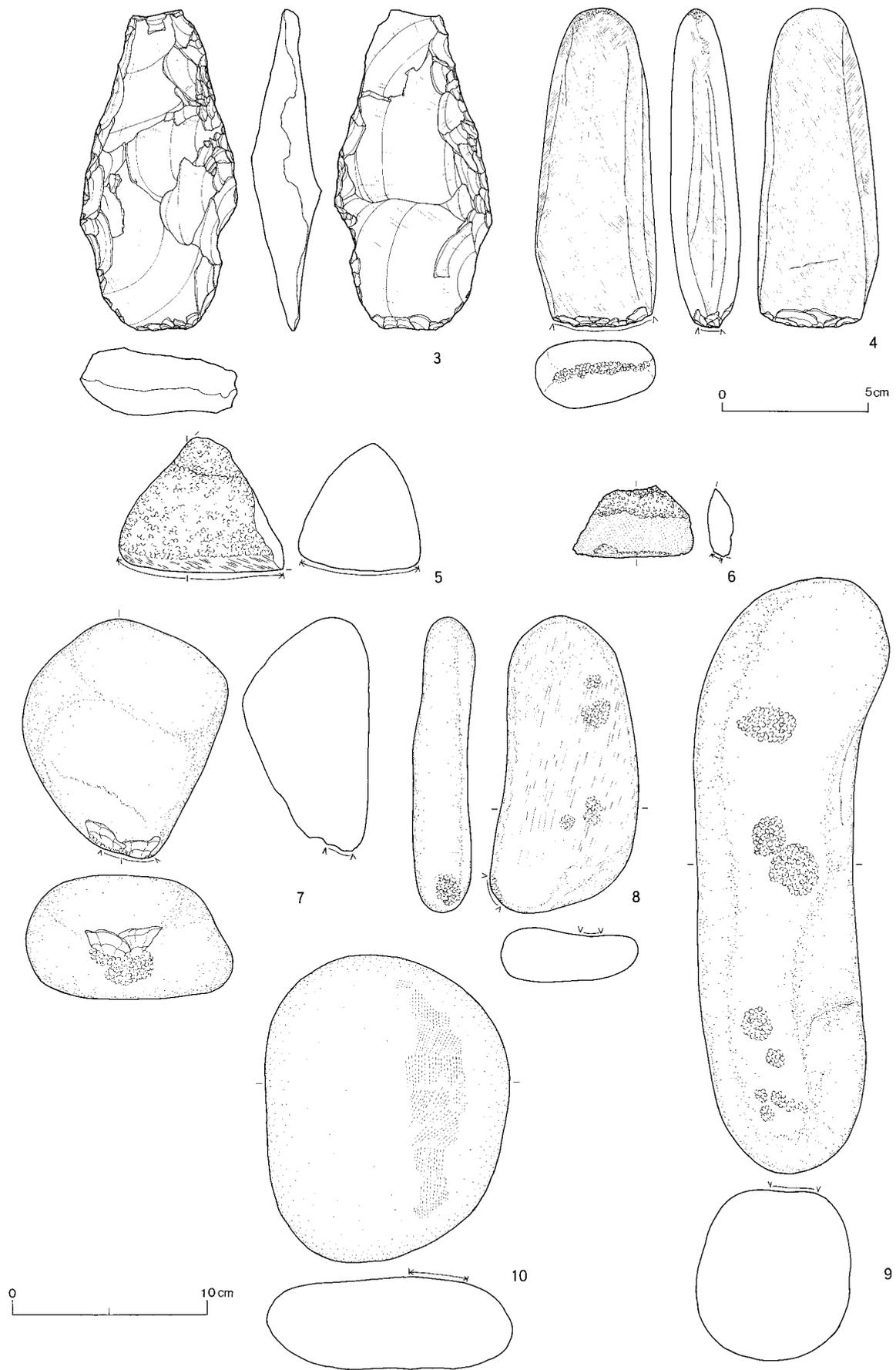
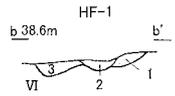
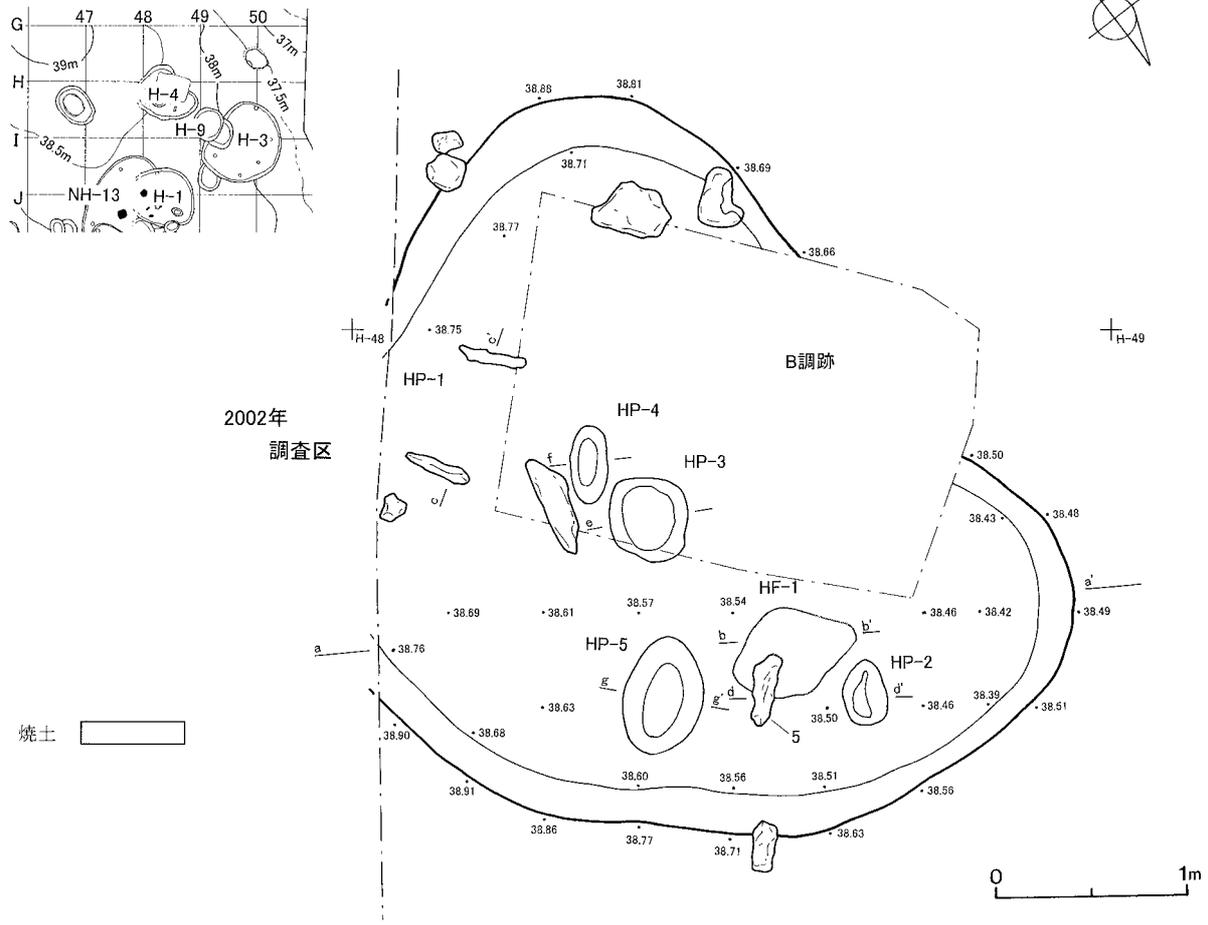


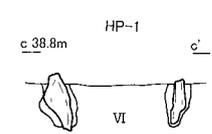
図 - 11 H - 3の遺物

H-4

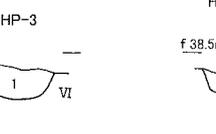
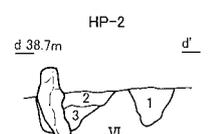


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	堅	破砕粒10%未満	IV>>VI
2	暗褐色	10YR3/4	壤土	弱	堅	破砕粒10%未満	IV>VI
3	褐色+黒褐色	10YR3/4+10YR3/4	壤土	弱	堅	破砕粒10%未満	IV+IV表状

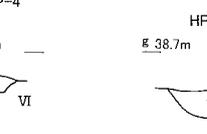
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	明赤褐色	2.5YR5/6	砂壤土	弱	堅		
2	暗赤褐色	2.5YR3/3	砂壤土	弱	堅		
3	暗赤褐色	2.5YR3/6	砂壤土	弱	堅		



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	褐色	10YR4/6	壤土	弱	堅		IV+VI



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	堅	破砕小粒φ0.5cm散	IV游主体



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒色	10YR2/1	壤土	弱	軟		IV立石採取跡
2	黒色	10YR2/1	壤土	弱	軟		
3	黒色	10YR2/1	壤土	弱	軟		IV+IV面状 礎の固定材
4	褐色	10YR3/4	壤土	弱	堅		礎を埋没するためのIV覆投

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋没入	その他
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	堅	破砕小粒φ0.5cm散	IV主体

図 - 12 H - 4 (1)

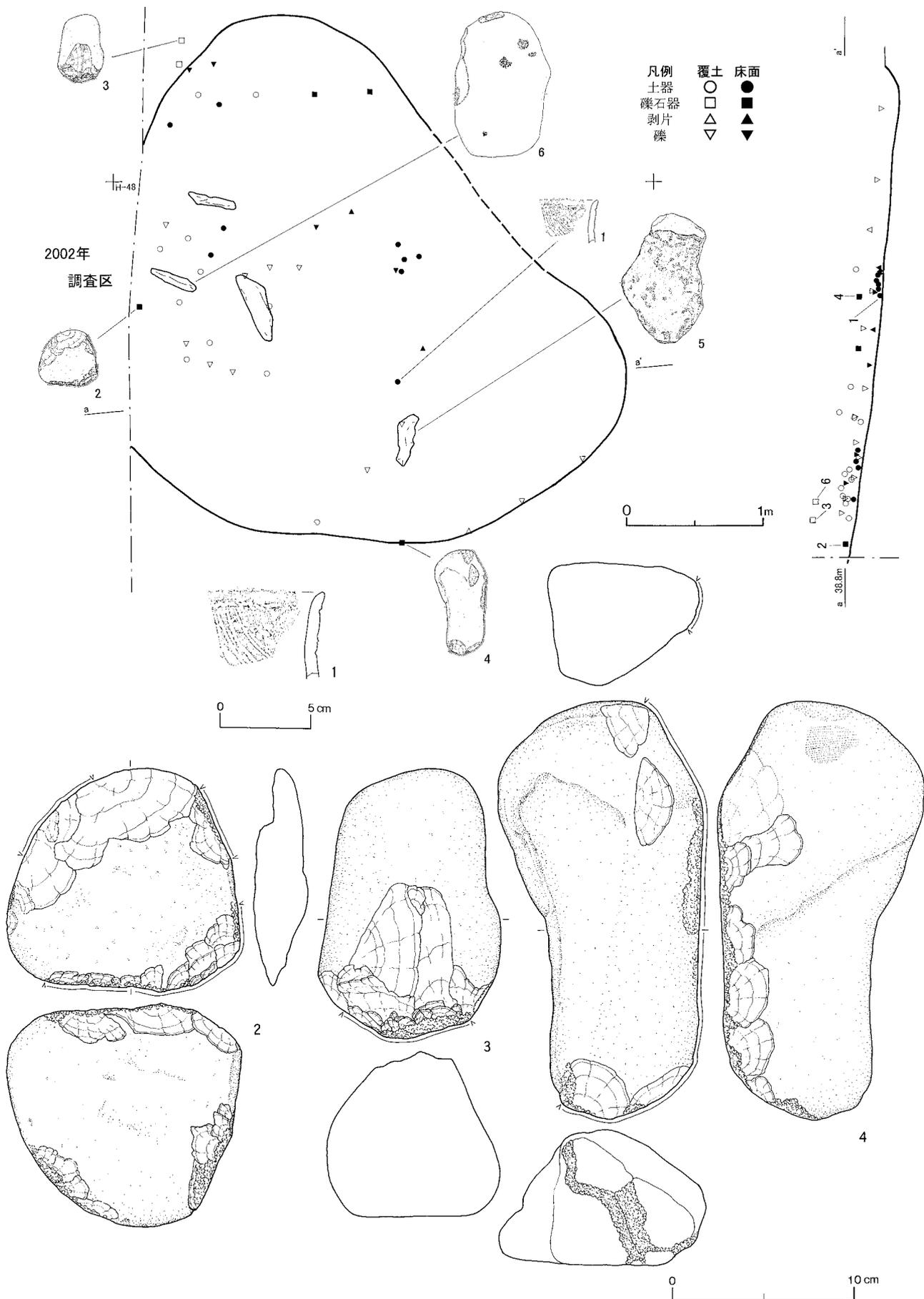


図 - 13 H - 4 (2) と遺物 (1)

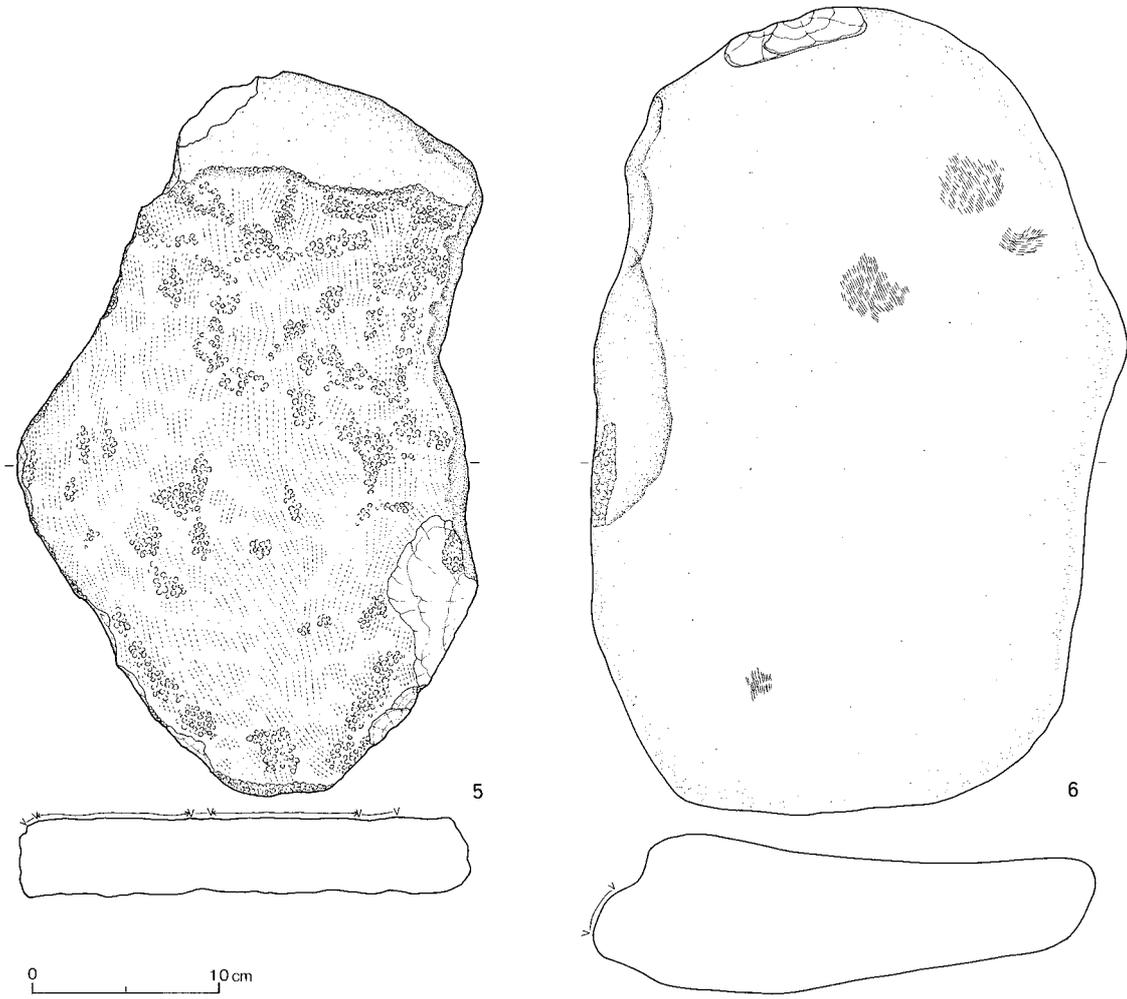
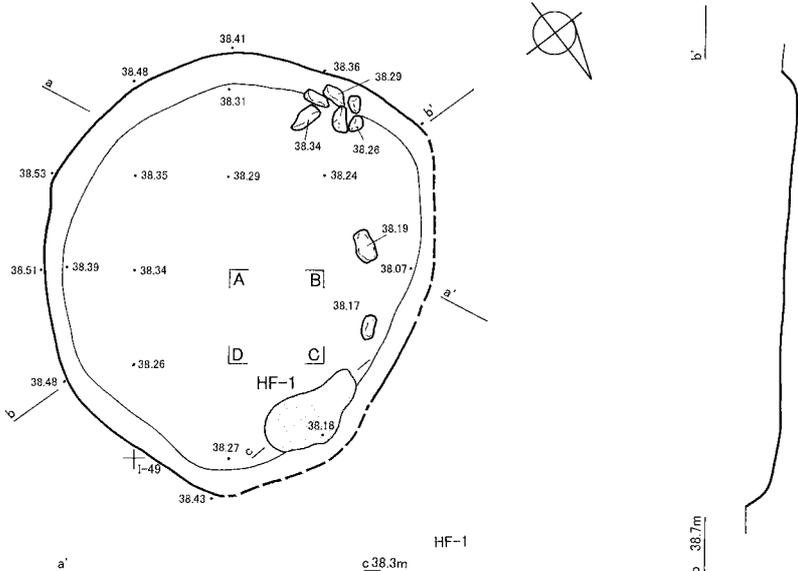
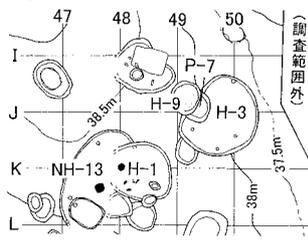
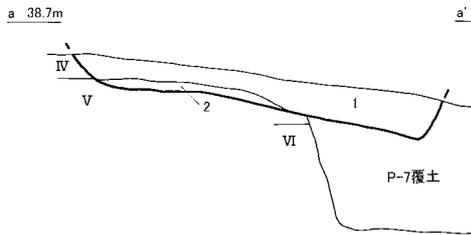


図 - 14 H - 4の遺物(2)

H-9

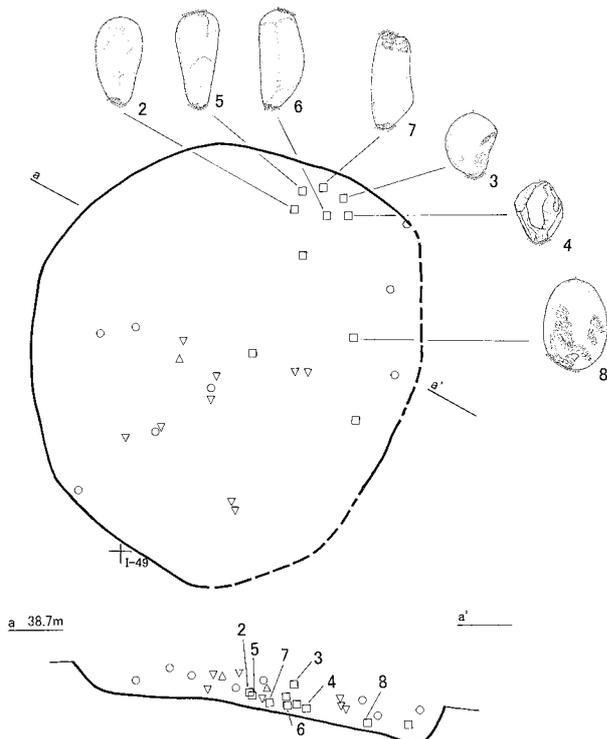
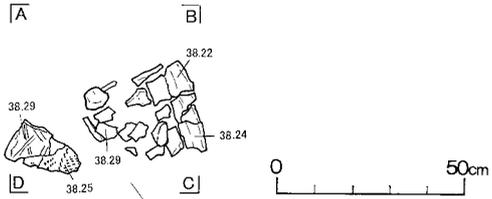


焼土



層名	土色1	土色2	土質	粘り	容積度	埋没人	その他
1	暗赤褐色	2.5YR3/6	砂壤土	弱	軟		炭化物少量含む

層名	土色1	土色2	土質	粘り	容積度	埋没人	その他
1	暗褐色	10YR2/4	壤土	強	軟	風化炭粉約1%	IV+V炭化物少量
2	褐色土黄褐色	10YR4/4+10YR3/4	壤土	強	軟		IV+V炭化物少量



凡例
 陶器 □
 剥片 △
 礫 ▽

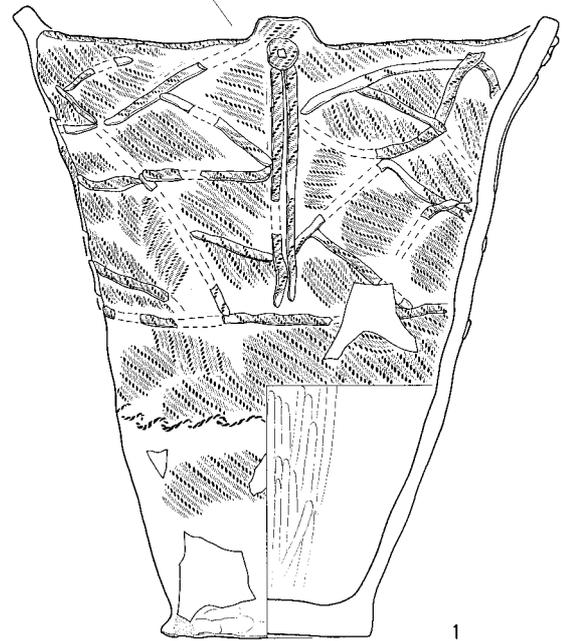


図 - 15 H-9と遺物(1)

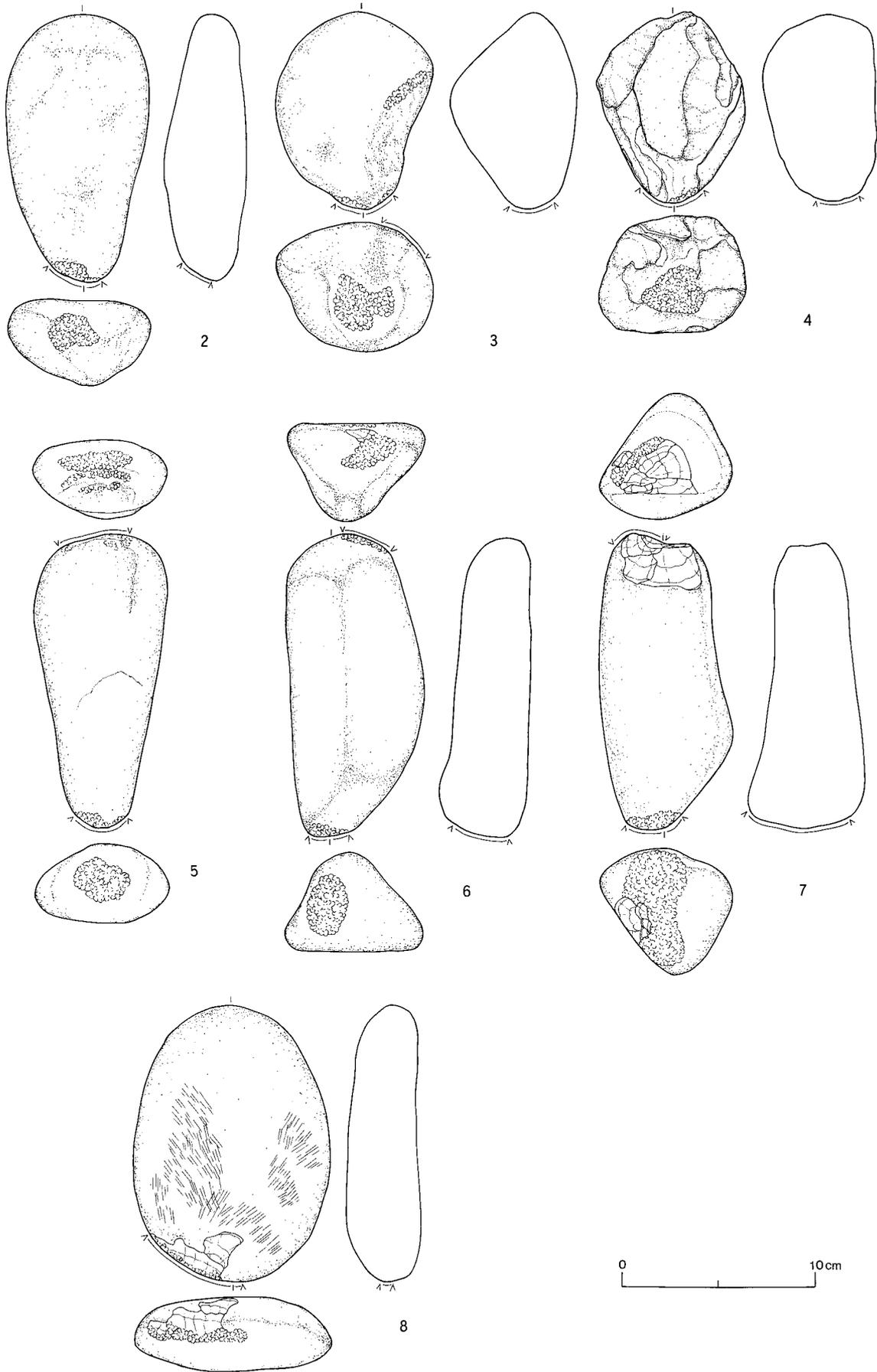
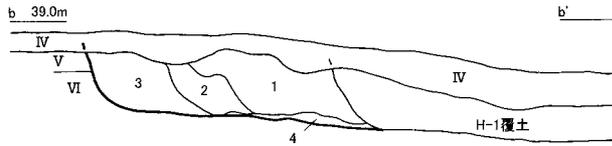
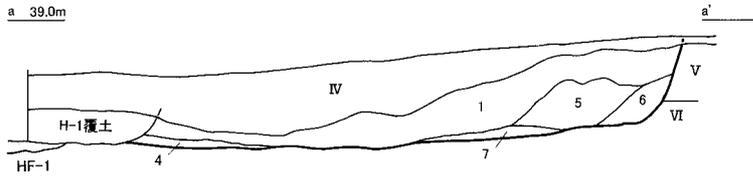
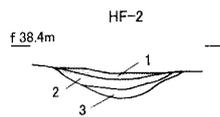
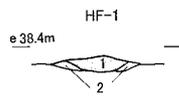
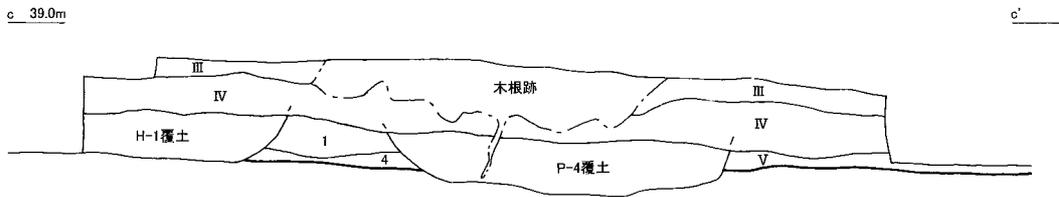


図 - 16 H - 9の遺物(2)

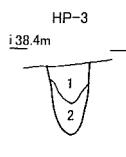
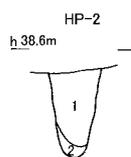
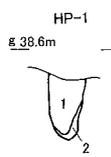


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	7.5YR2/2	壤土	中	軟	
2	黒色	7.5YR1.7/1	壤土	弱	すこぶるしろう	
3	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	壤土	中	堅	
4	褐色	10YR4/4	壤土	中	堅	
5	褐色	10YR4/4	壤土	中	しろう	
6	暗褐色	10YR3/4	壤土	中	軟	
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	中	軟	



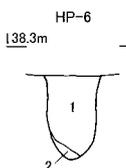
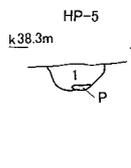
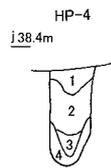
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	明赤褐色	5YR5/6	砂壤土	弱	堅	炭化物少量
2	橙	5YR6/8	砂壤土	弱	堅	被熱したVI

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	軟	V > VI炭化物少量
2	褐色	7.5YR4/4	砂壤土	弱	軟	V + VI
3	橙	7.5YR6/6	砂壤土	弱	堅	被熱したVI



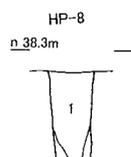
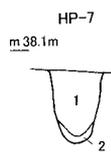
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	堅	IV層極少量混じる
2	黄褐色	10YR5/6	砂壤土	弱	すこぶる堅	IV層少量混じる

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	軟	V層主体
2	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂壤土	弱	堅	IV + V



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	褐色	10YR4/6	砂壤土	弱	軟	V層主体
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂壤土	弱	しろう	V層主体

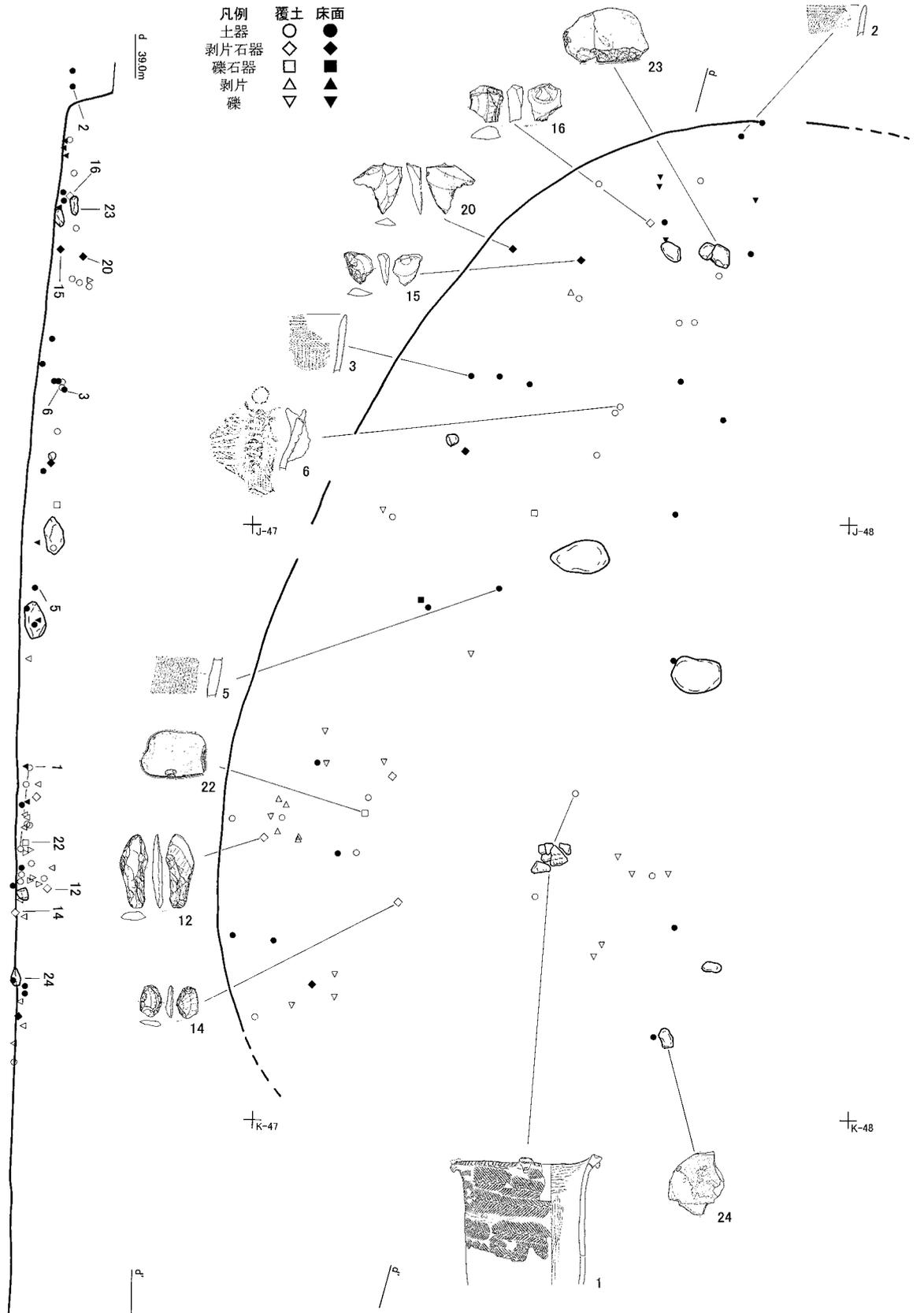
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色	10YR3/4	砂壤土	弱	堅	V > IV
2	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	堅	IV + V IVはブロック状
3	褐色	7.5YR4/4	砂壤土	弱	堅	V > IV
4	にぶい褐色	7.5YR5/4	砂壤土	弱	軟	IV > V



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色	7.5YR3/4	砂壤土	弱	軟	IV + V

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色	10YR3/4	砂壤土	弱	堅	V > IV
2	褐色	10YR4/4	砂壤土	弱	堅	IV + V
3	褐色	7.5YR4/4	砂壤土	弱	堅	V > IV





☒ - 19 NH - 13 (3)

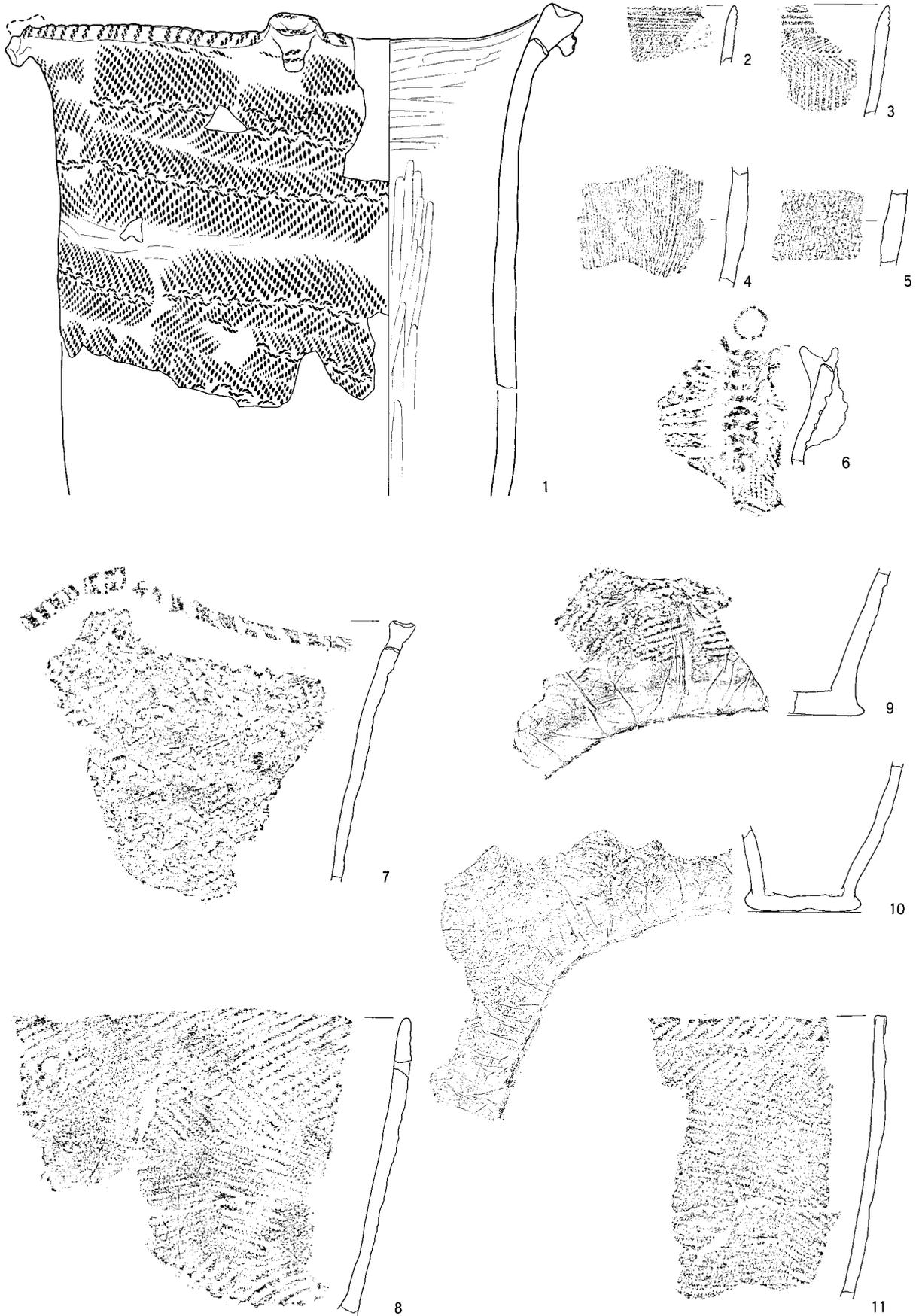


図 - 20 NH - 13の遺物(1)

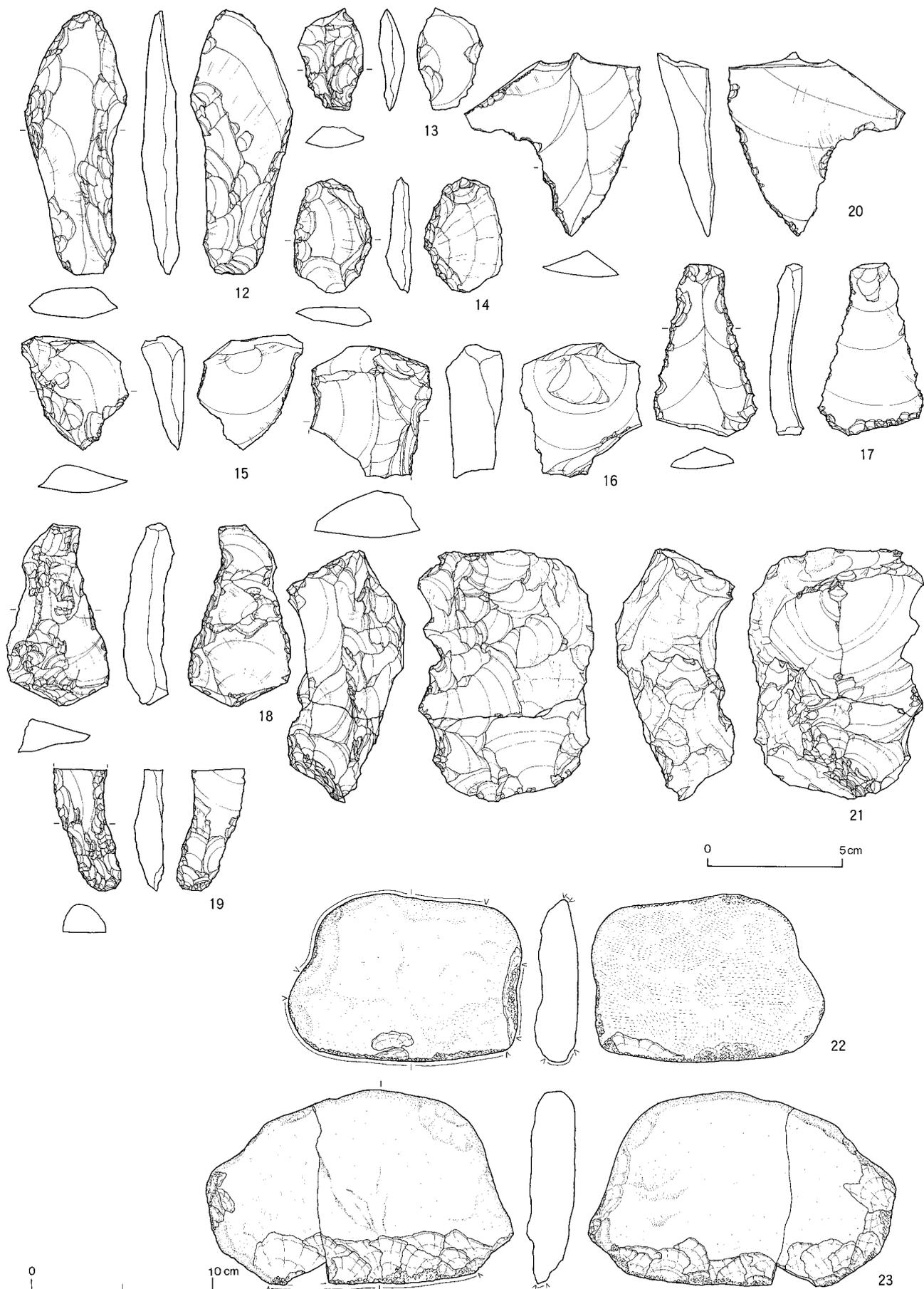


図 - 21 NH - 13の遺物 (2)

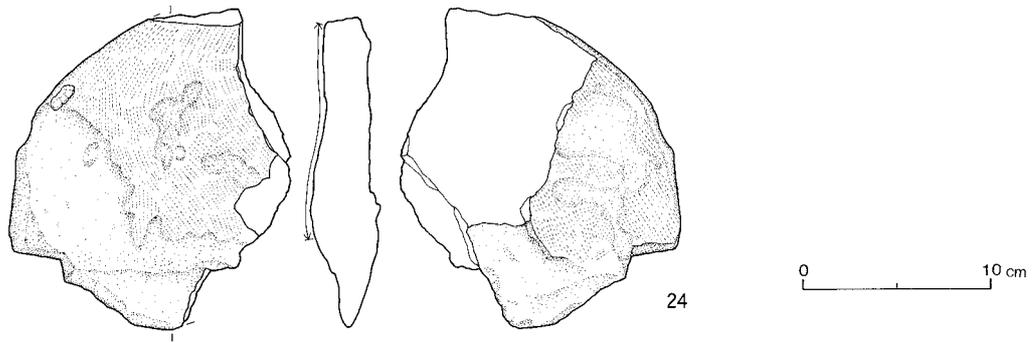
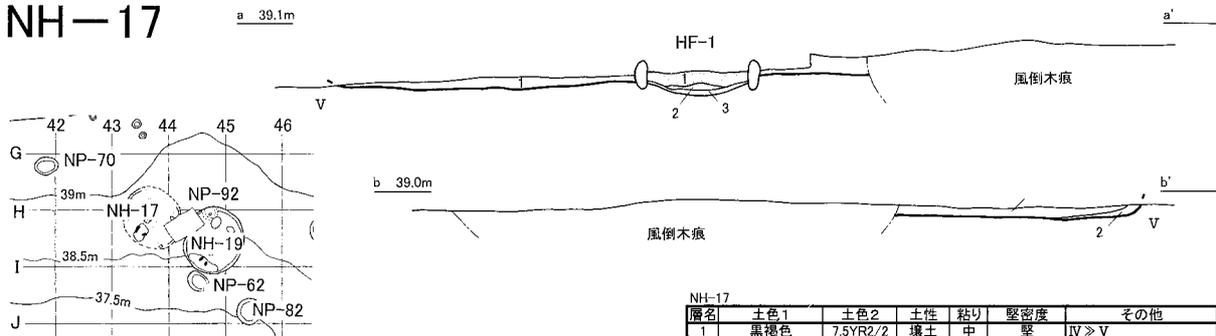
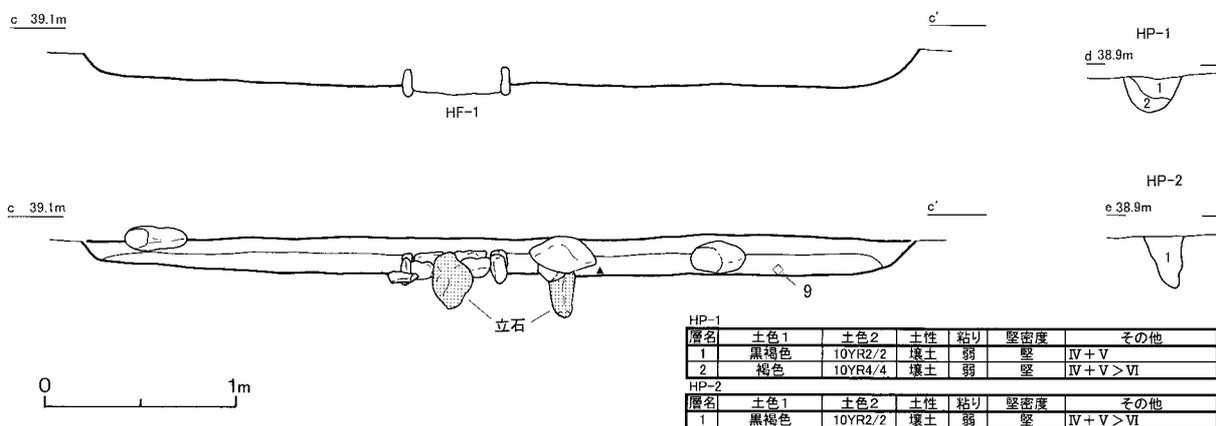
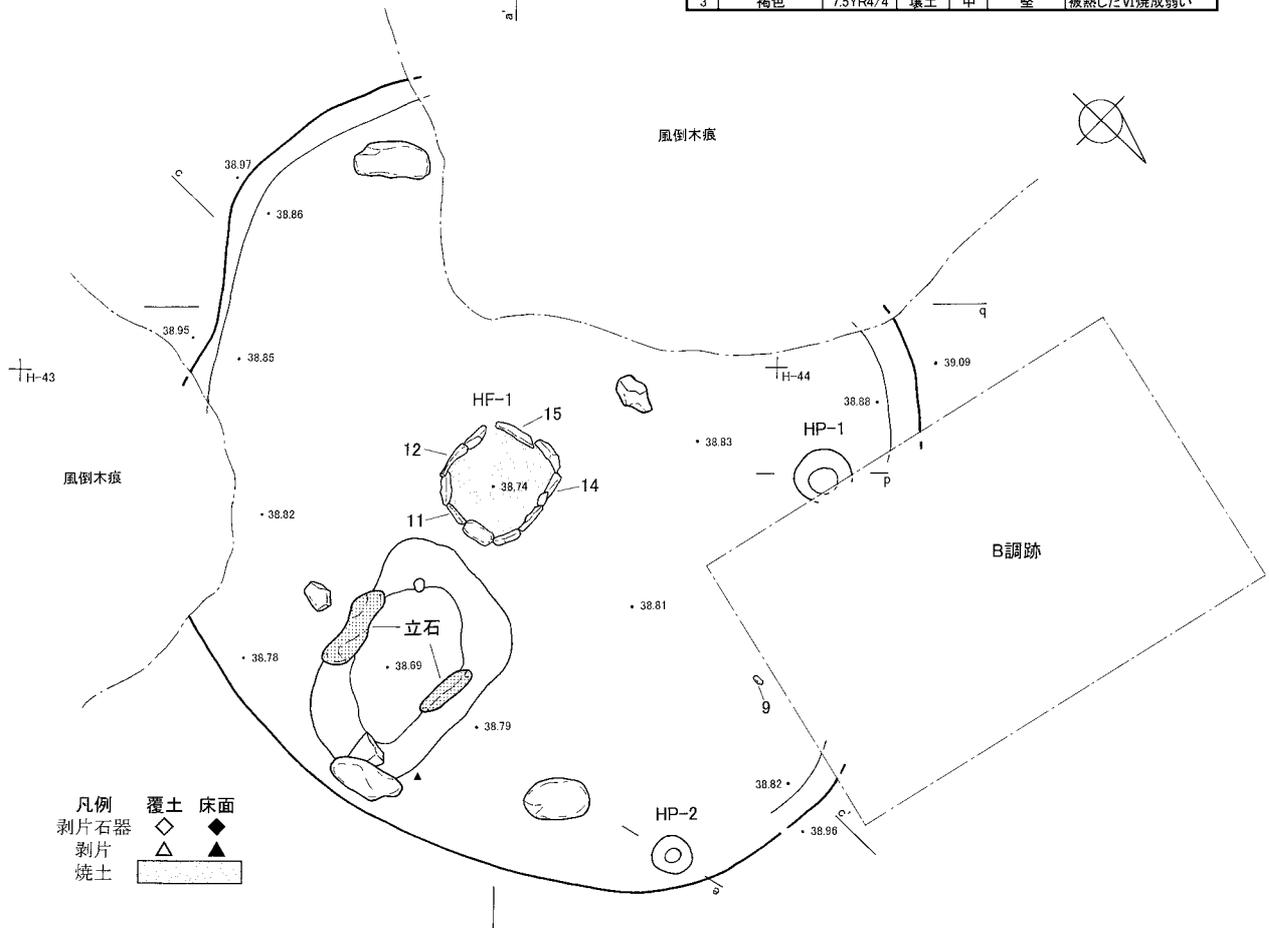


図 - 22 NH - 13の遺物 (3)

NH-17



NH-17						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	7.5YR2/2	壤土	中	堅	IV > V
2	黒色	10YR4/4	壤土	中	堅	IV > V
HF-1						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	7.5YR2/2	壤土	中	堅	
2	暗褐色	10YR3/3	壤土	中	堅	炭化物微量
3	褐色	7.5YR4/4	壤土	中	堅	被熱したVI焼成弱い



HP-1						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	10YR2/2	壤土	弱	堅	IV + V
2	褐色	10YR4/4	壤土	弱	堅	IV + V > VI
HP-2						
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	10YR2/2	壤土	弱	堅	IV + V > VI

図 - 23 NH - 17

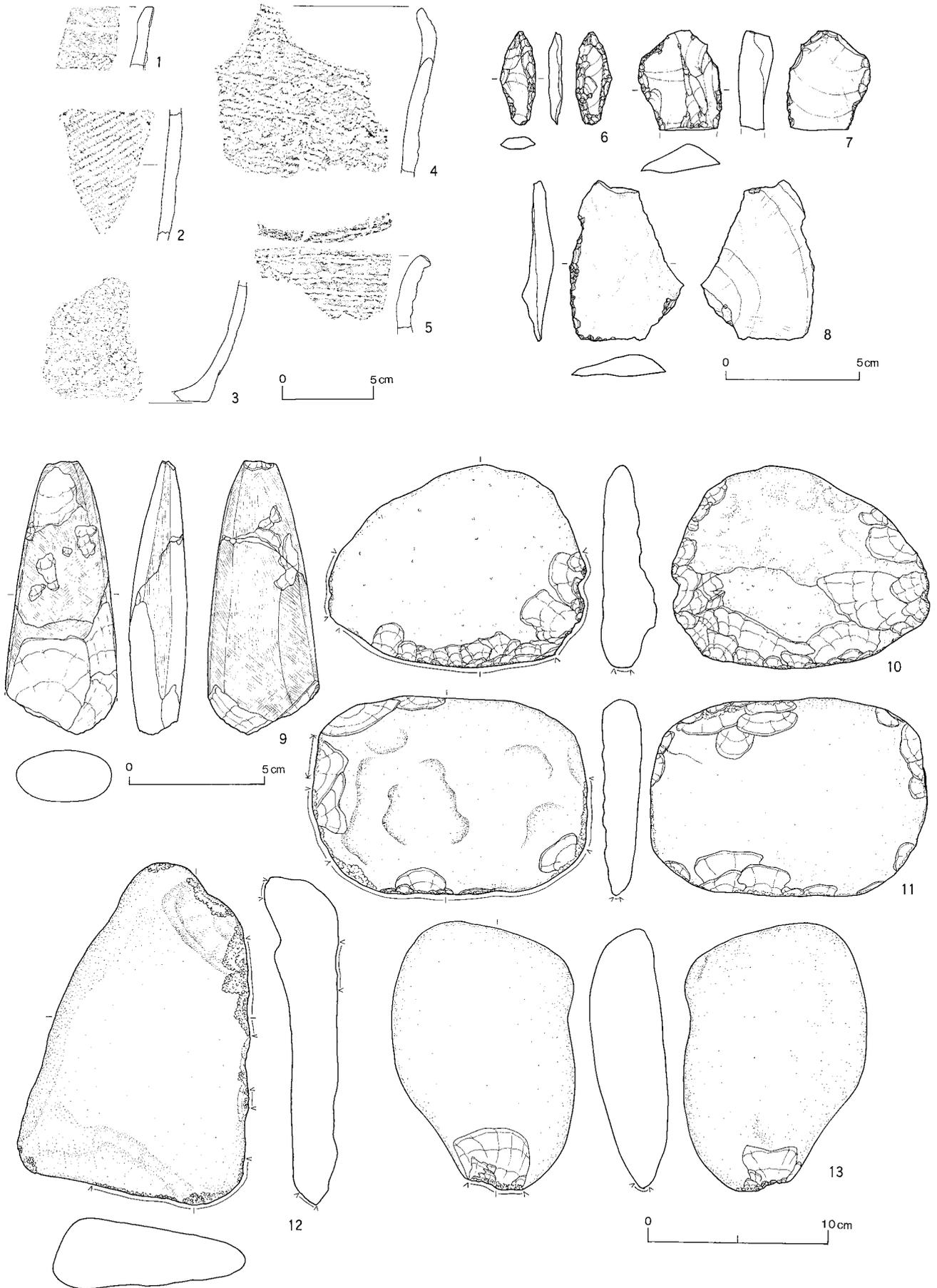


図 - 24 NH - 17の遺物 (1)

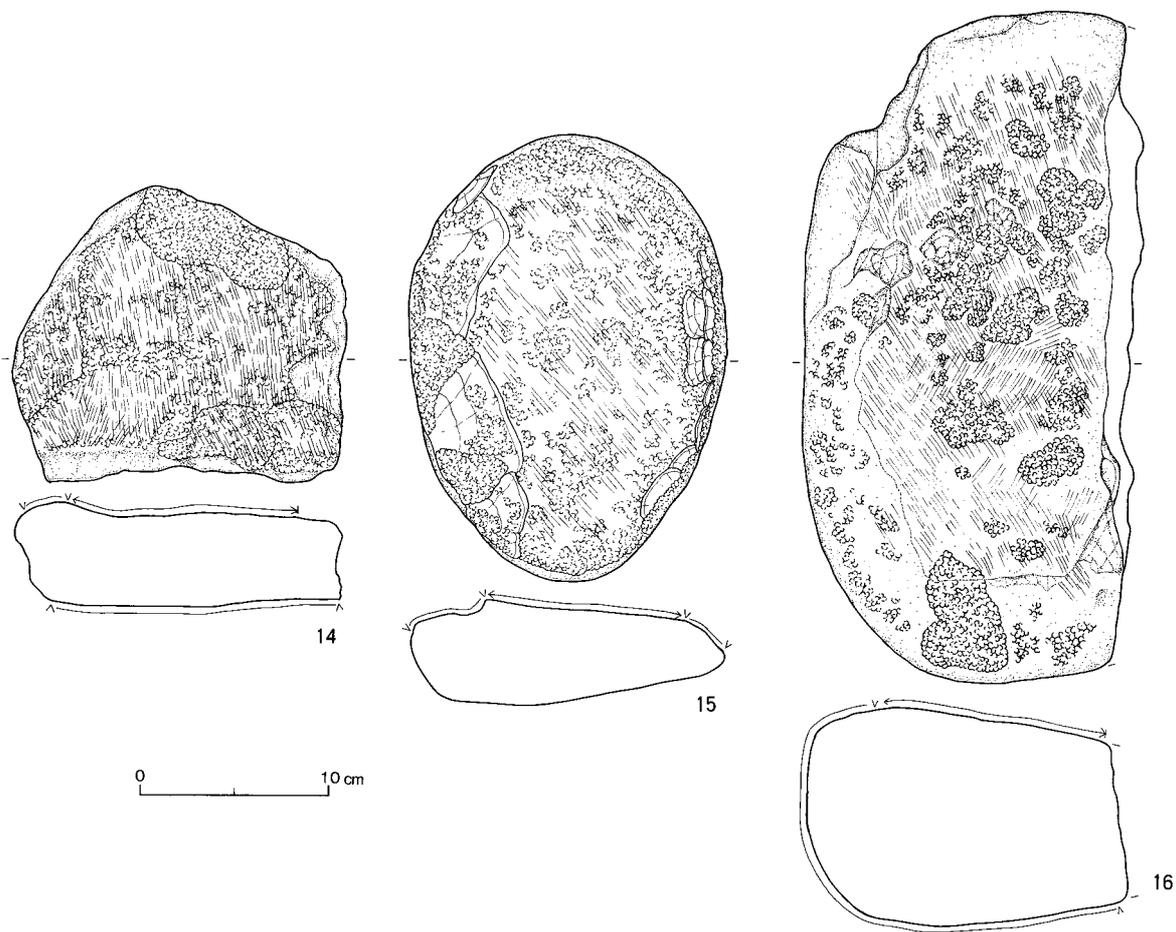
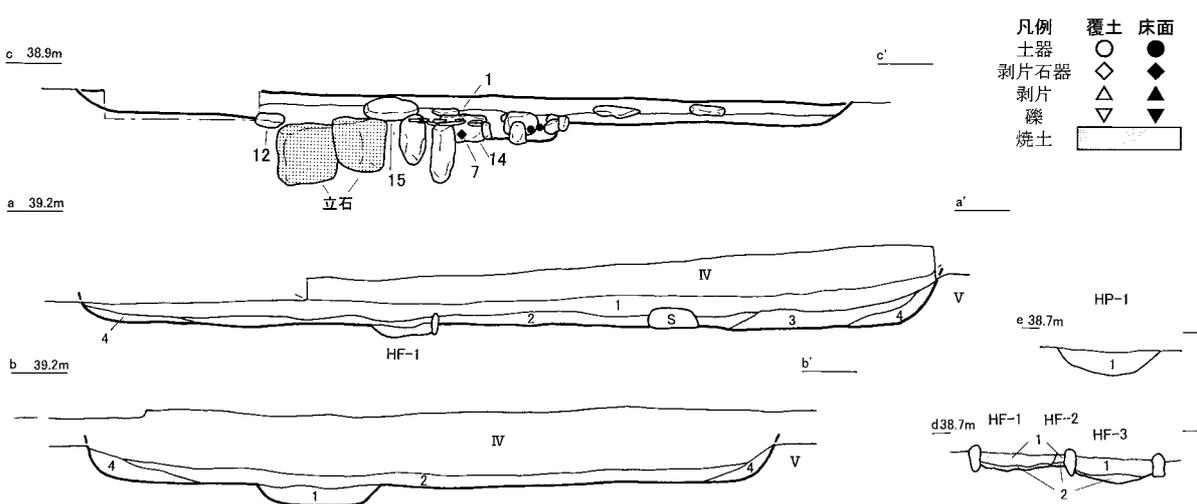
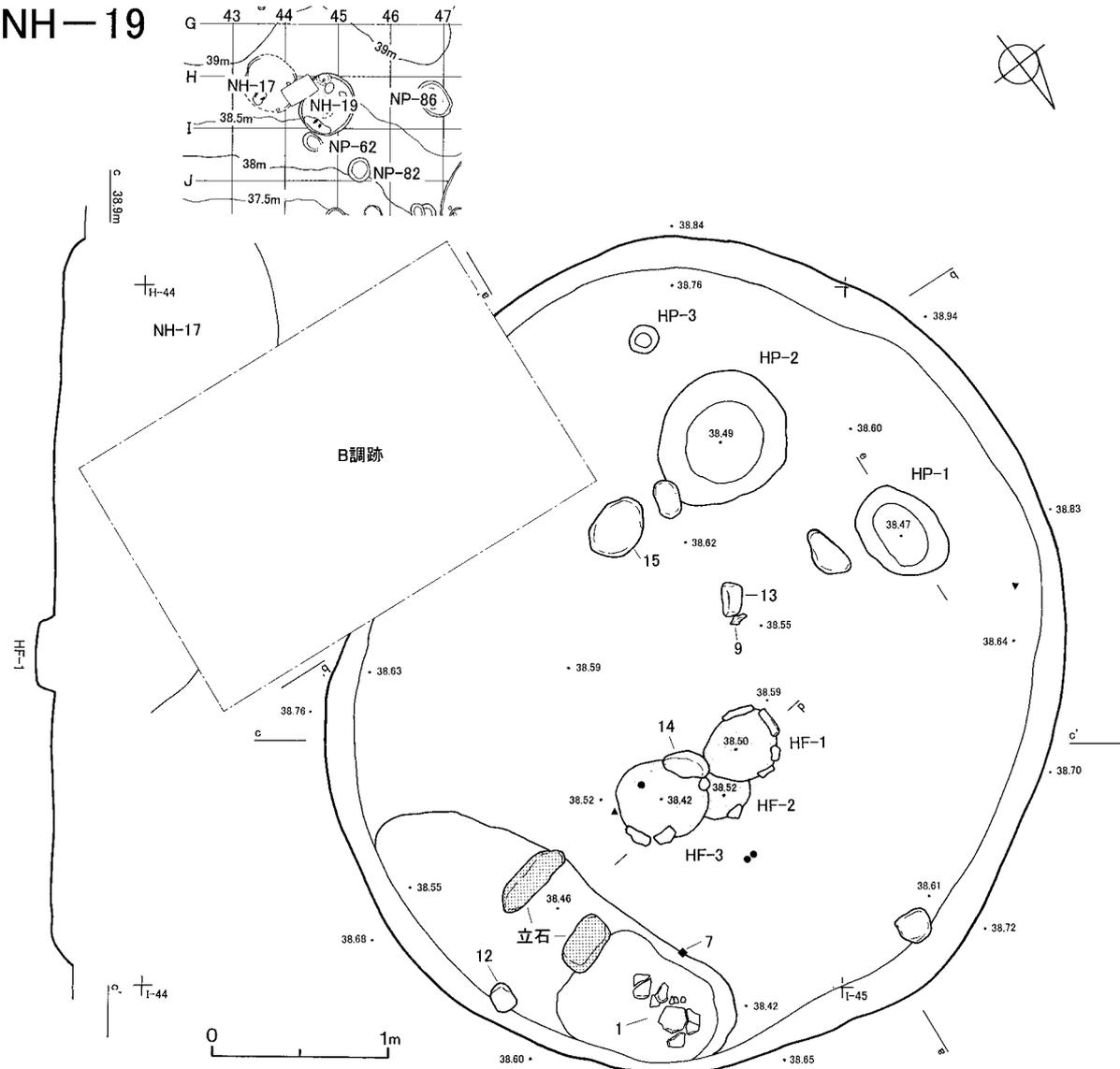


図 - 25 NH - 17の遺物 (2)

NH-19



NH-19

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色	10YR2/1	壤土	弱	堅	IV > V
2	暗褐色	10YR3/4	壤土	弱	堅	IV > V Vは斑状
3	暗褐色	10YR3/3	壤土	弱	堅	炭化物微量含む
4	暗褐色	10YR3/4	壤土	弱	堅	IV + V
5	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟	IV + V + VI

HP-1・2

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色	10YR2/1	壤土	弱	軟	IV > V Vはブロック状

HF-1・2・3

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色	10YR3/3	壤土	中	堅	炭化物微量
2	褐色	7.5YR4/4	壤土	中	堅	被熱したVI焼成弱い

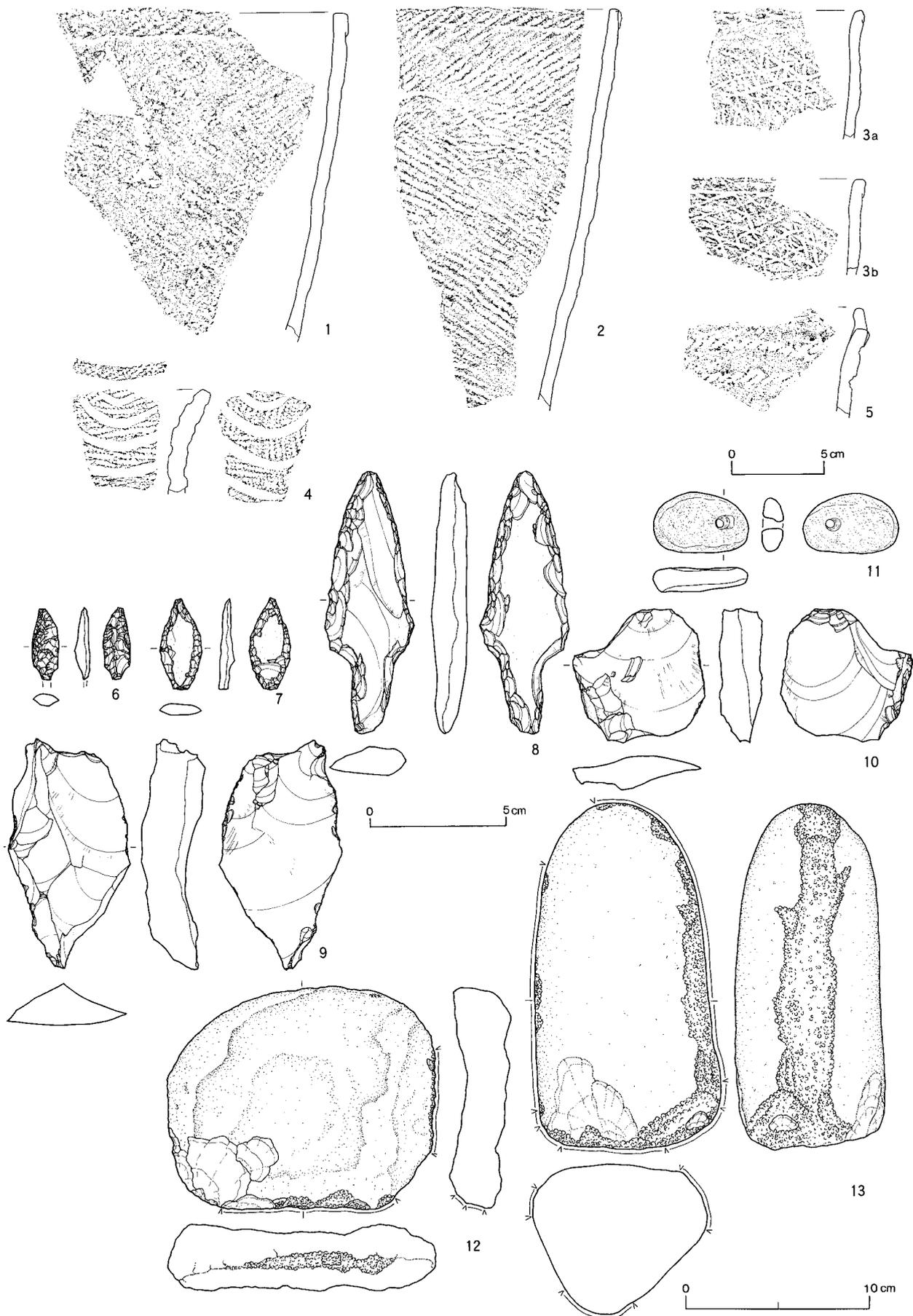


図 - 27 NH - 19の遺物 (1)

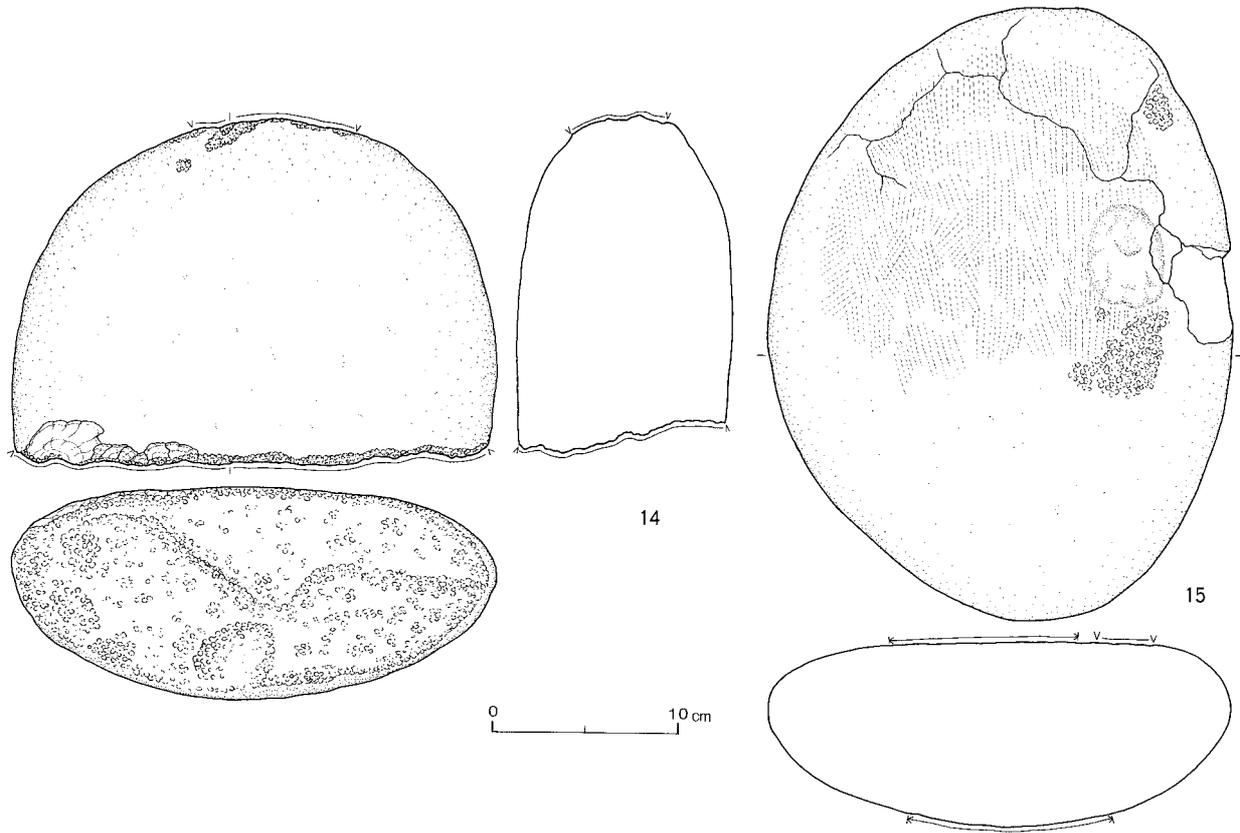


図 - 28 NH - 19の遺物 (2)

2 土壌

P - 1 (図 - 29・30、図版 8 - 1・2)

位置・立地：L - 49 標高37.5～38m、台地の北端、平坦面と斜面の境

規模：2.18×1.71 / 1.89×1.35 / 0.56m

確認・調査：包含層調査で 層下位において褐色土を主体とする斑状の落ち込みを検出した。土層観察用のベルトを設定し半截したところ平坦な墳底と明瞭な壁の立ち上りを確認したので土壌と認定した。覆土は1～5層に分けた。、 層土を主体とし、混ぜ返したような土が堆積している。埋め戻しによるものと考えられる。平面形は円形に近い楕円形を呈する。墳底は平坦である。遺物は台石や礫、礫石器を主とした大型の礫が埋め戻しの覆土中から出土する。これらと土器を含め覆土から15点、墳底から 群a類土器1点、たたき石1点、合計17点の遺物が出土した。

時期：調査区の近似する形態を持つ遺構と、遺物の出土状況から縄文時代中期前半の土壌と考えられる。(袖岡)

掲載遺物：土器 いずれも覆土出土の 群a類。サイベ沢 式である。1は環状の突起を有し、2本一組の縄線が突起下と口唇上に施されている。2は底部片。全体に磨き調整がなされている。(影浦)
石器 層位別の出土状況は覆土から台石3点、礫・礫片が4点出土し、墳底部からはたたき石が1点出土した。3は墳底部出土、安山岩製のたたき石である。長楕円礫の平面的な部分について数か所の敲打痕を持ち、微妙な擦痕を伴う。側縁にも敲打痕があり、折損の原因に関連すると考える。4は覆土出土、安山岩製の台石である。被熱しており数か所はぜた痕跡が残っている。顕著な擦痕が研磨したかのような機能部を形成する。(大泰司)

P - 3 (図 - 30、図版 8 - 3・4)

位置：J - 48

立地：北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：1.12×0.80 / 0.81×0.50 / 0.43m

確認・調査：H - 1検出のための精査時に、これと重複する黒色土の落ち込みが確認された。土壌であることを想定し半截したところ平坦な墳底と急で明瞭な壁の立ち上りを検出し土壌と認定した。覆土は1～3層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。平面形は不整な楕円形を呈する。遺物は覆土より 群b類土器6点、 群a類土器4点、 群a類土器5点、すり石1点、礫片1点の合計17点出土している。

時期：H - 1、HP - 2の規模や覆土の堆積状況が似ていることなどから判断して縄文時代後期に属するものであることが考えられる。(袖岡)

掲載遺物：土器 いずれも覆土出土のもの。1は 群b類。円筒土器下層d式である。2本一組の縄線が横位に巡り、その下に綾絡文と縄文が施されたもの。縄文は破損によりLRの斜行縄文か、結束羽状縄文か判別できない。胎土に繊維を含む。2は 群a類。粘土帯を貼付後、横位に調整を施し、その上に斜行縄文を施文したもの。口唇上にも調整痕が見られるが、凹凸が目立つ。(影浦)
石器 覆土からすり石1点、礫片1点が出土している。3は覆土出土のすり石である。安山岩の礫面を含む破片で、礫面には擦痕が顕著である。(大泰司)

P - 4 (図 - 31、図版 8 - 5・6)

位置・立地：J - 47、48 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：(1.65) × (1.48) / (1.90) × (1.56) / 0.40m

確認・調査：H - 1の精査時に土壌の存在が想定された。落ち込みの長軸方向にベルトを設定し掘り下げたところ明瞭な墳底と壁の立ち上りを検出し土壌と認定した。覆土は1～3層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。平面形や墳底の形については次年度調査区にかかり全様を知り得ないが、不整な楕円形で墳底は2段になっていたことが想定される。遺物は覆土より 群a類土器を中心として土器、石器類が36点、覆土下より 群b類土器1点、墳底より 群a類土器1点、たたき石1点、合計39点の遺物が出土した。

時期：縄文時代後期前葉に属する土壌であると考えられる。(袖岡)

掲載遺物：土器 1は覆土下で出土した 群b類の胴部片。円筒土器下層d式である。多軸絡条体の回転文を地文とする。胎土中には繊維と海綿骨針が混和している。(影浦)

石器 覆土別の出土状況は覆土中からUフレイク1点、フレイク1点、すり石1点、石製品1点、礫・礫片が9点、被熱礫2点が出土し、墳底部からたたき石が1点出土した。2は珪質頁岩製のUフレイクである。石核時のものが打面が残存し、縁辺に微細な潰れ痕跡がある。3は風化した頁岩製の石製品である。覆土出土のものと、J 47区 層出土のものが接合した。石斧様の形状で、下端は刃部様になっている。縦方向の擦痕が顕著であり、半截竹管状の工具が想定される。中央に孔があり、表裏から回転錐と思われる工具で穿孔してある。孔部から割れており製作時の破損の可能性がある。4は墳底部出土の安山岩製のたたき石片である。端部に敲打痕のある破片であり、他の礫面部分には調整痕はない。5は安山岩製のすり石である。被熱し、欠損している。偏平な楕円礫の一面に擦痕を持つ。6は被熱した安山岩の礫である。使用痕は認めがたいが、覆土中の4点と、J 48 d区とJ 47 d区の被熱礫片が1点ずつ、いずれも 層から出土したものが接合した。(大泰司)

P - 5 (図 - 32、図版 8 - 7・8)

位置・立地：I - 49 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：(1.62) × (1.43) / 1.54 × 1.08 / 0.64m

確認・調査：包含層調査で 層下位～ 層上面にかけて暗褐色土の落ち込みが検出された。これに重複するH - 3の存在が推定されていたのでこれらの新旧関係を確認するため、土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。調査の結果、H - 3によって壊された土壌と認定した。覆土は6層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。H - 3に切られているが平面形は楕円形を呈していたものと考えられる。墳底は平坦、壁の立ち上りは急で明瞭である。

遺物は覆土より 群b類土器4点、 群a類土器1点、偏平打製石器1点、すり石1点、礫・礫片1点2点の計9点、覆土下より 群b類土器2点の合計11点が出土した。

時期：H - 3に切られていることからこれより古い縄文時代前期後葉の土壌と考えられる。(袖岡)

掲載遺物：石器 覆土中から偏平打製石器が1点、すり石が1点、礫が2点出土している。

1・2は覆土中から出土した。1は安山岩製の偏平打製石器で機能部は、敲打によるものが、面状を呈する。面は長楕円形で長軸に対して縦方向の擦痕が観察でき、その周囲には細かい打ち欠き痕が巡る。縁辺にも打ち欠きによって半円形に成形する。2は安山岩製のすり石である。表裏面は平らで、擦痕がある。頻度が高いためか研磨されたかの様である。(大泰司)

P - 6 (図 - 32、図版9 - 1・2)

位置・立地：H - 48 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：0.88×0.65 / 0.86×0.67 / 0.34m

確認・調査：H - 4の調査で、試掘坑（平成13年4月文化課）内にある攪乱土を除去し、床面の精査を行っていたところ、灰黄褐色の、層を主体とする堅硬な土を検出した。移植ゴテでは掘れないほどの堅さだったので小さな剣先スコップで土を砕きながら遺物に注意し掘り下げたところ、覆土中からの土器片や礫などの遺物の出土と、平坦な墳底、急で明瞭な壁の立ち上りを検出し土壌と認定した。平面形は円形を呈する。覆土は2層に分けた。検出した覆土1層は層土を主体とし強い締まりのある土である。2層とした土は、1層より柔らかく、やや締まる程度である。1層は意図的に強い締まりを持たせたものと考えられる。これらは埋め戻しによるものと考えられる。

遺物は 群a類土器7点、Uフレイク1点、偏平打製石器1点、台石1点、礫・礫片4点で合計14点が出土した。

時期：埋め戻しである覆土中から 群a類土器の破片や偏平打製石器、台石、礫類が出土する土壌は、調査区内で他に検出した当該期と考えられる遺構の遺物出土状況や覆土の堆積状況が共通することから縄文時代中期前半、円筒土器上層式サイベ沢式期の土壌であると考えられる。（袖岡）

掲載遺物：石器 覆土からUフレイクが1点、偏平打製石器が1点、台石が1点、礫が4点出土している。1はUフレイクで被熱した頁岩の縁辺に極浅形の調整が巡る。2は安山岩製の偏平打製石器である。機能部は敲打によるものか面状を呈する。面は長楕円形で長軸に対して縦方向の擦痕が観察でき、その周囲には細かい打ち欠き痕が巡る。機能部にたいして両側縁は打ち欠きによって平行に整えられ、且つ、その頂部は半円形を呈する。3は安山岩製の台石である。礫が自然に凹んでいるその底部分について、敲打痕がある。（大泰司）

P - 7 (図 - 33、図版9 - 3)

位置・立地：H、I - 49 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面より西側

規模：(2.03)×(1.59) / (1.57)×(1.18) / 0.70m

確認・調査：H - 3・H - 9のトレンチ調査によって確認した。断面の観察よりH - 3・H - 9より古い遺構であることが判った。覆土は5層に分けた。自然埋没によるものと考えられる。平面形は角丸方形に近似した楕円形を呈する。墳底は平坦で壁の立ち上りは明瞭である。遺物は覆土中より北海道式石冠2点、礫1点出土している。

時期：H - 3より古い縄文時代前期後葉の土壌であると考えられる。（袖岡）

掲載遺物：石器 覆土中から北海道式石冠が2点、礫が1点出土している。1・2は覆土中から出土した安山岩製の北海道式石冠である。1は一部に礫面を残し、ほぼ全面に浅い敲打調整を加える。2は半割した楕円礫を用いるため礫面がよく残る。いずれも敲打によって浅い溝状の持ち手を作り出す。いずれも楕円形の機能面を持つ。1は長軸方向の浅い擦痕で、周囲の縁辺には敲打痕が残る。2はそれぞれがおおよそ短軸方向を向く2種類の擦り面によって構成される。1より擦りの度合いが強く、縁辺は打ち欠かれたような欠損が連続する。（大泰司）

P - 8 (図 - 34、図版9 - 4)

位置・立地：J - 48 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：2.14×1.70 / 1.96×1.54 / 0.54m

確認・調査：包含層の 層を掘り下げていたところ暗色の落ち込みを検出した。半截したところ平坦な墳底と急で明瞭な壁の立ち上りを検出したので土壌と認定した。平面形は先に調査を行なった P - 3・P - 4のために一部不明瞭なところもあるが円形である。覆土は1～5層に分けた。3層を除き 層土を多く含む土が主体となる。3層は唯一黒色を呈している。覆土は埋め戻しによるものと考えられる。覆土中からは礫が多く出土した。遺物分布図を見ると凝灰岩を主体とする礫集積が土壌のほぼ中央、土層断面で見ると3層としたところより多く出土している。遺物は 群b類土器10点、 群a類土器5点、フレイク4点、偏平打製石器1点、台石1点、礫・礫片53点、合計74点が出土した。

時期：埋め戻しである覆土中から礫や偏平打製石器の出土、 群a類土器片の出土は、調査区内で他に検出した該時期と考えられる遺構の遺物出土状況や覆土の堆積状況が共通することから縄文時代中期前半の土壌であると考えられる。 (袖岡)

掲載遺物：土器 いずれも覆土出土の 群a類。浅いくぼみを持つ肥厚した突起部に2本一組の縄の刻みが縦位に加えられたサイベ沢 式である。1は突起の中央に穿孔がなされ、沈線文が加えられている。地文は結束羽状縄文で、拓本左辺に補修孔を穿とうとした痕が見られるが、貫通していない。内面は平滑。2はより肥厚した口唇上に太い縄の圧痕が連続的に加えられている。 (影浦)

石器 覆土中からフレイク4点、偏平打製石器1点、台石1点、礫53点が出土する。覆土中位から同質の凝灰岩楕円礫、大小32点がまとまって出土している。使用痕等は見受けられない。

3・4は覆土出土の礫石器で、いずれも被熱した安山岩製である。3は偏平打製石器で破損が著しい。表面の平面的な部分には表裏とも擦痕が残る。機能部は敲打によるものか面を持つ。形状は敲打調整によって半円形である。4は台石である。不整な礫の平面的な部分に擦痕が残る。 (大泰司)

P - 11 (図 - 35・36、図版9 - 5・6)

位置・立地：G - 49 調査区の西端に近い標高37.5m、無名沢に臨む斜面

規模：1.74×1.88 / 1.13×1.10 / 0.58m

確認・調査：包含層の 層を掘り下げていたところ暗褐色土の落ち込みを検出した。半截したところ平坦な墳底と明瞭な壁の立ち上りを検出したので土壌と認定した。覆土は1～8層に分けた。口 - ム質土を多く含み、混ぜ返されたような土が堆積している。埋め戻しによるものと考えられる。覆土下位には焼土が検出された。ここで焼成を受けたものではなく、埋め戻しの過程において入れられたものと考えられる。平面形は楕円形である。墳底は平坦で、墳口より広がっておりオ - バ - ハングして立ち上る。遺物は覆土より 群b類土器2点、 群a類土器43点(ミニチュア土器1を含む)、すり石1点、たたき石1点、偏平打製石器2点、台石1点、礫・礫片14点、被熱礫3点の計67点出土している。墳底からは 群a類土器2点、礫・礫片1点、合計で70点の遺物が出土した。

時期：埋め戻しである覆土中より 群a類土器が多く出土したことから縄文時代中期前半、円筒土器上層式サイベ沢 式期の土壌であると考えられる。 (袖岡)

掲載遺物：土器 いずれも覆土出土である。1は 群a類。小型の土器である。類似の土器が包含層から出土しており、その周囲の土器の出土状況から 群a類と判断した。底部はやや張り出し、大きく開く器形である。口径は底径の倍以上ある。口縁は緩やかな波状を呈し、器表面は縦位の調整で平滑である。底部は指頭圧で揚げ底に整形している。2は 群a類。サイベ沢 式である。結束第2種羽状縄文を地文とし、口唇上は縄の圧痕で連続的な刻みが加えられている。内面は平滑に調整されており、ヘラ状工具による調整痕も認められる。胎土中に径5mm内外の角礫を多く含む。3は 群b類、円筒土器下層d式の底部。多軸絡条体の回転文を地文とし、やや膨らみをもって、立ち上がる器形で

ある。 (影浦)

石器 覆土中からすり石1点、たたき石1点、偏平打製石器2点、台石が1点、礫・礫片が14点、被熱礫3点が出土し、墳底部からは礫片が1点出土する。4・5は安山岩製の偏平打製石器である。4は比較的肉厚で刃部様ないしは礫器様の機能部を持つ。側縁にまで打ち欠き調整がおよぶが頂部は礫面を残す。5は被熱しており、刃部様の機能部を持つが、かすかに敲打によると思われる機能面を含む。欠損しているが、一側縁は直線状に、そして頂部は打ち欠きによって半円状に成形される。6は安山岩製のたたき石片である。棒状礫ないしは小型の楕円礫の比較的平面的な部分に2ヶ所敲打痕跡を持つ。7は安山岩製の台石であり、大型で不整な礫の平坦面のほぼ中央部に擦痕を持つ。擦痕は著しく、研磨を思わせる。 (大泰司)

P - 12 (図 - 37、図版9 - 7・8)

位置・立地：E - 48 調査区の西端に近い標高37.5m、無名沢に臨む斜面

規模：2.12×1.74 / (1.31) × (1.20) / 0.45m

確認・調査：包含層の 層を掘り下げていたところ暗褐色土の落ち込みを検出した。土層観察用のベルトを設定し掘り下げたところ平坦な墳底と明瞭な壁の立ち上りを検出し土壌と認定した。覆土は1～6層に分けた。 層土を多く含む土が主体である。平面形は南側が調査範囲外にかかり全様を知り得ないが楕円形を呈するものとみられる。遺物は覆土下位より口頸部を損失した 群a類土器が1個体、破片数にして15点出土した。このほか北海道式石冠1点、偏平打製石器1点、台石1点、礫3点の形21点出土している。

時期：覆土の下位より 群a類土器(1)が1個体出土し、先に調査した該時期の土壌と覆土の状況や出土する遺物が共通することから縄文時代中期前半、円筒土器上層式サイベ沢 式期の土壌であることが考えられる。 (袖岡)

掲載遺物：土器 いずれも覆土内出土の 群a類、サイベ沢 式である。1は口縁部を欠く小型土器。胴が膨らむ器形である。LR斜行縄文を施したのち、胴部下半に綾絡文を加えたもの。底部付近は横方向に調整され平滑である。内面は縦位の調整で光沢を呈する。2は口縁下に縄線が2条巡るもの。口唇上に縄の圧痕で刻みが加えられ、地文に結束第2種羽状縄文が施されている。 (影浦)

石器 覆土中から北海道式石冠1点、たたき石1点、台石1点、礫片3点が出土する。3は安山岩製の北海道式石冠片である。割礫に敲打によって溝をつけるタイプである。楕円形の機能面はよく研磨され、その縁辺には打ち欠き痕が巡る。4は安山岩製のたたき石である。包含層のたたき石の項で礫器としたもので、刃部様の機能部を持つ。縁辺にも打ち欠き調整が見られるが、まばらである。素材の原形を残しており使い込んだ状況とは言い難い。5は台石である。多孔質安山岩の楕円礫について、平らな一面に敲打痕がある。その機能面の長軸に対して斜方向の擦痕が浅く残っており、これはたたき引く様な作業が行われた事を想定する。 (大泰司)

P - 14 (図 - 38)

位置・立地：K - 50 台地の北側先端部、標高38m前後

規模：(1.56) × (1.09) / (0.61) × (0.36) / 0.61m

確認・調査：包含層 ~ 層調査によって、木根による攪乱と誤認し掘り下げ、壊してから土壌であることが判明した。土壌は3分の1程度が残存していた。覆土は1～8層に分けた。3層は焼土を主体とする土である。平面形は円形であったことが推測される。壁の立ち上りは急で明瞭である。墳底は

平坦である。遺物は覆土中よりたたき石1点、偏平打製石器2点、台石1点、礫7点の計11点出土した。時期：調査区内で他に検出した該時期と考えられる遺構の遺物出土状況や覆土の堆積状況が共通することから縄文時代中期前半の土壌と考えられる。（袖岡）

掲載遺物：石器 覆土中からたたき石1点、偏平打製石器2点、台石1点、礫6点、被熱礫1点が出土している。たたき石、台石としたものは礫にかすかに敲打痕跡を持つものである。1・2は覆土出土で、安山岩製の偏平打製石器である。1は両端に打ち欠き調整がなされる。頂部にも調整が加えられ、直線的な機能部にも打ち欠きがある。ただしむしろ曲線を描く頂部の方が打ち欠きの頻度が高く、包含層出土の側面観が丸みをおびた機能部のものを思わせる。2は被熱しており、機能部には敲打痕が残し、幅の狭い面を形成する。側縁についても打ち欠きと敲打によって両側縁が並行に成形されており、使用されていた可能性が高い。頂部は本来の素材の形状のままで、半円状である。（大泰司）

P - 17（図 - 38）

位置・立地：J - 48 北に張り出す台地の標高38～38.5mの平坦面

規模：(0.90) × (0.69) / (0.75) × (0.69) / (0.24) m

確認・調査：包含層 ~ 層の包含層調査で検出した。覆土中からは焼土を検出した。

確認面からみると平面形は不整な円形である。墳底は東側へ傾く。遺物は覆土中より4点の遺物が出土した。

時期：覆土中から焼土を検出しており、調査区で検出されている該時期類似の土壌と共通することから縄文時代中期前半の土壌であることが推測できる。（袖岡）

掲載遺物：石器 覆土中から礫・礫片が2点出土している。掲載遺物はない。（大泰司）

NP - 60（図 - 39～48、図版17）

位置・立地：F - 43 標高約39mの平坦面。

規模：0.41 / 0.26 × 0.40 / 0.26 × 0.17m

確認・調査：層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は層を主体とする黒色土が大半の、自然堆積である。平面形は円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、同一母岩から剥離されたと思われる長さ10cm程の頁岩製のフレイクなどが、北西側と南東側の2ヶ所にまとまって出土した。微細な剥片が出土していないことから、他の場所で剥離され、石器素材として選択されたものが集められたと考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、群a類土器の時期と考えられる。（村田）

掲載遺物：石器 覆土中から打面が明瞭な剥片（石核片とした）が7点、潰れ痕が明瞭な剥片（Uフレイクとした）が13点、連続する剥離を持つがそれを使用痕と断定できない剥片（Rフレイクとした）が9点、フレイク53点が出土している。すべて同一母岩のものあるいは非常に近いものとする。接合作業の結果16点の接合資料を得た。それぞれ打面の転移が頻繁に見受けられる。規則性・法則性を資料から理解することは難しい。ただし、接合資料Bについてのみ、母岩が板状節理で、質が均一であるためか、連続して齋一性のある横長剥片を作り出している。73はBから近いところに接合するものと考えられるが、間を充填する素材部分は発掘では得られていない。

遺物出土状況の特徴としては、土壌の北西側と南東側に遺物が分かれてそれぞれまとまりを形成している事が挙げられる。北西側のまとまりから、接合資料A・F・H・I・J・M・Oが、南東側のまとまりから接合資料B・C・D・E・G・K・L・N・Pが出土している。接合資料が2つの遺物のまとまり

りをまたがる事は接合資料Aの6が南東側から出土した以外にはなかった。73についても接合資料Bと同じ南東側からの出土である。 (大泰司)

NP - 61 (図 - 49・50、図版17)

位置・立地：J - 46 標高38m付近の緩斜面。

規模：1.33 / 0.94 × 0.98 / 0.61 × 0.38m

確認・調査： 層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面の土層堆積状況から遺構の重複が予想されたため、これを横断する土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行った。その結果、NP - 65より新しい遺構である事がわかった。覆土は 層が少量混じる 層が主体の埋め戻しである。平面形は楕円形を呈し、墳底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物出土状況は、墳口部に石皿4点と礫が1点、墳底から偏平打製石器1点と礫が4点出土している。土壌墓の可能性がある。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、群a類土器の時期と考えられる。 (村田)

掲載遺物：石器 覆土中からフレイク1点、偏平打製石器2点、台石3点、礫・礫片3点、被熱礫2点、使用痕のある礫1点が出土した。覆土中の石器を図化した。1・2はいずれも、安山岩製の偏平打製石器である。機能部は敲打によるものか面をなし、その周縁には細かい剥離が目立つ。1は被熱している。割礫の一侧縁を使用している。平行する両側縁には敲打痕があり、表面図右側縁に顕著である。機能面は表裏二面ある。2は偏平な礫を使用しており、縁辺の調整はない。3・4は安山岩製の台石片である。3は図化の際、便宜上表面とした側に顕著な擦痕があり、裏面は敲打によって皿状に凹む。4は表裏面ともに敲打痕があり、いずれも皿状に凹む。 (大泰司)

NP - 62 (図 - 50、図版18)

位置・立地：I - 44 標高38~39mの平坦面。

規模：(1.42) / (1.02) × 1.28 / 0.93 × (0.26) m

確認・調査： 層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層を主体とする自然堆積である。北側は風倒木によって壊されている。墳底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中に散見される程度である。性格は不明。

時期：覆土中および出土遺物から縄文時代後期前葉、群a類土器の時期と考えられる。 (村田)

掲載遺物：石器 覆土中から石核が1点、石のみが1点、フレイクが2点、礫が1点出土している。1はメノウ製の石核片である。両面から剥片を剥離した痕跡が残る。2は石のみである。F 46区層出土の破片(正面図接合右側)と接合した。片岩製で素材本来の形状を生かし、そのまま研磨する。刃部は折損する。 (大泰司)

NP - 65 (図 - 51、図版18)

位置・立地：J - 46 標高38m付近の緩斜面

規模：2.02 / 1.48 × (1.70) / 1.09 × (0.78) m

確認・調査： 層上面で黒色土と黒褐色土の落ち込みとして確認した。平面の土層堆積状況から遺構の重複が予想されたため、これを横断する土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を行った。その結果、NP - 61より古い遺構である事がわかった。覆土は 層の黒色土を主体とする自然堆積で、壁際に崩落した 層が混じる。平面形は楕円形を呈し、墳底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中に散見される程度である。性格は不明。

時期：覆土中および周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、群 a 類土器の時期と考えられる。

(村田)

掲載遺物：石器 覆土別に覆土 2・3 層からフレイクが 5 点、偏平打製石器が 1 点出土し、覆土 5 層から石核が 1 点出土している。1 は頁岩の石核であり、上端に打面が残存する。2 は安山岩製の偏平打製石器である。機能部には敲打によるものか面をなし、その周縁には細かい打ち欠き痕が巡る。石器縁辺には敲打調整が巡り、側縁は打ち欠きを併用して直線的に成形する。

(大泰司)

NP - 67 (図 - 51、図版18)

位置・立地：F - 43 標高約39mの平坦面。

規模：0.63 / 0.37 × 0.58 / 0.3 × 0.17m

確認・調査： 層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は周辺のNP - 60、68、69などと同様に、何らかの貯蔵穴と考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、群 a 類土器の時期と考えられる。(村田)

NP - 68 (図 - 52、図版18)

位置・立地：F - 42 標高約39mの平坦面。

規模：0.64 / 0.48 × 0.52 / 0.32 × 0.15m

確認・調査： 層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層を主体とする自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は周辺のNP - 60、67、69などと同様に、何らかの貯蔵穴と考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、群 a 類土器の時期と考えられる。(村田)

NP - 69 (図 - 52、図版18)

位置・立地：F - 42 標高約39mの平坦面。

規模：0.53 / 0.26 × 0.48 / 0.25 × 0.15m

確認・調査： 層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は周辺のNP - 60、67、68などと同様に、何らかの貯蔵穴と考えられる。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、群 a 類土器の時期と考えられる。(村田)

NP - 70 (図 - 52、図版19)

位置・立地：G - 41・42 標高約39mの平坦面。

規模：1.66 / 1.27 × 1.18 / 0.9 × 0.25m

確認・調査： 層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層と 層が混じる褐色土が主体の自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、墳底は皿状で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中から群 a 類の土器片が14点出土した。性格は不明。

時期：覆土中および周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉、群 a 類土器の時期と考えられる。

(村田)

掲載遺物：土器 1 は覆土 1 出土の 群 a 類。無文地の下に沈線が1条巡る。

(影浦)

NP - 77 (図 - 53、図版19)

位置・立地：J・K - 47 標高38m付近の平坦面端部。

規模：2.48 / 2.34 × 1.87 / 1.27 × 0.22m

確認・調査：NH - 13の調査中、暗褐色土の落ち込みとして確認した。NH - 13より新しい遺構である。覆土は Ⅰ層が混じる暗褐色土を主体とする自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、墳底は平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中に散見される程度である。性格は不明。

時期：覆土中および周辺の遺物から縄文時代中期前半、群a類土器の時期と推測される。(村田)

掲載遺物：土器 Ⅰは覆土Ⅰ出土の群b類。地文は結束第1種結束縄文を地文とする。内面調整は平滑で、胎土には繊維を含んでいる。(影浦)

石器 覆土中からスクレイパー1点、Uフレイク1点、Rフレイク1点、フレイク3点、たたき石1点、礫・礫片3点が出土する。2は玄武岩製の折損したスクレイパーであり、背面左側縁に浅い調整が連続する。背面右側縁には節理面を含むがその縁辺にも調整が及ぶ。3は安山岩製のたたき石である。偏平な礫の一縁辺に敲打による機能部を持つ。機能部周縁には粗い打ち欠きが巡る。(大泰司)

NP - 80 (図 - 53、図版19)

位置・立地：F - 46・47 標高39m付近の平坦面端部。

規模：2.48 / 2.34 × 1.87 / 1.27 × 0.22m

確認・調査：Ⅰ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅠ層を主体とする自然堆積で、壁および墳底に崩落によるⅠ層がブロック状に混入している。平面形は円形を呈し、墳底はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。遺物は覆土中から、群a類土器が9点、群a類土器が7点とUフレイク1点が出土している。性格は不明。

時期：遺構および周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、群a類土器の時期と考えられる。(村田)

掲載遺物：石器 覆土中からUフレイクが1点出土している。掲載遺物はない。(大泰司)

NP - 81 (図 - 54、図版19)

位置・立地：J - 45 標高37.5～38m付近の緩斜面。

規模：1.38 / 1.25 × 1.15 / 1.0 × 0.55m

確認・調査：Ⅰ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土はⅠ層を主体とした埋め戻しである。平面形は隅丸方形を呈する。墳底はほぼ平坦で、脆い頁岩を主体とするⅠ層が露出している。

Ⅰ層は硬いため、この面で掘削をやめたと考えられる。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。遺物は覆土上層の自然堆積層(Ⅰ層)から礫が2点出土している。土壌墓の可能性はある。

時期：遺構周辺の出土遺物から縄文時代中期前半、群a類土器の時期と考えられる。(村田)

掲載遺物：石器 覆土中から礫3点(うち原石1点) 被熱礫1点が出土している。掲載遺物はない。

(大泰司)

NP - 82 (図 - 55～57、図版20)

位置・立地：I・J - 45 標高38m付近の緩斜面。

規模：1.62 / 1.43 × (1.47) / 1.13 × 0.77m

確認・調査：Ⅰ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。埋め戻しの覆土である。Ⅰ層を主体とする黒色土(1、2層) Ⅰ層を主体とし炭化物を含む黒褐色土(3、4層) Ⅰ層を主体とし炭化物を

含む黒褐色土（5～8層）・層を主体とする褐色土（9～12層）の大きく4層に大別でき、遺物の取上げもこの大別で行った。取上げ層位の1層は覆土1・2層、2層は覆土3・4層、3層は5～8層、4層は一部墳底と壁出土の遺物を含み9～12層に相当する。平面形は楕円形を呈し、墳底はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。遺物出土状況は、覆土の上層から中層で、群a類土器がまとまって出土している。覆土の中層から墳底にかけて北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石、石皿・台石などの礫石器が13点出土した。また、人頭大の礫2点とこぶし大の礫が27点、軽石が1点出土している。剥片石器は少なく、Uフレイク・フレイクが4点とメノウの原石が1点のみである。土墳墓である。

時期：出土遺物から縄文時代中期前半、群a類土器の時期である。（村田）

掲載遺物：土器 1～4は群a類、サイベ沢式である。1は覆土1においてまとまって出土した。底部が張り出し、大きく屈曲したのち、垂直に開く器形で、口縁部は大きく外反する。4ヶ所の山形突起を持っており、突起部は特に外にせり出す。口縁部断面形は角形に近く、口唇上には縄の圧痕が斜位に連続的に施されている。縄線および縄端の圧痕が突起上にも観察される。体部には結節斜行縄文が施されている。底部付近の屈曲部分は横方向に調整がなされ、地文が平滑に磨り消されている。内面には指頭圧による凹凸がやや残っている。2は覆土3と覆土4の土器が接合したものの。LRの斜行縄文が地文。底部付近は横方向の調整で磨り消されている。内外面ともに指頭による凹凸が認められるが、内面は平滑に調整されている。胎土に繊維と若干の海綿骨針を含んでいる。3は覆土2で出土した。撚りの異なる2つの原体で羽状縄文が施され、その上に繊維痕の明瞭な浅い沈線を引いている。口唇上には太い縄の圧痕が施されている。4は覆土4と墳底で出土した土器片が接合したものの。RLRの複節斜行縄文を地文とする。底部断面が張り出す器形で、内面は平滑。胎土中に砂礫を含む。5・6は群b類、円筒土器下層d式である。いずれも口縁下に細い縄線を複数条巡らせている。胎土には繊維の混和が認められる。5は壁から出土した。撚糸文と結束羽状縄文が組み合わせられたものである。6は覆土3の出土。体部に綾絡文と多軸絡条体の回転文を施文している。（影浦）

石器 覆土別に遺物出土状況を見ると、壁面からたたき石が1点、被熱礫が2点出土している。墳底部から叩き石が1点、被熱礫が3点出土している。覆土中からフレイクが3点、北海道式石冠が3点、偏平打製石器が4点、たたき石が2点、台石が1点、石皿が1点、礫・礫片が17点（うち軽石が1点）被熱礫3点が出土している。7～9は安山岩製の北海道式石冠である。いずれも楕円礫の割礫に敲打で溝を刻むタイプである。明瞭なすり面を持ち、その周縁は所々細かい打ち欠きがある。10～12は偏平打製石器である。10は覆土1と覆土4から出土した破片が接合した。安山岩製で片面には礫面を残す。機能部は敲打によるものか薄い面を呈する側縁も一部打ち欠き調整を持つ。頂点にも敲打痕跡が微妙に残る。11は覆土3、6は覆土4から出土した安山岩製偏平打製石器片である。機能部は刃部様を呈する。12の機能部は敲打によるものか薄い面を呈する。13は安山岩のたたき石である。片面礫器とでも言うべきか、一端部に細かい打ち欠き痕跡がならび、大きな打ち欠きは他の縁辺にも及ぶ。14は覆土4から出土した安山岩製の石皿である。擦痕により皿状の平坦面を持つ。安山岩の特質から、鉋物が欠落したか所が、数か所皿面にあるが、そのひとつの孔には密な螺旋状に条線痕がある。

（大泰司）

NP - 84（図 - 58、図版20）

位置・立地：K - 46 標高38m付近の緩斜面。

規模：1.27 / 1.12 × 0.84 / 0.69 × 0.38m

確認・調査：層上面で褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は・層を主体とした埋め戻しで、

層はブロック状に混入する。平面形は楕円形を呈し、墳底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。土壌墓の可能性はある。

時期：出土遺物はなく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半、群a類土器の時期と推測される。(村田)

掲載遺物：石器 覆土中からUフレイク1点が出土している。掲載遺物はない。(大泰司)

NP - 85 (図 - 58、図版21)

位置・立地：K - 47 標高37.5~38m付近の緩斜面。

規模：(1.88) / (1.73) × 1.64 / 1.47 × (0.32) m

確認・調査：層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は層を主体とした褐色土で自然堆積である。平面形は楕円形を呈し、墳底は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土に散見される程度である。性格は不明。

時期：出土遺物が少なく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代前期後半もしくは中期前半の遺構と推測される。(村田)

掲載遺物：石器 覆土中からフレイク2点、石錐1点が出土している。1は頁岩製石錐である。突き刺す機能を持つものと考えられ先端部は折損している。背面には礫面を含む。機能部を形成する縁辺には極浅い調整が巡る。(大泰司)

NP - 86 (図 - 59、図版21)

位置・立地：H - 46・47 標高39m付近の平坦面。

規模：3.00 / 2.57 × 2.14 / 1.83 × 0.82m

確認・調査：層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は1層と2層を境に上下に区分される。上層部は層が互層または斑状、ブロック状に混入した土層で、自然流入土や隣接する遺構の掘揚げ土と考えられ、1層として一括した。2層以下は黒色土の流入がみられない埋め戻しの覆土で、一部に壁が崩落した層の堆積が見られる。平面形は楕円形を呈し、墳底はほぼ平坦である。壁は墳底から急角度で立ち上がり、中ほどから墳口に向かって漏斗状に広がっている。遺物出土状況は、覆土中に散見される程度で、まとまりはない。遺物は群b類の土器片が最も多いが、周辺にこの時期の住居跡があり、埋め戻す際に遺物が混入したものと考えられる。覆土の堆積状況から土壌墓と考えられる。

時期：周辺の遺物や他の土壌との関連から縄文時代中期前半、群a類土器の時期の遺構と推測される。(村田)

掲載遺物：土器 1・2は覆土1の出土、3は壁からの出土である。1~3は群b類。円筒土器下層d式である。1は口縁部文様帯が鋸歯状をしており、体部地文は単軸絡条体が縦位に回転施文されている。口縁部文様帯の区画帯には綾絡文が加えられている。2は口唇断面が丸みを持つ。口縁下に縄線を4条巡らせ、体部に単軸絡条体の回転文と綾絡文が施されている。3は底部片。やや膨らみを持ちながら立ち上がる器形で、地文は単軸絡条体の回転文である。(影浦)

石器 覆土中からスクレイパー3点、Rフレイク1点、Uフレイク1点、フレイク3点、礫1点、被熱礫2点が出土している。4~6は珪質頁岩製のスクレイパーである。4は破片であり、比較的浅い調整である。5は横長剥片を用いた削器で、比較的浅い調整でL字状の刃部を形作る。6は折損しているが縦長剥片と考えられ、その一側縁に極浅い調整を施したものである。(大泰司)

NP - 88 (図 - 60・61、図版22)

位置・立地：J - 44・45 標高37.5m付近の緩斜面。

規模：(1.57) / 1.2 × (1.34) / 1.16 × 0.82m

確認・調査： 層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層を主体とする埋め戻しである。覆土2層は炭化物を含む。平面形は円形を呈する。墳底は平坦で脆い頁岩を主体とする 層が全面に露出している。 層は硬いため、この面で掘削をやめたと思われるが、斜面上部に位置する南西側は墳底を平坦にするために、若干掘り込んでいる。壁は墳底から急に立ち上がる。遺物出土状況は、墳口部に 群a類の土器が1個体、横倒しのつぶれた状態で出土した。石器は同じレベルで、スクレイパー、偏平打製石器、たたき石などが出土している。土壌墓である。

時期：出土遺物から縄文時代中期前半、 群a類土器の時期である。 (村田)

掲載遺物：土器 いずれも覆土1で出土した 群a類、サイベ沢 式である。4は胴部下半が膨らみ、口縁が開く器形。結束第2種斜行縄文を地文とするが底部付近は横方向の調整で磨り消されている。口縁には2本一組になっている小形のツノ状突起と、上向きに開いた「C」字状突起が左右に並んだ2種2対の突起を持つ。それぞれの突起下には小突起を結ぶ「Y」字状の橋状把手が縦位に付され、縄の圧痕、環状の貼付が施されている。橋状把手を中心軸として地文の原体による結節のある縄線が連弧文風に展開している。口縁部の断面形は幅広で、その中央に半截竹管状の工具により深い沈線を引いて上下に分割し、それぞれに結節のある縄線文が加えられている。内面は指頭圧による凹凸が顕著であるが、平滑に調整され、鈍い光沢を呈している。胎土中には海綿骨針の混和が顕著である。5は粘土紐の貼付によって文様帯を構成するもの。貼付上に細い縄線を施している。 (影浦)

石器 覆土中からスクレイパー1点、Rフレイク1点、偏平打製石器1点、たたき石1点、礫5点(うち軽石1点)が出土している。1は珪質頁岩製のスクレイパーである。不整な縦長剥片の両側縁に極浅形調整を施す。背面右側縁は両面調整である。2は安山岩製の偏平打製石器である。敲打によるものか機能面を持ち、周縁に打ち欠き痕・敲打痕が巡る。側縁および周縁にも打ち欠き痕が巡る。表面には敲打による凹みを有する。3は安山岩製のたたき石である。割礫の底面側の割面に敲打痕がある。 (大泰司)

NP - 89 (図 - 62、図版22)

位置・立地：F - 47・(48) 標高38m付近の西側緩斜面。

規模：(0.61) / (0.39) × (0.74) / (0.47) × 0.44m

確認・調査：2001年調査区との境に設定した土層断面で確認した。覆土は 層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈すると思われるが不明である。墳底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。性格は不明。

時期：出土遺物がなく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (村田)

NP - 90 (図 - 62、図版22)

位置・立地：E・F - 46 標高39m付近の平坦面端部。

規模：0.94 / 0.67 × 0.81 / 0.66 × 0.31m

確認・調査： 層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。覆土は 層を主体とする自然堆積である。平面形は円形を呈し、墳底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。棒状の礫が出土している。

性格は不明。

時期：出土遺物が少なく不明であるが、周辺の遺物から縄文時代中期前半もしくは後期前葉の遺構と推測される。 (村田)

NP - 92 (図 - 62、図版23)

位置・立地：G・H - 44 標高38.5m付近の平坦面。

規模：1.16 / 0.77 × 0.96 / 0.8 × 0.36m

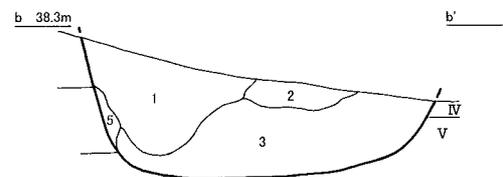
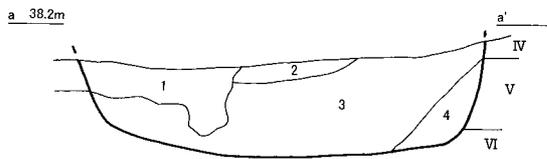
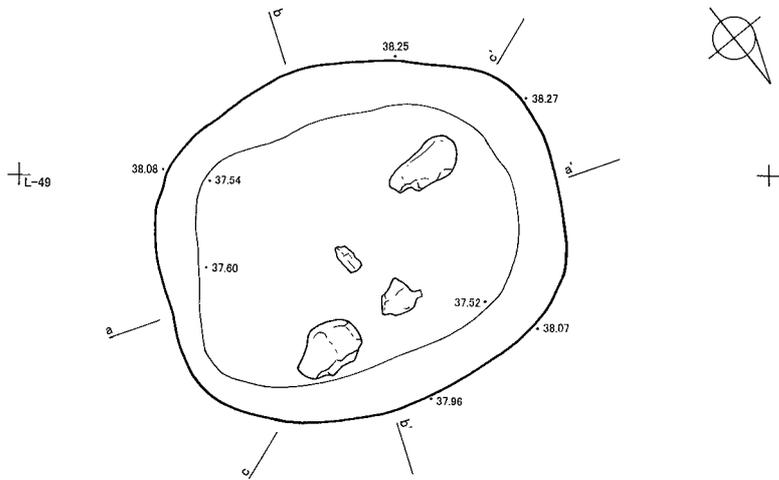
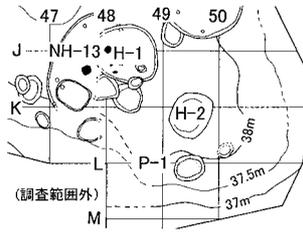
確認・調査：NH - 19の調査中に黒褐色土の落ち込みとして確認した。土層断面の観察からNH - 19より古い遺構であることがわかった。覆土は 層を主体とする自然堆積である。平面形は不整楕円形を呈し、墳底は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中に散見されるが、墳底付近から偏平打製石器が1点出土している。性格は不明。

時期：出土遺物から縄文時代中期前半、 群 a 類土器の時期と考えられる。 (村田)

掲載遺物：土器 いずれも覆土2からの出土した 群a類、サイベ沢 式の胴部片である。1は貼付が上端に残存している。 (影浦)

掲載遺物：石器 覆土中から偏平打製石器が1点、礫が1点出土している。3は安山岩製の偏平打製石器である。機能部には敲打痕があり、幅の狭い平坦面を形成する。側縁を含め、縁辺には打ち欠きによる調整痕が巡る。 (大泰司)

P-1

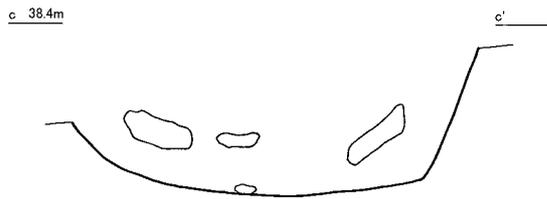


a'

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	雑物混入	その他
1	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟	破砕小礫20%混入	IV>>VI
2	灰黄褐色	10YR4/2	壤土	弱	軟	破砕小礫20%混入	IV>V
3	黄褐色	10YR2/2	壤土	弱	軟	破砕小礫20%混入	IV未達
4	黄褐色	10YR5/6	壤土	弱	軟	破砕小礫10%混入	VI>>IV
5	灰黄褐色	10YR5/2	壤土	弱	軟	破砕小礫10%混入	VI(還元化された頁岩層)

b'

層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅硬度	雑物混入	その他
1	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟	破砕小礫20%混入	IV>>VI
2	灰黄褐色	10YR4/2	壤土	弱	軟	破砕小礫20%混入	IV>VI
3	黄褐色	10YR2/2	壤土	弱	軟	破砕小礫20%混入	IV未達
5	灰黄褐色	10YR5/2	壤土	弱	軟	破砕小礫10%混入	VI(還元化された頁岩層)



凡例
 土器 ○
 礫石器 □
 礫 ▼

覆土 ●
 墳底 ■

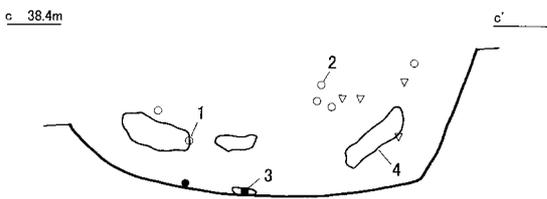
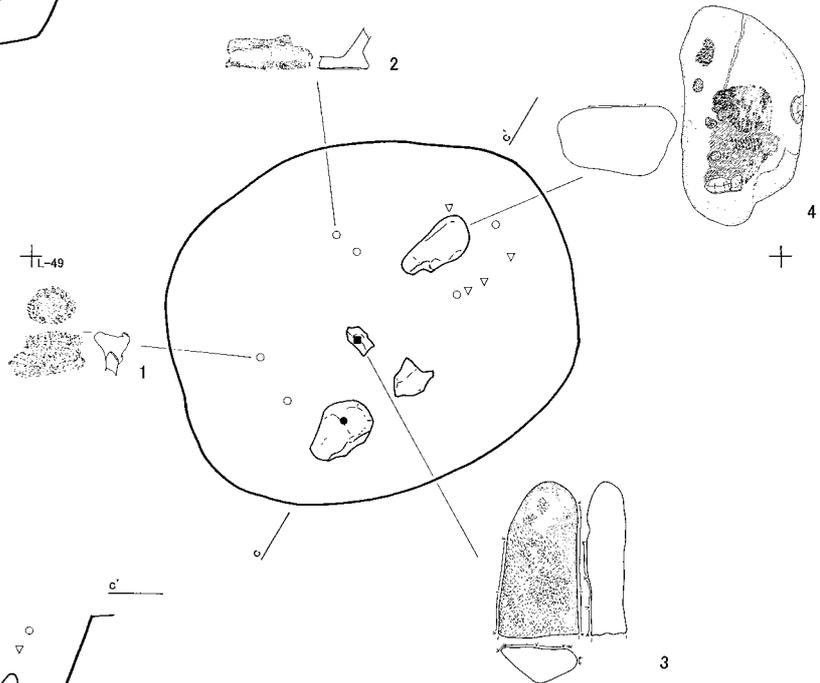
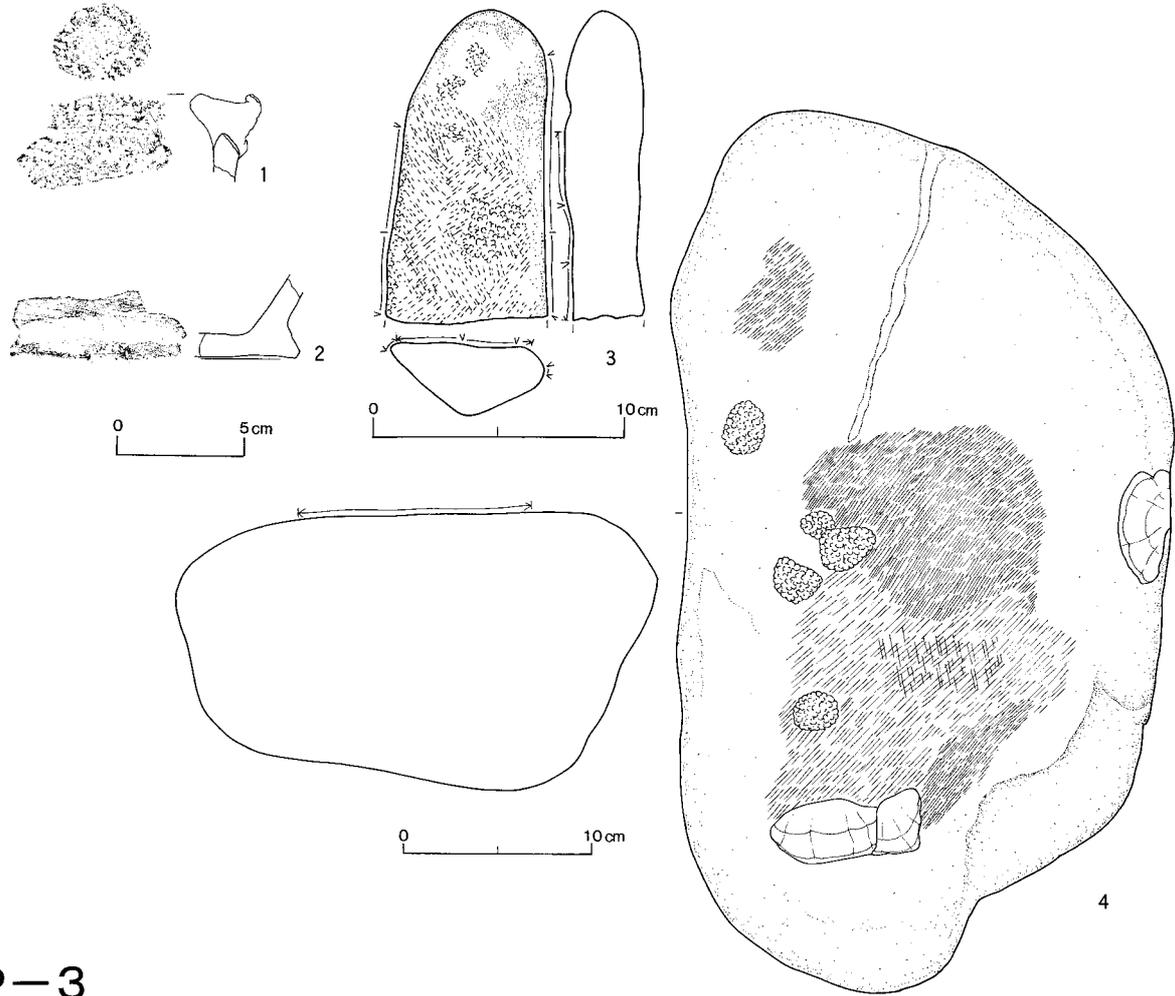
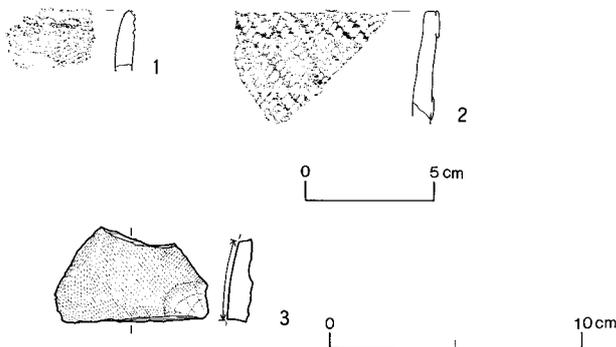
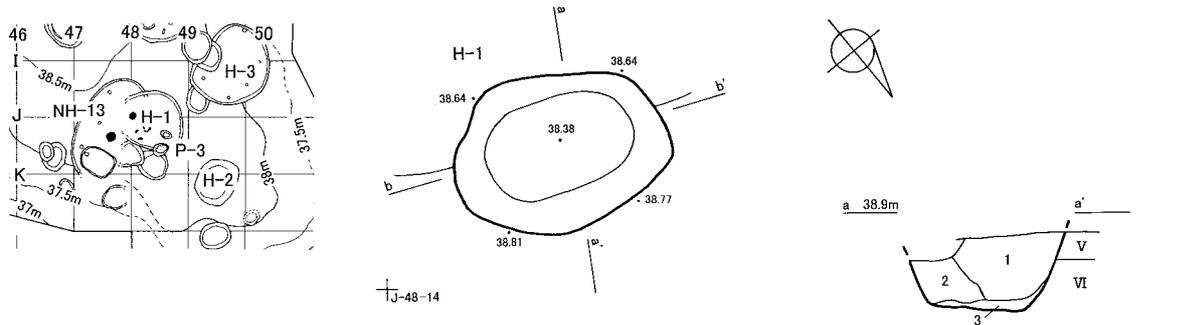


図 - 29 P - 1



P-3



層名	土色1	土色2	土性	粘り	厚薄度	層別入	その他
1	黄褐色	10YR3/2	壤土	弱	砂粒小混10%混入	IV > V	
2	暗褐色	2.5YR3/3	壤土	弱	砂粒小混20%混入	IV+VI	炭化物含む
3	褐色	10YR4/4	壤土	弱		VI	

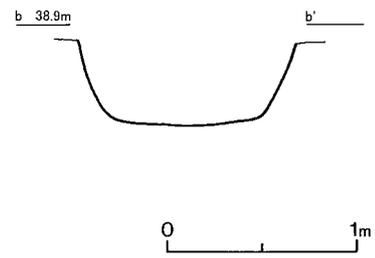
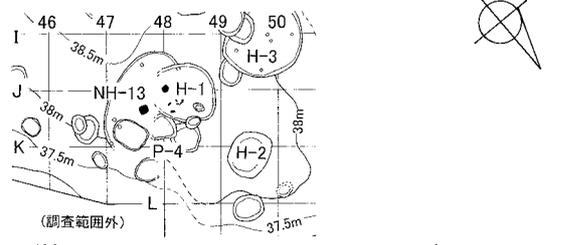
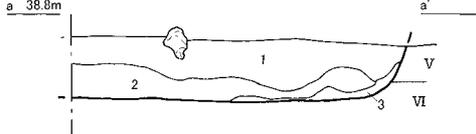
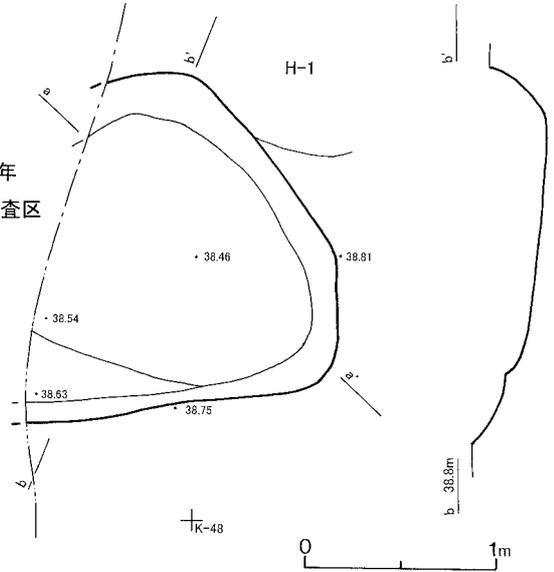


図 - 30 P - 1 の遺物とP - 3

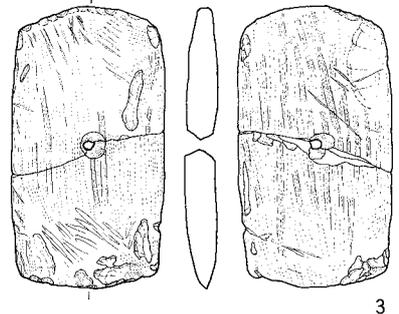
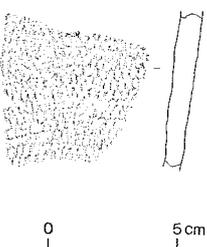
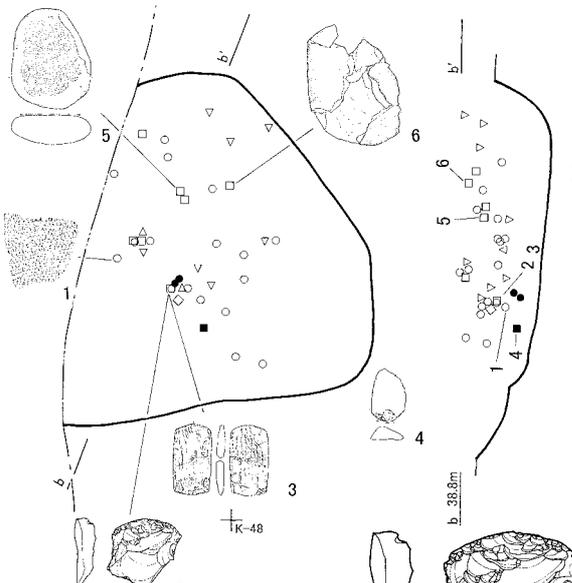
P-4



2002年
調査区



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	埋入	その他
1	黒褐色	10YR3/2	壤土	弱	軟	磁器小片φ0.3cm散	IV+切屑状
2	暗褐色	2.5YR3/3	壤土	弱	軟		VI>>可築状
3	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟		



- 凡例
- 土器 ○ ●
 - 剥片石器 ◇ ◆
 - 礫石器 □ ■
 - 剥片 △ ▼
 - 礫

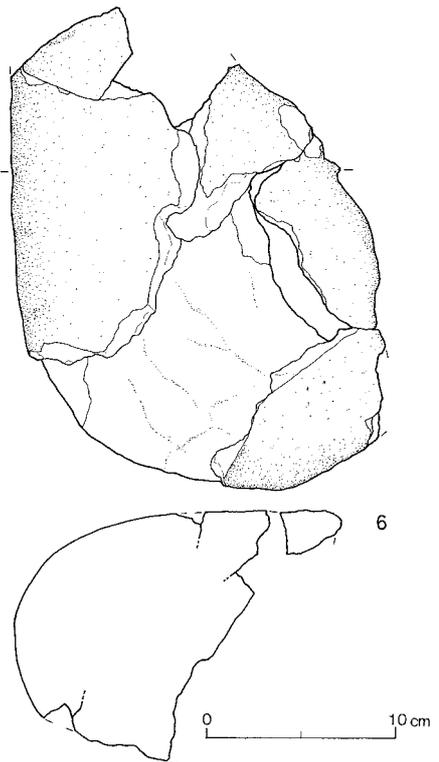
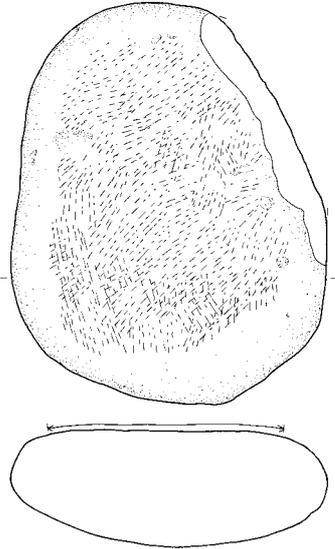
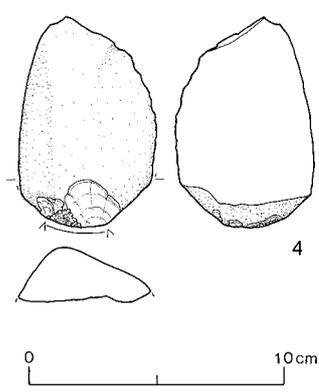


図 - 31 P - 4 と遺物

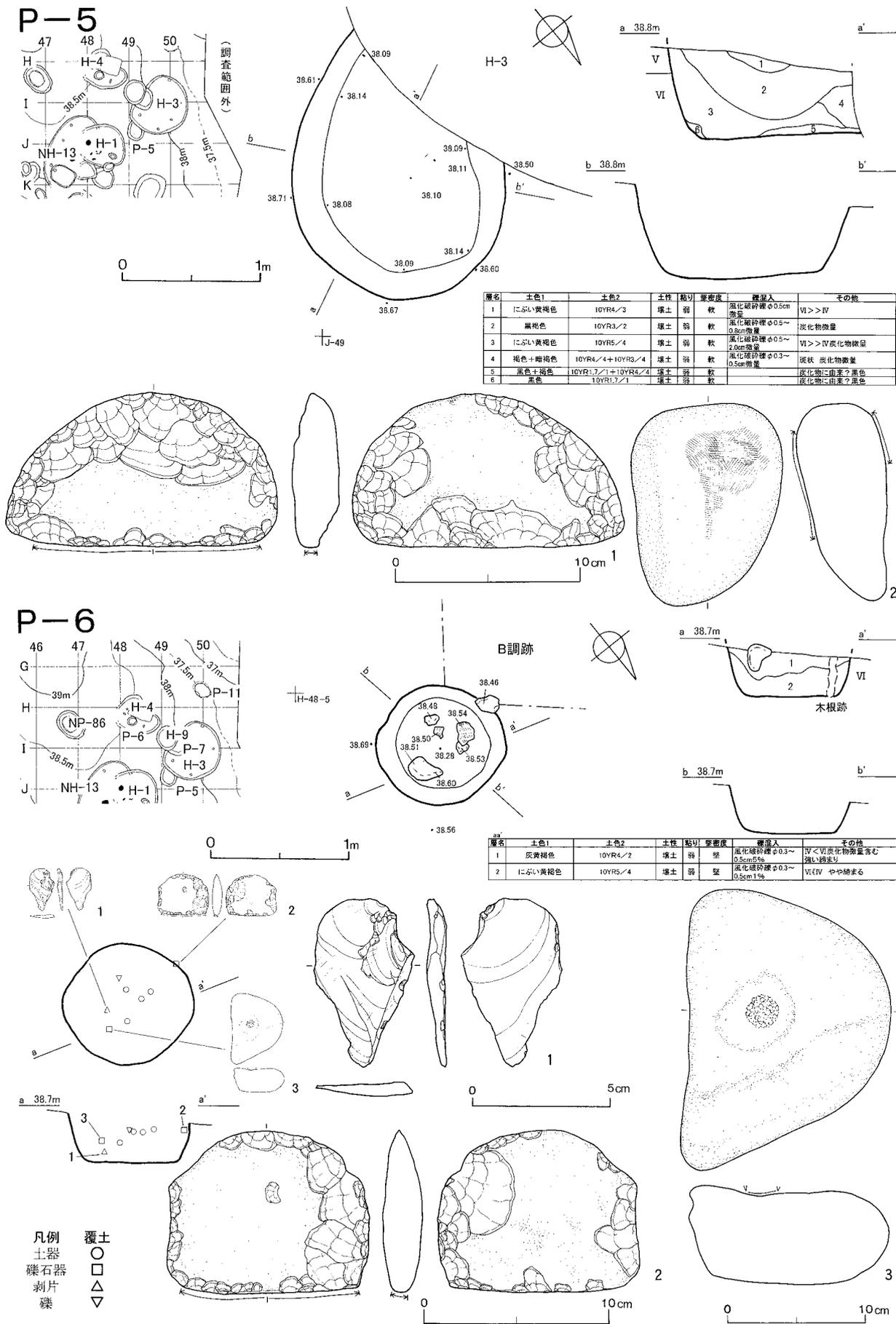


図 - 32 P - 5・6と遺物

P-7

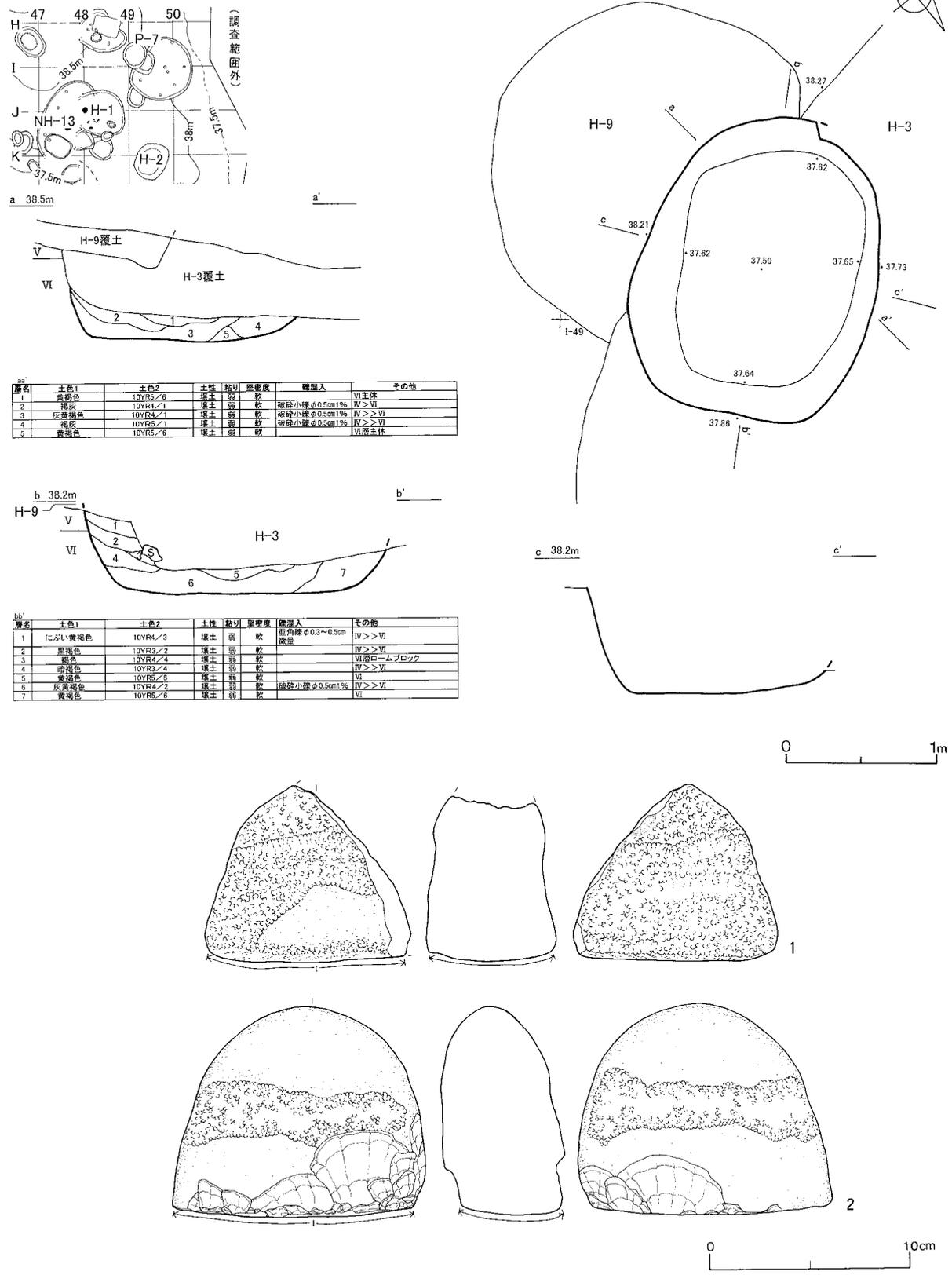
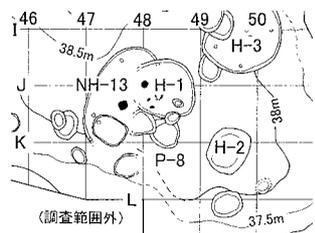
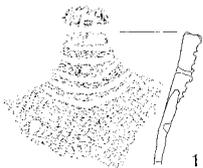


図 - 33 P - 7と遺物

P-8



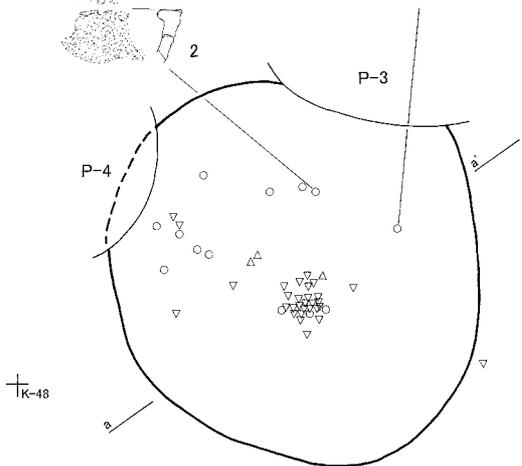
(調査範囲外)



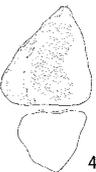
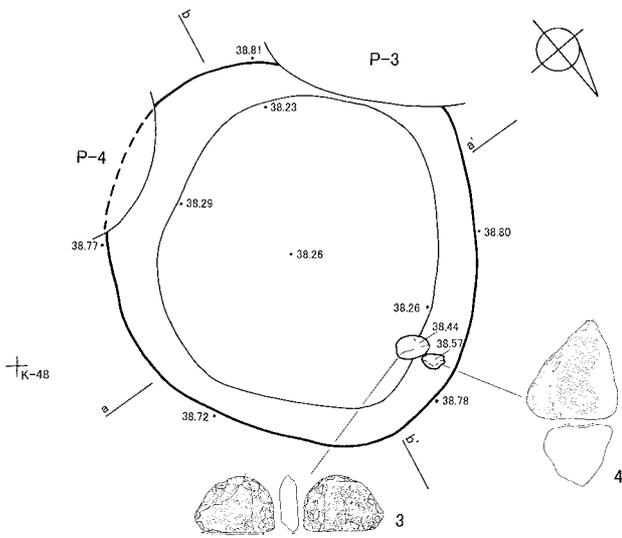
1



2



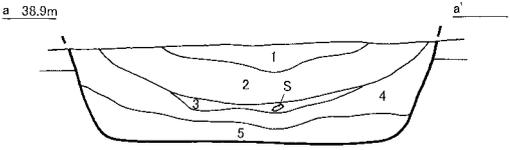
†K-48



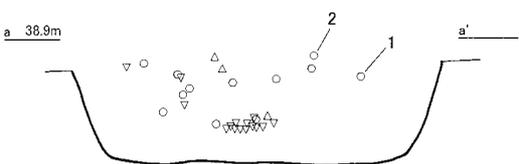
4



3

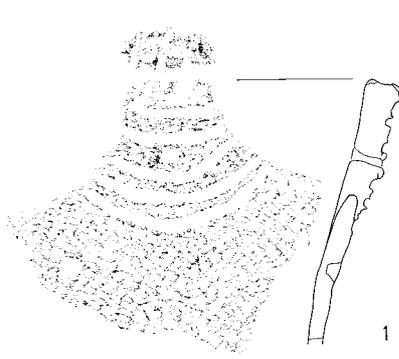


層名	土色1	土色2	土性	粘り	硬さ	層混入	その他
1	黄褐色	10YR5/6	壤土	粘	軟		VI
2	褐色	10YR4/1	壤土	粘	軟		IV > VI
3	黒	10YR2/1	壤土	粘	軟		IV未体
4	灰黄褐色	10YR4/2	壤土	粘	軟		
5	黄褐色	10YR5/6	壤土	粘	軟		VI > IV

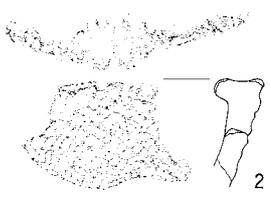


凡例
 土器 ○
 剥片 △
 礫 ▼

0 1m

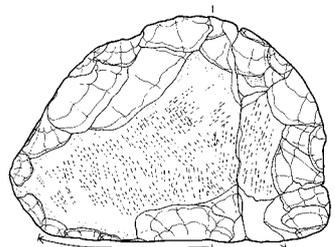


1



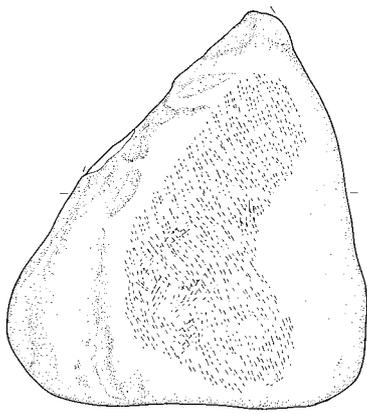
2

0 5cm



3

0 10cm



4

0 10cm

図 - 34 P - 8 と遺物

P-11

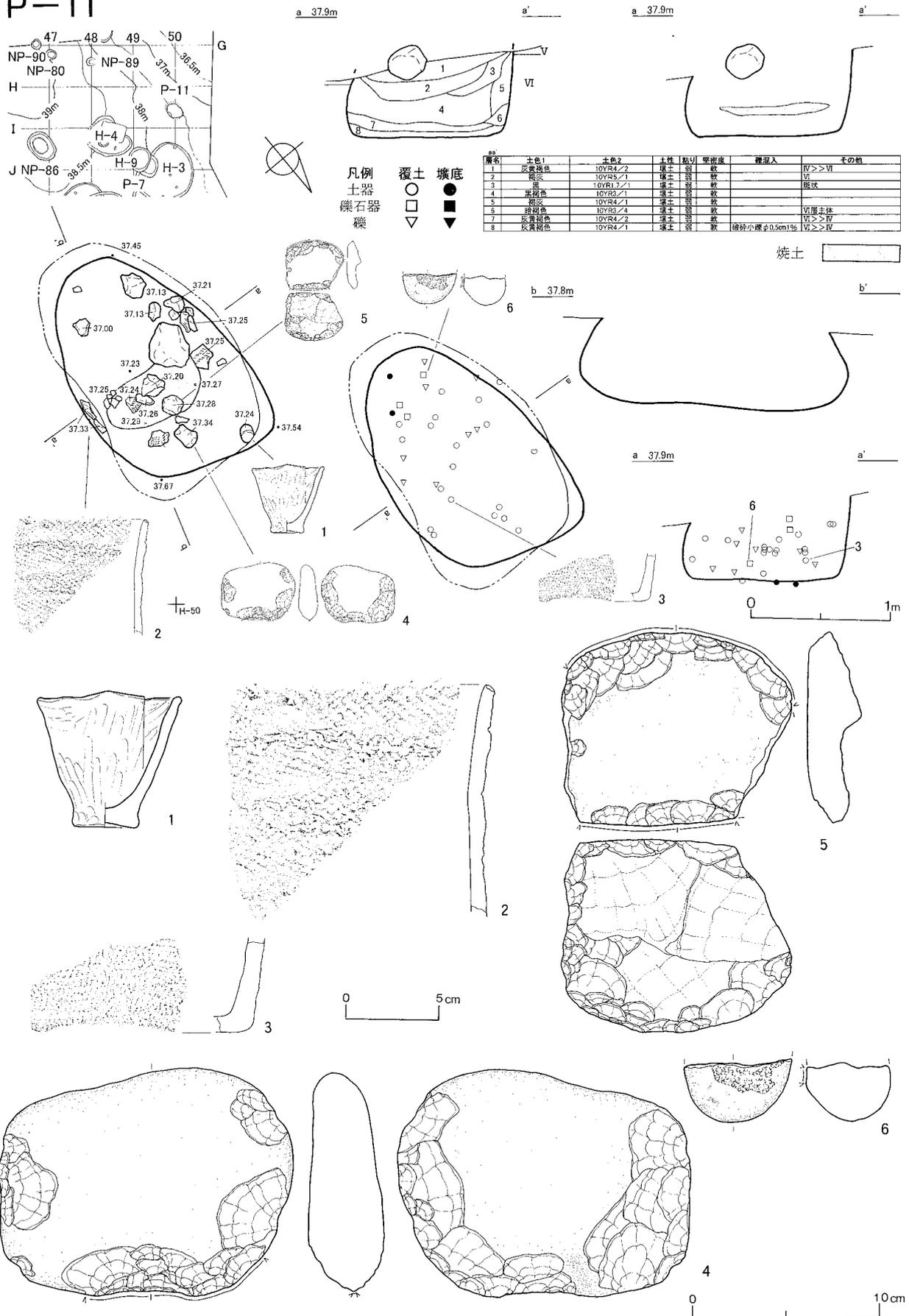


図 - 35 P-11と遺物(1)

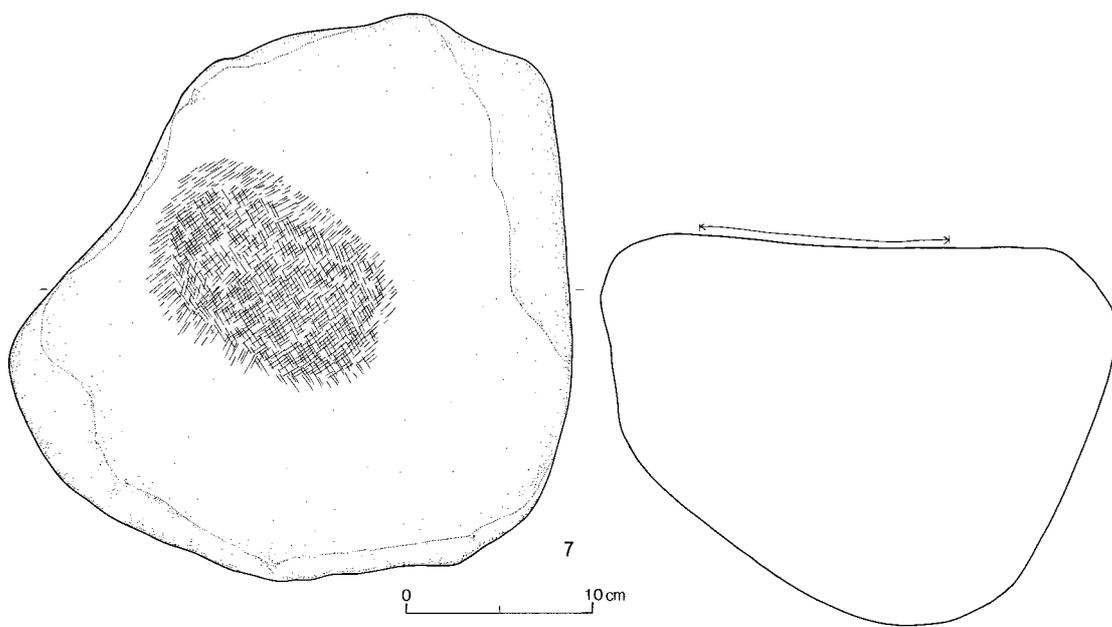
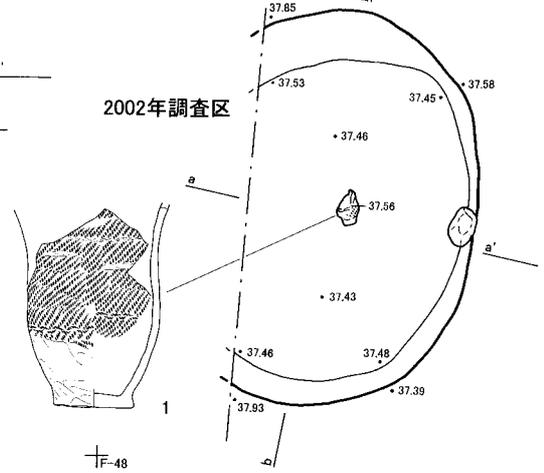
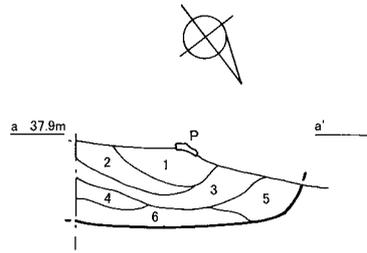
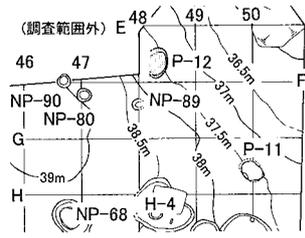
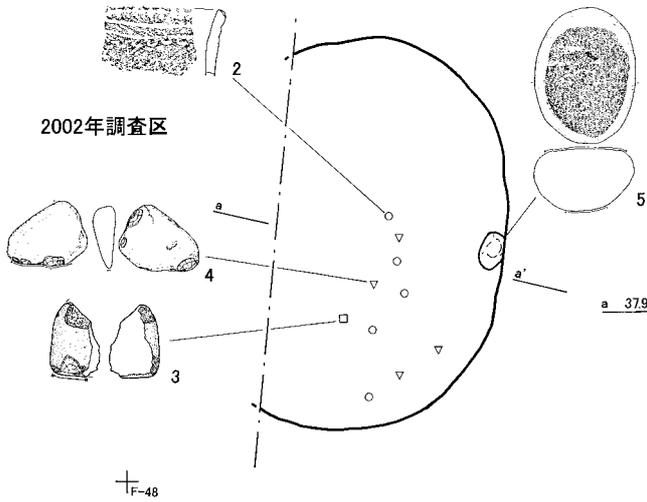


図 - 36 P - 11の遺物(2)

P-12



層名	土色1	土色2	土質	粘引	堅硬度	埋入物	その他
1	黒褐色	10YR3/1	壤土	弱	軟		VI >> IV 炭化物残量
2	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟		VI > IV 炭状
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	壤土	弱	軟	磁種小礫φ0.5~1.0cm10%	IV+VI
4	褐色	10YR4/1	壤土	弱	軟	磁種小礫φ0.5~2.0cm10%	VI >> IV
5	暗褐色	10YR3/4	壤土	弱	軟	磁種小礫φ0.5~1.0cm1%	IV+VI
6	灰黄褐色	10YR4/2	壤土	弱	軟	磁種小礫φ0.5cm1%	VI > IV



凡例
 覆土 ○
 土器 □
 礫石器 ▽
 礫

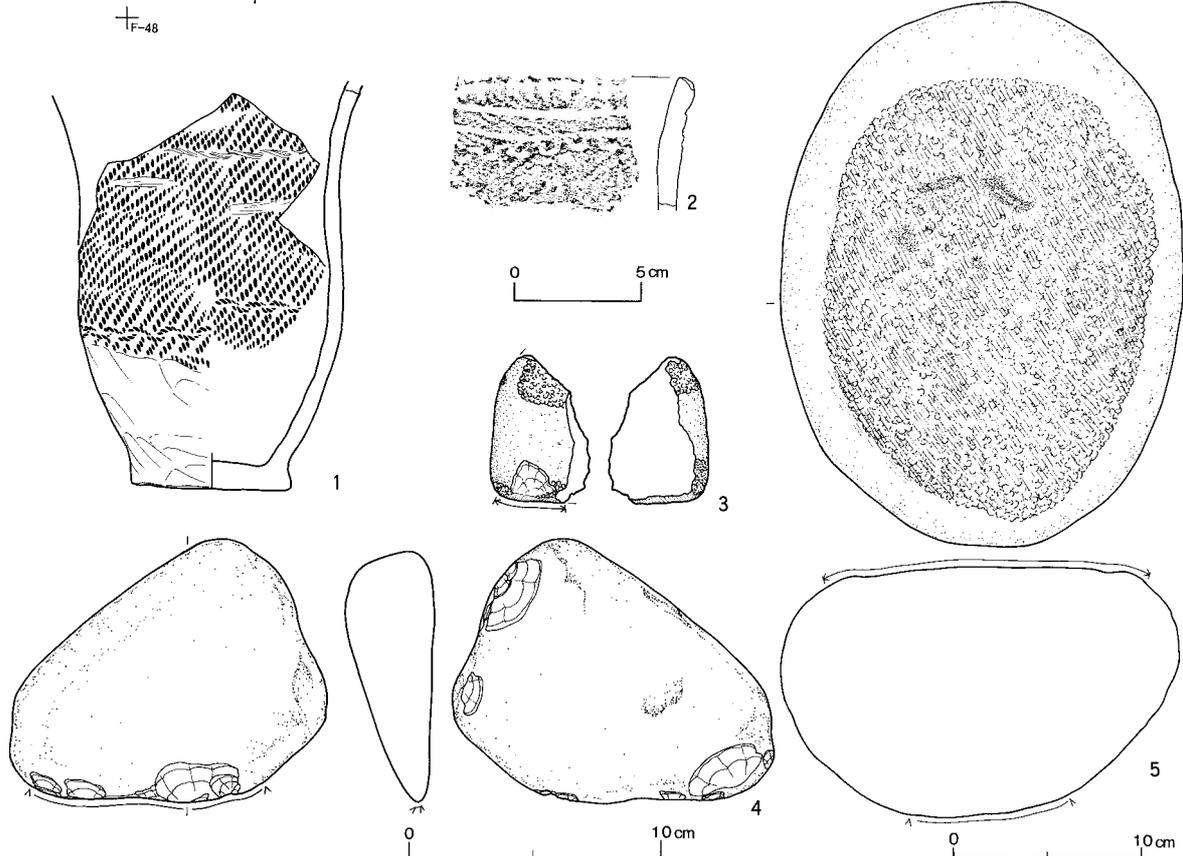
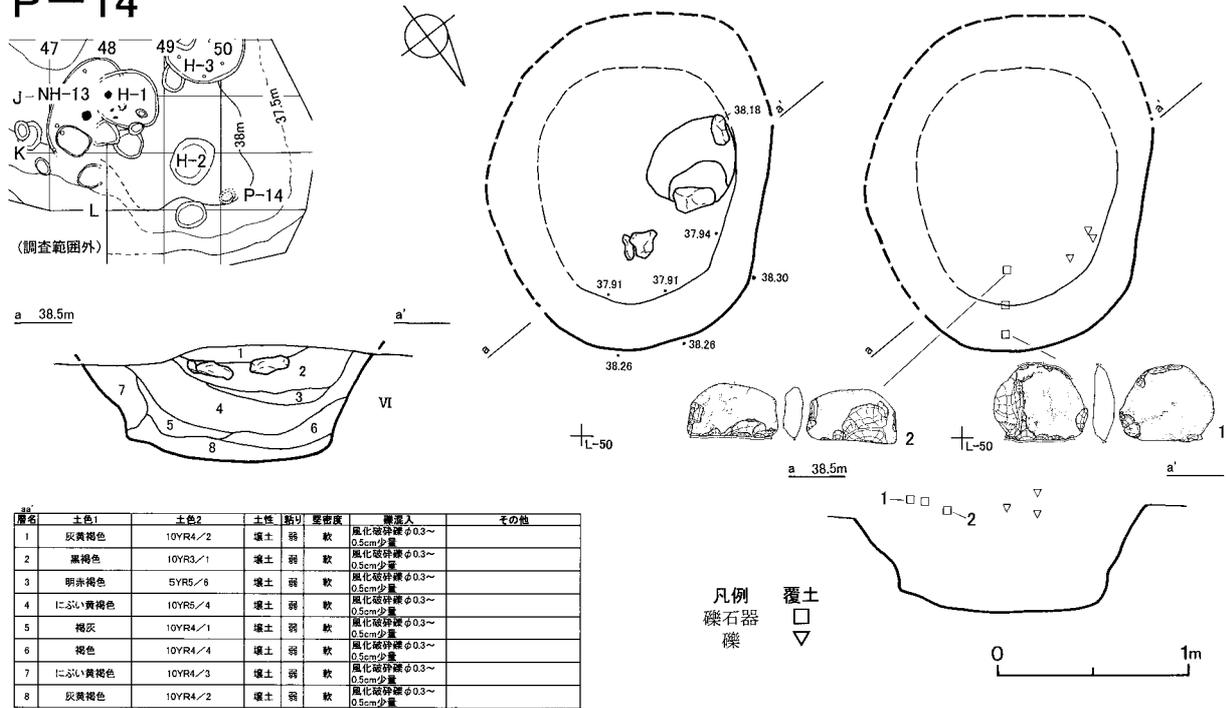


図 - 37 P-12と遺物(1)

P-14



P-17

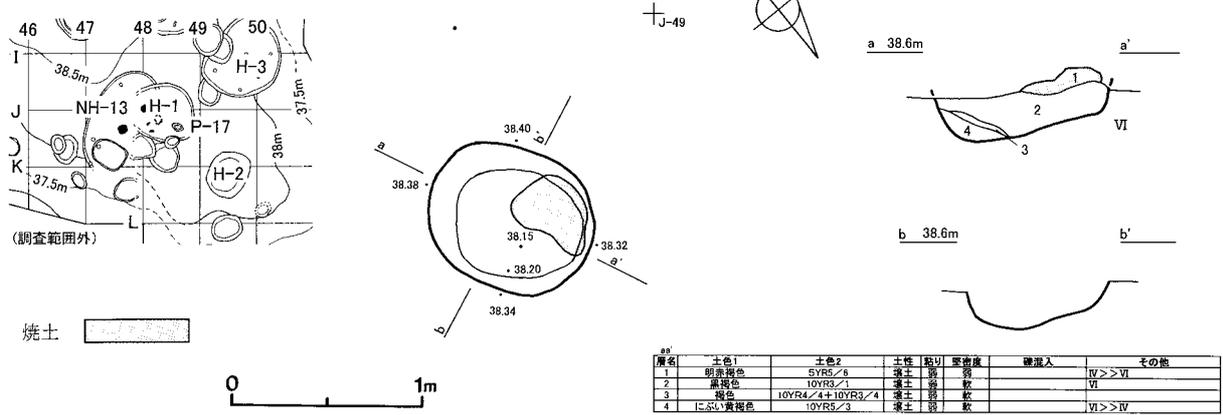
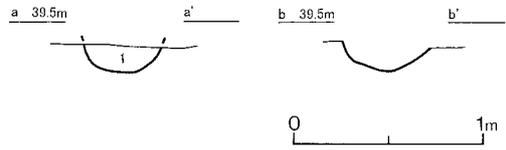
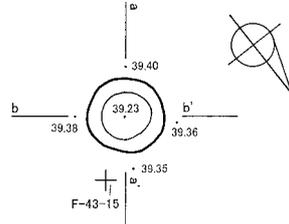
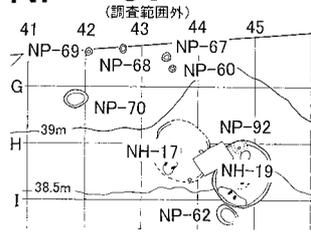
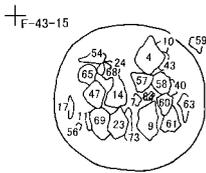
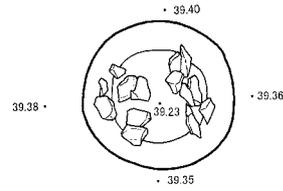
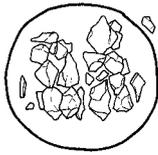


図 - 38 P - 14と遺物、P - 17

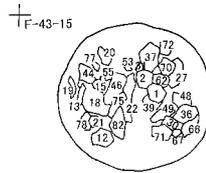
NP-60



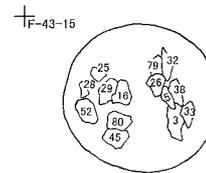
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色土	10YR1.7/1	壤土	弱	軟	



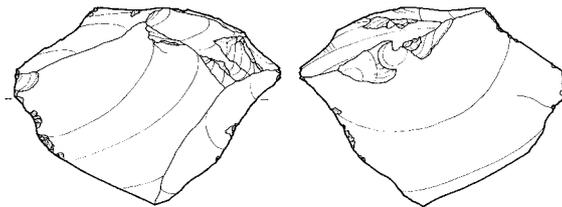
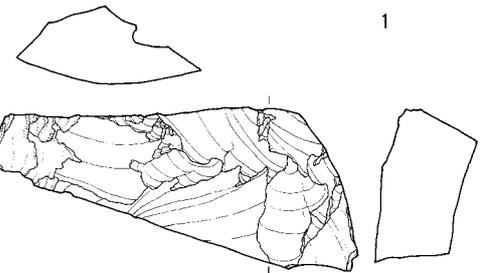
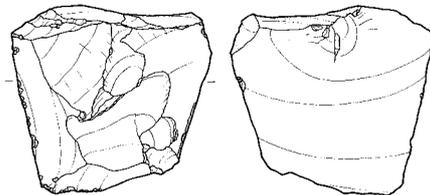
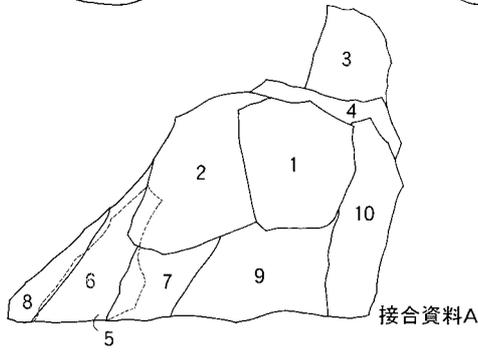
1回目



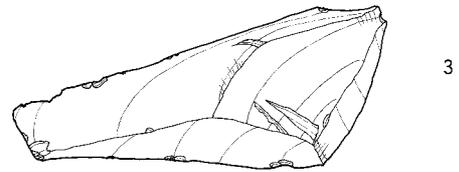
2回目



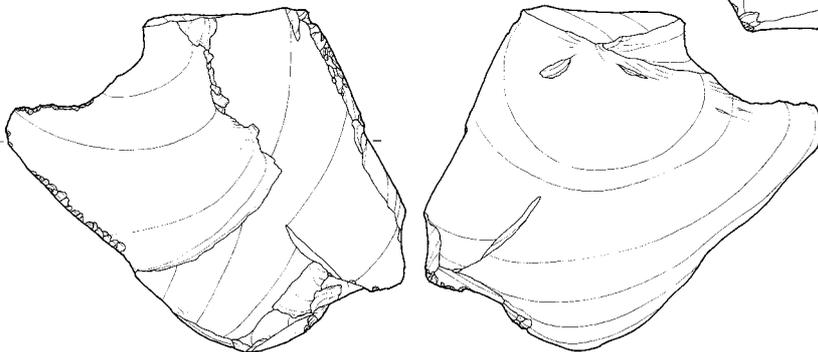
3回目



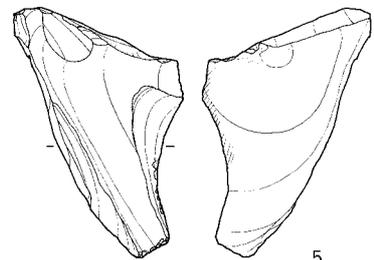
2



3



4



5



図 - 39 NP - 60と遺物 (1)

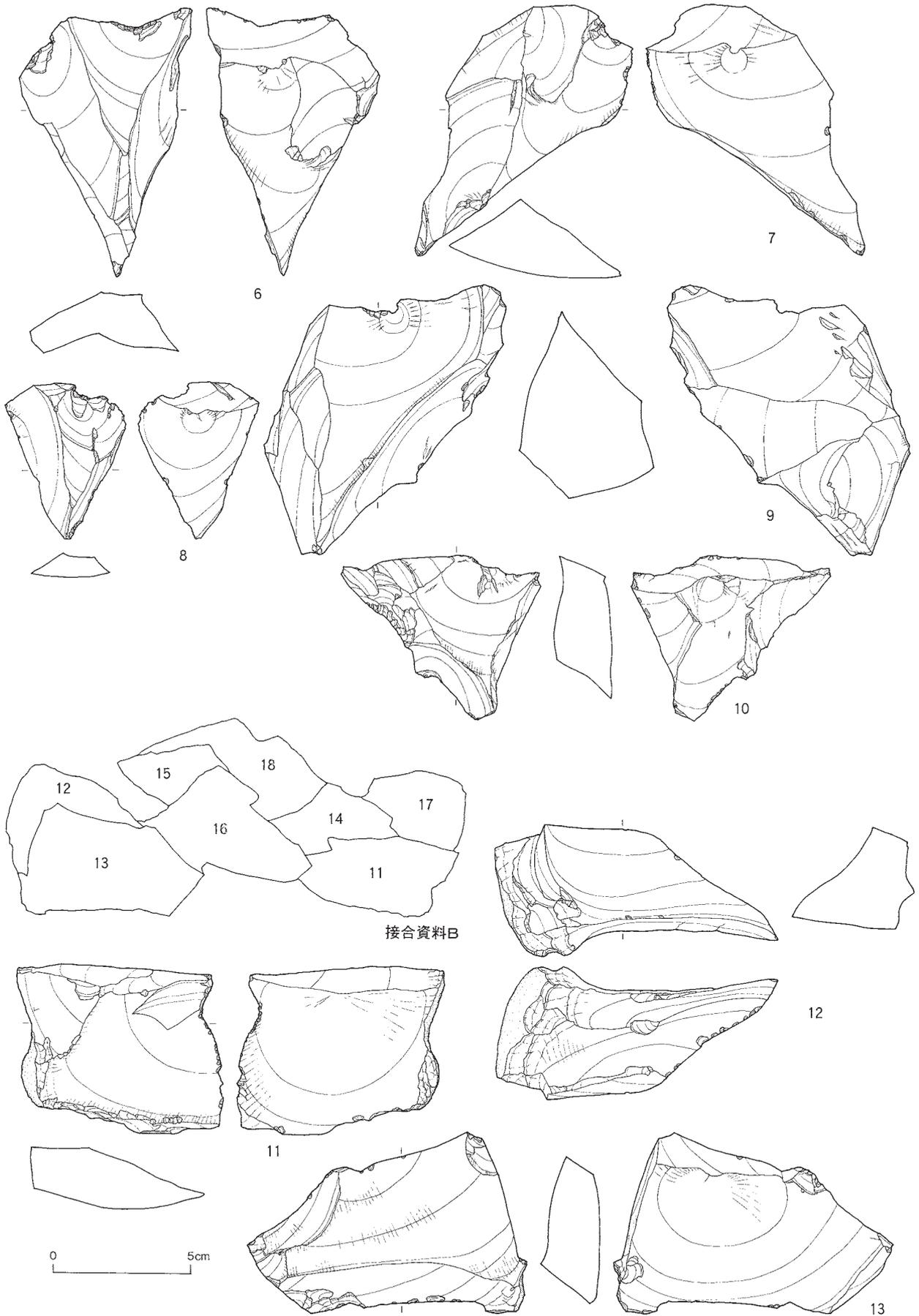


図 - 40 NP - 60の遺物 (2)

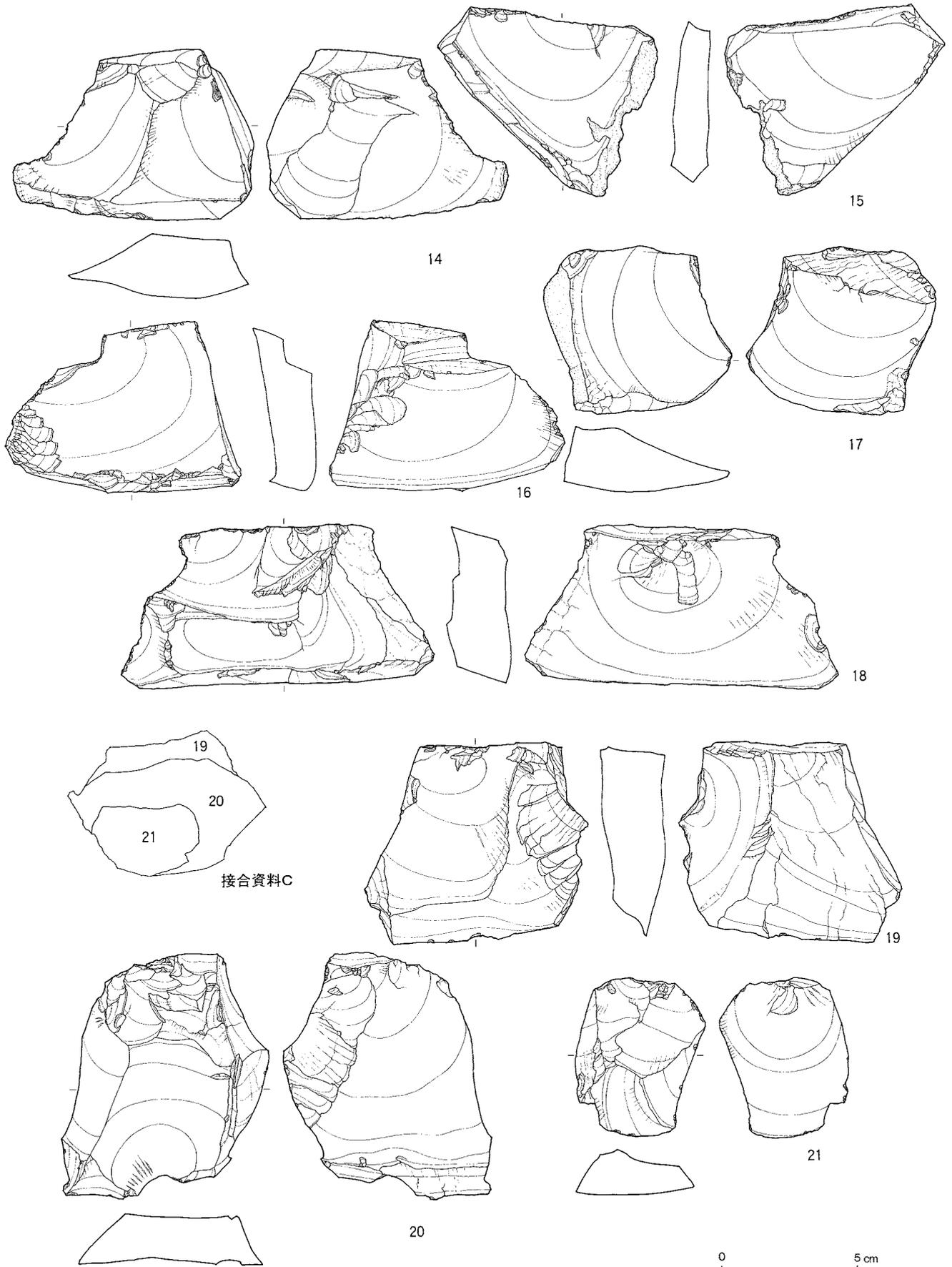


図 - 41 NP - 60の遺物 (3)

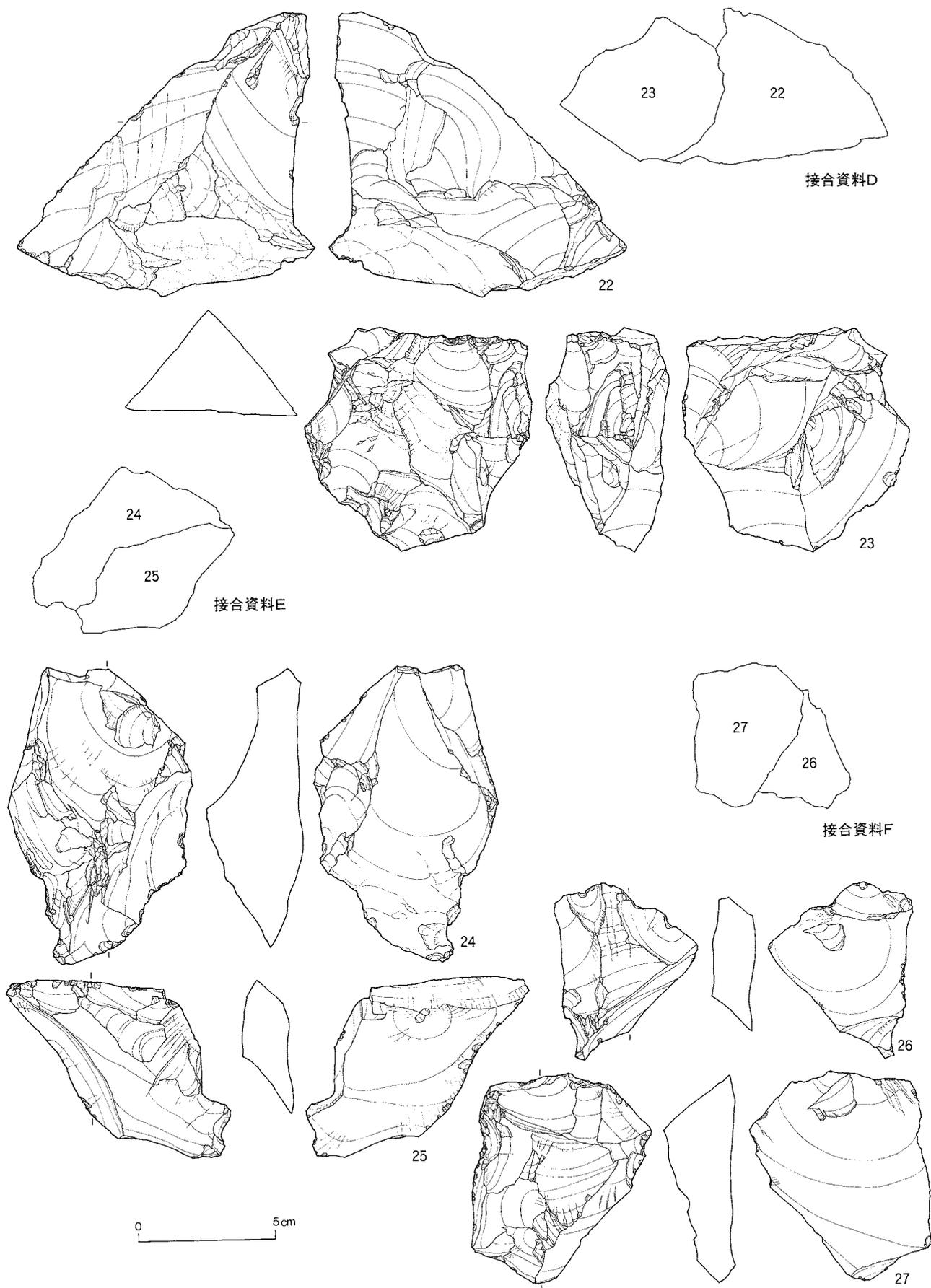


図 - 42 NP - 60の遺物 (4)

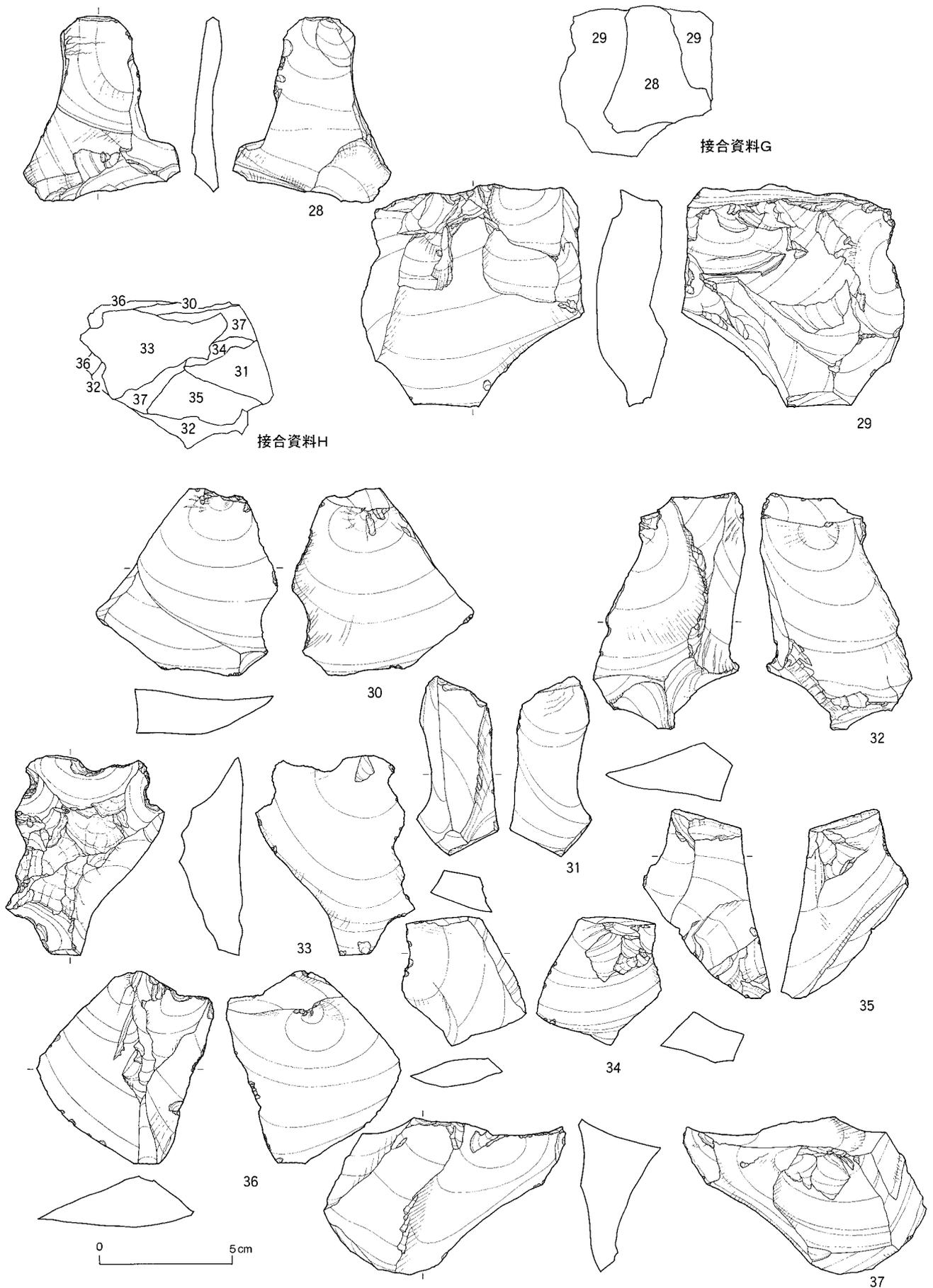


図 - 43 NP - 60の遺物 (5)

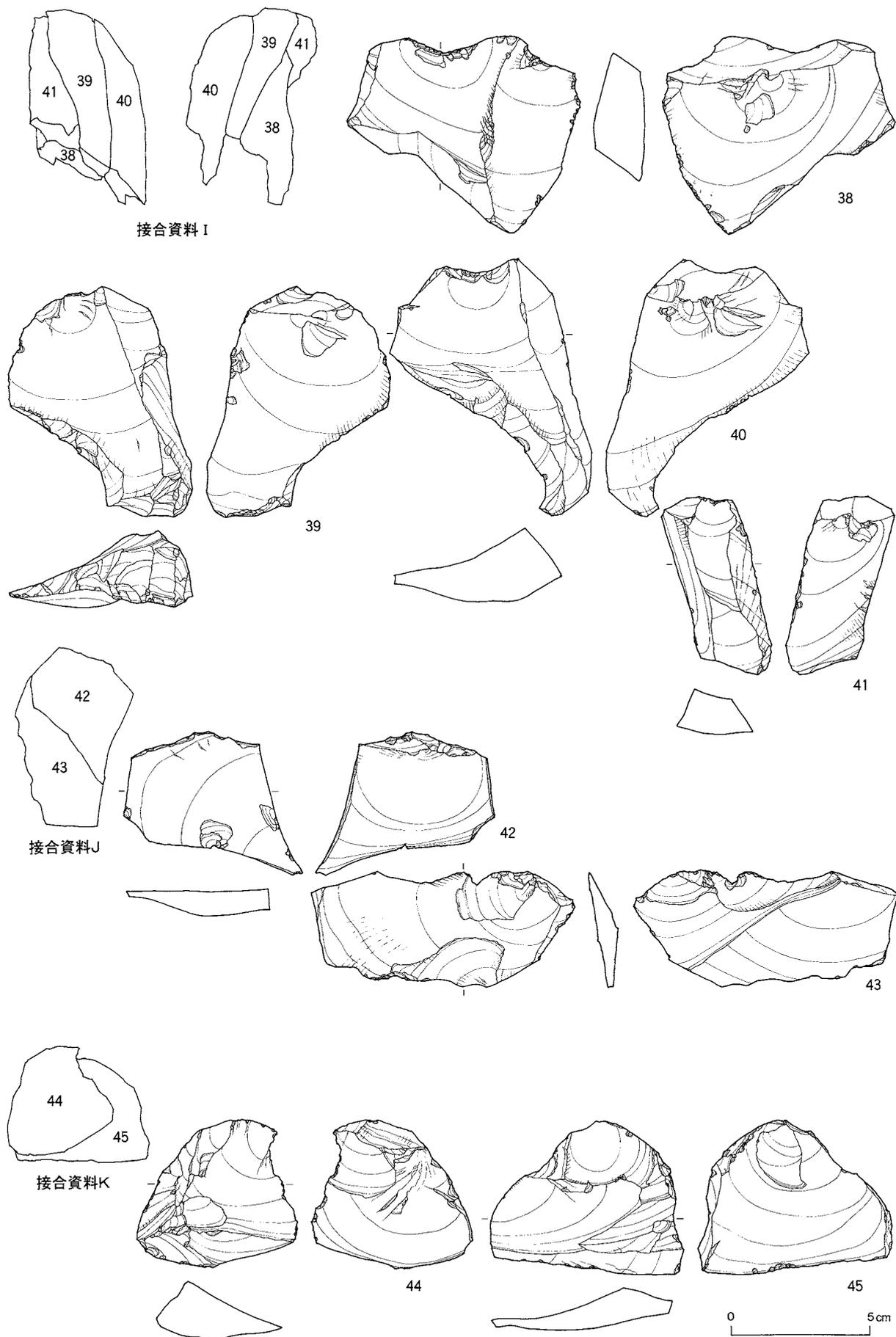


図 - 44 NP - 60の遺物 (6)

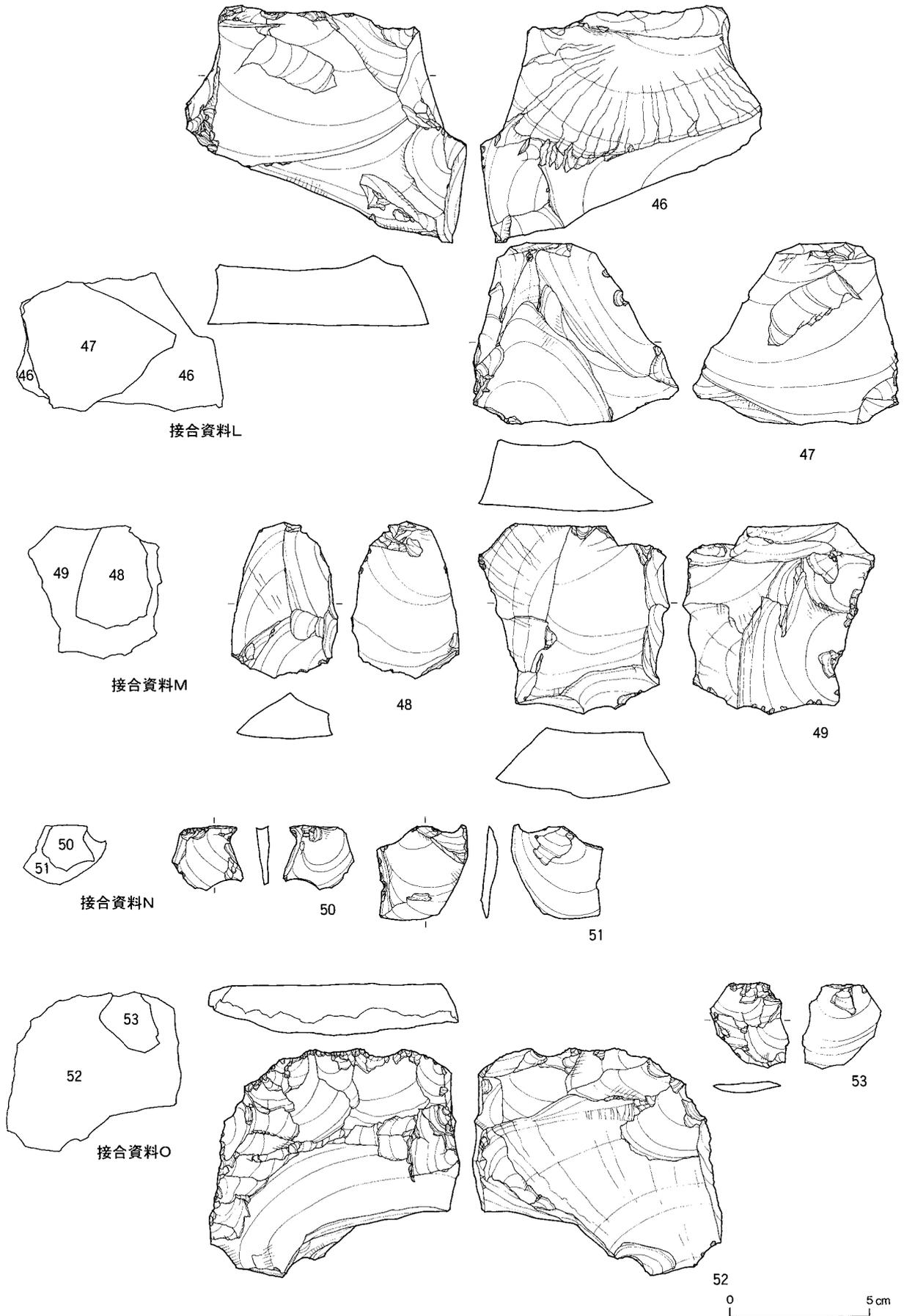


図 - 45 NP - 60の遺物 (7)

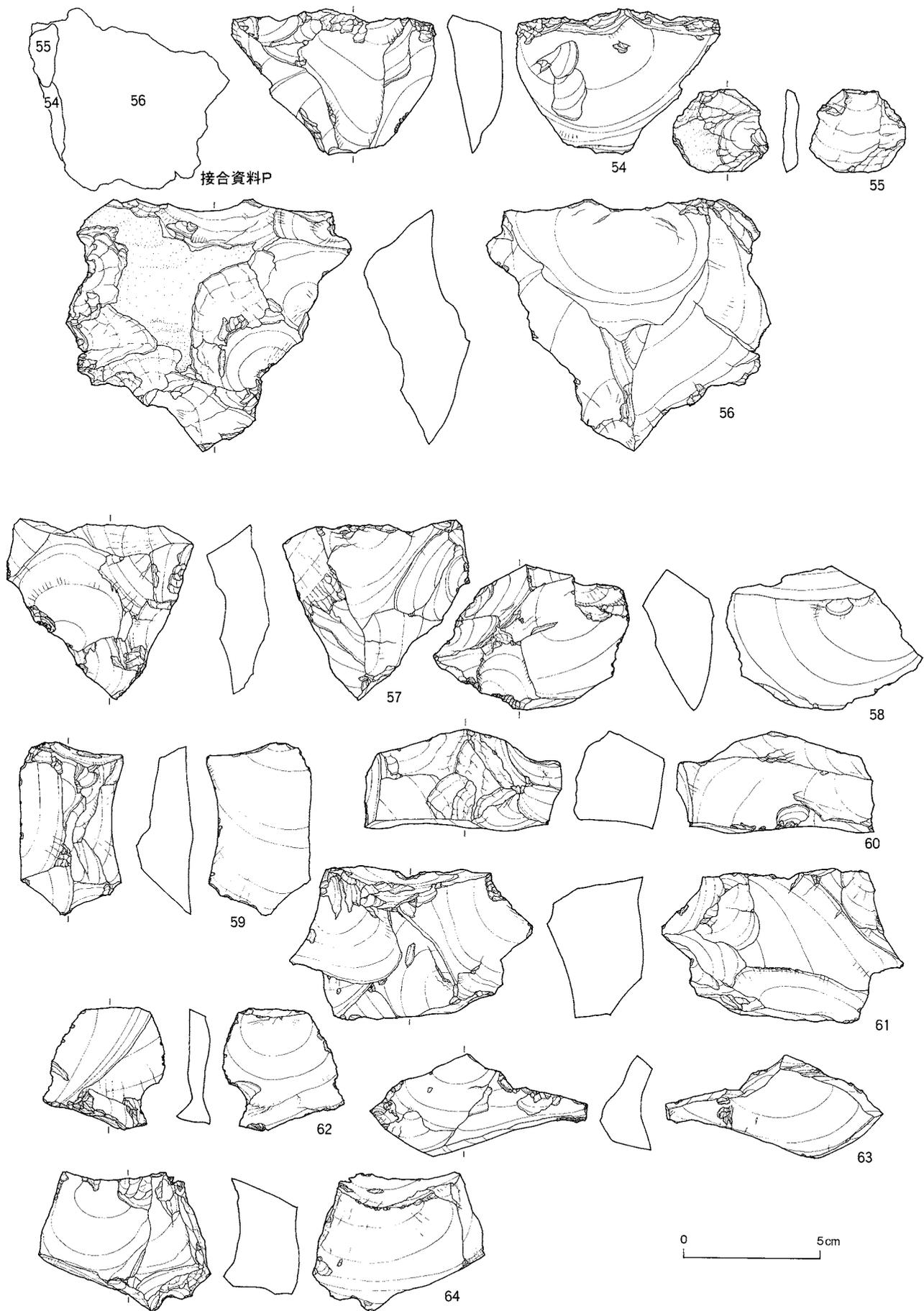


図 - 46 NP - 60の遺物 (8)

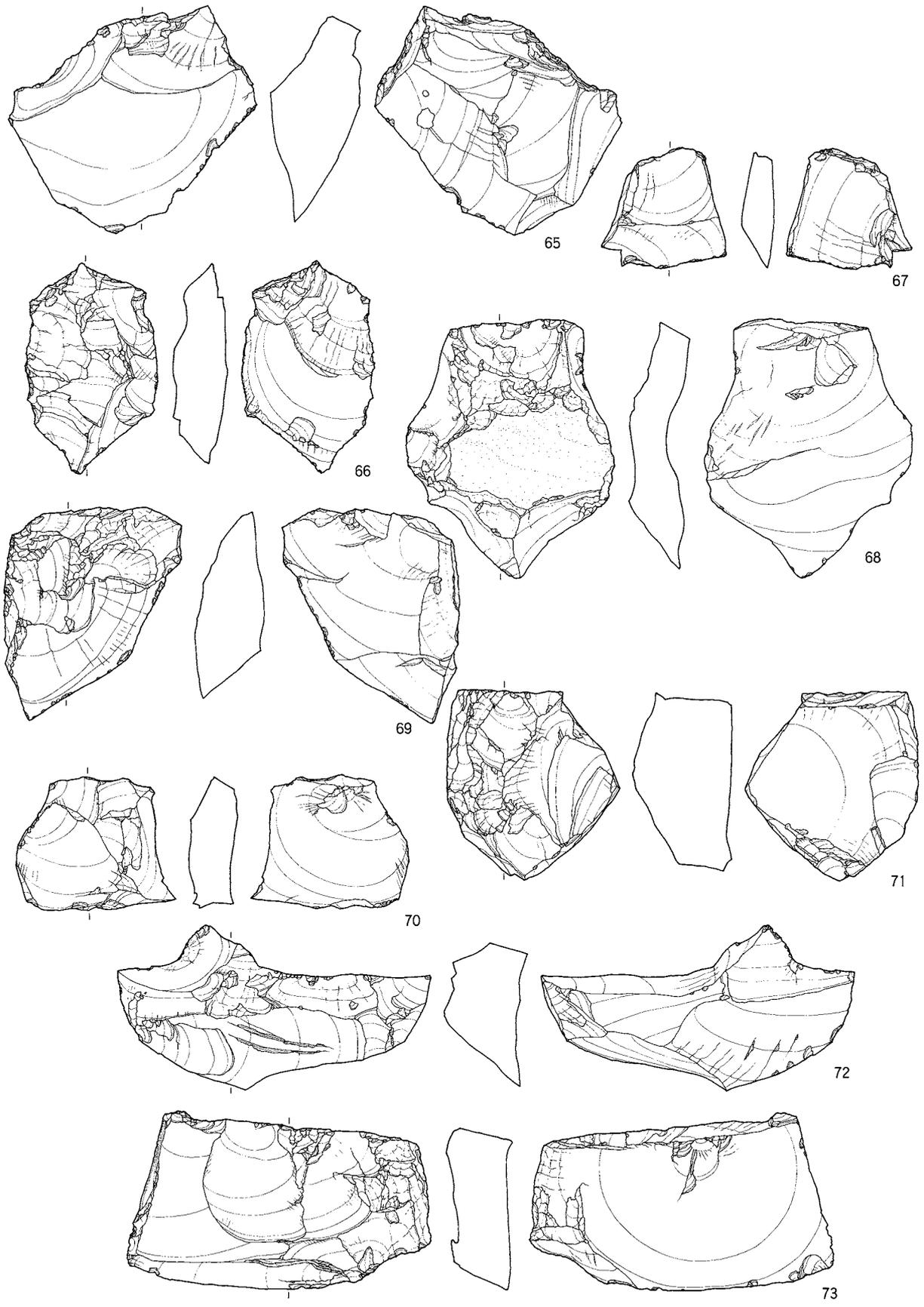


図 - 47 NP - 60の遺物 (9)

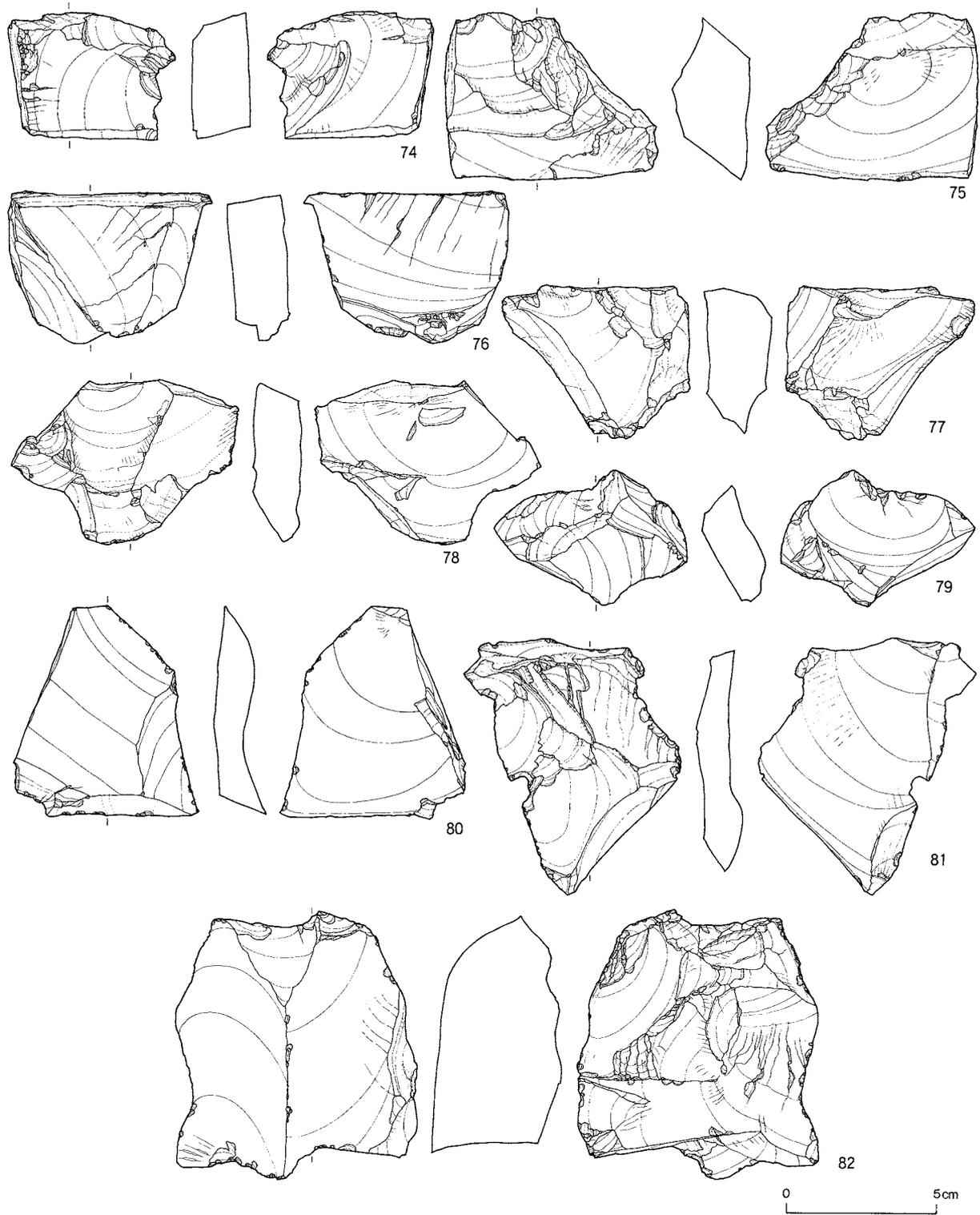
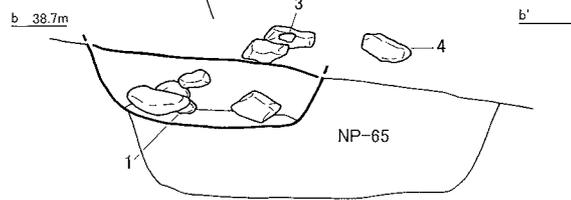
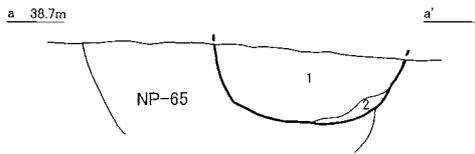
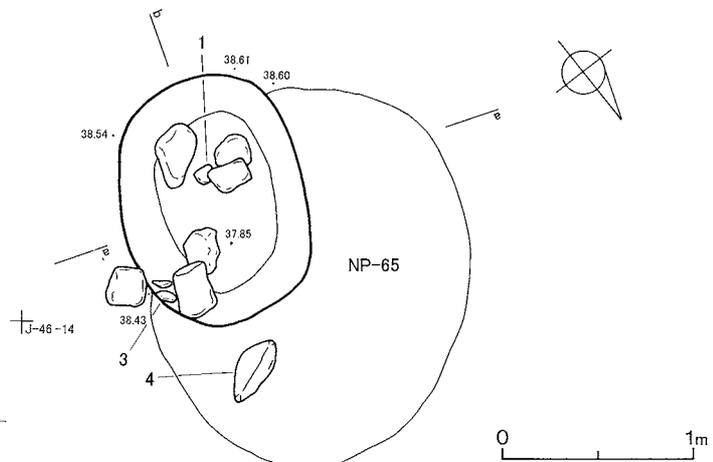
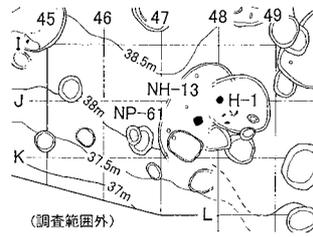
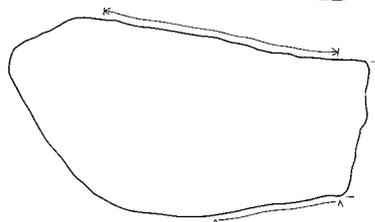
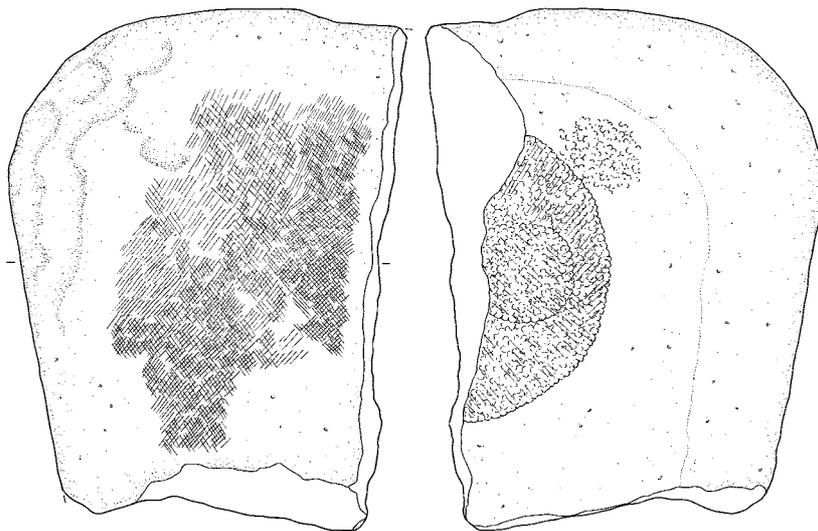
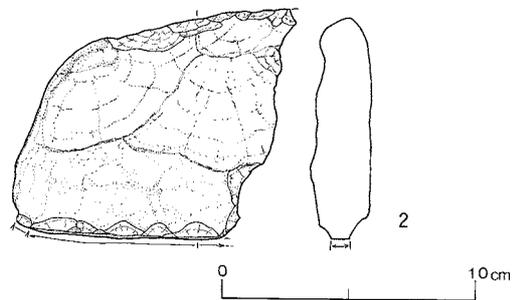
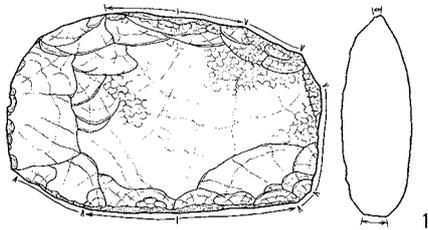


図 - 48 NP - 60の遺物 (10)

NP-61



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色土	10YR2/1	壤土	中	堅	IV > V + VI
2	暗褐色土	10YR3/3	壤土	中	堅	IV > V



0 10cm

図 - 49 NP - 61と遺物(1)

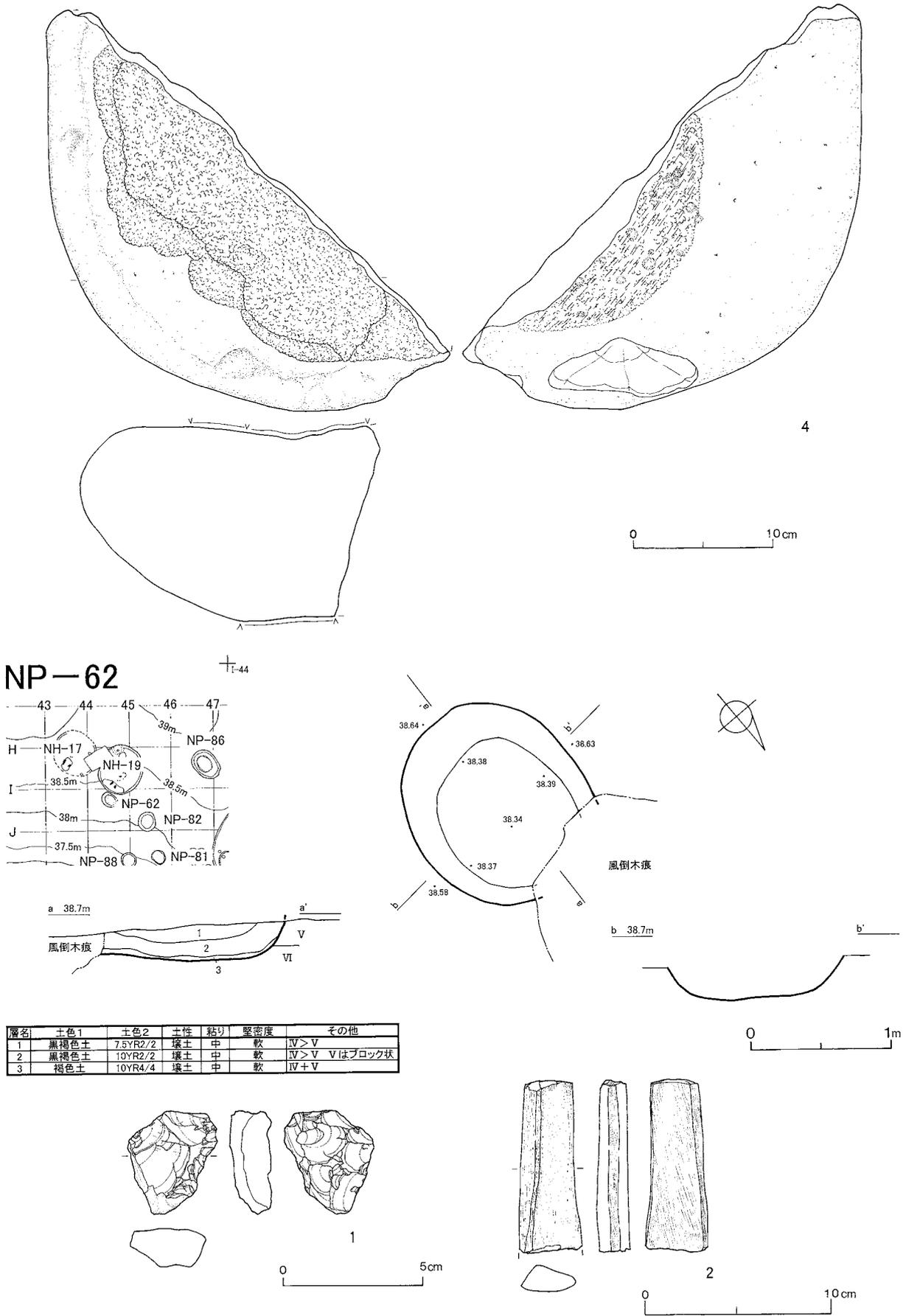
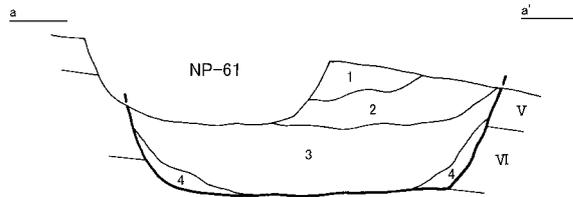
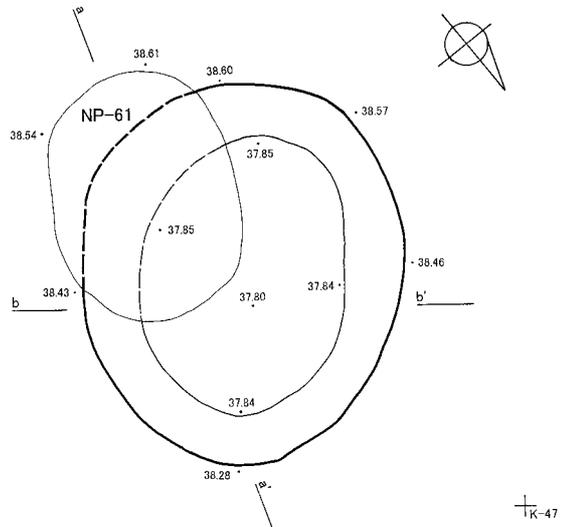
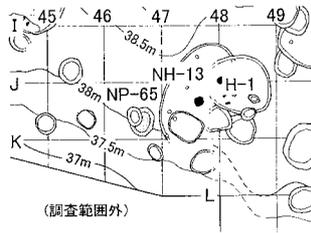
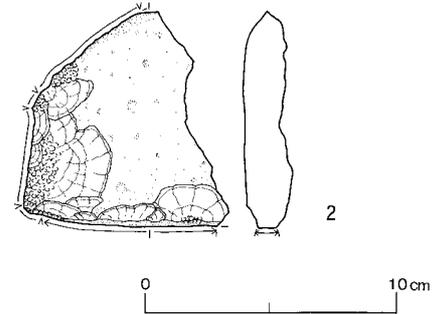
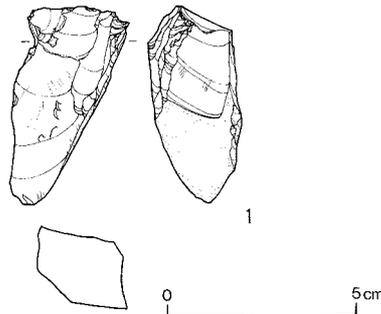


図 - 50 NP - 61の遺物 (2) NP - 62と遺物

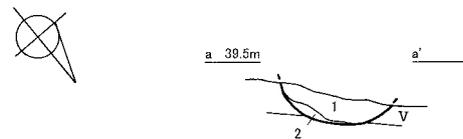
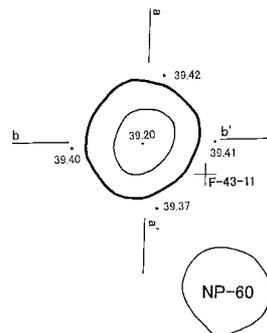
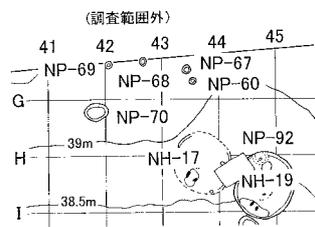
NP-65



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2	壤土	中	軟	IV>V+VI
2	黒色土	7.5YR2/1	壤土	中	軟	IV>V+VI
3	暗褐色土	10YR3/3	壤土	中	軟	IV>V>VI
4	褐色土	10YR4/4	壤土	中	軟	IV+V
5	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	軟	IV>V>VI



NP-67



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR3/1	壤土	弱	堅	IV>V
2	褐色土	10YR4/4	壤土	弱	堅	IV>V

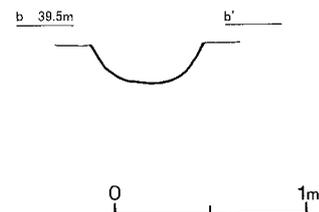
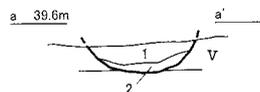
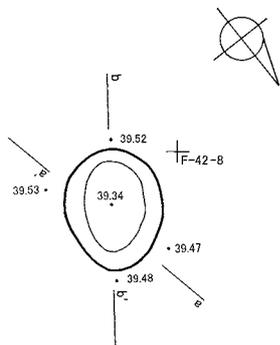
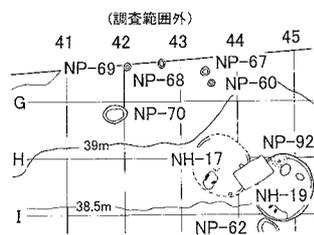


図 - 51 NP - 65と遺物、NP - 67

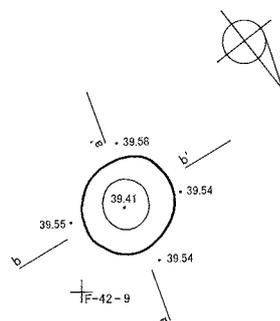
NP-68



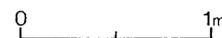
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2	壤土	弱	堅	
2	褐色土	10YR4/4	壤土	弱	堅	



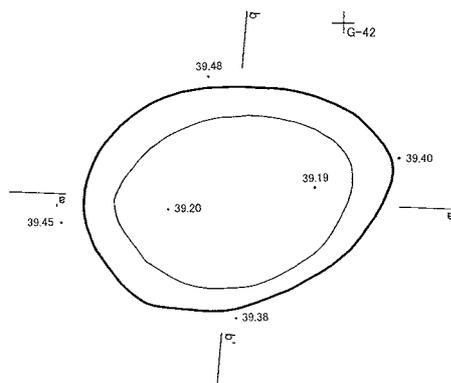
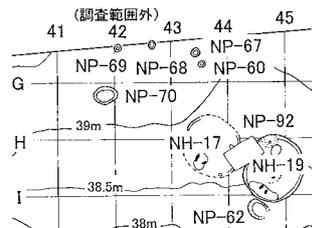
NP-69



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2	壤土	弱	堅	IV > V
2	暗褐色土	10YR3/3	壤土	弱	堅	IV > V



NP-70

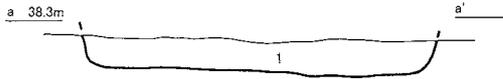
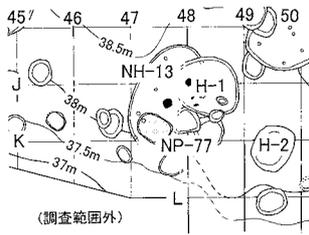


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色土	10YR3/3	壤土	弱	堅	IV + V
2	黒褐色土	10YR2/2	壤土	弱	堅	IV > V Vは斑状
3	暗褐色土	10YR2/3	壤土	中	堅	IV + V

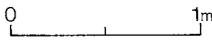


図 - 52 NP - 68 ・ 69 ・ 70

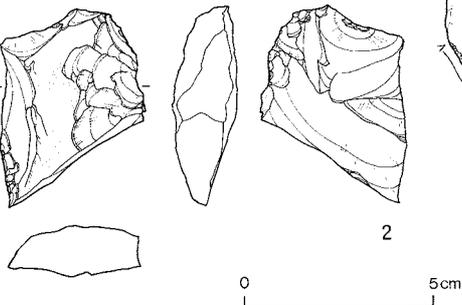
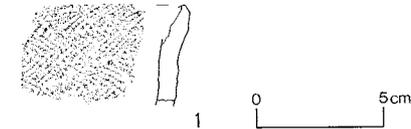
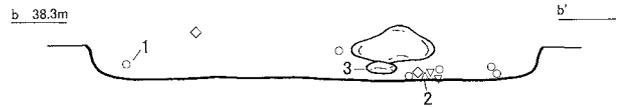
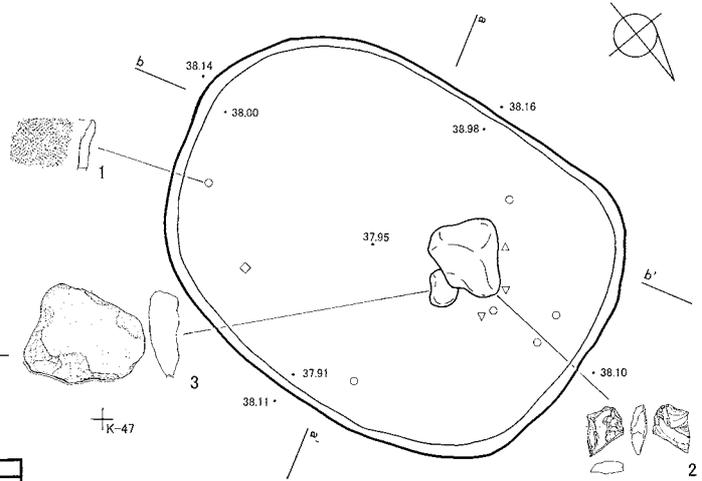
NP-77



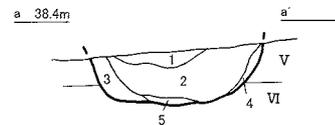
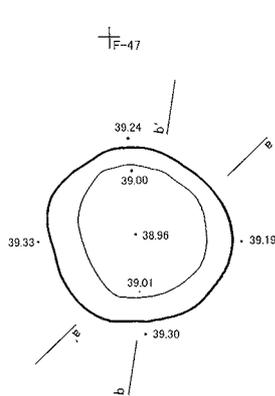
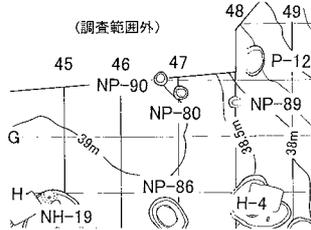
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色土	10YR3/3	壤土	中	堅	V+VI>IV



- 凡例
- 覆土
 - 土器
 - ◇ 剥片石器
 - △ 剥片
 - ▽ 礫



NP-80

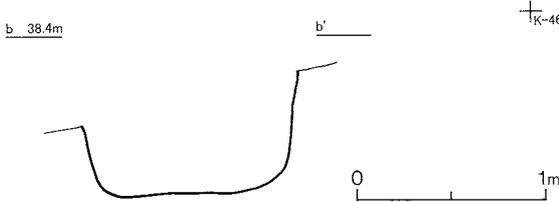
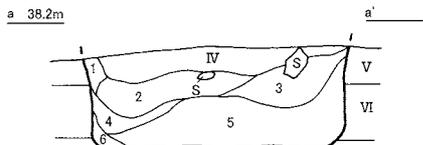
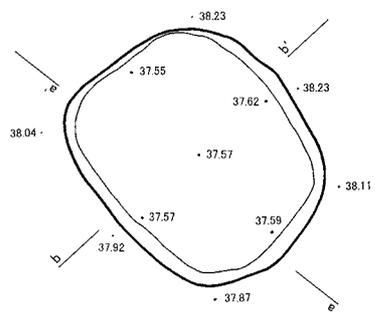
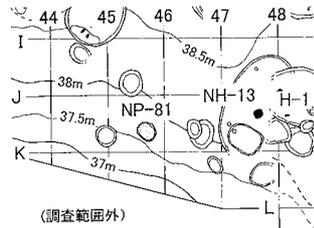


層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色土	7.5YR2/1	壤土	中	しよう	IV>V Vは斑状
2	黒褐色土	10YR2/2	壤土	中	しよう	IV+V
3	にぶい黄褐色土	10YR4/3	壤土	中	しよう	IV+V>VI
4	褐色土	10YR4/4	壤土	中	しよう	IV+V>>VI
5	にぶい黄褐色土	10YR5/4	壤土	中	しよう	VI>IV VIはブロック状



図 - 53 NP-77と遺物、NP-80

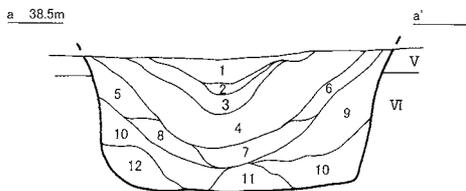
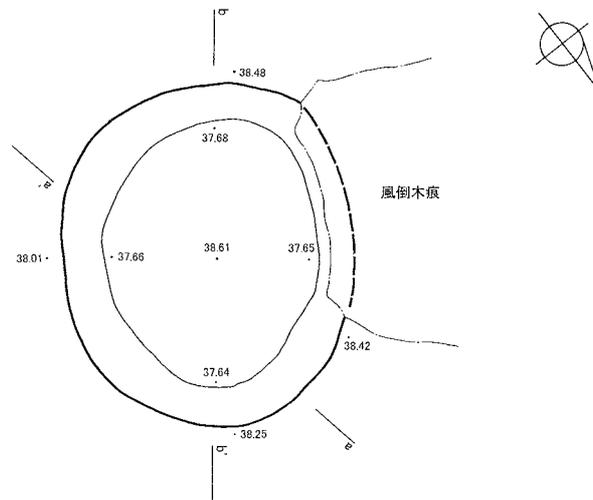
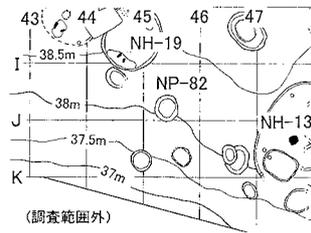
NP-81



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色土	10YR3/3	壤土	中	しよふ	V>IV
2	褐色土	10YR4/4	壤土	中	しよふ	主にV
3	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	しよふ	IV+V
4	黒褐色土	10YR2/3	壤土	中	しよふ	IV>V
5	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	しよふ	IV+V
6	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	軟	IV+V>>VI VIは斑状

図 - 54 NP - 81

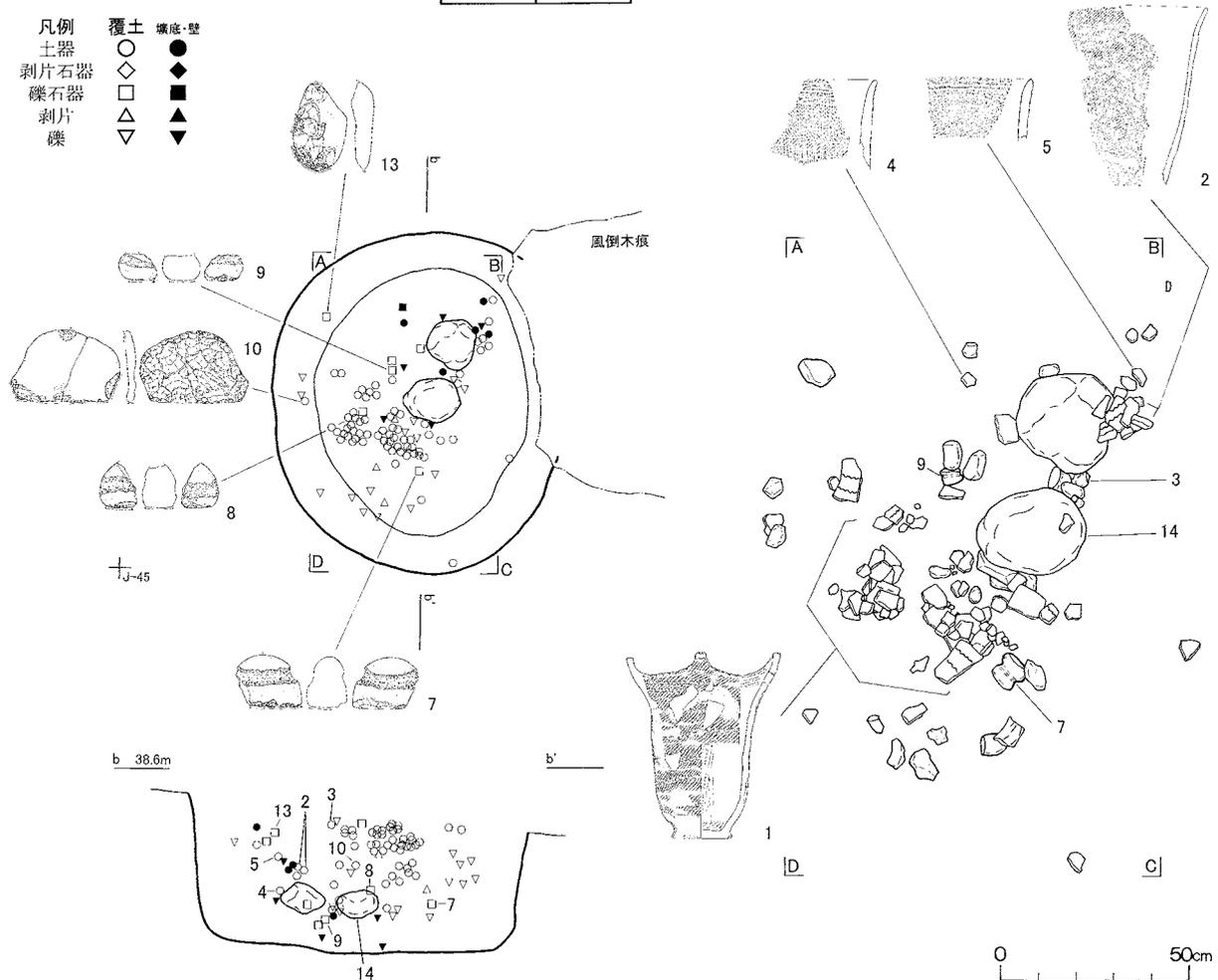
NP-82



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黄褐色土	10YR1.7/1	壤土	中	しろう	IV
2	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	しろう	IV+V Vはブロック状
3	黒褐色土	10YR2/2	壤土	中	しろう	主にIV 炭化物あり
4	褐色土	10YR4/4	壤土	中	しろう	IV+V 炭化物少量
5	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	しろう	IV+V
6	にふい黄褐色土	10YR4/3	壤土	中	しろう	IV+V 炭化物少量
7	黒褐色土	10YR2/3	壤土	中	しろう	IV+V 炭化物少量
8	黒褐色土	10YR2/3	壤土	中	しろう	IV>V 炭化物微量
9	褐色土	10YR4/3	壤土	中	しろう	V>IV 炭化物少量
10	褐色土	10YR4/4	壤土	中	軟	主にV
11	黒褐色土	10YR2/3	壤土	中	しろう	主にIV
12	褐色土	10YR4/4	壤土	中	軟	V+VI VIはブロック状



- 凡例
- 土器 ○
 - 剥片石器 ◇
 - 礫石器 □
 - 剥片 ▲
 - 礫 ▼
- 覆土 ●
- 竈底・壁 ◆



☒ - 55 NP - 82

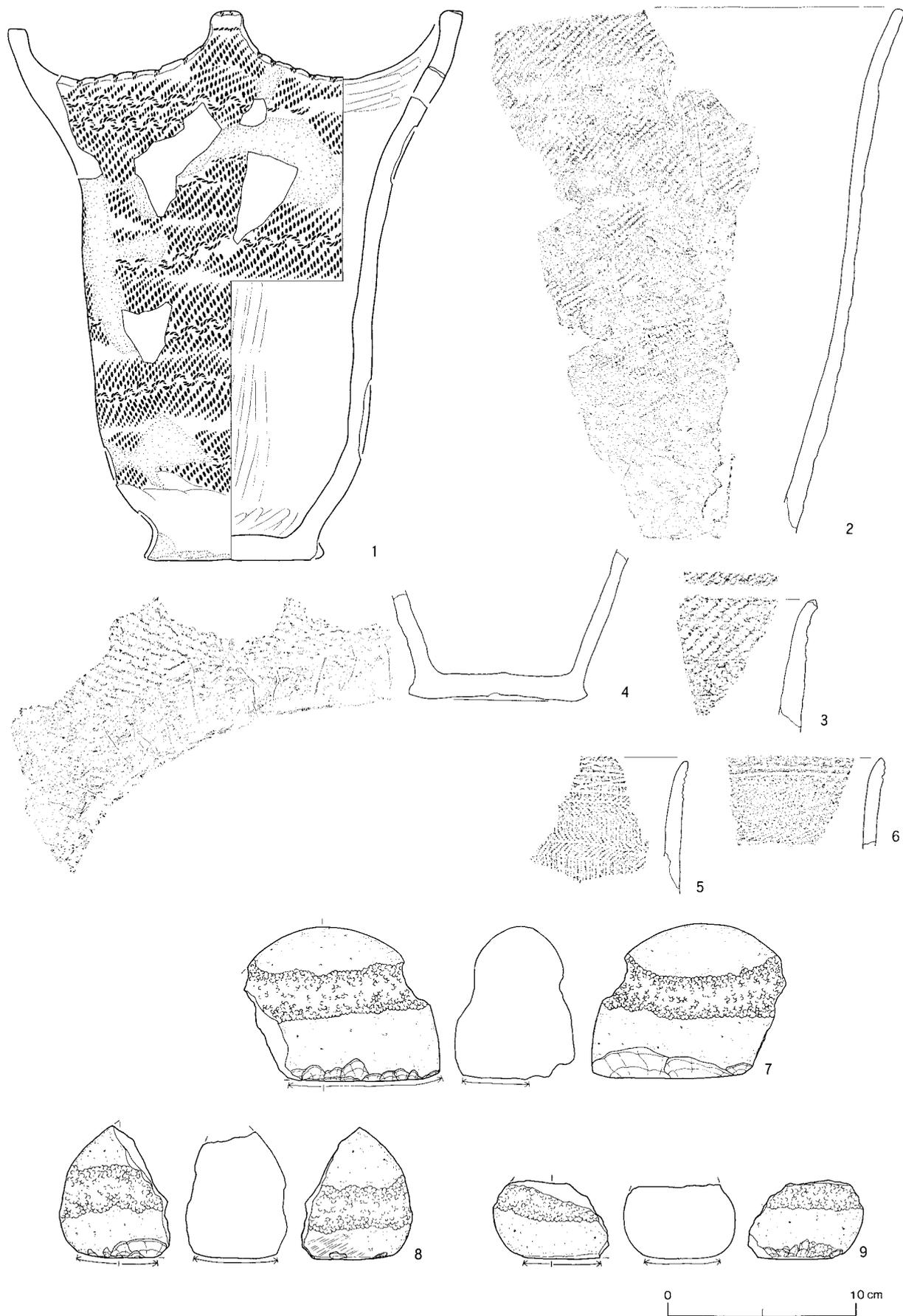


図 - 56 NP - 82の遺物 (1)

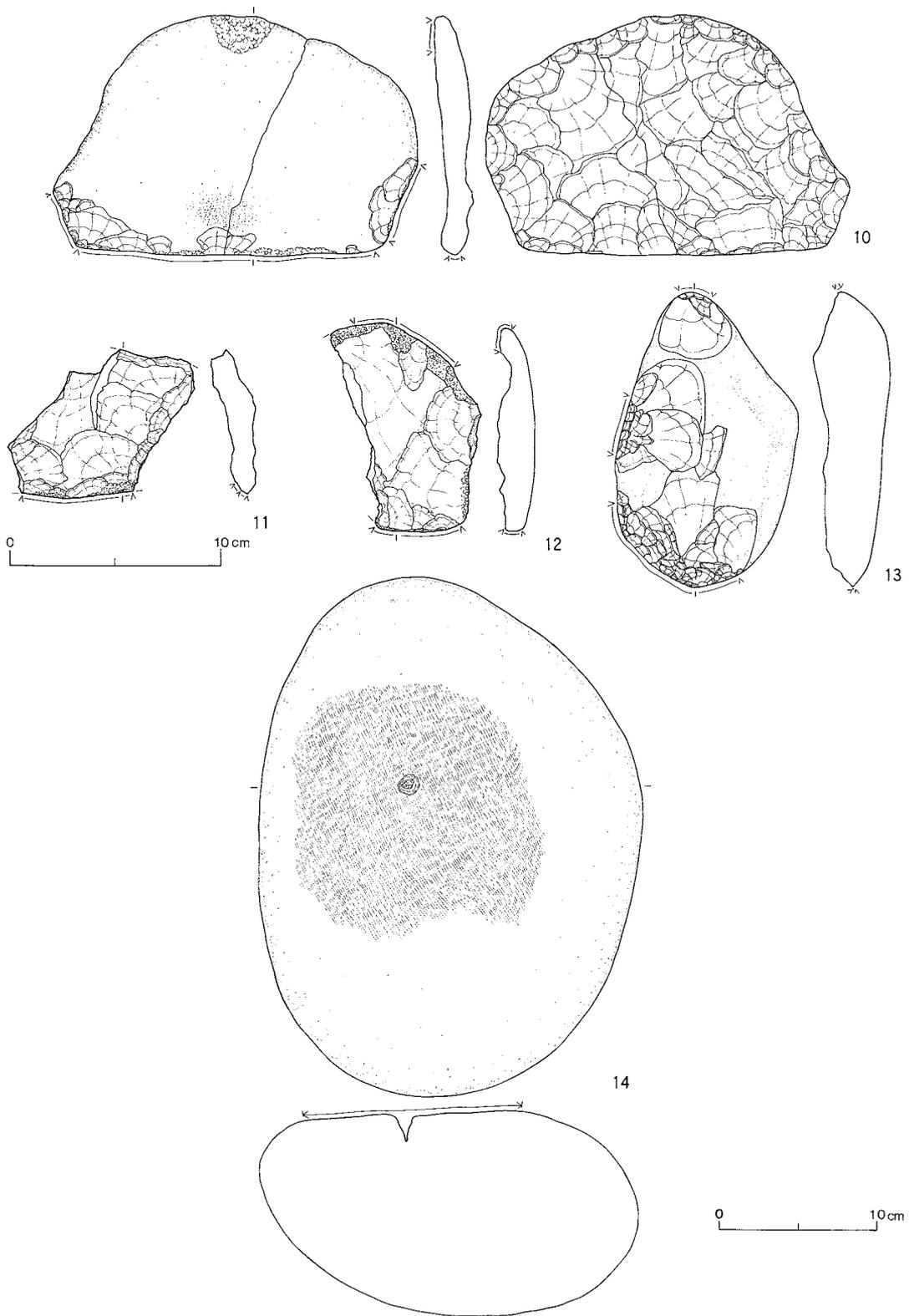
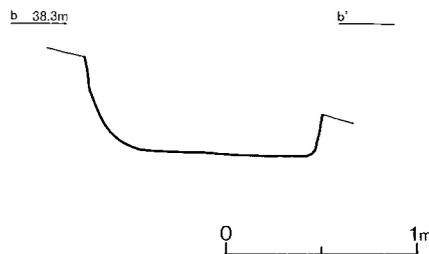
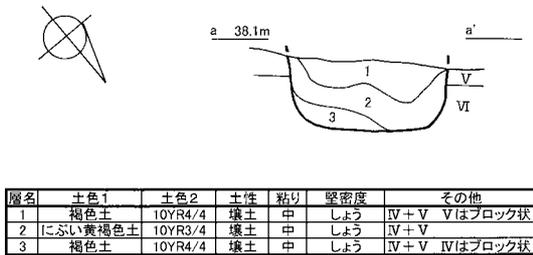
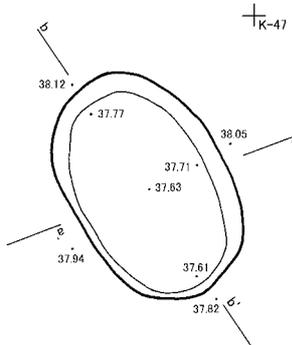
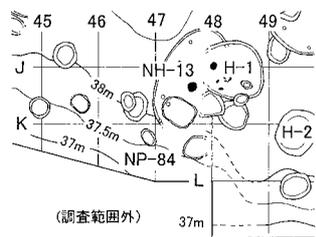
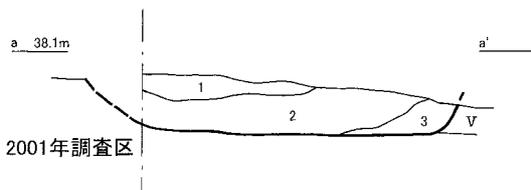
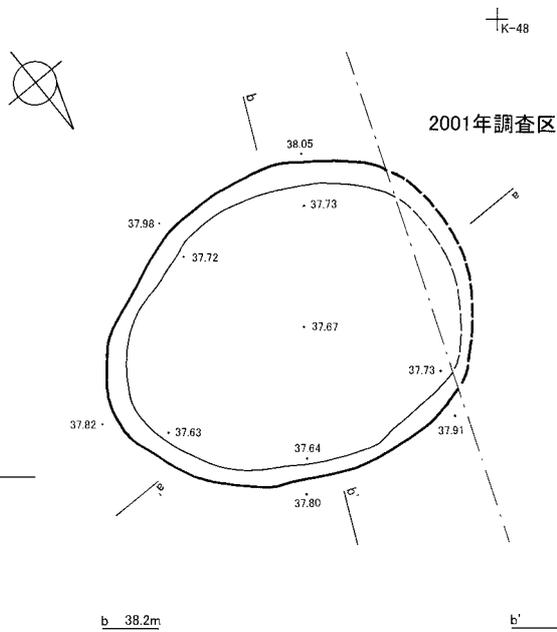
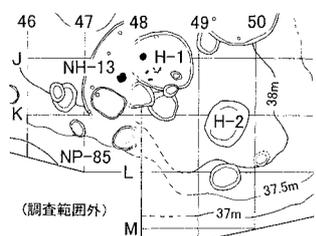


図 - 57 NP - 82の遺物 (2)

NP-84



NP-85



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色土	10YR2/2	壤土	中	しろう	IV+V
2	にぶい黄褐色土	10YR4/3	壤土	中	しろう	V>IV
3	褐色土	10YR4/6	壤土	中	しろう	V+VI>IV

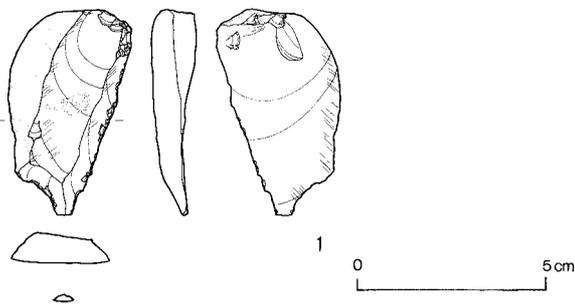
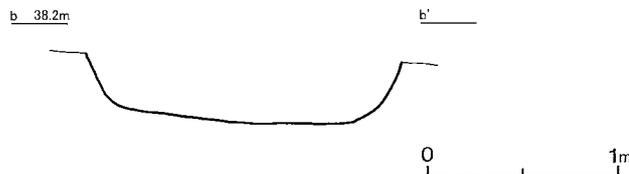
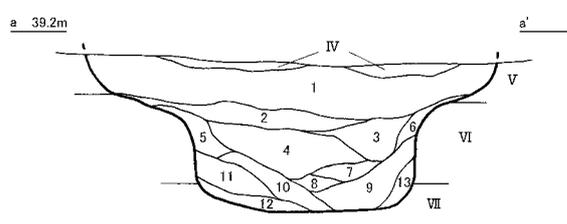
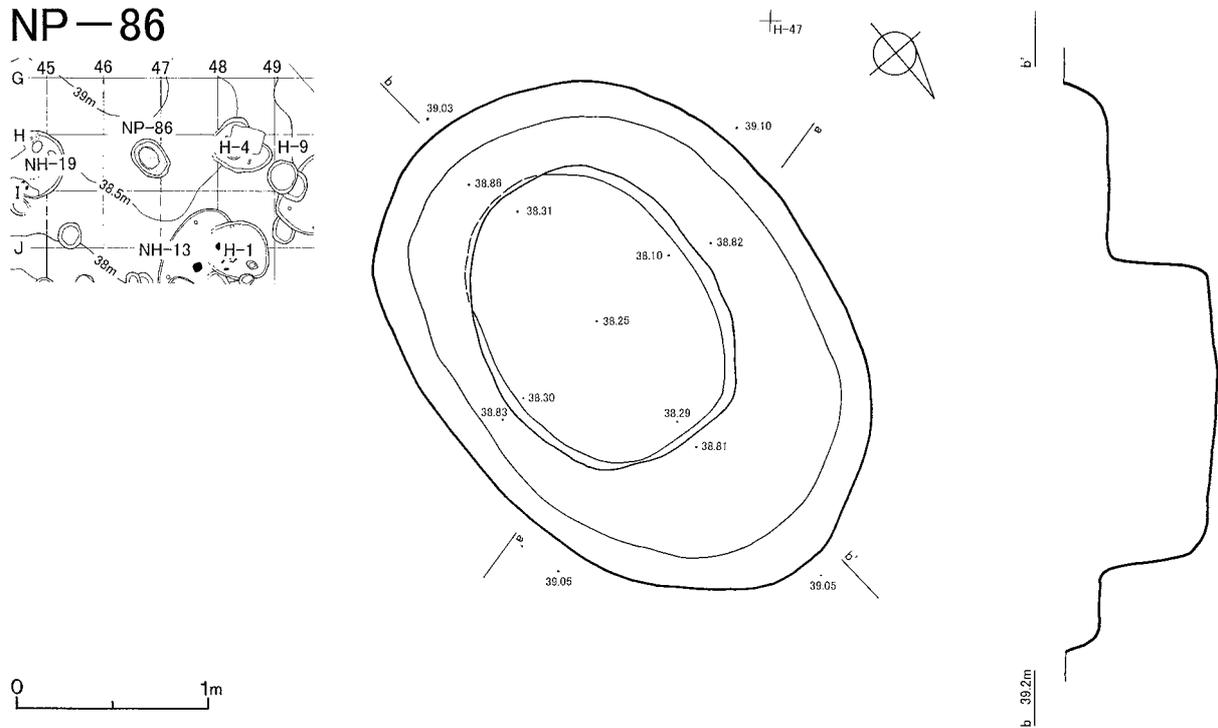


図 - 58 NP - 84、NP - 85と遺物

NP-86



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色土	10YR2/3	壤土	中	軟	V+IV+VI
2	褐色土	10YR4/4	壤土	中	堅	V+IV+VI
3	褐色土	10YR4/4	壤土	中	堅	V+IV+VI
4	褐色土	10YR4/6	壤土	中	堅	V+VI ≧ IV
5	褐色土	10YR4/6	壤土	中	軟	V 壁の崩落
6	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	軟	V+IV 壁の崩落
7	褐色土	10YR4/4	壤土	中	軟	V > IV
8	黄褐色土	10YR5/6	壤土	中	堅	V ブロック状
9	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	軟	IV+V+VI
10	にふい黄褐色土	10YR4/3	壤土	中	堅	VI > IV+V
11	暗褐色土	10YR3/4	壤土	中	軟	≧9
12	にふい黄褐色土	10YR5/4	壤土	中	すこぶる堅	IV+V
13	黒褐色土	10YR3/2	壤土	中	しよう	IV+V

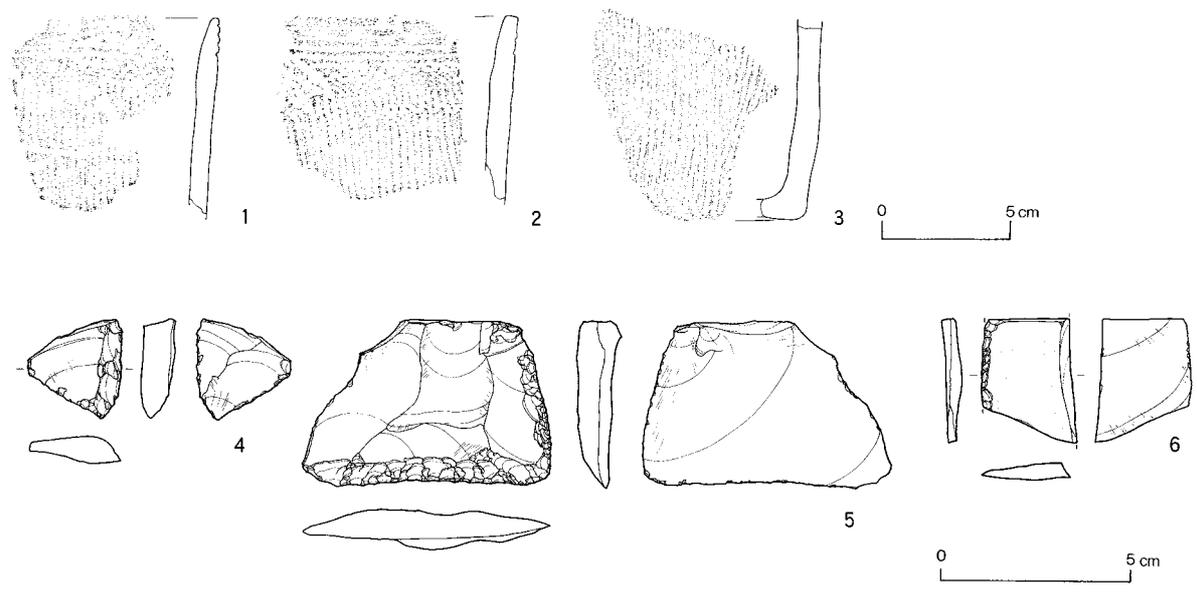
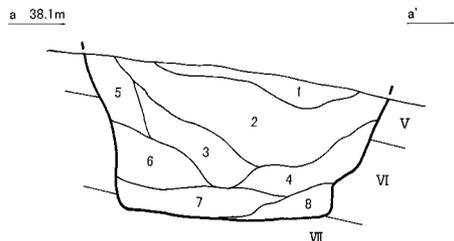
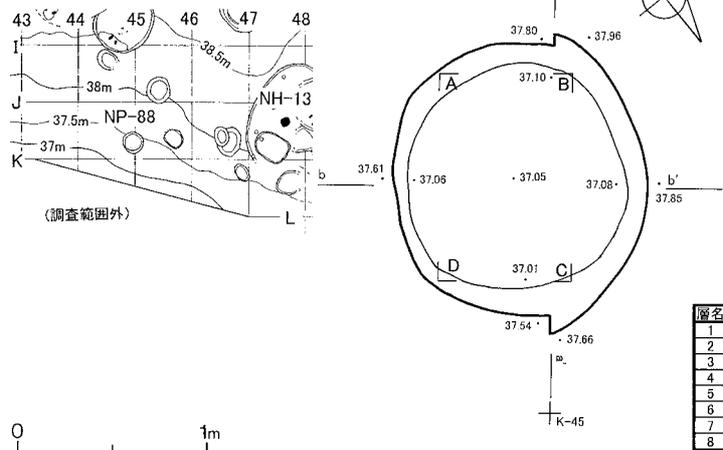


図 - 59 NP - 86と遺物

NP-88



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色土	10YR2/1	壤土	弱	軟	IV
2	暗褐色土	10YR3/3	壤土	弱	軟	IV+V 炭化物あり
3	暗褐色土	10YR4/4	壤土	弱	しろう	V+VI>>IV
4	褐色土	10YR4/6	壤土	弱	軟	V>>VI>>IV
5	褐色土	10YR4/6	壤土	弱	軟	=4
6	褐色土	10YR4/4	壤土	弱	しろう	V+VI
7	褐色土	10YR4/6	壤土	弱	軟	V+VI+VII
8	褐色土	10YR6/6	壤土	中	堅	VI+VII>V

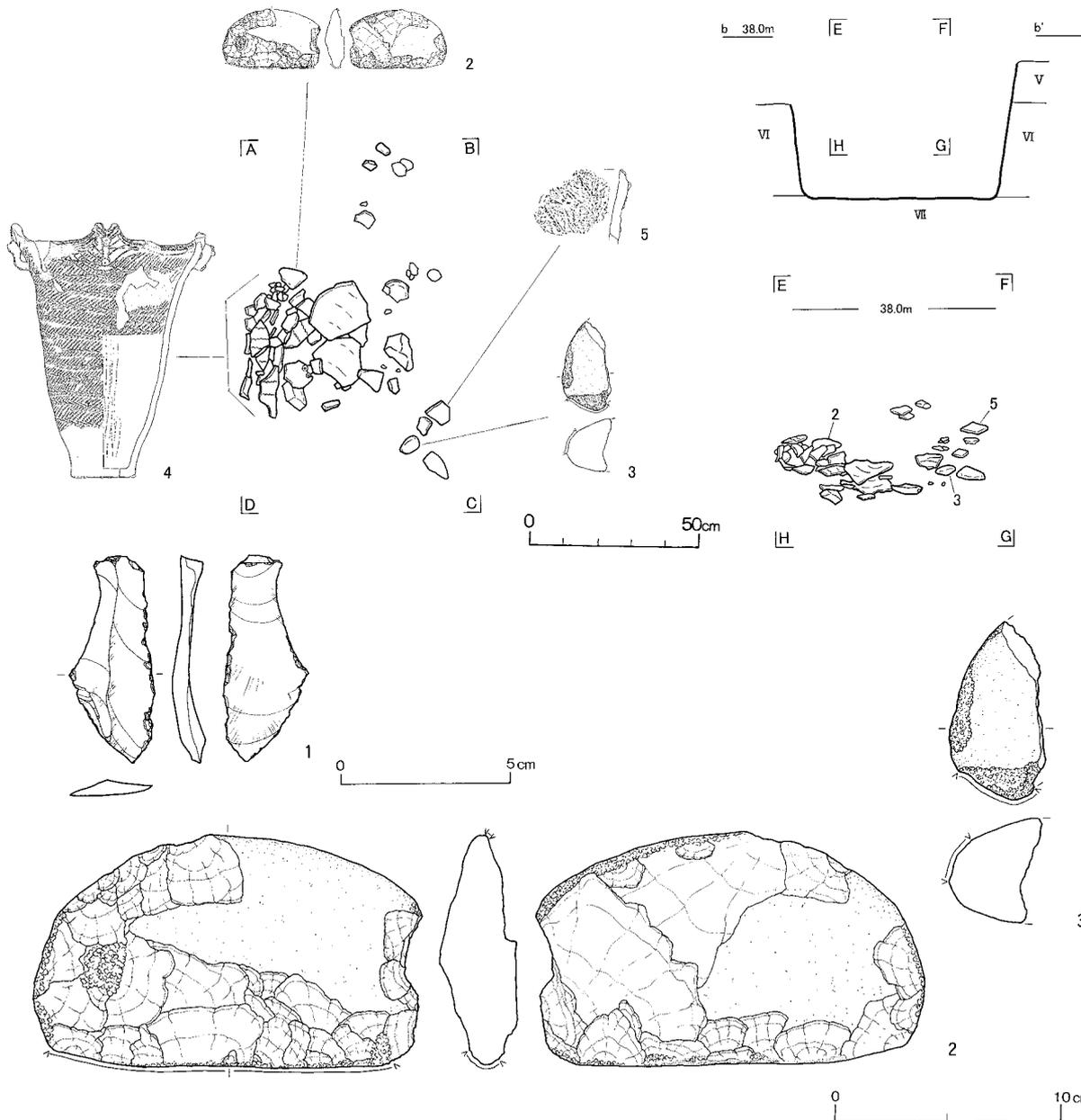


図 - 60 NP - 88と遺物 (1)

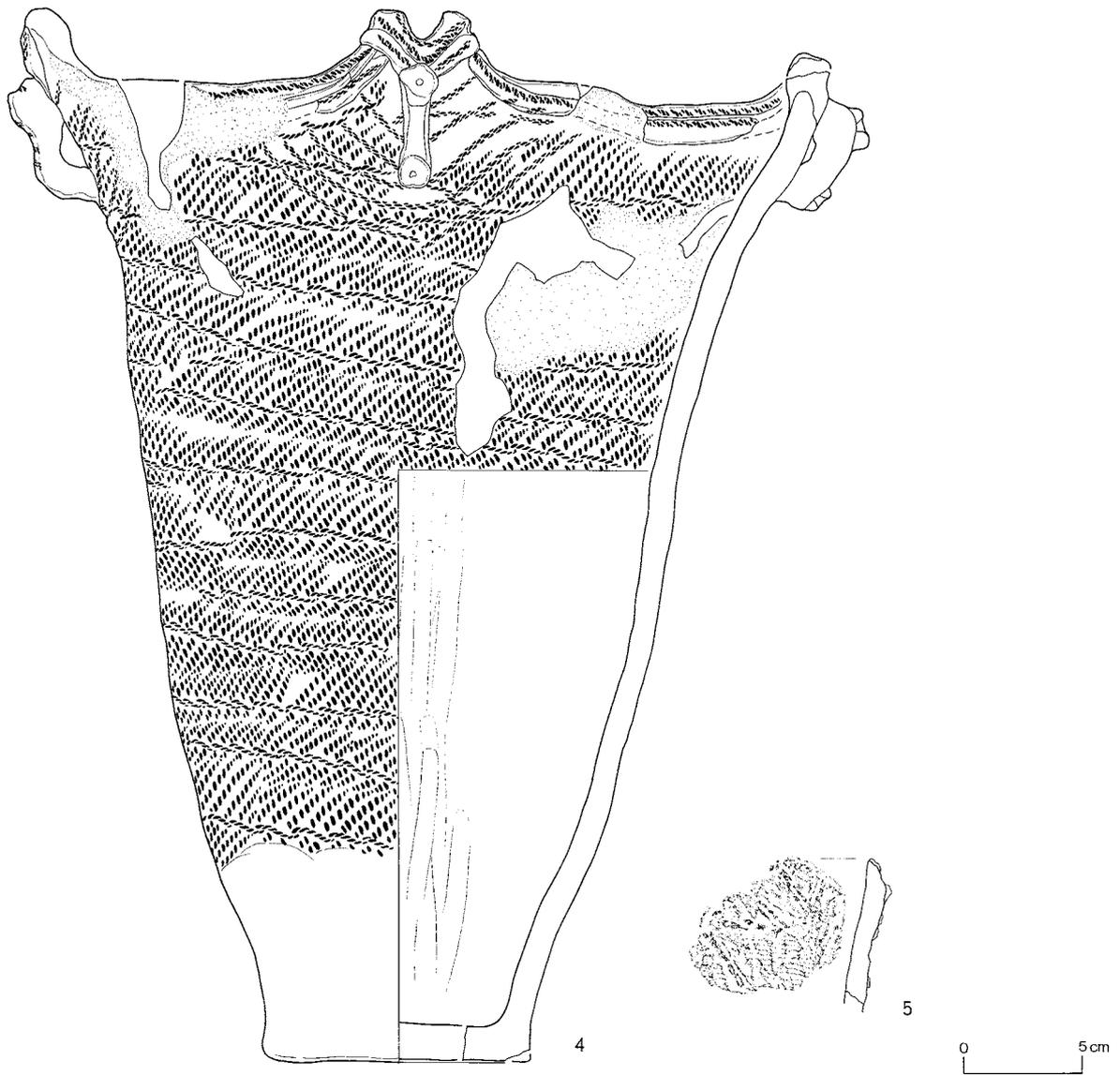
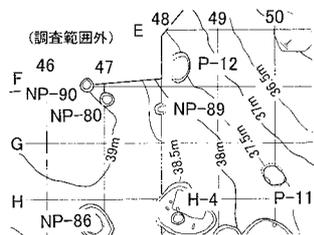
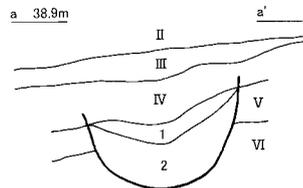


図 - 61 NP - 88の遺物 (2)

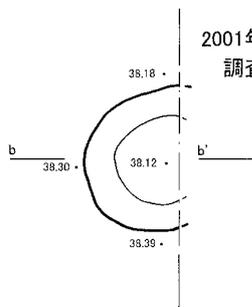
NP-89



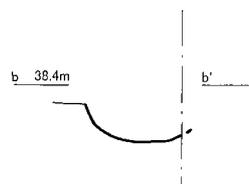
⊕F-48



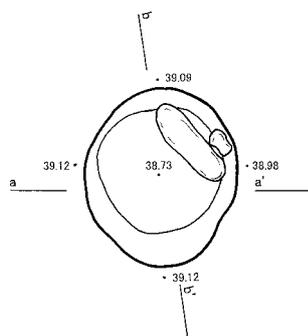
2001年
調査区



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒色土	10YR2/1	壤土	中	堅	IV>V+VI
2	暗褐色土	10YR3/3	壤土	中	堅	IV>V



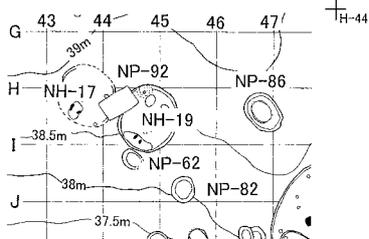
NP-90



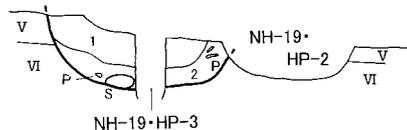
層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	暗褐色土	10YR3/3	壤土	中	堅	V+VI>IV



NP-92

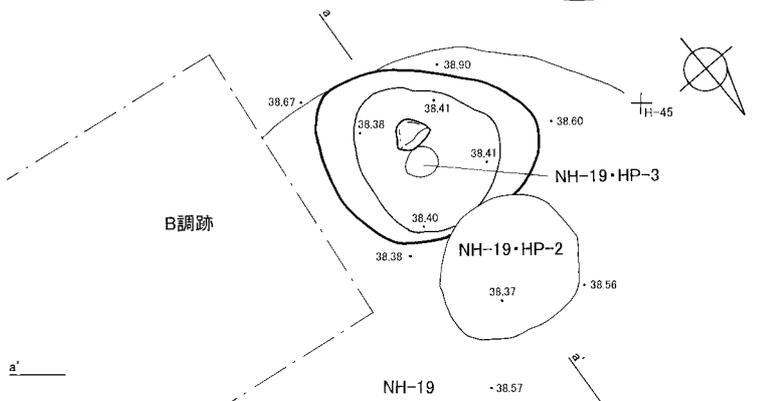


a 38.9m



NH-19-HP-3

B調査区



層名	土色1	土色2	土性	粘り	堅密度	その他
1	黒褐色	10YR2/2	壤土	弱	軟	V+VI
2	褐色	10YR4/4	壤土	弱	軟	V>VI

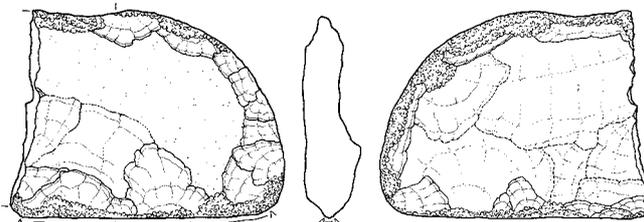
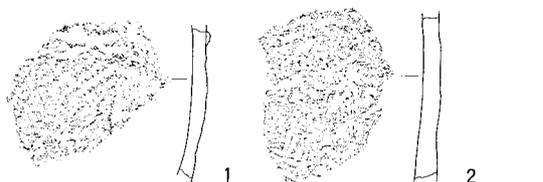


図 - 62 NP - 89・90、NP - 92と遺物

包含層出土の遺物

1. 土器等 (図 - 1 ~ 14、図版44 ~ 59、表 - 1 ~ 3)

土器等は、今回報告の調査範囲では、包含層から25,750点が出土した。その時期は縄文時代前期後葉から縄文時代中期前葉、縄文時代後期前葉、続縄文時代前期である。うち縄文時代後期前葉(群a類)がもっとも多く、17,514点(約68%)出土した。次いで縄文時代前期後葉(群b類)の5,309点(約21%)、縄文時代中期前葉(群a類)の2,892点(約11%)と続く。他に少数の出土として続縄文時代前期(群a類)59点、土製玉2点、円板状土製品2点、焼成粘土塊1点がある。

群b類はすべて円筒土器下層d式である。その分布状態はF-44・45区に分布の濃密な部分があり、地形の低いところへと広がっていく。群a類はサイベ沢式である。I-43・44区付近、H-48区、K-50区、L-48区において比較的多く出土している。群a類は天祐寺式~涌元式相当の土器、トリサキ式、大津群などが出土した。型式に細分できなかったものが多いが、その分布状態をみるとF-44・45区とF-49区において比較的多い。群b類と群a類に多い出土が認められたF-44・45区は標高39m台であり、今回報告のB地区の中では標高の高い地点である。分布の濃淡が概ね地形の等高線に沿っていることから、調査範囲外のより高い地点から流れ込んできたものが、たまっただけであろう。

群b類(縄文時代前期後葉)(図-1~2-1~34、-14、図版44~46、表-1~3)

すべて円筒土器下層d式である。大半が円筒土器下層d₁式であるが、少量円筒土器下層d₂式も出土した。

円筒土器下層d₁式(1~20)は縄線や絡条体圧痕文で、幅3cmに満たない狭い文様帯を構成し、体部には単軸絡条体や多軸絡条体を縦位に回転施文しているものが多い。また、口縁部文様帯と体部の境に羽状縄文や綾絡文を1段ないし複数段施文する場合は認められる。1~7は文様帯が鋸歯状のもの。1は復元個体。胴がやや膨らみ、口縁がわずかに外反する筒形の土器である。口縁部は2条一組の平行縄線を3条横環させ、斜位の縄線と組み合わせで文様帯を構成している。口縁部と体部の境には結束第2種羽状縄文を1段巡らせ、地文には単軸絡条体を縦位に回転施文している。内面は全て横方向に調整がなされ、平滑で鈍い光沢を帯びる。2は斜位の縄線を組み合わせで、菱形を構成している。4は結束羽状縄文と撚糸文を組み合わせ、いわゆるスダレ状文を地文とする。5は文様帯と体部の境に結束第1種羽状縄文を巡らせ、地文に多軸絡条体を回転施文したもの。7は絡条体圧痕文で鋸歯状の文様を構成している。8~17は口縁を平行縄線が複数条巡るもの。8はやや太い縄線を4条横走させ、その下に結束第2種羽状縄文を2段施文させたもの。その上に多軸絡条体を回転施文させているようだが、器表面にナデ調整が施されているため不明瞭である。9は2本一組の縄線を2条横走させたもの。文様施文後、器表面をヘラ状の工具で調整している。11は特殊な原体を用いた不整な綾絡文が口縁部と体部の境を巡る。12は縄線の上に単軸絡条体を回転施文したもの。13は縄線間に馬蹄形の圧痕が連続的に加えられたもの。14は緩やかな波状口縁。口唇直下を綾絡文が2段巡り、その下に縄線が2条施される。15は単軸絡条体による網目状撚糸文が体部地文。16と17は地文が多軸絡条体の回転施文である。16aの左と16bの右は接合する。16は口縁から底部まで接合したもの。器高は29cmある。17は結束第2種羽状縄文を巡らせている。18は絡条体圧痕文を平行に施文したもの。19・20は文様帯を持たない。19は結束第2種羽状縄文を複数段巡らせている。20は多軸絡条体を回転施文した

もの。

円筒土器下層d₂式(21~24)は口縁部文様帯と体部の境に段ないし張り出しを持ち、口縁が外に開く器形である。d₁式に比べて波状口縁を呈するものが多く認められる。21aはいびつな山形口縁。波頂部を境に右側は急角度で下がっている。波頂部からは縦位に隆帯が垂下し、2本一組の平行縄線が複数条巡る。口縁部文様帯と胴部の境にはヘラ状工具による押し引き風の刺突が連続的に加えられている。21bは隆帯がみられない。21cはこれらの底部と考えられるもの。底面は11.5cm×10.0cmで、やや楕円。22は体部との境を持たないが、口縁部断面のくびれや厚み、いびつな山形口縁を持つことなど、21との類似点を勘案して円筒土器下層d₂式のうちに数えた。口唇上には単軸絡条体が回転施文されている。23、24は縄線による鋸歯状の文様を口縁部に展開させるもの。いずれも体部との境の張り出し部分に平行縄線を付している。

24・25は胴部片。24は地文に結束第1種羽状縄文を複数段施している。同一個体片は他に確認されなかったが、2段ごとに施文方向を変えている。26~33は底部片。25~27は結束第1種羽状縄文と撚糸文の組み合わせで、いわゆるスタレ状の文様を体部地文としている。28・29は単軸絡条体の回転施文によるもの。30~33は多軸絡条体の回転施文によるもの。28は底面の9割が残存する。推定底径は11cm×9.5cmで、楕円を呈する。34は当該時期の胴部片を利用した円板状土製品である。

群a類(縄文時代中期前葉)(図 3~5 - 35~63、-14、図版47~49、表 -1~3)
すべてサイベ沢 式である。

36~41は粘土紐の貼付で文様帯を構成するもの。36~38は貼付上に縄線文が加えられたもの。36・37は細い撚糸を2本一組で圧痕している。37は口縁が外反し、厚めの粘土紐を口唇沿いに貼付したものである。幅広の肥厚した口唇の中央に沈線が引かれ、上下二段に分割された口唇上には縄線文を矢羽状に加えている。38は角度の急な山形口縁で、やや肥厚した波頂部が内湾する。39は粘土紐の上に縄文が施されたもの。C字状の突起を有する。40・41は粘土紐の上が無文。40は環状の突起を口縁部に持つ。41は口唇上と口縁に粘土紐を貼付し、その間を短い粘土紐で連続的に繋いでいるもの。38~40は口唇上に縄の刻みが加えられている。

35・42~56は口縁部文様帯を構成しないもの。35・42~46、51・52は結束羽状縄文を地文とする。35は底部が張り出して直線的に立ち上がる深鉢。孔が穿たれた山形突起を持ち、肥厚した口唇上には中空の工具で連続的に円形刺突が加えられている。地文は縦位の結束第2種羽状縄文。内面はヘラ状工具による調整で平滑である。42は2種2対の突起を口縁に有する。2本組になっている小形のツノ状突起(a)と、上向きに開いた「C」字状の突起(b)の組み合わせによるもので、この組み合わせは住居跡NH-2出土の復元土器(図 -6-1)と共通である。縄文は貼付上にも施されている。胴部片(c)は内外面とも指頭圧による凹凸が著しい。43は半裁竹管状の工具による刺突が口唇上に連続的に加えられ、左に下がりてヘラ状工具による刻みが施されたもの。44は縄線が施された山形突起片。縄線に原体の結節部が観察される。45はボタン状の貼付を有し、縦位に結束羽状縄文が施文されている。46は頸部が屈曲して大きく外反する器形。「C」字状突起を有し、口唇上に縄の刻みが加えられている。47~50は斜行縄文に綾絡文が付されたもの。47は鋭角な山形口縁。口唇縁辺に粘土紐が貼付され、その肥厚した口唇上には縄で刻みが加えられている。波頂部は粘土紐の接点のためダマ状に丸みを帯びる。50はRL縄文を地文として綾絡文が付されたもの。器表面にナデ調整が施されているため、縄文は一部磨消されている。51~53・56は結束第1種羽状縄文を地文とする。51は折り返し風に肥厚した口縁で、縄の圧痕が加えられている。52は口唇上に押し引き風の刺突が加えられている。小波状を呈し、やや裏面が反り返る。53は山形口縁の上縁辺が波状を呈する。56は山形の突起部

にのみ細い粘土紐が施されているもの。53・56は原体の回転方向を変えて二重に施文して、斜行縄文風にしたものである。口唇上にはヘラ刻みが加えられている。54・55は斜行縄文のもの。いずれも口唇上に縄の刻みが加えられている。54は口縁が大きく外反し、内側に「C」字状突起を持つ。地文にRL斜行縄文が密に施文され、口縁から胴部下半まで器壁がほぼ一定の厚さである。55は環状のボタン状突起を持つ。

57～59は山形の突起。57は左右両角がツノ状に突き出ており、X字状に粘土紐が付されている。また上縁辺の中央には溝の入った鈴様の小突起もある。58はやや突き出た突起の下に穿孔が施されているが、破砕面にかかっており、拓本には表れていない。59は上縁辺が肥厚して浅いくぼみを呈する。くぼみの周縁に、2本一組の細い縄で刻みを入れている。

60は魚骨回転文の施された胴部片。原体に用いた魚骨はニシンと推定される。61～63は底部片。61は揚げ底気味のもの。内面は横方向の調整で平滑である。62は全体的に丁寧な調整で鈍い光沢を持つ。焼成の良好な底部片。底面の一部を欠くが、推定7.5×7.0cmの底径である。63は粗雑な手捏土器の底部。底面は丸底気味で、焼成以前に生じたとみられる細かい亀裂が全体に観察される。胎土の質感から群a類の可能性を想定した。

群a類(縄文時代後期前葉)(図 - 6～12 - 64～165、- 14、図版50～59、表 - 1～3)

64～69・74～117は天祐寺式～トリサキ式の可能性が考えられるもの。破片のため型式を特定できない資料が多く、文様で分けて掲載した。74～79は横位の粘土帯が複数段のもの。74～76は口縁部の地文を磨消し、その上に粘土帯を貼付している。74・75は貼付が少なくとも3段数えられる。74は縦位と斜位の貼付が重ねられている。77は折り返し口縁の上に貼付したもの。78・79は粘土帯を貼付後、横位に調整したもの。79は調整後、斜行縄文を施文している。74～79に関しては、いずれも口唇上が平滑に調整されており、群a類の中でもより古い可能性がある。

64・80～94は口縁部を粘土帯が1段巡るもの。貼付と折り返し口縁の区別が判然としない資料が多く、両者をここにまとめた。64は復元個体。直線的に開く器形で、体部全体にRL原体を縦方向に施文後、口縁部では同一原体を横方向に回転させている。器表面は凹凸が顕著で、輪積みの接ぎ痕も窺われる。内面はヘラ状工具で調整されている。80～86は地文が羽状縄文。原体の回転方向を変えて施文したもので縄文同士が一部重なり合っている。80は口縁を巡る貼付がJ字状に垂下している。85は口縁の調整による表裏面からの粘土のたまりで、口唇が溝状になっている。87・88は縄文原体を縦位に回転施文したもの。88は複節の原体を二重施文している。原体の縄端を結わえたようであり、不整綾線様の文様が部分的に縦位にみられる。89・90は縄線が施されたもの。89は頸部に無文帯を巡らせ、そこに縄線で三角形を構成している。体部地文は羽状縄文である。口唇は小さい山形突起が2つ並んでいるが、うち1つが欠損している。90は肥厚した口縁から胴部にかけて、斜位に縄線を施し、平行縄線と組み合わせることで台形様にしたもの。91は口縁に横位、体部には縦位の方向で単軸絡条体を回転施文している。体部は一部で横方向にも単軸絡条体を回転させている。92は口縁部に斜行縄文、無文地の体部に網目状撚糸文をそれぞれ施文したもの。93・94は縦の粘土帯を2本貼付し、その上に縄線を押圧したものである。95は粘土帯が斜位。同じく縄線が押圧されている。

65・96～112は粘土帯の貼付や折り返し口縁ではないもの。65・96～99は平行縄線。65は胴部下半を欠く復元個体。胴部が直線的に張り出す器形で、全体に磨耗しているが、地文はLR原体を縦位に回転させたものである。口縁はゆるやかな波状を呈する。96は口唇と平行縄線の間を、刺突がゆるやかな波状をなして連続的に加えられている。97は口縁がやや内湾する器形。口唇部直下を平行縄線が深めに施されている。98は縄文の上に斜位の縄線を付している。99は無文地に2条の平行縄線と縦位

の縄線がある。100・101は単軸絡条体を回転させて網目状撚糸文を施したもの。100は口縁部において単軸絡条体を横位に回転させている。底部内面(100b)は丸みを帯びる。101は横位と斜位に重ねて施文している。102~109は縄文のみのもの。102は羽状縄文。103・104は緩やかな波状口縁を呈する土器で、原体を縦方向に施文したもの。103の波頂部は口唇上に粘土を貼付して山形にした作りである。104はR L Rの複節縄文。105~108は斜行縄文。105~107は口唇上にも縄文が施されている。105は凹凸が顕著。106は複節斜行縄文。108は付加条の縄文。109は特殊な原体による施文のもの。複節の原体を二重施文したように見えるが、判然としない。110~112は無文土器。110は垂直に立ち上がり、111・112は頸部がくびれる。112は器表面に凹凸が顕著である。

66~69・113~117は底部片。66は径の小さい底部。胴部との接ぎ部分はくびれを呈する。凹凸が顕著な器表面に、自縄自巻的なL Rの斜行縄文を施している。底部付近は原体を縦方向に回転施文している。67はR L R原体による斜行縄文を地文とし、胎土に繊維を含む。68は巻きの緩い単軸絡条体を縦位に回転施文したもの。上部には斜位の施文もみられる。原体を斜位に施文後、縦位に施文を重ねている。69は櫛歯状工具による沈線文が不規則に施されている。113・114は羽状縄文が地文。114は底面の縁に粘土を貼付し、揚げ底状にしたもの。115は底面にも縄文が施されている。116は自縄自巻的な縄文が縦方向に施文されたもの。117は木の葉の葉脈痕が底面に残る。

70~73・118~153はトリサキ式と考えられるもの。胴部上半が膨らみを持ち、頸部がくびれて口縁の開いた器形が多い。口縁部は折り返しも多く見られ、8の字状の粘土紐を付すものもある。

118~137は棒状工具の外側で沈線を施したもの。118~123は細い沈線。118~121は沈線が直線的である。118・119は平行沈線が頸部に2条引かれたもの。118は地文の縄文が横位で、外反する口縁部に8の字状の粘土紐が貼付されている。119は無文地である。120・121は縦位および斜位の沈線が組み合わせられたもの。121は地文が横位の調整で磨消されている。122は山形の波頂部を持ち、無文地に沈線で菱形を描いたもの。123は横位に展開する連弧文。頸部が屈曲し、胴部が膨らむ器形。124~137は比較的太い沈線のもの。124~128は平行沈線。124・125は平行沈線の間を縦位に短い沈線が施されている。124は粘土帯を横位に貼付し、その上に縄文を施文している。125と127は山形の波頂部に8の字の貼付がくる。127は8の字に貼付後、中空の工具で8の輪の中を刺突している。129~132は斜位に沈線が引かれるもの。129は波頂部から短い隆帯が垂下する。130は弧線気味の沈線を斜位に交差させ、菱形にしたもの。131・132は胴部片。132は沈線が2本一組。133~137は沈線が3本一組のもの。136は3本単位の沈線が重なりあっている。真ん中の沈線が深い。137は胴部片。割れ口の縁辺が磨耗している。三角状の土製品の可能性もある。

70~73・138~142は無文または縄文のみのもの。70~73は無文の復元個体。70~72は全体的にヘラ状工具による調整痕が顕著。表裏面とも胴部下半は縦方向、胴部中央から口縁にかけては横方向の調整である。いずれも胎土に砂粒を含み、よく焼きしまった平底の土器である。70はF - 49区においてまとまって出土した大型のもの。71はE - 48区においてまとまって出土した。全体的な作りが70よりいびつで、やや傾く。72はF - 44区において出土した小型土器。71・72は器高に比して底部が厚めのためか、見た目よりも重さを感じる。73は御猪口型である。指頭の調整痕が顕著な無文の手捏土器。138~142は口縁部片。138~140は縄文地、141・142は無文地である。

143~150は半截竹管様工具の内側で沈線を施文したもの。143~147はS字状に沈線を引いたもの。148は連弧文風である。151・152は櫛歯状工具と沈線を組み合わせて施文したもの。153は沈線がカニのハサミ状に似る。151~153はトリサキ式の中でも比較的新しい段階のものである。

154~165は大津 群土器と考えられるもの。平縁のものと緩やかな波状口縁をなすものがあり、

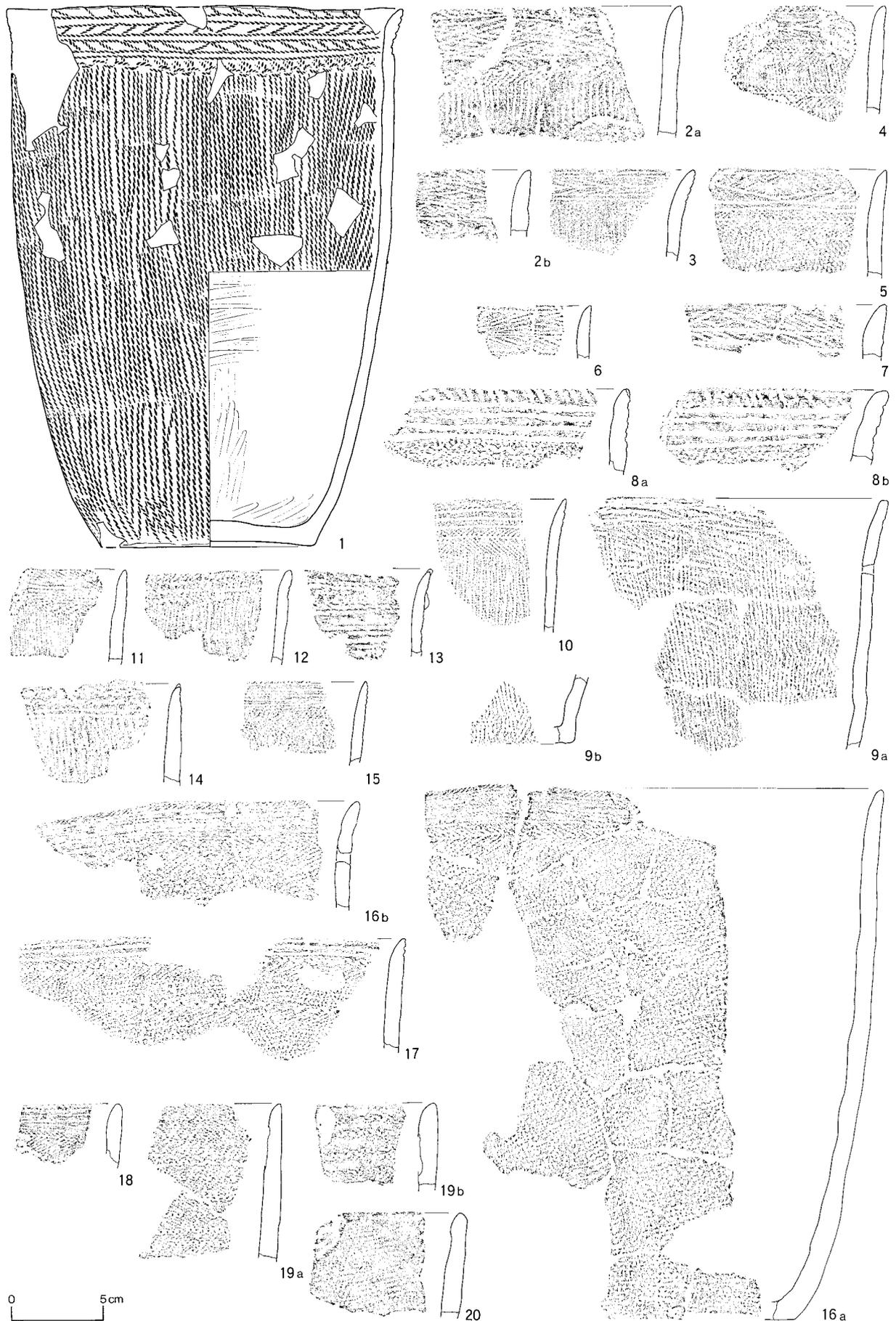


図 - 1 包含層出土の土器 (1)



図 - 2 包含層出土の土器(2)

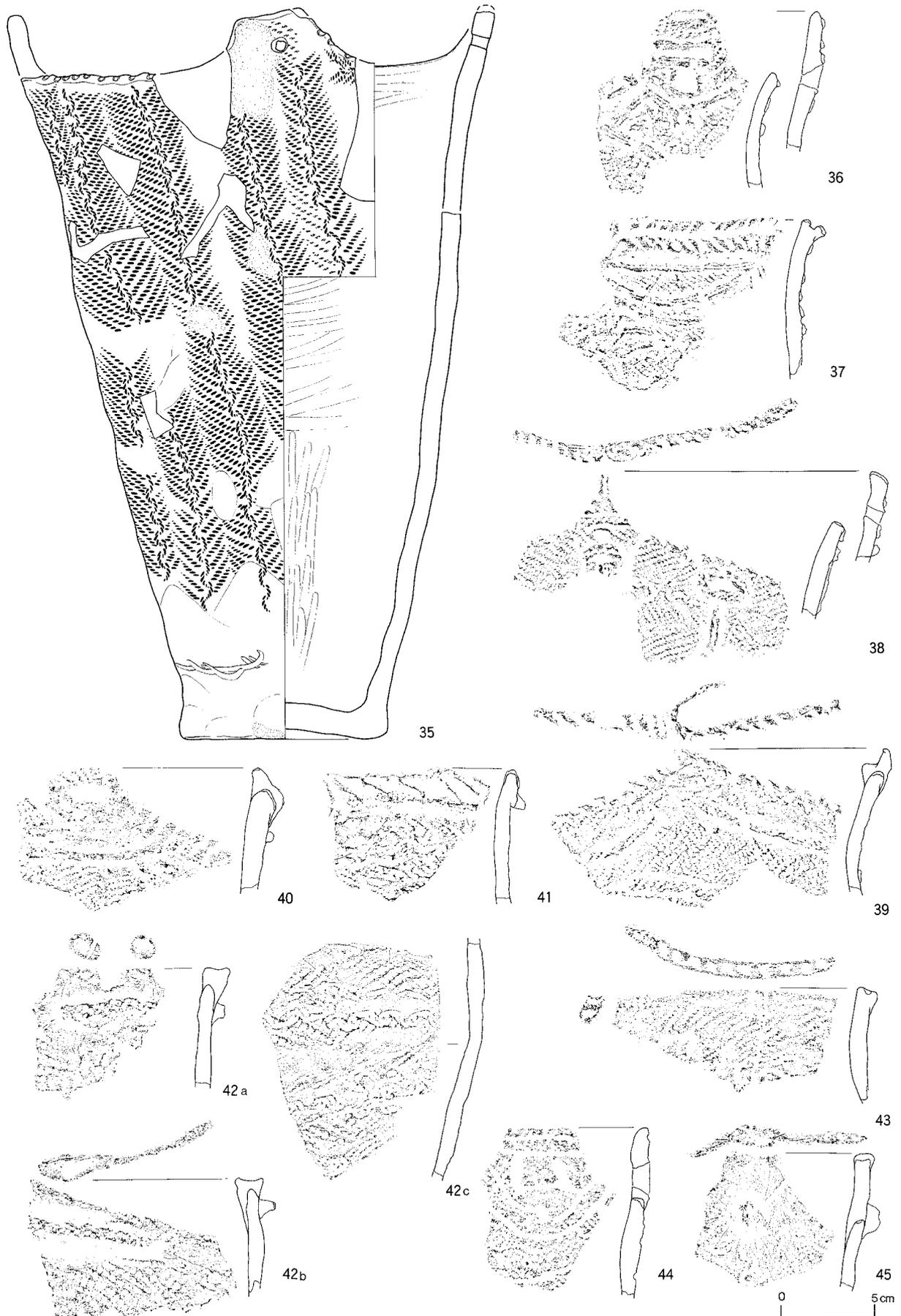


図 - 3 包含層出土の土器 (3)

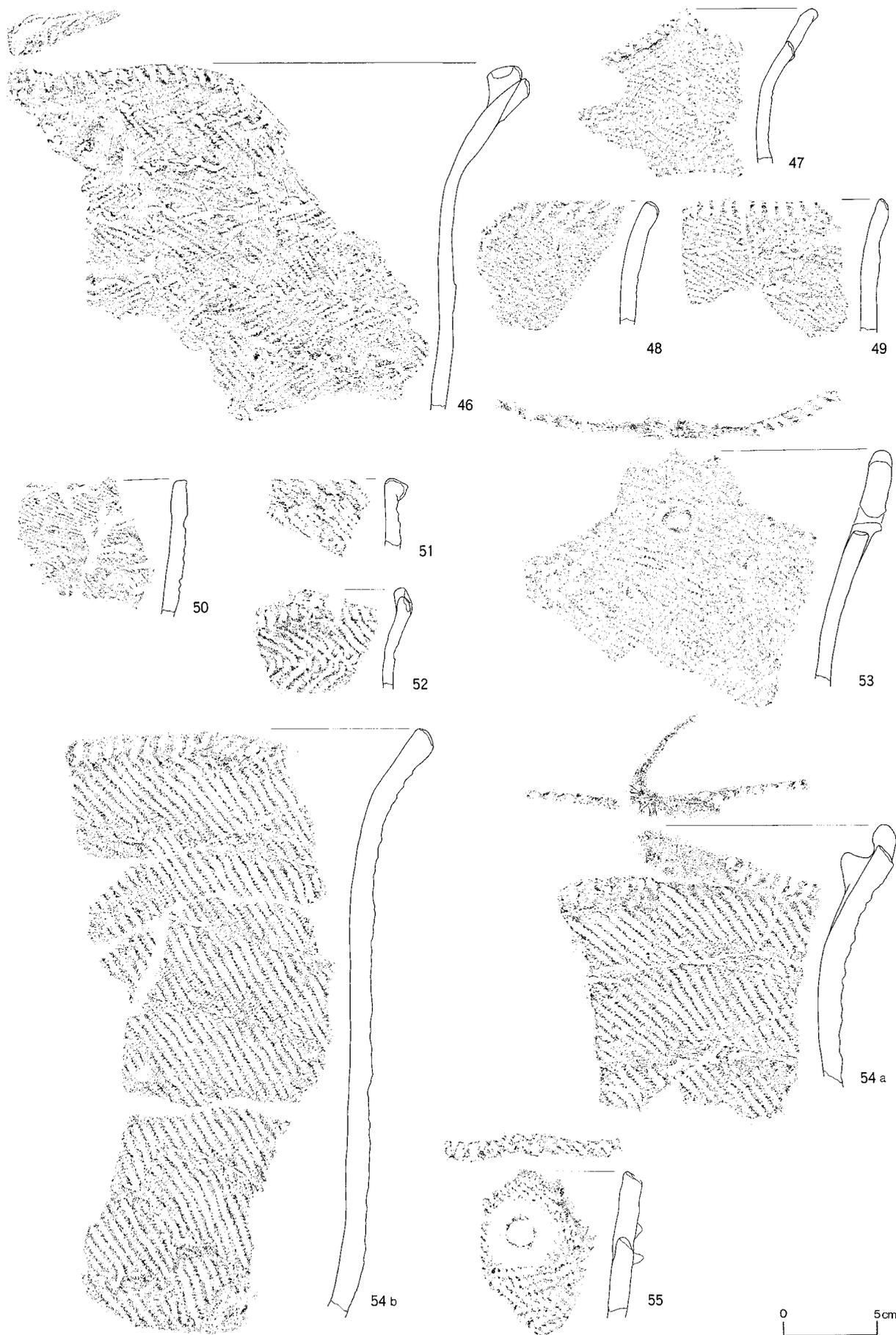


図 - 4 包含層出土の土器(4)

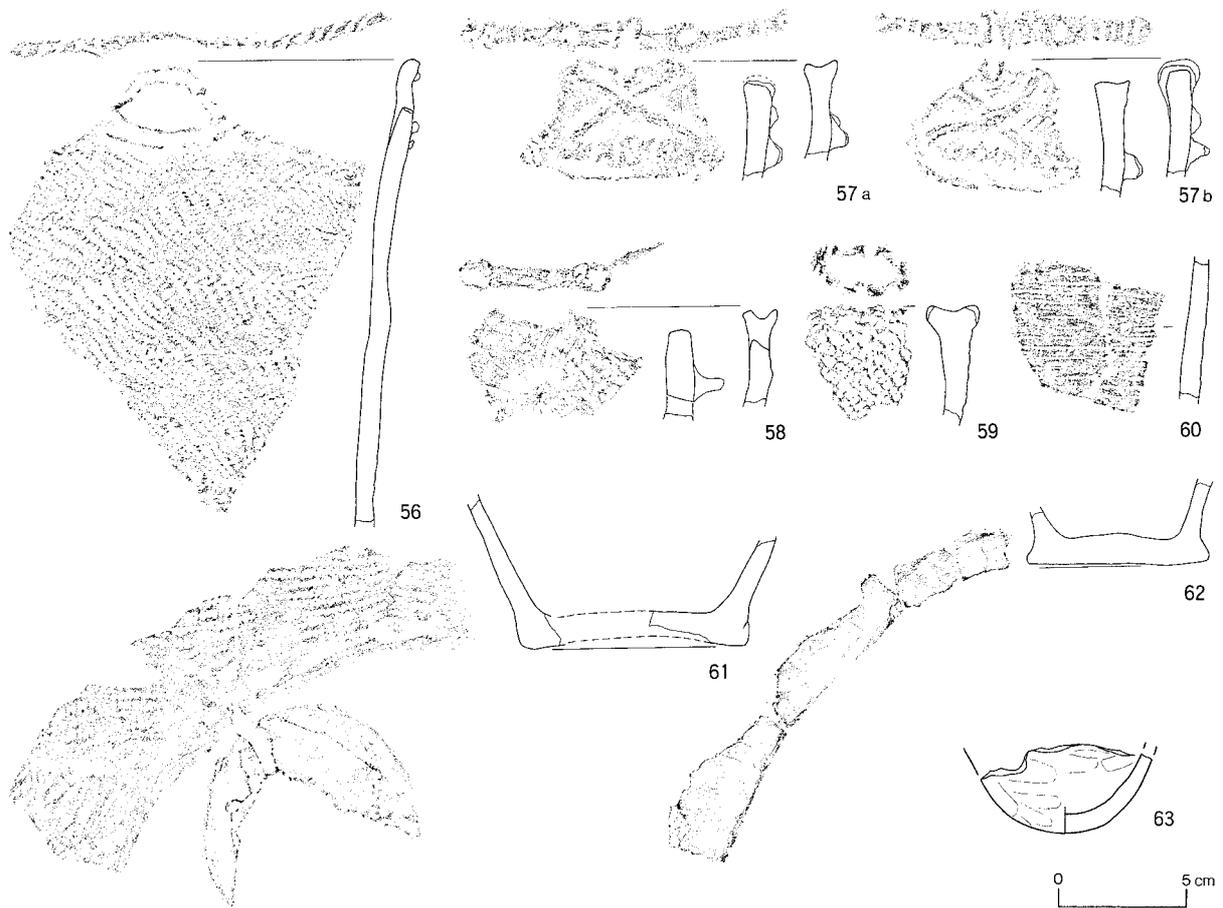


図 - 5 包含層出土の土器（5）

器形は胴部がわずかに張り出して、口縁部が外反するものと胴部が張り出さないものとがみられる。体部文様帯は沈線で区画した中に構成され、磨消縄文の盛行によって、大柄な入組文や「カニのハサミ」状文を展開するものがある。他に連続的な「乙」字文や「く」の字文の施文が顕著に認められる。内面の調整に関しては、すべて横方向（154・156～158）である場合が少なからず見られた。また、胎土に砂粒を含んだ、焼成の良好な土器が多い。

154～159は復元個体。154は胴があまり張り出さない。口縁部には「く」の字文が連続的に施文される。「く」の字と逆「く」の字が向き合うところは、菱形を形成するが、山形を呈している箇所もある。頸部には2本の沈線で区画された幅の狭い無文帯が巡り、その下は「乙」字文を横位に展開させている。「乙」字は同じ向きで連続するが、部分的に菱形を形成する。その菱形から矢印様の弁状文が下に伸びており、垂下する弁状文の間は「カニのハサミ」状文が構成されている。「カニのハサミ」の下、底部周縁にも「く」の字文が巡り、さらに底面には沈線が渦巻き様に描き込まれている。155は頸部を沈線が1条巡り、その下を角張った波状文が横環するもの。体部中央には磨消縄文による「J」字状の入組文と「カニのハサミ」状文が複合して施文されている。「カニのハサミ」状文の下、帯状に沈線で区画された縄文地には「く」の字文が縁飾り的に施されている。地文の縄文は施文方向が不規則である。156は口縁がゆるやかな波状を呈するもの。波頂部口唇に5本の刻みを加えている。口縁部には鋸歯状沈線が3条横環し、頸部を沈線が1条巡る。体部は磨消縄文による入組文が横位に展開し、その下には「カニのハサミ」状文が一部にみられる。157はゆるやかな波状口縁。頸部

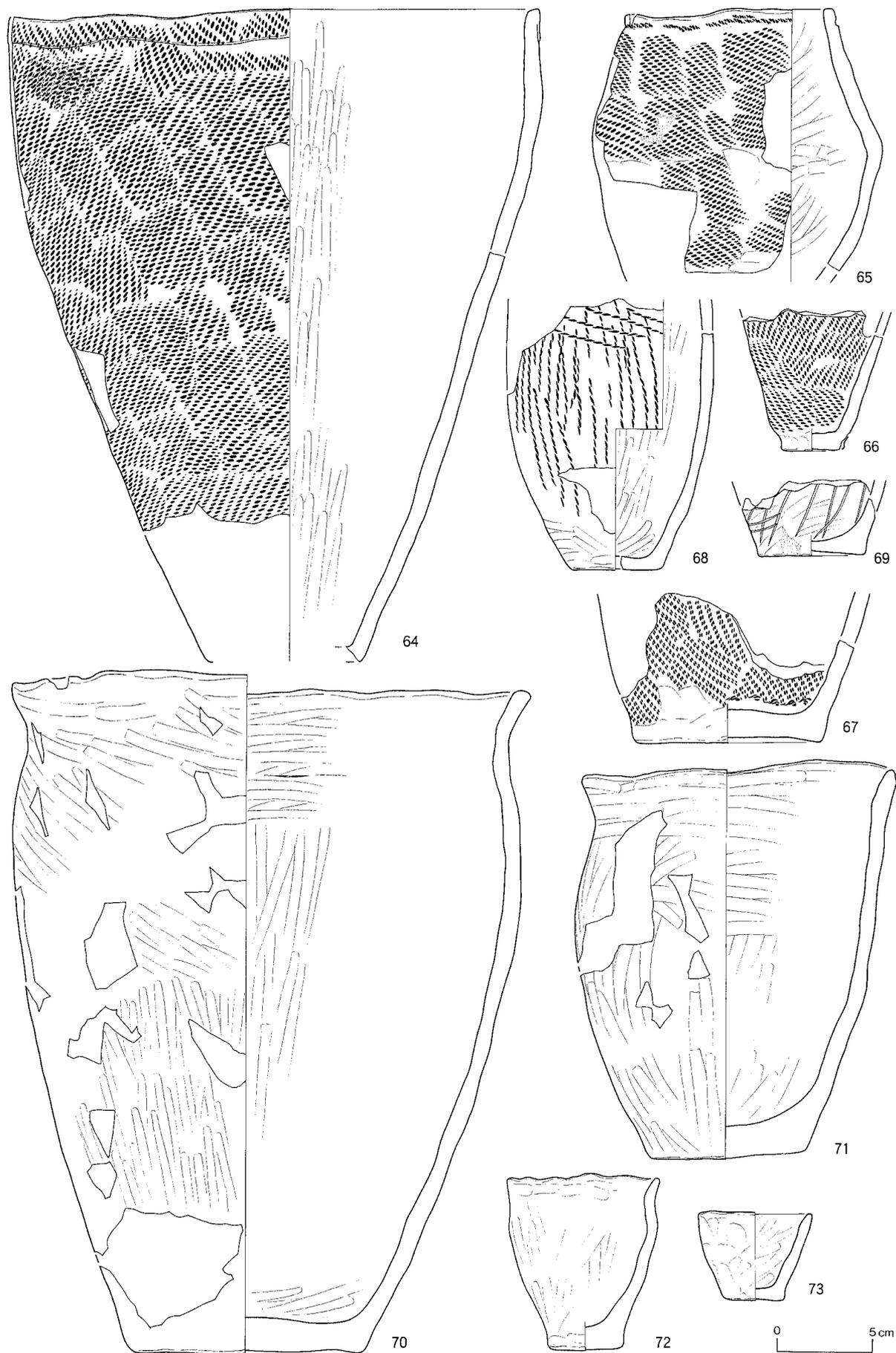


図 - 6 包含層出土の土器(6)

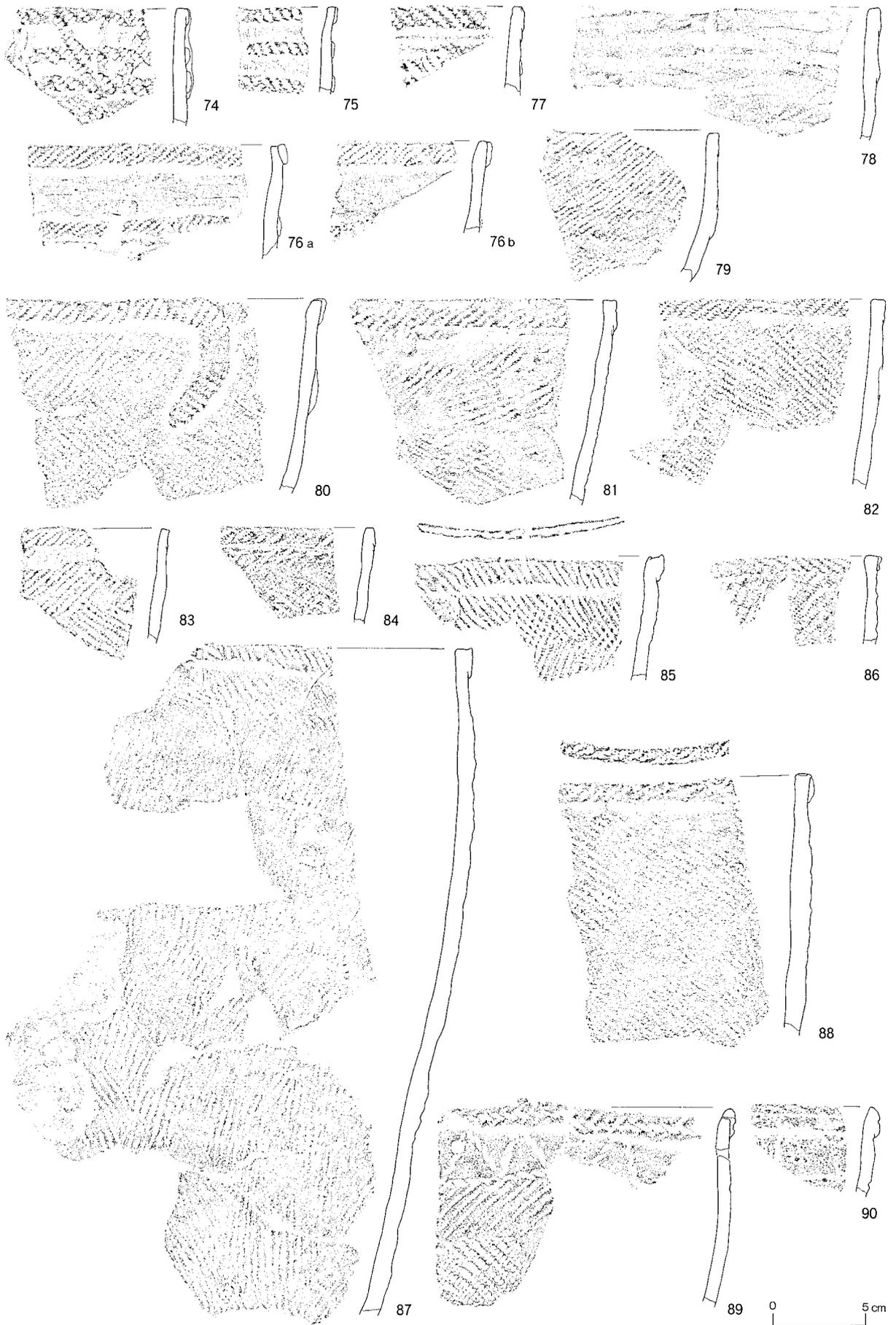


図 - 7 包含層出土の土器(7)

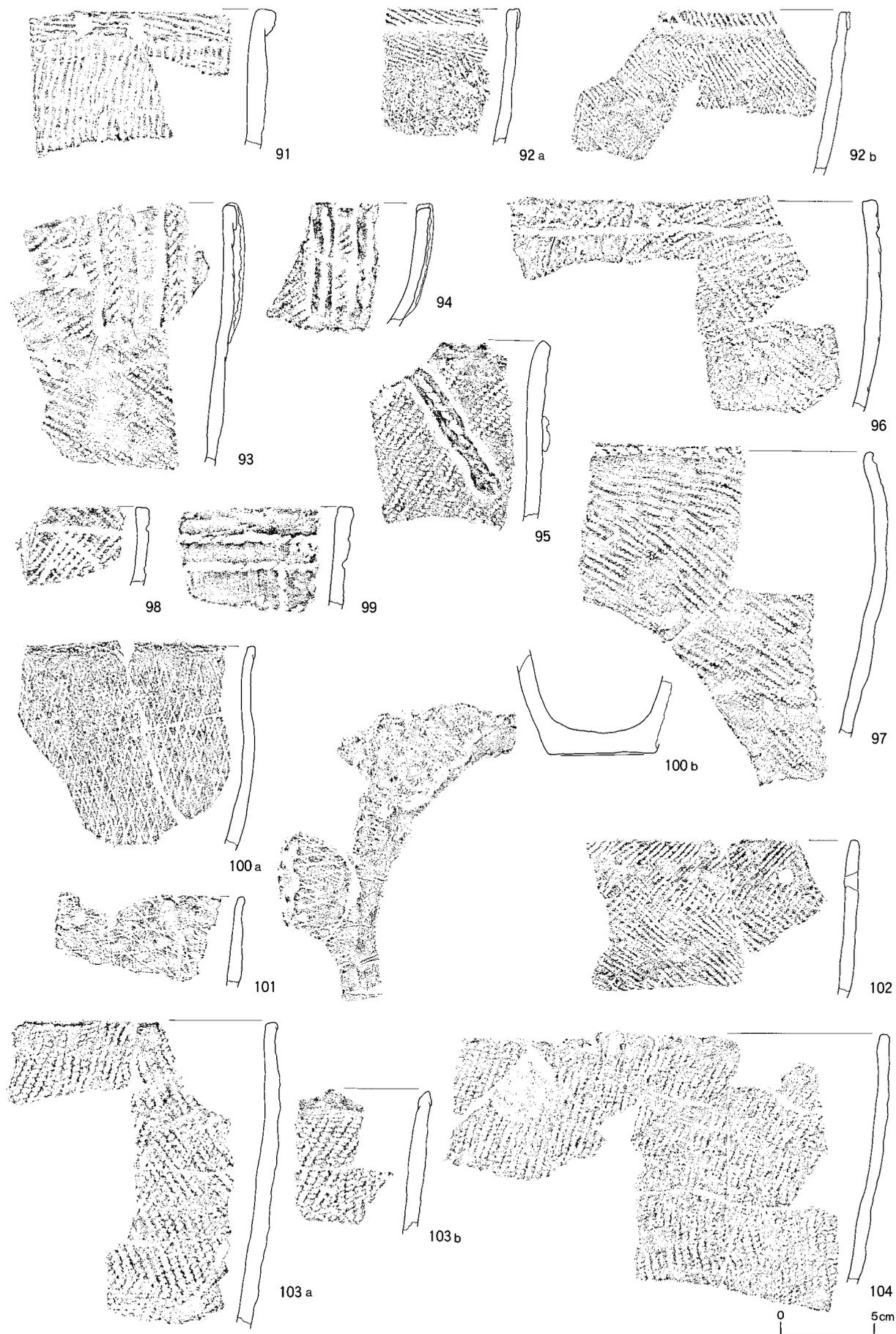


図 - 8 包含層出土の土器 (8)



図 - 9 包含層出土の土器 (9)

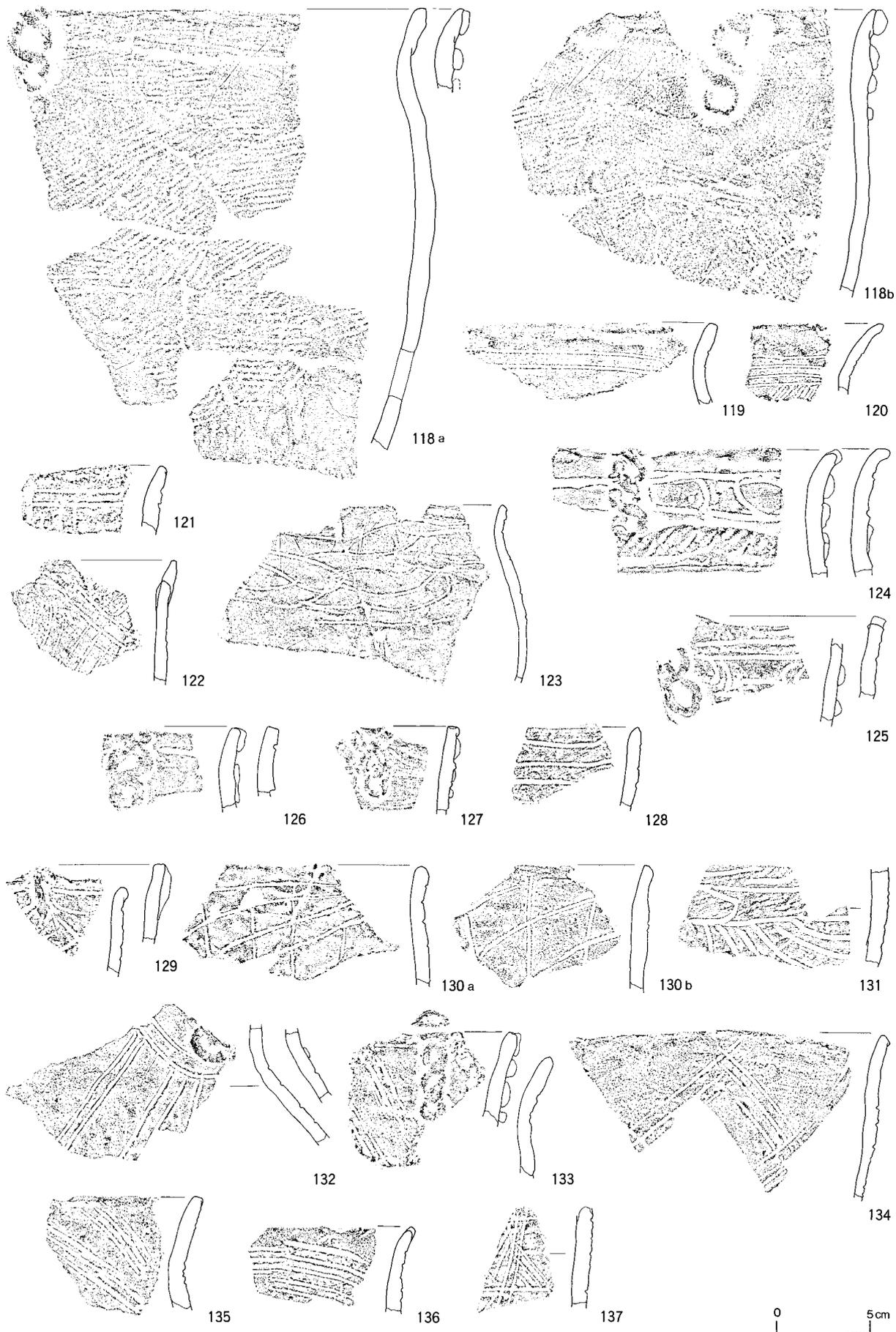


図 - 10 包含層出土の土器 (10)

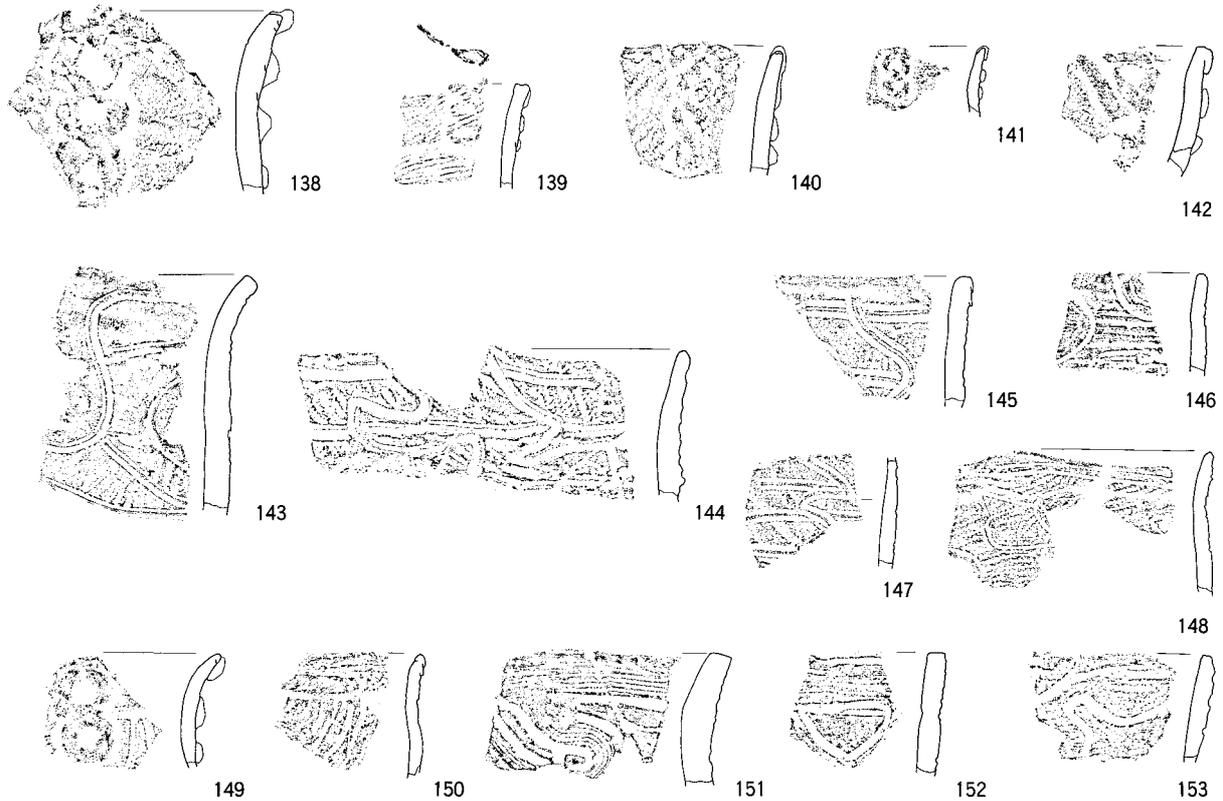


図 - 11 包含層出土の土器 (11)

を沈線が1条巡り、その下に「乙」字が連続的に施されている。体部中央は2条の沈線で区画された中に、磨消縄文で大柄な「J」字状の入組文が渦巻様に描かれ、さらにその下には波状文が施されている。焼成は非常によく、胎土には砂礫を多く含む。158は浅鉢型の土器。直線的に開く器形で、無文地に太い沈線が3条巡り、底部は外側にやや張り出す。胎土と焼成が157に酷似する。159は中型の深鉢。文様は頸部下位と体部の中ほどに沈線で区画された縄文帯が2段あり、それぞれクランク状の「乙」字文を2条横環させている。器表面には炭化物の附着が目立つ。

160～162・164・165は口縁部片。160は頸部が屈曲して口縁が外反する。波頂部には連弧文が施されている。161は文様帯と無文帯が交互に横走するもの。文様帯には「乙」字を連続させるものと「く」の字を連続させるものがある。162は裏に連弧文があるもの。163は注口土器の可能性ある胴部片。磨消縄文が多用され、帯状に区画された文様帯の分岐点に「く」の字が施されている。164・165は連弧文。165は表裏面に連弧文があり、その施文範囲にのみ縄文が施されている。

群a類(統縄文時代前葉)(図 - 13 - 166・167、- 14、図版59、表 - 1～3)

166・167は統縄文時代前葉の恵山式土器。166はJ - 42区で一個体まとまって出土した。口縁がゆるやかな波状をなして外側に開き、胴部が膨らむ器形。底部は揚げ底である。口縁部を平行沈線が6条巡り、その下を連続する山形沈線が1条巡る。平行沈線は胴部の張り出し部分にも2条横環し、胴部上半と下半を分かち。原体の施文方向を上から順に横、縦、斜めと変えているため、口縁は斜位、頸部から胴張り出し部にかけては横位、胴部下半は縦位の帯状縄文が付されている。口唇の外縁には刻線が連続的に加えられるが、全部で10ヶ所を数えるやや肥厚した小波頂部には深く強制的に施されている。内面に残るヘラ状工具の調整痕はすべて横方向。167は横走する複数の平行沈線が無文帯を挟

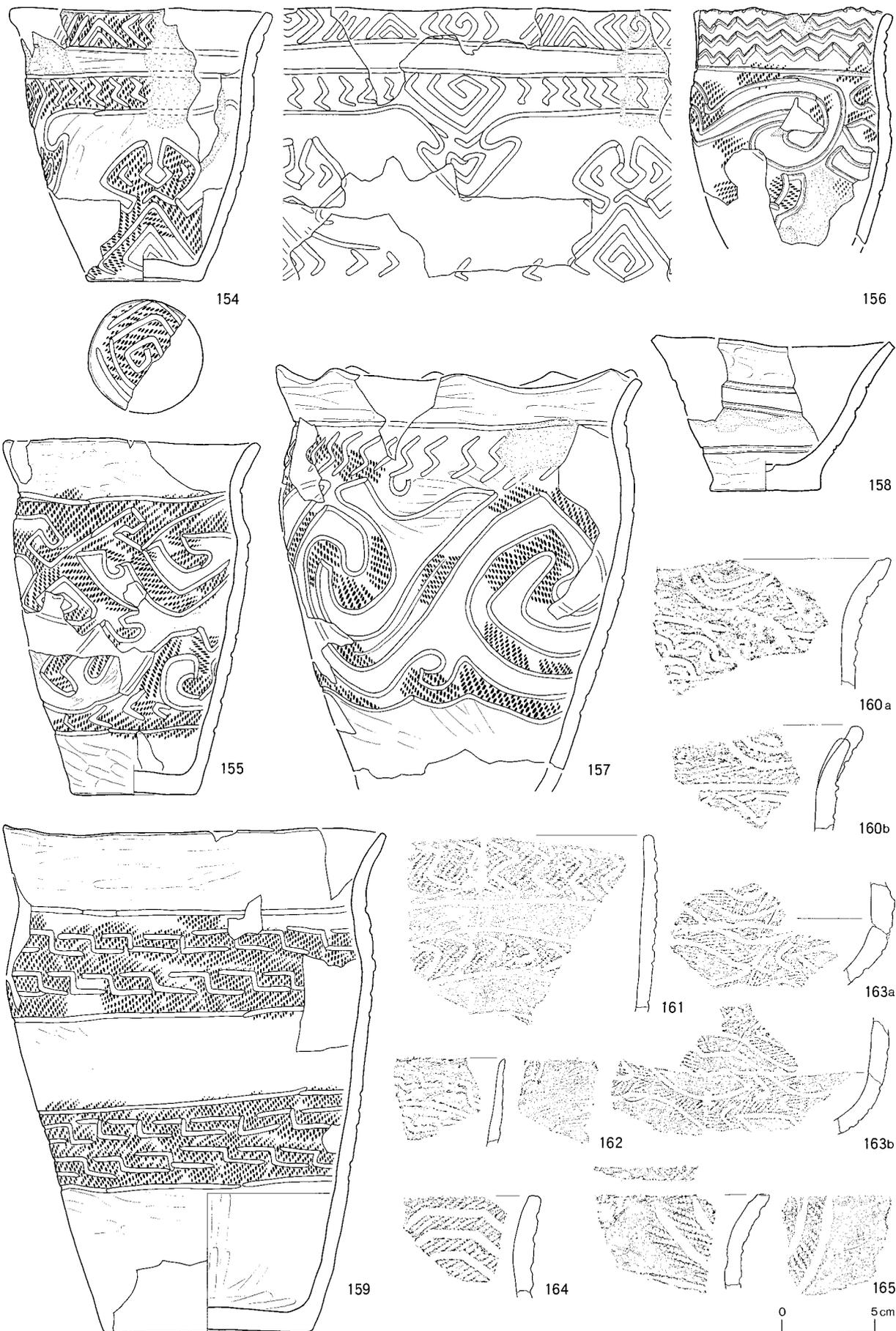


図 - 12 包含層出土の土器 (12)

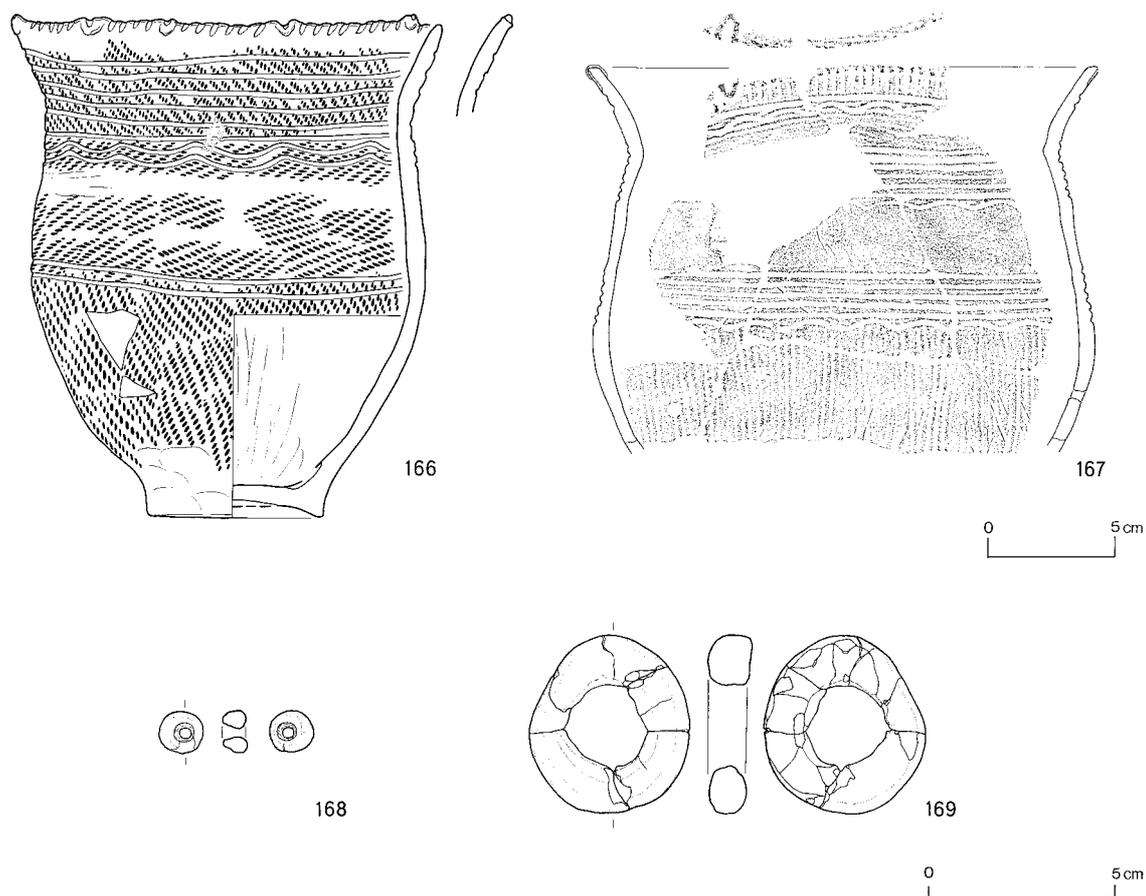


図 - 13 包含層出土の土器等 (13)

んで頸部と胴部を巡る。帯状縄文は口縁部を横走する波状文付近には横位に、胴部の波状文より下は縦位に施しており、口唇上にも施してある。166・167とも恵山2式・南川 群土器相当である。

土製品 (図 - 13 - 168・169、- 14、図版51、表 - 1~ 3)

168・169は土製玉。168は小型。灰赤色を呈しており、当センターで蛍光X線分析を行った結果、第二酸化鉄 (Fe_2) の付着が確認された。彩色の可能性が高いものである。なお、分析は第1調査部第1調査課の花岡正光の指導による。169は環状を呈する。全体的にいびつで太さが不均一。二次焼成を受けたため、細かい亀裂がみられ、非常に軽い。 (影浦)

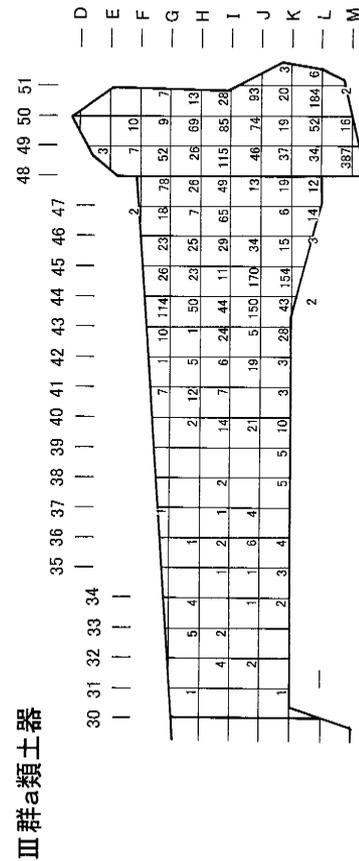
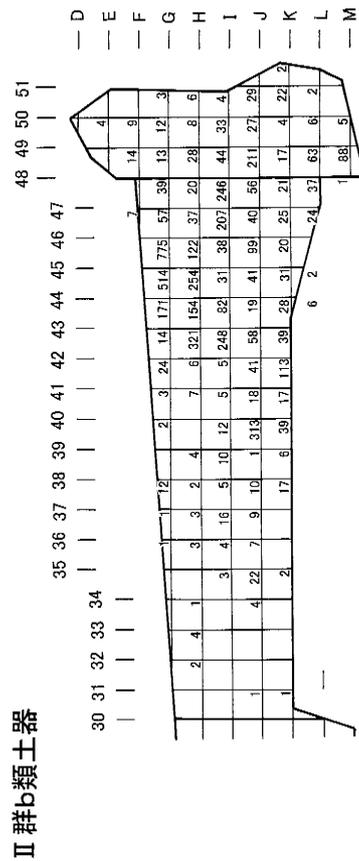
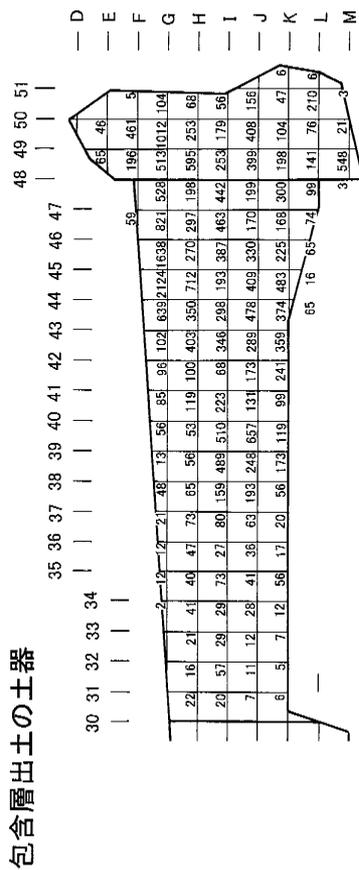
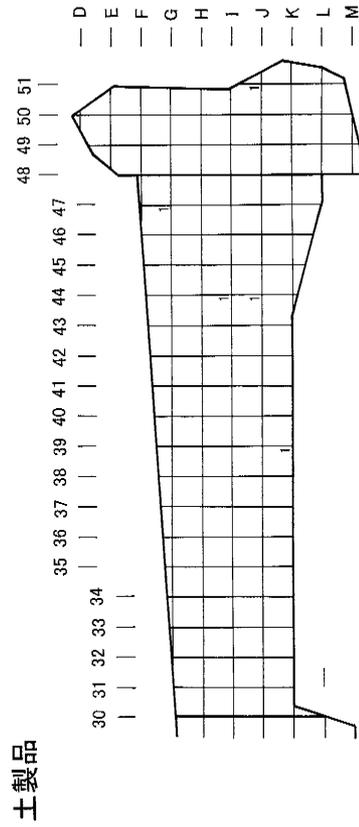
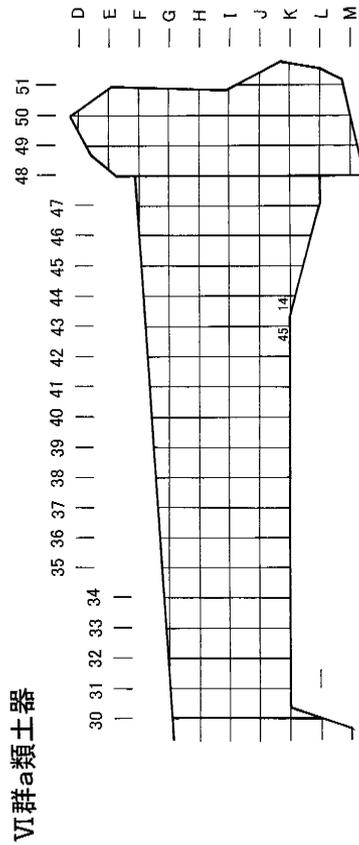
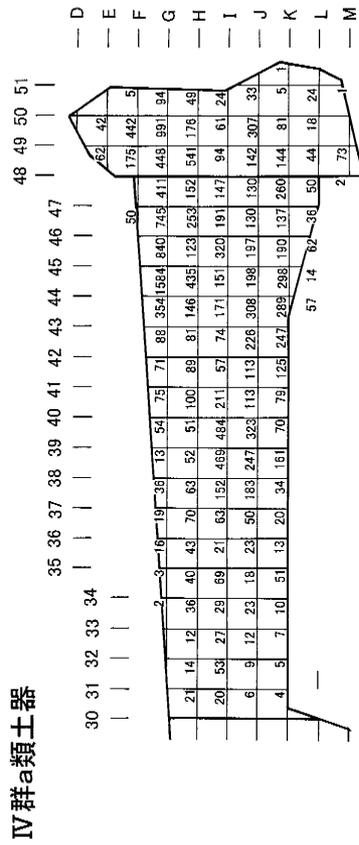


図 - 14 包含層出土の土器分布図

2 石器等(図 - 15~27、図版60~67、表 - 4・5)

3325点出土した。剥片石器580点、礫石器347点、石製品4点、剥片1879点、礫が515点である。層位的な分布としては、層から層を手掘りで2回掘り下げた段階までに1723点が出土するのが目立つ。層から層上位についておおよそ集中すると言える。平面的な分布については遺構が集中する40ラインより北西側に集中的に出土する。濃密に集中するのはそのうちで3か所ある。特に多いF-40・41区については、調査区外の台地平坦部に遺構が広がる可能性がある。F-48・49区は斜面の縁にあたり、廃棄場的な様相を考える。G-42~44区は遺構NH-17・19のすぐ脇にあたり、構築時の掘りあがり、ないしは生活の痕跡を示す可能性がある。50ラインより北西側は遺物の出土量が少ない。剥片石器の剥離調整の程度については章の石器分類に示した。

石鏃(図 - 15-1~17、26、図版60、表 - 4・5)

石鏃は49点出土した。層位的な出土状況としては、層から12点と層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階でさらに14点出土しているのが目立つ。素材別に見ると(()内は掲載番号)頁岩製(2・9、珪質頁岩は5・10~14・17)が27点と最も多くメノウ製(1・3)10点、チャート製(4・15・16)4点、黒曜石製(6~8)3点である。

凹基有茎のもの(14~16)は11点出土した。平基有茎の3点のうち2点(12・13)は凹基有茎に近い。凸基有茎のもの(3~11・17)は17点出土した。比較的大型で両面全面調整のもの(17)や、茎部の作り出しが不明瞭なもの(3)、先端が突き錐のように尖るもの(11)、使用が著しかったためか先端平面形が鈍角のもの(4~6)そのうちで茎部が小さく舌状に張り出すもの(4・5)など、形態は多様である。10の基部付け根にはタール様のものが付着する。掲載遺物以外についてもタール様のものが付着して出土した石鏃は2点ある。それらはすべて凸基有茎だが、後述する特殊なかえしを持つものは含まない。折損品は6点出土する。尖基鏃の範疇に入りうるもの(2)も1点あるが側縁が潰れており凸基有茎のものを製作する際素材の粒子が粗いため縁辺が潰れた可能性が高い。

出土した石鏃のうち特徴のある製品として、両面全面に調整がおよび、特殊なかえしを持つもの(12~17)が挙げられる。両面全面調整で、かえしに微妙な段を持つ。12・14・16に顕著である。平基有茎(12・13)が2点、凹基有茎(14~16)が4点、折損品にも2点含まれる。類似のもので、凸基有茎のものについても17の様に側縁のかえしよりの部分が微妙にノッチ様になるものが2点ある。

石鏃の平面的な分布の特徴としてははG-43区を中心に集中する事が挙げられる。石器全体からみても比較的集中する場所である。G-43区からは未成品が4点出土している。そのうちで、1は未成品である。周田からは1と同一母岩のものが19点出土している。さらに2点の石鏃未成品が含まれる他に、石核、Rフレイク、スクレイパー、フレイク等が合わせて13点出土している。この石鏃が集中するあたりで、剥片剥離・石器製作がなされたのであろう。

石槍又はナイフ(図 - 15-18~22、26、図版60、表 - 4・5)

石槍又はナイフは7点出土した。すべて頁岩製(18・19は風化した頁岩、20・21は珪質頁岩)である。層位的な出土状況としては、層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階で4点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としてはF~I-40~47区から1点ずつ出土し、Fラインに比較的多い事が挙げられる。凸基有茎のもの(18~22)が7点出土する。凸基有茎のものうち茎が明瞭なもの(18・19)が3点、うち1点は茎部のみの残存である。特徴的なものとしては、茎部が突起様、あるいは微妙な舌状に作られるもの(20~22)が3点出土(すべてFラインから)している。うち2点(20・21)は折損を再生したものか、先端の正面観平面形が鈍角である。これらの形状は石鏃4・5

に近似する。寸法上の規格から別分類とした。22は茎が特に不明瞭なものである。

石錐（図 - 15 - 23・24、 26、図版60、表 - 4・5）

石錐は4点出土している。層位的な出土状況としては、比較的下位の包含層 層から2点出土している。平面的な分布の特徴としてはF～H - 40～49区から散点的に1点ずつ出土する事が挙げられる。突錐の範疇で捉えられるもの（23・24）が2点ある。いずれも頁岩製で、24は珪質頁岩である。残る1点は黒曜石製の石鏃未成品の基部にあたる部分の潰れ痕跡に石錐の可能性がある。

つまみ付きナイフ（図 - 16 - 25～35、 26、図版61、表 - 4・5）

つまみ付きナイフは24点出土した。層位的な出土状況としては、層の上面から手掘りで3回掘り下げた段階までで16点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては40ラインから北西側に散点的に出土する事が挙げられ、隣り合うG 47・H 48区に比較的集中している。これらのうち3点は剥片に極めて簡単に調整を施したものである。素材の石質は頁岩製（25～32・35そのうち25・28・29以外は珪質頁岩）が21点、メノウ製（33・34）が3点である。縦長剥片素材のもの（25～32）が10点で、明らかに横長剥片を用いているもの（35）は3点ある。それらを除いて、両面調整のものが3点出土しておりそのうちの2点（33・34）はメノウ製で、つまみ部分のみ両面全面調整である。そのうち1点（33）は鋭利な先端部を持つ。つまみを含めた側縁が両面調整のもの（35）が1点ある。極浅い調整が縁辺に施されているもので、未成品の可能性もあるもの（31）は5点ある。折損品でつまみ部分のみの残存するものは3点あった。

縦長剥片素材を使用するもの（25～32）で、片縁調整のもの（28・29）は2点、縁辺全周に調整が及ぶもの（25）は2点、両縁調整のもの（27・30）は7点あり、そのうちで、一側縁に急角度の刃部を持つもの（27）が1点、端部のみが片面全面調整のもの（25）が1点ある

スクレイパー（図 - 16・17 - 36～45、 26、図版61～62、表 - 4・5）

スクレイパーは147点出土している。層位的な出土状況としては、層から24点と層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階でさらに33点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては37ラインより北西側についてほぼまんべんなく出土する事が挙げられ、隣り合うG 43・44区、F 45区に比較的集中する。ただし細分器種レベルで、特に集中する傾向はない。

用いている石材は頁岩（36～38・40・41・43～45、44は風化した頁岩、41・43・45以外は珪質頁岩）が128点と最も多く、メノウ製（39）の13点がそれに続く。流紋岩製のもの（42）もある。剥片素材としては縦長剥片を使用したもの（36～41）が目立ち、50点の出土である。そのうち片縁のみの加工（37・39・41）が17点で、そのうち端部にも加工が及ぶもの（37）は1点、両縁に加工が及ぶもの（36・38・40・45）は31点でそのうち端部にまで加工が及ぶものは4点、ほぼ縁辺全周に加工が及ぶもの（36）は2点である。尚、剥片素材の形状が不明なもの（42・44）も多いが、明らかに横長剥片を用いているもの（43）は7点である。

剥片素材の縁辺を極浅く調整したもの（39）は44点である。そのうち急角度の刃部を有するものは3点、である。それらのうちで、折損しておらず、極めて簡単に、一側縁のみに加工を施すものは16点である。縦長剥片に極浅い調整を施したものは20点である。

相対的に明確な調整（目安として石器幅の8分の1以上の剥離が規則的に連続するもの）を持つもの（36～38・40・42・43）を持つスクレイパーないしはその破片は91点である。そのうち石器の正中線に至るまでの深い調整によって刃部を形成するもの（36）は7点で、そのうち両面調整のものは3点である。7点のうち筒状石器が3点ある。

明確な調整を持つ91点は、折損したものを除いて、「急角度の刃部を持つもの」、「筒状石器ないし

はそれに類するもの」「背面観から見て曲線的に張り出す形状の刃部を持つもの」「両面調整の刃部を持つもの」に分けられる。これらの分類に当てはまらないもののうちで、縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して「両側縁に刃部を持つもの」と「片縁に刃部を持つもの」に分けた。

「急角度の刃部を持つもの」は22点出土し、搔器の可能性のあるもの(36)は5点である。21点のなかには、背面観からみて側縁に特に曲線的な刃部を持つもの1点、と両側縁に刃部を持つものが2点ある。「篋状石器ないしはそれに類するもの」は9点出土し、そのうち両面調整のものは4点、篋の角にあたる部分が1か所しかないもの(37)は1点である。「背面観からみて、側縁が曲線的に張り出す形状の刃部を持つもの(43)」は上記の2分類に含まれるものを除外してある。9点の出土があり、うち両面調整のものは4点である。「両面調整の刃部を持つもの」は上記の3分類に含まれるものを除外してある。13点の出土があり、両側縁に刃部を持つもの(38)は3点である。この中には両側縁とも両面調整のものはない。

「縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して両側縁に刃部を持つもの」は26点出土した。両側縁とも確たる調整が巡るものは14点で、そのうち端部にも調整が及ぶものは6点である。片縁のみ確たる刃部を持ち、もう片縁は極めて浅い調整のもの(40)は8点ある。そのうち、端部に調整が及ぶものは1点である。背面の側縁に片面調整があり、対となる側縁の腹面側に調整が及ぶものが4点出土している。「縦長剥片のように平行する両側縁を持つ剥片に対して片縁に刃部を持つもの」は13点出土している。

なお、剥片石器および剥片の接合は行ったが、接合しなかったスクレイパー片には、つまみ付きナイフの折損品が混在する可能性もある。そして、スクレイパー片に分類した小型のものの中には、石鏃未成品の可能性を持つものが2点ある。

両面調整石器(図 - 17・18 - 46~50・53・55、 26、図版63・64、表 - 4・5)

両面調整石器は20点出土した。両面から調整が入り、縁辺に使用痕が断定できないもので、石核の性質を備えている可能性がある、又は他の分類に当てはまらないものをここに分類した。層位的な出土状況としては、層および層上面から6点、層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階で3点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては40ラインより北西側に散点的に分布する事が挙げられ、F 40区、F 48区に比較的集中する。これは包含層出土石器の集中か所とほぼ合致する。素材の石質は頁岩製(46~50・53・55)が17点、メノウ製が3点である。接合資料としては、F - 48c区 層上面とF 50 b区 層の1点ずつが接合したもの(46)、F - 48 - c区 層上面とF - 49 - a区 層、F 48 b区 層上面出土遺物がそれぞれ1点ずつ接合したもの(47)がある。J 46区 層から同一母岩の両面調整石器片3点とRフレイク5点が出土している。接合した資料を2点図化した(48・49)。K 47区 層からフレイク2点、Rフレイク2点、両面調整石器片の可能性が高いものがそれぞれ2点ずつ出土しており、そのうち3点が接合している。

石核(図 - 17・18 - 51・52、 26、図版63・64、表 - 4・5)

石核は80点出土した。打面が顕著で、剥片剥離面ないしはそれに準ずるものが認められるものである。連続して、定型的な素材を剥離したと考えられるものはなかった。層位的な出土状況としては、層から22点、層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階で35点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては、F 40・41区、および隣り合うG・H - 44、I - 43区に集中する事が挙げられる。これは包含層出土石器の集中か所とほぼ合致する。素材の石質は頁岩が47点、メノウが26点である。I 44区とF 41区から出土した石核片が1点ずつ接合している。また未掲載のものとして、接合はしなかったがG 44区から同一母岩の可能性が高いフレイク2点と石核1点が出土している。

ピエス・エスキーユ(図 - 18 - 56・57、 26、図版64、表 - 4・5)

ピエス・エスキーユは7点出土した。上下両端に潰れ痕跡があるもの、どちらかの端部から裂けるように剥離が及ぶものを選んだ。側縁に調整が連続するものはない。層位的な出土状況としては、層の上面から手掘りで2、3回掘り下げた段階で3点、層の下位で1点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては37ラインより北西側に散点的に分布する事が挙げられる。素材の石質は頁岩製(56)が3点、メノウ製(57)が4点である。

Uフレイク(図 26、表 - 4)

Uフレイクは151点出土した。潰れている、連続して欠けている、など的人為的な使用痕が認められるものを当てはめた。層位的な出土状況としては、層から34点、層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階までで44点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては41ラインより北西側からまんべんなく出土する事が挙げられる。その範囲で、まとめて出土するのはFラインである。素材の石質は頁岩が132点、以下多い順番として、メノウが15点、黒曜石が2点と続く。

Rフレイク(図 - 17 - 48・55、 26、図版63・64、表 - 4・5)

Rフレイクは91点出土した。連続して剥離された痕跡を持つものを当てはめた。層位的な出土状況としては、層から24点、層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階までで12点出土しているのが目立つ。平面的な分布は43ラインより北西側に集中する事が挙げられる。素材の石質は頁岩が76点、以下多い順番として、メノウが10点、黒曜石とチャートが2点ずつと続く。48と55については接合関係と出土状況から、両面調整石器に関連する資料である。

フレイク(図 26、表 - 4)

フレイクは1879点出土した。人為的に母材から打ち剥がされたもので、UフレイクやRフレイクを始めとして石器分類にあてはまらないものをここに分類した。層位的な出土状況としては、層から466点、層の上面から手掘りで2回掘り下げた段階までで646点出土しているのが目立つ。石質は頁岩製が1459点、以下多い順番として、メノウが385点、チャートが12点、黒曜石9点と続く。

石斧・石のみ(図 - 19 - 58~64、 26、図版64、表 - 4・5)

石斧は24点出土した。層位的な出土状況としては、層から5点、層の上位、手掘りで1、2回掘り下げた段階までで7点出土しており層の下位、手掘りで4回掘り下げた段階から層にかけて3点出土しているのが目立つ。平面的な分布は40ラインより北西側で散点的に出土する事が挙げられる。その範囲で、比較的Fラインよりに集中する。素材の石質は緑色泥岩製(60~62・64)が12点、粘板岩製(58・63)が3点、片岩製(59)が9点である。

成形、調整方法が確認できるものは8点のみで、そのうち刃部の折損しているものが6点で、刃部が残存するものは2点(59・60)ある。また、刃部の破片が2点ある。これらの刃部形態は弱凸強凸刃が3点で、そのうち円刃(59・60)が2点、残部から直刃の可能性のあるものが1点ある。他に残部から円刃で弱凸強平刃の可能性のあるものが1点ある。

成形、調整方法として、全面に研磨が及ぶものが多い。敲打調整後に研磨したものが2点(59・60)、打ち欠き調整後のもの(63)が1点、擦り切り痕跡が明瞭なもの(58)が1点ある。61は素材本来の形状を生かしたものか簡単に打ち欠き後、全面研磨を施す。62は研磨のみで成形・調整している可能性がある。未成品は4点出土し、ひとつは板状の節理痕を打ち欠いただけのものであった。64は未成品を製作途中でたたき石に転用した可能性がある。

接合関係としては、H 31区とG 42区出土のものが接合し、G 32区と遺構NH 17出土のものがそれぞれ接合した。

石のみの可能性があるものは遺構P 62と接合したF 43区出土破片1点のみである。

北海道式石冠（図 - 20 - 65～71、- 26・27、図版65、表 - 4・5）

北海道式石冠は36点出土した。層位的な出土状況としては、層から5点、層の上位、手掘りで1, 2回掘り下げた段階までで6点出土しており層の下位、手掘りで4～5回掘り下げた段階から6点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴としては、48ラインより北西側に集中する事が挙げられる。またF 43区やH 41区のそれぞれの周辺、隣り合うH 35・I 36区にそれぞれ分布のまとまりがある。縄文時代前・中期の遺物であるためか、分布状況が独特である。素材としている石質はほとんど安山岩である。1点は不明の火成岩製である。

成形方法としてほぼ全面を敲打で成形する、あるいはその可能性が高いもの(65～68)が23点ある。短軸で割った楕円礫に敲打で溝を作る、あるいはその可能性が高いもの(69・70)は11点ある。他に未成品の可能性が高いもの(71)が2点出土した。71は打ち欠き調整後、敲打調整をほぼ全面に施すものである。

全面敲打調整23点のうち形状に規格性があるものとしては、持ち手の溝に対して北海道式石冠を直角に断ち割った際、持ち手頂部の断面形態が真円の弧が描くラインに近いもの(65・66)が8点出土している。そのうち素材の形状を生かし、頂部には敲打が巡らないもの(68)が2点ある。67は正面観が方形に近く、独特である。

偏平打製石器（図 - 21 - 72～80、- 26・27、図版65、表 - 4・5）

偏平打製石器は69点出土した。層位的な出土状況としては、層上面から8点、層から2点、層の上位、手掘りで2～3回掘り下げた段階で11点出土しており層の下位、手掘りで4～5回掘り下げた段階から8点出土し、層から6点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴は39区の列・42～46ライン・47～51ラインの3か所にまとまっている事が挙げられる。素材の石質は安山岩(72～80)が65点で、そのうち豊浦町、虻田町で多く見られる赤褐色で、板状節理が特徴的な安山岩製のものが2点ある。凝灰岩製が2点、濁川火砕流起源で、発泡性の強い凝灰岩か軽石が判然としない素材のものが1点ある。なお、機能部としたのは、偏平打製石器に特有な、石器の正面観に対する底面部(ものによっては頂部にも)に残る敲打痕ないしは擦り痕のある部分を指す。機能面としたものは作業によって面が形成されるに至っている場合を指すものとした。

完形品の形状が判るものについて、石器そのものの正面観が、半円形のもの(72・73・74・78)が23点、楕円形のもの(79)が5点、礫素材の形状を留めるもの(75)が10点あり、素材を生かした結果、三角形を呈するもの1点などがある。また素材に打ち欠き調整を施したのみで未成品の可能性が高いもの(76)が3点出土している。

機能部の形状としては、石器正面観から見て直線的なもの(72～74)、曲線的なもの(75・78)、上下に機能部を有するもの(77～80)の3種類に分かれる。底面(機能面)については、石器の底面観について機能部が、明瞭な面を持つもの(73)、機能面があるものの明瞭とは言いがたいもの(74・75)、面部分を持たずいわば刃部様の機能部を有するもの(78)の3通りに分けられ、刃部様のものには、厚さが3.4cm以上の肉厚で重量感のあるもの(1000gを目安として、章に掲載したH - 2 - 9、P - 11 - 4)などがある。

石器正面観から見た機能部について、直線的なものは49点出土した。それらのうち、明瞭な機能面を持つものは10点(うち6点が半円状)あり、そのほとんどが長軸方向の擦痕(73)を持つが、敲打の方向を反映しているものと考えられる。1点のみ機能面短軸方向に擦りが確認でき(72)、いわゆるすり石としての機能が明瞭なものがある。底面部の全面に機能面が及ばないものは15点(うち5点が半

円状)出土した。やはり、そのほとんどが長軸方向の擦痕を持ち、それについては、敲打の方向を反映しているものと考え。刃部様の機能部を有するものは25点(うち8点が半円状)出土した。そのうち5点(うち2点が半円状)は厚さのあるタイプである。

石器正面観について機能部が描くラインが曲線的なものは3点出土した。面の明瞭なもの、不明瞭なもの、刃部様のもの(78)がそれぞれ1点ずつ出土している。

石器正面観について頂部と底部にふたつの機能面を持つものは7点出土している。その内訳としては、頂・底部とも直線的な刃部様を呈するものは3点出土、片方が曲線的でもう片方が直線的な刃部様のもの(77・80)は2点、両方が直線的で機能面を有するもの(79)が2点ある。

たたき石(図 - 22・23 - 81~95・100、- 26・27、図版66、表 - 4・5)

たたき石は106点出土した。層位的な出土状況としては、層から13点、層の上位、手掘りで1~3回掘り下げた段階までで37点出土しているのが目立つ。平面的な分布は36ラインより北西側に分布する事が挙げられ、G 42・43、E・G 49区に比較的集中する。素材の石質は安山岩が大半を占め(83~95・100)、流紋岩製が1点、凝灰岩製が2点、泥岩製(82)が2点出土する。

礫素材の選択としては楕円礫(81・83・89・92・93)が30点と目立つ。その中には、不整なもの10点や偏平なもの1点を含む。他に素材となる礫の形状を指摘できるものとしては、亜角礫(82)8点、偏平礫(85・86)6点、棒状礫(87)6点、球礫(94)3点があり、他は不整な形状の礫である。

機能部の形態としては所謂、凹み石とされるもの(90~93)が5点出土しており、表裏面で凹み部分同士が対応する(90・93)ないしは、凹みと敲打痕が対応(91・92)している。他にある程度定型的なものとしては、顕著な打ち欠きによる調整を持つ「礫器」とでもいうべき石器(81~84)が12点出土している。両面調整のものは1点、他は片面調整である。片面調整のうち、礫の両端に調整がおよぶもの(81)は4点ある。類似のものとして、偏平打製石器の項目で刃部様と称した機能部を側縁に持つもの(84)が1点出土している。

他に、礫の端部のみを使用(85・94)するもの36点、そのうち一箇所のみ用いるもの(94)は23点である。礫の側縁を使用するもの(87~89)は17点でそのうち一辺のみを使用するもの(87・88)は12点である。礫の平坦な面を用いるもの(100)は6点ある。100は機能部についてかすかな擦りの後、敲打が加わっている。縁辺と端部を使用するもの(86)は5点、亜球礫のほぼ全面に敲打が巡るもの(95)は1点である。複合的な機能部を有しているものは、両端と側縁を用いるもの3点、縁辺と面を用いるものは3点、一端と面を用いるものは2点出土した。割礫の割面を用いるもの(例示するならば、91の端部・被熱礫に分類した113の端部のような状態)が7点ある。

すり石(図 - 23 - 96~99、- 26・27、図版66、表 - 4・5)

すり石は13点出土した。層位的な出土状況としては、層から5点、層の下位から2点出土しているのが目立つ。平面的な分布の特徴として33ラインより北西側から散点的に出土する事が挙げられる。素材の石質はすべて安山岩である。礫素材の選択としては楕円礫(96~99)が9点でそのうち3点が偏平なものである。他が球礫、亜球礫、不整な礫を選択しているものが1点ずつある。

機能部の状態としては表裏の面を微妙に用いているもの(97)が5点である。同一面について敲打後に擦痕を持つもの(96)が2点、礫の平らな一面を用いるもの(98)が2点、端部に機能部があるものが1点、一側縁を使用するもの(99)は2点ある。96は裏面の擦り面が特に顕著である。99は側縁の他に表裏面にも擦痕が認められる。

砥石(図 - 23 - 101・102、- 26・27、図版66、表 - 4・5)

砥石は10点出土した。層位的な出土状況としては、層上面と層から2点、層を2回掘り下げ

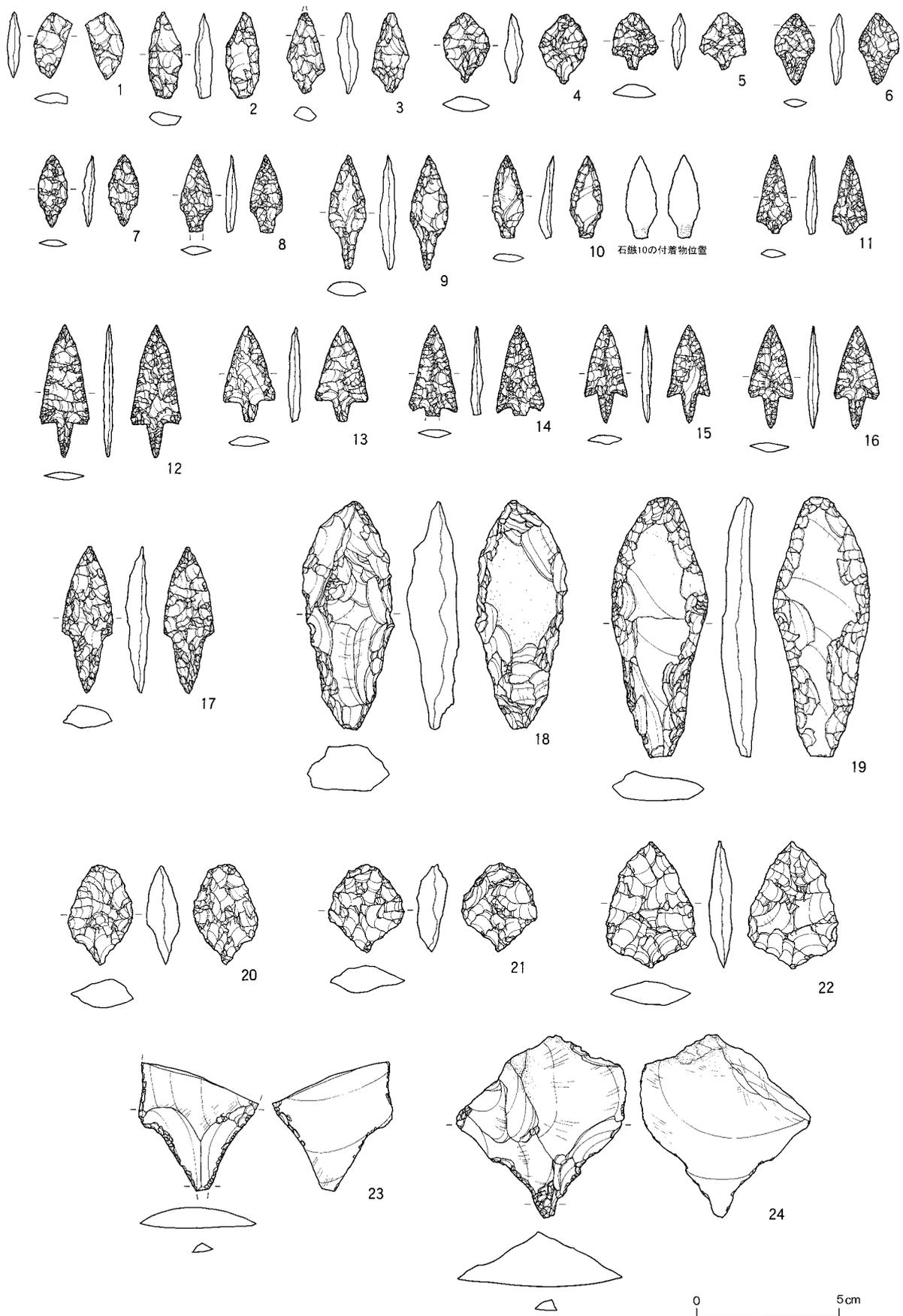


図 - 15 包含層出土の石器 (1)

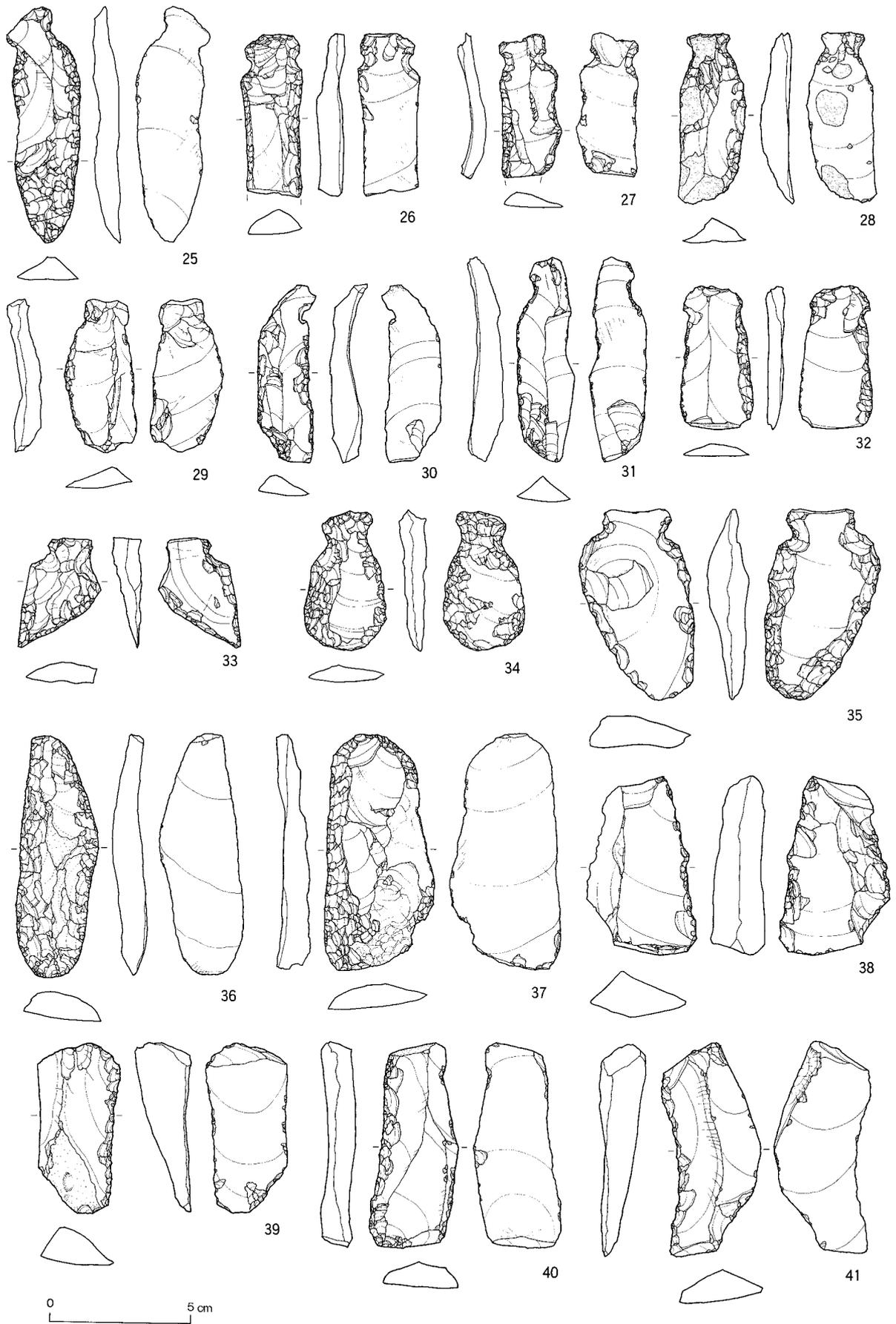


図 - 16 包含層出土の石器(2)

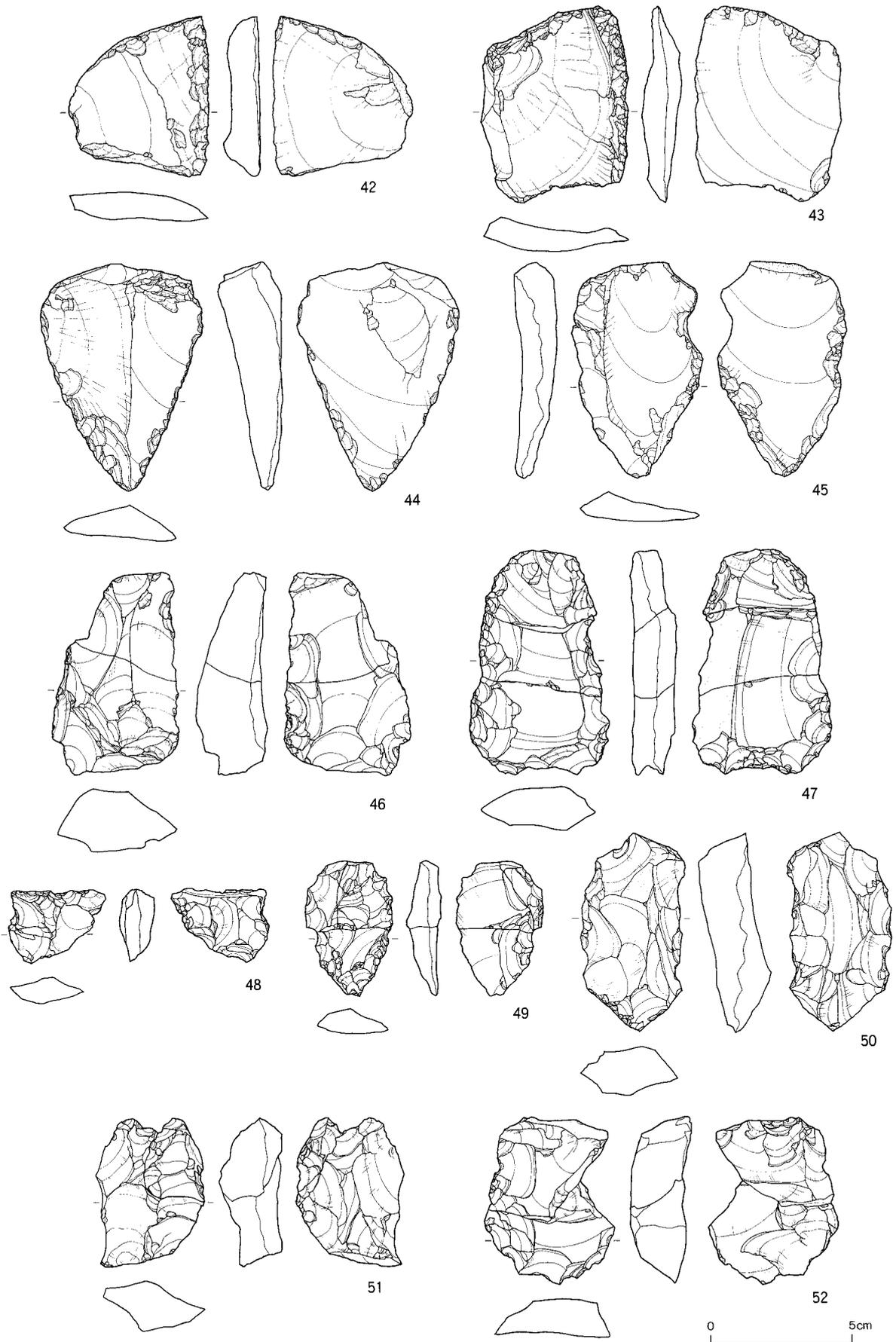


図 - 17 包含層出土の石器 (3)

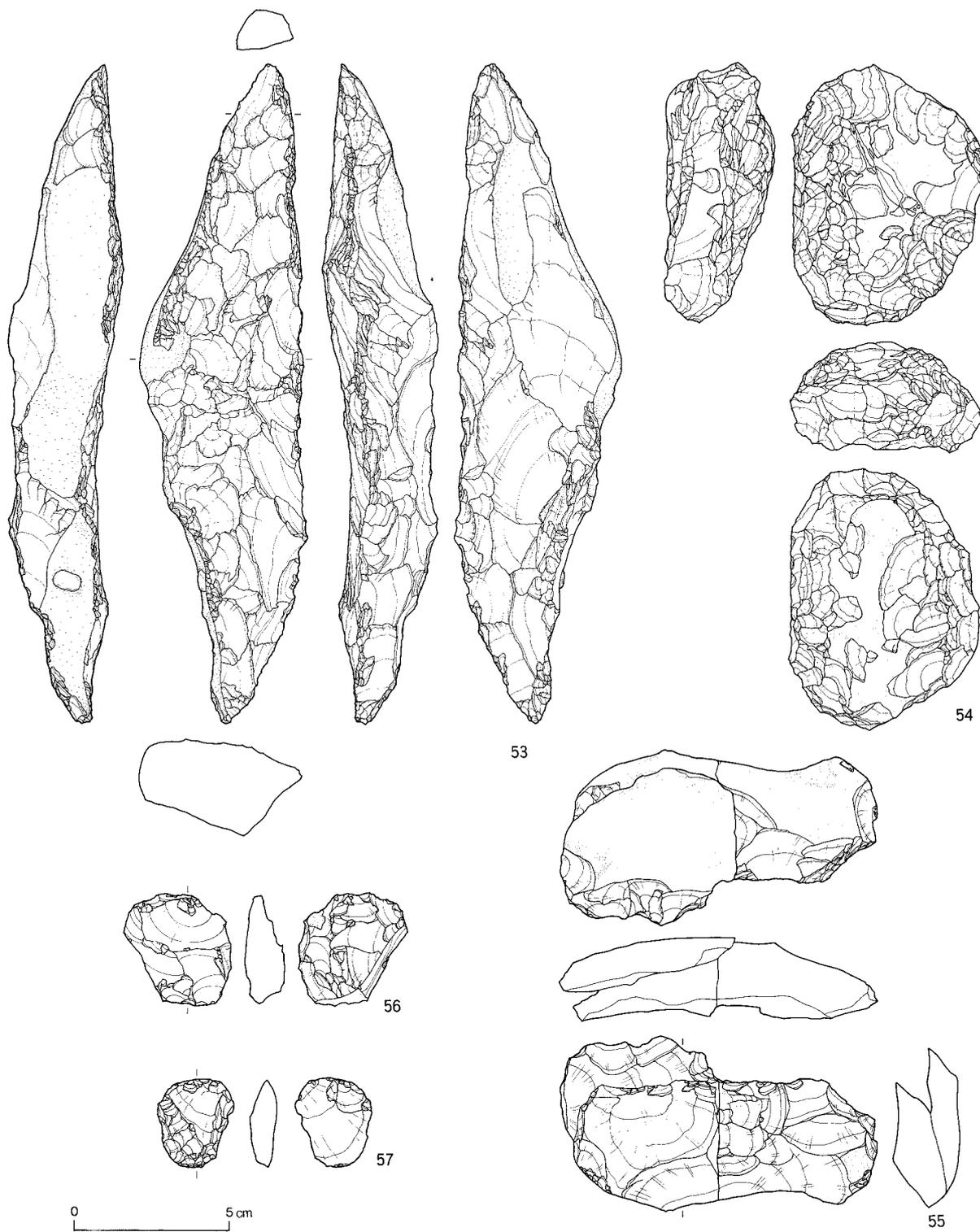


図 - 18 包含層出土の石器(4)

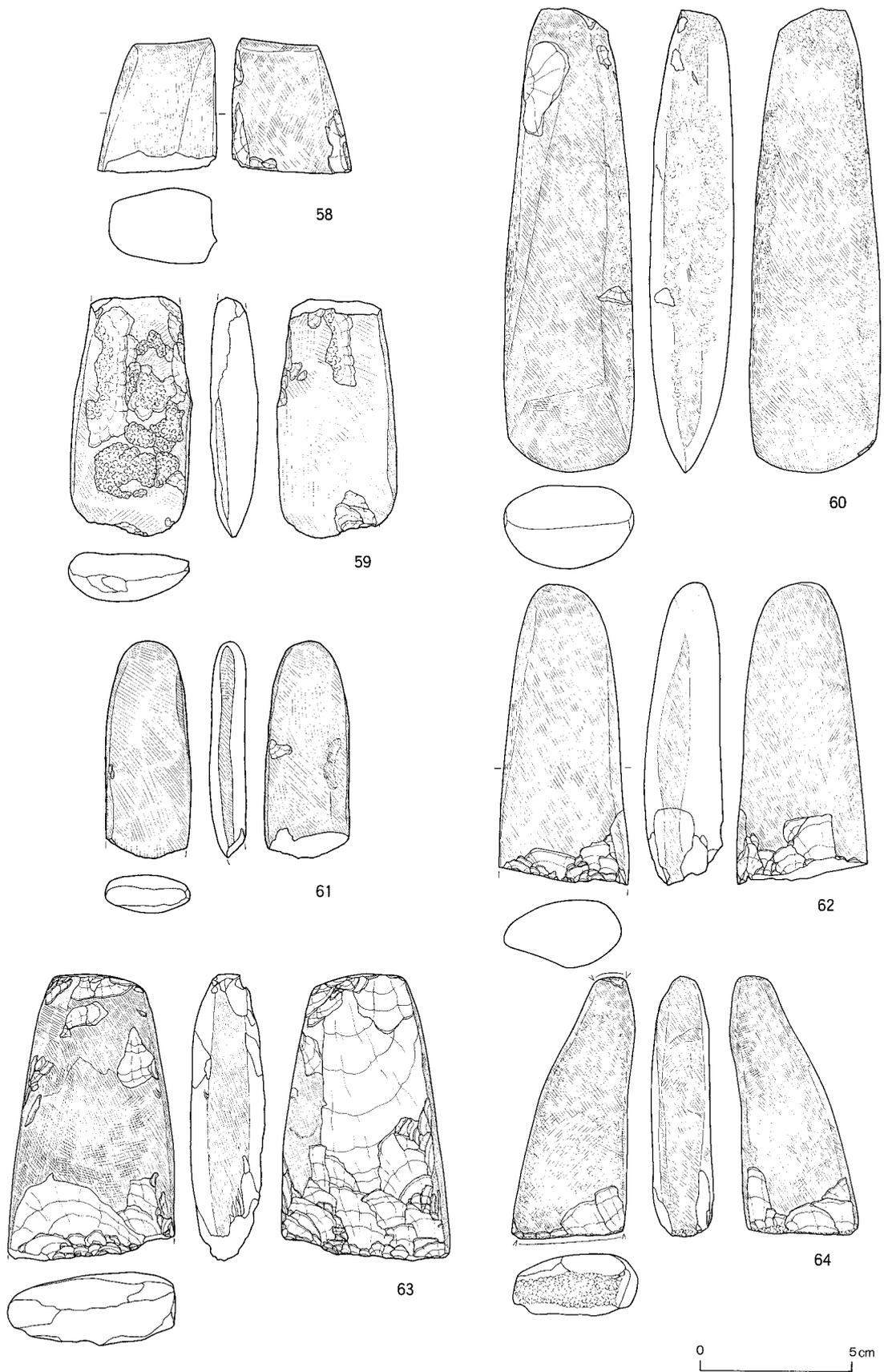


図 - 19 包含層出土の石器 (5)

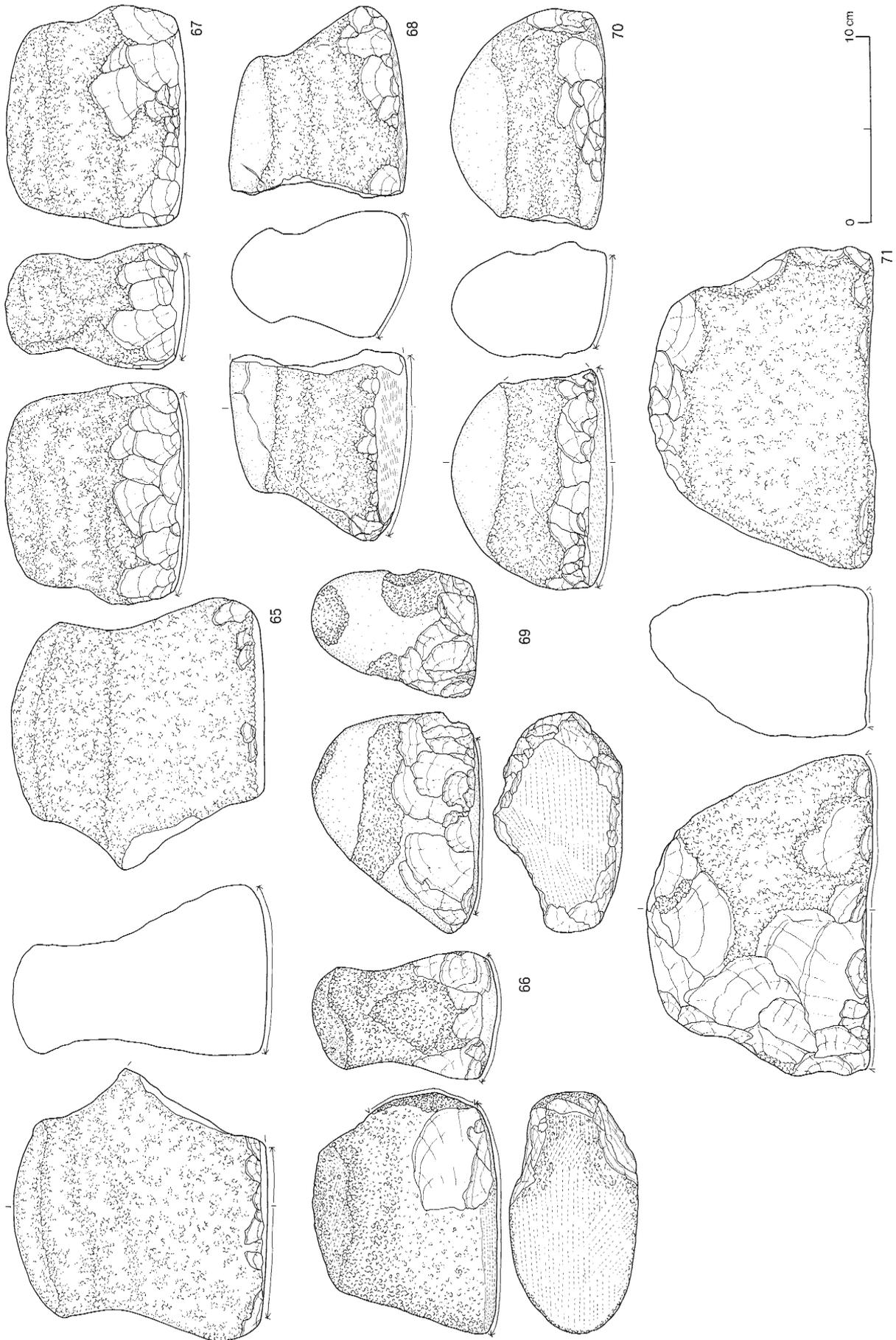


図 - 20 包含層出土の石器(6)

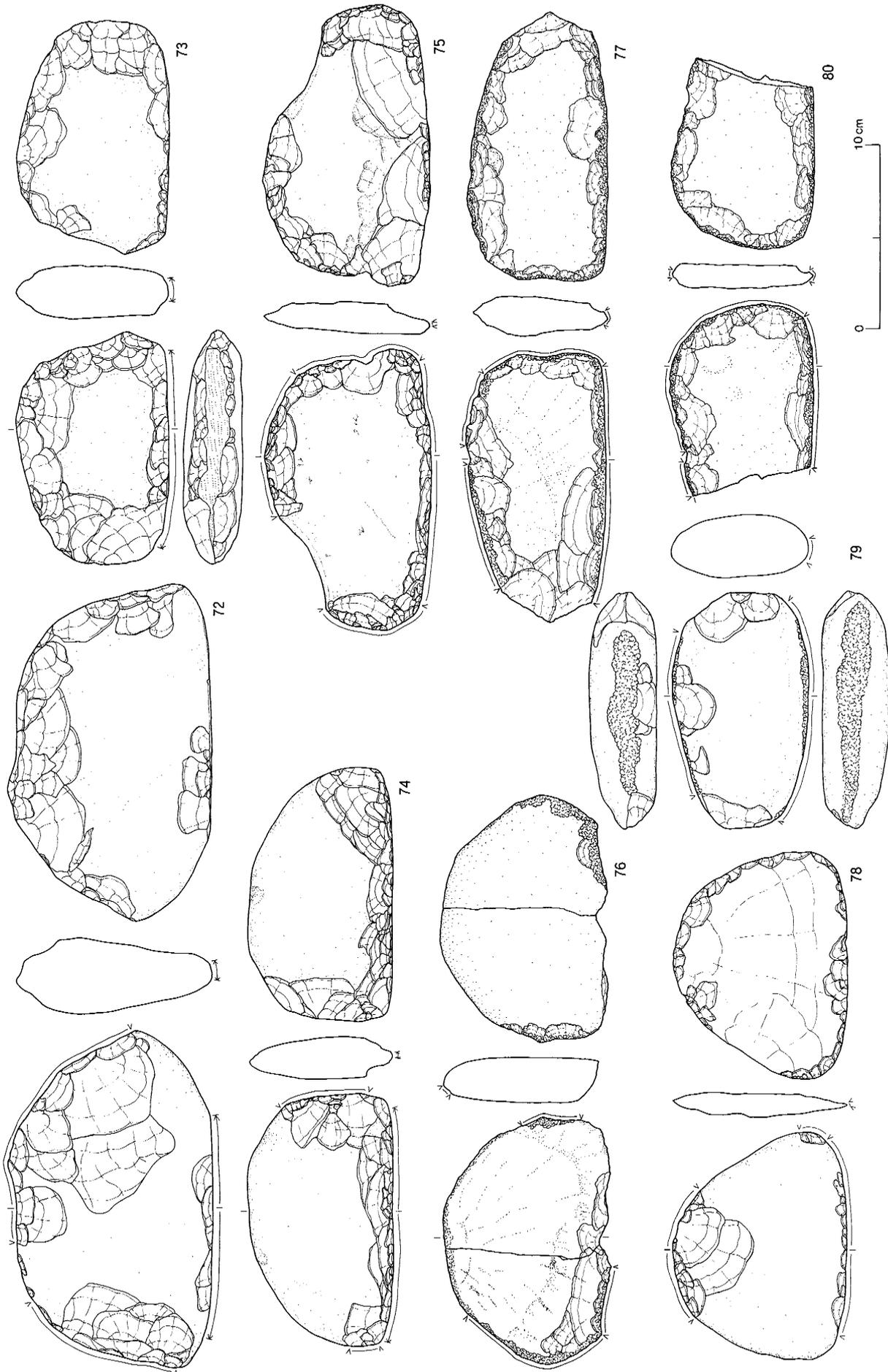


図 - 21 包含層出土の石器(7)

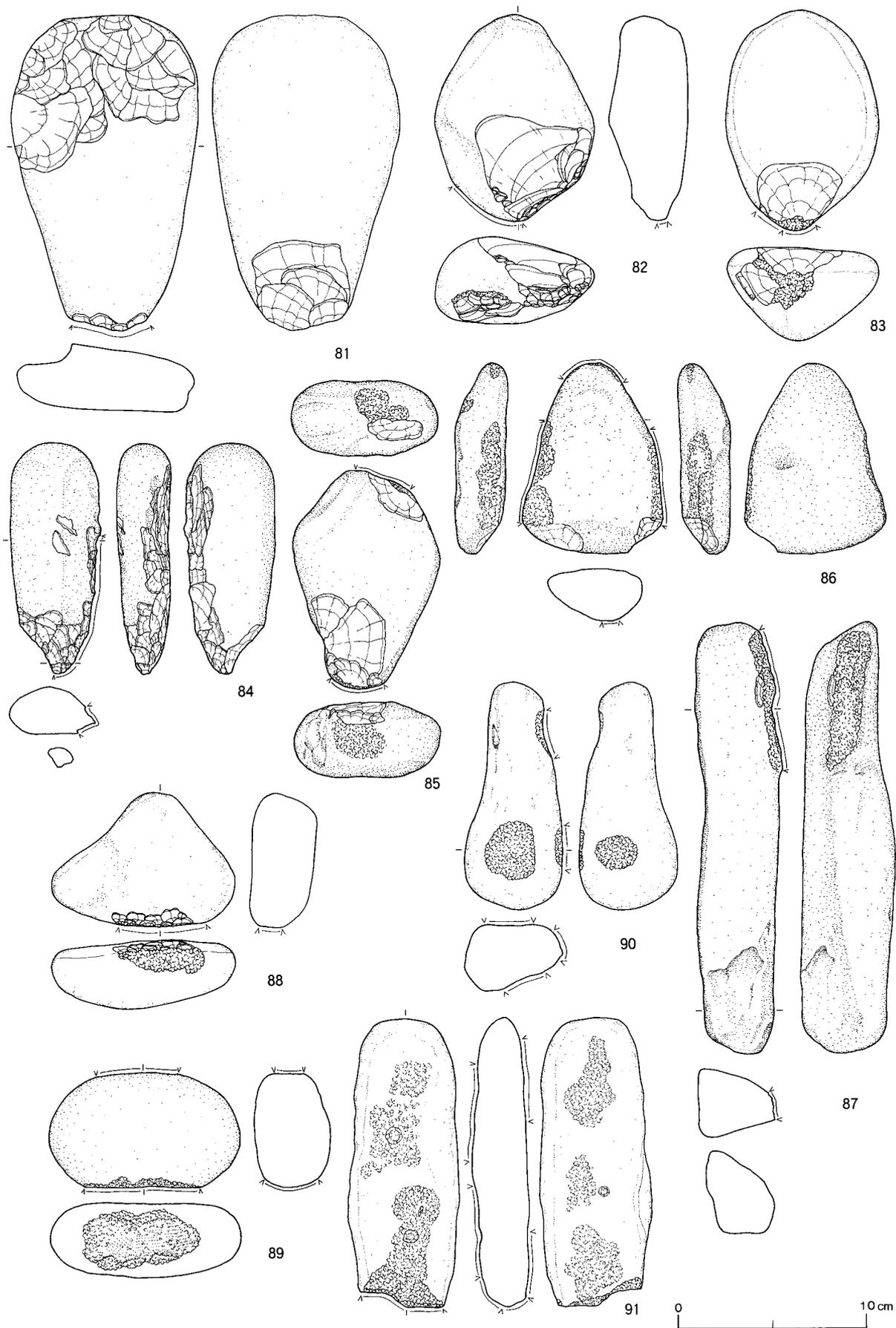


図 - 22 包含層出土の石器 (8)

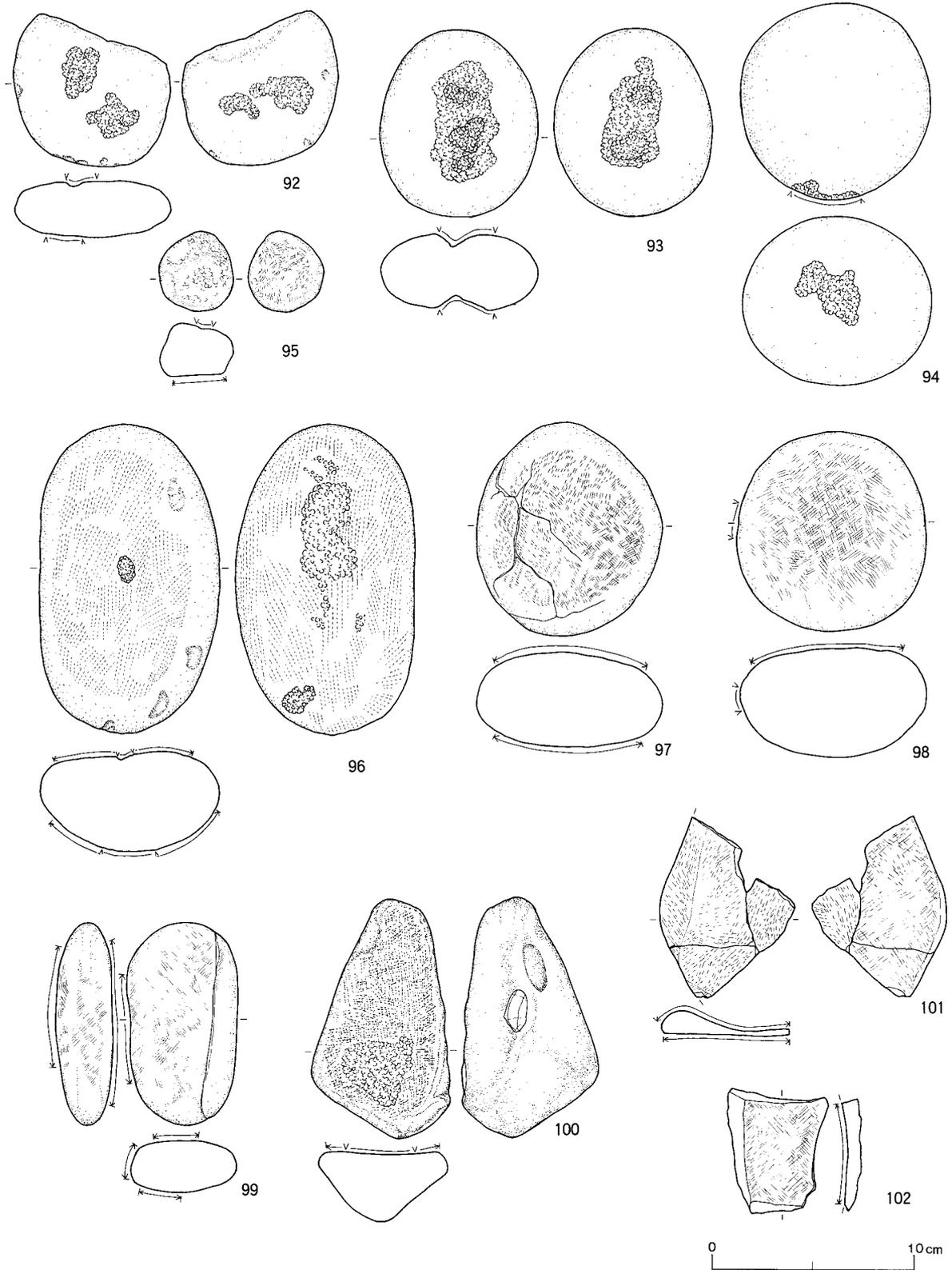


図 - 23 包含層出土の石器 (9)

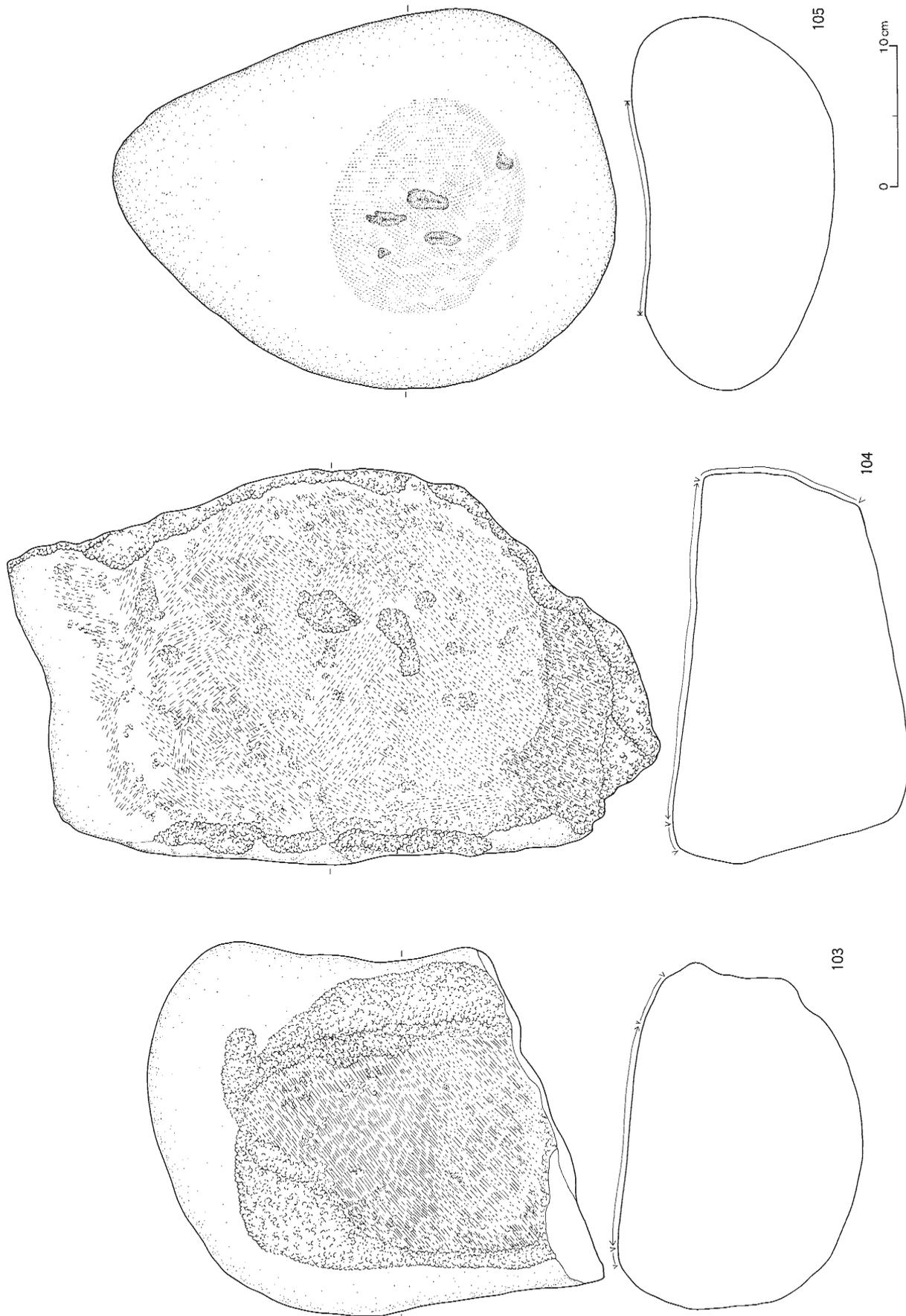


図 - 24 包含層出土の石器(10)

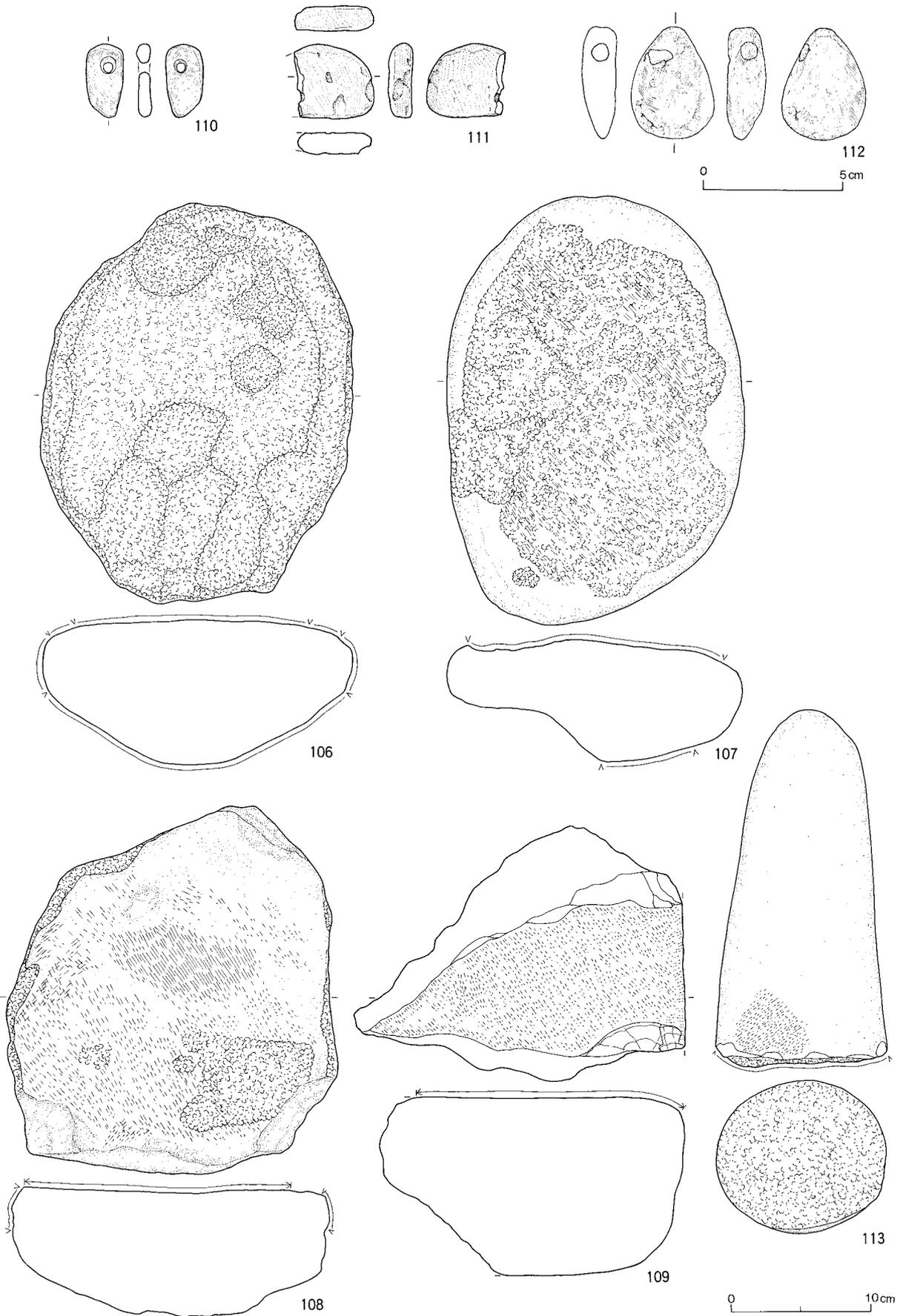


図 - 25 包含層出土の石器等 (11)

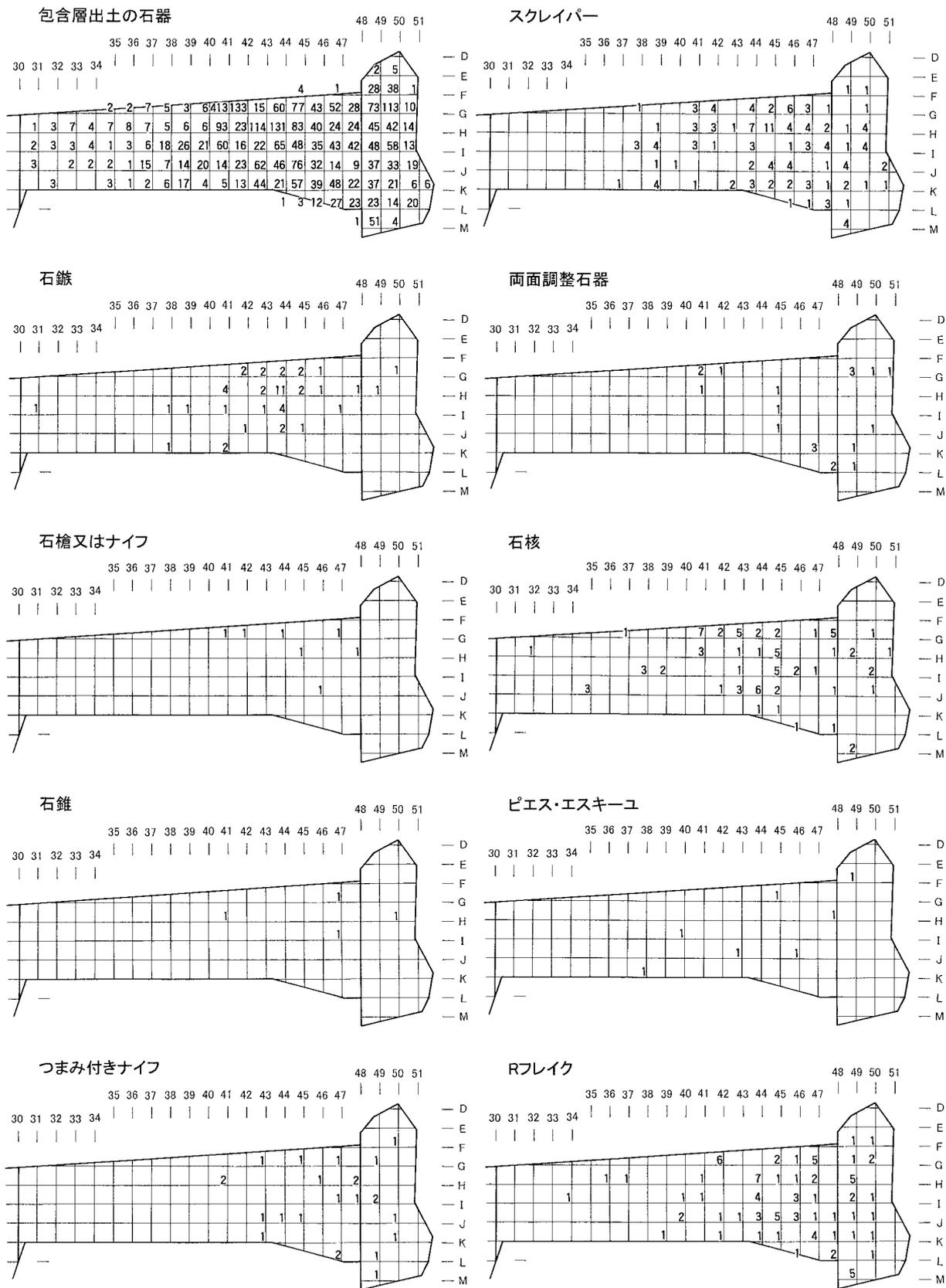


図 - 26 包含層出土の石器分布図 (1)

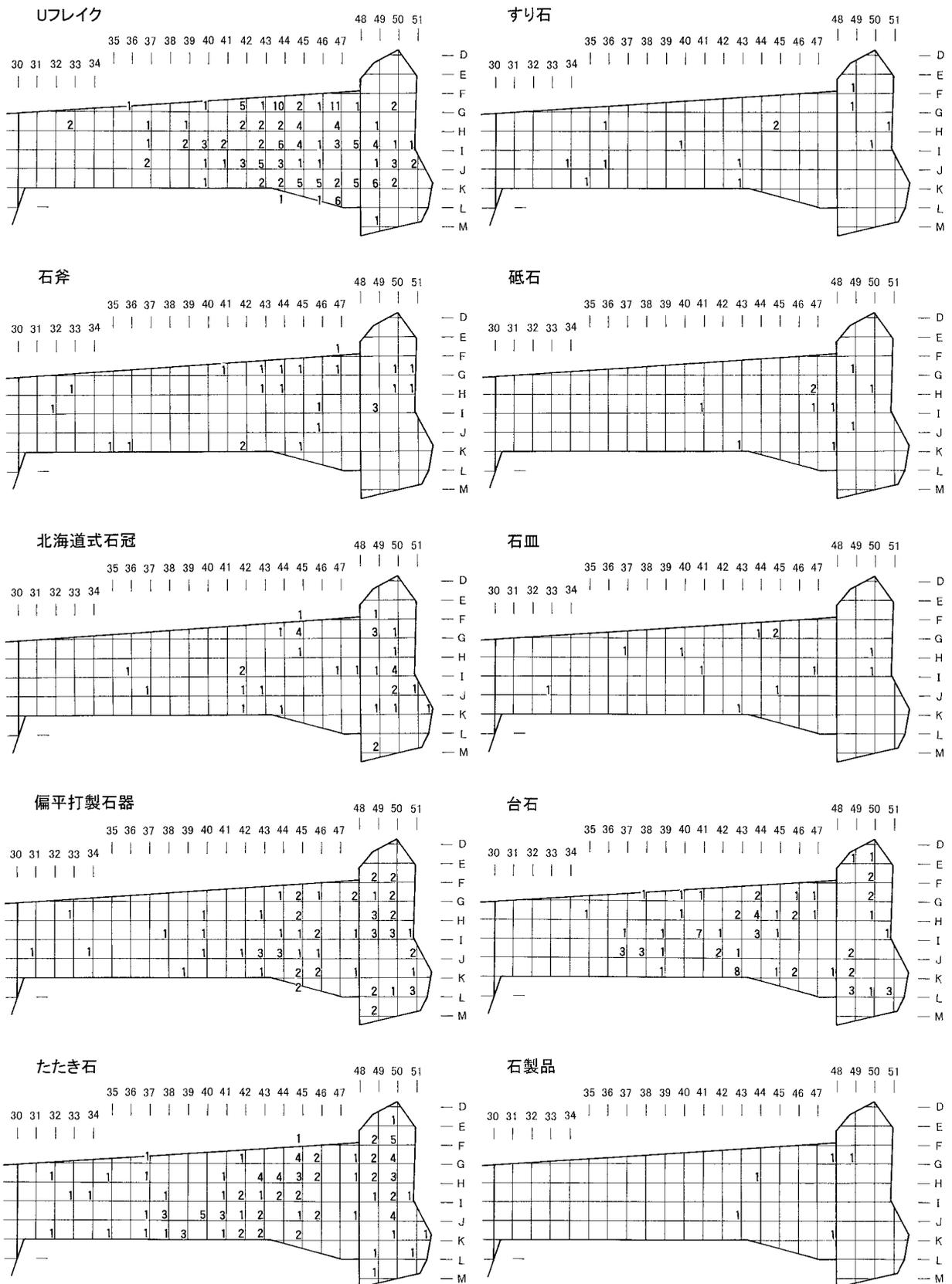


図 - 27 包含層出土の石器分布図 (2)

た段階で2点、層下位と層から1点ずつ出土している。平面的な分布の特徴としては40ラインより北西側から散点的に分布する事が挙げられるが、H 47区周辺に比較的偏る。素材の石質は安山岩・凝灰岩・軽石がある。凝灰岩製の3点(101)は接合した。軽石製のものは使用痕が顕著ではない。楕円礫の平坦面の一面を使用したものが2点出土しているが、すり石に類似する使用法と痕跡が認められるものもあり、単純に使用痕が顕著なものと言い換えることも可能である。101、102は機能面が顕著であり、凹面を形作る。

台石・石皿(図 - 24・25 - 103~109、- 26・27、図版67、表 - 4・5)

台石・石皿の類は88点出土した。楕円形をした顕著に凹む、皿部分を有する典型的な石皿の出土は105のみである。加えて、楕円礫を選択し、顕著な擦り面を持つものを石皿として、分類するならば、その定義に当てはまるもの(109)は12点あり、すべて安山岩製である。層位的な出土状況としては、層を1~2回掘り下げた段階で5点出土している。分布の特徴としては35ラインより北西側で散点的に出土する事が挙げられる。

上記の、石皿の定義に当てはまらないのものを台石としたが、破片については石皿の可能性が高いものもある。76点出土した。層位的な出土状況としては、層を1~3回掘り下げた段階で29点出土している。分布の特徴としては36ラインより北西側に所々(J 36・37区、H 40区、K 42区、I~K 48区、F 49区)に集中しながらまばらに分布する事が挙げられる。素材の石質はほとんど安山岩である。濁川火砕流起源と考えられる安山岩ないしはそれによく似る軽石製のもの(108)は8点出土している。台石としたものの中には北海道式石冠を作るための割礫かとも思われるものが6点ある。敲打痕が散点的に見受けられるが根拠に乏しいため、北海道式石冠未成品とはしなかった。機能面としては敲打痕を持つもの25点、かすかに擦痕を持つもの5点、敲打痕と擦痕の見られるもの(103・104・107)は25点である。縁辺に敲打調整を加えるものは4点あり、その機能面に敲打痕と擦痕を持つもの(106・108)が2点ある。表裏面とも確実に使用しているものは2点であった。図化した103・104・106~108は敲打で機能面を調整した後、擦痕を加えているか、あるいは、叩き引くような敲打作業を行っていたものと想定する。103は特に機能面の中央に顕著な擦痕がある。104は擦痕が特に顕著である。106は楕円形に形状を成形している。

使用痕のある礫・被熱礫(図 - 25 - 113、- 26、図版67、表 - 4・5)

使用痕のある礫・被熱礫は152点出土した。使用痕跡の大部分は敲打によるものである。被熱した使用痕の有る礫は13点、被熱礫は129点、加工痕の有る礫は10点出土した。

発掘で得られた礫は肉眼観察によって判断し、自然礫は現地で廃棄してきたが、特徴的な礫は取上げた。363点を取上げたなかで、加工痕はないが素材として選択してきた可能性のある原石は39点、加工痕のない軽石は8点、自然の作用で穿孔された小型の礫は3点ある。

113は顕著に被熱し、割面が敲打によって平坦に調整される。礫面の一部には擦痕がある。第二の道具である石棒に類似するものの可能性があるため掲載した。

石製品(図 - 25 - 110~112、- 26・27、図版67、表 - 4・5)

石製品は4点出土した。1点は遺構P 4出土遺物と接合した。110・111は軽石製で、偏平に研磨され、縁辺にも研磨が巡る。111は穿孔部分から折損している。いずれも両面から穿孔したものである。112はヒスイ製の玉である。材質は蛍光X線分析により糸魚川産の良質の硬玉である(章 1 参照)。正面観が滴状をした素材を選択する正面は礫の粗面により研磨が及んでいないか所が目立つ。素材の右側面から穿孔を行う。孔の中には穿孔時の旋条痕が残る。孔が左側面に到達した時点で止めている。穿ち止めたか所には亀裂が走り、素材のキメの粗さによるものとする。(大泰司)

自然科学的分析

1 濁川左岸遺跡出土ヒスイ製石製品の産地分析

藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこかの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということ調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこかの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2, 3), 4)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例⁵⁾が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリ - として、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉は北海道茅部郡森町字石倉町401ほかに位置する濁川左岸遺跡の調査区F - 47区の層（層より古い可能性もあり）から出土したヒスイ製石製品（遺物番号34番）1個について産地分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を

消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原産地分析で成功している⁴⁾非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダ - に置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。また、小型のヒスイ・碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した⁵⁾。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産⁶⁾、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これではぼつくとされていると思われる。これら原石の原産地を図1に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)などの軽元素⁷⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオブウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピ - クを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピ - クを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出する方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなからうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピ - クがFeのピ - クに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピ - クが見られ、Baのピ - クも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピ - クが観測されている。このCe

のピ - クは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときには有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピ - クが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピ - クが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表1、2に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表2の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピ - クが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピ - クが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図2はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入

れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。 はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Fe の値（横軸）2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。 は大佐産の、 は若桜産の、 は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピ - クが見られなかった場合、表2の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。 は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。 印の日高産および*印の引佐産ヒスイの分布の一部が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより（図3）糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図4）遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の分析結果

出土玉の比重が3.2以上（アルキメデス法）あり良質硬玉の可能性の範囲に入る。蛍光X線スペクトル（図5）には硬玉の主成分の一つのNa元素が観測されることから、この玉を硬玉製と判定した。また、分析できた含有元素の結果を表2に示した。この硬玉製玉の原産地を明にするために、これら分析値を各原産地の原石の元素比量Sr/Fe対Zr/Srの分布範囲と比較すると、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示す（図2）。また、Sr/Fe対Ca/Siでも、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示した（図3）。またNa/Si対Mg/Siの図4では、玉は糸魚川、大佐、若桜、神居コタンの重なる範囲に入っている。これら判定に使用した図と判定基準表1の比重の範囲およびBa元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を満たした玉の産地として、糸魚川・青海産硬玉を使用した玉と同一し、結果を表3に示した。

結 論

今回分析した濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品にはBa元素のピ - クがされず、比重も3.2以上あり良質の硬玉のようである。糸魚川産硬玉が多量に北海道に伝播した時期は縄文時代後期で、多くみられ、使用遺跡を抜粋して示すと例えば北海道千歳市美々遺跡から青森県大石平遺跡、岩手県大日遺跡、山梨県石堂遺跡、岐阜県西田遺跡、愛知県白石遺跡、三重県森添遺跡、大分県二反田遺跡、熊本県ワクド石遺跡、宮崎県学頭遺跡まで日本全国におよび、これら遺跡では糸魚川産ヒスイが尊重される共通の基盤を持っていたと思われ、糸魚川産地から遠くなるにしたがって、希少価値が増すと推測され本遺跡がヒスイの玉類を入手できる力（経済力）が大きかったことが推測される（図1）。

表1 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析 個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00 ~ 3.35	0.01 ~ 0.17	0.01 ~ 0.56	0.15 ~ 30	0.00 ~ 2.94	0.72 ~ 27.6
若桜産	12	3.12 ~ 3.29	0.01 ~ 0.91	0.03 ~ 0.59	3.45 ~ 47	0.00 ~ 0.25	4.33 ~ 48.4
大佐産	20	2.85 ~ 3.17	0.01 ~ 0.07	0.00 ~ 1.01	3.18 ~ 61	0.00 ~ 12.4	3.47 ~ 28.6
長崎産	3	3.16 ~ 3.23	0.01 ~ 0.14	0.17 ~ 0.33	0.02 ~ 0.06	4.30 ~ 16.0	
日高産	22	2.98 ~ 3.29	0.00 ~ 0.01	0.00 ~ 0.02	0.00 ~ 0.37	0.00 ~ 0.063	5.92 ~ 51.6
引佐産	8	3.15 ~ 3.36	0.04 ~ 0.04	0.00 ~ 0.03	0.03 ~ 0.33	0.00 ~ 0.018	36.3 ~ 65.9
大屋産	18	2.96 ~ 3.19	0.03 ~ 0.08	0.04 ~ 0.16	1.08 ~ 79	0.02 ~ 0.48	0.95 ~ 4.81
神居コタン産	9	2.95 ~ 3.19	0.02 ~ 0.49	0.09 ~ 0.17	0.04 ~ 0.22	0.12 ~ 0.85	2.22 ~ 17.3
飛騨産	40	2.85 ~ 3.15	0.01 ~ 0.04	0.00 ~ 0.00	0.02 ~ 0.10	0.00 ~ 1.24	12.7 ~ 28.5
ミャンマ産	26	3.15 ~ 3.36	0.02 ~ 0.14	0.01 ~ 0.26	0.09 ~ 2.5	0.01 ~ 23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND : 検出限界以下の濃度

表2 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素 (各元素が確認できた個体数の百分率)							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	Tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND : 検出限界以下 tr : 検出確認

表3 濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の元素分析値と比量の結果

遺物	分析番号	元素分析値の比量									
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe
玉	88308	0.132	0.189	0.14	0.43	2.896	0.05	0.006	0.01	0.013	0.562
JG-1		0.024	0.086	0.06	1.25	3.354	0.3	0.001	0.024	0.001	0.426

遺物	分析番号	元素分析値の比量							試料比重	試料重量
		Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr	Rb/Sr	Y/Sr		
玉	88308	0.313	0.01	1.07	0.41	0.45	0.17	0.01	3.248	24.12884
JG-1 ^{a)}		0.719	0.10	5.77	0.23	0.29	0.72	0.18		

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

表3 濁川左岸遺跡出土のヒスイ製石製品の元素分析値と比量の結果

遺物	分析番号	元素分析値の比量				総合判定
		図2判定	図3判定	図4判定	比重&基準(2) Ni/Fe判定 ^{a)}	
玉	88308	IT	IT	IT,OS,WK,KM	IT,IN,WK,HK,HD	糸魚川産

IT:糸魚川 WK:若桜 OS:大佐 NG:長崎 HK:日高 IN:引佐 OY:大屋
KM:神居コタン HD:飛騨

a): Ni/Fe比は日高産地および飛騨産地に同時に帰属された遺物の分類指標
(飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差) Ni/Fe=0.091±0.030
(日高産原石、14個の平均値±標準偏差) Ni/Fe=0.065±0.028

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ヶ原新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』,14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学,16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992)、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. *Journal of Archaeological Science* 19:357-373
- 6) 番場猛夫(1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録 No.18:11-15
- 7) 河野義礼(1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石磁物鉱床学雑誌 22:195 - 201

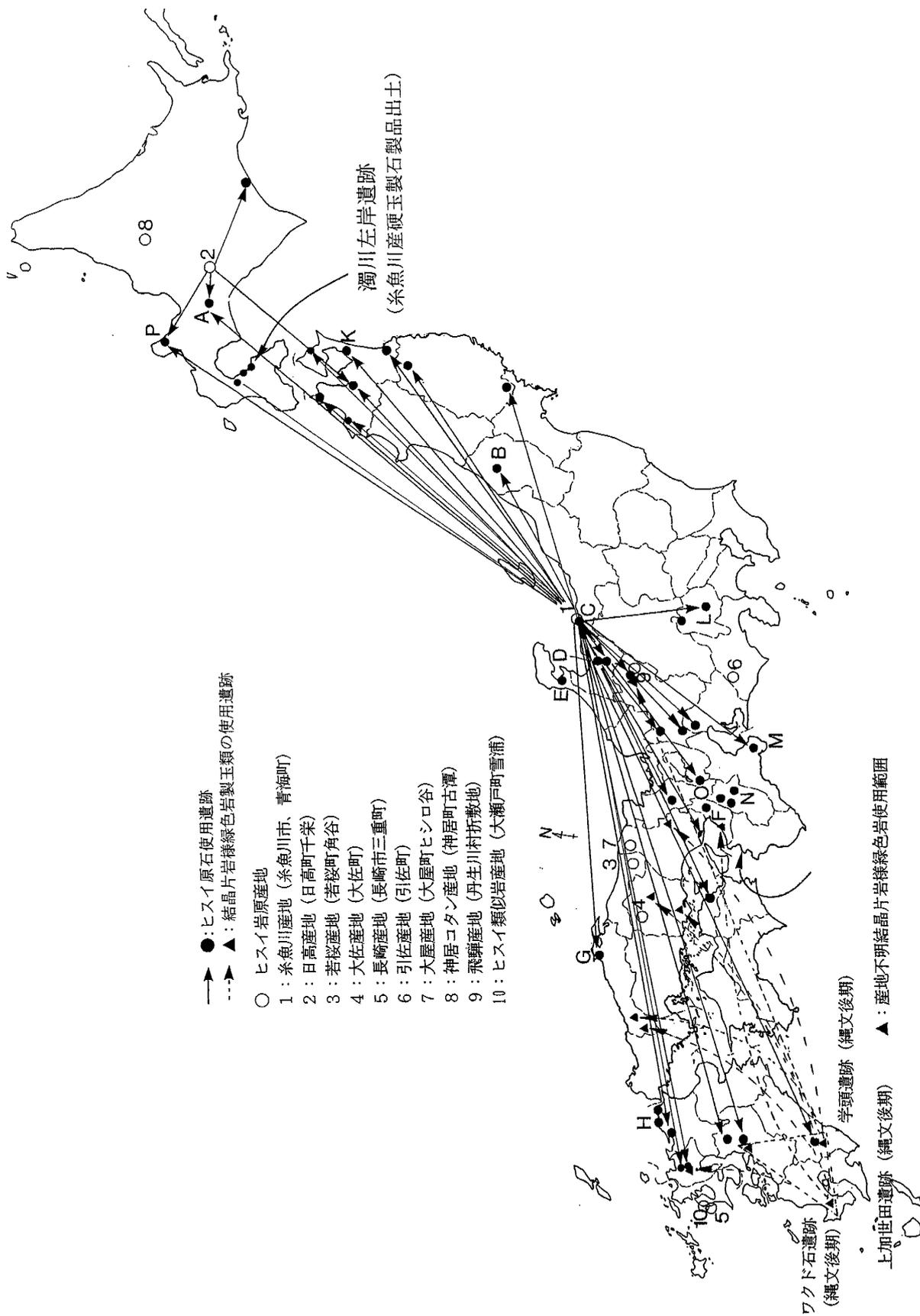


図1 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布図

2 濁川左岸遺跡から出土した炭化植物種子

吉崎昌一 / 札幌国際大学
 椿坂恭代 / 札幌国際大学

1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：濁川左岸遺跡 (B-15-22)

遺跡の所在：北海道茅部郡森町字石倉町401ほか

調査の機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査担当者：熊谷仁志、村田 大、影浦 覚、大泰司 統

調査期間：平成14年5月7日～8月30日

調査面積：3,630m²

遺跡の立地：JR森駅から北西方向に約9km離れた標高37～45mの濁川河岸段丘上に立地する。

遺構の年代：縄文時代前期後半、中期前半、後期前葉

遺構、遺物については本文を参照していただきたい。

2) 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、縄文時代前期後半の竪穴住居跡内の焼土からと、縄文時代後期前葉の竪穴住居内の焼土から土壌を採取し、フローテーション法で処理後、種子の第一次選別を経て送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察並びに撮影を行った。検出された植物種子の出土表は第1表に示しておいた。

3) 検出された種子

イネ科 GRAMINEAE (図版-1a、b)

縄文時代後期前葉の竪穴住居跡 (NH-19) 内の焼土1から1粒出土。穎果はやや扁平な長卵形。背面はやや隆起し、果の約1/2長の胚がある。腹面は平で基部にやや円形のヘソがある。これらの特徴からメヒシバ属 *Digitaria* Hallerに分類される。しかし、メヒシバ属には形態の類似する種子が多く、種までの分類は困難である。計測値は長さ1.75mm、幅0.80mm、厚さ0.60mm

ニワトコ属 *Sambucus* L (図版-2a、b)

縄文時代後期前葉の竪穴住居跡 (NH-19) 内の焼土3から1粒出土。種子は狭楕円形で表面に独特の凹凸があり粗面である。計測値は長さ2.00mm、幅1.05mm、厚さ0.80mm

ウルシ属 *Rhus* L (図版-3)

縄文時代前期後半の竪穴住居跡 (NH-13) 内の焼土2から破片1片出土。核果はやや歪んだ扁平形で表面は光沢がなく保存状態はきわめて悪い。ウルシ属種子の特徴を示すが破片のため詳細な分類は出来なかった。破片のため計測は出来なかった。

不明種子1 (図版-4)

縄文時代後期前葉の竪穴住居跡 (NH-19) 内の焼土3から1粒出土。種子は針形で種子の表面は粗面

である。資料の保存状態が悪いため分類が出来なかった。計測値は長さ4.40mm、幅1.50mm、厚さ1.30mm

以上述べたもの以外に資料の保存状態がきわめて悪く分類出来なかったものを不明²として扱った。

4) 若干のコメント

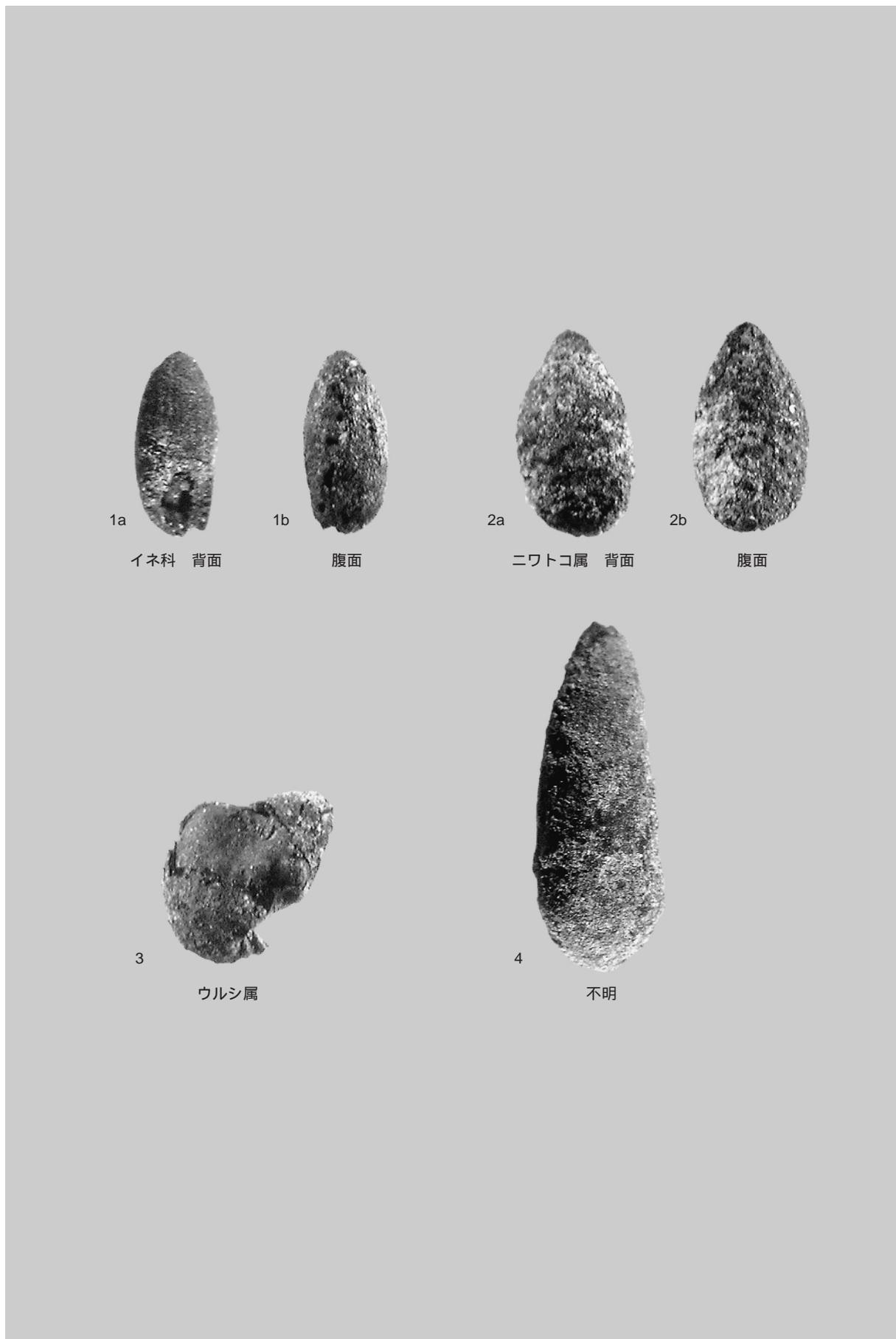
この地域周辺の発掘調査でも同様であったが、種子の検出量はきわめて少ない。土質が保存に向いていないのであろうか。縄文時代後期初頭の遺構からは野生のイネ科種子とニワトコ属の種子が検出されたのみである。縄文時代前期後半の遺構から、ウルシ属の種子破片が1点検出されているが、集落周辺の低木林に存在していたものが持ち込まれたのであろう。北海道産のウルシはヤマウルシ *Rhus triechocarpa* Miq.で塗料としてのウルシ原液には利用できないという。

表1 濁川左岸遺跡炭化種子一覧

試料番号	遺構名	採集場所	時期	重量 (kg)	体積 (ℓ)	浮遊物重 量 (g)	残渣重量 (g)	イネ科 (粒)	ニワ トコ 属 (粒)	ウル シ属 (片)	不明1 (粒)	不明2 (片)
NS02-3	NH-13	HF-1 焼土中	縄文時代 前期後半	8.9	7.8	7.65	523.73					5
NS02-4	NH-13	HF-2 焼土中	縄文時代 前期後半	22.1	21.9	51.67	1581.4			1		1
NS02-5	NH-19	HF-1 焼土中	縄文時代 後期前葉	3.5	5.2	41.4	68.41	1				20
NS02-6	NH-19	HF-2 焼土中	縄文時代 後期前葉	10.3	11.7	31.6	155.68					3
NS02-7	NH-19	HF-3 焼土中	縄文時代 後期前葉	2.6	3.2	22.23	35.32		1		1	

表2 フローテーション試料一覧

試料番号		NS02- 3	NS02- 4	NS02- 5	NS02- 6	NS02- 7
遺構名		NH-13	NH-13	NH-19	NH-19	NH-19
試料名称		HF-1	HF- 2	HF-1	HF-2	HF-3
層位		焼土層	焼土層	焼土層	焼土層	焼土層
時期		縄文時代 前期後半	縄文時代 前期後半	縄文時代 後期前葉	縄文時代 後期前葉	縄文時代 後期前葉
重量	(Kg)	8.9	22.1	3.5	10.3	2.6
体積	(ℓ)	7.8	21.9	5.2	11.7	3.2
浮遊重量 2mmメッシュ (g)		2.26	15.25	14.05	6.18	6.6
浮遊重量 0.425mmメッシュ (g)		5.39	36.42	27.35	25.42	15.63
残渣重量 (g)		523.73	1581.44	68.41	155.68	35.32
炭化種子 (粒)	(2.00mm)					
炭化種子 (粒)	(0.425mm)	1	6	25	3	2
炭化種子 (粒)	残渣 (1.41mm)					
	合計	1	6	25	3	2
焼骨動物依存体 (g)	(2.00mm)		1514.78			
焼骨動物依存体 (g)	(2.00mm)					
焼骨動物依存体 (g)	残渣 (1.41mm)					
	合計		1514.78			
炭化材 (g)	(2.00mm)	0.63	1.62	12.9	3.93	4.23
炭化材 (g)	(0.425mm)	0.31	0.99	8.7	2.26	1.71
炭化材 (g)	残渣 (1.41mm)	0.03	0.13	0.27	0.44	0.15
	合計					
その他 (g)	(0.425mm)					
その他 (g)	(2.00mm)		9.15			
その他 (g)	残渣 (1.41mm)					
	合計					
その他 (g)	上記の個数と種類		軽石 1点			
人工遺物 (点)	残渣 (1.41mm)			1	5	
人工遺物 (g)	上記の重量			0.02	0.19	



図版 濁川左岸遺跡出土炭化種子

成果と課題

1 遺構

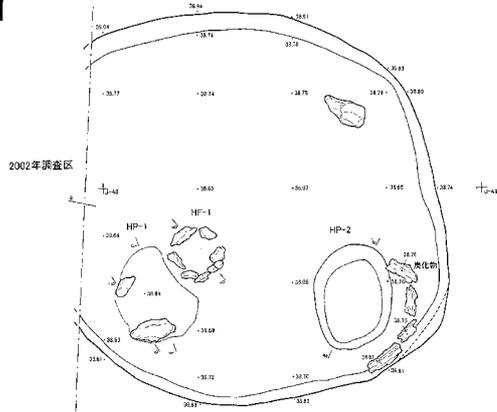
濁川左岸遺跡のB地区は、標高約37m～39mの濁川左岸段丘上に位置し、調査区の北西側を流れる無名沢に開析された、北側へ舌状にのびる台地上に立地する。遺構は主に、標高38m付近を傾斜の転換点とする平坦面と、沢に面する緩斜面から検出されている。平成13・14年の2カ年の調査で確認された遺構は、住居跡8軒、土壌30基である。これらは出土遺物などから、縄文時代前期後半の群b類、中期前半の群a類、後期前葉の群a類土器のいずれかの時期に属するものと考えられる。

8軒の住居跡のうち、群b類に属するものはH-3、NH-13で、平面形が楕円形を呈する大形のものである。北側へ舌状にのびる台地上平坦面の先端部に位置している。群a類に属するものはH-2・9で、小形のものである。明瞭な柱穴はなく、覆土中に焼土が検出されている。また、H-2の覆土は埋め戻しであることなどから、これらは通常の住居ではない施設の可能性がある。群a類に属するものはH-1・4、NH-17・19で、平面形は直径が4～5mのほぼ円形を呈し、掘り込みは浅く、明瞭な柱穴はない。床面の中央付近に直径0.5mほどの石組の炉を持つ。H-4は試掘坑と攪乱により、全体の様相が明らかではないが、他は石組炉の東側に、礫の3分の2ほどが埋め込まれた、1対の立石がある。石組炉の中心と立石の間を通る線の方向は、東へ72°から88°の間にあり、おおむね東を向いている。A地区で確認された住居跡にも、東側に立石を持つものがある。若干時期は新しいが、八雲町浜松5遺跡（八雲町教育委員会1995）では、この方向に出入り口構造が確認されているが、今回の調査では検出できなかった。

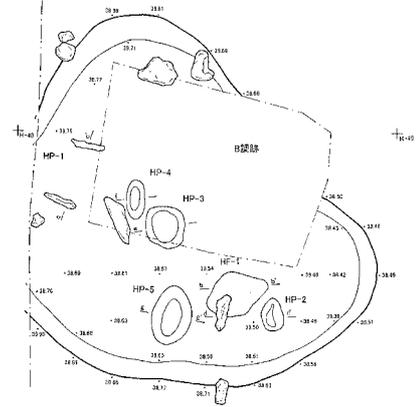
土壌は大まかに平坦面に位置するものと、緩斜面に位置するものに分かれる。前者のうち、F-42・43区に位置するNP-60・67～69は、遺構周辺の遺物出土状況などから、隣接する後期前葉の住居跡NH-17・19と関連があるものと推測される。NP-60からは接合関係が認められ、同一母岩から剥離されたと思われる頁岩製の石核、剥片など82点が出土している。北西側と南東側の2ヶ所にまとまりがあり、接合作業で16点の接合資料を得た。2つのまとまりをまたがる接合資料は1点のみであった。このことから、まとまりごとに剥離作業が行われ、それぞれ袋状のものに入れられていた可能性が高い。後者は長軸約1.5m～2mの平面形が楕円形を呈し、掘り込みも深いものが多い。このうち、土壌墓はP-11、NP-82・86・88の4基である。NP-82は土器とともに北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石など礫石器が13点出土した。NP-88は墳口部からサイベ沢式土器が横倒しのつぶれた状態で出土したほか、スクレイパー、偏平打製石器、たたき石などが伴う。NP-86のような墳口部が漏斗状に広がる形態を持つものは、八雲町野田生4遺跡（北埋調報171）のP-6に類例がある。その他、覆土が埋め戻しであることなどから土壌墓の可能性のあるものは、P-1・12・14、NP-61・81・84の6基である。P-1・12、NP-61は北海道式石冠、偏平打製石器、たたき石、石皿などの礫石器が出土している。P-14は覆土の中位から焼土が検出されている。土壌墓の可能性のあるものを含めたこれら10基の土壌は、平面形が円形を呈するNP-82・88を除き、遺構の長軸がほぼ等高線と平行に構築されている。いずれも中期前半の群a類土器の時期に属すると思われる。A地区が整理作業中のため、遺跡全体の様相は明らかではないが、作業の進捗を踏まえて更に検討してゆきたい。

（村田）

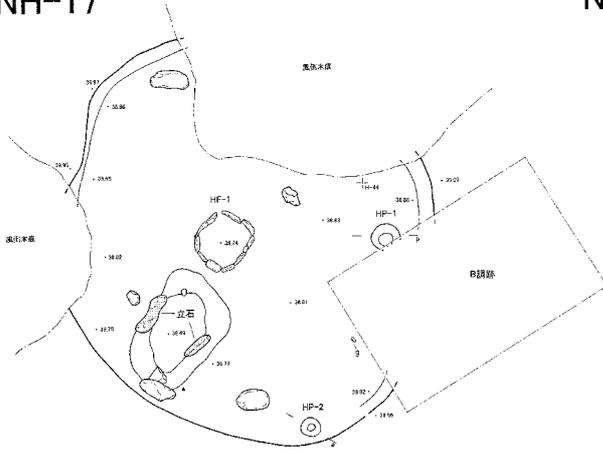
H-1



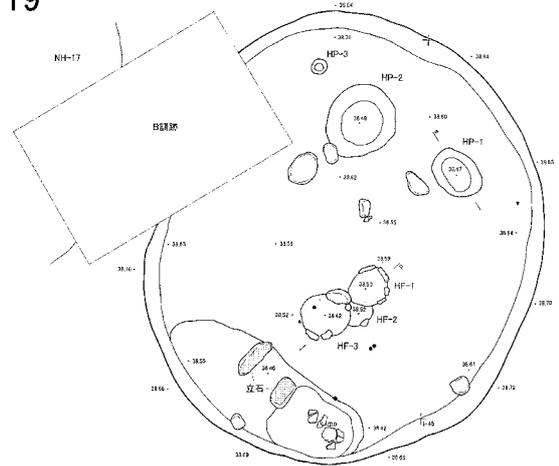
H-4



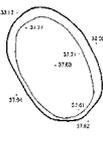
NH-17



NH-19



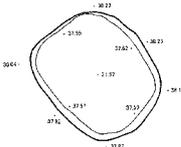
NP-84



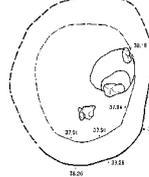
NP-61



NP-81



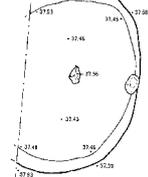
P-14



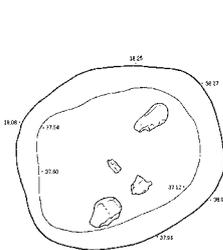
P-11



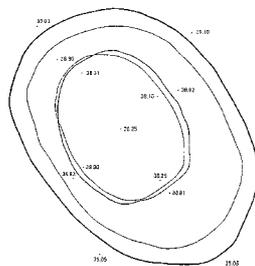
P-12



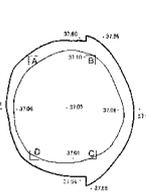
P-1



NP-86



NP-88



NP-82

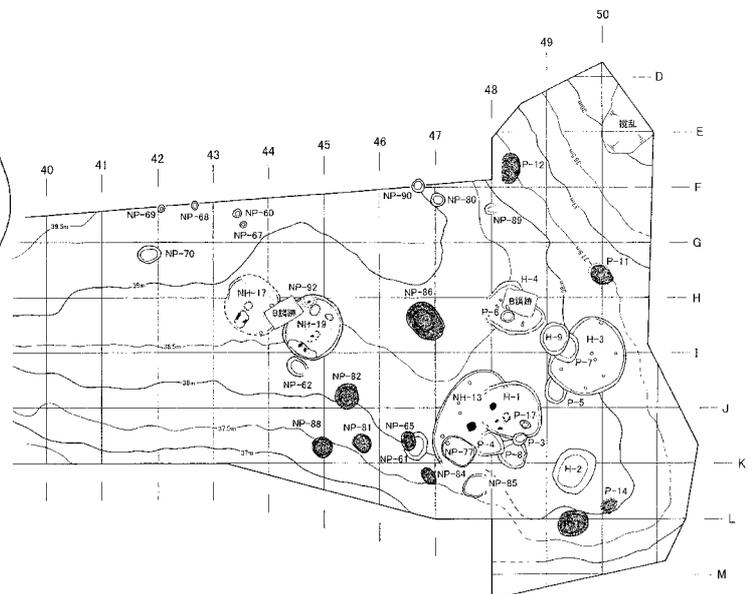
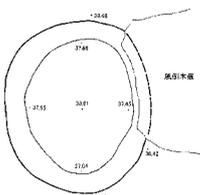


図 - 1 縄文時代後期前葉の住居跡と中期前半の土壇

2 土器

濁川左岸遺跡B地区では 群b類、 群a類、 群a類、 群a類が出土した。土製品と焼成粘土塊を加えると包含層からは全部で25,750点を数える。調査区全体が駒ヶ岳火山灰d層(Ko-d)に覆われていたため、ほとんど人為的な攪乱を受けていない状況であったが、山林の緩斜面に立地するため流れ込みの影響を受けていた。ここでは各群について気のついた事項を簡単に記して、若干のまとめとしておきたい。

群b類は総出土点数の2割、5,309点が出土したが、すべて円筒土器下層d式であった。ほとんどが円筒土器下層d₁式であったが、円筒土器下層d₂式も少量が出土した。掲載拓影土器(図 - 2 - 21~24)のほか、未掲載で6個体相当の破片が確認されており、全部で少なくとも10個体の存在が数えられる。口縁部文様帯がより幅広く、口唇断面が厚みを持つもの。口縁部と体部の境に隆帯を持ち、口縁部断面が外反するものを円筒土器下層d₂式として円筒土器下層d₁式と分別したが、胴部片などは単軸絡条体を縦位に回転施文するものが両者に見られることなどから区別ができなかった。

群a類は総出土点数の1割、2,863点が出土した。すべてサイベ沢 式と考えられる。粘土紐の貼付による文様帯を持つものと持たないものに分けて掲載した。「C」状の突起を口唇内面に持つもの(図 - 3 - 39・42、図 - 4 - 46・54)が両者に見られた。NH-2(図 - 6 - 1)やNP-88(図 - 61 - 4)出土の復元個体などから2本組になっている小形のツノ状突起と組み合わせる可能性が高いものである。「C」状突起を持つ土器に、文様帯を持つものと持たないものがある点については、同時に存在したのか、それとも時期差によるものかという問題がある。遺構内の共伴出土例など類例に注意をしていきたい。

群a類は総出土点数の7割、17,514点が出土した。天祐寺式~涌元式相当のもの、トリサキ式、大津 群がある。破片のため細分ができない土器は粘土帯を貼付されたものともたないものに大別した。これらの中には天祐寺式~トリサキ式が含まれている。このうち貼付が口縁部に複数段施されたものは、口縁部を横方向のナデ調整で磨消したのち、貼付しているものが多く見られた。また口唇上も平滑に調整している場合が多い。これらの特徴を有する土器は 群a類の中でも古い段階のものと考えられる。口縁部の貼付ないし折り返しが横位に1段巡るものは、器表面の凹凸が著しく、口唇上も粗い調整のものが多くみられた。縄文は一部重なりあう羽状縄文や、二重に重ねて施文したものの、原体の回転方向が不規則なものが顕著で、特に原体を縦方向に回転施文するものが多く認められた。

トリサキ式は沈線を施したものと無文または縄文のみのものがある。沈線が施されたものは棒状工具によるものと半截竹管様の工具の内面を用いたものと二種がある。破片資料が多く、器形等から時期差の違いを説明することはできなかった。内面の調整については、復元個体を見る限り、天祐寺式~トリサキ式のものでは底面から頸部までを縦位に、口縁部付近では横位に施しているものが多くみられたが、トリサキ式に後続する大津 群では全て横位の調整というものも認められた。

群a類は総出土点数の1%に満たない59点の出土であった。接合作業の結果、この59点は2個体分であり、復元個体と拓影土器でそれぞれ掲載した(図 - 13 - 166・167)。隣接しあうJ-42・43区の出土であり、いずれも恵山2式、南川 群土器である。

(影浦)

3. 石器

遺構・包含層の項で説明した石鏃・偏平打製石器・石製品のうち、特徴的なものであると記したもののについて類似例を探索するなかで得られたことがらを、いくつか述べておきたい。尚、図 - 2・3の石器実測図に付された掲載番号はそれぞれの報告書のものである。

石鏃：(図 - 15 - 1 ~ 17・図 - 2)「突起様の茎部を持ち、丸みを帯びた形状のもの」・「特殊なかえしを持つもの」・「付着物があるもの」これらについて縄文時代後期前葉の特色と考えられる例があった。

「突起様の茎部を持ち、丸みを帯びた形状のもの」(図 - 15 - 4・5・図 - 2)は「石槍又はナイフ」についても同様の形状(図 - 15 - 20~22)のものがある。類例としては、「函館市石倉貝塚」第一貝層出土遺物、「木古内町新道4遺跡・B地区」・「松前町大津遺跡」包含層出土遺物、「松前町白坂第3地点」包含層出土遺物、「青森県青森市小牧野遺跡」包含層出土遺物、「青森県六ヶ所村大石平遺跡」第6号住居覆土出土遺物(十腰内 b式主体に覆土から出土)「六ヶ所村大石平遺跡」包含層出土遺物、(十腰内 式並行が大半を占める)「六ヶ所村上尾駁(2)遺跡」(1987)包含層出土遺物などがある。石鏃サイズのものについては、先端部を再生したものがほとんどと考える。ただし大石平遺跡第6号住居覆土からまとまって出土した再生された石鏃群について先端を鋭利にする再生例もあり、再生の典型例とは言い難い。素材の厚みが比較的厚い事に起因する現象とも捉え得る。ただし、「白坂第3地点」包含層からの、大型で「石槍又はナイフ」の範疇にはいるサイズのものについて、同様な茎部の形状で、大型で鋭角的な先端を持つものの存在を断定できなかった。

以上の事から、茎部の形状が突起様で、正面観について先端が丸みをおびた形状については、再生の結果このようになったものがまず存在する。ただ同時に、この形状を生かした用途や使用方法になにか特色があったものではないかと考える。

出土例はいずれも縄文時代後期前葉を代表する遺跡である。

「特殊なかえしを持つもの」(図 - 15 - 12~16・図 - 2)新道4遺跡B地区において、「有茎凹基のなかでもきわめて特徴的なもので、かえしの部分が2段になっている。出土区もまとまりをみせており、群a類に伴うものである。」と記述がある石鏃群もこの範疇に収まるものである。「2段」という定義がやや幅広いが、本遺跡については、薄い剥片を素材とし、両面全面調整を施すもののなかにひとつのまとまりが捉えられた。これには13のように「段」が微妙なものについても近似のものとした。

類例を探索したところ、「八雲町浜松5遺跡」5号住居覆土2出土遺物、「函館市石倉貝塚」第一貝層出土遺物、「松前町大津遺跡」包含層出土遺物、「松前町白坂第2地点・第3地点」包含層出土遺物、「六ヶ所村大石平遺跡」包含層出土遺物、作りは粗雑だが、「六ヶ所村上尾駁(2)遺跡」包含層出土遺物などがある。先述の「新道4遺跡」でもB地区以外にC地区・D地区・G地区包含層出土のものがある。このような出土例をもとに推定すると、新道4遺跡B地区での記述にある通り、縄文時代後期前葉のものと考えられる。

「付着物があるもの」(図 - 15 - 10・図 - 2)B地区で出土したタール様の付着物がある石鏃の類例を求めたところ、「松前町白坂第2地点」(1983)包含層出土の凸基・平基でそれぞれ有茎、「上の国町小岱遺跡」包含層出土の凸基有茎、「木古内町新道4遺跡」C地区の凹基・平基・凸基でそれぞれ有茎、「青森市小牧野遺跡」の凸基有茎、「六ヶ所村上尾駁(2)遺跡」凸基・凹基でそれぞれ有茎、のものが挙げられる。いずれも縄文時代後期前葉の代表的な遺跡で包含層出土遺物である。有茎

のものみに付着しており、凸基有茎が多い。そして、付着物の位置が示してあるものについて集成を試みところ、茎部付け根に付着する例が目立った。次いで正中線上に付着する例が少数ある。

偏平打製石器（図 - 21 - 72～80・図 - 3）

偏平打製石器は、縄文時代中期、特に円筒土器文化に特徴的な石器である。しかし濁川左岸遺跡において、縄文時代後期前葉NH - 17の石組炉の組み石として、偏平打製石器が出土している。これについて、縄文時代後期前葉の段階まで用いられる石器なのか、縄文時代中期の遺物を採集し炉石として用いたものかについて検討する。

羽賀（1995）のまとめでは「函館市西股遺跡」の成果から、北海道ではノダップ 式まで残る事が示されている。縄文時代中期末葉～後期前葉に属する可能性がある資料を探索したところ、数例があった。またそのなかには炉石として用いている例もあった。ここでは擦り石として報告されているもので、偏平打製石器の範疇にはいるものも取り上げるものとした。

「豊浦町高岡 1 遺跡」WH - 7において縄文時代中期後半の石組炉の炉石として偏平なすり石（偏平打製石器の範疇に入り得る）が出土している。同じ遺跡のWH 18においても縄文時代中期末葉の石組炉の炉石として偏平打製石器が2点、早期の断面三角形のすり石が1点用いられている。「乙部町緑町 2 遺跡」3号竪穴式住居から涌元式直前の土器に伴う偏平打製石器（ただし包含層の遺物と接合し、同一住居から北海道式石冠の出土もある）、「八雲町浜松 5 遺跡」11号住居覆土、10号土壌、20号土壌からのものはトリサキ式土器に伴う遺物という可能性が高い。「南茅部町白尻B遺跡」の住居跡からノダップ 式段階での偏平打製石器の例がある。HP - 206からも形状等は不明であるが、擦り石から炉石への転用例が2点と記載され、覆土中位から偏平打製石器の出土がある。HP - 214からは5点の偏平打製石器が炉石として用いられる。HP - 236からは北海道式石冠 1点と偏平打製石器 3点が炉石に転用されている。HP - 252では炉石に1点の偏平打製石器が用いられる。HP - 207、HP - 258の床面から偏平打製石器が出土している。小笠原（1985）はこの白尻B遺跡のまとめで、大安在B式以降が石組炉であり、白尻B遺跡における後半ステージの石組炉の炉石に擦り石や石棒を使用する事象を追及する課題のひとつとして考えている。「戸井町釜谷 2 遺跡」HP39床面出土遺物について、折り返し口縁の土器（天祐寺式直後か）に偏平打製石器が伴っている。「木古内町新道 4 遺跡」F地区のFP - 3覆土に大木10式並行ないしはその直後の土器がまとまって出土しており、それに伴って偏平打製石器が出土している。「函館市西股遺跡」のノダップ 式段階、5号住居床面から偏平打製石器が出土する。「知内町湯の里 1 遺跡」において縄文時代中期末葉、住居址 1 の石組炉から偏平打製石器が2点転用されている。また、同時期の住居址10の床面から偏平打製石器の出土がある。「青森県六ヶ所村弥栄平遺跡」前十腰内土器様式の土器が多く出土する包含層からの偏平打製石器出土がある。「大石平遺跡」において十腰内 式期の72号土壌から偏平打製石器に類する擦り石の出土がある。

以上に引用した事例からノダップ 式以降、縄文時代中期後半の頃から石組炉が出現し、偏平打製石器や擦り石等の礫石器が炉石として用いられる事例がよくあることが判明した。「浜松 5 遺跡」においては包含層に中期円筒上層土器は混じらないため、円筒上層式土器の遺物という可能性が低い。ただし、遺跡以外の場所からの採集ということは有り得ない。今後形態分類作業等から形態上の石器の時期的変遷が追うなどの根拠づけが必要となろう。偏平打製石器が後期前葉までは継続して用いられていた可能性が高く、また炉石の材として中期以前の遺物（北海道式石冠、断面三角形の擦り石等）を採集する動きも同時にあると言う事のみ指摘するにとどめ、今後の更なる検討を要するものとする。

その次なる検討に備え、偏平打製石器の使用法について簡単に考察する。今回出土した遺物につい

て、機能部は敲打痕が顕著なものが多く、擦痕については機能面を長楕円形として捉えた場合、長軸方向に擦痕がつくものがほとんどであった。また、面を形成するにいたる機能部について、その周辺には調整・成形とは無関係と思われる細かい剥離が巡るものが多い。先述の「大石平遺跡」において十腰内式期の72号土壌から出土している偏平打製石器に類する擦り石としたものについても同様の剥離痕跡がある。遺跡から出土した自然礫のうち、人為的な使用、被熱が認められないもの（廃棄できると判断したもの）の中から、偏平な礫を複数選び、その縁辺について「擦り」と「叩き」をそれぞれ行ってみた。その結果、機能部縁辺に細かい剥離痕が発生するのは「叩き」であった。簡単な実験で決定するのは早計かとも思われるが、この結果からは、偏平打製石器について、「叩き」という行為を行っている可能性が指摘できる。擦痕については機能面を長楕円形として捉えた場合、長軸方向に擦痕がつくものがほとんどであり、想定される用法は偏平楕円というその形状から、機能面の長軸方向に叩き擦るものと想定する。持ち方については、藤原（2000）が凹みを持つ偏平打製石器（濁川左岸遺跡の類例としてはNP-88-2）の形状から推測している持ち方の通りであろう。

また、たたき石の項目で「礫器」と称した石器についても機能部の形態が類似している事から使用法の類似等の可能性がある。そのように検討するとNH-19床面出土石器のうち板状の偏平礫を使用しているたたき石について、やはり偏平打製石器と使用法が類似する可能性がある。このことは偏平打製石器が縄文時代後期前葉まで用いられる事を検討する上でひとつの資料となる。

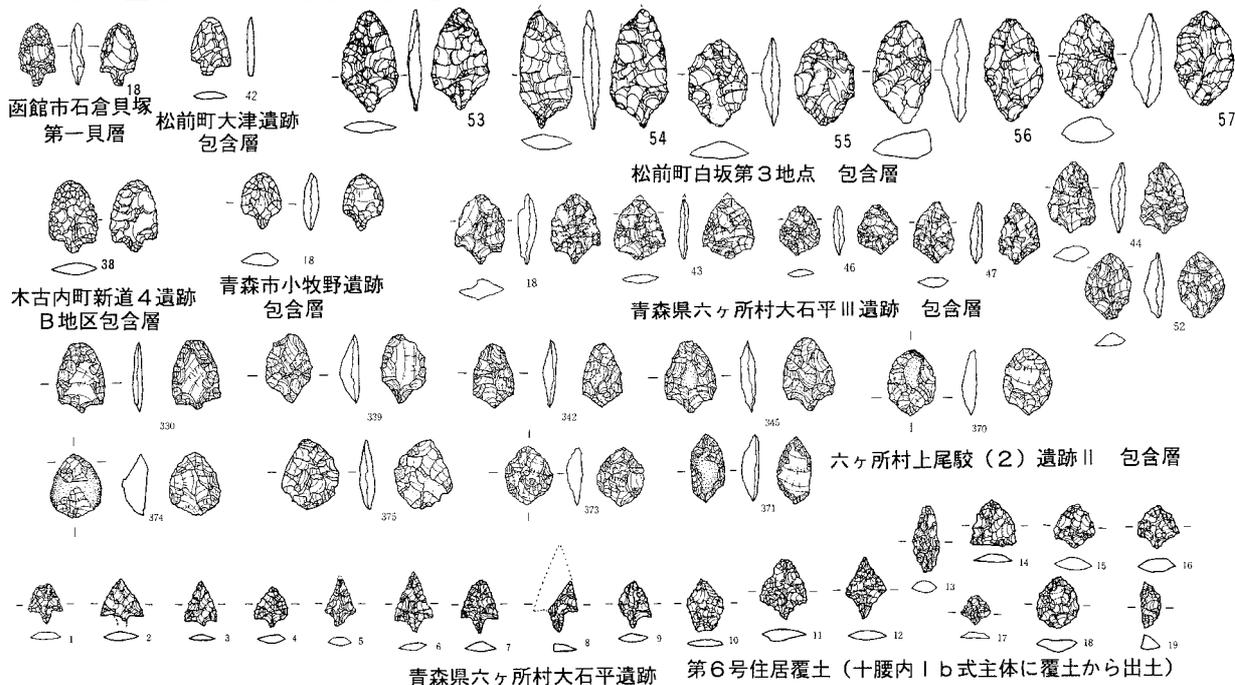
石製品：「ヒスイ」「孔のある石斧型の石製品」について検討する。

「ヒスイ」（図 - 25 - 112）濁川左岸遺跡B地区において、ヒスイ製玉が出土している。渡島半島の時期が判る出土例を探索した。「八雲町浜松5遺跡」40号配石床面から1点、「八雲町浜松2遺跡」6号配石から16点、7号配石から1点出土している。「栄浜1遺跡」A地区16号土壌の覆土から1点、これについて報告では中期とあるが、周囲から後期的な配石等の検出があるため後期の可能性が高い。「松前町寺町貝塚」出土で縄文時代後期の可能性が高いものが1点、「函館市日吉ストーンサークル」から後期のもの、「木古内町札苅遺跡」出土で晩期のもの14点、知内町の「湯の里4遺跡」からは後～晩期の可能性が高いもの、「湯の里5遺跡」からは後期の可能性が高いものが1点ずつ、「松前町上川遺跡」から晩期のもの2点、「上の国町大岱沢A遺跡」からは中期中葉の可能性が高いもの1点が出土する。「八雲町シラリカ2遺跡」包含層から前期後半のヒスイが報告されているが、例外的である。青柳文吉(1998)のとおり、中期中葉からヒスイの出土例が一般的となる。出土例の多さから、後期前葉の頃に搬入される動きが活発になるものと考え。「八雲町山崎4遺跡」出土の時期不明のもの1点についても時期は不明だが中期中葉～後期前葉の土器が出土している事などを踏まえると、その時期のものと考え。今回出土したヒスイ製玉は 層のものであり、確実な時期の推定はできない。だが周辺のおもな遺物の出土が 層から 層上位に集中している実態を参考に推定すると、やはり縄文時代中期中葉～後期前葉の可能性が高い。隣の青森県は縄文時代後期前葉の土器様式について渡島半島と関連する。青森県後期前葉における、特徴的なヒスイの出土状況を示すものとして、「六ヶ所村上尾駮(2)遺跡」がある。十腰内式期のヒスイ製玉が4点まとまって出土する。

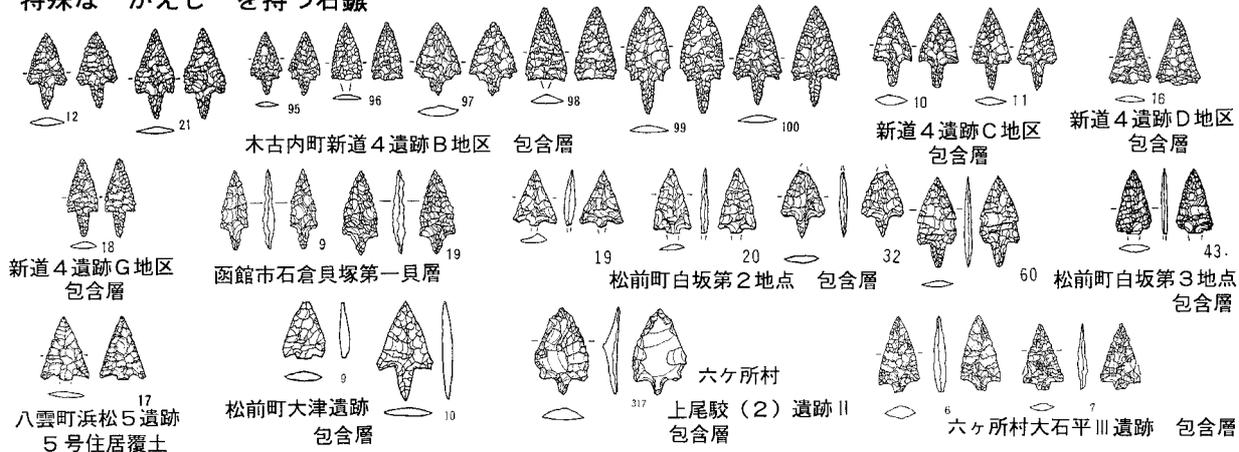
「孔のある石斧型の石製品」（図 - 31 P 4 3）縄文時代後期前葉の遺構であるP 4から石斧に類似する形状の、頁岩製石製品が出土している。渡島半島の遺跡について類例を求めたが、近似するものは見つけられなかった。やや類似するものとして正面観が長方形で、薄形のものについては、「八雲町コタン温泉遺跡」包含層出土の頁岩製の石製品1点がある。「八雲町浜松5遺跡」からスレート製のもの2点が出土している。これらの遺物が検出された包含層からは縄文時代後期の遺物が出土している。

（大泰司）

突起様の基部を持ち、先端が丸みを帯びた形状の石鏃



特殊な“かえし”を持つ石鏃



付着物のある石鏃

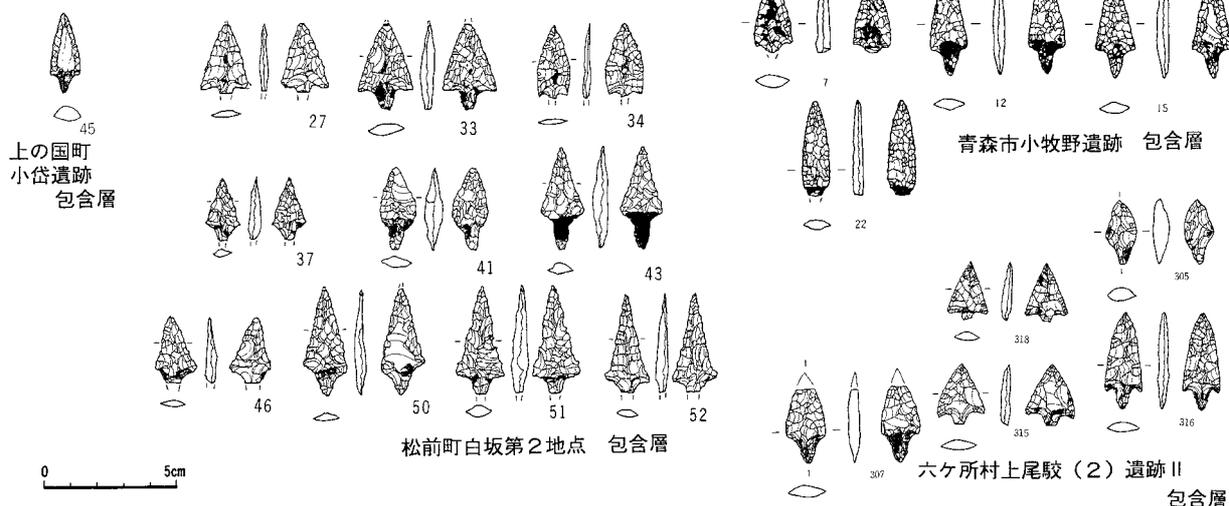


図 - 2 石器のまとめ(1) 石鏃

偏平打製石器

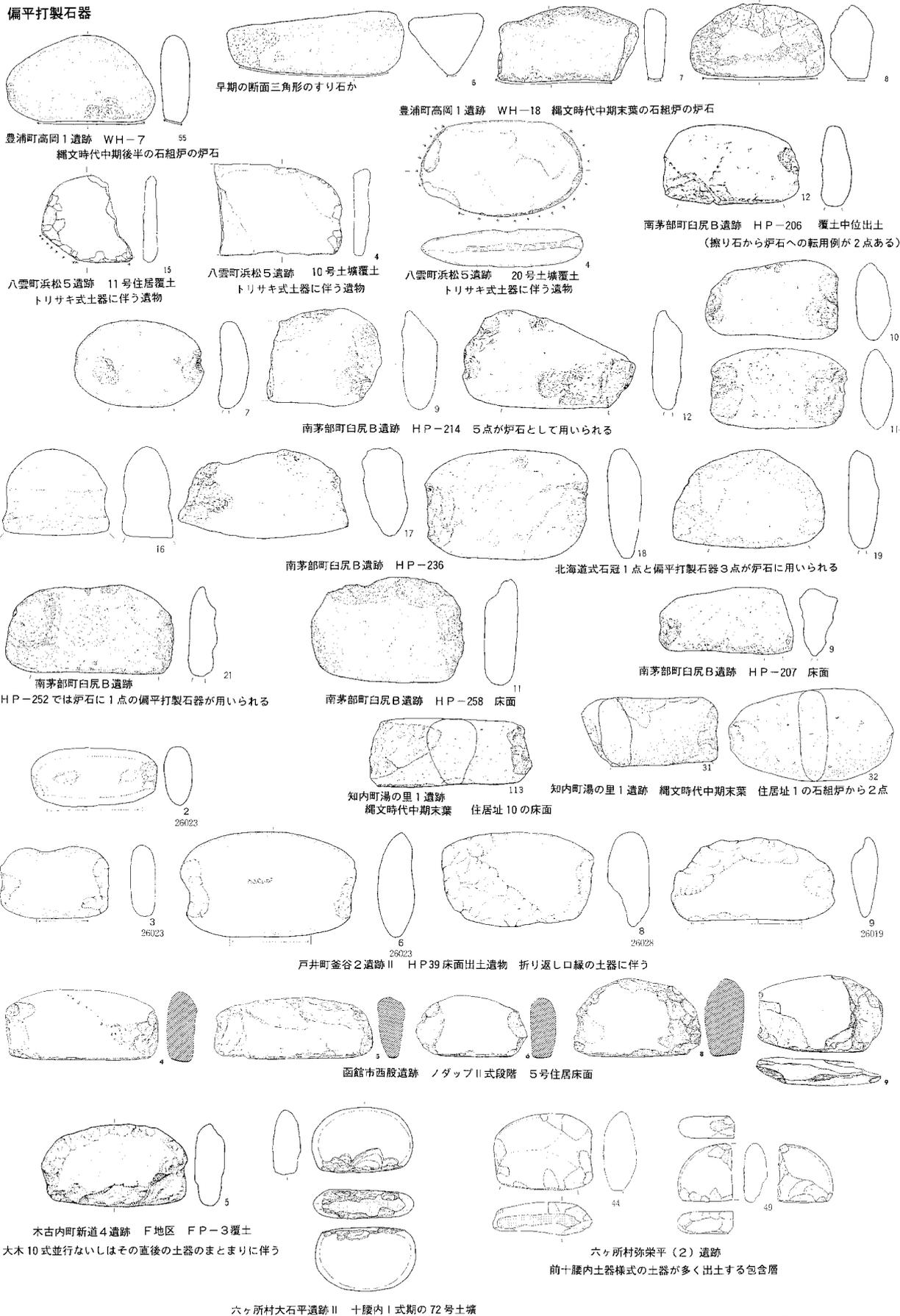


図 - 3 石器のまとめ(2) 偏平打製石器

表 - 1 遺構規模一覧

遺構名	位置	規模 (m)				長さ	平面形	長軸方向	時期	備考
		長軸		短軸						
		確認面	床面	確認面	床面					
H-1	I・J - 47・48	(4.80)	／ (4.50)	4.20	／ 4.00	0.20	円形	N-73° -E	IV群a類	N-88° -E(炉-立石)の方向 NH-13より新
H-2	J・K - 49	3.28	／ 2.47	2.67	／ 1.87	0.54	楕円形	N-18° -W	III群a類	埋め戻し覆土
H-3	H・I・J - 49・50	5.73	／ 4.85	5.42	／ 4.47	0.42	楕円形	N-6° -W	II群b類	新
H-4	G・H - 47・48	4.16	／ 3.72	(3.61)	／ (1.50)	0.18	不整楕円形	N-17° -E	IV群a類	P-6より新
H-9	H - 49	2.34	／ 2.05	(2.05)	／ 1.85	0.18	不整円形	N-42° -E	III群a類	H-3より新
NH-13	I・J・K - 47・48	(7.67)	／ (7.44)	—	／ —	0.50	楕円形	N-60° -E	II群b類	2001年一部確認
NH-17	G・H - 43・44	(4.50)	／ (4.26)	—	／ —	0.12	(円形)	(N-85° -W)	IV群a類	N-72° -E(炉-立石)の方向
NH-19	H・I - 44・45	4.78	／ 4.52	4.08	／ 3.80	0.23	円形	N-44° -E	IV群a類	N-82° -E(炉-立石)の方向
P-1	L - 49	2.18	／ 1.71	1.89	／ 1.35	0.56	楕円形	N-58° -W	III群a類	埋め戻し覆土
P-3	J - 48	1.12	／ 0.80	0.81	／ 0.50	0.43	楕円形	N-24° -E	IV群a類	
P-4	J - 47・48	(1.65)	／ (1.48)	(1.90)	／ (1.56)	0.40	(不整楕円形)	(N-3° -E)	縄文時代前期～後期	
P-5	I - 49	(1.62)	／ (1.43)	1.54	／ 1.08	0.64	(楕円形)	(N-36° -E)	II群b類	H-3より古
P-6	H - 48	0.88	／ 0.65	0.86	／ 0.67	0.34	円形	N-82° -E	III群a類	埋め戻し覆土 H-4より古
P-7	H・I - 49	(2.03)	／ (1.59)	(1.57)	／ (1.18)	(0.70)	楕円形	N-47° -E	II群b類	H-3より古
P-8	J - 48	2.14	／ 1.70	1.96	／ 1.54	0.54	円形	N-12° -E	III群a類	P-3より古
P-11	G - 49	1.74	／ 1.88	1.13	／ 1.10	0.58	楕円形	N-0° -E	III群a類	埋め戻し覆土
P-12	E - 48	2.12	／ 1.74	(1.31)	／ (1.20)	0.45	(楕円形)	N-52° -E	III群a類	埋め戻し覆土
P-14	K - 50	(1.56)	／ (1.09)	(0.61)	／ (0.36)	0.61	(楕円形)	N-89° -W	IV群a類	埋め戻し覆土
P-17	J - 48	(0.90)	／ (0.69)	(0.75)	／ (0.69)	(0.24)	円形	N-24° -W	III群a類	
NP-60	F - 43	0.41	／ 0.26	0.40	／ 0.26	0.17	円形	N-11° -W	IV群a類	大形ブレイク等
NP-61	I - 46	1.33	／ 0.94	0.98	／ 0.61	0.38	楕円形	N-32° -E	III群a類	埋め戻し覆土 NP-65より新
NP-62	I - 44	(1.42)	／ (1.02)	1.28	／ 0.93	(0.26)	—	(N-4° -W)	IV群a類	
NP-65	J - 46	2.02	／ 1.48	(1.70)	／ 1.09	(0.78)	楕円形	N-42° -E	III群a類	NP-61より古
NP-67	F - 43	0.63	／ 0.37	0.58	／ 0.3	0.17	円形	N-71° -E	IV群a類	
NP-68	F - 42	0.64	／ 0.48	0.52	／ 0.32	0.15	楕円形	N-36° -E	IV群a類	
NP-69	F - 42	0.53	／ 0.26	0.48	／ 0.25	0.15	円形	N-83° -E	IV群a類	
NP-70	G - 41・42	1.66	／ 1.27	1.18	／ 0.9	0.25	楕円形	N-61° -W	IV群a類	
NP-77	J・K - 47	2.48	／ 2.34	1.87	／ 1.27	0.22	隅丸方形	N-13° -W	III群a類	NH-13より新
NP-80	F - 46・47	1.0	／ 0.71	0.94	／ 0.69	0.29	円形	N-22° -W	III群a類	
NP-81	J - 45	1.38	／ 1.25	1.15	／ 1.0	0.55	隅丸方形	N-2° -E	III群a類	埋め戻し覆土
NP-82	I・J - 45	1.62	／ 1.43	(1.47)	／ 1.13	0.77	楕円形	N-34° -E	III群a類	埋め戻し覆土
NP-84	K - 46	1.27	／ 1.12	0.84	／ 0.69	0.38	楕円形	N-13° -E	III群a類	埋め戻し覆土
NP-85	K - 47	(1.88)	／ (1.73)	1.64	／ 1.47	(0.32)	—	(N-14° -E)	縄文時代前期、中期	
NP-86	H - 46・47	3.00	／ 2.57	2.14	／ 1.83	0.82	楕円形	N-1° -E	III群a類	埋め戻し覆土
NP-88	J - 44・45	(1.57)	／ 1.2	(1.34)	／ 1.16	0.82	円形	(N-33° -E)	III群a類	埋め戻し覆土
NP-89	F - 47・(48)	(0.61)	／ (0.39)	(0.74)	／ (0.47)	0.44	—	(N-64° -W)	縄文時代中期、後期	
NP-90	E・F - 46	0.94	／ 0.67	0.81	／ 0.66	0.31	円形	N-37° -E	縄文時代中期、後期	
NP-92	G・H - 44	1.16	／ 0.77	0.96	／ 0.8	0.36	不整楕円形	N-62° -W	III群a類	NH-19より古

表 - 2 遺構出土遺物一覧

H-1

分類・層位	II b	III a	IV a	分類不明土器	スクレイパー	石核	Uフレイク	フレイク	偏平打製石器	たたき石	台石	軽石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	合計
覆土	6	18	41		1	1	2	5					43	17	2	136
覆土下	1	7	10				1		1		1		5			26
床		10	1	7	3			2	1		1	1	33	3	2	64
HF-1										1	1		13			15
HP-2覆土			1										1	1		3
合計	7	35	52	7	4	1	3	7	2	0	2	1	81	20	4	226

H-2

分類・層位	II b	III a	IV a	円板状土製品	スクレイパー	Uフレイク	フレイク	北海道式石冠	偏平打製石器	たたき石	台石	軽石	礫・礫片	合計	
覆土	1	128	3	1	1	1	3		4	2			1	27	172
覆土下							1				1				1
不明			1					1							3
HF-1			3							2			1	9	15
合計	1	129	3	1	1	1	4	1	4	2	1	1	27	176	

H-3

分類・層位	II b	III a	IV a	Uフレイク	石斧	北海道式石冠	たたき石	すり石	台石	軽石	礫・礫片	被熱礫	合計
攪乱											1		1
風倒木	3						1				1	2	7
覆土	4	3	3	1			2		1		5	4	23
覆土下	1	5		2				1		1	13		23
床	5				2	2	3	1			9	1	23
合計	13	8	3	3	2	2	6	2	1	1	29	7	77

H-4

分類・層位	II b	III a	IV a	Uフレイク	フレイク	偏平打製石器	たたき石	台石	軽石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土		1	31	1		1		1	1	8	1	45
覆土下		2	1							4		7
床	1	4	1		2			4	1	3	1	17
H-4付近							2	1				3
HP-2覆土			2					1				3
合計	1	7	33	1	2	1	0	5	2	15	2	69

H-9

分類・層位	II b	III a	IV a	フレイク	たたき石	礫・礫片	合計
覆土	3	2	3	1	1	9	19
覆土下	1	75		1	7	3	87
合計	4	77	3	2	8	12	106

H-13/NH-13

分類・層位	II b	III a	IV a	石槍又はナイフ	スクレイパー	石核	Uフレイク	フレイク	偏平打製石器	たたき石	台石	原石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土		1	49		1			1							52
覆土1	45	63	205		5		2		2	1	1		7	4	335
覆土2	5	8	3	1			2	4		1			6	2	32
覆土下(2001)	1	1				1		1							4
床	15	30	16		2		2	1			4	1	8	1	80
HF-1		1													1
HP-1覆土		2													2
HP-3覆土	1														1
HP-5覆土		7													7
合計	67	113	273	1	8		6	7	2	2	5	1	21	7	514

NH-17

分類・層位	II b	III a	IV a	石鏃	スクレイパー	フレイク	石斧	偏平打製石器	たたき石	台石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	合計
覆土1	9	4	11			3								27
ベルト	2		5		1				1					9
ベルト下	5	22	1	1	1			1				1		32
ベルト上	2	5	4											11
ベルト中	3		4						2					9
床						1	1	1	2	7	2	3	2	19
合計	21	31	25	1	2	4	1	2	5	7	2	4	2	107

NH-19

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	石鏃	石槍又はナイフ	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	たたき石	台石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	石製品	合計
東西トレンチ	11	6	18					1	1							37
東西ベルト	13	7	38	1				1	12							72
南北トレンチ	5	2	20						4	1						32
南北ベルト	15	4	35				1	1	4							60
覆土	14	1	15						1						1	32
HP-2覆土1			12						1							13
覆土1	21	7	35		1			1	4			1				70
覆土2	6	3	24									3				36
覆土3												1				1
不明		1							2		1		20			24
床	5	3	14	1		1			3	2	4	7	2	1		43
合計	90	34	211	2	1	1	1	4	32	3	5	12	22	1	1	420

P-1

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	たたき石	台石	礫・礫片	合計
覆土	1	7		3	4	15
坑底		1	1			2
合計	1	8	1	3	4	17

P-3

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	すり石	礫・礫片	合計
覆土	6	4	5	1	1	17

P-4

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	Ⅳa	Uフレイク	フレイク	たたき石	すり石	礫・礫片	被熱礫	石製品	合計
坑底			1			1					2
覆土	4	2	15	1	1		1	9	2	1	36
覆土下	1										1
合計	5	2	16	1	1	1	1	9	2	1	39

P-5

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	偏平打製石器	すり石	礫・礫片	合計
覆土	4	1	1	1	2	9
覆土下	2					2
合計	6	1	1	1	2	11

P-6

分類・層位	Ⅲa	Uフレイク	偏平打製石器	台石	礫・礫片	合計
覆土	7	1	1	1	4	14

P-7

分類・層位	北海道式石冠	軽石	合計
覆土	2	1	3

P-8

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	フレイク	偏平打製石器	台石	礫・礫片	合計
覆土	10	5	4	1	1	53	74

P-11

分類・層位	Ⅱb	Ⅲa	偏平打製石器	たたき石	すり石	台石	礫・礫片	被熱礫	合計
坑底		2					1		3
覆土	2	43	2	1	1	1	14	3	67
合計	2	45	2	1	1	1	15	3	70

P-12

分類・層位	Ⅲa	北海道式石冠	たたき石	台石	礫・礫片	合計
覆土	15	1	1	1	3	21

P-14

分類・層位	偏平打製石器	たたき石	台石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土	2	1	1	6	1	11

P-17

分類・層位	Ⅳa	礫・礫片	合計
覆土	2	2	4

NNP-60

分類・層位	石核	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	合計
覆土1	3	5	3	19	30
覆土2	4	4	10	34	52
合計	7	9	13	53	82

NP-61

分類・層位	Ⅱb	フレイク	偏平打製石器	台石	礫・礫片	被熱礫	加工痕の有る礫	合計
覆土1	4	1	2	3	3	2	1	16

NP-62

分類・層位	II b	III a	IV a	石核	フレイク	石のみ	加工痕の有る礫	合計
覆土				1				1
覆土1	1	1	4		2	1	1	10
覆土2	3		1					4
合計	4	1	5	1	2	1	1	15

NP-65

分類・層位	II b	石核	フレイク	偏平打製石器	合計
覆土2			4		4
覆土3				1	1
覆土5	1	1	1		3
合計	1	1	5	1	8

NP-70

分類・層位	IV a	合計
覆土1	14	14

NP-77

分類・層位	II b	III a	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	たたき石	礫・礫片	合計
覆土1	6	2	1	1	1	3	1	3	18

NP-80

分類・層位	III a	IV a	Uフレイク	合計
覆土1	9	7	1	17

NP-81

分類・層位	II b	III a	原石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土1	1	5	1	1	1	9
覆土2		1		1		2
合計	1	6	1	2	1	11

NP-82

分類・層位	II b	III a	IV a	フレイク	北海道式石冠	偏平打製石器	たたき石	石皿	台石	原石	軽石	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土1	5	54				1						1		61
覆土2	2	26	2	1			1							33
覆土3	6	57	1	1		1				1		2	1	70
覆土4	3	12	2	1	3	2	1	1	1		1	13	2	42
壁	2	2					1							7
坑底		2					1					3		6
合計	18	153	5	3	3	4	4	1	1	1	1	20	5	219

NP-84

分類・層位	II b	Uフレイク	合計
覆土1	1	1	2

NP-85

分類・層位	II b	III a	石錐	フレイク	合計
覆土1	7	3	1	2	13

NP-86

分類・層位	II b	III a	IV a	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	フレイク	礫・礫片	被熱礫	合計
覆土1	98	7	12	1			2		1	121
覆土2	100			1	1	1	1	1	1	106
覆土3	37									37
覆土4	16			1						17
壁	31									31
床	1									1
合計	283	7	12	3	1	1	3	1	2	313

NP-88

分類・層位	II b	III a	IV a	スクレイパー	Rフレイク	偏平打製石器	たたき石	軽石	礫・礫片	合計
覆土1	8	130	2	1	1	1	1	1	4	149

NP-90

分類・層位	礫・礫片	合計
覆土1	1	1

NP-92

分類・層位	II b	III a	偏平打製石器	礫・礫片	合計
覆土			1		1
覆土2	5	21		1	27
合計	5	21	1	1	28

表 - 3 遺構出土掲載土器一覧（復元土器）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	口縁部片	胴部片	底部片	復元残データ	総点数	時期・形式名	備考
図Ⅲ-6-1	H-2-70覆土×66	9	52	5	H-2-70覆土×5	71	Ⅲa	
図Ⅲ-15-1	H-9-30覆土下×62、H-9-31覆土下×8	6	62	2		70	Ⅲa	
図Ⅲ-20-1	NH-13-8覆土×2、NH-13-10覆土1×10、NH-13-101覆土1×1、NP-6-7覆土×1、F45-25Ⅳ×1、H49a-7×1、L48a-6Ⅳ×1	5	12	—	H48c-10Ⅳ×2、L48a-6Ⅳ×1	20	Ⅲa	
図Ⅲ-35-1	P-11-12覆土×1	1	—	—		1	Ⅳa	
図Ⅲ-37-1	P-12-12覆土×9	—	8	1		9	Ⅲa	
図Ⅲ-56-1	NP-82-2覆土2×1、NP-82-3覆土2×1、NP-82-4覆土2×1、NP-82-5覆土2×2、NP-82-8覆土2×1、NP-82-9覆土2×1、NP-82-10覆土2×1、NP-82-21覆土2×1、NP-82-23覆土2×2、NP-82-51覆土2×2、NP-82-57覆土1×4、NP-82-63覆土3×3、NP-82-64覆土2×3、NP-82-65覆土3×9、NP-82-97覆土1×3、NP-82-58覆土1×1、J44-11Ⅳ×1	8	23	6	NP-82-13覆土2×1、NP-82-57覆土1×2、NP-82-63覆土3×1、NP-82-65覆土3×6、NP-88-1覆土1×1、NP-88-6覆土1×1、NP-88-19覆土1×1、NP-88-21覆土1×1、NP-88-23覆土1×1、J44-11Ⅳ×1	53	Ⅲa	
図Ⅲ-61-4	NP-88-1覆土1×35、NP-88-6覆土1×1、NP-88-8覆土1×1、NP-88-9覆土1×5、NP-88-17覆土1×1、NP-88-19覆土1×16、NP-88-21覆土1×4、NP-88-23覆土1×2、NP-88-15覆土1×1	10	51	5	NP-88-1覆土1×19、NP-88-6覆土1×1、NP-88-9覆土1×2、NP-88-19覆土1×1、NP-88-22覆土1×3、NP-88-23覆土1×2	94	Ⅲa	

表 - 4 遺構出土掲載土器一覧（拓影図）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅲ-3-1	H-1-21覆土×1	IVa	-	口縁		1	胎土に海綿骨針と多量の砂礫を含む。
図Ⅲ-3-2	H-1-47覆土×1	Ⅲa	-	口縁		1	内面平滑。鈍い光沢を帯びる。補修孔2ヶ所（うち1つは破損面にかかる）
図Ⅲ-3-3	H-1-112覆土下×2	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅲ-3-4	H-1-137床×2、H-1-140床×1、H-1-154床×1	Ⅲa	4	口縁		4	
図Ⅲ-6-2	H-2-24覆土×1	Ⅲa	-	口縁		1	環状突起が縦位に付されている。突起上に縄線が2条巡る。内面は平滑。胎土中には繊維を含む。
図Ⅲ-6-3	H-2HF1-84覆土×1	Ⅲa	-	口縁		1	山形突起下に瘤状の貼付。赤褐色を呈する。
図Ⅲ-6-4	H-2-39覆土×1、H-2-40覆土×1	Ⅲa	2	口縁		2	
図Ⅲ-6-5	H-2-19②覆土×1	Ⅲa	-	-		1	円板状土製品
図Ⅲ-10-1	H-3-59床×1	Ⅱb	-	底部		1	
図Ⅲ-10-2	H-3-63床×1	Ⅱb	-	胴部		1	
図Ⅲ-13-1	H-4-30床×1	IVa	-	口縁		1	
図Ⅲ-20-2	NH-13-52②床×1	Ⅱb	-	口縁		1	
図Ⅲ-20-3	NH-13-20覆土2×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅲ-20-4	NH-13-57床×1	Ⅱb	-	胴部	NH-13-41床×1、86覆土1×2	4	
図Ⅲ-20-5	NH-13-39床×1	Ⅱb	-	胴部	NH-13-39床×7	8	
図Ⅲ-20-6	NH-13-87覆土1×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図Ⅲ-20-7	NH-13HP5-1覆土1×4、NH-13HP-1覆土1×1	Ⅲa	5	口縁	NH-13HP1-1覆土1×1、HP5-1覆土1×1、12覆土1×2、40床×5、66覆土2×4、87覆土1×1、145-4IV×2、145-11IV×1	22	
図Ⅲ-20-8	NH-13-97②覆土1×5	Ⅲa	5	口縁	NH-13-78床×6、97②覆土1×1	12	
図Ⅲ-20-9	NH-13-97②覆土1×3、NH-13-18床×2	Ⅲa	5	底部	NH-13-97②覆土1×2	7	
図Ⅲ-20-10	NH-13-99①覆土1×2	Ⅲa	2	底部		2	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅲ-20-11	NH-13-100覆土1×6	Ⅳa	6	口縁	NH-13-88②覆土1×2、90②覆土×1、100覆土×79、107③覆土1×2、F44-2②Ⅲ×1、J47-10Ⅳ×1、J47-15Ⅳ×14、K47-15Ⅳ×1	107	
図Ⅲ-24-1	NH-17-25ベルト×1	Ⅳa	-	口縁		1	
図Ⅲ-24-2	NH-17-39覆土1×1	Ⅳa	-	胴部		1	
図Ⅲ-24-3	NH-17-42ベルト×1	Ⅳa	-	底部		1	
図Ⅲ-24-4	NH-17-28ベルト下×5	Ⅲa	5	口縁	NH-13HF1-1×1、NH-17-28ベルト下×11、NP82-1覆土2×1、11覆土2×1、56覆土1×1	20	
図Ⅲ-24-5	NH-17-22ベルト上×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅲ-27-1	NH-19-106②ベルト×4	Ⅳa	4	口縁		4	
図Ⅲ-27-2	NH-19-1②床×2、NH-19-68覆土1×1、NH-19-71覆土2×2	Ⅳa	5	口縁	NH-19-1②床×7、68覆土1×1	13	
図Ⅲ-27-3a	NH-19-106②ベルト×2	Ⅳa	2	口縁	掲載拓影NH-19-100②ベルト×1と同一個体。NH-19-39覆土2×4、106②ベルト×4	11	内面平滑。焼成良好。網目状燃糸文を重ねて施文。
図Ⅲ-27-3b	NH-19-100②ベルト×1	Ⅳa	-	口縁	掲載拓影NH-19-106②ベルト×2と同一個体。NH-19-39覆土2×4、106②ベルト×4	11	内面平滑。焼成良好。網目状燃糸文を重ねて施文。
図Ⅲ-27-4	NH-19-45覆土2×1	Ⅳa	-	口縁		1	表裏面に連弧文
図Ⅲ-27-5	NH-19-106②ベルト×1	Ⅳa	-	口縁		1	
図Ⅲ-30-1	P-1-10覆土×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図Ⅲ-30-2	P-1-3覆土×1	Ⅲa	-	底部		1	
図Ⅲ-30-1	P-3-3覆土×1	Ⅱb	-	口縁		1	
図Ⅲ-30-2	P-3-2覆土×1	Ⅳa	-	口縁		1	粘土帯を2条貼付し、上に斜行縄文を施文。
図Ⅲ-31-1	P-4-32覆土下×1	Ⅱb	-	胴部		1	
図Ⅲ-34-1	P-8-11覆土×3	Ⅲa	3	口縁		3	
図Ⅲ-34-2	P-8-8覆土×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図Ⅲ-35-2	P-11-23覆土×1	Ⅲa	-	口縁	P-11-1覆土×1、14覆土×4、19覆土×2、21覆土×1、24覆土×1、28城底×1、44覆土×1、45覆土×1、46覆土×1、47覆土×1、49覆土×1	16	胎土に砂礫を多く含む・焼成良好・炭化物付着
図Ⅲ-35-3	P-11-42覆土×1	Ⅱb	-	底部		1	
図Ⅲ-37-2	P-12-9覆土×1	Ⅲa	-	口縁	P-12-4覆土×1	2	摩滅著しい。

図番号	遺構名グリッド・ 遺物番号・層位	時期	接合 点数	部位	拓本残データ	総点 数	備考
図Ⅲ-52-1	NP-70-1覆土 1×2	IVa	2	口縁		2	
図Ⅲ-53-1	NP-77-3覆土 1×2	IIb	2	口縁	NP-77-5覆土1×1	3	
図Ⅲ-56-2	NP-82-90覆 土4×5、NP- 82-29覆土3× 3、NP-82-31 覆土3×1	IIIa	9	口縁		9	
図Ⅲ-56-3	NP-82-15覆 土2×1	IIIa	-	口縁		1	胎土に砂礫を多く含む
図Ⅲ-56-4	NP-82-41覆 土4×3、NP- 82-69底×2	IIIa	5	底部		5	焼成良好
図Ⅲ-56-5	NP-82-48壁 ×1	IIb	-	口縁		1	
図Ⅲ-56-6	NP-82-20覆 土3×1	IIb	-	口縁		1	
図Ⅲ-59-1	NP-86-16覆 土1×3	IIb	3	口縁	NP-86-1 覆土1×5、2覆土2×5、6覆土3× 2、8覆土3×1、9覆土4×6、10壁×10、11坑 底×1、12覆土1×2、14覆土2×1、15覆土3 ×3、17覆土2×1、19覆土3×2、20覆土1× 2、22②覆土1×11、27覆土2×21	76	
図Ⅲ-59-2	NP-86-6覆土 3×1	IIb	-	口縁	NP-86-1 覆土1×5、2覆土2×5、6覆土3× 11、9覆土4×6、10壁×7、12覆土1×6、15覆 土3×1、17覆土2×2、19覆土3×2、20覆土 1×5、22②覆土1×26、27覆土2×20	97	
図Ⅲ-59-3	NP-86-10壁 ×1	IIb	-	底部		1	
図Ⅲ-61-5	NP-88-9覆土 1×1、NP- 88-21覆土1×1	IIIa	2	口縁		2	
図Ⅲ-62-1	NP-92-3②覆 土2×1	IIIa	-	胴部		1	
図Ⅲ-62-2	NP-92-3②覆 土2×1	IIIa	-	胴部		1	

表 - 5 遺構出土掲載石器一覧

掲載図番号	掲載番号	遺構名	遺物No.	取上げNo.	器種名	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図Ⅲ-3	5	H-1	44	44	スクレイパー	覆土	粘板岩	84.0	61.0	14.0	57.1	籠状石器
図Ⅲ-3	6	H-1	132	131	スクレイパー	床	頁岩	58.0	47.0	18.0	30.1	
図Ⅲ-4	7	H-1	122	121	スクレイパー	床	メノウ	64.0	38.0	15.0	27.8	
図Ⅲ-4	8	H-1	120	119	偏平打製石器	床	安山岩	77.0	(67.0)	13.0	(71.6)	
図Ⅲ-4	9	H-1	167	165	台石	HP-1床	安山岩	33.1	20.7	97.0	7,500.0	
図Ⅲ-6	6	H-2	7	7	スクレイパー	覆土	頁岩	57.0	44.5	9.0	23.7	
図Ⅲ-7	7	H-2	43	43	偏平打製石器	覆土	安山岩	99.0	188.0	36.0	750.0	
図Ⅲ-7	8	H-2	44	43	偏平打製石器	覆土	安山岩	88.0	141.0	25.0	400.0	
図Ⅲ-7	9	H-2	65	64	偏平打製石器	覆土	安山岩	137.5	170.0	37.0	1,050.0	被熱未製品
図Ⅲ-7	10	H-2	74	73	偏平打製石器	覆土	安山岩	132.0	191.0	26.0	1.1	未製品
図Ⅲ-7	11	H-2	3	3	北海道式石冠	不明	安山岩	(59.0)	(36.0)	(53.0)	(83.0)	
図Ⅲ-7	12	H-2	31	31	たたく石	覆土	安山岩	124.0	106.0	47.5	(730.0)	
図Ⅲ-7	13	H-2	82	81	たたく石	HF-1	安山岩	128.0	133.0	81.0	1,310.0	
図Ⅲ-7	14	H-2	83	82	たたく石	HF-1	安山岩	122.0	130.0	36.0	640.0	
図Ⅲ-11	3	H-3	56	53	石斧(未成品)	床	粘板岩	111.0	54.0	22.0	102.4	未製品
図Ⅲ-11	4	H-3	45	42	石斧	床	緑色泥岩	109.0	41.0	23.0	180.6	
図Ⅲ-11	5	H-3	50	47	北海道式石冠	床	安山岩	(70.0)	(84.0)	62.0	(480.0)	
図Ⅲ-11	6	H-3	60	57	北海道式石冠	覆土	安山岩	(37.0)	(61.0)	(13.0)	(28.6)	
図Ⅲ-11	7	H-3	6	6	たたく石	覆土	安山岩	122.0	105.0	64.0	990.0	
図Ⅲ-11	8	H-3	47	44	たたく石	床	安山岩	151.0	76.0	27.7	500.0	
図Ⅲ-11	9	H-3	44	41	たたく石	床	安山岩	308.0	100.0	87.0	4,000.0	
図Ⅲ-11	10	H-3	48	45	すり石	床	安山岩	157.0	125.0	48.0	1,340.0	
図Ⅲ-13	2	H-4	46	46	偏平打製石器	覆土	安山岩	123.0	129.0	30.0	565.0	
図Ⅲ-13	3	H-4	43	43	たたく石	H-4付近	安山岩	149.0	100.0	90.0	1,950.0	
図Ⅲ-13	4	H-4	42	42	たたく石	H-4付近	安山岩	113.0	231.0	68.0	2,430.0	
図Ⅲ-14	5	H-4	53	53	台石	床	安山岩	382.0	247.0	41.0	6,000.0	
図Ⅲ-14	6	H-4	52	52	台石	床	安山岩	429.0	283.0	82.0	15,000.0	
図Ⅲ-16	2	H-9	18	18	たたく石	覆土下	安山岩	137.0	73.0	43.0	570.0	
図Ⅲ-16	3	H-9	21	21	たたく石	覆土下	安山岩	102.0	81.0	65.0	630.0	
図Ⅲ-16	4	H-9	23	23	たたく石	覆土下	泥岩	98.0	77.0	58.0	570.0	
図Ⅲ-16	5	H-9	19	19	たたく石	覆土下	安山岩	151.0	69.0	41.0	580.0	
図Ⅲ-16	6	H-9	22	22	たたく石	覆土下	安山岩	157.0	71.0	51.0	710.0	
図Ⅲ-16	7	H-9	20	20	たたく石	覆土下	安山岩	153.0	69.0	58.0	800.0	
図Ⅲ-16	8	H-9	25	25	たたく石	覆土下	安山岩	141.0	102.0	38.5	780.0	
図Ⅲ-21	12	NH-13	65	65	石槍またはナイフ片	覆土2	玄武岩	99.0	38.0	11.0	47.9	
図Ⅲ-21	13	NH-13	103b	103b	スクレイパー	覆土1	頁岩	38.0	24.0	8.0	7.5	
図Ⅲ-21	14	NH-13	11	11	スクレイパー	覆土1	玄武岩	43.0	29.0	7.0	11.6	
図Ⅲ-21	15	NH-13	37	37	スクレイパー	床	頁岩	42.5	39.0	10.0	13.5	
図Ⅲ-21	16	NH-13	30	30	スクレイパー	覆土1	頁岩	49.5	45.0	17.0	42.3	
図Ⅲ-21	17	NH-13	103a	103a	スクレイパー	覆土1	頁岩	64.0	38.0	8.5	18.8	
図Ⅲ-21	18	NH-13	89	89	スクレイパー	覆土	メノウ	68.0	38.0	12.5	35.7	
図Ⅲ-21	19	NH-13	103c	103c	スクレイパー	覆土1	頁岩	45.0	25.0	10.0	9.3	
図Ⅲ-21	20	NH-13	38	38	スクレイパー	床	頁岩	68.0	65.0	11.0	39.9	
図Ⅲ-21	21	NH-13	1	1	石核	覆土	頁岩	93.0	65.5	36.0	230.0	NH-13(1-覆土正面図下側)とH-1(66-覆土)と接合
図Ⅲ-21	22	NH-13	13	13	偏平打製石器	覆土1	安山岩	92.5	127.5	23.5	400.0	
図Ⅲ-21	23	NH-13	34	34	偏平打製石器	覆土1	安山岩	108.0	170.0	24.5	570.0	
図Ⅲ-22	24	NH-13	80	80	台石	床	安山岩	168.0	148.0	37.0	935.0	
図Ⅲ-24	6	NH-17	29	29	石鏃	ベルト下	頁岩	35.0	13.0	5.0	2.6	
図Ⅲ-24	7	NH-17	43	43	スクレイパー	ベルト	頁岩	(37.0)	31.0	10.0	(12.6)	
図Ⅲ-24	8	NH-17	30	30	スクレイパー	ベルト下	泥岩	60.0	43.0	8.0	19.8	
図Ⅲ-24	9	NH-17	3	3	石斧	床	片岩	102.0	41.0	21.0	127.2	G32-12(Ⅲ)と接合
図Ⅲ-24	10	NH-17	31	31	偏平打製石器	ベルト下	安山岩	112.0	142.0	29.0	580.0	
図Ⅲ-24	11	NH-17	11	11	偏平打製石器	床	安山岩	110.0	152.0	21.0	570.0	炉石
図Ⅲ-24	12	NH-17	13	13	たたく石	床	安山岩	189.0	128.0	39.0	1,040.0	炉石
図Ⅲ-24	13	NH-17	44	44	たたく石	ベルト	安山岩	149.0	110.0	40.0	880.0	
図Ⅲ-25	14	NH-17	17	17	台石	床	安山岩	157.0	177.0	53.5	1,700.0	炉石
図Ⅲ-25	15	NH-17	15	15	台石	床	安山岩	237.0	169.0	54.0	2,980.0	炉石
図Ⅲ-25	16	NH-17	7	7	台石	床	安山岩	356.0	(181.0)	112	(10,000.0)	
図Ⅲ-27	6	NH-19	107	107	石鏃	東西ベルト	黒燐石	(26.0)	10.0	5.5	(1.3)	
図Ⅲ-27	7	NH-19	2	2	石鏃	床	メノウ	33.5	15.5	5.5	2.5	
図Ⅲ-27	8	NH-19	69	69	石槍またはナイフ	覆土1	頁岩	96.0	33.0	13.0	15.3	
図Ⅲ-27	9	NH-19	24	24	Uフレイク	床	頁岩	84.0	45.0	20.0	46.0	
図Ⅲ-27	10	NH-19	101	101	スクレイパー	南北ベルト	頁岩	48.5	48.0	11.0	26.2	
図Ⅲ-27	11	NH-19	60	60	石製品	覆土	軽石	22.0	35.0	9.0	3.1	
図Ⅲ-27	12	NH-19	3	3	たたく石	床	安山岩	122.0	147.0	31.0	610.0	
図Ⅲ-27	13	NH-19	10	10	たたく石	床	安山岩	189.0	101.0	82.0	2,170.0	
図Ⅲ-28	14	NH-19	17	17	台石片	床	安山岩	184.0	255.0	114.0	6,500.0	炉石
図Ⅲ-28	15	NH-19	8	8	台石	床	安山岩	325.0	246.0	98.0	10,500.0	
図Ⅲ-30	3	P-1	15		たたく石	壙底	安山岩	(123.5)	63.5	31.0	(330.0)	
図Ⅲ-30	4	P-1	12	12	台石	覆土	安山岩	467.0	266.0	147.0	28,500.0	
図Ⅲ-30	3	P-3	4		すり石	覆土	安山岩	37.0	60.0	(9.0)	20.9	
図Ⅲ-31	2	P-4	16	11	Uフレイク	覆土	頁岩	37.0	39.0	9.0	8.9	
図Ⅲ-31	3	P-4	17	11	石製品	壙底	頁岩	74.5	40.5	8.6	15.5	J47c2(Ⅳ)と接合
図Ⅲ-31	4	P-4	34	28	たたく石	壙底	安山岩	(83.0)	(55.0)	(21.0)	(95.0)	
図Ⅲ-31	5	P-4	27	21	すり石	覆土	安山岩	158.0	(125.0)	46.0	(1,340.0)	
図Ⅲ-31	6	P-4	5	5	被熱燻	覆土	安山岩	(26.0)	(197.0)	(131.0)	(5,120.0)	P-4-12・26・30 J47d1・J48d12と接合
図Ⅲ-32	1	P-5	6		偏平打製石器	覆土	安山岩	83.0	147.0	25.0	450.0	
図Ⅲ-32	2	P-5	5		すり石	覆土	安山岩	109.0	82.0	46.0	590.0	
図Ⅲ-32	1	P-6	2		Uフレイク	覆土	頁岩	61.0	36.5	5.5	9.7	
図Ⅲ-32	2	P-6	8		偏平打製石器	覆土	安山岩	88.0	110.0	21.5	300.0	
図Ⅲ-32	3	P-6	1		台石	覆土	安山岩	151.0	205.0	67.0	3,250.0	
図Ⅲ-33	1	P-7	3		北海道式石冠	覆土	安山岩	(89.0)	(104.0)	65.0	(780.0)	
図Ⅲ-33	2	P-7	3		北海道式石冠	覆土	安山岩	106.0	126.0	61.0	1,200.0	
図Ⅲ-34	3	P-8	50	49	偏平打製石器	覆土	安山岩	90.0	126.0	27.0	400.0	五分割
図Ⅲ-34	4	P-8	49	48	台石	覆土	安山岩	(210.0)	189.0	124.0	(4,980.0)	被熱
図Ⅲ-35	4	P-11	32	31	偏平打製石器	覆土	安山岩	122.0	157.0	41.0	1,130.0	
図Ⅲ-35	5	P-11	33	32	偏平打製石器	覆土	安山岩	103.0	(123.0)	29.0	(420.0)	
図Ⅲ-35	6	P-11	7	7	たたく石	覆土	安山岩	(34.0)	(58.0)	45.0	(96.4)	
図Ⅲ-36	7	P-11	52	12	台石	覆土	安山岩	300.0	298.0	199.0	23,500.0	
図Ⅲ-37	3	P-12	5	5	北海道式石冠	覆土	安山岩	(58.0)	(39.0)	(49.0)	(108.0)	
図Ⅲ-37	4	P-12	6	6	たたく石	覆土	安山岩	104.0	126.0	34.0	560.0	
図Ⅲ-37	5	P-12	11	11	台石	覆土	安山岩	290.0	212.0	131.0	10,500.0	
図Ⅲ-38	1	P-14	5	5	偏平打製石器	覆土	安山岩	120.0	148.0	32.0	780.0	
図Ⅲ-38	2	P-14	11	11	偏平打製石器	覆土	安山岩	84.0	142.0	29.0	510.0	被熱
図Ⅲ-39	1	NP-60	38	38	Uフレイク	覆土2	頁岩	49.5	52.8	20.0	47.0	接合資料A 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図Ⅲ-39	2	NP-60	40	40	Uフレイク	覆土2	頁岩	52.0	70.2	24.0	61.9	接合資料A 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図Ⅲ-39	3	NP-60	68	68	フレイク	覆土2	頁岩	43.4	98.5	22.5	79.7	接合資料A 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図Ⅲ-39	4	NP-60	1	1	Rフレイク	覆土1	頁岩	91.0	105.0	16.0	139.3	接合資料A 遺物集中南西側 1回目掘り下げ

掲載図番号	掲載番号	遺構名	遺物No.	取上げNo.	器種名	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図III-39	5	NP-60	69	69	フレイク	覆土2	頁岩	66.0	44.5	7.0	22.2	接合資料A 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-40	6	NP-60	30	30	Rフレイク	覆土1	頁岩	97.0	62.3	19.0	80.2	接合資料A 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-40	7	NP-60	25	25	フレイク	覆土1	頁岩	90.5	78.5	26.0	102.6	接合資料A 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-40	8	NP-60	26	26	フレイク	覆土1	頁岩	56.5	43.5	8.5	20.8	接合資料A 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-40	9	NP-60	7	7	フレイク	覆土1	頁岩	98.0	87.5	47.5	270.0	接合資料A 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-40	10	NP-60	5	5	Rフレイク	覆土1	頁岩	59.5	72.3	21.0	72.6	接合資料A 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-40	11	NP-60	21	21	石核	覆土1	頁岩	61.0	74.5	20.0	105.7	接合資料B 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-40	12	NP-60	53	53	フレイク	覆土2	頁岩	47.5	100.5	38.0	170.5	接合資料B 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-40	13	NP-60	63	63	フレイク	覆土2	頁岩	65.5	100.5	21.0	125.3	接合資料B 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-41	14	NP-60	14	14	Uフレイク	覆土1	頁岩	63.0	89.0	23.0	128.5	接合資料B 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-41	15	NP-60	56	56	フレイク	覆土2	頁岩	70.0	81.0	13.5	84.0	接合資料B 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-41	16	NP-60	77	77	フレイク	覆土2	頁岩	63.0	86.8	18.0	106.1	接合資料B 遺物集中北東側 3回目掘り下げ
図III-41	17	NP-60	23	23	フレイク	覆土1	頁岩	62.0	69.5	23.5	114.7	接合資料B 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-41	18	NP-60	57	57	フレイク	覆土2	頁岩	61.0	115.0	22.5	169.1	接合資料B 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-41	19	NP-60	64	64	フレイク	覆土2	頁岩	74.5	81.5	23.5	161.9	接合資料C 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-41	20	NP-60	61	61	フレイク	覆土2	頁岩	91.0	75.5	17.5	143.9	接合資料C 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-41	21	NP-60	58	58	フレイク	覆土2	頁岩	58.5	47.8	17.0	40.1	接合資料C 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-42	22	NP-60	51	51	フレイク	覆土2	頁岩	104.5	108.5	36.5	305.0	接合資料D 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-42	23	NP-60	13	13	Rフレイク	覆土1	頁岩	82.0	83.0	44.0	250.0	接合資料D 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-42	24	NP-60	18	18	フレイク	覆土1	頁岩	109.0	67.5	34.0	177.8	接合資料E 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-42	25	NP-60	81	81	Uフレイク	覆土2	頁岩	66.0	81.0	17.0	76.8	接合資料E 遺物集中北東側 3回目掘り下げ
図III-42	26	NP-60	71	71	フレイク	覆土2	頁岩	65.0	52.5	16.0	44.4	接合資料F 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-42	27	NP-60	43	43	Rフレイク	覆土2	頁岩	76.5	66.3	25.5	113.4	接合資料F 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-43	28	NP-60	80	80	フレイク	覆土2	頁岩	68.7	58.0	8.5	31.5	接合資料G 遺物集中北東側 3回目掘り下げ
図III-43	29	NP-60	78	78	フレイク	覆土2	頁岩	83.0	83.0	26.0	176.6	接合資料G 遺物集中北東側 3回目掘り下げ
図III-43	30	NP-60	34	34	フレイク	覆土2	頁岩	70.0	68.0	16.0	63.0	接合資料H 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-43	31	NP-60	44	44	フレイク	覆土2	頁岩	67.0	30.4	12.0	33.2	接合資料H 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-43	32	NP-60	72	72	フレイク	覆土2	頁岩	88.3	56.5	21.0	79.8	接合資料H 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-43	33	NP-60	67	67	Rフレイク	覆土2	頁岩	74.5	59.0	22.5	73.3	接合資料H 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-43	34	NP-60	29	29	フレイク	覆土1	頁岩	48.3	46.5	10.0	20.8	接合資料H 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-43	35	NP-60	27	27	フレイク	覆土1	頁岩	70.5	47.0	16.0	42.6	接合資料H 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-43	36	NP-60	35	35	フレイク	覆土2	頁岩	72.5	65.3	19.0	72.4	接合資料H 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-43	37	NP-60	45	45	石核	覆土2	頁岩	58.5	90.0	28.0	122.7	接合資料H 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-44	38	NP-60	70	70	フレイク	覆土2	頁岩	71.0	83.8	18.0	99.0	接合資料I 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-44	39	NP-60	39	39	Uフレイク	覆土2	頁岩	84.0	66.0	26.0	96.2	接合資料I 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-44	40	NP-60	11	11	フレイク	覆土1	頁岩	92.4	72.5	25.0	93.9	接合資料I 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-44	41	NP-60	74	74	フレイク	覆土2	頁岩	64.3	39.5	15.0	34.0	接合資料I 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-44	42	NP-60	28	28	フレイク	覆土1	頁岩	51.5	64.0	9.0	27.1	接合資料J 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-44	43	NP-60	4	4	Uフレイク	覆土1	頁岩	41.7	95.0	7.5	35.6	接合資料J 遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-44	44	NP-60	60	60	Uフレイク	覆土2	頁岩	53.0	57.5	20.0	41.1	接合資料K 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-44	45	NP-60	75	75	フレイク	覆土2	頁岩	55.0	69.5	12.5	40.1	接合資料K 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-45	46	NP-60	49	49	フレイク	覆土2	頁岩	85.5	101.0	25.0	253.0	接合資料L 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-45	47	NP-60	16	16	フレイク	覆土1	頁岩	66.0	74.0	25.0	122.4	接合資料L 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-45	48	NP-60	37	37	Uフレイク	覆土2	頁岩	56.3	38.3	16.5	27.8	接合資料M 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-45	49	NP-60	36	36	Uフレイク	覆土2	頁岩	68.5	68.5	23.0	119.3	接合資料M 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-45	50	NP-60	66 <small>(小)</small>	66 <small>(小)</small>	フレイク	覆土2	頁岩	23.0	25.0	4.0	2.2	接合資料N 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-45	51	NP-60	66 <small>(大)</small>	66 <small>(大)</small>	Uフレイク	覆土2	頁岩	34.0	33.0	4.0	4.9	接合資料N 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-45	52	NP-60	79	79	Rフレイク	覆土2	頁岩	82.0	89.7	14.0	137.3	接合資料O 遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-45	53	NP-60	50	50	フレイク	覆土2	頁岩	30.5	28.0	3.5	2.2	接合資料O 遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-46	54	NP-60	19	19	フレイク	覆土2	頁岩	53.5	75.5	18.5	71.4	接合資料P 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-46	55	NP-60	55	55	フレイク	覆土2	頁岩	30.3	35.0	5.5	6.3	接合資料P 遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-46	56	NP-60	22	22	石核	覆土1	頁岩	92.5	104.0	29.0	253.0	接合資料P 遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-46	57	NP-60	2	2	フレイク	覆土1	頁岩	66.0	68.0	18.0	70.7	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-46	58	NP-60	3	3	Uフレイク	覆土1	頁岩	53.2	71.5	25.0	65.1	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-46	59	NP-60	10	10	Rフレイク	覆土1	頁岩	63.5	38.0	20.0	44.3	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-46	60	NP-60	6	6	フレイク	覆土1	頁岩	37.5	72.2	31.5	85.6	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-46	61	NP-60	8	8	フレイク	覆土1	頁岩	57.0	89.0	34.5	157.0	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-46	62	NP-60	41	41	フレイク	覆土2	頁岩	45.0	44.5	12.0	15.3	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-46	63	NP-60	9	9	フレイク	覆土1	頁岩	38.0	80.0	16.0	34.5	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-46	64	NP-60	12	12	フレイク	覆土1	頁岩	51.5	63.0	27.0	82.7	遺物集中南西側 1回目掘り下げ
図III-47	65	NP-60	20	20	フレイク	覆土1	頁岩	79.5	86.5	31.0	172.3	遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-47	66	NP-60	31	31	Rフレイク	覆土2	頁岩	74.0	46.5	18.0	54.1	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-47	67	NP-60	33	33	フレイク	覆土2	頁岩	42.0	44.0	11.5	23.2	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-47	68	NP-60	17	17	フレイク	覆土1	頁岩	90.5	72.8	18.0	109.3	遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-47	69	NP-60	15	15	フレイク	覆土1	頁岩	75.0	62.0	23.0	109.3	遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-47	70	NP-60	42	42	Uフレイク	覆土2	頁岩	46.5	55.5	16.0	43.8	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-47	71	NP-60	32	32	石核	覆土2	頁岩	68.0	66.0	34.0	144.2	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-47	72	NP-60	46	46	石核	覆土2	頁岩	57.5	109.5	25.0	126.8	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-47	73	NP-60	24	24	石核	覆土1	頁岩	62.0	106.2	22.0	168.0	遺物集中北東側 1回目掘り下げ
図III-48	74	NP-60	47	47	石核	覆土2	頁岩	42.0	55.0	19.0	55.0	遺物集中南西側 2回目掘り下げ
図III-48	75	NP-60	48	48	フレイク	覆土2	頁岩	55.0	70.0	25.0	100.8	遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-48	76	NP-60	54	54	フレイク	覆土2	頁岩	50.0	67.0	19.0	86.5	遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-48	77	NP-60	62	62	フレイク	覆土2	頁岩	50.5	62.0	21.0	68.3	遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-48	78	NP-60	59	59	フレイク	覆土2	頁岩	54.0	74.2	15.5	56.9	遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-48	79	NP-60	73	73	フレイク	覆土2	頁岩	44.5	63.5	16.0	41.0	遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-48	80	NP-60	76	76	フレイク	覆土2	頁岩	69.5	67.0	13.0	57.5	遺物集中南西側 3回目掘り下げ
図III-48	81	NP-60	65	65	フレイク	覆土2	頁岩	84.4	71.7	12.5	59.4	遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-48	82	NP-60	52	52	フレイク	覆土2	頁岩	88.5	79.7	41.0	275.0	遺物集中北東側 2回目掘り下げ
図III-49	1	NP-61	10	10	扁平打製石器	覆土1	安山岩	78.0	122.0	27.3	386.0	
図III-49	2	NP-61	12	12	扁平打製石器	覆土1	安山岩	(88.0)	(90.0)	21.0	(271.0)	
図III-49	3	NP-61	4	4	台石片	覆土1	安山岩	(276.0)	(210.0)	98.0	(9,000.0)	
図III-50	4	NP-61	5	5	台石片	覆土1	安山岩	(290.0)	(287.0)	133.0	(10,500.0)	
図III-50	1	NP-62	1	1	石核	覆土	頁岩	37.0	32.0	14.0	13.3	
図III-50	2	NP-62	4	4	石の片	覆土1	片岩	(62.0)	22.0	11.0	(26.0)	F43-36(IV)と接合
図III-51	1	NP-65	4	4	石核	覆土5	頁岩	53.0	32.0	17.5	32.5	
図III-51	2	NP-65	2	2	扁平打製石器	覆土3	安山岩	86.0	79.0	16.0	170.0	
図III-53	2	NP-77	15	15	スクレイパー片	覆土1	玄武岩	53.0	38.5	15.5	29.1	
図III-53	3	NP-77	12	12	たたき石	覆土1	安山岩	150.0	190.0	46.0	1,420.0	
図III-56	7	NP-82	80	80	北海道式石冠	覆土4	安山岩	82.0	(104.0)	64.0	(640.0)	
図III-56	8	NP-82	78	78	北海道式石冠	覆土4	安山岩	(71.0)	(59.0)	54.0	(300.0)	
図III-56	9	NP-82	34	34	北海道式石冠	覆土4	安山岩	(42.0)	(61.0)	60.0	(220.0)	
図III-57	10	NP-82	53	53	扁平打製石器	覆土1	安山岩	113.0	171.0	15.0	500.0	NP-33(覆土4)と接合
図III-57	11	NP-82	71	71	扁平打製石器	覆土3	安山岩	(70.0)	(87.0)	15.0	(80.0)	
図III-57	12	NP-82	96	96	扁平打製石器	覆土4	安山岩	99.0	(71.0)	19.0	(110.0)	
図III-57	13	NP-82	26	26	たたき石	覆土2	安山岩	139.0	86.0	36.0	540.0	加工痕あり
図III-57	14	NP-82	86	86	石皿	覆土4	安山岩	330.0	242.0	129.0	16,000.0	
図III-58	1	NP-85	2	2	石片	覆土1	頁岩	54.0	3.0	7.5	15.4	
図III-59	4	NP-86	3	3	スクレイパー片	覆土2	頁岩	26.5	25.0	7.5	5.5	
図III-59	5	NP-86	7	7	スクレイパー	覆土4	頁岩	44.0	65.0	7.6	26.3	
図III-59	6	NP-86	24	24	スクレイパー	覆土1	頁岩	33.0	25.5	4.0	4.5	
図III-60	1	NP-88	25	25	スクレイパー	覆土1	頁岩	61.0				

表 - 1 包含層出土土器一覽

層位	Ⅱ群b類 土器	Ⅲ群a類 土器	Ⅳ群a類 土器	Ⅴ群a類 土器	焼成 粘土塊	土製品	合計
Ⅲ層	547	374	4,299	59	0	2	5,281
Ⅳ層	3,297	2,017	11,094	0	0	1	16,409
Ⅴ層	389	115	440	0	0	0	944
表採・攪乱・ 木根痕・B調跡	30	149	154	0	1	1	335
風倒木	1,005	199	1,454	0	0	0	2,658
不明・排土	41	9	73	0	0	0	123
合計	5,309	2,863	17,514	59	1	4	25,750

表 - 2 包含層出土掲載土器一覧（復元土器）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	口縁部片	胴部片	底部片	復元残データ	総点数	時期・形式名	備考
図IV-1-1	G42-27V × 141	15	114	12	G42-27V × 1	142	Ⅱb	
図IV-3-35	I50-7木根 × 53	5	44	4	I50-7木根 × 1	54	Ⅲa	縦方向に施された第2種羽状縄文は全部で17段を数える。
図IV-5-63	J47-3②Ⅲ × 3	0	0	3		3	Ⅲa	
図IV-6-64	F48c-11Ⅲ × 7、F48d-2Ⅲ × 1、F48d-8Ⅲ × 1、F48d-15Ⅳ × 2、F48d-20②Ⅲ × 1、F49a-3Ⅳ × 1、F49a-15Ⅳ × 2、F49a-17Ⅳ × 2、F49b-3Ⅳ × 2、F49b-6Ⅳ × 1、F49b-11Ⅳ × 6、F49b-15Ⅳ × 1、G48a-5Ⅲ × 8、I48d-5②Ⅲ × 2	4	35	0	F48c-18Ⅳ × 1	40	Ⅳa	
図IV-6-65	H38-12①Ⅳ × 2、H38-22①Ⅳ × 1、H38-29①Ⅳ × 1、H38-31①木根 × 1、H39-21①Ⅳ × 1、H39-24①Ⅳ × 1、H39-26①Ⅳ × 2	5	4	0	H38-14①Ⅳ × 1、H39-4②Ⅳ × 1、H39-5①Ⅳ × 1、H39-13①Ⅳ × 1、H39-24①Ⅳ × 1、H39-26①Ⅳ × 1、I39-5①Ⅳ × 1、I39-17①Ⅳ × 1	17	Ⅳa	
図IV-6-66	G47-28Ⅳ × 3	0	2	1	G47-28Ⅳ × 1	4	Ⅳa	
図IV-6-67	J42-16②Ⅳ × 9	0	3	6		9	Ⅳa	
図IV-6-68	G47-3②Ⅲ × 1、G47-28Ⅳ × 9	0	8	2		10	Ⅳa	
図IV-6-69	J42-10Ⅳ × 1、J42-2Ⅳ × 1	0	0	2		2	Ⅳa	
図IV-6-70	F49b-3Ⅳ × 1、F49c-8Ⅳ × 2、F49c-9Ⅳ × 2、F49c-11Ⅳ × 10、F49c-12Ⅳ × 63、F49c-14Ⅳ × 18、F49c-16Ⅳ × 23、F49c-17Ⅳ × 1、F49d-11Ⅳ × 1	19	94	8	F43-25Ⅲ × 1、F43-40Ⅳ × 2、F43-50Ⅳ × 1、F44-9Ⅳ × 1、F44-16Ⅳ × 1、F44-18Ⅳ × 1、F44-26Ⅳ × 1、F44-34風倒木 × 1、F49c-8Ⅳ × 5、F49c-11Ⅳ × 4、F49c-12Ⅳ × 1、F49c-14Ⅳ × 2、F49c-16Ⅳ × 3、G43-64Ⅳ × 1、I41-9Ⅳ × 1	147	Ⅳa	
図IV-6-71	E48a-2Ⅲ × 1、E48b-7Ⅲ × 21、E48b-8Ⅳ × 4、E48b-9Ⅳ × 6、E48b-11Ⅳ × 3	6	28	1		35	Ⅳa	
図IV-6-72	F43-25②Ⅲ × 1、F44-26②Ⅳ × 4、F44-42Ⅳ × 3	5	1	2		8	Ⅳa	
図IV-6-73	J43-9Ⅲ × 2	1	1	0		2	Ⅳa	
図IV-12-154	G40-34Ⅳ × 1、H40-1Ⅲ × 3、H40-7Ⅳ × 3、H40-26②Ⅳ × 4、H40-34Ⅳ × 3、I40-1Ⅲ × 3	2	13	2	H40-7Ⅳ × 1、I40-3②Ⅳ × 1	19	Ⅳa	
図IV-12-155	G41-10Ⅳ × 1、G41-21Ⅳ × 6、H39-1Ⅲ × 2、H-39-5②Ⅳ × 5、H39-8②Ⅳ × 1、H39-9②Ⅳ × 2、H39-13②Ⅳ × 1、H40-39Ⅳ × 1、I39-2Ⅲ × 1、I39-5②Ⅳ × 1、I39-8②Ⅳ × 3、I39-17②Ⅳ × 3、J38-1Ⅲ × 1、J38-5Ⅳ × 1	9	19	1	H39-1Ⅲ × 1、I39-17②Ⅳ × 1	31	Ⅳa	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	口縁部片	胴部片	底部片	復元残データ	総点数	時期・形式名	備考
図IV-12-156	F39-3IV×1、F39-5IV×2、F39-8IV×1、F40-1IV×1	2	3	0	F39-3IV×5、F39-5IV×1、F40-10IV×2	13	IVa	
図IV-12-157	F40-2Ⅲ×19、F40-10IV×1、F40-26IV×1、F41-36IV×1、G40-1Ⅲ×1、G41-25IV×4、H39-1Ⅲ×3、H40-1Ⅲ×5、H40-7IV×8	9	34	0	G41-25IV×2、H39-1Ⅲ×1、H40-7IV×5	51	IVa	
図IV-12-158	F49a-1Ⅲ上×1、F49a-5IV×1、F49a-6Ⅲ上×1、I47-22Ⅲ×1	0	1	3		4	IVa	
図IV-12-159	F44-2②Ⅲ×4、F44-9②IV×2、F44-18②風倒×1、F44-34②風倒×9、F44-42②IV×6、F44-68風倒×1、F45-32②風倒×1、G43-28IV×1、G43-40IV×1、G44-3②Ⅲ×10、G44-14②IV×2、G44-17②IV×1、G44-21②IV×1、G45-3②IV×1、H44-2②Ⅲ×1、I44-12②IV×1、I44-1②IV×4、I44-38IV×4	9	39	3		51	IVa	
図IV-13-166	J42-10Ⅲ×44	6	33	5	J42-10Ⅲ×1	45	VIa	

表 - 3 包含層出土掲載土器一覧（拓影図）

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図IV-1-2a	H43-48IV × 3、 F43-54IV × 1	II b	4	口縁	掲載拓影H43-1Ⅲ × 1と同一個体。F41-21IV × 2、F41-23IV × 1、F43-23Ⅲ × 1、F43-33IV × 1、F43-38IV × 12、F43-48IV × 14、F43-54IV × 3、F43-59IV × 4、F43-62IV × 1、F44-74IV × 1、NP-86-22①覆土1 × 3	48	
図IV-1-2b	H43-1Ⅲ × 1	II b	—	口縁	掲載拓影H43-48IV × 3+F43-54IV × 1と同一個体。F41-21IV × 2、F41-23IV × 1、F43-23Ⅲ × 1、F43-33IV × 1、F43-38IV × 12、F43-48IV × 14、F43-54IV × 3、F43-59IV × 4、F43-62IV × 1、F44-74IV × 1、NP-86-22①覆土1 × 3	48	
図IV-1-3	F45-24IV × 1	II b	—	口縁		1	
図IV-1-4	G44-10IV × 1	II b	—	口縁	I43-40IV × 1、I44-1Ⅲ × 1、I44-19 × 1、I44-39IV × 1、I45-47Ⅲ × 1	6	
図IV-1-5	F43-59IV × 1	II b	—	口縁		1	
図IV-1-6	J41-14Ⅲ × 2	II b	2	口縁		2	
図IV-1-7	G44-18IV × 1、 G44-64V × 1	II b	2	口縁		2	
図IV-1-8a	I47-5IV × 1、I 47-10IV × 1	II b	2	口縁	掲載拓影J43-51V × 1+I47-16①V × 1と同一個体。I47-16①V × 1、I47-10IV × 2	7	
図IV-1-8b	J43-51V × 1、I 47-16①V × 1	II b	2	口縁	掲載拓影I47-5IV × 1+I47-10IV × 1と同一個体。I47-16①V × 1、I47-10IV × 2	7	
図IV-1-9a	I45-14IV × 4、 I45-1IV × 1、 I45-38 × 1	II b	6	口縁	掲載拓影I45-28IV × 1と同一個体。G44-1Ⅲ × 1、G44-15IV × 2、G45-1IV × 3、G45-11Ⅲ × 1、G45-16IV × 5、G45-17①IV × 1、G45-23①IV × 5、G45-30IV × 1、I44-36IV × 1、I44-39IV × 1、I45-1IV × 2、I45-14IV × 12、I45-16IV × 1、I45-18IV × 15、I45-24IV × 1、I45-43IV × 2、I45-47IV × 1、K47-14IV × 1	63	文様施文後、ヘラ状工具で着表面を調整している。
図IV-1-9b	I45-28IV × 1	II b	—	底部	掲載拓影I45-14IV × 4+I45-1IV × 1+I45-38 × 1と同一個体。G44-1Ⅲ × 1、G44-15IV × 2、G45-1IV × 3、G45-11Ⅲ × 1、G45-16IV × 5、G45-17IV × 1、G45-23IV × 5、G45-30IV × 1、I44-36IV × 1、I44-39IV × 1、I45-1IV × 2、I45-14IV × 12、I45-16IV × 1、I45-18IV × 15、I45-24IV × 1、I45-43IV × 2、I45-47IV × 1、K47-14IV × 1	63	
図IV-1-10	L48c-4風倒木 × 1	II b	—	口縁		1	
図IV-1-11	J50 d-3IV × 1	II b	—	口縁	J50d-2Ⅲ × 1	2	
図IV-1-12	K48c-8IV × 1、 K48c-9IV × 1	II b	2	口縁	K48c-10IV × 2、L48d-2 × 1	5	
図IV-1-13	J46-31V × 1	II b	—	口縁		1	2本1組の縄線を口縁に巡らせ、縄線間に馬蹄形の縄圧痕を連続的に施している。

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ-1-14	L48d-5Ⅳ×3	Ⅱb	3	口縁	K47b-2Ⅲ×1、K48b-8Ⅳ×1、K48b-9Ⅳ×4、K48c-10Ⅳ×1、L48-1Ⅳ×1、L48a-4Ⅳ×1、L48a-5Ⅳ×2、L48a-8風倒木×1、L48a-16Ⅳ×10、L48a-18Ⅳ×1、L48b-3Ⅳ×2、L48d-2Ⅳ×1、L48d-3風倒木×1、L48d-5Ⅳ×4	34	
図Ⅳ-1-15	K49c-5Ⅳ×1	Ⅱb	-	口縁		1	
図Ⅳ-1-16a	H42-13Ⅳ×18、 I42-9Ⅳ×2	Ⅱb	20	口縁	掲載拓影H42-13Ⅳ×3と同一個体。H42-8Ⅳ×1、H42-13Ⅳ×105、H47-13Ⅳ×1、I42-9Ⅳ×5、I42-19Ⅳ×2、未注記×3	140	
図Ⅳ-1-16b	H42-13Ⅳ×3	Ⅱb	3	口縁	掲載拓影H42-13Ⅳ×18+I42-9①Ⅳ×2と同一個体。H42-8Ⅳ×1、H42-13Ⅳ×105、H47-13Ⅳ×1、I42-9Ⅳ×5、I42-19Ⅳ×2、未注記×3	140	
図Ⅳ-1-17	F37-1Ⅳ×2、 G42-13Ⅳ×2	Ⅱb	4	口縁	F37-1Ⅳ×2、G42-4①Ⅲ×4、G42-9①Ⅳ×7、G42-13Ⅳ×1、G42-20Ⅳ×1、G42-30①風倒木×6、G43-48Ⅳ×1、H36-6Ⅳ×1、H39-12Ⅳ×1	28	
図Ⅳ-1-18	H43-61Ⅳ×1	Ⅱb	-	口縁		1	
図Ⅳ-1-19a	G44-74Ⅳ×1、 G43-91①風倒木×1、 F44-58風倒木×1	Ⅱb	3	口縁	掲載拓影J44-45Ⅳ×1と同一個体。F44-43①Ⅳ×1、G43-20Ⅳ×1、G43-48Ⅳ×5、G43-83風倒木×3、G43-91①風倒木×1、G44-10Ⅳ×2、G44-18①Ⅳ×2、G44-69風倒木×1、H44-16B調査トレンチ×1、J37-16Ⅳ×1	22	
図Ⅳ-1-19b	J44-45Ⅳ×1	Ⅱb	-	口縁	掲載拓影G44-74Ⅳ×1+G43-91①風倒木×1+F44-58風倒木×1と同一個体。F44-43①Ⅳ×1、G43-20Ⅳ×1、G43-48Ⅳ×5、G43-83風倒木×3、G43-91①風倒木×1、G44-10Ⅳ×2、G44-18①Ⅳ×2、G44-69風倒木×1、H44-16B調査トレンチ×1、J37-16Ⅳ×1	22	
図Ⅳ-1-20	G45-16Ⅳ×1	Ⅱb	-	口縁		1	
図Ⅳ-2-21a	I48d-14Ⅳ×2、 I48a-13Ⅳ×3	Ⅱb	5	口縁	掲載拓影F48c-14Ⅳ×1+F49a-9Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×5と同一個体。NH-1-2覆土×1、NH-3-16覆土×1、NP-5-2覆土×2、G48d-9Ⅲ×1、G49b-4Ⅲ上×1、H48c-14Ⅳ×1、H49b-10Ⅳ×1、I48a-9Ⅳ×1、I48a-13Ⅳ×2、I48b-4Ⅳ×1、I48d-3Ⅲ×2、I48d-7Ⅳ×4、I48d-10木根×1、I48d-12Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×1、I49a-11Ⅳ×1、I49b-3Ⅳ×1、I49d-19Ⅳ×1、J47c-1Ⅳ×1、J48a-7Ⅳ×1、K48b-8Ⅳ×1	39	
図Ⅳ-2-21b	F48c-14Ⅳ×1、 F49a-9Ⅳ×1	Ⅱb	2	口縁	掲載拓影I48d-14Ⅳ×2+I48a-13Ⅳ×3、I48d-14Ⅳ×5と同一個体。NH-1-2覆土×1、NH-3-16覆土×1、NP-5-2覆土×2、G48d-9Ⅲ×1、G49b-4Ⅲ上×1、H48c-14Ⅳ×1、H49b-10Ⅳ×1、I48a-9Ⅳ×1、I48a-13Ⅳ×2、I48b-4Ⅳ×1、I48d-3Ⅲ×2、I48d-7Ⅳ×4、I48d-10木根×1、I48d-12Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×1、I49a-11Ⅳ×1、I49b-3Ⅳ×1、I49d-19Ⅳ×1、J47c-1Ⅳ×1、J48a-7Ⅳ×1、K48b-8Ⅳ×1	39	

図番号	遺構名グリッド・ 遺物番号・層位	時期	接合 点数	部位	拓本残データ	総点 数	備考
図Ⅳ-2-21c	I48d-14Ⅳ×5	Ⅱb	5	底部	掲載拓影F48c-14Ⅳ×1+F49a-9Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×2+I48a-13Ⅳ×3と同一個体。NH-1-2覆土×1、NH-3-16覆土×1、NP-5-2覆土×2、G48d-9Ⅲ×1、G49b-4Ⅲ上×1、H48c-14Ⅳ×1、H49b-10Ⅳ×1、I48a-9Ⅳ×1、I48a-13Ⅳ×2、I48b-4Ⅳ×1、I48d-3Ⅲ×2、I48d-7Ⅳ×4、I48d-10木根×1、I48d-12Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×1、I49a-11Ⅳ×1、I49b-3Ⅳ×1、I49d-19Ⅳ×1、J47c-1Ⅳ×1、J48a-7Ⅳ×1、K48b-8Ⅳ×1	39	
図Ⅳ-2-22	I48b-6Ⅲ×2	Ⅱb	2	口縁		2	
図Ⅳ-2-23	F43-11Ⅳ×2、 F43-20Ⅳ×1	Ⅱb	3	口縁		3	
図Ⅳ-2-24	J42-23Ⅳ×1、J 42-33Ⅳ×4	Ⅱb	5	胴部	G42-4Ⅲ×1、G42-9Ⅳ×1、G42-13Ⅳ×1、I40-13Ⅳ×1、I42-33Ⅳ×1、I42-34Ⅳ×1、I42-38Ⅳ×1	12	
図Ⅳ-2-25	F43-48Ⅳ×3、 H43-40①Ⅳ× 1、F43-38Ⅳ× 1、F43-59Ⅳ×1	Ⅱb	6	胴部		6	
図Ⅳ-2-26	F44-24Ⅳ×4、 F44-43①Ⅳ×7	Ⅱb	11	底部	F44-24Ⅳ×2、F44-43①Ⅳ×8、G42-27Ⅳ×1	22	
図Ⅳ-2-27	I48d-14Ⅳ×1	Ⅱb	-	底部	H48c-18木根×1、I48d-7Ⅳ×7、I48d-8Ⅳ×1、I48d-12Ⅳ×3、I48d-13Ⅳ×1、I48d-14Ⅳ×11	25	
図Ⅳ-2-28	F45-40風倒木 ×9、F45-24Ⅳ ×1	Ⅱb	10	底部	F44-40風倒木×1、F45-19風倒木×2、F45-24Ⅳ×20、F45-40風倒木×33、F46-9Ⅳ×1、H47-45Ⅳ×1、K48a-5Ⅳ×1、K48a-6Ⅳ×3、K48b-1Ⅲ上×1、K48b-7Ⅳ×4、K48b-8Ⅳ×8、K48b-9Ⅳ×1、K48c-5Ⅲ上×1、L48d-5Ⅳ×1	88	
図Ⅳ-2-29	F45-42風倒木 ×1	Ⅱb	-	底部		1	
図Ⅳ-2-30	J47-1Ⅲ×1	Ⅱb	-	底部		1	
図Ⅳ-2-31	G42-13Ⅳ×1	Ⅱb	-	底部		1	
図Ⅳ-2-32	F44-7Ⅳ×1、F 44-41×1	Ⅱb	2	底部	G38-15木根×1、H44c-1Ⅳ×1	4	
図Ⅳ-2-33	G44-64Ⅴ×1、 G44-72Ⅴ×1	Ⅱb	2	底部		2	
図Ⅳ-2-34	I50c-11②木根 ×1	Ⅱb	-	円板 状土 製品		1	
図Ⅳ-3-36	L48a-6Ⅳ×3、 L48b-5Ⅳ×1	Ⅲa	4	口縁	K49c-3Ⅲ×1、L48a-3Ⅳ×1、L48a-6Ⅳ×2、L48a-14Ⅳ×2、L48a-19Ⅳ×1、L48b-2Ⅳ×13、L48b-4Ⅳ×12、L48b-5Ⅳ×20、L48b-9Ⅳ×3、L48c-1Ⅳ×1、L48c-2Ⅳ×8、L48d-1Ⅳ×7、L48d-4Ⅳ×3、L50d-1Ⅳ×1、K50c-2Ⅲ×1、未注記×2	82	
図Ⅳ-3-37	I43-57Ⅳ×5	Ⅲa	5	口縁		5	
図Ⅳ-3-38	L48b-5Ⅳ×7	Ⅲa	7	口縁		7	
図Ⅳ-3-39	F46-55風倒木 ×3	Ⅲa	3	口縁		3	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図IV-3-40	I47-6IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-3-41	F47-36IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-3-42a	K50d-7IV×2	Ⅲa	2	口縁	掲載拓影K50d-7IV×1+K50d-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×3と同一個体。G48-8Ⅲ×1、G50b-11V×1、J50b-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×8、K50-5風倒木×2、K50a-1Ⅲ×1、K50c-1Ⅲ×1、K50d-7IV×10、K50d-8IV×2、L49d-2IV×1	35	
図IV-3-42b	K50d-7IV×1、K50d-2Ⅲ×1	Ⅲa	2	口縁	掲載拓影K50d-7IV×2、K50-3風倒木×3と同一個体。G48-8Ⅲ×1、G50b-11V×1、J50b-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×8、K50-5風倒木×2、K50a-1Ⅲ×1、K50c-1Ⅲ×1、K50d-7IV×10、K50d-8IV×2、L49d-2IV×1	35	
図IV-3-42c	K50-3風倒木×3	Ⅲa	3	胴部	掲載拓影K50d-7IV×2、K50d-7IV×1+K50d-2Ⅲ×1と同一個体。G48-8Ⅲ×1、G50b-11V×1、J50b-2Ⅲ×1、K50-3風倒木×8、K50-5風倒木×2、K50a-1Ⅲ×1、K50c-1Ⅲ×1、K50d-7IV×10、K50d-8IV×2、L49d-2IV×1	35	
図IV-3-43	J44-41①IV×1、J44-56木根×1	Ⅲa	2	口縁	J44-46V×3、J44-52攪乱×2	26	
図IV-3-44	G43-11IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-3-45	H47-57風倒木×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-4-46	L48b-2IV×7	Ⅲa	7	口縁	L48a-14IV×2、L48b-2IV×9、L48b-4IV×4、L48b-5IV×5、L48c-2IV×1、L48d-1×1、L48d-4IV×1	30	
図IV-4-47	J44-41IV×3、I45-25IV×1	Ⅲa	4	口縁		4	
図IV-4-48	H44-9IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-4-49	J44-11IV×1、J44-20②IV×1	Ⅲa	2	口縁		2	
図IV-4-50	K46-2Ⅲ×4	Ⅲa	4	口縁		4	
図IV-4-51	L49d-2IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-4-52	J34-7IV×3	Ⅲa	3	口縁	J39-3IV×1	4	
図IV-4-53	J50a-2IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-4-54a	I47-11IV×4	Ⅲa	4	口縁	掲載拓影I47-11IV×5+NH-13-87覆土1×1と同一個体。NH-13-87覆土×3、NH-13-88①覆土×4、NH-13-101①覆土×2、NH-13-107①覆土×1、I47-11IV×2、J42-24IV×1、J45-11Ⅲ×1、J47-15IV×1	25	
図IV-4-54b	I47-11IV×5、NH13-87覆土1×1	Ⅲa	6	口縁	掲載拓影I47-11IV×4と同一個体。NH-13-87覆土×3、NH-13-88①覆土×4、NH-13-101①覆土×2、NH-13-107①覆土×1、I47-11IV×2、J42-24IV×1、J45-11Ⅲ×1、J47-15IV×1	25	
図IV-4-55	H49d-7IV×1	Ⅲa	-	口縁		1	
図IV-5-56	H49a-2Ⅲ×2	Ⅲa	2	口縁		2	
図IV-5-57a	L48d-4IV×1	Ⅲa	-	口縁	掲載拓影L48a-14IV×1と同一個体。	2	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ-5-57b	L48a-14Ⅳ×1	Ⅲa	—	口縁	掲載拓影L48d-4Ⅳ×1と同一個体。	2	
図Ⅳ-5-58	K50d-8Ⅳ×1	Ⅲa	—	口縁		1	
図Ⅳ-5-59	H45-26Ⅳ×1	Ⅲa	—	口縁		1	
図Ⅳ-5-60	I45-3Ⅳ×3	Ⅲa	3	胴部		3	
図Ⅳ-5-61	F47-4Ⅲ×1、 F47-14Ⅳ×1、 F46-23Ⅳ×1	Ⅳa	3	底部		3	
図Ⅳ-5-62	L48b-2Ⅳ×4	Ⅲa	4	底部		4	
図Ⅳ-7-74	I42-10Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁	掲載拓影同一番号資料(図Ⅳ-7-83・図Ⅳ-8-95・図Ⅳ-8-99)とは別個体。F47-30Ⅴ×1、J43-38Ⅳ×1	3	
図Ⅳ-7-75	I47-7Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁		1	
図Ⅳ-7-76a	I44-18②Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁	掲載拓影K47-26Ⅴ×1と同一個体。J43-26Ⅳ×1	4	
図Ⅳ-7-76b	K47-26Ⅴ×1	Ⅳa	—	口縁	掲載拓影I44-18②Ⅳ×2と同一個体。J43-26Ⅳ×1	4	
図Ⅳ-7-77	J45-8②Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁		1	
図Ⅳ-7-78	K47-3②Ⅲ×3	Ⅳa	—	口縁		3	
図Ⅳ-7-79	I40-3②Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁		1	
図Ⅳ-7-80	G48a-6Ⅲ上×1、 G48a-8Ⅲ×2、 G48a-5Ⅲ×1	Ⅳa	4	口縁	F49b-11Ⅳ×1、F49b-15Ⅳ×1、F49c-2Ⅳ×1、 F49c-3Ⅳ×1、G48a-8Ⅲ×1、H44b-7Ⅳ×1、 I43-9Ⅳ×1、J43-3Ⅲ×1	12	
図Ⅳ-7-81	F49b-13Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁		1	
図Ⅳ-7-82	I49a-8Ⅳ×1、I49a-29Ⅳ×3	Ⅳa	4	口縁	I48c-5Ⅲ×1、I49a-2Ⅲ×4、I49a-5Ⅳ×10、 I49a-8Ⅳ×25、I49a-9Ⅳ×1、I49a-12Ⅳ×9、 I49a-13Ⅳ×2、I49a-14Ⅳ×1、I49a-24Ⅳ×4、 I49a-29Ⅳ×27、I49d-2Ⅳ×1、I49d-3Ⅳ×3、 I49d-18Ⅳ×2、I50a-4Ⅳ×2	96	
図Ⅳ-7-83	I42-10②Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁	掲載拓影同一番号資料(図Ⅳ-7-74・図Ⅳ-8-95・図Ⅳ-8-99)とは別個体。	1	
図Ⅳ-7-84	J43-9Ⅲ×1	Ⅳa	—	口縁		1	
図Ⅳ-7-85	G36-5Ⅳ×1、 H39-13②Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ-7-86	K47-15②Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ-7-87	J43-26Ⅳ×12	Ⅳa	12	口縁	H39-9②Ⅳ×1、H39-21②Ⅳ×1、H39-22Ⅲ×2、 H39-24②Ⅳ×3、I42-21Ⅳ×1、J43-21Ⅳ×1、 J43-26Ⅳ×3、J47-15②Ⅳ×1、K43-5Ⅳ×7	32	
図Ⅳ-7-88	G49a-8Ⅳ×4	Ⅳa	4	口縁		4	
図Ⅳ-7-89	J44-31②Ⅳ×1、 J46-21Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	J44-10②Ⅲ×1、J44-41②Ⅳ×1	4	
図Ⅳ-7-90	F49d-3Ⅳ×1	Ⅳa	—	口縁		1	
図Ⅳ-8-91	H31-11Ⅲ×1、 H33-12風倒木×1、 L50c-2Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁	NH13-90②覆土×2、G37-4Ⅳ×1、I42-1Ⅲ×1、 I44-41Ⅳ×1、I44-60表採×1、I48c-3Ⅲ×1、 J39-14Ⅳ×1、J44-21Ⅳ×1、J44-31Ⅳ×1、 J44-53攪乱×1	14	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図IV-8-92a	H39-13②IV × 1	IVa	—	口縁	掲載拓影H38-12②IV × 1+H38-5IV × 1+H39-22Ⅲ × 1と同一個体。H31-8Ⅲ × 2、H38-4IV × 1、H38-18IV × 1、H39-17②IV × 1、H39-23IV × 1、I38-2IV × 1、J42-2Ⅲ × 1	12	
図IV-8-92b	H38-12②IV × 1、H38-5IV × 1、H39-22Ⅲ × 1	IVa	3	口縁	掲載拓影H39-13②IV × 1と同一個体。H31-8Ⅲ × 2、H38-4IV × 1、H38-18IV × 1、H39-17②IV × 1、H39-23IV × 1、I38-2IV × 1、J42-2Ⅲ × 1	12	
図IV-8-93	F49c-6Ⅲ × 2、F49c-9IV × 2、F49c-14IV × 1	IVa	5	口縁	F48b-2Ⅲ × 1、F48b-3Ⅲ上 × 1、F48c-1Ⅲ上 × 2、F48c-4Ⅲ上 × 26、F48c-11Ⅲ × 2、F48d-2Ⅲ × 1、F49a-1Ⅲ上 × 1、F49a-5IV × 1、F49a-11IV × 2、F49a-15IV × 1、F49b-3IV × 1、F49b-4Ⅲ上 × 2、F49b-11IV × 2、F49c-5IV × 1、F49c-8IV × 2、F49c-9IV × 2、F49c11IV × 2、F49d-6IV × 1、F49d-7攪乱 × 1、F49d-8IV × 1、F49d-9IV × 1、F50a-1IV × 2、F50b-2IV × 1、G48a-1Ⅲ上 × 1、G48a-5Ⅲ × 5、G48a-9IV × 1、G48b-5Ⅲ × 1、G48d-2Ⅲ × 1、G48d-10Ⅲ × 1、G48d-16IV × 1、G49a-1Ⅲ上 × 1、G49a-3Ⅲ × 1、G49a-5IV × 1、G49a-6IV × 2、G49a-8IV × 1、G49d-5IV × 2、G49d-10V × 1、G49d-12V × 1、H39-5②IV × 1、H39-9②IV × 2、I39-8②IV × 1、I39-17②IV × 1、J42-9Ⅲ × 2、J42-17IV × 1	91	
図IV-8-94	I43-9IV × 2	IVa	2	口縁		2	
図IV-8-95	I42-10IV × 1	IVa	—	口縁	I43-9IV × 1、J43-9IV × 1。掲載拓影同一番号資料(図IV-7-74・図IV-7-83・図IV-8-99)とは別個体。	3	
図IV-8-96	F47-4Ⅲ × 1、G47-3②Ⅲ × 1、F46-10②IV × 1、F46-23IV × 1	IVa	4	口縁	F44-4Ⅲ × 1、F46-10IV × 10、F46-15IV × 7、F46-23IV × 2、F46-35V × 2、F46-49IV × 1、F46-56風倒木 × 1、F47-4Ⅲ × 2、F47-14IV × 1、F47-30V × 1、未注記 × 1	33	
図IV-8-97	H38-31木根 × 2、H39-24IV × 1	IVa	3	口縁	H38-9IV × 1、H38-12②IV × 1、H38-14②IV × 1、H38-22②IV × 5、H38-31②木根 × 5、H39-24②IV × 1、H39-26②V × 1、I38-2IV × 2、I38-5IV × 5、I38-9IV × 1、I38-13IV × 2、I38-16風倒木 × 1、I38-19木根 × 1、I39-5②IV × 1、J38-5IV × 1、J38-8IV × 1、J38-14IV × 2、J38-17IV × 21、J38-20木根 × 4	60	
図IV-8-98	G43-34IV × 1	IVa	—	口縁		1	
図IV-8-99	I42-10IV × 1	IVa	—	口縁	掲載拓影同一番号資料(図IV-7-74・図IV-7-83・図IV-8-95)とは別個体。	1	
図IV-8-100a	J44-36IV × 1、J44-2②Ⅲ × 1、K43-5IV × 1	IVa	3	口縁	掲載拓影J43-23IV × 1+J43-31IV × 1と同一個体。	5	
図IV-8-100b	J43-23IV × 1、J43-31IV × 1	IVa	2	底部	掲載拓影J44-36IV × 1+J44-2Ⅲ × 1+K43-5IV × 1と同一個体。	5	
図IV-8-101	H38-23IV × 2、J39-19IV × 1	IVa	3	口縁	H38-23IV × 3	6	
図IV-8-102	J43-26IV × 2	IVa	2	口縁		2	
図IV-8-103a	I46-22Ⅲ × 5	IVa	5	口縁	同一番号の掲載拓影I46-22Ⅲ × 2と同一個体。I45-44V × 1、I45-49Ⅲ × 2、I46-22Ⅲ × 8、I47-22Ⅲ × 1	19	
図IV-8-103b	I46-22Ⅲ × 2	IVa	2	口縁	同一番号の掲載拓影I46-22Ⅲ × 5と同一個体。I45-44V × 1、I45-49Ⅲ × 2、I46-22Ⅲ × 8、I47-22Ⅲ × 1	19	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図Ⅳ-8-104	H48c-2Ⅲ×1、 H48c-24Ⅳ×1、 I49a-18Ⅳ×4、 I49a-29Ⅳ×4	Ⅳa	10	口縁	G49a-6Ⅳ×1、H48c-12Ⅳ×1、H48c-24Ⅳ×2、 I49a-2Ⅲ×1、I49a-8Ⅳ×1、I49a-13Ⅳ×1、 I49a-29Ⅳ×1、I49d-18Ⅳ×2	20	
図Ⅳ-9-105	F41-12不明×2	Ⅳa	2	口縁	F41-19Ⅳ×1、H42-28Ⅳ×1、未注記×1	5	
図Ⅳ-9-106a	G49c-12Ⅲ上×1、 G49c-14Ⅳ×1、 G49c-16Ⅳ×1、 G49c-22Ⅳ×1	Ⅳa	4	口縁	掲載拓影K46-7Ⅲ×1と同一個体。G48a-20Ⅲ×1、 G48a-22Ⅲ×1、G49b-14Ⅳ×1、G49c-14Ⅳ×2、 G49c-16Ⅳ×1、H49b-14Ⅳ×4、K48a-3Ⅳ×1、 K49a-2Ⅳ×1、K50d-9Ⅲ×1	18	
図Ⅳ-9-106b	K46-7Ⅲ×1	Ⅳa	—	口縁	掲載拓影G49c-12Ⅲ上×1+G49c-14Ⅳ×1+ G49c-16Ⅳ×1+G49c-22Ⅳ×1と同一個体。G48a-20Ⅲ×1、 G48a-22Ⅲ×1、G49b-14Ⅳ×1、G49c-14Ⅳ×2、 G49c-16Ⅳ×1、H49b-14Ⅳ×4、K48a-3Ⅳ×1、 K49a-2Ⅳ×1、K50d-9Ⅲ×1	18	
図Ⅳ-9-107	H39-24Ⅳ×4、 H39-26Ⅴ×3	Ⅳa	7	口縁	H39-13②Ⅳ×1、H39-17②Ⅳ×1、H39-26Ⅴ×1	10	
図Ⅳ-9-108	I41-26Ⅳ×1、I41-30Ⅳ×1、 I41-21Ⅳ×1、I42-35Ⅳ×1	Ⅳa	4	口縁	I39-8②Ⅳ×1、I39-17②Ⅳ×1、I40-1Ⅳ×1、 I40-3②Ⅳ×4、I40-6②Ⅳ×3、I41-3②Ⅲ×1、 J40-4Ⅳ×1、J40-14Ⅳ×1、J41-11Ⅲ×1、 J42-17Ⅳ×1、J46-3②Ⅲ×1	20	
図Ⅳ-9-109	I49d-25Ⅳ×1、 I49a-10Ⅳ×1	Ⅳa	2	口縁	NH3-12覆土×1、F49b-14Ⅳ×1、I48c-13Ⅲ×2、 I49a-6Ⅳ×1、I49a-10Ⅳ×6、I49a-22Ⅲ×1、 I49a-28Ⅳ×1、I49a-29Ⅳ×1、I49a-30Ⅳ×1、 I49b-9Ⅳ×1、I49d-4Ⅳ×2、I49d-5Ⅳ×1、 I49d-10Ⅳ×1、I49d-15Ⅳ×3、I49d-22Ⅲ×1、 I49d-23Ⅲ×1、I49c-2Ⅳ×1、I49c-3Ⅳ×2、 I49c-4Ⅳ×1、I50b-3Ⅳ×7、I50b-4Ⅲ×2、 I50b-5Ⅳ×1、I50b-6Ⅳ×2	43	
図Ⅳ-9-110	I39-5②Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁		2	
図Ⅳ-9-111	J44-31②Ⅳ×1、 J44-21②Ⅳ×1、 J44-12②Ⅳ×1	Ⅳa	3	口縁		3	
図Ⅳ-9-112	H37-11Ⅳ×2	Ⅳa	2	口縁	G37-15木根×1、I37-16Ⅳ×1、H37-1Ⅳ×1、 H37-2Ⅳ×3、H37-11Ⅳ×5、H37-14Ⅳ×6、 H37-20Ⅳ×5	24	
図Ⅳ-9-113	I44-4Ⅲ×1、 I44-27Ⅳ×1	Ⅳa	2	底部		2	
図Ⅳ-9-114	I42-6Ⅲ×3	Ⅲa	3	底部		3	
図Ⅳ-9-115	F49c-11Ⅳ×2、 F49c-15Ⅳ×1、 F49c-16Ⅳ×1、 F49c-23Ⅳ×1	Ⅳa	5	底部	E48c-2Ⅲ上×1、F49c-5Ⅳ×2、F49c-9Ⅳ×1、 F49c-11Ⅳ×1、F49c-14Ⅳ×1、F49c-23Ⅳ×1、 H45-14Ⅳ×1、J46-3②Ⅲ×4	17	
図Ⅳ-9-116	J42-54Ⅳ×5、 J42-16①Ⅳ×1	Ⅳa	6	底部		6	
図Ⅳ-9-117	H40-26②Ⅳ×1	Ⅳa	—	底部	G40-31Ⅳ×1	2	
図Ⅳ-10-118a	H34-1Ⅲ×1、 H34-3Ⅳ×12、 H34-7Ⅳ×3	Ⅳa	16	口縁	掲載拓影H34-3Ⅳ×2+H34-7Ⅳ×4+未注記×3と同一個体。G33-1Ⅳ×2、G33-4Ⅳ×1、 G34-6Ⅳ×1、H31-2Ⅳ×1、H32-4Ⅳ×2、 H33-12風倒木×1、H34-1Ⅲ×3、H34-3Ⅳ×4、 H34-7Ⅳ×1	41	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図IV-10-118b	H34-3IV×2、 H34-7IV×4、 未注記×3	IVa	9	口縁	掲載拓影H34-1Ⅲ×1+H34-3IV×12+H34-7IV×3と同一個体。G33-1IV×2、G33-4IV×1、G34-6IV×1、H31-2IV×1、H32-4IV×2、H33-12風倒木×1、H34-1Ⅲ×3、H34-3IV×4、H34-7IV×1	41	
図IV-10-119	F46-10②IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-120	F46-28IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-121	G46-2Ⅲ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-122	F44-42IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-123	F45-3②風倒木 ×3、F45-6② 風倒木×1	IVa	4	口縁	F45-9②Ⅲ×2、F46-46V×1	7	
図IV-10-124	H43-12IV×1、 H43-21IV×1	IVa	2	口縁	G43-69IV×1、H42-14②IV×1、未注記×2	6	
図IV-10-125	F48d-14IV× 1、F48a-7Ⅲ× 1	IVa	2	口縁		2	
図IV-10-126	G46-2Ⅲ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-127	F45-43風倒木 ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-128	J36-5IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-129	F48d-13IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-130a	G48a-7Ⅲ×1、 G48a-9IV×1	IVa	2	口縁	掲載拓影G49a-6IV×1と同一個体。	3	
図IV-10-130b	G49a-6IV×1	IVa	—	口縁	掲載拓影G48a-7Ⅲ×1+G48a-9IV×1と同一個体。	3	
図IV-10-131	F45-6②風倒木 ×2	IVa	2	胴部		2	
図IV-10-132	F46-49IV×1	IVa	—	胴部		1	
図IV-10-133	F44-34②風倒木 ×1	IVa	—	口縁	同一番掲載拓影土器F44-34②風倒木×1(図IV-11-149・図IV-12-165)と別個体。	1	
図IV-10-134	F44-26②IV× 1、I46-22Ⅲ×1	IVa	2	口縁	F44-34②風倒木×1、F45-32②風倒木×1、I45-49Ⅲ×1	5	
図IV-10-135	F44-68風倒木 ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-136	J44-31②IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-10-137	K49b-3IV×1	IVa	—	胴部		1	土製品の可能性有。
図IV-11-138	F45-9②Ⅲ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-11-139	G44-3②Ⅲ×1	IVa	—	口縁	同一番掲載拓影土器G44-3②Ⅲ×1(図IV-11-140)と別個体。	1	
図IV-11-140	G44-3②Ⅲ×1	IVa	—	口縁	同一番掲載拓影土器G44-3②Ⅲ×1(図IV-11-139)と別個体。	1	
図IV-11-141	F47-4Ⅲ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-11-142	F49d-11IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-11-143	F45-39風倒木 ×3	IVa	—	口縁		3	

図番号	遺構名グリッド・遺物番号・層位	時期	接合点数	部位	拓本残データ	総点数	備考
図IV-11-144	F45-6②風倒木×3	IVa	3	口縁	F44-9②IV×1、F44-34②風倒木×1、F45-1IV×2、F45-6風倒木×1、F45-9②Ⅲ×3、F45-15②風倒木×1、F45-26②IV×2、F45-32②風倒木×1、F45-39風倒木×1、F45-43風倒木×2、F46-23IV×1、G41-4Ⅲ×1、G41-27Ⅲ×1、G44-3②Ⅲ×1、I45-15IV×1	23	
図IV-11-145	J48b-9IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-11-146	F44-60②風倒木×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-11-147	G45-12Ⅲ×1	IVa	—	胴部		1	
図IV-11-148	F45-9②Ⅲ×1、F47-4Ⅲ×1、F47-19 IV×1	IVa	3	口縁		3	
図IV-11-149	F44-34②風倒木×1	IVa	—	口縁	同一番号掲載拓影土器F44-34②風倒木×1(図IV-10-133・図IV-12-165)と別個体。	1	
図IV-11-150	F40-8IV×1、F40-10IV×1	IVa	2	口縁		2	
図IV-11-151	G41-24V×5	IVa	5	口縁	F40-10IV×1、F40-23IV×2、F42-13②IV×1	9	
図IV-11-152	J34-9木根×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-11-153	F43-35②IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-12-160a	J35-2Ⅲ×1、I37-6IV×1	IVa	2	口縁	掲載拓影J34-11Ⅲ×1と同一個体。	3	
図IV-12-160b	J34-11Ⅲ×1	IVa	—	口縁	掲載拓影J35-2Ⅲ×1+I37-6IV×1と同一個体。	3	
図IV-12-161	F37-2②IV×5、F37-9IV×1	IVa	6	口縁		6	
図IV-12-162	F41-40IV×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-12-163a	I43-12IV×1、H43-12IV×1	IVa	2	胴部	掲載拓影I43-27IV×2+I43-2Ⅲ×1と同一個体。F44-9IV×1、F44-68風倒木×2、G40-10IV×1、G43-28IV×1、I42-10②IV×1、I43-2Ⅲ×3、I43-27IV×2	16	
図IV-12-163b	I43-27IV×2、I43-2Ⅲ×1	IVa	3	胴部	掲載拓影I43-12IV×1+H43-12IV×1と同一個体。F44-9②IV×1、F44-68風倒木×2、G40-10IV×1、G43-28IV×1、I42-10②IV×1、I43-2Ⅲ×3、I43-27IV×2	16	
図IV-12-164	J45-3Ⅲ×1	IVa	—	口縁		1	
図IV-12-165	F44-34②風倒木×1	IVa	—	口縁	同一番号掲載拓影土器F44-34②風倒木×1(図IV-10-133・図IV-11-149)と別個体。	1	
図IV-13-167	J43-2Ⅲ×14	VIa	14	口縁		14	
図IV-13-168	H43-57IV×1	土製品	—	—		1	玉
図IV-13-169	F46-47Ⅲ×1	土製品	—	—		1	玉

表 - 4 包含層出土石器一覧

	Ⅲ層	Ⅲ層上面	Ⅳ層	Ⅳ層(1回目)	Ⅳ層(2回目)	Ⅳ層(3回目)	Ⅳ層(4回目)	Ⅳ層(5回目)	Ⅳ層(6回目)	Ⅳ層下位	V層	風倒木	撿乱・B調 査跡	不明	合計
石鏃	12		4	8	6	2	3	4			2	8			49
石槍又はナイフ	1			3	1	2									7
石錐	1		1								2				4
つまみ付ナイフ	2		7	3	5	1	2		1		1	2			24
スクレイパー	24	1	25	20	13	8	10		9	5	4	8	14	2	147
ピエス・エスキーユ			2	2	2	1		1							7
石核(頁岩)	14		3	21	6	3	2		1				1		51
石核(メノウ)	8		5	3	5		4	1					3		29
両面調整石器	3	3	8		3						2			1	20
Rフレイク(メノウ)	2		2		2								4		10
Rフレイク(チャート)	2														2
Rフレイク(泥岩)	1														1
Rフレイク(頁岩)	18	1	27	6	3	2	4	4		1	6	2		2	76
Rフレイク(黒曜石)				1		1									2
Uフレイク(メノウ)	2		3	3		1	2	3					1		15
Uフレイク(安山岩)			1												1
Uフレイク(チャート)				1											1
Uフレイク(頁岩)	31		21	18	22	10	6	3	4		8	2	2	5	132
Uフレイク(黒曜石)	1		1												2
フレイク(頁岩)	377	13	237	187	356	71	26	19	1	9	56	69	11	27	1459
フレイク(メノウ)	66	2	71	40	61	34	26	13	2	4	11	52	1	2	385
フレイク(安山岩)	1		1					1				2	1		6
フレイク(砂岩)	1														1
フレイク(泥岩)	1		2							2	1	1			7
フレイク(チャート)			1	1								3		7	12
フレイク(黒曜石)	5		1		1	1		1							9
石斧	5		9	3	4		1				1	1			24
石のみ				1											1
北海道式石冠	4	1	17	3			4	2				2			36
偏平打製石器	9	2	23		8	3	5	3			7	5	4		69
たたき石	13	2	25	15	12	10	4	5		3	5	8	3	1	106
すり石	5		1	1		1	2				1	1	1		13
磁石	1	1	3		2	1				1	1				10
石皿			4	4	1			2						1	12
台石	4		19	11	8	10	2	1		1	7	7	5	1	76
礫(自然の穿孔礫)	1			1			1								3
礫(被熱・使用痕あり)	2		7	1		1				2					13
被熱礫	16	1	33	30	15	8	7	7			4	3	3	2	129
礫(使用痕有)		1	4	1	1		1	1					1		10
礫(軽石)	1		3		3										8
礫(原石)	7	1	5	5	4	3	1	1		1	9	1	1		39
礫	61	10	119	25	16	17	5	4	2	1	17	21	9	6	313
石製品	1	1	1	1											4
合計	703	40	696	417	563	192	117	85	16	29	149	215	44	59	3325

表 - 5 包含層出土掲載石器一覧

掲載図版番号	掲載番号	器種名	調査区	遺物No.	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図IV-15	1	石鏃	G43	90	風倒木	メノウ	23.0	13.5	4.0	0.8	未成品
図IV-15	2	石鏃	H37	3	IV(1)	頁岩	30.0	12.0	6.2	1.7	尖基鏃(凸基有茎)
図IV-15	3	石鏃	F49b	7	IV	メノウ	(28.0)	13.0	6.5	(2.1)	凸基有茎
図IV-15	4	石鏃	G40	2	III	チャート	25.0	16.0	6.5	1.9	凸基有茎 先端が鋭角で基部が突起状に張り出す
図IV-15	5	石鏃	F41	8b	III	珪質頁岩	20.0	16.5	5.0	1.2	凸基有茎 先端が鋭角で基部が突起状に張り出す
図IV-15	6	石鏃	G48a	12	IV	黒曜石	25.0	14.0	4.1	1.3	凸基有茎
図IV-15	7	石鏃	J40	15	IV(5)	黒曜石	25.0	10.0	3.5	0.8	凸基有茎
図IV-15	8	石鏃	G47	4	III	黒曜石	(27.5)	11.5	3.0	(0.9)	凸基有茎
図IV-15	9	石鏃	H38	15	IV(1)	頁岩	40.5	13.0	6.0	2.2	凸基有茎
図IV-15	10	石鏃	I43	15	(トレン)	珪質頁岩	29.5	11.5	4.3	1.4	凸基有茎 付着物(タールか)あり
図IV-15	11	石鏃	J37	11	IV(2)	珪質頁岩	28.0	12.5	4.0	1.0	凸基有茎
図IV-15	12	石鏃	G42	6	III	珪質頁岩	47.0	18.0	3.0	1.8	平基有茎 特殊なアグを持つ
図IV-15	13	石鏃	H42	4	III	珪質頁岩	34.0	18.0	4.2	1.9	平基有茎 特殊なアグを持つ
図IV-15	14	石鏃	I44	19	IV(2)	珪質頁岩	32.0	17.0	3.5	1.3	凹基有茎 特殊なアグを持つ
図IV-15	15	石鏃	F41	8a	III	チャート	35.0	15.0	3.0	1.2	凹基有茎 特殊なアグを持つ
図IV-15	16	石鏃	F44	10	IV(1)	チャート	36.0	16.0	3.5	1.3	凹基有茎 特殊なアグを持つ
図IV-15	17	石鏃	G40	3	III	珪質頁岩	51.5	18.0	8.0	5.3	凸基有茎 特殊なアグを持つ
図IV-15	18	石鏃またはナイフ	G44	35	IV(3)	風化した頁岩	80.0	33.0	17.5	23.3	凸基有茎
図IV-15	19	石鏃またはナイフ	G47	12	IV(1)	風化した頁岩	92.0	34.0	11.5	32.3	凸基有茎
図IV-15	20	石鏃またはナイフ	F43	51	IV(3)	珪質頁岩	35.0	22.5	11.5	6.5	凸基有茎 先端が鋭角で基部が突起状に張り出す
図IV-15	21	石鏃またはナイフ	F40	11	IV(1)	珪質頁岩	31.0	26.0	10.0	6.7	凸基有茎 先端が鋭角で基部が突起状に張り出す
図IV-15	22	石鏃またはナイフ	F41	37	IV(1)	頁岩	45.0	31.5	8.0	9.0	凸基有茎 基部不明瞭
図IV-15	23	石鏃	G49d	3	V	頁岩	(45.0)	(42.0)	(9.1)	(12.4)	突鏃
図IV-15	24	石鏃	G40	4	III	珪質頁岩	65.0	60.0	23.7	50.7	突鏃
図IV-16	25	つまみ付きナイフ	L48a	5	風倒木	頁岩	84.0	26.5	8.7	15.4	縁辺全面に調整が及ぶ
図IV-16	26	つまみ付きナイフ	I42	22	IV(2)	珪質頁岩	(58.0)	22.0	9.0	(13.0)	両縁調整
図IV-16	27	つまみ付きナイフ	K48b	4	IV	珪質頁岩	(52.0)	22.0	4.7	(6.5)	両縁調整
図IV-16	28	つまみ付きナイフ	G45	13	III	頁岩	61.0	24.0	9.9	11.9	片縁調整
図IV-16	29	つまみ付きナイフ	H48b	6	IV	頁岩	55.0	26.0	7.0	10.3	片縁調整
図IV-16	30	つまみ付きナイフ	G47	18	IV(2)	珪質頁岩	63.5	21.0	9.1	11.0	両縁調整
図IV-16	31	つまみ付きナイフ	H48d	2	IV	珪質頁岩	73.0	20.0	10.0	12.5	極浅い調整 未成品の可能性もある
図IV-16	32	つまみ付きナイフ	H46	20	IV(3)	珪質頁岩	51.0	26.0	4.5	9.0	背腹面のそれぞれ右側縁に調整を持つもの
図IV-16	33	つまみ付きナイフ	F42	14	IV(4)	メノウ	39.0	29.5	8.5	8.0	両面調整
図IV-16	34	つまみ付きナイフ	F48d	12	IV	メノウ	50.0	29.5	8.4	8.8	両面調整
図IV-16	35	つまみ付きナイフ	K46	12	IV(2)	珪質頁岩	68.0	41.0	15.0	32.8	両面調整
図IV-16	36	スレイバー	H49a	10	IV	珪質頁岩	86.0	29.0	11.0	24.7	片面全面調整 揺器
図IV-16	37	スレイバー	I44	20	IV(2)	珪質頁岩	84.0	39.5	10.4	37.7	筈状石器に類するもの
図IV-16	38	スレイバー	H46	15	IV(2)	珪質頁岩	64.0	39.0	19.0	37.9	両面調整の刃部
図IV-16	39	スレイバー	G49b	9	IV	メノウ	60.5	29.0	12.0	26.9	剥片素材の縁辺を浅く調整
図IV-16	40	スレイバー	E48c	11	IV	珪質頁岩	73.0	31.0	9.0	26.9	両縁調整
図IV-16	41	スレイバー	E49a	7	IV	頁岩	76.0	35.0	11.0	29.2	片縁調整
図IV-17	42	スレイバー	H48c	11	IV	流紋岩	56.0	49.0	12.5	32.7	片縁調整
図IV-17	43	スレイバー	I50c	4	木の根	頁岩	69.0	52.0	9.0	35.0	背面観について曲線的な刃部
図IV-17	44	スレイバー	G48d	11	IV	風化した頁岩	80.0	57.0	17.0	66.6	両縁調整
図IV-17	45	スレイバー	I48a	1	III	頁岩	76.0	46.0	10.0	35.7	両縁調整
図IV-17	46	両面調整石器	F48c	2	III上面	珪質頁岩	72.0	45.0	24.0	61.7	F50b1(III)(形状上基部側)と接合:合計
図IV-17	47	両面調整石器	F49a	13	IV	珪質頁岩	79.0	49.0	15.0	62.4	F48b1(III上面)(1点:中央部)F48c(III上面)(1点形状上基部側)と接合:合計3点
図IV-17	48	Rフレイク	J46	24	IV	頁岩	26.0	34.5	9.5	5.9	同一グリッド内でRフレイク2点が接合
図IV-17	49	両面調整石器	J46	24	IV	頁岩	47.5	30.0	11.5	8.8	同一グリッド内でRフレイク1点と両面調整石器片が2点接合
図IV-17	50	両面調整石器	I49c	4	IV	珪質頁岩	70.0	36.0	19.0	48.3	両面全面調整 使用痕跡を認めたい
図IV-17	51	石核	I44	22	IV(2)	頁岩	53.0	38.0	21.0	33.7	F41-2(IV)(1点:剥片の側)と接合:合計2点
図IV-17	52	石核	G48a	10	IV	頁岩	58.0	45.0	19.0	39.8	同一グリッド内で2点が接合
図IV-18	53	両面調整石器	J48d	11	IV	頁岩	215.0	55.0	29.0	315.0	打面の転移がある
図IV-18	54	石核	L48d	8	IV	メノウ	62.0	85.0	35.0	190.0	打面の転移がある
図IV-18	55	両面調整石器	K47	30	V	頁岩	103.0	57.0	26.0	107.1	K47-30(V)(フレイク-Rフレイク-両面調整石器片2点ずつ出土のうち、両面調整石器片×2、フレイク×1の3点が接合)
図IV-18	56	ピエス・エスキュー	F44	38	風倒木	珪質頁岩	37.0	35.0	13.0	15.7	上下端に浅い痕跡
図IV-18	57	ピエス・エスキュー	E48a	2	IV	メノウ	29.0	25.0	9.0	7.4	上下端に浅い痕跡
図IV-19	58	石斧片	F46	39	V	粘板岩	(45.0)	(39.0)	(25.0)	(69.8)	磨り切り調整痕跡
図IV-19	59	石斧片	H48b	16	IV	片岩	(79.0)	40.0	16.0	78.1	弱凸強凸刃 円刃 敲打調整後全面研磨
図IV-19	60	石斧片	E46	4	IV(1)	緑色泥岩	153.0	43.0	27.0	300.0	弱凸強凸刃 円刃 敲打調整後全面研磨
図IV-19	61	石斧片	F49d	5	IV	緑色泥岩	(71.0)	28.0	12.0	(43.5)	原石の形状を生かし、簡単に打ち欠いた後に全面研磨
図IV-19	62	石斧片	H31	3	IV(1)	緑色泥岩	(100.0)	43.0	25.0	(152.5)	G42-7(III)と接合 全面研磨
図IV-19	63	石斧片	J41	18	III	粘板岩	86.0	42.0	20.0	103.5	打ち欠き調整後、研磨 折損後も打ち欠きによって再生か
図IV-19	64	石斧片	J41	17	III	緑色泥岩	(95.0)	55.0	(24.0)	(161.9)	未成品をたたき石に転用か
図IV-20	65	北海道式石冠	I36	19	IV(5)	安山岩	135.0	(147.0)	91.0	(2.1)	全面を敲打して調整・成形
図IV-20	66	北海道式石冠	F49c	14	IV	安山岩	98.0	129.0	66.0	1080.0	全面を敲打して調整・成形
図IV-20	67	北海道式石冠	G49b	3	IV	安山岩	96.0	119.0	68.0	1130.0	全面を敲打して調整・成形
図IV-20	68	北海道式石冠	H41	13	IV(2)	安山岩	94.0	(103.0)	67.0	(780.0)	全面を敲打して調整・成形
図IV-20	69	北海道式石冠	F48a	10	IV	安山岩	89.0	118.0	67.0	840.0	楕円縁を短軸で割った後、持ち手の溝を敲打で作ridす
図IV-20	70	北海道式石冠	H48	1	IV	安山岩	83.0	(118.0)	60.0	(870.0)	楕円縁を短軸で割った後、持ち手の溝を敲打で作ridす
図IV-20	71	北海道式石冠	F44	50	IV(1)	安山岩	121.0	174.0	81.0	2180.0	未成品 打ち欠き後全面敲打
図IV-21	72	偏平打製石器	J38	21	木の痕跡	安山岩	110.0	183.0	41.5	1100.0	明らかに擦っている機能面 頂部は丸く刃部様に調整 両側縁についても打ち欠き おおよそ半円状
図IV-21	73	偏平打製石器	F49d	10	IV	安山岩	82.0	126.0	29.0	430.0	半円状 敲打によるものか機能面を持つ 縁辺は刃部様に打ち
図IV-21	74	偏平打製石器	H48c	12	IV	安山岩	78.0	137.0	22.0	360.0	比較的幅広い機能面を持つ打ち欠きによる刃部様の機能面を持ち一側縁が直線状でエッジ状を呈する 半円
図IV-21	75	偏平打製石器	L48d	2	IV	安山岩	90.0	170.0	16.0	320.0	上下に機能面 下は直線状上は丸みをおびていずれも刃部様に打ち欠きで調整される 両側縁は打ち欠きで直線的な刃部様 不整な半円状
図IV-21	76	偏平打製石器	J47	6	IV	安山岩	90.0	134.0	24.0	325.0	未成品 打ち欠きによって刃部様機能面を成形途中に折損 半
図IV-21	77	偏平打製石器	H47	34	IV(5)	安山岩	75.0	145.0	21.0	300.0	上下に機能面を持つ上部は湾曲下部は直線的 両側縁にも打ち欠きによる調整痕がある 長楕円形
図IV-21	78	偏平打製石器	H45	38	IV	安山岩	94.0	123.0	13.0	190.0	平たい素材を用いる 直線的な機能面と半円状の縁辺には打ち欠き調整が加わる
図IV-21	79	偏平打製石器	L48a	14	IV	安山岩	73.5	127.5	34.0	450.0	上下に機能面 両端が打ち欠きによって調整される 楕円形
図IV-21	80	偏平打製石器	I42	33	IV(3)	安山岩	77.0	(103.0)	13.0	155.0	上下に機能面 側縁は丸みを帯びて打ち欠き調整 長楕円形状
図IV-22	81	たたき石	G34	9	IV(4)	安山岩	167.0	100.0	34.0	750.0	機器 刃部様の機能部
図IV-22	82	たたき石	J51	2	木の根	泥岩	109.0	84.0	42.0	500.0	機器 刃部様の機能部
図IV-22	83	たたき石	I40	11・2	IV(3)	安山岩	117.0	81.0	50.0	600.0	機器 刃部様の機能部
図IV-22	84	たたき石	I49d	1	III	安山岩	123.0	48.0	25.0	205.0	機器 刃部様の機能部

掲載区版 番号	掲載 番号	器種名	調査 区	遺物 No.	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
図IV-22	85	たたき石	F49c	11	IV	安山岩	115.0	78.0	40.0	380.0	礫の端部のみ使用
図IV-22	86	たたき石	E48b	7	III	安山岩	101.0	74.0	27.0	210.0	縁辺と端部を使用
図IV-22	87	たたき石	J38	24	IV(下位)	安山岩	228.0	46.0	42.0	635.0	礫の側縁を使用
図IV-22	88	たたき石	F48d	1	IV上面	安山岩	71.0	97.0	34.0	280.0	礫の側縁を使用
図IV-22	89	たたき石	F49a	10	III	安山岩	61.0	101.0	40.0	353.0	礫の側縁を使用
図IV-22	90	たたき石	E49c	1	IV	安山岩	121.0	53.0	35.0	260.0	凹み石
図IV-22	91	たたき石	E49a	3	III上面	安山岩	152.0	60.0	30.0	400.0	凹み石
図IV-23	92	たたき石	H49b	9	IV	安山岩	76.0	77.0	28.0	190.0	凹み石
図IV-23	93	たたき石	J49c	2	IV	安山岩	92.0	78.0	36.0	310.0	凹み石
図IV-23	94	たたき石	E49	1	木根痕	安山岩	96.0	93.0	83.0	1050.0	礫の端部のみ使用
図IV-23	95	たたき石	K48a	2	IV	安山岩	40.0	37.0	26.2	48.4	両球礫のほぼ全面に敲打痕
図IV-23	96	すり石	I33	11	風倒木	安山岩	152.0	88.0	48.0	825.0	表裏面ともに敲打の後、顕著な研磨
図IV-23	97	すり石	H49a	15	IV	安山岩	105.0	92.0	47.0	560.0	表裏面を使用
図IV-23	98	すり石	G50c	2・1	木の根	安山岩	94.0	99.0	54.0	750.0	平らな面を使用
図IV-23	99	すり石	G35	5	III	安山岩	100.0	55.0	25.0	230.0	一側縁を使用
図IV-23	100	たたき石	G48d	1	III	安山岩	118.0	67.0	33.0	280.0	礫の平らな面を使用
図IV-23	101	砥石	I48d	5	IV	泥岩	(89.0)	(67.0)	(12.0)	(51.1)	被熱・G46-34(V)×1・H47-43(IV)×1の合計2点が接合
図IV-23	102	砥石片	G46	3	III	安山岩	(62.0)	(50.0)	(8.0)	(39.8)	
図IV-24	103	台石	F45	45	V	安山岩	(324.0)	265.0	165.0	(20000.0)	
図IV-24	104	台石	J48d	14	木の根	安山岩	464.0	282.0	163.0	28500.0	
図IV-24	105	石皿	H49a	12	IV	安山岩	355.5	270.5	139.0	18500.0	
図IV-25	106	台石	F39	1	IV	安山岩	282.0	222.0	105.0	10000.0	トレンチ
図IV-25	107	台石	H40	29	IV(2)	安山岩	302.0	211.0	86.0	7000.0	
図IV-25	108	台石	I48d	7	木の根	濁川起源の安山岩	264.0	235.5	89.0	6500.0	
図IV-25	109	石皿片	F43	66	IV	安山岩	(182.5)	(235.5)	(127.0)	(6500.0)	被熱
図IV-25	110	石製品	I42	13	IV(1)	軽石	26.0	13.5	5.0	0.9	軽石を擦りによって調整成形
図IV-25	111	石製品	F48c	1	III上	軽石	27.0	(28.0)	(9.0)	2.6	軽石を擦りによって調整成形
図IV-25	112	ヒスイ製の玉	F47	34	III	ヒスイ	40.0	30.0	13.0	24.1	糸魚川産のヒスイ
図IV-25	113	被熱礫	J42	39	IV(3)	安山岩	255.0	121.0	109.0	4500.0	被熱礫・石棒に類するものか

引用・参考文献

- 青柳文吉 1988 「北海道のひすい製玉について」『北海道考古学』第24輯
- 森浩一編 1998 『古代翡翠文化の謎』 新人物往来社
- 石岡憲雄 1994 「撚糸文」『縄文文化の研究』5 雄山閣
- 石川 徹 1967 「札幌郡手稲町砂山出土の土器について」『北海道考古学』第3輯
- 今井富士夫・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」 岩木山
- 大島直行ほか 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』 知内町教育委員会
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66 - 4
- 大沼忠春 1982 「続縄文時代型式の編年」『縄文土器大成』5 講談社
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(2)」『北海道考古学』第22輯
- 大沼忠春 1989 「続縄文土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 葛西 勳 1979 「十腰内 式土器の編年的細分」『北奥羽古代文化』第11号
- 児玉大成 1999 「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』第35輯
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』 雄山閣
- 高瀬克範 1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第34輯
- 高橋正勝 1974 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化・31』
- 高橋正勝 1994 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 高橋正勝・小笠原忠久 1980 「4 縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』
- 千代 肇 1984 考古学ライブラリー25 『続縄文文化』 ニュー・サイエンス社
- 千代 肇 1994 「道南地方の土器」『縄文文化の研究』6 雄山閣
- 富樫泰時 1981 「東北地方」『縄文土器大成2』 講談社
- 成田滋彦 1994 「青森県の土器」『縄文文化の研究4』 雄山閣
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4』 小学館
- 羽賀憲二 1995 「北海道式石冠」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 羽賀憲二 1998 「道央部における縄文時代後期初頭の土器 「仮称手稲砂山式土器」について」『時の絆 道を辿る』 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会編
- 藤原秀樹 2002 「半円状扁平打製石器について」『山越3遺跡・山越4遺跡』 北埋調報166
- 三宅徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域的展開」『北奥古代文化』第6号
- 村越 潔 1976 「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』
- 村越 潔 1984 『増補 円筒土器文化』 雄山閣考古学選書10
- 三浦孝一 1984 「第二編 先史時代」『改訂八雲町史上巻』 八雲町
- 吉崎昌一 1965 「1 北海道」『日本の考古学 縄文時代』 河出書房
- 青森県教育委員会 1983 『弥栄平遺跡(2)』
- 青森県教育委員会 1984 『青森県六ヶ所村大石平遺跡』
- 青森県教育委員会 1985 『青森県六ヶ所村大石平 遺跡』
- 青森県教育委員会 1986 『青森県六ヶ所村大石平 遺跡』
- 青森県教育委員会 1987 『上尾駁(2)遺跡』
- 青森市教育委員会 1995 『小牧野遺跡』
- 乙部町教育委員会 1976 『元和』
- 乙部町教育委員会 1989 『緑町2遺跡』
- 上磯町教育委員会 1992 『三ツ石2遺跡』
- 上磯町教育委員会 1992 『石倉野3遺跡』
- 上ノ国町教育委員会 1985 『小岱遺跡』

- 白老町教育委員会 1992 『アヨ口遺跡』
- 戸井町教育委員会 1988 『釜谷2遺跡』
- 松前町教育委員会 1974 『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1976 『松前町原口遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1978 『鬼沢B遺跡・柵石遺跡調査報告』
- 松前町教育委員会 1983 『白坂』)
- 南茅部教育委員会 1986 『白尻B遺跡 vol. 』
- 南茅部教育委員会 1985 『白尻B遺跡 vol. 』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 1993 『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』
- 森町教育委員会 1975 『鳥崎遺跡』
- 森町教育委員会 1994 『御幸町』
- 森町 1980 『森町史』
- 函館市教育委員会 1988 『寺町貝塚』
- 函館市教育委員会 1999 『函館市石倉貝塚』
- 八雲町教育委員会 1980 『山崎遺跡発掘調査報告書』
- 八雲町教育委員会 1982 『栄浜1遺跡発掘調査概報』
- 八雲町教育委員会 1983 『栄浜』
- 八雲町教育委員会 1986 『栄浜1遺跡』
- 八雲町教育委員会 1987 『栄浜1遺跡』
- 八雲町教育委員会 1988 『山越5・6遺跡発掘調査報告書』
- 八雲町教育委員会 1989 『浜松2遺跡』
- 八雲町教育委員会 1990 『八雲3遺跡発掘調査報告書』
- 八雲町教育委員会 1991 『浜松2遺跡』
- 八雲町教育委員会 1992 『コタン温泉遺跡』
- 八雲町教育委員会 1995 a 『浜松5遺跡』
- 八雲町教育委員会 1995 b 『栄浜1遺跡』
- 八雲町教育委員会 1997 『大新遺跡』
- 八雲町教育委員会 1998 a 『大新遺跡』
- 八雲町教育委員会 1998 b 『旭丘1遺跡』
- 八雲町教育委員会 1998 c 『栄浜1遺跡』
- 北海道第四期研究会 1974 『西股』
- (財)北海道埋蔵文化財センター1986 『知内町湯の里3遺跡』北埋調報32
- (財)北海道埋蔵文化財センター1986 『矢不來2遺跡』北埋調報37
- (財)北海道埋蔵文化財センター1987 『木古内町建川2・新道4遺跡』北埋調報43
- (財)北海道埋蔵文化財センター1988 『木古内町新道4遺跡』北埋調報52
- (財)北海道埋蔵文化財センター2000 『八雲町シラリカ2遺跡』北埋調報142
- (財)北海道埋蔵文化財センター2001 『八雲町ポンシラリカ1遺跡・黒岩3遺跡』北埋調報155
- (財)北海道埋蔵文化財センター2001 『八雲町山崎4遺跡』北埋調報162
- (財)北海道埋蔵文化財センター2002 『八雲町山崎5遺跡』北埋調報165
- (財)北海道埋蔵文化財センター2002 『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166
- (財)北海道埋蔵文化財センター2002 『八雲町野田生2遺跡』北埋調報167
- (財)北海道埋蔵文化財センター2002 『八雲町野田生4遺跡』北埋調報171
- (財)北海道埋蔵文化財センター2002 『八雲町栄浜1遺跡』北埋調報175

写真図版



1 住居跡確認（南西から）



2 住居跡確認（南東から）

図版 2



1 H - 1 東西セクション (北西から)



2 H - 1 南北セクション (北東から)



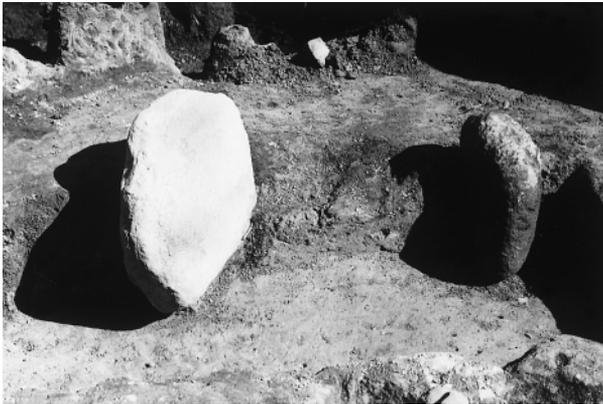
3 H - 1 遺物出土状況 (南東から)



1 HF - 1・HP - 1 セクション (北から)



2 HF - 1 セクション (北から)



3 HP - 1 セクション (南から)



4 HP - 2 セクション (北西から)



5 H - 1 完掘 (北西から)

図版 4



1 H - 2 東西セクション (南東から)



2 H - 2 南北セクション (東から)



3 HF - 1 確認 (南東から)



4 HF - 1 セクション (南から)



5 H - 2 完掘 (南東から)



1 H - 3東西セクション(南から)



2 HP - 1セクション(南から) 3 HP - 7セクション(南から) 4 HP - 8セクション(西から)



5 H - 3完掘(北東から)

図版 6



1 H - 4 セクション (北から)



2 HF - 1 セクション (南西から)



3 HP - 2 セクション (東から)



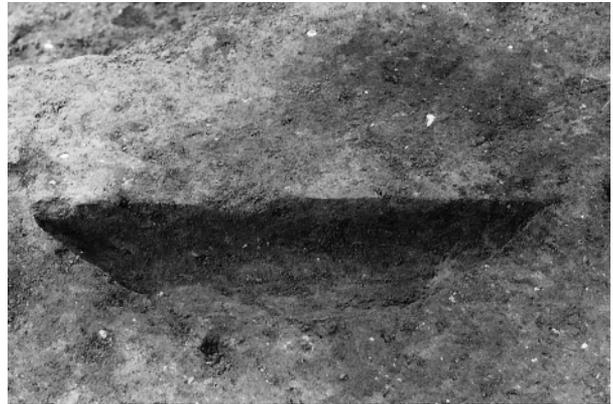
4 H - 4 出土状況 (北東から)



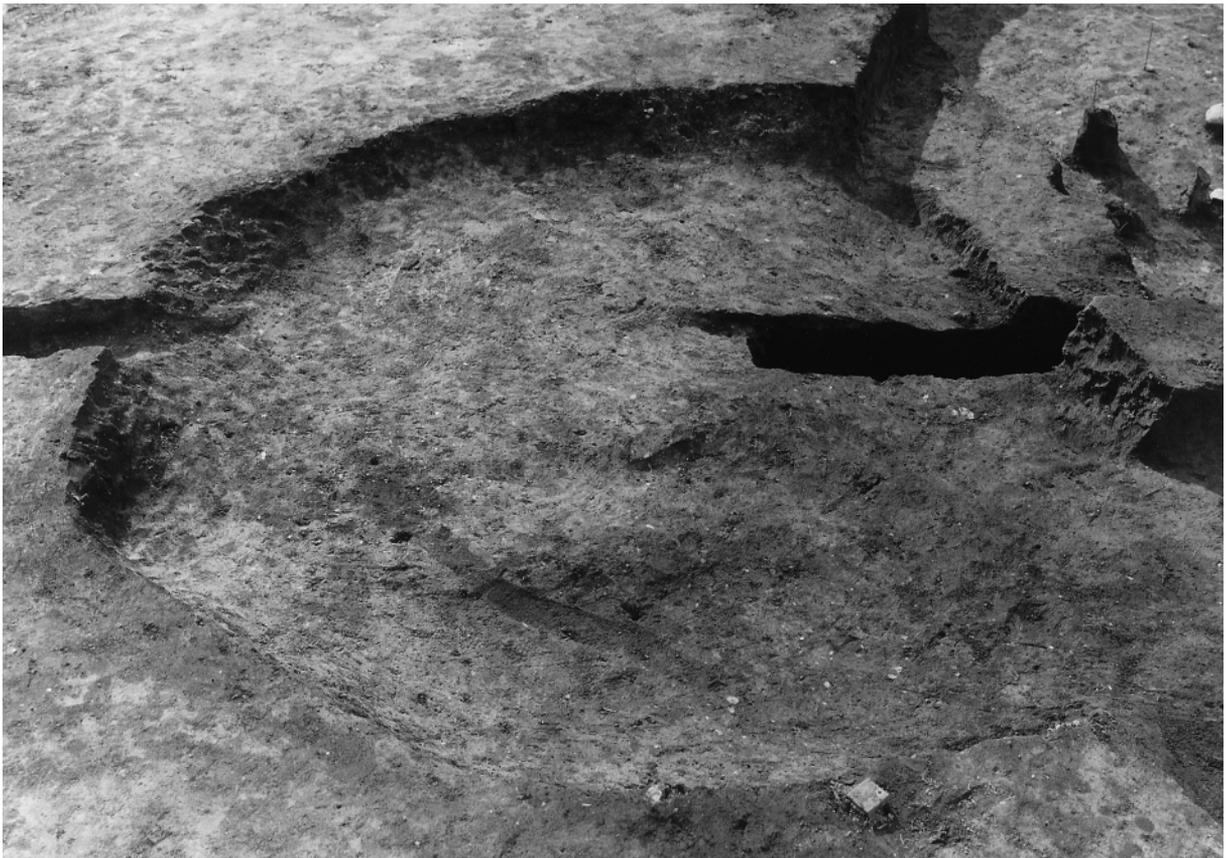
1 H - 9 セクション (西から)



2 H - 9 遺物出土状況 (東から)



3 HF - 1 セクション (北西から)



4 H - 9 完掘 (東から)

図版 8



1 P - 1 セクション (東から)



2 P - 1 遺物出土状況 (北東から)



3 P - 3 セクション (東から)



4 P - 3 完掘 (北西から)



5 P - 4 セクション (北西から)



6 P - 4 完掘 (北から)



7 P - 5 セクション (南から)



8 P - 5 完掘 (南から)



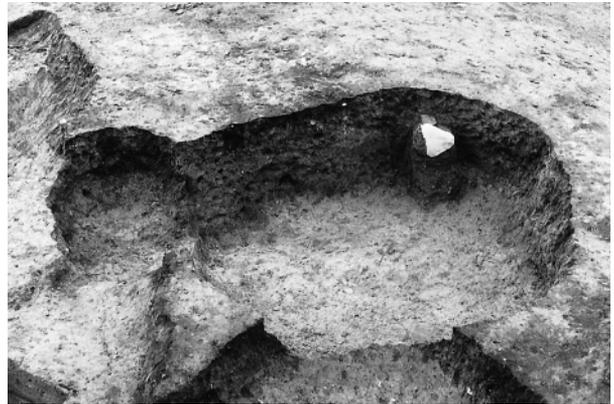
1 P - 6 セクション (南から)



2 P - 6 遺物出土状況 (西から)



3 P - 7 セクション (東から)



4 P - 8 完掘 (南東から)



5 P - 11 セクション (南西から)



6 P - 11 遺物出土状況 (西から)



7 P - 12 セクション (南西から)



8 P - 12 完掘 (北西から)



1 火山灰除去作業（東から）



2 B地区完掘（北東から）



1 NH - 13東西セクション(南西から)

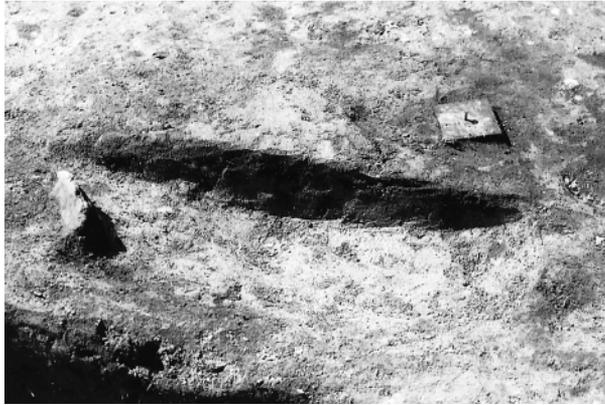


2 NH - 13南北セクション(南東から)



3 NH - 13覆土1層遺物出土状況(北東から)

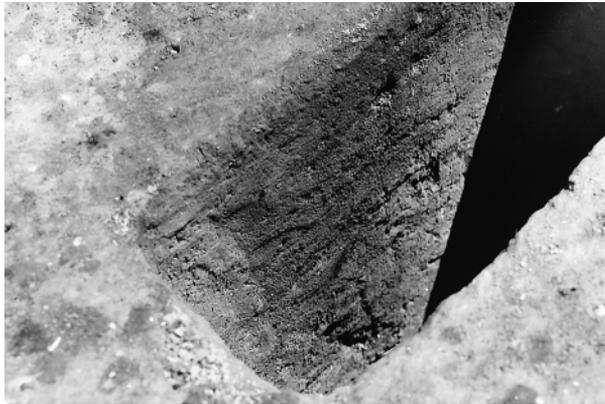
図版12



1 HF - 1セクション (東から)



2 HF - 2セクション (東から)



3 HP - 2セクション (西から)



4 HP - 3セクション (西から)



5 NH - 13完掘 (西から)



1 NH - 17遺物出土状況（東から）



2 NH - 17東西セクション（南から）



3 HF - 1検出状況（北東から）



4 HF - 1セクション（北西から）



1 NH - 17完掘（南から）



2 NH - 19東西セクション（南から）



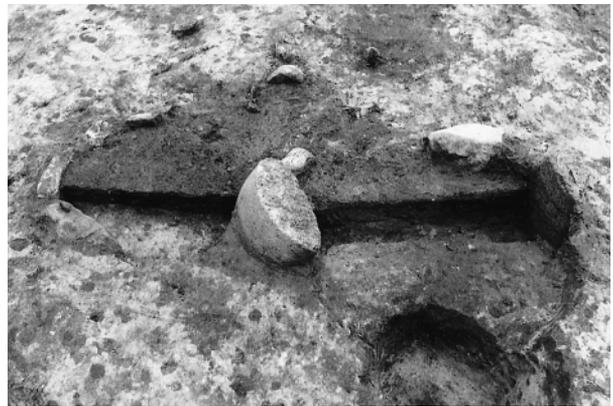
3 NH - 19南北セクション（南西から）



1 HF確認（北から）



2 HF確認（西から）



3 HFセクション（南から）



4 NH - 19完掘（東から）



1 NH - 17 (手前)・19 (奥) 調査状況 (南から)



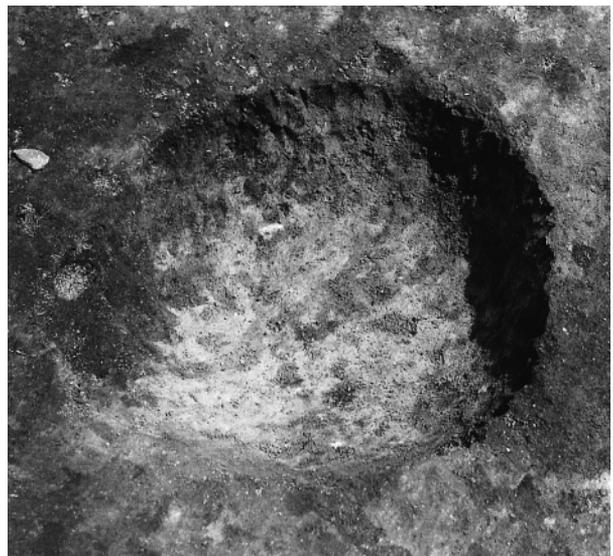
1 NP - 60遺物出土状況（南西から）



2 NP - 60遺物出土状況（南西から）



3 NP - 60遺物出土状況（南西から）



4 NP - 60遺物出土状況（南西から）



5 NP - 61セクション（南から）



6 NP - 61遺物出土状況（東から）



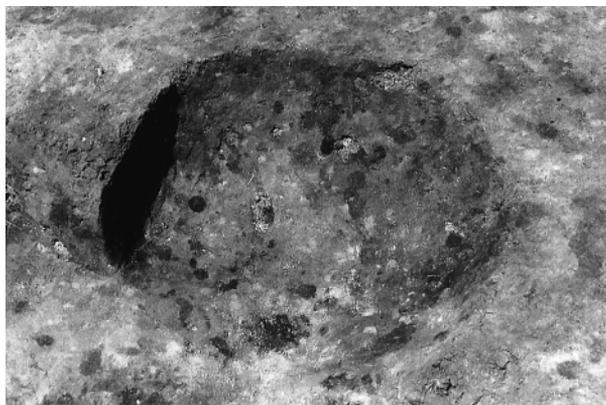
1 NP - 62セクション (西から)



2 NP - 62完掘 (南西から)



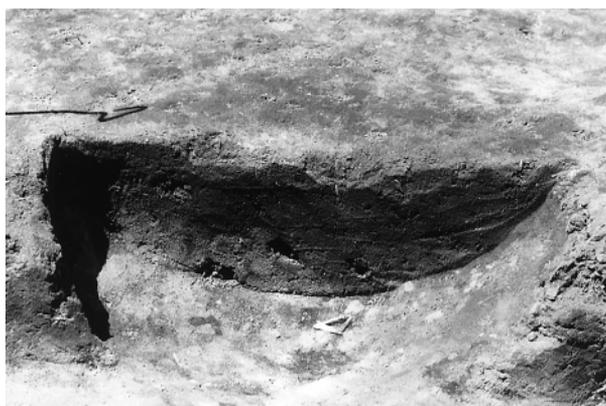
3 NP - 65完掘 (西から)



4 NP - 68完掘 (北から)



5 NP - 67セクション (東から)



6 NP - 67完掘 (東から)



7 NP - 69セクション (西から)



8 NP - 69完掘 (北から)



1 NP - 70セクション (南西から)



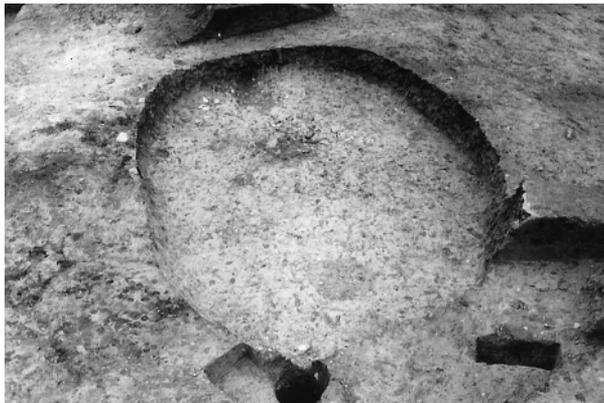
2 NP - 70完掘 (南西から)



3 NP - 77セクション (東から)



4 NP - 77遺物出土状況 (南東から)



5 NP - 77完掘 (南東から)



6 NP - 80完掘 (南から)



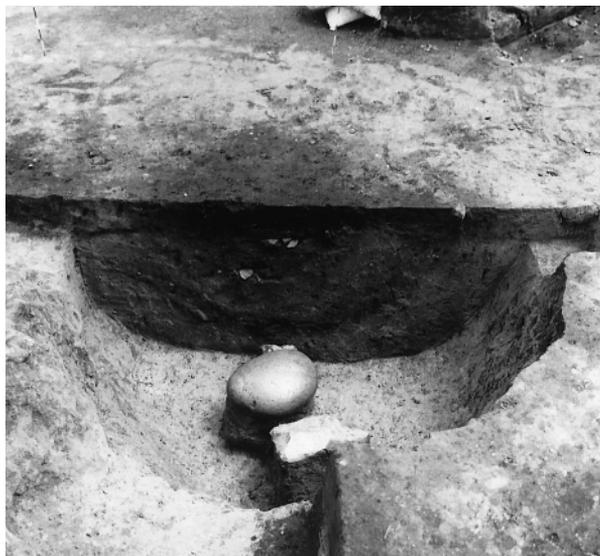
7 NP - 81セクション (南西から)



8 NP - 81完掘 (南から)



1 NP - 82確認 (西から)



2 NP - 82セクション (南西から)



3 NP - 82遺物出土状況 (西から)



4 NP - 82完掘 (西から)



5 NP - 84セクション (南から)



6 NP - 84完掘 (北から)



1 NP - 85セクション (南から)



2 NP - 85完掘 (西から)



3 NP - 86セクション (南から)



4 NP - 86完掘 (東から)



1 NP - 88確認 (北東から)



2 NP - 88遺物出土状況 (北東から)



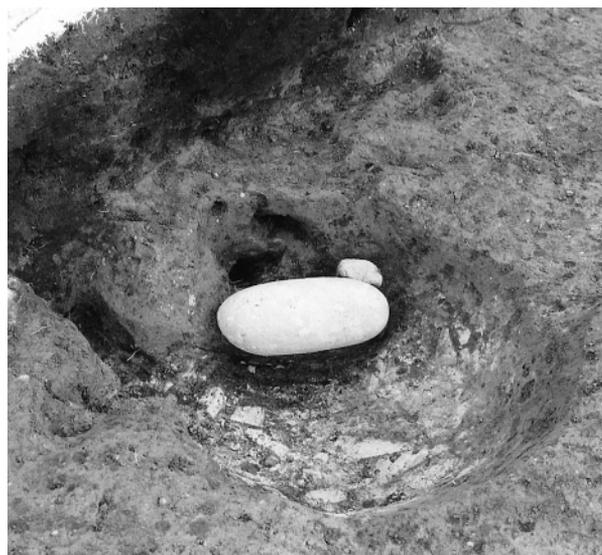
3 NP - 88セクション (南東から)



4 NP - 88完掘 (東から)



5 NP - 89セクション (東から)



6 NP - 90完掘 (北東から)



1 NP - 92セクション(東から)



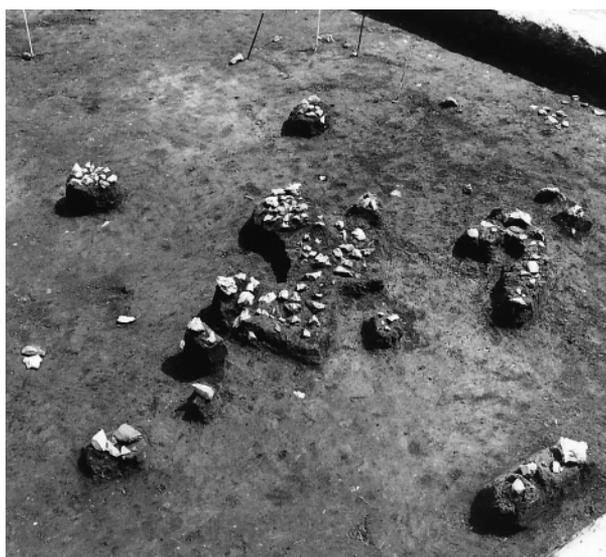
2 NP - 92完掘(東から)



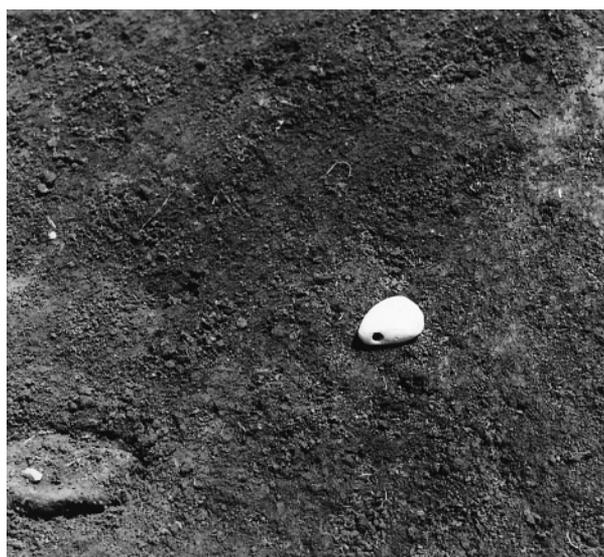
3 恵山式土器出土状況(北から)



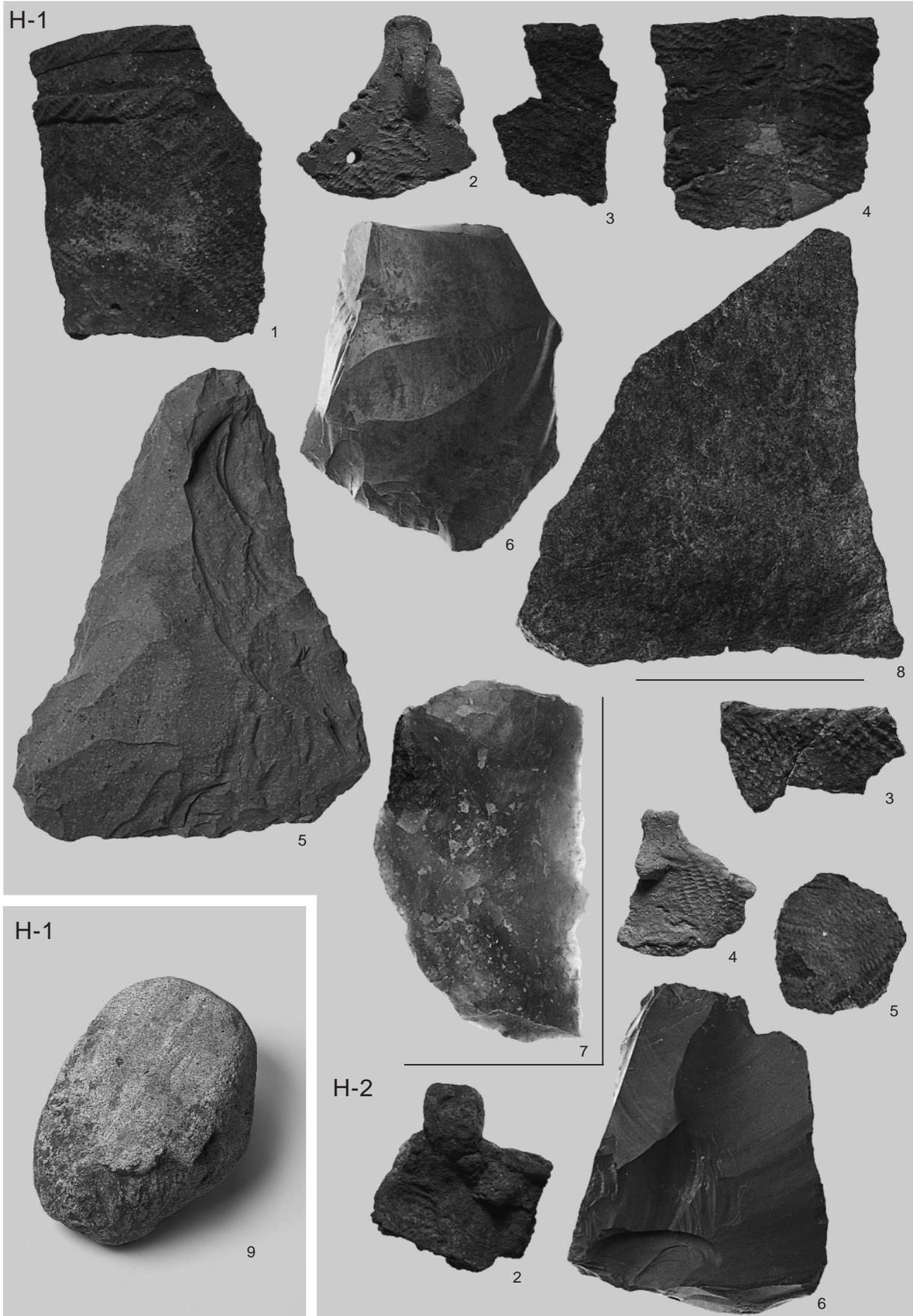
4 円筒下層d式土器出土状況(北から)



5 フレイク出土状況(F-40区)(北から)



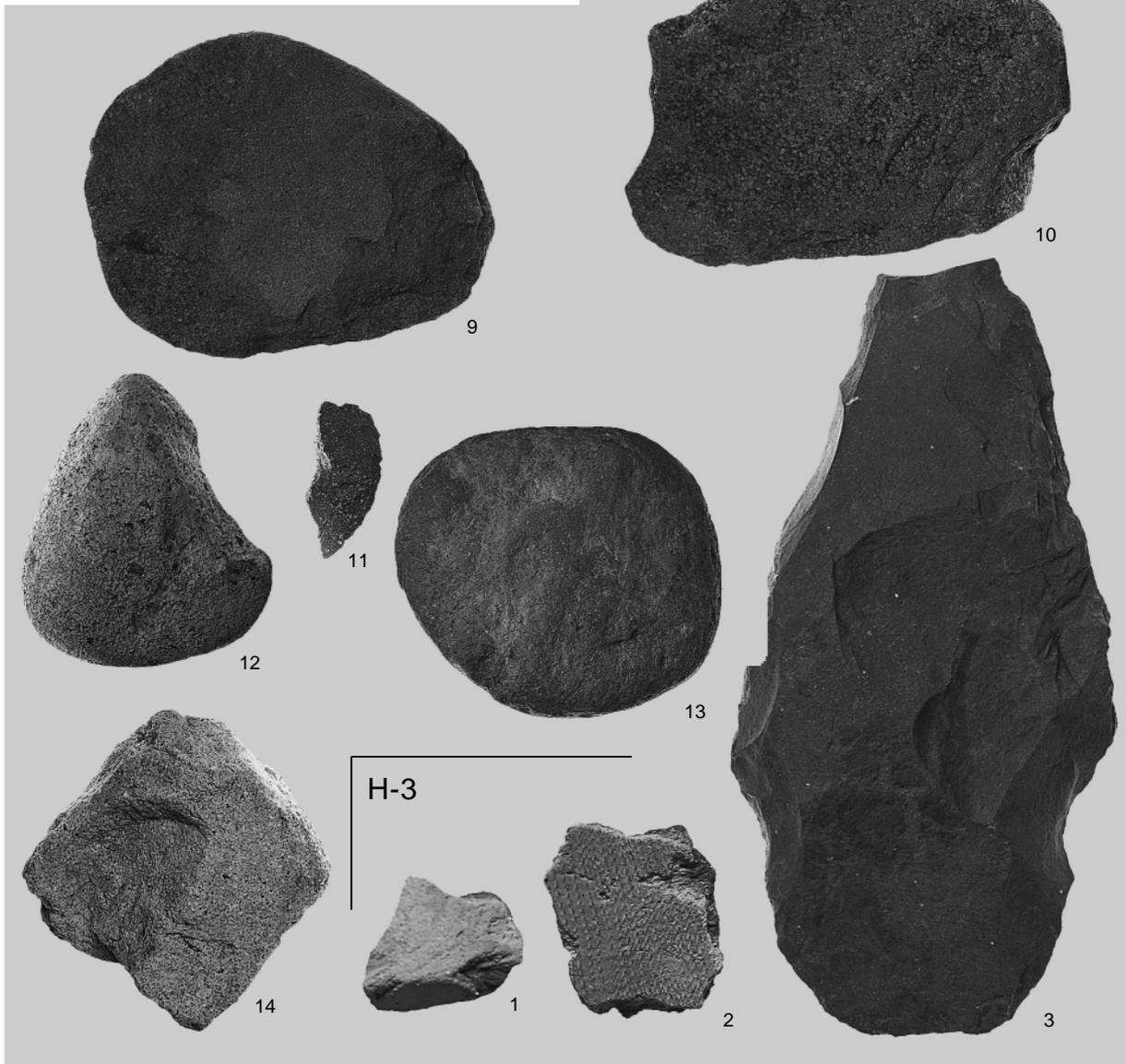
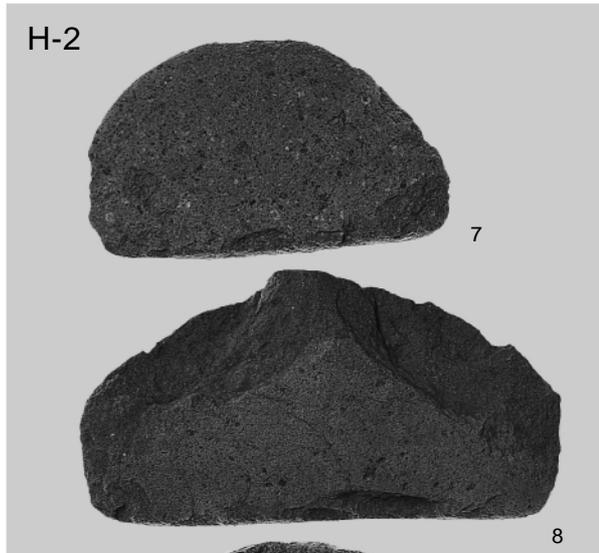
6 ヒスイ製玉出土状況(F-47区)(西から)



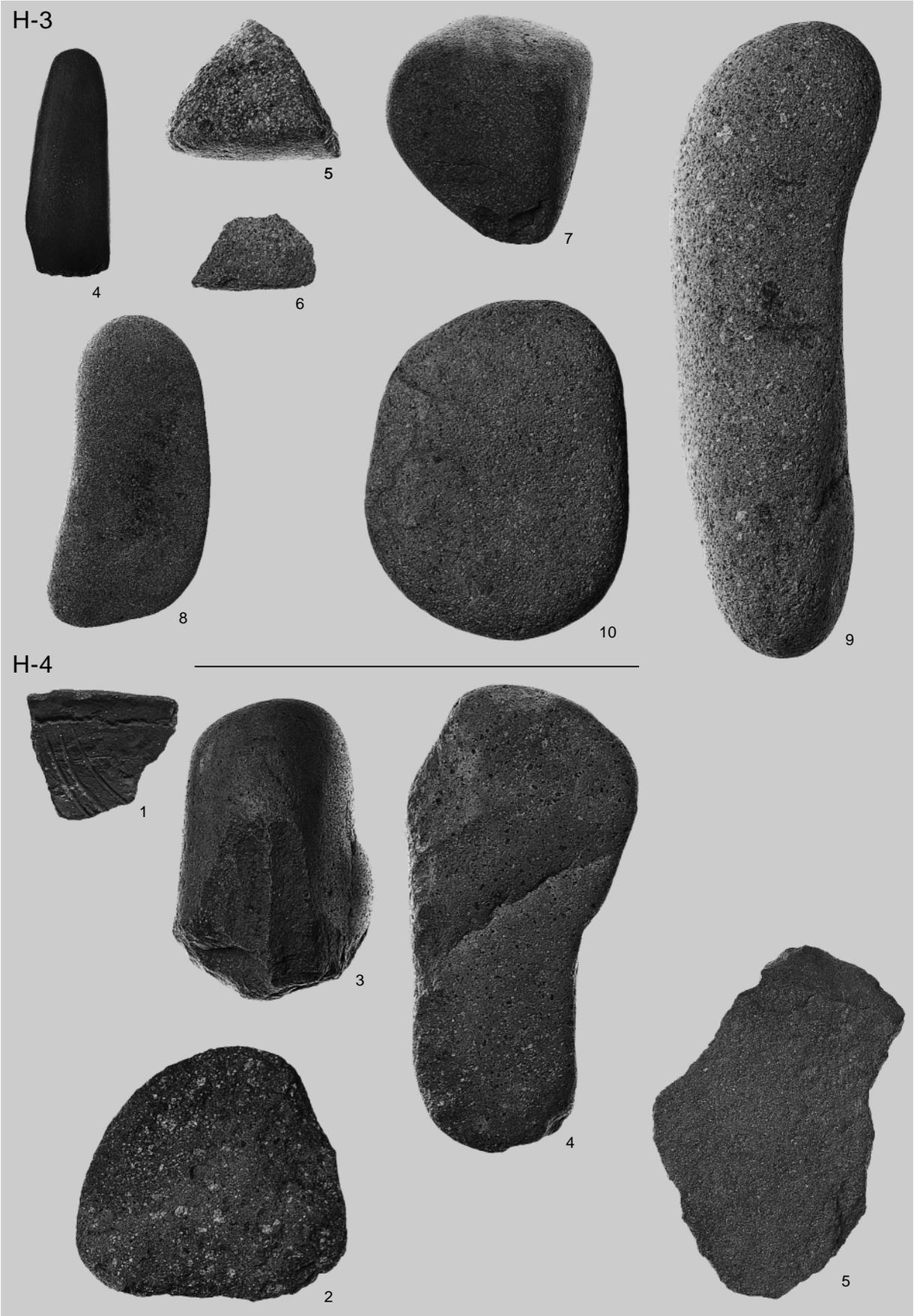
遺構出土の遺物（1）



H-2



遺構出土の遺物(2)



遺構出土の遺物（3）



H-4

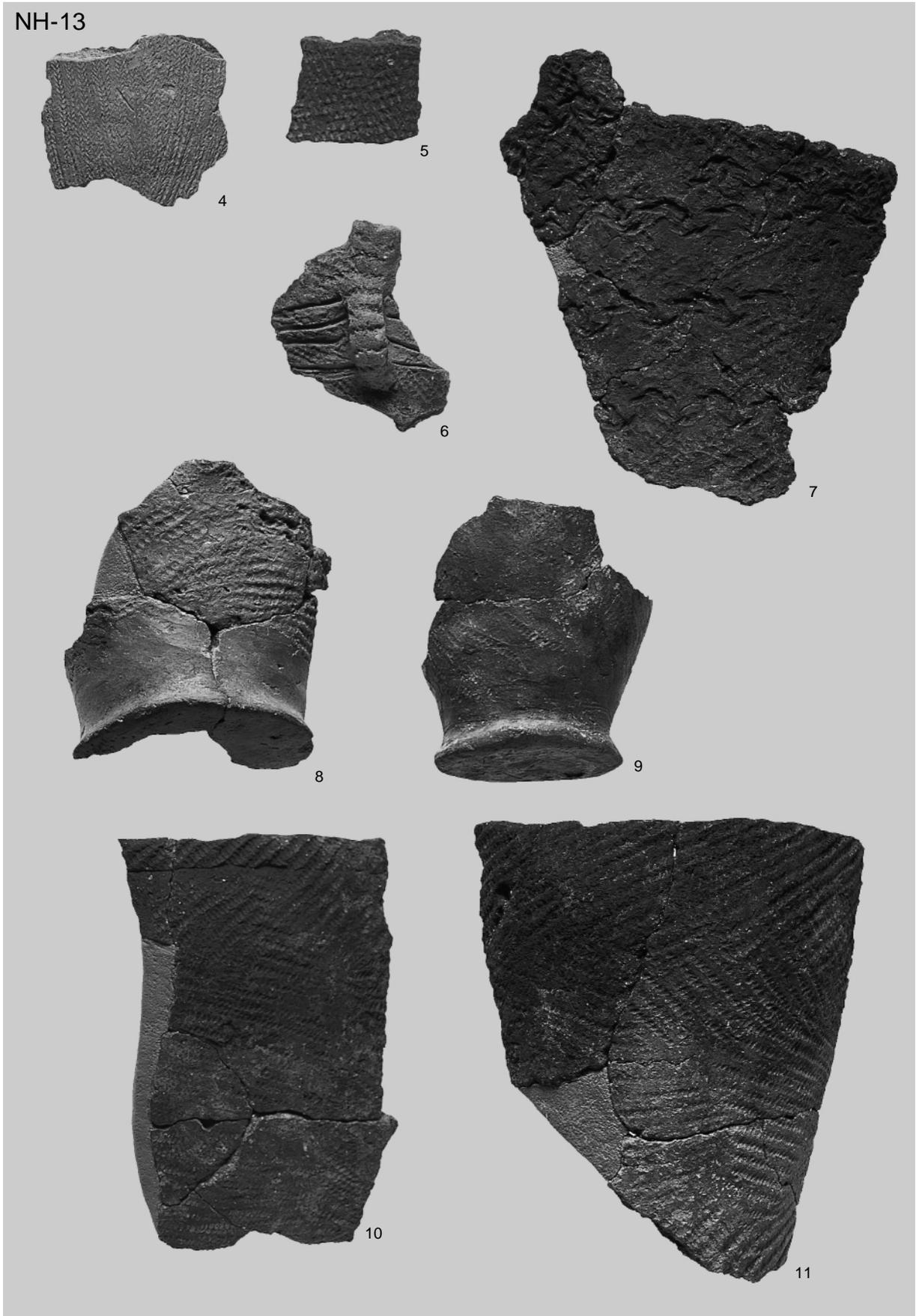


H-9

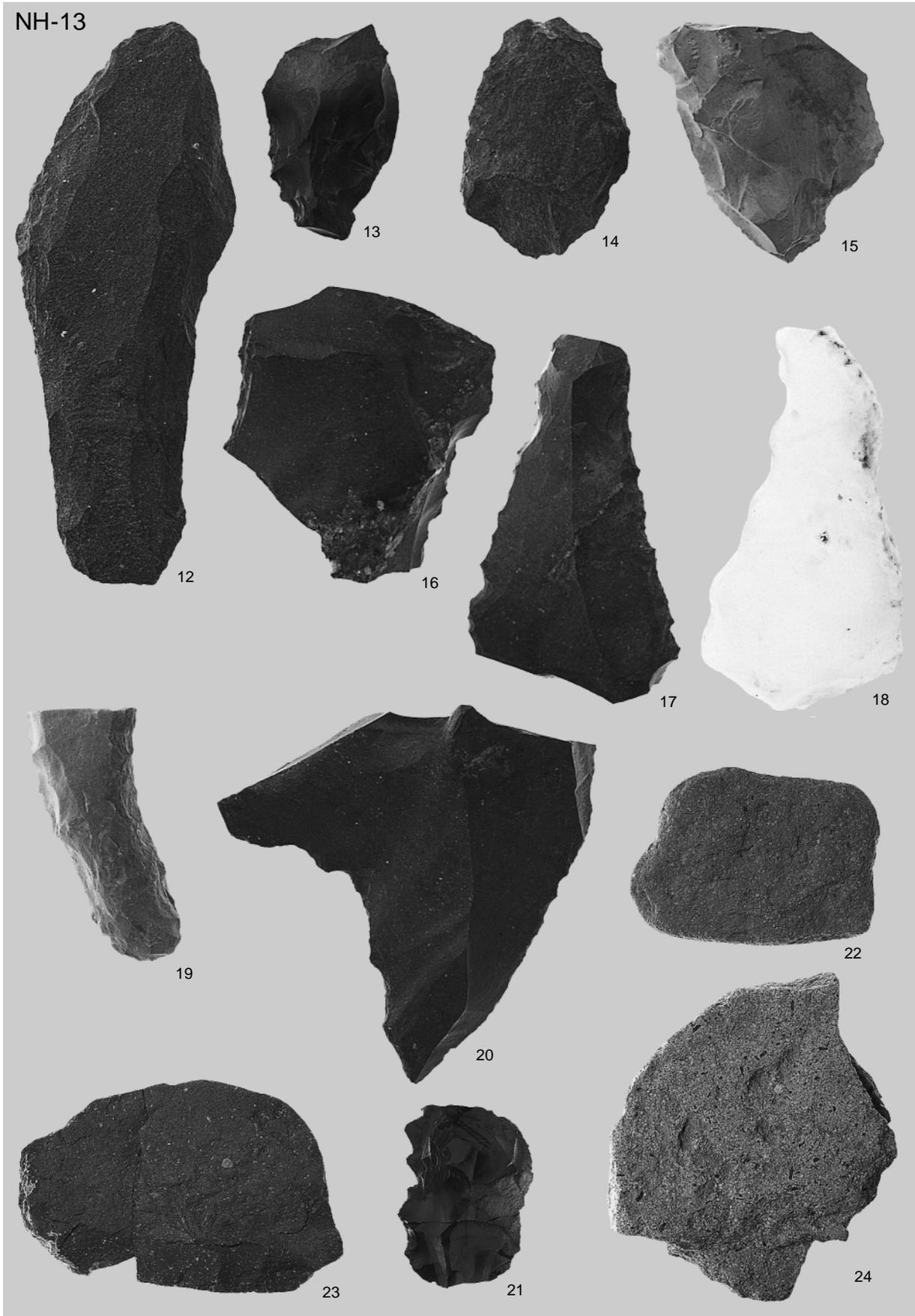


遺構出土の遺物(4)

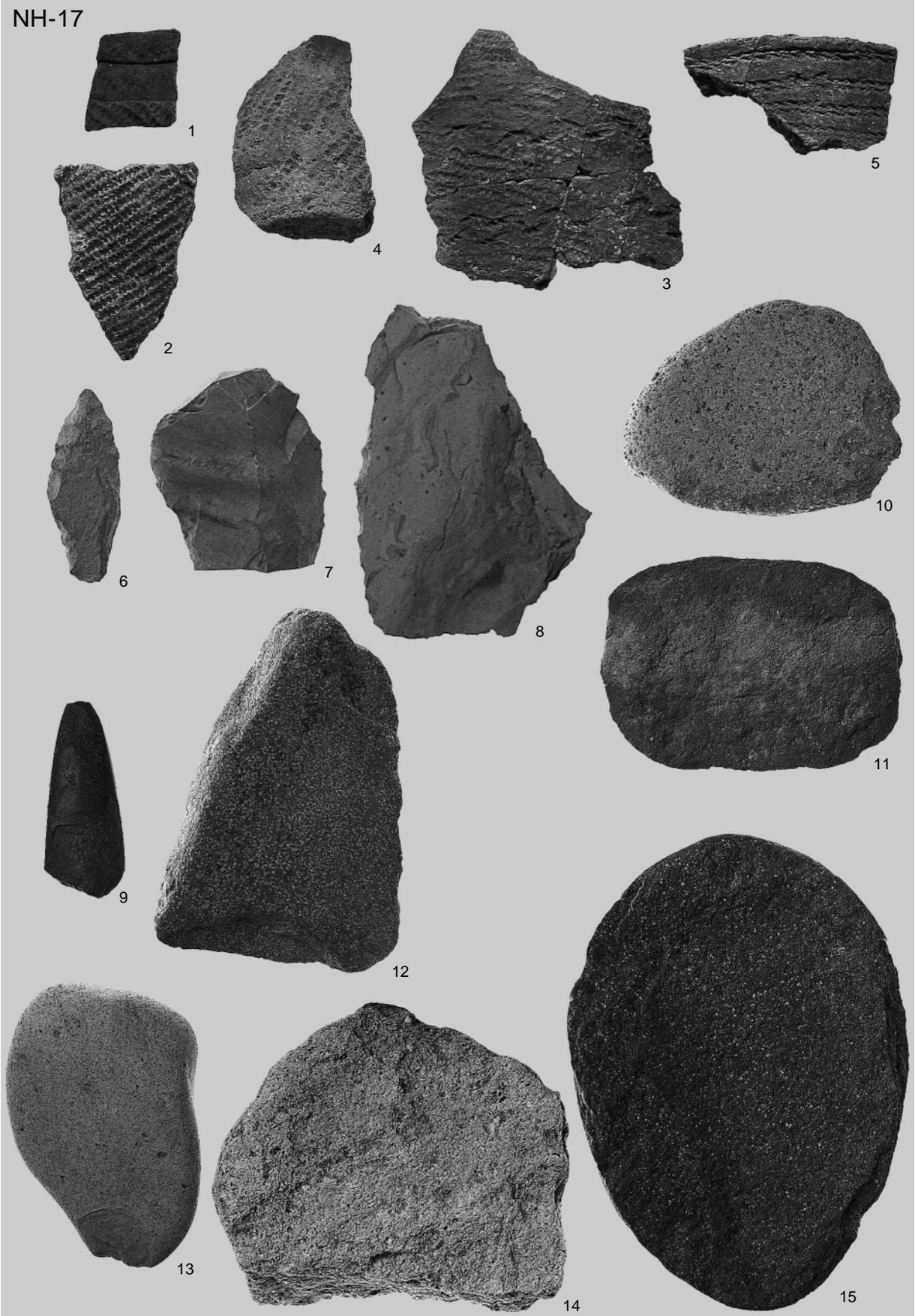
NH-13



遺構出土の遺物（5）



遺構出土の遺物（6）



遺構出土の遺物（7）

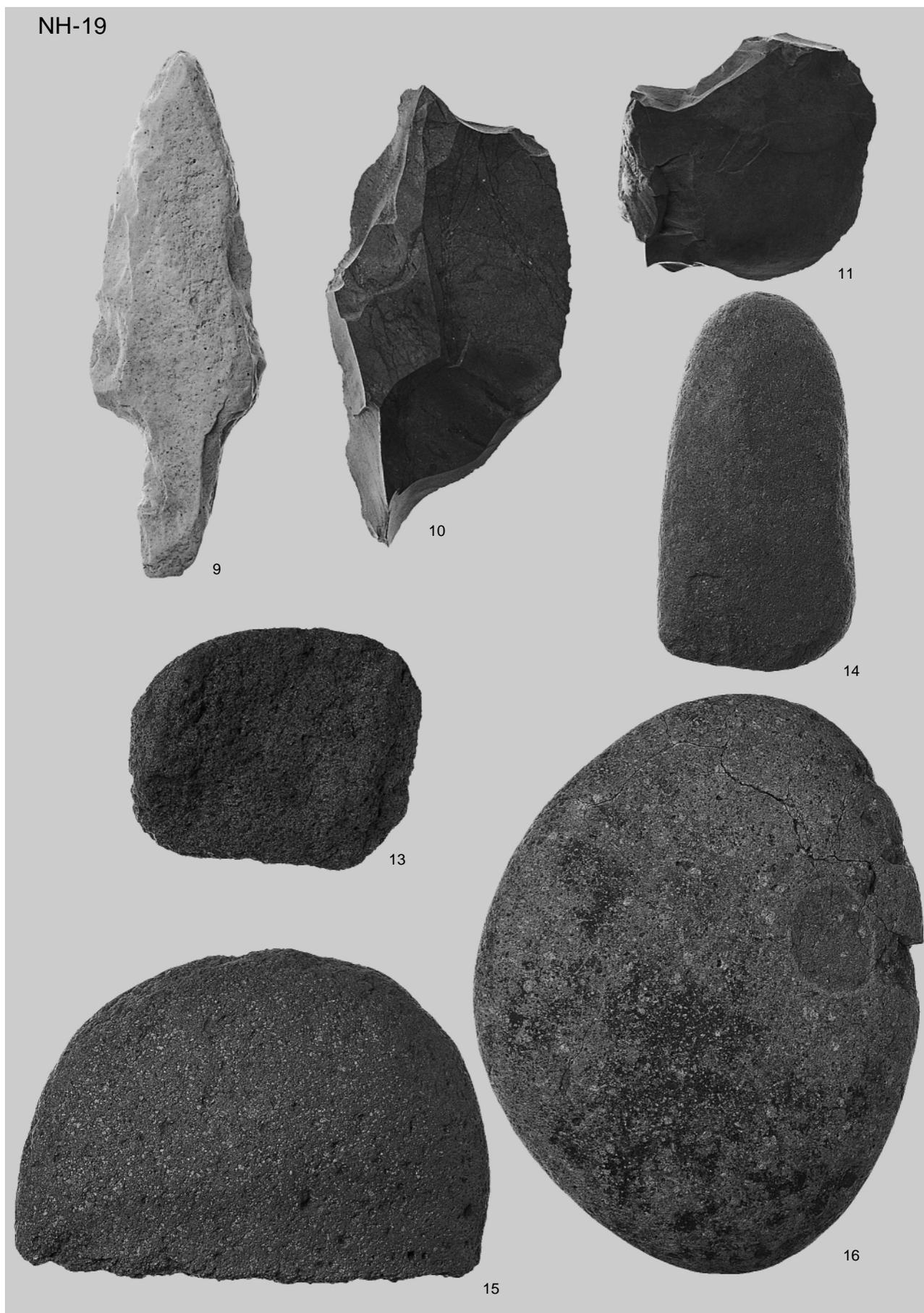
NH-17

NH-19

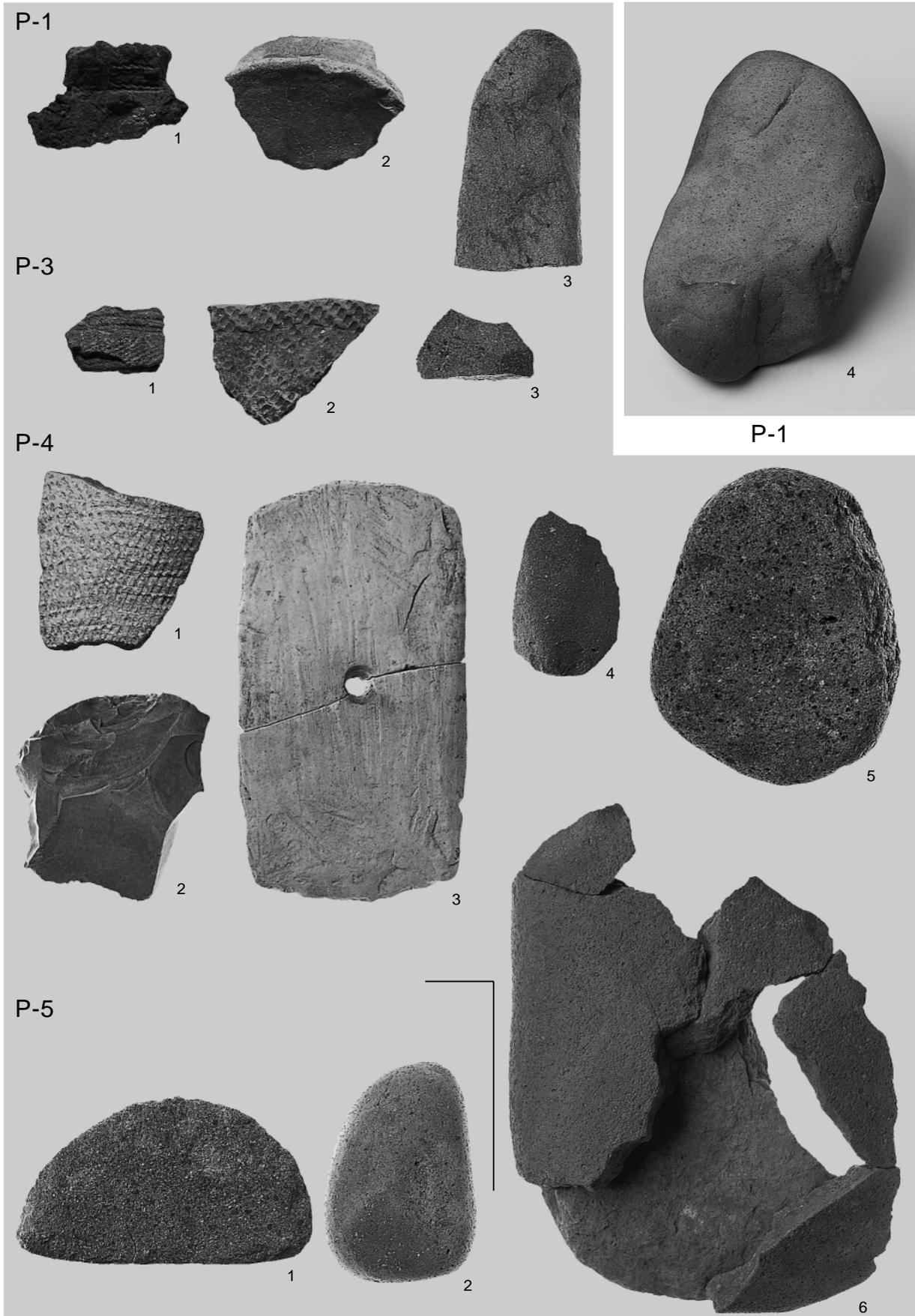


遺構出土の遺物（8）

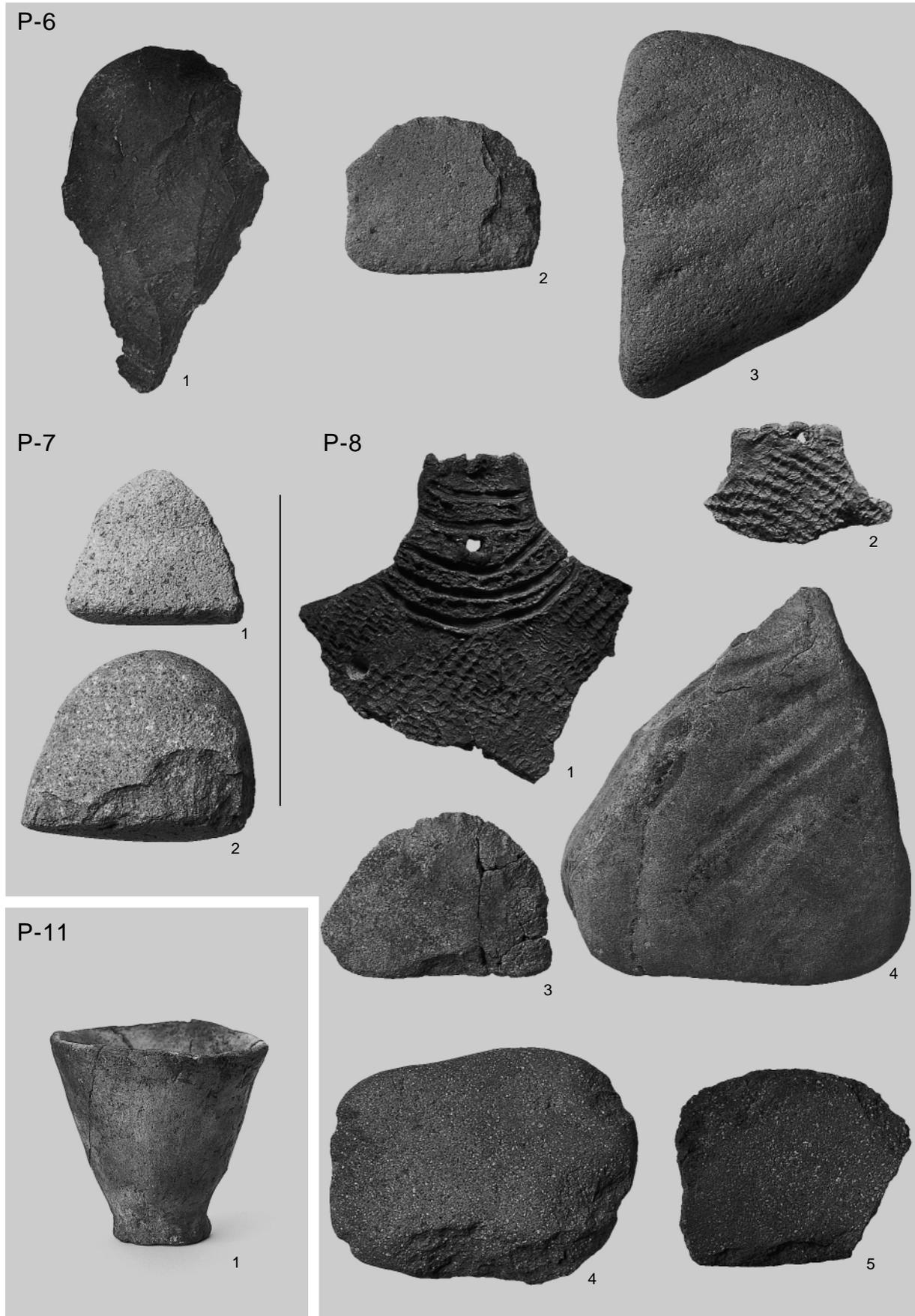
NH-19



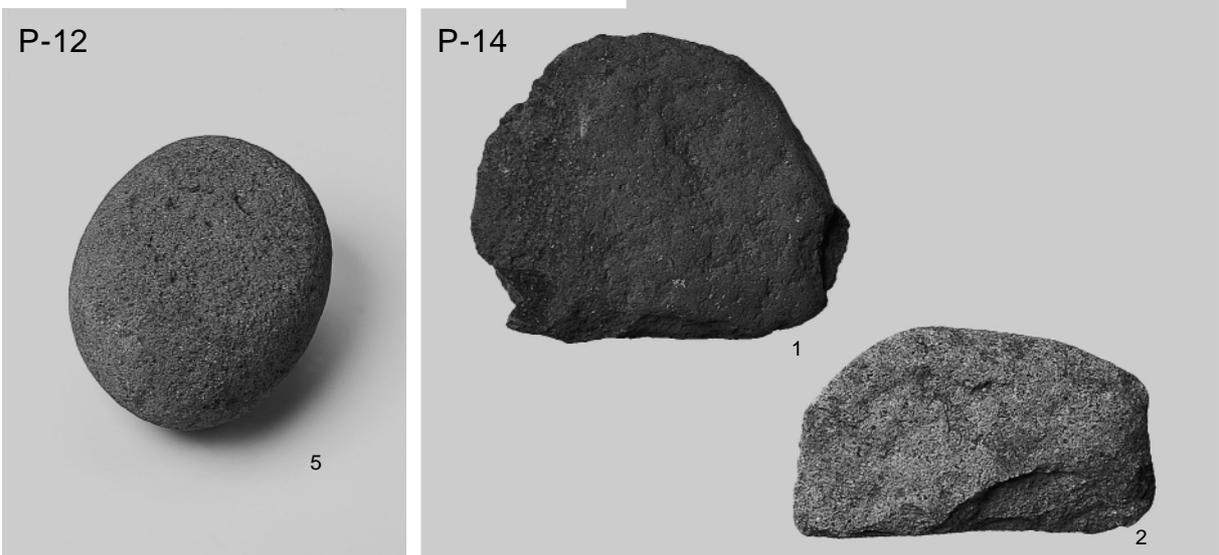
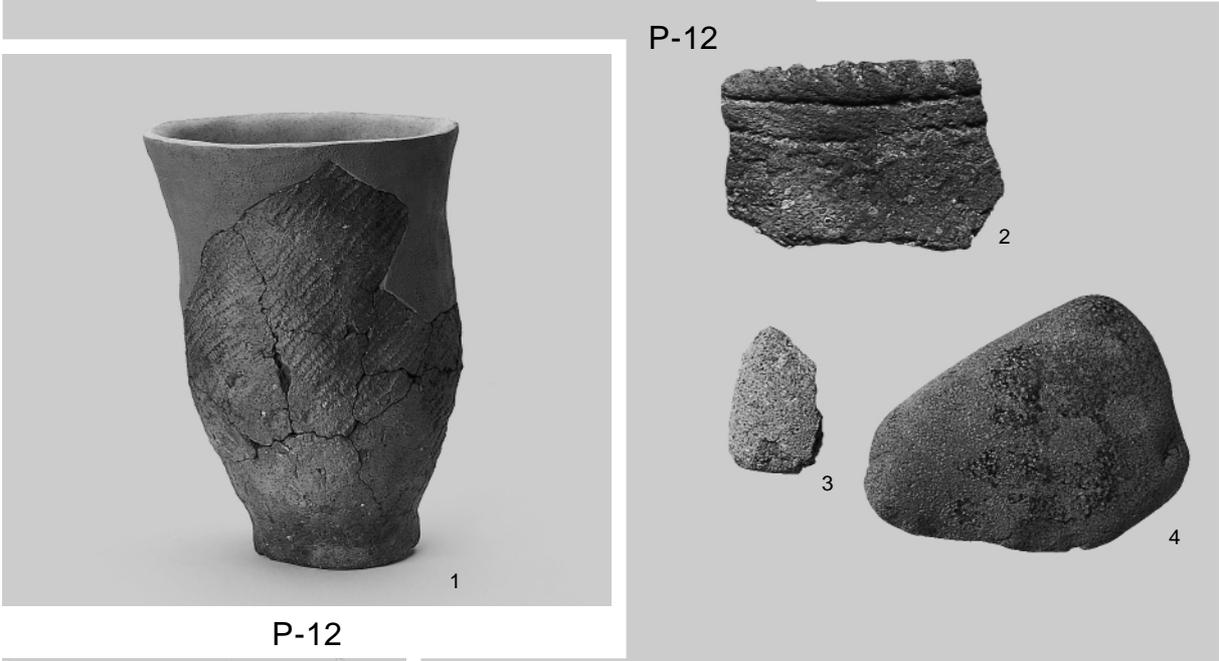
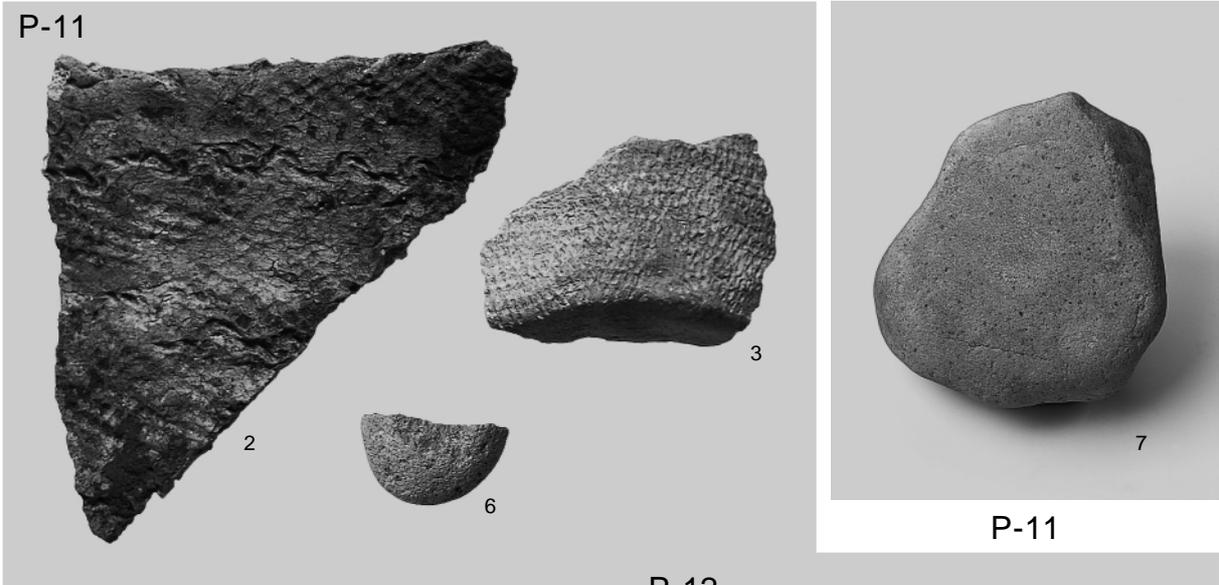
遺構出土の遺物（9）



遺構出土の遺物 (10)

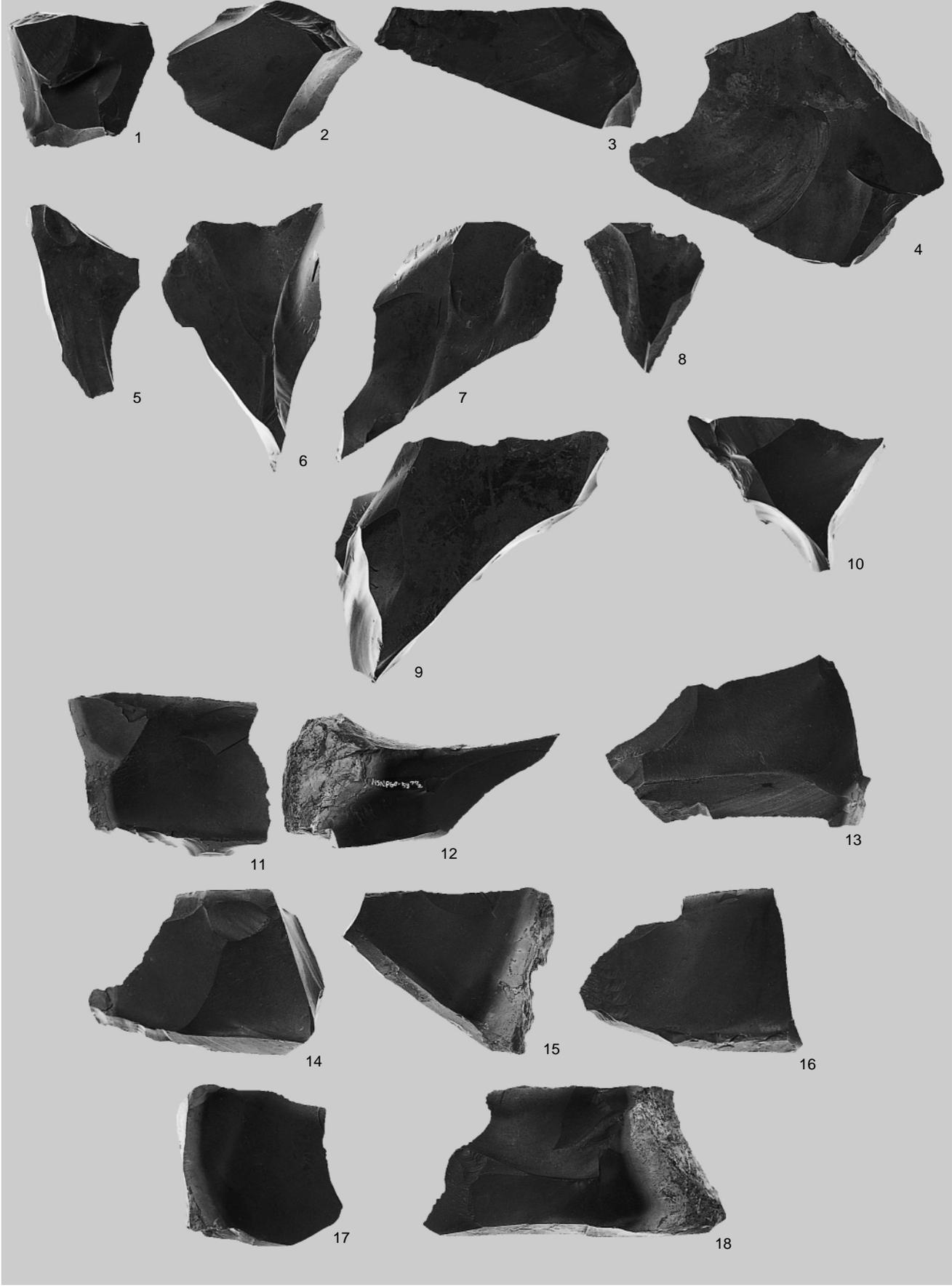


遺構出土の遺物(11)



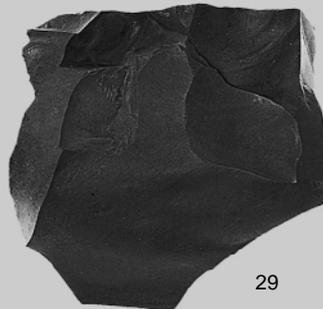
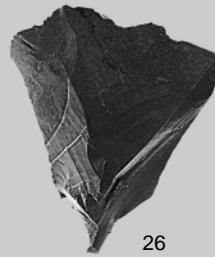
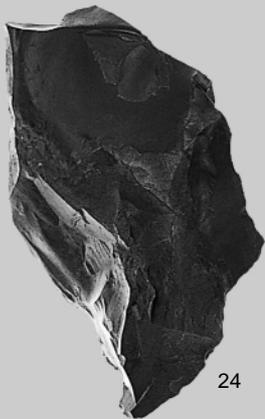
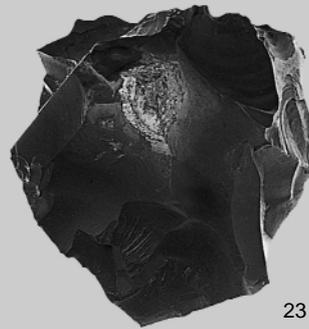
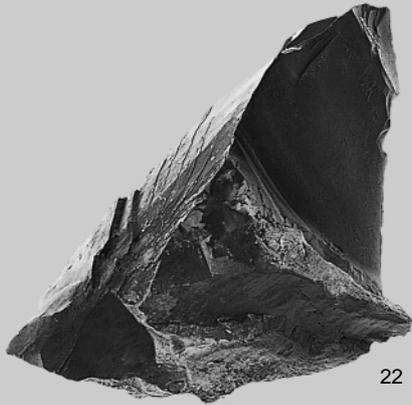
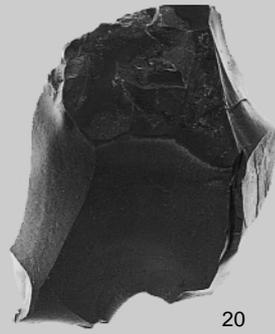
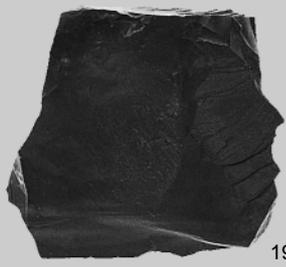
遺構出土の遺物(12)

NP-60

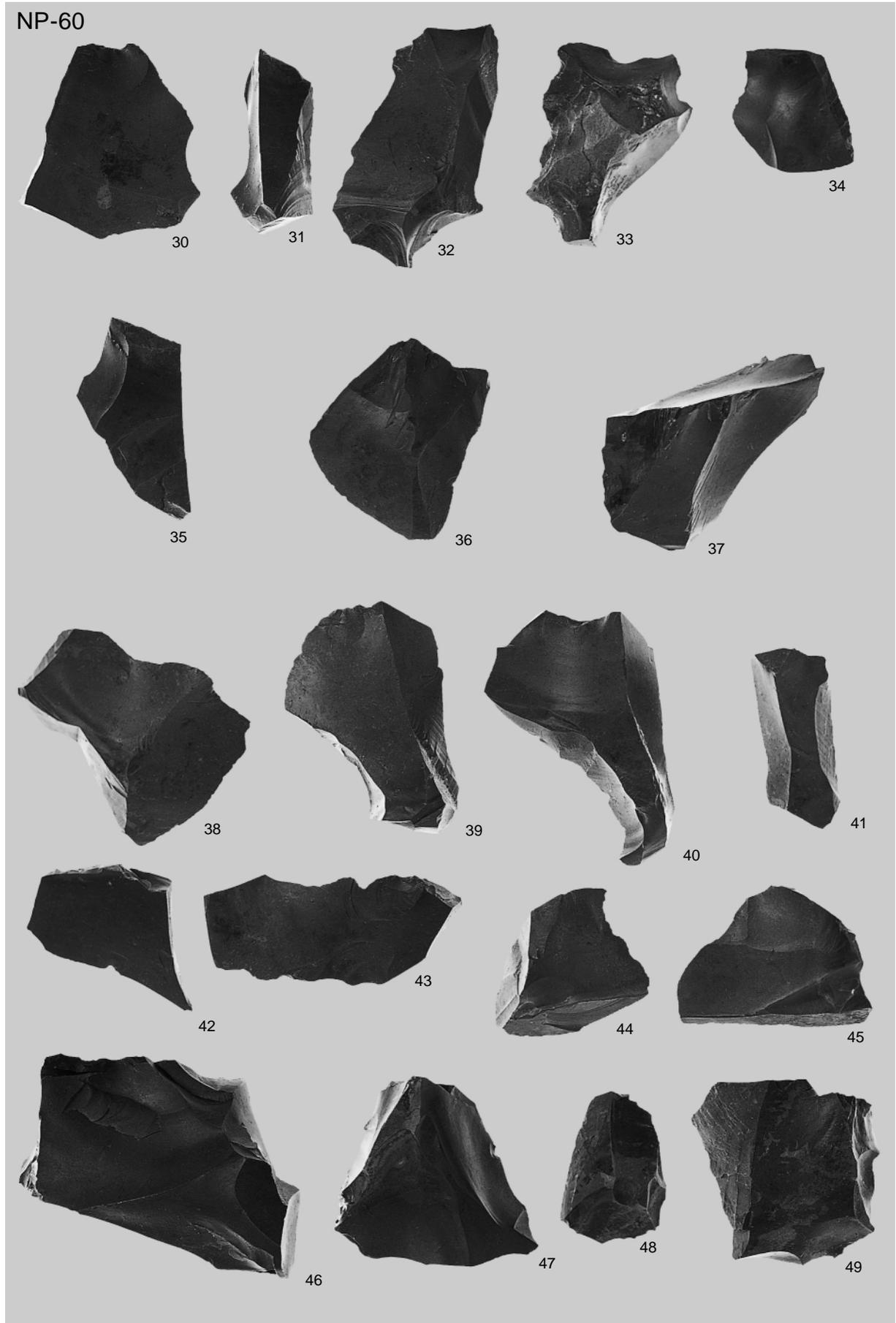


遺構出土の遺物(13)

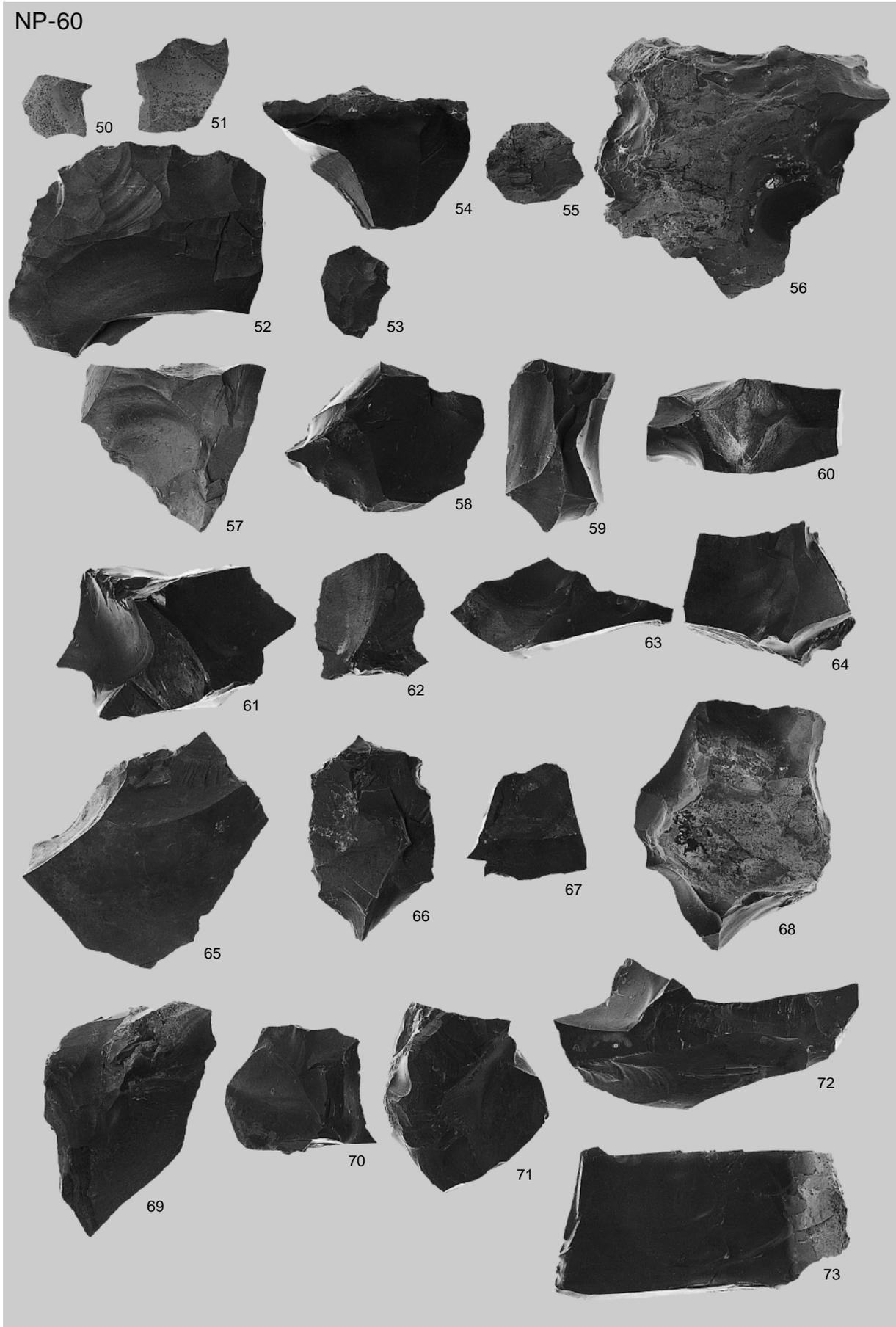
NP-60



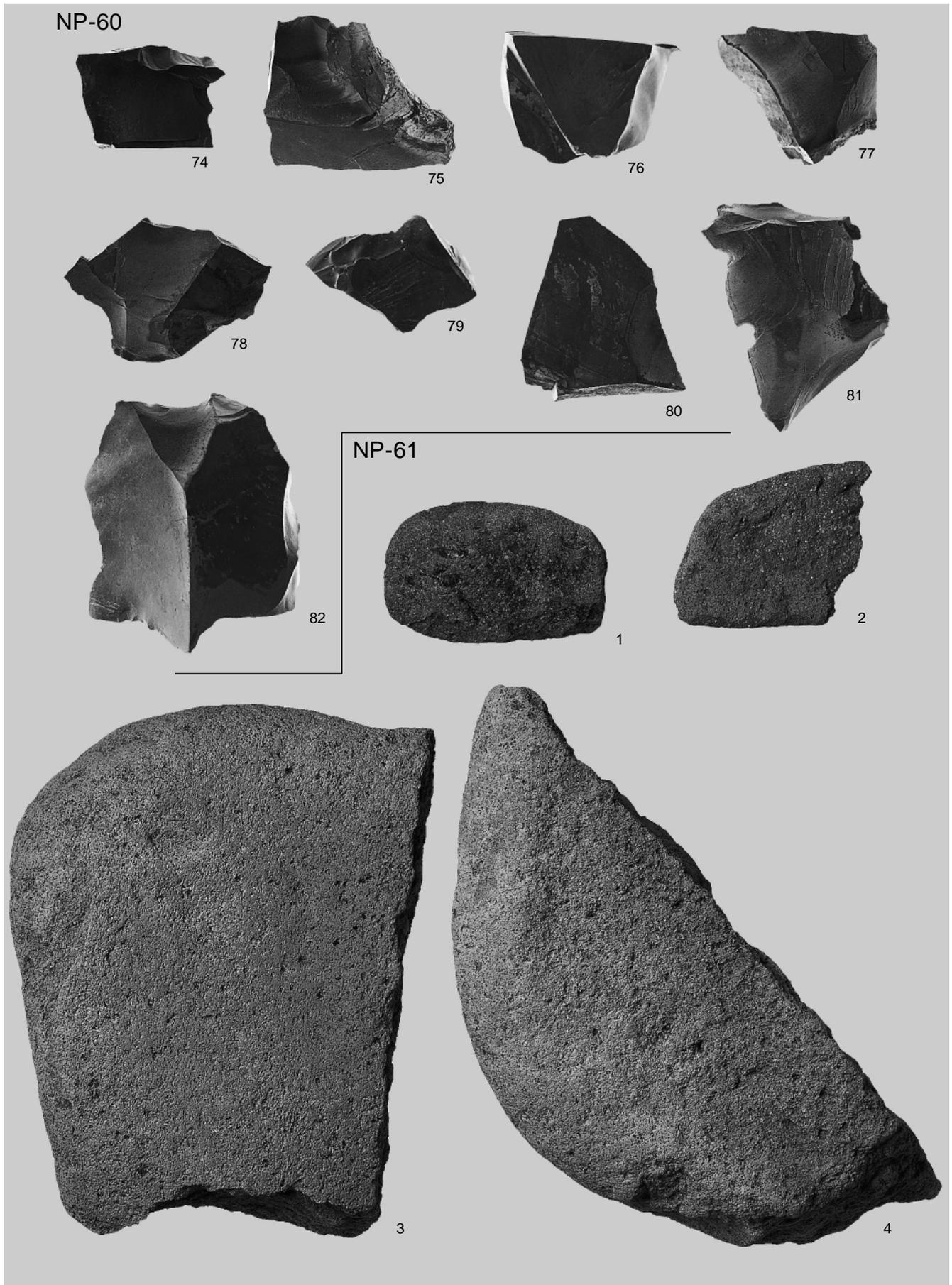
遺構出土の遺物(14)



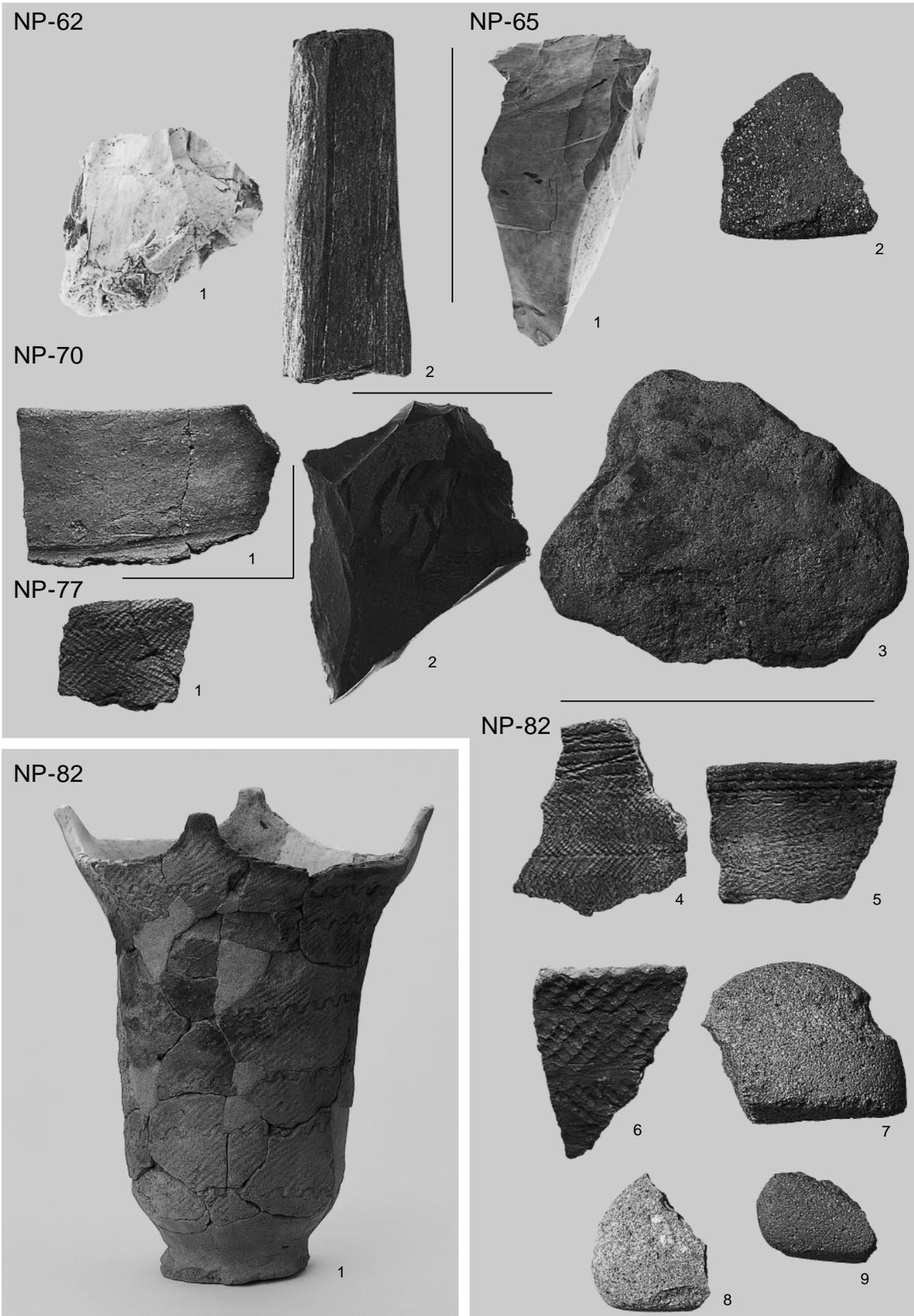
遺構出土の遺物 (15)



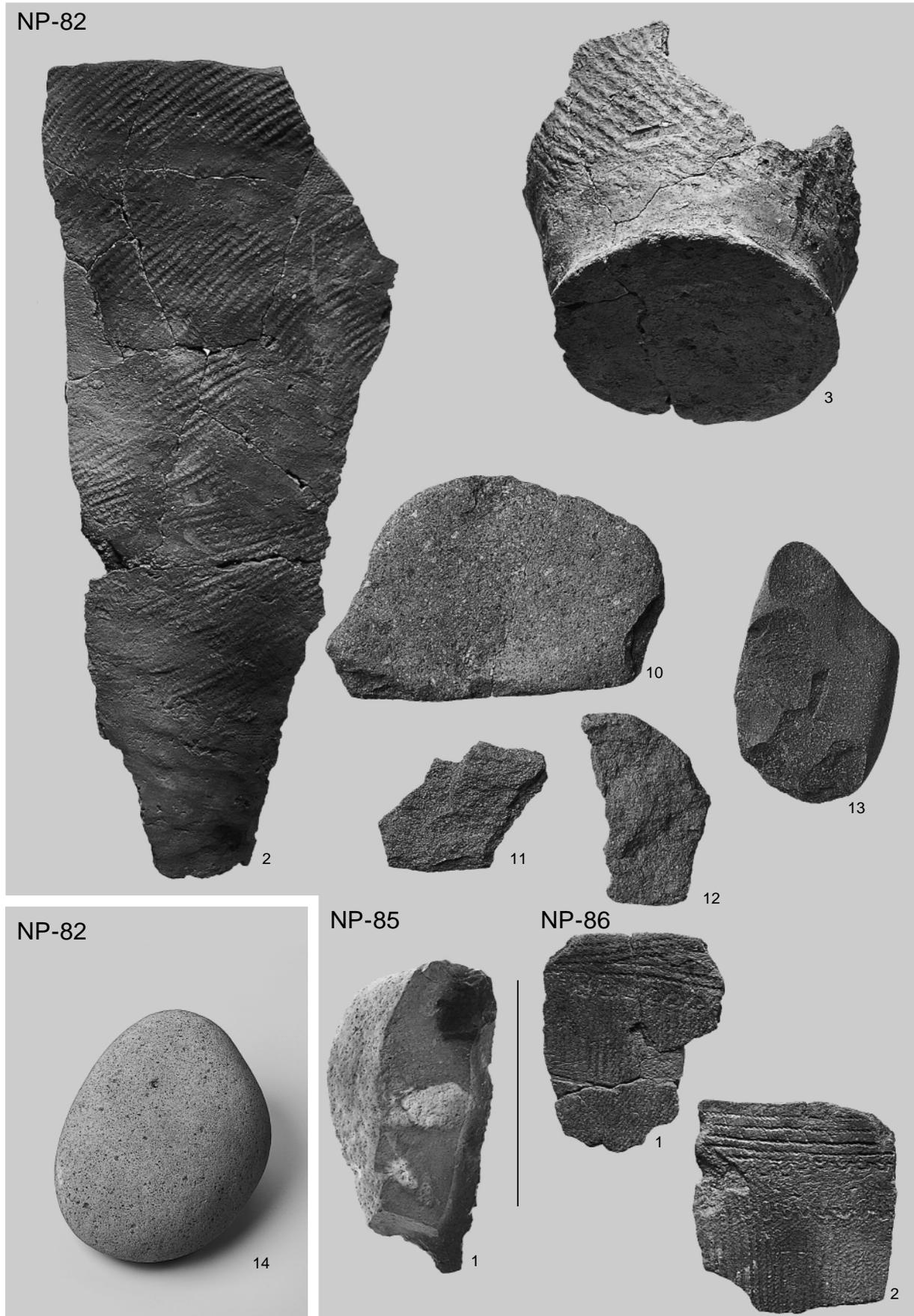
遺構出土の遺物(16)



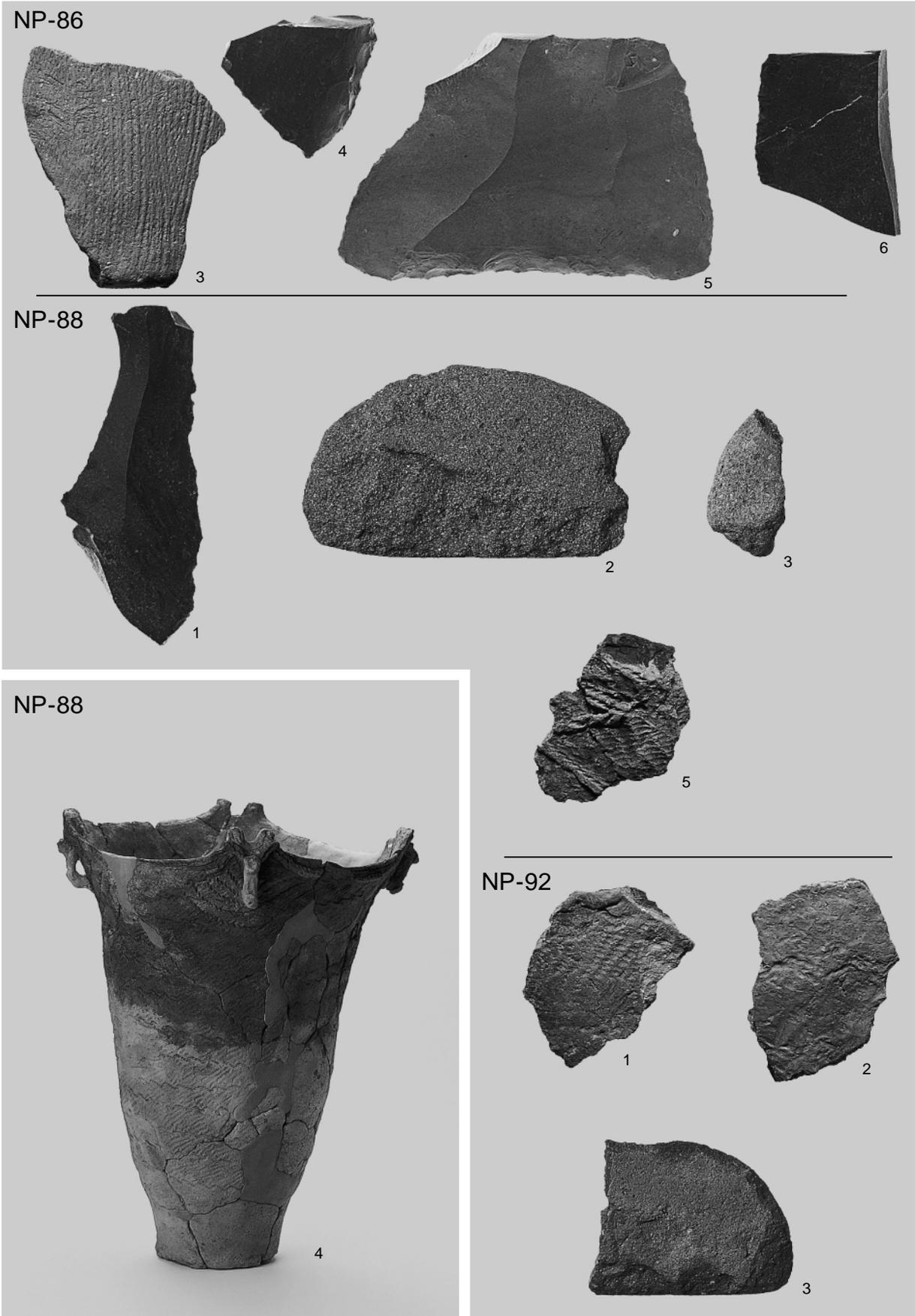
遺構出土の遺物 (17)



遺構出土の遺物(18)



遺構出土の遺物 (19)



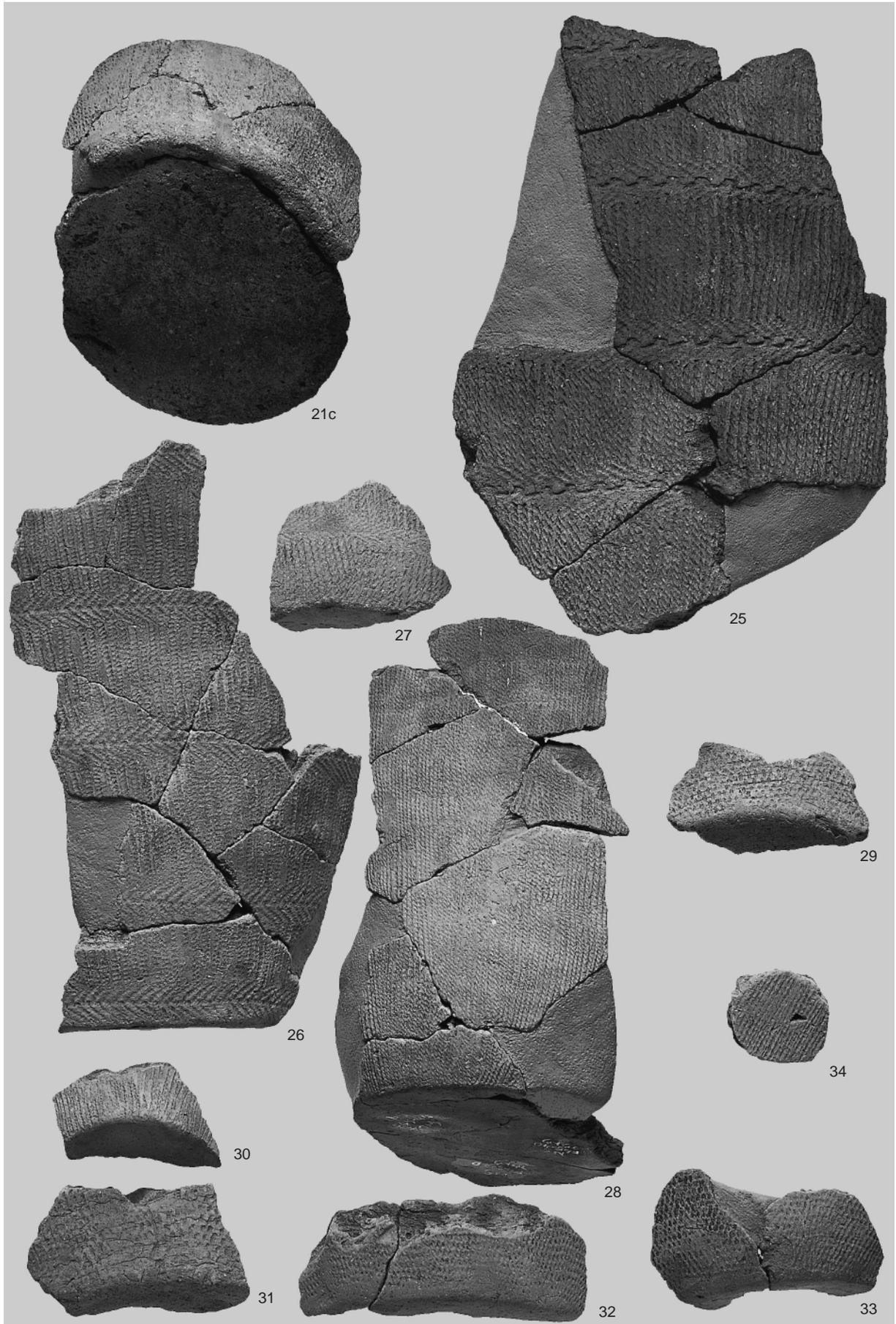
遺構出土の遺物(20)



包含層出土の土器(1)



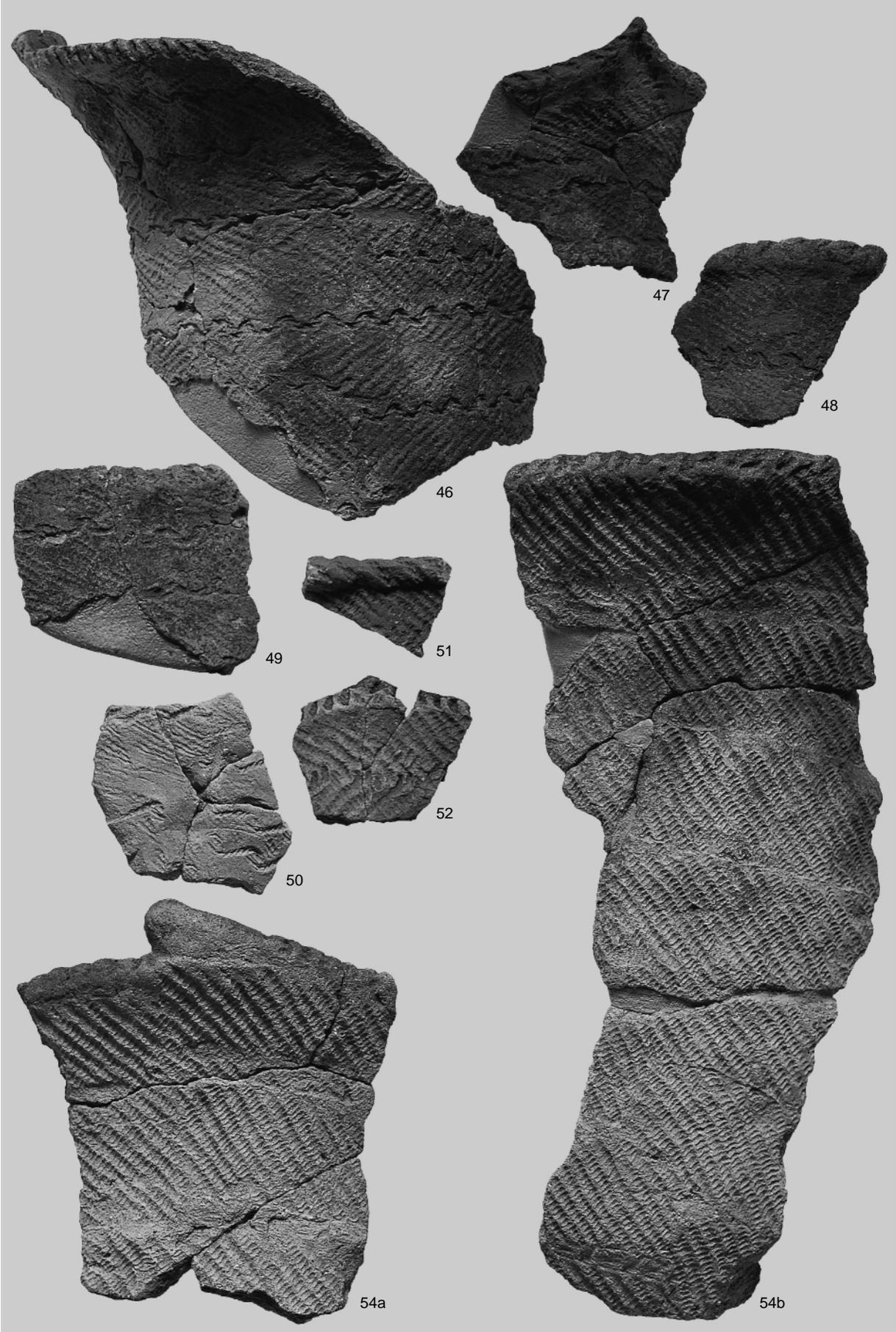
包含層出土の土器（2）



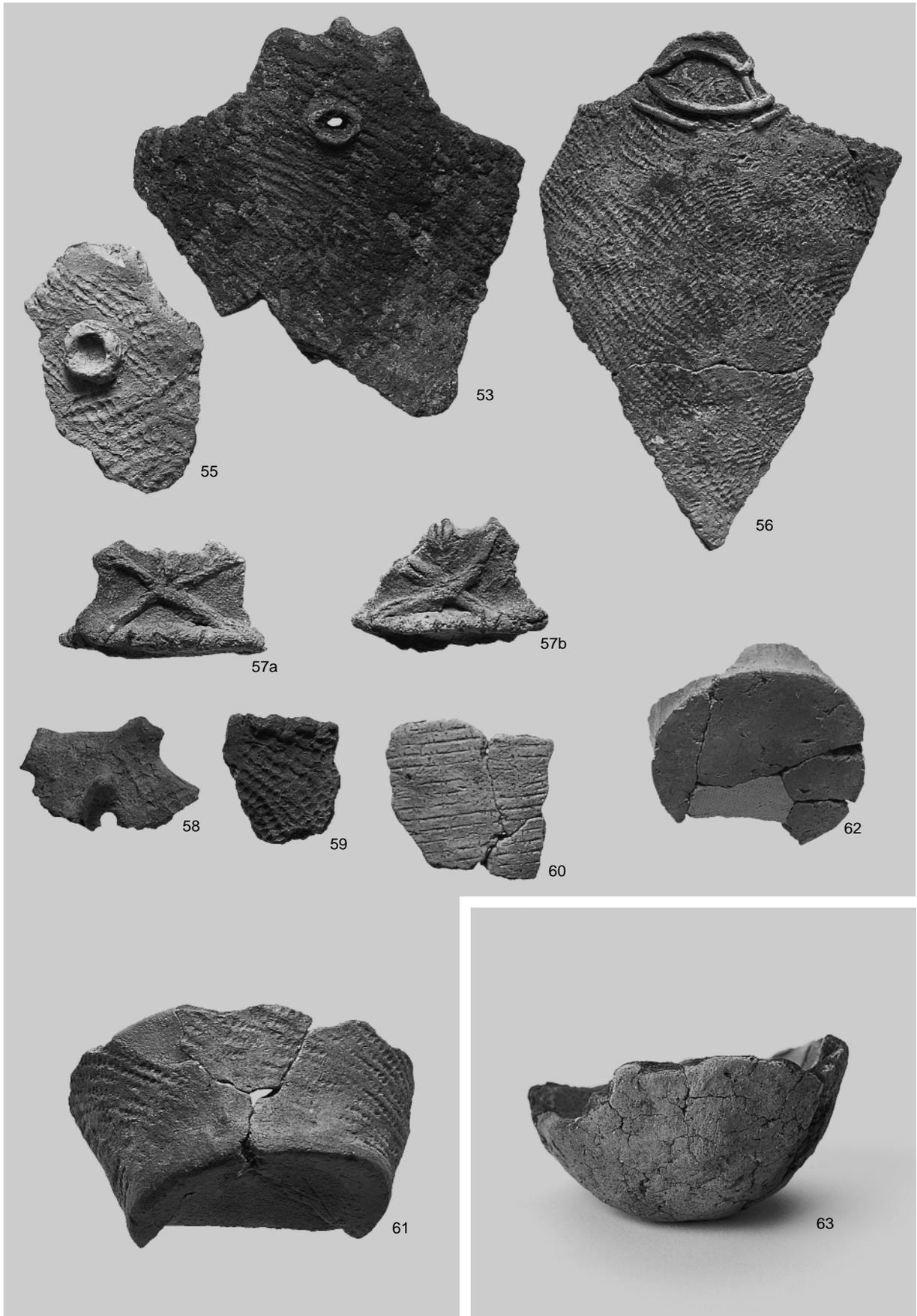
包含層出土の土器（3）



包含層出土の土器(4)



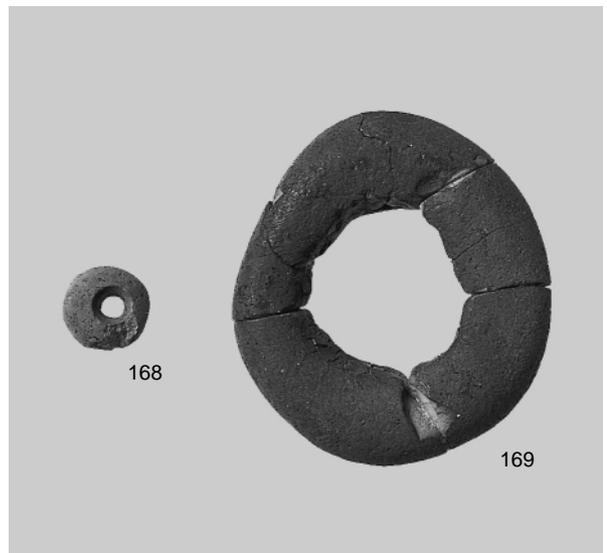
包含層出土の土器（5）



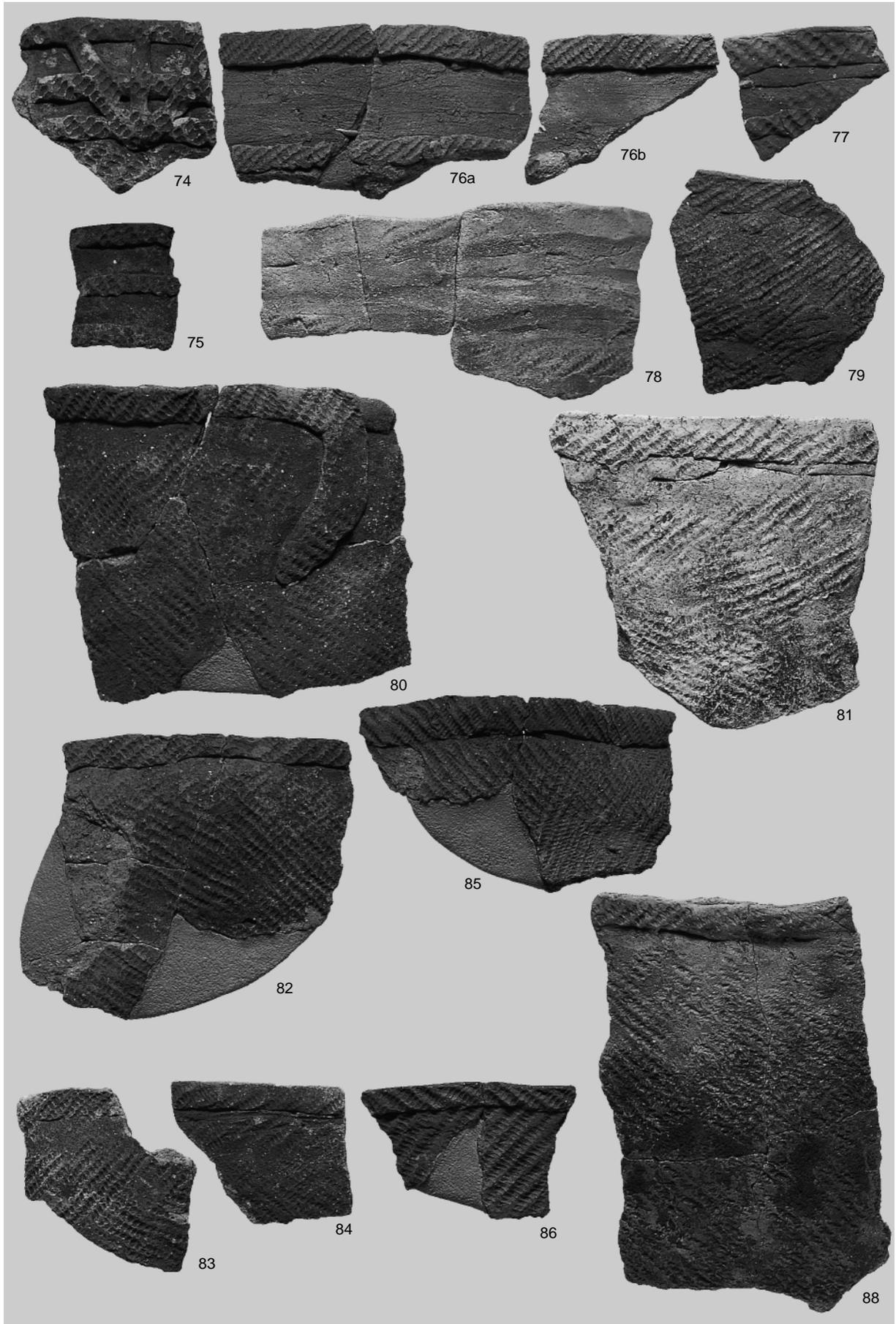
包含層出土の土器(6)



包含層出土の土器(7)



包含層出土の土器(8)・土製品



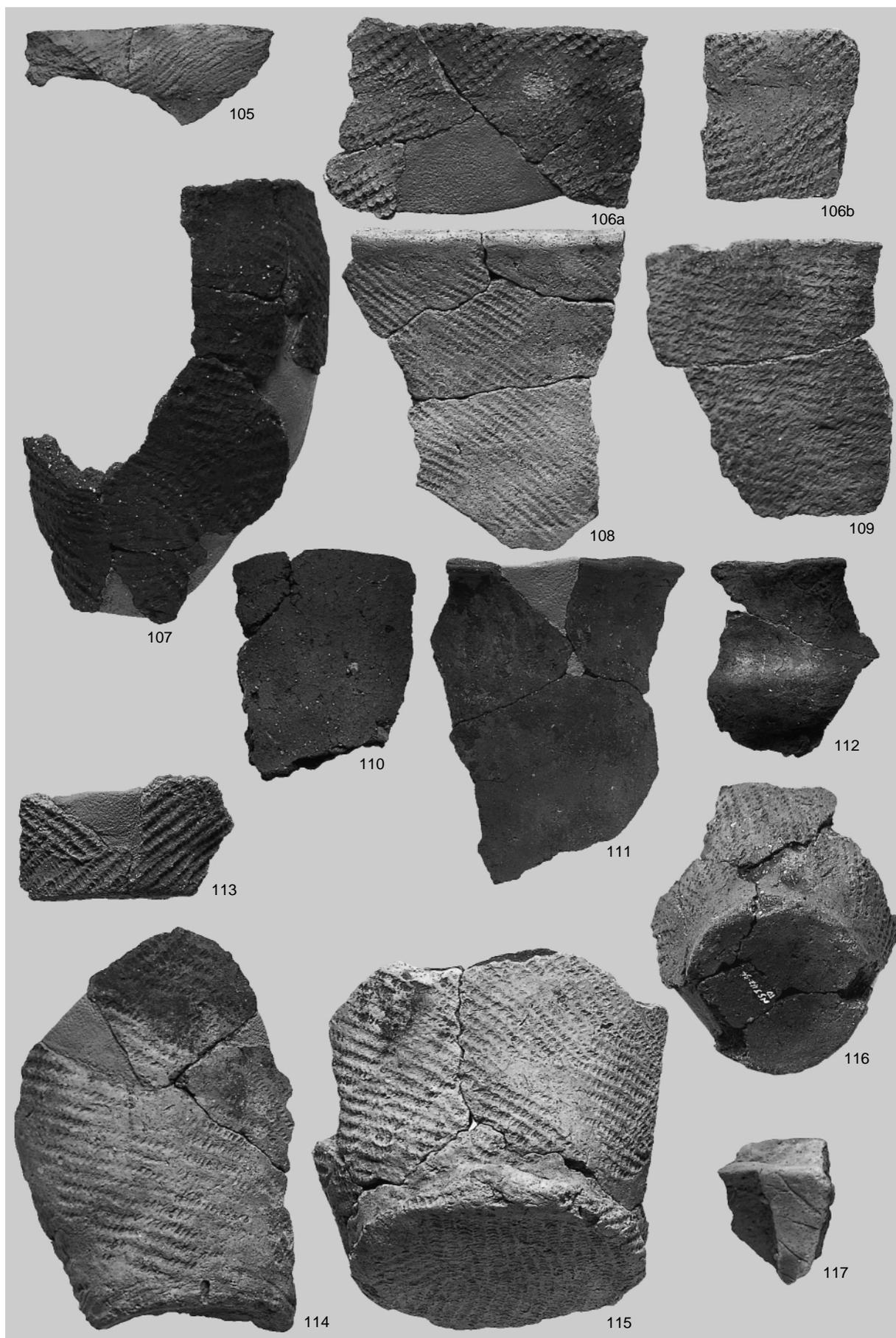
包含層出土の土器（9）



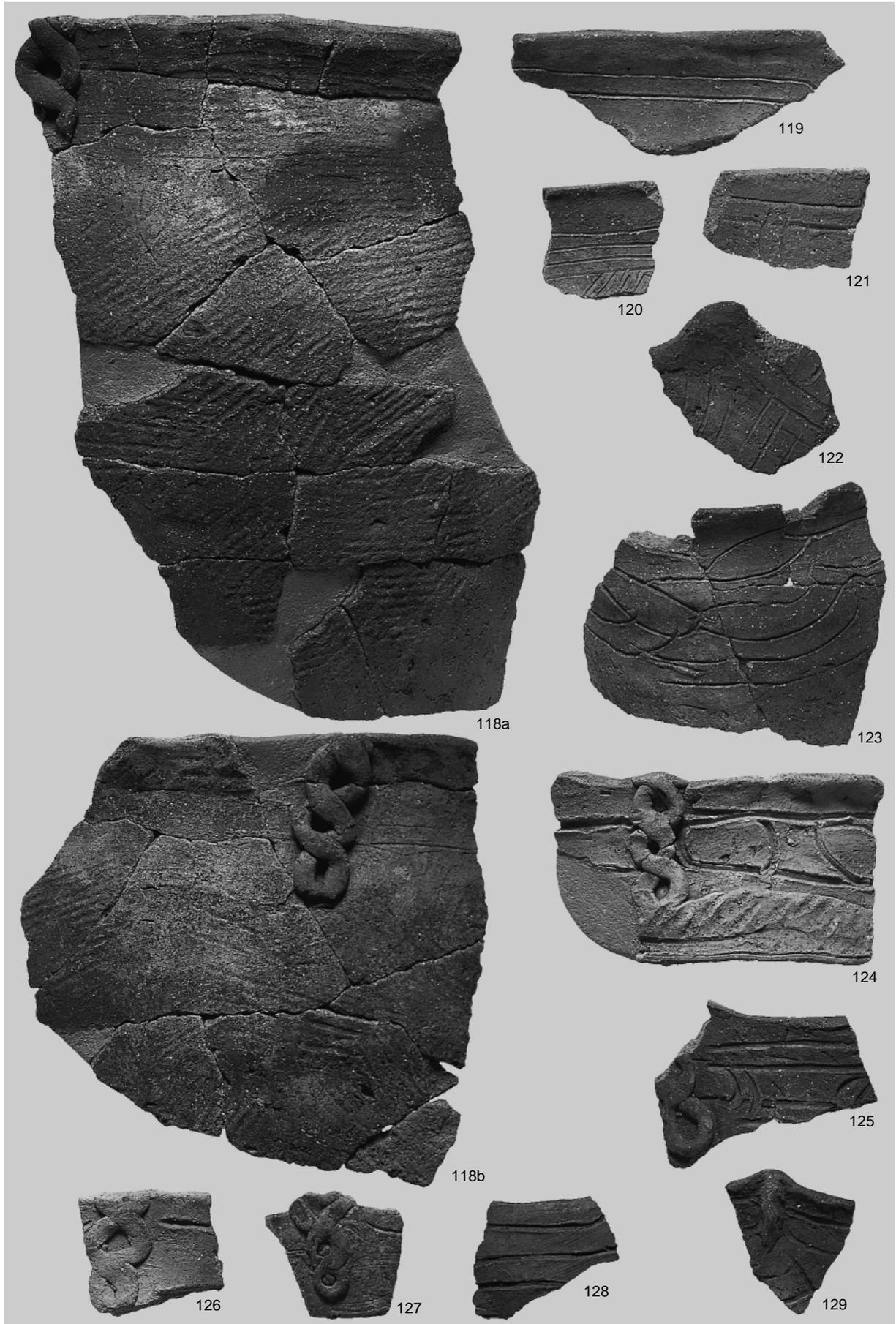
包含層出土の土器(10)



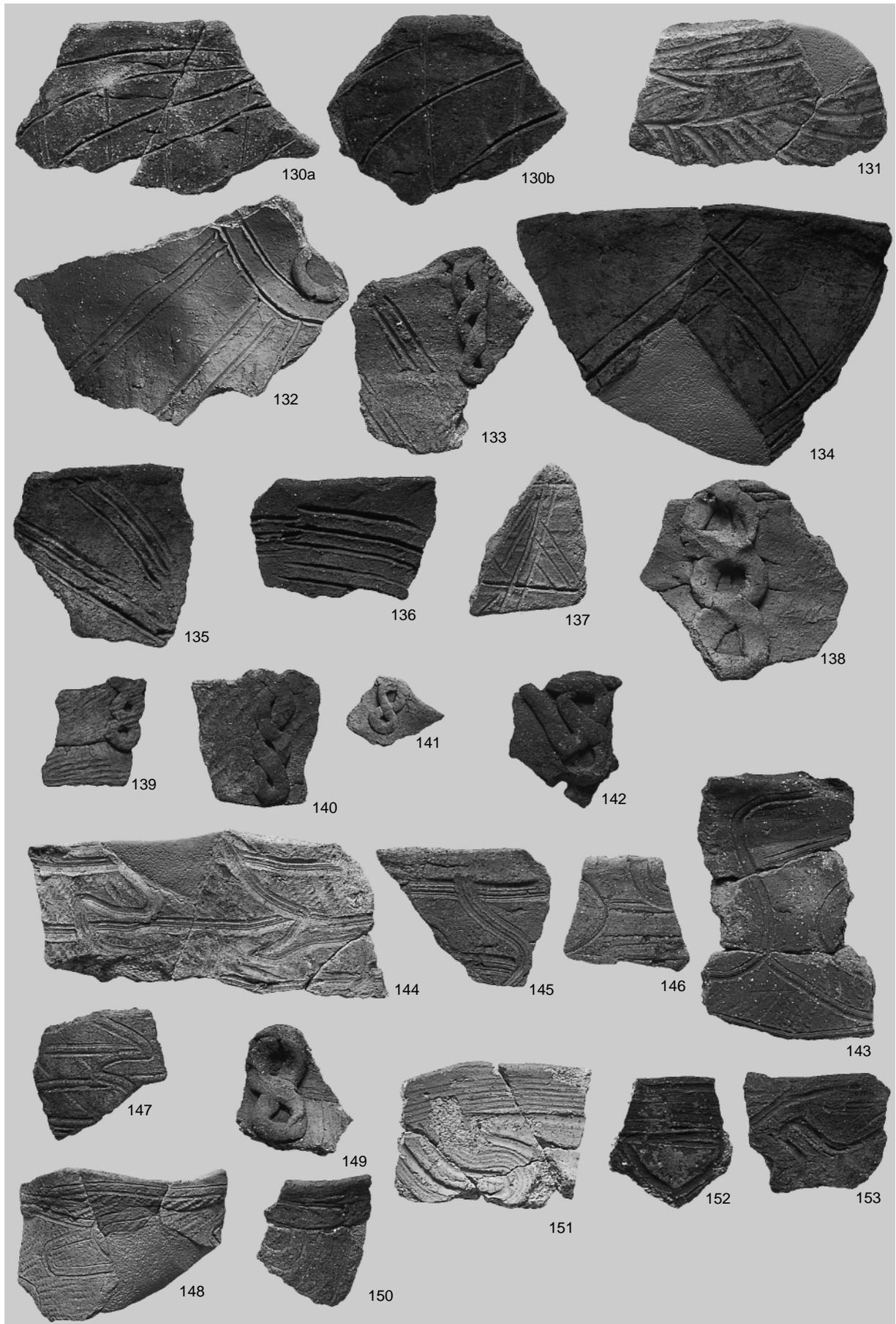
包含層出土の土器(11)



包含層出土の土器(12)



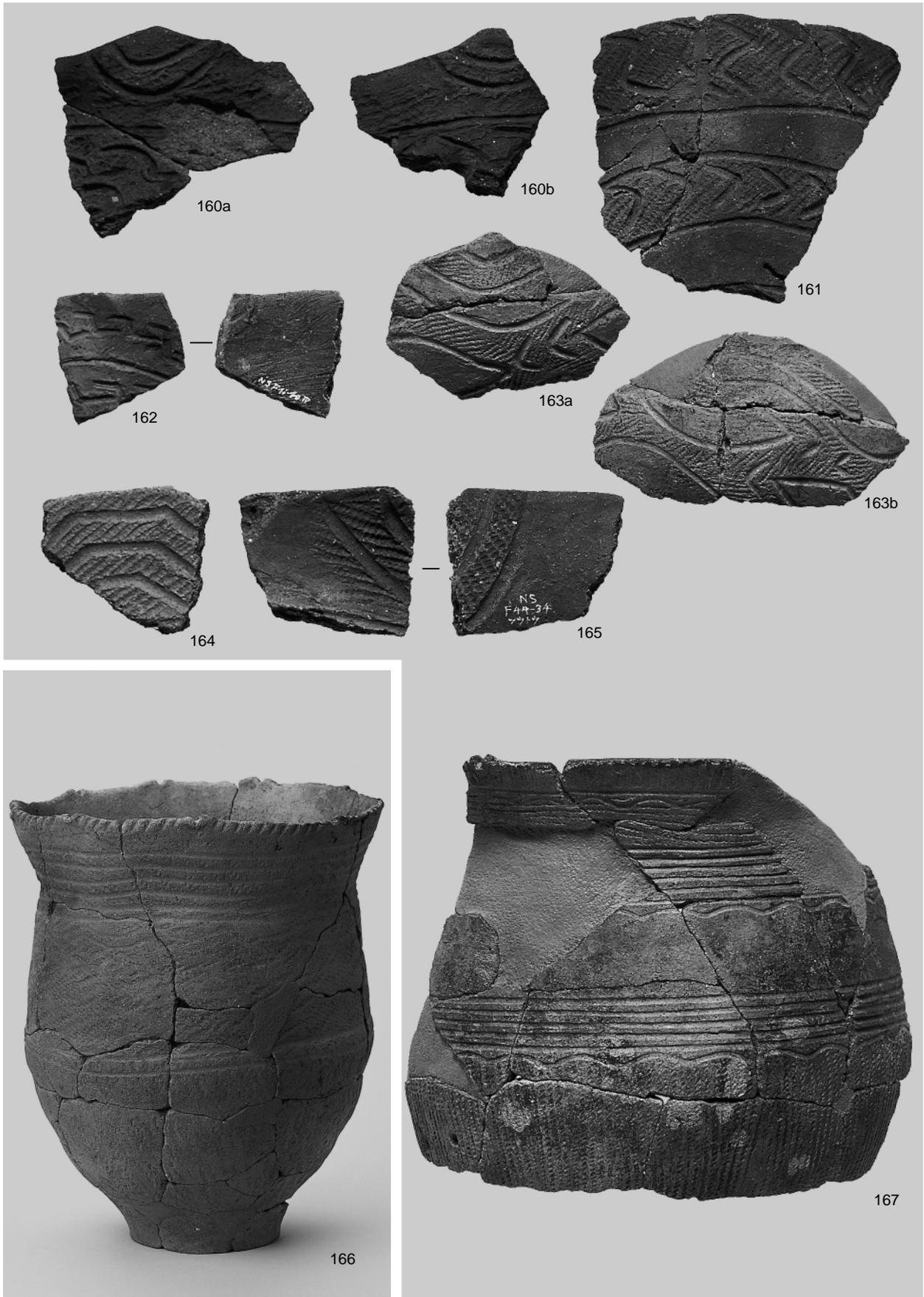
包含層出土の土器(13)



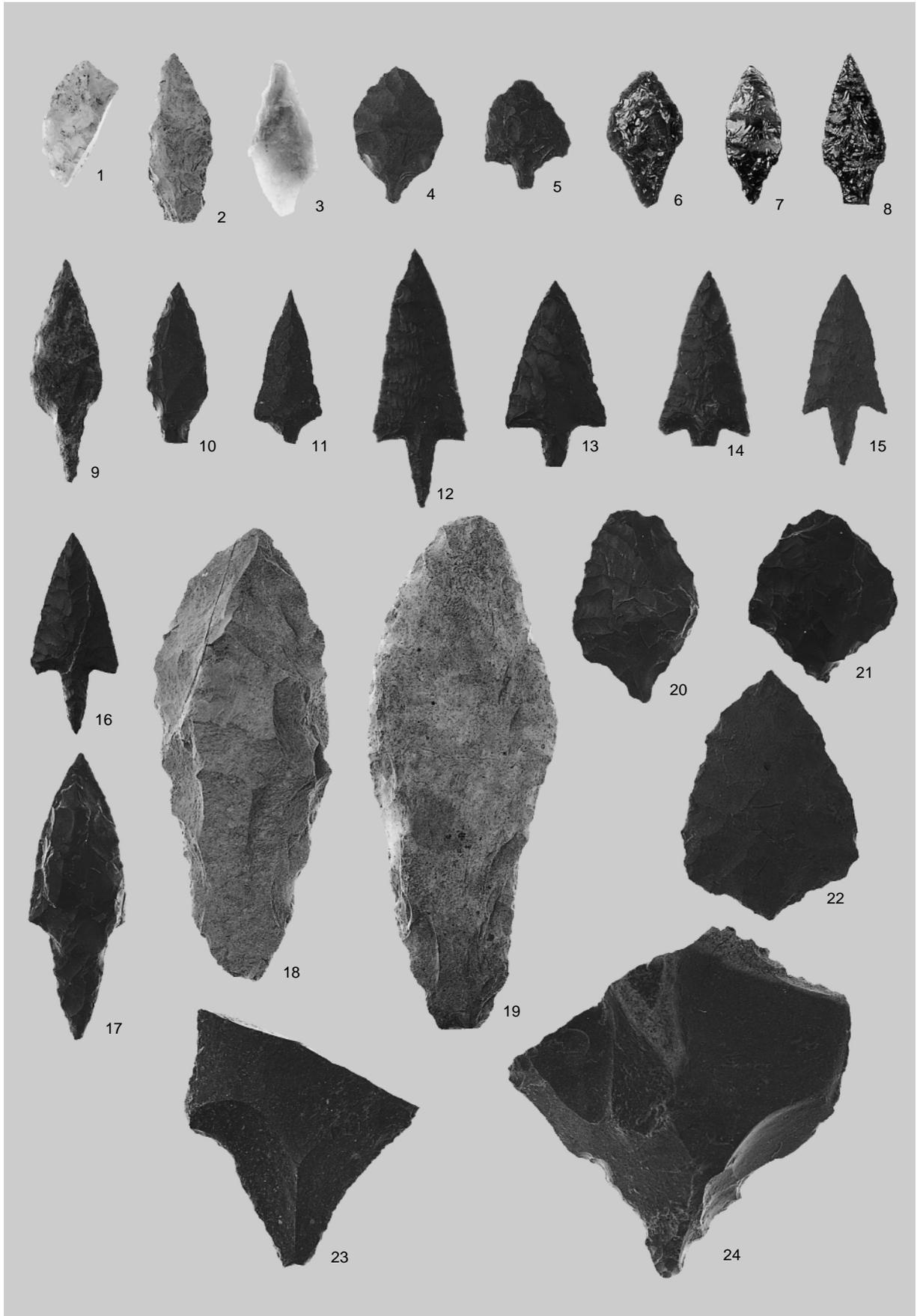
包含層出土の土器(14)



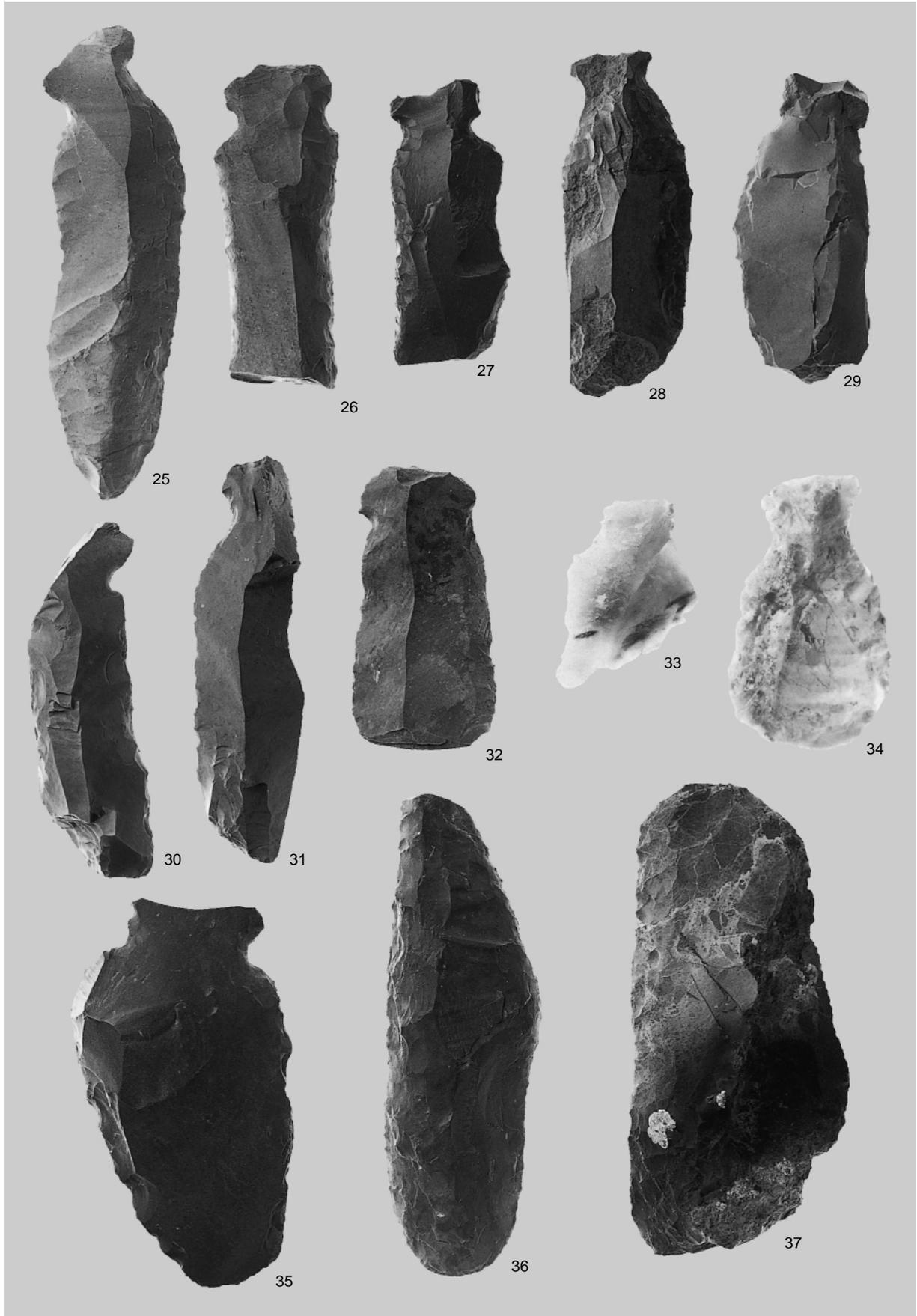
包含層出土の土器(15)



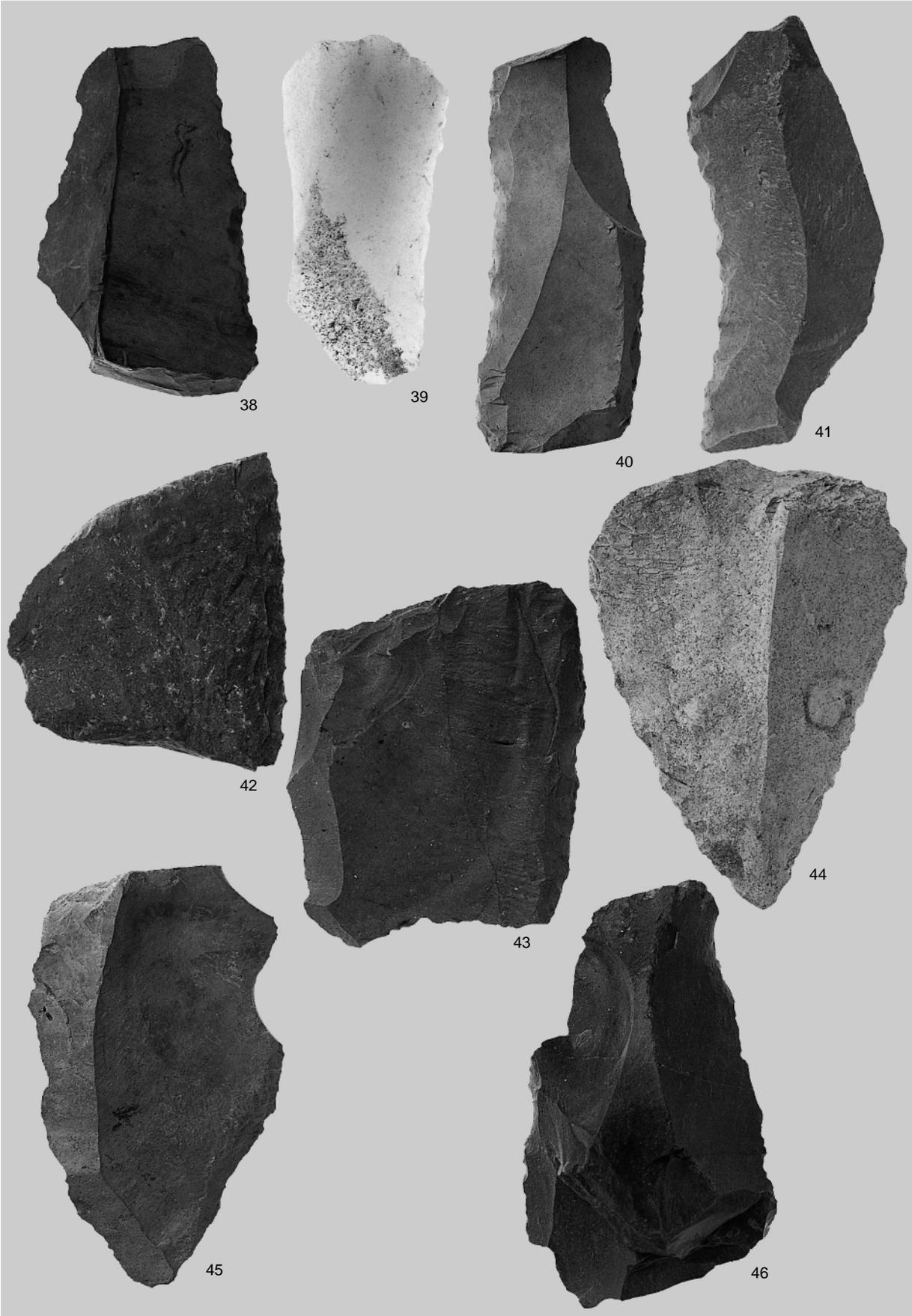
包含層出土の土器 (16)



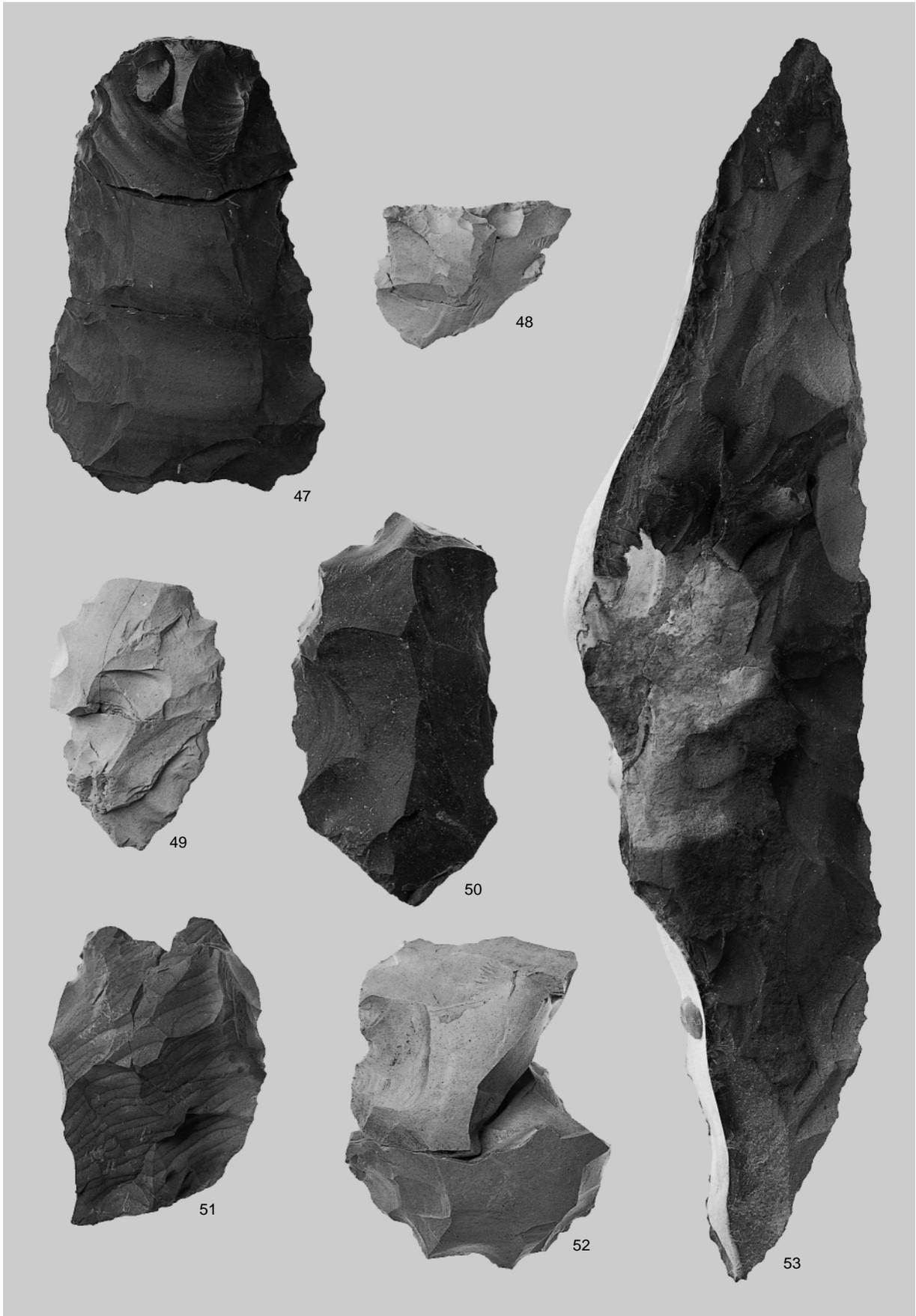
包含層出土の石器(1)



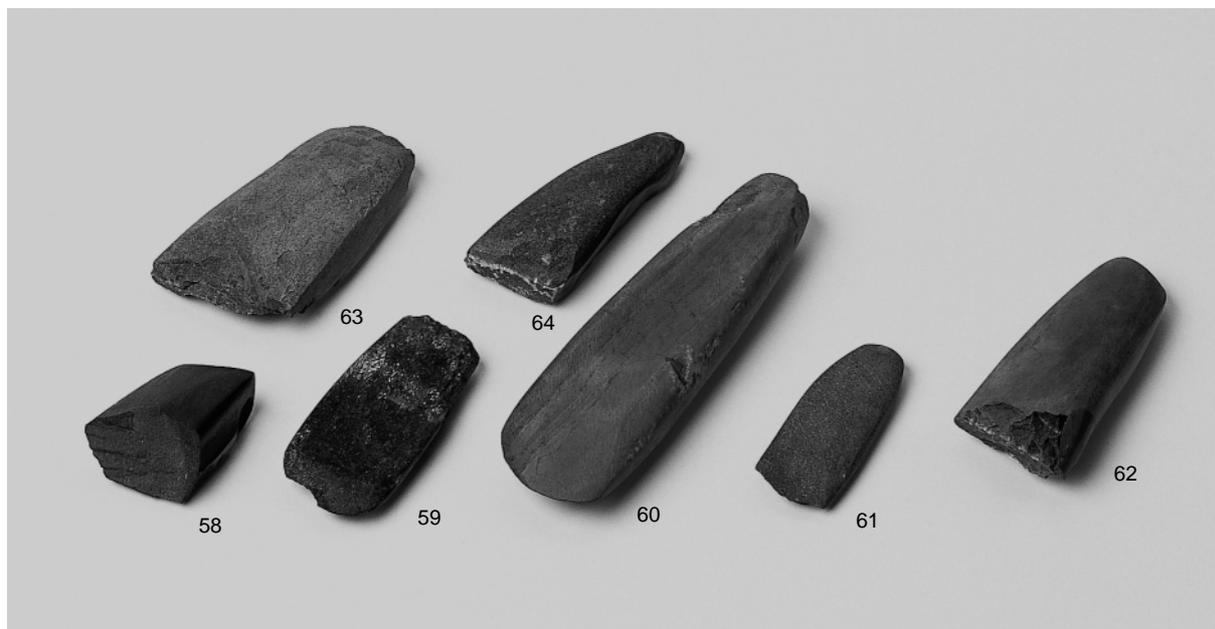
包含層出土の石器(2)



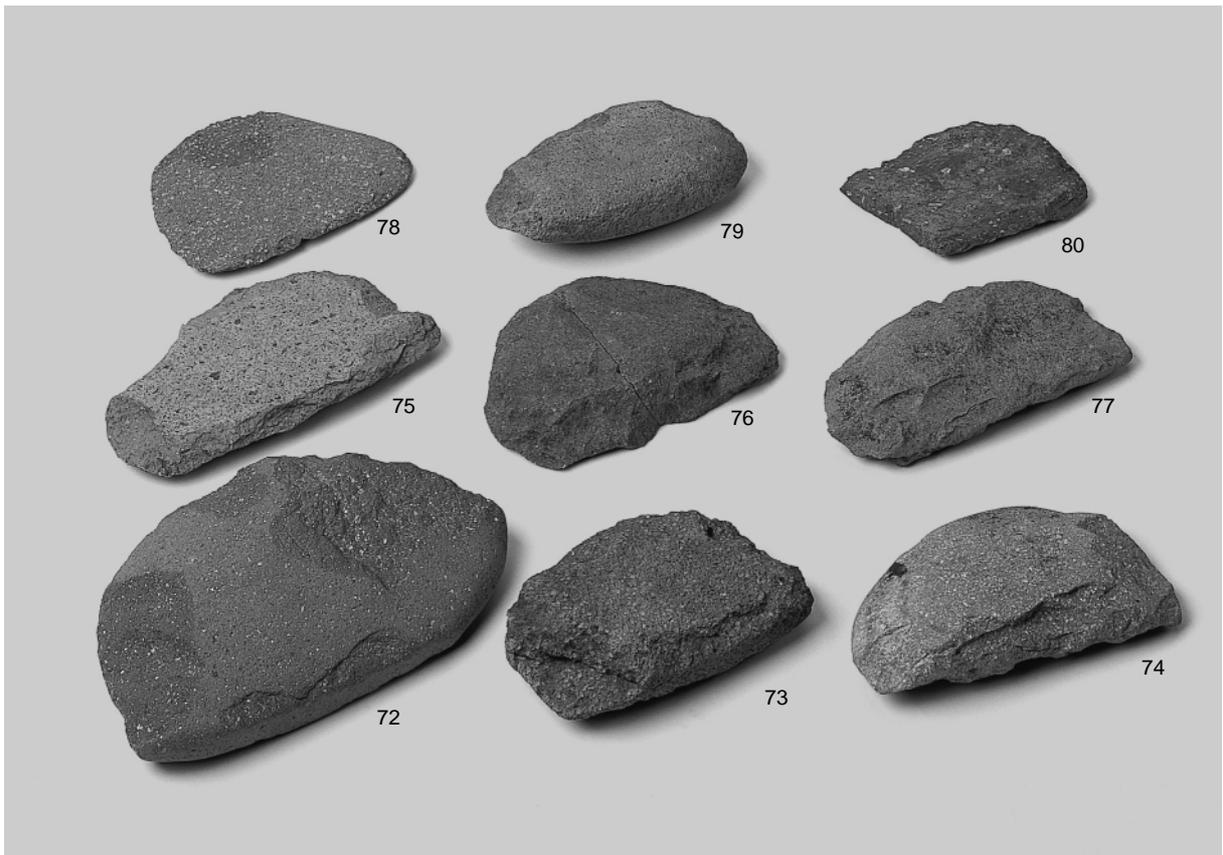
包含層出土の石器（3）



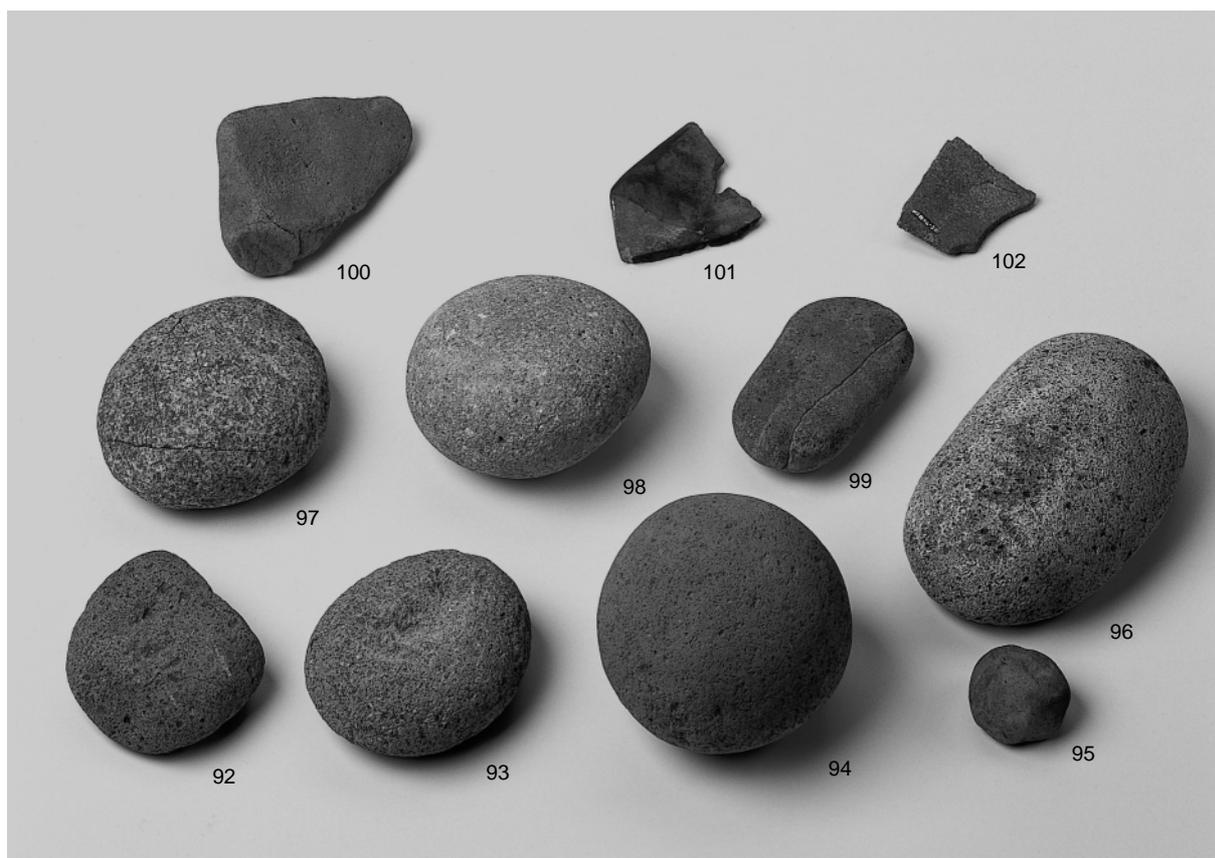
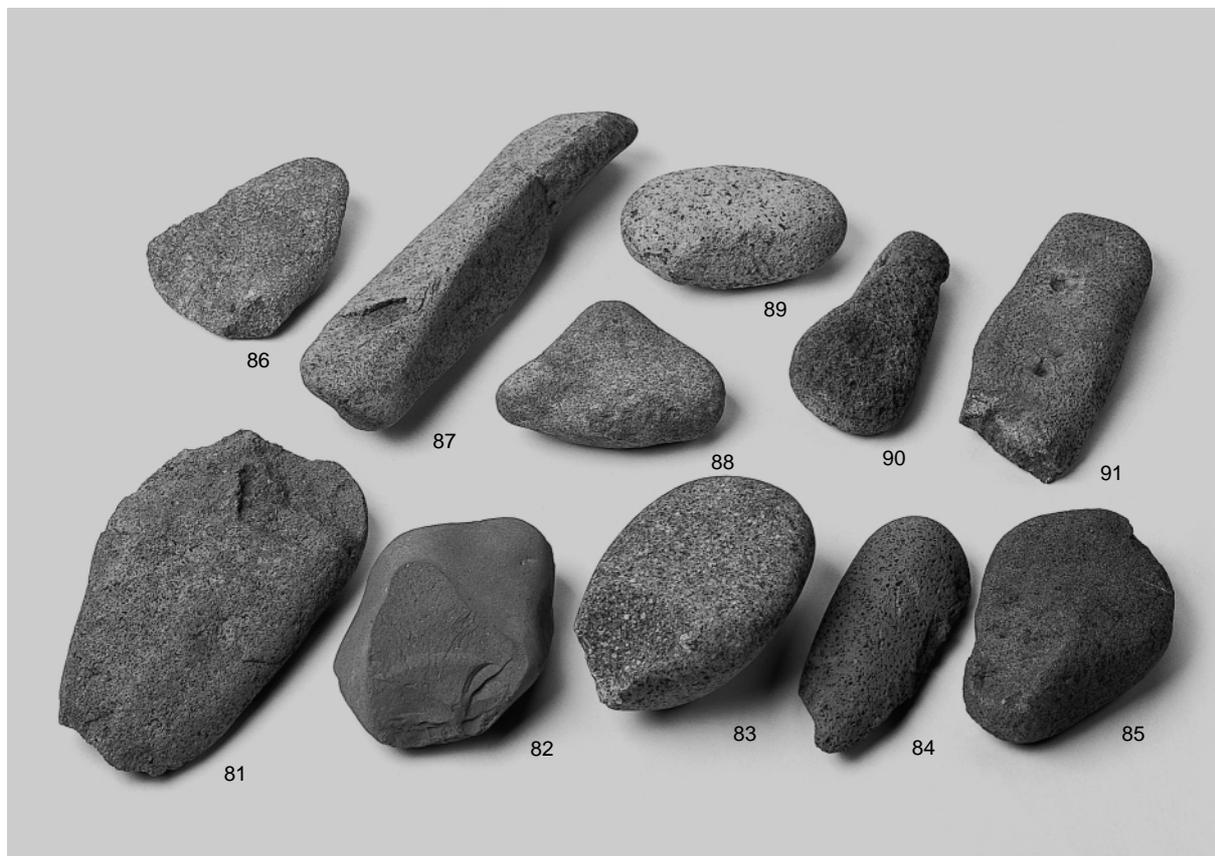
包含層出土の石器（4）



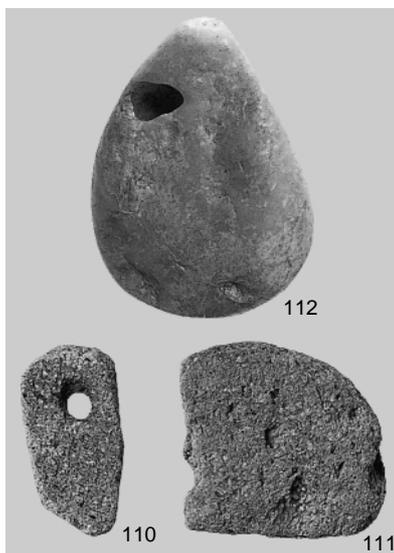
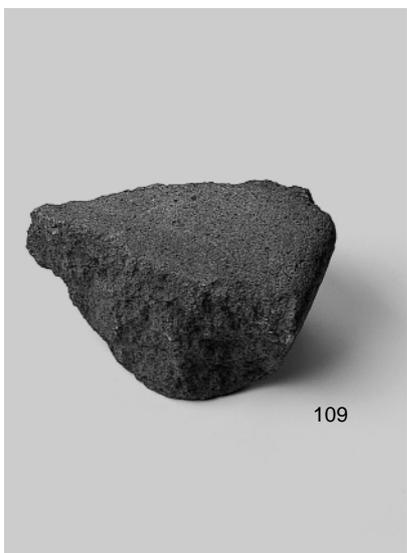
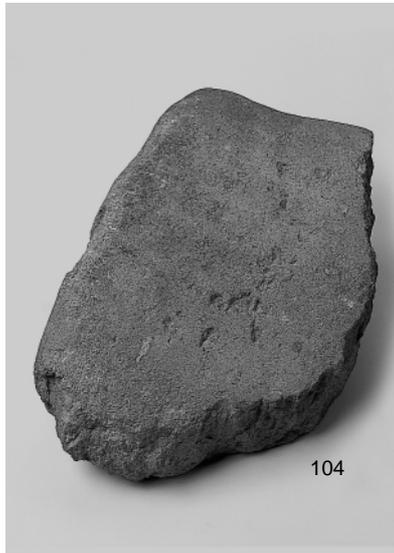
包含層出土の石器（5）



包含層出土の石器(6)



包含層出土の石器(7)



包含層出土の石器(8)・石製品

報告書抄録

ふりがな	もりまち にごりかわさがんいせき びいちく							
書名	森町 濁川左岸遺跡 - B地区 -							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第190集							
編著者名	村田大・影浦覚・大泰司統・中山昭大・袖岡淳子・熊谷仁志							
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地-1 TEL 011-386-3231							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。	東経 。	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にごりかわさがんいせき 濁川左岸遺跡	ほっかいどうがやべくん 北海道茅部郡 もりまちいしくらちょう 森町石倉町 401ほか	01345	B-15-22	42 8 49	140 28 57	20010724 ～20011026 20020507 ～20020830	1,300 3,630 (A・B地区)	高速道路 北海道縦 貫自動車道 (七飯～長 万部)建設 工事に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
濁川左岸遺跡	集落跡	縄文時代 前期 中期 後期 続縄文時代	住居跡 8軒 土壌 30基 (B地区のみ)	縄文土器 円筒土器下層d式 サイベ沢式 見晴町式 トリサキ式 大津 群 続縄文土器 恵山式 土製品 石器等 石鏃・石槍・石錐・ つまみ付きナイフ・ スクレイパー・偏平 打製石器・石核・フ レイク・石斧・たた き石・すり石・砥石・ 石皿・台石・加工痕 のある礫・焼成礫・ 礫など ヒスイ製玉 (B地区のみ)		縄文時代前期後半～後 期前葉の集落・墓域		

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第190集

森 町

濁川左岸遺跡 - B地区 -

北海道縦貫自動車道(七飯~長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年3月31日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL (011) 386-3231 (代表)

FAX (011) 386-3238

印 刷

札幌大同印刷株式会社

〒004-0003 札幌市厚別区厚別東3条2丁目

TEL (011) 897-9711
